
Elona で Fantasy life な日記

なつや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Elona で Fantasy life な日記

【Nコード】

N5582N

【作者名】

なつや

【あらすじ】

『世界は何時だって狙われている』の前日譚となる物語です。Elona・リプレイって感じで石動進の冒険者時代となります。なお、Elonaメインストーリーのネタバレが含まれます。本編末クリアの方は、それを承知で読むか、先にクリアしてから読めれると良い感じかもしれません。

以下がプレイルール

多少の脚色（睡眠ボーナス狙いのリロード）はありで基本は死んでも埋まらず這い上がり。

仲間の死は重傷扱いで1ヶ月復帰禁止。

種族…神の使い（現代日本からの来訪者）

職業…観光客

クリア条件…

1. 全ての神との戦闘に勝利する。（某中の神は除く）
2. 小城の建設。
3. 全固定ダンジョンの踏破。

石動進、冒険者 始めます

※第二章から、公式Elona更新停止に伴い、有志による改造版Elonaを用いてプレイしています。

基本的にチートっぽい所の無いバグ修正&機能追加版を選ばせていただきます。

Lv0：高校生と乞食の洞窟と緑髪の男の悲劇

始まりの日…

ある日の事だ、気がつくとい俺は洞窟で寝ていた。直ぐ傍には焚き火がある。

「あ…あれ？」

思わず疑問符が浮かぶ。俺の普通で言えば、目が覚めればそこは自宅のベッドの上だろう。

いや、さて、そもそも俺は何時眠りに着いた？

確か昨日の晩の最後の記憶は…母さんに呼ばれて飯を食おうと部屋を出たところだっけ？やばい、イマイチ記憶が怪しい。

「ああ、ようやく目を覚ましたか」

「へっ？」

ぼんやりとする頭のままで居ると突然声をかけられたので間抜けな返事を返してしまった。

「ふむ、どこかぼうつとした様子もあるが意識が戻ったばかりだから…と言う所か？」

声をかけてきたのはことなくファンタジー系の世界観を持つ格好をした男だ。

ぶっちゃければ、ロードス島戦記とかで見るような冒険者染みた格好…。

しかも、大真面目にそれを着ているようで、コスプレっぽさがない。見れば男のそれは所謂『実用的な』外套や軽鎧、そして剣に弓…。

他にも色々あるが全部が全部なんとなく『本物っぽい』と感じさせられる。

「さて、こっちも余り時間がない身でな…手早く確認したいんだ。

お前、武器や防具は？」

「え…？」

言われてなんとなく自分の持ち物を確認する。

身につけているのは職場で着ていた私服と財布と携帯ぐらいだった。

「ない、な」

「なるほど、あのエーテル風の影響で船ごと流されちゃったか？その割にエーテル病の進行は無い様だな。

お前、運が良かったぞ？」

「エーテル？どこかで聞いた覚えがあるが…」

ソレはゲームじゃないだろうかと言おうとしたが、ソレよりも早く俺の言葉に男はゲツと頭を抱えた。

「なるほど、外見的变化じゃなくて、記憶の方に影響が出てやがったか…。お前、今どれだけの事を覚えている？」

これは、下手な事は言わずにまずは名前から言うべきか？

「そういわれても…まずは名前が石動進ってことかな？」

「イスルギススム？変わった名前だな」

男はいぶかしむ様に言う。

「石動は家の名前、進が自分の名前…だね」

「ふうん、と、いう事はお前は極東の国の出身者か？確か、アツチの国じゃそういう名前の付け方をするって聞いた事がある」

（日本がある？しかし、先ほどのエーテル病とか見た目ファンタジーな格好の彼を見る限り…：うん、ここって俺が住んでた世界、或いは時代とはまったく違うんじゃないか？でも、一応は日本っぽい国がある…：というのは間違いないだろう）

「…：ううん、イマイチ分からないけどそうなんじゃないかな？」

「そうか……先ず、予め言っておこう。俺達は用事があって旅をしている最中だ。本来であればお前さんに色々教えてやるべきなんだろうが、悪いがその余裕がないから最低限だけ教えておいてやる」彼はそう言ってニヤリと笑う。

後に自己紹介を受けてロミアスという名を知るが。

とにかく、彼にこの世界で最低限知るべき事柄を教えてもらった。その途中でとんでもない性悪な行為を受けたがそれでも恩人なので気にしない。主に自分の精神衛生の為に。

この洞窟の外には色々な危険な動物やモンスター、そして盗賊団などが存在する事。

弓の扱い方……の基本的なこと。そして金を稼ぐ方法。

なお、弓の扱いと戦闘の訓練をしている間にロミアスが連れの女性、ラーネイレに酔っ払って突っかかり、フルボッコにされて無残な肉塊になった気がしたが気のせいだろう。

話は変わるが進が拾われたのは難破した船の残骸が散らばる浜辺から少し歩いた所にある森らしい。

なるほど、そういえば覚えがある。家に居たのに突然森になって訳も分からないうちにどうしようかというついで……転んだんだった。多分その時に頭でも打ったのだろう。

ラーネイレは俺の視線に気付くとニコニコと無言のプレッシャーを与えてきた。

「これ、貴方にあげますね。彼は当分お休みですから」
体は初めての戦闘の直後で大分くたびれていたのだが、ススムは命が惜しいので＜アレ＞は見なかったことにして素直に頷いて彼女から＜アレ＞が持っていた弓や剣、ついでに何故か靴まで受け取り「逝ってきます」と声をかけて外に出ることにした。

取り合えず時間を潰そう。恐怖に負けたわけじゃない。そう考えながら適当に歩いているとなんかでかいヤドカリに襲われた。

「うおっ!?!あぶなっ!?!」

相手は足が遅いようなので距離をとって対処を考える。

どうした物かと思ったが、取り合えずロミアスから貰った弓矢で攻撃を仕掛けてみるが…。

「ぜんっぜんダメだな、貝で防御されてる」

取り合えず逃げることにした。

面倒ならとっとと逃げたっていいだろう?

しかし何時までも追ってくるので困り果てていると、モヒカンの青年に出会った。

青年は気さくに声をかけてきた。

「よう、アンタ見慣れねーけどこんな所で何してんだ?」

「ヤドカリに追いかけられて困ってるんだ。俺の弓じゃ全然歯が立たなくて」

「ははあ、アンタ戦闘は初心者か?しょうがない、オレサマが手伝ってやろうじゃねえの」

ススムの言葉に青年は自身ありげに拳銃を手に持ちヤドカリを射撃し始める。

「アンタも見えてないで矢を放つんだよ。足止めになればもうけもんだ」

その言葉になるほど、と思いつつススムも矢を射掛ける。
しばらくの間銃撃と矢で射掛けつつ後退を繰り返す。

「いいか、足が遅い奴相手に態々接近戦で付き合う必要はねえ。こ
うやって距離を保ちながら戦うのだって手段だぜ」

「な、なるほど！」

一々もつともな事だ。だが、初心者のススム慣れるまでそんなこと
すらわからないで居た。

しばらく射撃と後退を繰り返すと10分もしないうちにヤドカリは
穴だらけの矢だらけになって死んでいた。

「アレだな、アンタ最初は矢がキチンとなっていないから刺さらなか
ったんだな。ほれ、後の方のは少し慣れてきたからか突き刺さつて
るだろう？」

「……あ、本当だ」

その後、助けしてくれたお礼を言ってモヒカンの青年と別れ、洞窟に
戻ると……。

「ふむ、上出来だったようだな」

「あ、ロミアス」

どこかボロつとした状態のロミアスが何事も無かったかのようにそ
こに居た。

時折ラーネイレから受け取った彼の武器やブーツ……ブーツは靴を
履いてなかったのでありがたく借りてる……に目が行っているが、
そのたびにラーネイレからプレッシャーが飛んできた。

（俺まで巻き込まんでください）

そう思わずにはいられなかった。

その後、軽くこのノースティリスの大地にあるネファイア……遺跡郡に関する簡単な説明を受けて彼のレクチャーは終わった。
そしてこの日から始まるのだ、彼の旅は。

石動進17歳。冒険者 はじめます。

L v 0 :: 高校生と乞食の洞窟と緑髪の男の悲劇 (後書き)

名前…ススム (石動進)

種族…神の化身 (現代日本人)

男性…男性

職業…観光客

初期ステータス…カッコ内は元の値

生命力 90 (90)

マナ 150 (150)

狂気度 0

速度 100 (100)

筋力 6 (6)

耐久 7 (4)

器用 6 (6)

感覚 6 (6)

習得 5 (5)

意思 3 (3)

魔力 5 (5)

魅力 6 (6)

名声 0

L v 1：新米旅行者と物騒なロリっ娘と血に塗れた平原（前書き）

基本短めです。

レベル上がってくると長くなるかもしれません。

むしろ分割する勢いかもしれません。

多分そんな感じ。

チュートリアル（L v 0）でロミアスがマジでラーネイレに抹殺された時は吹きました。

酔っ払いが、無茶しやがって……。

遺品はありがたく頂戴しました。

ラーネイレさんからのプレゼントと思って！w

Lv1：新米旅行者と物騒なロリっ娘と血に塗れた平原

一日目

進：もといススムです。

読みは変わらないけど、この世界はカタカナ重視っぽいので日記もそれっぽくする事にしました。

日記は洞窟に転がっていた本をリサイクルしてます。空白ページばかりだったしね！

そういえば、ロミアスの出したプチを3匹倒すって言う課題で危うく死に掛けました。

恩人だけど、正直凄く性格悪いと思う。

酒癖の悪さで連れの綺麗な女性にフルボッコにされてたけど……。怖くてその場から逃げ出したけど。

さて、今日はこの世界での色々なびっくりと出会いました。

特に一番のびっくりはヴェルニースの冒険者ギルドに辿り着いた瞬間でせうか？

とりあえず、うん、何で俺こうなったよ？正直、状況が未だに飲み込めません。

助けてドラ●もん！

~~~~~

### 鉱山の街・ヴェルニース

ロミアスが教えた通りに、洞窟から出て街道沿い……といっても草が生えてないで偶々道っぽくなった場所に沿って歩いていたらヴェルニースという集落に辿り着いた。

広場で異様に肌の白い人がなんか演説でもしているのか声を張り上

げていたが、ススムはそれに興味がもてないので完璧に無視して広場を横切る。

「ふうん、それにしても思っていたより大きい所だなあ……。たしか、先ずはギルドに顔を出してギルドの人に冒険者手帳を発行してもらうんだっけ？」

しかし、ぶっちゃけ場所が分からないので、近くに居たオバちゃんに尋ねてみた。

「すいません、この街のギルドはどこにありますか？」

「ああ、すまないねえ。今忙しいからそういうのはガードに聞いてくれないかい。ほら、あそこに立ってるでしょう」

そう言って完全武装の青年を指差すオバちゃん。

「なるほど：ありがとうございます、オバちゃん！」

「あいよ、どういたしまして」

オバちゃんは言うが早いかせかせかと去っていった。ススムは改めてガードに話しかける事にした。ちよっと怖いと思ったが気にしない事にする。

「すみません、ギルドはどこにありますか？」

「ああ、それならここから東にある。そこの広場をあっちに行った所にある建物がそうだ」

ガードの青年が口で言い、指を差して教える。

「ありがとうございます」

「あいよ、どういたしまして」

礼を言って改めてギルドに向い暫く歩くとようやく辿り着いた。

「さて、お金が掛からなけりゃいいけど……」

今のススムは一文無し：ではなく、ロミアスから借りた162gd（小銭と紙幣からなるこの世界の通貨）を持っているが：キチンと働けば直ぐにそれ以上の金を手に入れる事もできるだろう、と彼は言っていた。

様々な期待を胸に抱きつつ、ススムは遂にギルドに入り――

「ご主人様――」

！

――何故か金髪少女に抱きつかれた。

「な、なにごと――!?」

動揺しつつ少女を見ると少女は感極まってるのかすすすと泣いている。

ちなみに、年齢は見た目10歳前後、容姿はボサボサの金髪で髪の毛は長く着ているモノはボロボロのワンピースのみだ。

決して真新しい血の跡が見て取れるメイスなんて視界に映ってない。

「ほう、君が彼女の主かの？」

時代がかった口調で黒髪の妙齡の女性が戸惑っているススムに問いかける。

（なんていうか、すごく……美人です……）

等と考えつつも口を開く。

「いえ、その、俺は彼女と初対面なんですが」

と、いいですかこんなヤヴァ気な少女と知り合いだなんて、そのなんだ、困る。

「ふむ……言われてみればこの娘っ子の言っていた容姿とは若干違うの、黒髪に黒目だしの。」

ワシはヴェルニースのギルドのトレイナー、リーシュじゃ。お主は？」

ギルドのトレイナー、という事はギルドの人か。

「俺は：旅行者のススム・イスルギといいます。乗っていた船が難破したらしく、その際にとある人々に助けてもらい、ここに行けば取り敢えず仕事を見つける事が出来ると言われてきました」

乗っていた船の難破云々は作り話だ。だが、実際に船が難破した事件はあったらしく、俺を拾った現場の近くで船の残骸と人の死体が転がっていた……とはロミアスの談だ。

「船が難破：じゃと？」

「ええ、俺自身はその時の影響で難破以前の記憶がなくなってしまつて……。俺を助けてくれた人の推測ではエーテルの影響じゃないだろうか？と、言っていました」

ススムの言葉に女性はフム：と頷き2、3秒程度目を閉じてから再び口をあける。

「確かに、そういった可能性はあるかも知れんう。エーテル病による突然変異で頭の肥大化、翼が生える、足が蹄になる、目が増える：などといった報告を聞いた事もある。その程度で済んでよかったのう」

「ま、まったくですね……」

エーテル病がそこまで厄介だとは思ひもしなかった為に思わず口元が引き攣ってしまう。

（ロミアスはただ単に「厄介な病の元」としか言っていないかったしな！とはいえ、主観では自身がエーテル病に掛かっている形跡はない。とりあえず、ここに来る前と代わらない俺の体だ。衣装も間違はなくここに来る前と変わらないしな……なら、俺はまだエーテル病を発症していないとみていいか）

ススムがそんな事を考えていると、リーシュが目線をススムの腰の当たりに向けて口を開く。

「もしかすれば、この娘っ子の主はお主かも知れんな？ どうじゃ、この娘っ子連れて行ってはくれぬか？」

「いいっ！？ ちょ、本気ですか？！」

そう問いかけるとリーシュさんはさも当然のように頷いた。

「本気じゃ、娘っ子もお主になついて居るしの。何より、ギルドでは娘っ子を養う余裕が無いのが実情じゃ。例え人違いであろうと連れて行ってくれるのなら連れて行ってもらいたいのじゃよ」

最近は一エテル風による影響と魔物の活性化で治安は悪化しつつあり、ガードも人手不足。彼女の世話をする余裕など欠片もないのだ……とリーシュは語る。

実例として、この間も吟遊詩人の演奏がトラブルとなり重傷者が出る大騒ぎになったし、通り魔殺人事件、市街のど真ん中で突然モンスター襲撃等があるとリーシュは言う。

「下手に人間の多いところに居るよりは、お主の様な旅行者の方が安全と言う場合も無いわけではない」

それは、魔物よりも人間の方が厄介である事を暗に示している。

そう言われてしまうと、例えこの少女の方が恐ろしいとススムの勘が囁いても、安全なのは確かにそうなのかもしれないと思うてしまう。

上手く言いくるめられてる気がしないでもないけど、ここは素直にいう事を聞くことにした。

「……わかりました。とりあえず、この娘が自主的に離れるまでは面倒見ますよ」

……どうか預かっている間にこの娘に殺されません様に！ それと言葉の裏で進が強く思ったことだった。

「んむ、任せたぞ。さて、少々聞きたい事もあるので答えてもらおう」

その後2、3回ほど質問されたがその全てはこの世界の常識と言ったような内容であったが、ススムは良く分からなかったので素直に「わからない」と返した。そして、その度にわからないと答えた部



分に関して説明を受け、そして、最後に問われたのは。

「お主は身分証明になるようなものは持っておるかの？」

「一つも…。ここにすれば代わりになるものを発行してもらえるとロミナスに言われてここに着たんです」

ロミナスの名前を聞いてリーシュの顔がピクリと引きつった。

「お主、よくロミナスと関わって無事じゃったのう」

「ええっと、どういふことです？」

彼女はしばし考えた後、クチにする。

「ロミナス、彼の者は冒険者として優れた腕を持つが、それ以上に性質の悪い悪戯をすることで少々有名でな。以前も依頼で肉の調達を依頼された際、動物の肉ではなく、人肉なぞ用意しくさったわ！」

徐々に怒りが込み上げているのかヒートアップしているリーシュ。

「気持ちには痛いほど理解できますが、先ずは身分証の代わりになるものがほしいんですが」

「おおっと、すまぬのう。発行自体は直ぐに済むぞ。お前さんの住所と氏名、後は血判で十分じゃ」

「血判ですか」

ススムは古臭い上に痛そうだと思わないでもないが、この世界で生きる為の通過儀礼と思って諦めた。

この程度の妥協は必要なのである。

住所はこの世界で始めて目が覚めた時に居たあの洞窟にしておいた。あそこは何でも『乞食の洞窟』と呼ばれているらしい。

……………乞食。

「では、次に仕事の方を説明するかの。依頼の受け方は掲示板に掲載されている依頼書をみて依頼人の元に行くか、または直接依頼されるかの二択じゃ」

「それって、何か差があったりするんですか？」

「勿論ある。掲示板の依頼は我ら冒険者ギルドの方で格付けと掲示板への掲載、または冒険者への仲介を行っておる分仲介料として依頼料が差っぴかれておる。直接の依頼はギルドを通さずに受けた場合の依頼じゃの。コチラの場合は仲介料がない分懐には割り増しで入るが、その分難易度の判定がつかないから危険度も多少高くなるのじゃ。ここまでは良いか？」

ススムはメモをとりつつコクリと頷く。

「依頼の難易度についてじゃが、基本となるのは星の数じゃ」  
「星？」

「コレを見てみるが良い」

そう言って一枚の書類を出す。

書いてある文字は何故か日本語だった……なんでさ？ いや、知らない文字だったりしたら読めないから助かるんだけど。そんな俺の心境を知らぬまま話は進む。

「モンスター退治系の依頼書じゃ。難易度は星一つ、腕に覚えのある初心者に任せるにピッタリの依頼じゃ。他にも初心者向けは収穫依頼、調達依頼、配達依頼などもある。収穫依頼は畑などで収穫を手伝う依頼じゃ。手間取る事がなければ一番簡単じゃな。調達は少々面倒でいう、直ぐに手に入るものならば良いが、手に入らぬ物まであったりするからの。配達系は要注意じゃ、失敗すれば依頼の品を横領したとして最悪犯罪者として認定されるから注意せよ」  
「なるほど、配達は要注意かあ……覚えておきます。他にも稼ぐ手段って何かありますか？」

ススムの言葉にほんの少し考えてからリーシュは口を開く。

「ふむ、他にはやはり交易かのう？ 地域の特産品を他の街で売り捌けばそこそこに設けられなくもないじゃろう……だが、これは需要があれば、の話じゃな」

「なるほど……その辺りはなんとなく分かります」

つまりは需要と供給、Aという商品が欲しい人が居ない街にAを持つていても意味がない。人々が欲しがるようなモノや珍しいモノを持っていけばいいわけだ。

「そうか、ならばよい。最後に残るのはこのノースティリスの地に眠る迷宮郡、ネフィアの探索じゃの」

迷宮郡、そしてネフィアという単語はススムにとって始めて耳にする単語だ。

「迷宮郡とは…？」

一応ロミアスから触りは聞いている。だが、彼は本当にさわりしか教えてくれなかった。

いわく、どこにでも現れる不可思議な迷宮、と。

「一般にネフィアと総称される地下迷宮、迷宮化した森林、迷宮の塔や砦などの総称じゃ。ネフィアは魔物の巣窟となっておってお主の様な旅行者にはちと荷が重かろう…もしも挑むのなら十分以上の準備をし、仲間を募ってから行くとよい。そうすれば生存率が大きく上がるじゃろうて。とはいえ、今のお主ではネフィアどころか平原の魔物でも勝てるか怪しいのう…」

その言葉を聞き、ススムは戦闘経験の浅い自分じゃ下手に戦うのは無謀かあ…と考え。

「戦闘になったら逃げるが吉っすかねえ」

「じゃろうな…とはいえ、プチやひ弱な動物程度なら十分に倒す事は出来るじゃろう。そやつらを相手に基礎を学ぶのも良かろう」

（そのプチに殺されかけた事がある、とは流石に言えない、言いたくないなあ）

そんな事を思いつつ、ススムは話を進める。

「取り敢えず、出来れば早急に仕事の話が欲しいです…できれば戦闘力が必要ない依頼が良いんですが」

「では、様子見も含めてコレなんてどうじゃろうなあ？」

そう言って渡されたのは『あの人がもっているものが欲しい ★』  
詳しく読むとなんでも、途方も価値の無い偽の金塊を自慢されたの  
で、悔しいから自分もそれを入手したい、という話の様だ。

「ああ、これなら簡単そうだな」

だって、ロミアスに偽物の金塊を掴まされたしな……あの時のガッ  
カリ感はなんとも言えなかったが。

「それでは、その依頼をしっかりと遂行してくれ。期日は3日以内だ」

ちなみに、この間少女の事は完全放置状態だ。

依頼があっさりと終了してしまうと、次に幾らなんでも実力を付け  
ないのは良くないと思ったススムは少女を伴って街から30分ほど  
歩いた場所にある平原に来た。

そこで、ススムはふと思い出す。

「なあ、そういやお前さんの名前はなんていうんだ？」

素晴らしく今更な疑問であった。

「エリュシオンと言います」

「！」

思わず『お前は俺を音の地平線とか奈落に誘うつもりか!？』と、  
突っ込みたくなる名前だったが、そんな意味不明な突っ込みは自重  
する。

「エルと呼んで下さい」

「エリュシオンか……んじゃ略してエリーな。今後はエリーって呼ぶ  
から」

エリュシオンの言葉を華麗にスルーして決め付けるススム、中々に  
外道である。

「……わかりました、ご主人様」

(……頼むから、そんな死んだ魚の様な目でこっちを見ないで欲し  
いなあ。ヤンデレっぽくて怖いぞ!?)

そう、このエリュシオンことエリーは常時死んだ魚のような目……

俗に言うレイプ目とか言われちゃうアレ系の目をしているのだ。

「あゝ……今回の目的はこの平原での狩りだ。怖かったら街で待っててもいいからな？」

「エリーもお供します」

間髪いれずにエリーは答える。

「どうやら基本的に子犬っぽい感じだ。とススムは思った。

「そう。じゃあ怪我をしないように気をつけてくれ。念のためにコレはお前さんに預けておこう」

そういつてススムは腰に挿していた鉄のナイフをエリーに手渡す。

これはもっていた鈍器でグロテスクな肉塊の山を築かれるより、惨殺死体のほうがマシと判断したからだ。

「ありがとうございます」

「ああ、それじゃあちよっくら向こうで狩って来るわ」

数刻後

「せいっ！」

ヒツジに対し膝蹴り、肘撃ち、踵落しの3発をくわえて怯ませ、更にそこに至近距離でヒツジの頭部目掛けて矢を放つ。矢は狙い違わずにヒツジの頭部に吸い込まれ、ヒツジはそのまま絶命してしまう。弓矢の扱い方に関してはそれなりに自信が着いてきた。至近距離で撃つと言う邪道な扱いだけど、と思った所で矢が残り数本しかないことに気付く。

「南無南無っと、とりあえず狩りはこの程度にしてそろそろ引き上げるかー」

ヒツジの肉を先ほど拾った折れた剣で削いで切り取り、十分だろうと思える量を確保した所でススムはエリーを待たせている場所に戻る。エリーも喜ぶだろうか？などと考えながら歩いて、しかし、戻った先は惨劇の場と化していた。

「ひっ!？」

戻った先に繰り広げられていたのはエリーを中心とした血の池地獄、周囲には動物どころか人型のモンスターの屍骸も幾つか転がっている。正に死屍累々という事場が相応しい。

「GYAAAA!!!」

「!!!」

モンスターの悲鳴、その悲鳴の先にススムが目をやると、夕暮れをバックにモンスターはゆっくりと倒れ付す。

その先に居るのは草臥れてボロボロになったワンピースを真っ赤に染め、腕には血が滴る鉄のナイフ、そして口元を狂気の笑みに歪めたエリュシオンの姿があった。

（あ、あわわわわわわわわわわあ!?!）

だがそれもススムの姿を認識した所で先ほど別れる前までの子供らしい笑みの表情に戻ったと、ススムは思い込もうと思った。

現実は無情で表情がまったく読めない鉄面皮の無表情だったりする。

「あ、ご主人様」

「お、おう!?!」

この時、若干声が裏返ったススムを咎めることが出来る人間は居ないだろう。

「お肉いっぱいですね。辺りに薬草もありましたし、お夕飯楽しみです」

「お、おう! そうだな!」

心なしか弾んだように聞こえるその声色が無表情鉄面皮でなけりや良いのに、とススムは思わずにはいられなかった。

（そういえば、宿に泊まったときにジーさんが出てくる変な夢を見

ただのだけれど、一体なんだっただんたろうか？  
（

**LV1：新米旅行者と物騒なロリっ娘と血に塗れた平原（後書き）**

ススムに「少女」の仲間を付けたくて無理矢理理由をくっつけてみました。



## **L V 2 : 新米旅行者と物騒なロリっ娘と盗賊と油断 (前書き)**

リプレイ小説って結構大変なんですね。  
特にこの手のは。

プレイ内容をソレっぽく文章にするだけで少し時間食いすぎました。  
20101008 誤字修正。報告感謝します！

## Lv2：新米旅行者と物騒なロリっ娘と盗賊と油断

### 5日目

いきなり前回の日記から日が開きました。元々こういうのを毎日付けるのって苦手だしいいかと思ってる所存です。ススム・イスルギです。

さて、ここ数日何をして過ごしたかと言うと色々な依頼をして過ごしていました。

他にも、墓地を根城にしている盗賊を退治したりもしたな。

盗賊たちでしたが、ぶっちゃけ大して強くありませんでした。

エリーが前衛を勤め、俺が後方から支援狙撃をする。

このパターンだけで割と何とかなりましたわ。

ぶっちゃけ、こいつら盗賊と言うよりただの不良グループみたいな感じだったのかなあ？

あそこまで徹底しなくても適当にやりゃ良かったか？いや、でも油断するとあっさり殺されそうだよなあ。

後、人殺しを始めて経験したわけなんだが……何と言うか思ったほど心に来る物はなかった。

むしろ俺の中では必要だから殺したけど、何か？といった感じだ。だってほら、殺さなきゃ殺されるし。

そう理解しては居ただけど、そこで恨まれるって所まで思考がいつてればその後の問題は起きなかったんだろうなあ……。

|||||



常識が欠如している状態だそうだ。

全くをもって好都合である。

そういえば彼の職業は旅行者のようだ。

弓の扱いには自信があるようだが殴り合い、斬り合いは苦手だと言っている。

ならばイザと言う時に御するのも楽だろう。

その後、彼の仕事についていき、平原での訓練兼食糧確保を手伝った。

ゴブリンを筆頭にごろつきや敗残兵も混じっていたが、肉を大量に確保できた。

人肉は大して旨くも無いが、コレも生きる為だ。私の血となり肉になれることを光栄に思うが良い。

等と思っていたが彼が人肉を嫌ったので、結局夕飯は羊肉だった。

彼の手料理は簡素なものだが割と美味しかった。

その後の数日間は彼が幾つもの自分の背丈に見合った依頼をこなし、安定してお金を稼いでいた。

彼は何度か怪我をして討伐依頼に失敗していたがこれは仕方ない。

彼は正直に言っ腕っ節は大した事が無いから。

昨晚、酒場で彼がシーナに「盗賊退治」を依頼され、考え渋った末に了承し、盗賊退治が実行された。

相手は10を超える成人した男達が集まった武装集団。

反面、こちらは腕に覚えがあるといえ、まだ成人していない女と近接戦闘に大きな不安の残る男が一人だ。

だがはつきり言おう、彼は、ご主人は基本的には優しく、そして臆病者であると同時に……素晴らしく冷酷な虐殺者だ。

私はこの盗賊退治でそれをハッキリと理解した。

墓地の地下倉庫を根城にしていた盗賊たち。

彼等のご主人が魔法店で購入してきた火炎瓶によって半数以上を強烈な炎と熱気で焼き殺され、ほうほうの体で脱出してきた盗賊たちも地上に出ようとした瞬間に彼の弓と私のナイフによって容赦無く殺される。

これは冒険者の戦いではない。寧ろ殲滅戦や虐殺の様相だ。

私は彼を誇らしく思うと同時に恐ろしさを覚えた。

願わくば、彼が多くの者を敵に回さない事を祈りたい。

仮に敵に回したとして自身を守る手段をキチンと得てもらわねばなるまい。

しかし、今のままでは策を弄することは出来ても直接勝負では弱いままだろう。

ならば、なんとか実力をつけてもらうしかあるまい。

そう、全ては私が生きるために。

## Side Out

ススムはここ最近、エリーの視線が何だか妙な感じだなあと思っていた。

発端は多分、墓地の盗賊を殲滅した時のなんだろうと辺りはつけて居たものの。

そんなに特別なことをした訳ではない。

籠城する武装集団を古典的な火攻めで全滅させただけ、と言う認識なのだ。

「ご主人様、少々よろしいですか？」  
「ん？」

エリーに話しかけられ手に持っていた棒を床に置く。

「今のままではご主人様の強さに磨きを掛けるには時間がかかりすぎてしまうと思います」

「うーん、そうか？」

と言うかそもそも余り強くなろうと言う意識は無かったんだけだな。と胸のうちだけで考える。

「はい、ですのでここは一つ実践訓練と言うことで戦闘依頼を受けてみてはどうでしょうか？」

「……本気か？」

「はい」

エリーの言葉にススムは割りと本気で思考する。

エリーは別段悪い子、と言うわけではない。怖いけど。

言う事はキチンと聞いてくれるし、自分より強いし、行ってみれば相棒だ。かなり年下でしかも女の子だけど。その辺は異世界クオリティと言うことでスルー。

「うーん、それじゃあ☆一つの奴限定で受けてみようか」

「わかった」

この判断は先の盗賊の討伐に成功したが故の油断だった。と、後にススムはため息混じりにいうことになる。

余りにも盗賊退治があっさりと済んでしまったが故の慢心。その代償は大きかった。

森に入ってモンスター達を討伐して欲しいという依頼だったのだが、指示された場所に行っても丸で遭遇しなかったのだ。

「おかしいな、場所はあってるよな？」

「はい、場所に間違いは無いはずです」

そう思っていると、二人の死角となる場所から空気を切り裂いて矢が飛翔してきた。

「「!」?」

矢は二人に当たらなかったが、その直後に二人は悟ることになった。

「か、囲まれてるっ!」?

「拙い、ですね」

ススムはロミアスの弓を、エリーは短剣を構える。

周囲の木々にソレまで気づくことのできなかった武装した人間達の姿が見える。

「いまだ、アジトを潰してくれた札をしてやれ!」

「かかれい!」

その言葉にススムは激しく動揺する。

「罠だったのか!」?

「そんな?!」

罠と悟った時点でもう逃げるべきだとススムは判断した。

冷静な判断、と言うよりは完璧にビビッたうえでの敗走だ。

「逃げるぞ！エリー！！」

「はい！」

しかし、囲まれている状態なので包囲を突き破らなければならない。  
エリーが駆け出す。そこには手斧を持った盗賊が居た。

「にがしやしねえ！！」

「っ！」

エリーが手斧を避け、反撃とばかりにナイフを振るう。  
エリーのナイフは盗賊の腹を刺すが。

「捕まえたぜえ…小娘！」

「うっ！？」

ナイフで刺すために突き出した腕を致命傷覚悟で受け止め、そして  
その腕をがちりと両手で握りつぶさんばかりに掴む。

「エリーを離せっ！」

「おおっと！テメエの相手はおれだぜいボウズ！」

その言葉と共に振るわれたメイスは的確に石動の後頭部を粉碎した。

「——！？」

ススムが最後に見たのはススムに向かって叫んで手を伸ばそうとした  
エリーが棍棒で袋叩きにされているシーンだった。



（まだ、死にたく……死に切れな……）

そして、痛みも思考も何もかもが無くなってススムはそのまま死を迎えた。

「うわああああ!？」

ススムが改めて目を覚ますとそこはヴェルニースの人気の無い路地だった。

「あ……れ? ユメだったのか??」

そう思って直ぐ横を見て「ヒッ!？」と後ずさる。

掠れる吐息を漏らし、血を垂れ流しているエリーがそこに横たわって居たから。

そして自分が夢だと思ったかった光景の最後の瞬間。エリーが袋叩きにされるところがフラッシュバックしてくる。

夢な訳が無かった。全てが現実だと彼女の状況が語っていた。

「く、くそう! くそう!! 何でこうなってるんだよ!」

喚きつつも今すべきことは何か? 決まっている、医者の方にエリー

を連れて行くことだ。

そう結論付ける。

「くそ、救急車が呼べりゃいいのに！！」

エリーを背負い、愚痴りながらも路地を抜け出る。

ヴェルニースに向かっていく間、ススムは絶えずエリーに声をかけ続ける。

「我慢しろよ！堪えてくれよ！絶対死ぬんじゃないぞ！」

## LV2：新米旅行者と物騒なロリっ娘と盗賊と油断（後書き）

名前：ススム（石動進）

種族：神の化身（現代日本人）

男性：男性

職業：観光客

LV1↓LV2

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 100 (100) ー ー

名声 86 +86

カルマ 16 +16

現在値 前回比

筋力：6 (6) \* ー ー

耐久：7 (4) ー ー

器用：16 (6) \* ー ー

感覚：6 (6) \* ー ー

習得：5 (5) ー ー

意思：3 (3) ー 1 (ー1)

魔力：5 (5) \* ー ー

魅力：5 (5) ー 1 (ー1)

装備

頭：なし

首：なし

背中…烈火の皮の軽外套「4, 2」…（感覚維持, 交渉「\*\*」,  
 火炎耐性「\*\*」）  
 胴体…なし（シャツ）  
 利手…長棒（良質）「布製」（恐ろしい）  
 手…なし  
 指…なし  
 指…なし  
 腕…厚籠手（良質）「鉛製」  
 腰…なし（ズボン）  
 足…合成靴（奇跡）「ブロンズ製」…ロミアスの遺品  
 遠隔…波動を放つ弓（特別）「ミスリル製」…ロミアスの遺品  
 矢…鉛の矢束（1d5）……ロミアスから貰った

### **L V 3：新米旅行者と護衛の旅と王都への道（前書き）**

今更だけど、今の所はL Vが上昇した付近でお話を区切ると言う形を取っています。

前回は討伐依頼の最中にレベルが上がったのであんな感じでした。

### Lv3：新米旅行者と護衛の旅と王都への道

6日目

あの後、エリーは医者の手によって何とか命をつないだが、全身に大なり小なり怪我を負っていた為に一ヶ月の療養を言い渡された。今朝にはエリーは意識を取り戻して居たがギプスや包帯で固定された全身をみてびっくりしていた。

「申し訳ありませんご主人様。当分はお役に立つ事が出来ません」

何時もの死んだ魚のような目で謝罪された。

慣れてきたけど今回みたいに死にぞこなった状態で言われるとなんだか迫力が増していると言える。

「気にすんな、今回はまあ、アレだ。これ以上気にしてもしょうがないだろう？」

俺もお前も生きているんだし、次に活かそうぜ」

「はい…」

「取り合えず俺はギルドの方に行ってくるよ。エリーはゆっくり休んで早く復帰してくれ」

「はい」

そうしてギルドに向かうと、トレーナーのリーシュに「お主は魔法を覚える気は無いのか？」と問われ、魔法自体良く知らないので説明を請うと『書に宿る魔力を、書に記された内容を読む事覚える事によって共感し書の魔力を取り込む』事で魔法を覚えるらしい。とはいえ、覚えたからといって即自在に使いこなせるわけではない。

『<sup>キーワード</sup>詠唱』が必要となるらしい。

詠唱自体は人によって異なるし、上位の魔法使いともなれば無詠唱でも発動可能なのだが重要なのは一つだけ。取り込んだ書の魔力を適切に開放するイメージ力を持つ事。

実際に詠唱している理由は魔法発動のためのイメージを補強する為である。

で、ススムは魔法使いとしての才能はどうやら低いということが判明した。

非常に残念すぎる。とススムは呟く。

とはいえ、何事も努力次第なので継続して頑張る様に、とススムは言われた。

この世界においては魔法も所詮技術の一つでしかないので何事も努力次第なのだ。

「読書や暗記、詠唱のコツなどはここから東に行った所にある王都パルミアや芸術都市ルミエストのギルドで学ぶことができる。興味があれば行って見ると良いじゃろう」

リーシュはそう言っとうなずく。

「んじゃ、幾つか本は持ってるけど読書とか暗記覚えるまでは読まないでおこうかな」

「その辺は好きにするがよかろ？……ってお主、この本達はまだ鑑定しておらんのか？」

「鑑定、ですか？？」

「なるほど、そういえば説明しておらんかったな」

そう言ってからリーシュは直ぐ近くに居たローブを着た青年を呼ぶ。

「ベルファス、こやつは魔道書を鑑定してやってくれんかの？」

「いいですけど……支払い大丈夫なんですか、彼」  
「……あー、幾らになるんでしょう？」

支払いといわれて弱冠下手になるススム。  
お金は大事である。

「未鑑定品を出してくれ、計算するから」

言われてススムは鑑定していない持ち物……ほぼ全ての手荷物を取り出した。

「多いな、ちょっと待ってろ」

しばし待つと結果が出た。

「個別なら288ゴールド、全一括なら6333ゴールド。おまけで特別な品を調査するなら3968ゴールドだな」

「うぐっ、全部一括は無理。個別で頼みます」

そうして幾つかの品を鑑定することになった。

最初は装備を、次は書物と魔法棒をその次に薬品類を。

「の、呪いの品が二つも……しかも棒が手を離れなかったのって呪われてたからかよ」

「……初心者にありがちな迂闊さじゃのう」

「ですね。呪いは祝福された水を振り掛けたり呪いを解く効果のある魔法や巻物、魔法棒を入手して使用するほかありません。がんばってください」

「あい……」



とほほ、と肩を落とす石動。  
だが、コレに懲りて次は呪いの武具には引っかかるまいと心に決める。

「さて、この後どうしようかな……」

エリーは一ヶ月間の入院生活、その間の費用はギルドの割引もあったかなり安く済んだのだがその間自分は暇になる。

「地道に働くか……」

そう思いながら依頼掲示板をみると、星が赤かったり難易度が高かったり時間制限が厳しそうなばかりがあった。

「こりゃきついな」

思わず眉根を寄せて呟く。

それぞれの依頼を隅まで見渡すと『美しすぎる人』と題が書かれた護衛の依頼があった。

王都パルミアまでの護衛で、変質者に狙われているらしい。金貨と補給品が成功報酬となるようだ。

「星もひとつだし、変質者って言っても街道とかで人目につくところで襲い掛かっては来ないよな？」

そう思って依頼を引き受けることにした。

そして依頼主であるヴェルニースの長に会いに行き、護衛を引き受ける旨を告げると喜んだ表情をしてありがとうという。

「『彼』は一人でも大丈夫と言っていただけど心もなかったからね、少々頼りなさそうな気もするけど助かるよ！絶対無事に送り届けてくれよ！」

そう言って彼を呼ぶ。

呼ばれた彼を見てススムは驚いた。

「あー、そのなんだ、頼むわ」

若干苦笑した様子でモヒカンの彼はススムに挨拶をするのだった。

「あ、アンタはあの時の！！」

そう、そのモヒカンの彼はススムが『乞食の洞窟』を始めて出た時に遭遇したヤドカリを倒す手伝いをしてくれたモヒカンの男だった。

「覚えてたか、まあアレだ。話は道中で、な？」

「あ、はい。それじゃ街長さん、いつてきます」

ヴェルニースを出て二日、何度か仮眠を取りつつ街道沿いに二人は旅を進めていた。

その間にモンスターの襲撃は二回。そのうち、彼が言うには彼を狙った待ち伏せが一回あったが二人そろって距離をとりながら戦えば近接戦闘しかできないモンスターにはさほど苦勞することなく勝利できた。

他にも1度旅商人と出会ったが、品は良い物だったが値段が高すぎて買物出来なかった。

「そういえば、なんでヴェルニースを出ることにしたんですか？」

「んん？ ああそっちを聞くのか。単純な話で街長に付き合いきれなくなったからだよ。尻を狙われるのは勘弁して欲しい」

「……そういう事っすか」

石動は敢えて聴くつもりはなかったのだが、どうやら街長は俗に言う薔薇族らしく、彼は変質者（ヴェルニースの長）から逃れるためにパルミアへ向かうようだ。

長の方は自分が変質者扱いとは知らずに護衛を依頼したらしい。待ち伏せは彼を諦めさせるための策であろうと言う。

「……大変っスね」

げんなりした表情でススムは言う。

「だが、ここを逃げ切ればもう尻の心配はしないですむ。パルミアに付くまで頼むな！」

「ええ、お任せください」

それから二日後。

途中で大雨に降られて道を見失って余計な時間をロスしつつも二人は何とか王都パルミアへ辿り着く事が出来た。

「ここまでありがたいな！コレ、成功報酬だ」

モヒカンの男はそれだけ言って荷物袋をススムに手渡すと意気揚々と夜のパルミアの街に消えていった。

「相当嬉しかったんだなあ、きつと。んじゃ俺も疲れたし宿にでも泊まろうかなあ……この時間に開いてればいいけど……」

### Lv3：新米旅行者と護衛の旅と王都への道（後書き）

名前…ススム（石動進）

種族…神の化身（現代日本人）

男性…男性

職業…観光客

Lv2↓Lv3

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 100 (100) ー ー

名声 86 +9

カルマ 16 +1

現在値 前回比

筋力…6 (6) \* ー ー

耐久…7 (4) ー ー

器用…16 (6) \* ー ー

感覚…6 (6) \* ー ー

習得…5 (5) ー ー

意思…3 (3) +1 (+1)

魔力…5 (5) \* ー ー

魅力…5 (5) ー ー

装備

頭…なし

首…なし

背中…烈火の皮の軽外套「4, 2」…（感覚維持, 交渉「\*\*」,  
 火炎耐性「\*\*」）  
 胴体…なし（シャツ）  
 利手…長棒（良質）「布製」（恐ろしい）  
 手…なし  
 指…なし  
 指…なし  
 腕…厚籠手（良質）「鉛製」  
 腰…なし（ズボン）  
 足…合成靴（奇跡）「ブロンズ製」…ロミアスの遺品  
 遠隔…波動を放つ弓（特別）「ミスリル製」…ロミアスの遺品  
 矢…鉛の矢束（1d5）…ロミアスから貰った

◆スキルと特殊能力

戦術 Lv3. 720  
 両手持ち Lv3. 285  
 治癒 Lv5. 062  
 盾 Lv3. 000  
 重装備 Lv4. 000  
 中装備 Lv4. 000  
 二刀流 Lv4. 000  
 軽装備 Lv5. 158  
 回避 Lv4. 475  
 隠密 Lv4. 468  
 釣り Lv5. 000  
 信仰 Lv4. 000  
 旅歩き Lv6. 913  
 瞑想 Lv5. 506  
 詠唱 Lv4. 000  
 交渉 Lv4. 620

◆武器の専門

|       |      |     |
|-------|------|-----|
| 長剣    | Lv4. | 070 |
| 斧     | Lv4. | 000 |
| 格闘    | Lv7. | 134 |
| 鎌     | Lv4. | 000 |
| 鈍器    | Lv4. | 000 |
| 槍     | Lv4. | 000 |
| 杖     | Lv4. | 003 |
| 短剣    | Lv4. | 000 |
| 弓     | Lv4. | 663 |
| クロスボウ | Lv4. | 000 |
| 投擲    | Lv7. | 000 |
| 銃器    | Lv4. | 000 |

◆耐性と抵抗力

|      |         |
|------|---------|
| 火炎耐性 | 弱い耐性**  |
| 冷氣耐性 | 耐性なし    |
| 電撃耐性 | 耐性なし    |
| 暗黒耐性 | 耐性なし    |
| 幻惑耐性 | 耐性なし    |
| 毒耐性  | 強い耐性*** |
| 地獄耐性 | 耐性なし    |
| 音耐性  | 耐性なし    |
| 神経耐性 | 耐性なし    |
| 混沌耐性 | 耐性なし    |
| 魔法耐性 | 耐性なし    |

◆特徴と体質

|        |                                  |
|--------|----------------------------------|
| 「フィート」 | 貴方の防御は石の様に固い「Protection Value+5」 |
| 「フィート」 | 貴方は見切れる「Defense Value+5」         |
| 「フィート」 | 貴方は我慢強い「耐久+3」                    |

ボーナスは今の所全て旅歩きに振っています。

#### **L v 4 :: 新米旅行者と王都と農村と鉱山街をいったりきたり (前書き)**

プレイ中に衝動的に何度か討伐系依頼をやり直したくなりました。  
ええ、悔しかったですから。

20100908

タイトルに誤字があったため修正

20101008

誤字修正。報告に感謝です！



## Lv4：新米旅行者と王都と農村と鉱山街をいったりきたり

### 11日目

あの後、ススムは運よく宿がまだ空いていたのでその場でチェックインし食事にもありつく事が出来た。

気持ちよく布団で休みさあ今日もがんばるぞ！と彼は目を覚ましたのだが生憎その日の天気は雨だった。

「むう、残念だ…。とはいえこのまま部屋に居る訳にも行かないし仕事を探すか」

呟いて宿を後にする。

雨は小雨程度だが、やはり濡れると微妙にストレスがたまる物だった。

「ふうむ、普通な依頼から変な依頼まで、色々あるんだな」

彼は呟きながらその日のうちに幾つかの依頼をこなしていた。

魔道書を入手する依頼や、使用済みと見られる中古の衣類を入手する依頼。

そして森の清浄化という名のモンスター退治だ。

上記二つは手持ちの魔道書や食べ物譲渡することで簡単に入手する事が出来たがモンスター退治はススムにとってややトラウマ的な依頼だった。

「まあ、ここでまた罨なんてオチは無いだろ。大丈夫、基本を護つてやれば俺は勝てる！」

そう意気込んでいくが、森に向かうとやはり囲まれてしまった。

否、まだ気付かれていないが気付かないうちに囲まれているといつていい場所に居たのだ。

「くそっ、土地勘とかも重要だよな本当に！」

なんとかモンスターの包囲を抜け出し、適当に距離が取れた場所でロミアスの弓を放つ。

射るのはススムに気付いて追いかけてきた小柄な人型の魔物と熊だ。「この、こっちくるなよ!!」

小柄な魔物は一撃で射抜いて倒せたが、熊は一撃では沈まない。焦りもあってかミスもでる。

「くっそ!!」

それでも射ることに集中する。既に至近距離であり、武器を棒に切り替えたほうが良いのだが彼はソレに気付かず弓を引き続けた。すると、突然の立ち居地が変わった。

「がう!?!?!」

コチラの姿が見えていない位置に移ったのだ。

「トドメ!」

熊の頭部を射抜く一撃が熊に刺さり熊はそのまま倒れた。

「……ふう、一体なんだったんだ今の?」

その後も弓を射って当たる度にモンスターが転移する現象が何度か起きる。

だが、特に困ることも無く余裕で勝利する事が出来た。

「ううん、謎は多いけど取り合えず戦い方のコツは理解できてきたかな?」

そう思って王都に戻り再び仕事を探すことにした。

「あ、これリーシュさんへの配送依頼じゃないか。コレ、引き受けておくかな。」

どうせだ、他にもヴェルニス行きがあれば引き受けておくかな?」

そう思って依頼を見ると護衛依頼と急患の護衛依頼があった。

「……うーん、俺の腕じゃどちらか一つのほうがいいか？」

急患の方は急ぎみたいだし、コッチを受けてみるか」

そうして依頼主の雑貨屋の主人に会いに行くと、そこには青白い顔をした調子の悪そうな少し柄の悪い年を取った男性と雑貨屋の店主と思われる年若い女性が居た。

「あ、冒険者の方ですか！？お願いします、急いでヴェルニースまで父を連れて行ってください！」

「スマン、よろしく頼むぞ……」

「え、あ、はい！コチラこそよろしくっす！！」

その後、食料をその雑貨店で買い揃えて改めてヴェルニースに旅立った。

しかし、行きと違い今回は狙われて居るわけでもなかったので襲撃されること無く二日の強行軍でヴェルニースへの道を踏破した。

「何も無くコレだけ早くつけてよかった」

「ええ、感謝します……。ここからは一人でも大丈夫です、ありがとうございます」

彼はそう言ってよろよと、しかし確実に癒し手の居る場所まで向かったのを見てほっとする。

良いことをした、といった気分だ。

「そういや、エリーの所に顔を出すのもいいかもな」

エリーが入院してから5日ほど経つが一度も顔を出していないのは保護者失格だ。

そう思ってエリーの所……といっても宿なのだが、そちらに顔を出す。

「おーっす、エリー元気にばふぁ!？」

「遅い、です。酷いのです」

相変わらずの死んだ魚のような目は、恨み節も合っとかヤンデル系の雰囲気醸し出してススムをびびらせるには十分だった。

「す、すまんすまん。依頼でパルミアまで行って来たんだよ。お土産もあるぞ〜! ほら、これとかこれとか」

「……全部巻物。女心を分かってない残念な人なのです」

「……あー。その、ごめん」

その後、ススムも宿を取って、というか同じ部屋に泊まり寝る時間になったのだが。

「……部屋一つにベッド一つだからこうなるのは分かって居たのに……!」

「ご主人様は幼女に欲情するムツツリのロリコンでペドフェリアですか? しかも大して強くないとか救いがありませんね」

「ああ、もう黙れって。いいから寝るぞ!」

「ツレナイ人です」

そんな感じで二人は眠りに付いたのだが、ススムはその晩、夢で以前と同じ赤い髪の老人の魔術士の夢を見た。

「侘びにまた魔法を教授してやろう」と夢の中の老人は言ってその瞬間に夢の中だというのに頭痛を催す。

※元素の傷跡の魔法の知識を得た※

変な夢だったと夢の中で思っていると再び老人が現れた。

「おや、またおぬしの所に来てしまったか…。失敗じゃのう侘びに  
(ry」

※癒し手の魔法の知識を得た※

翌日。

「と、言うわけでご主人様。手っ取り早く強くなってもらいたいの  
でこの森での討伐依頼を受けてきてもらいたいのです」

そういつて『既に受諾された依頼書』をエリーが二枚見せる。

「……勝手に受けてきたのか!？」

「はい、今のご主人様でも大丈夫そうなのを見繕ってきました」

「……ふ、不安だ」

2時間後

「ごめん、アレは無理だった」

ボロ雑巾となったススムがそこにいた。

重傷というわけでもないが死に底ないといった雰囲気醸し出して  
いる。

実際に彼は依頼の場所に赴いてそこでモンスターに袋叩きにされて  
死んだと本人も思ったのだが、死んだと思ってから次の瞬間には気  
付けばヴェルニースの町のハズレに居たのだった。

そして二つとも結果は失敗に終わり評判は下がりっぱなしである。  
先ほど顔見せと共に配達物をリーシュに渡した時に「この大うつけ  
が!身の丈にあわん依頼を受けてあまつさえ失敗とは情けない!」  
というお叱りの言葉を頂戴している。

「……はあ、わかりました。ご主人様は無理に戦おうとしないほう  
がいいのかもしれませんがね」

「面目ない。んで、またパルミアまでの護衛依頼があったから行っ  
てくる。暫くヴェルニースを離れるけど……まあ、直ぐに無事戻っ  
てこれるからおとなしく待っているように!」

「無事に戻ってきてください、ご主人様」

「任せておけて。俺は不死身だぜ！」

ぐっとサムズアップして任せろというススムに対してエリーは無表情にため息をつく。

「（確かにそうなのかもしれませんが……とはいえ）調子に乗っているとまた失敗してしまいますよ？」

「うぐっ。まあそこは気をつけるよ。土産話でも期待してゆっくりと待っていてくれ！んじゃ、行ってくるよ」

そうしてパルミアへと向かうが、今回の護衛も特に命が狙われている様な依頼ではないので拍子抜けするほどあっさりとパルミアへとたどり着いたのだった。

と言う訳でもない。

途中で盗賊団に襲われたのだ。

身代金と荷物の兵糧を奪われる羽目になったが抗っても勝てるわけでもなし、即行で白旗を揚げてさよならさせてもらった、と言うわけだ。

あの時は護衛対象も肝を冷やしたと言っていた。

パルミアについて護衛対象と別れ、暇をもてあまし、さてどうしようかと思う悩む。

食料に関しては先ほど宿で食事だけ貰ったので十分なのだが、この後する事が特に無かった。

「そういえば、ここから南の方に村があるんだっけ？そこに行くよ  
うな依頼でも受けてみるかな？」

そうしてパルミアの南、ヨウインという農村へと向かう依頼を二つ、配送と護衛の依頼を受けて引き受けて向かうことにしたススムのだが、その道中は存外にストレスのたまる物だった。それというのも護衛対象がやたらに騒がしい人物で常に喋っていないと死んでしまうわ！というような人物だったのだ。

ソレを堪えながらヨウインに付いたとき、ようやく解放される、という思いが強かったのは言うまでもない。

配送依頼も情報屋というギルドに常駐する人物相手なので直ぐに終わった。

「さて、この後どうしようかな？」

宿で食事を取りながら少し考える。

一応、エリーの様子も気になるしヴェルニースに戻るか。

ヨウインでも依頼はあったのだが、妙に力仕事ばかりで貧弱なシェイボーイであるススムは能力的に無理と実に賢明な判断を下していたと言う一面もある。

そうしてヴェルニースに戻ってきたのがパルミアへ向かったあの日から4日後のことだった。

夕方にさて今日も泊まろうかと宿屋の主人に宿代を出しに行った時にソレは起きた。

「エーテルの風だあああああああ！」

その叫びと共に人々は悲鳴と怒号を上げて宿屋へと押しかけてきた。

「ななっ?! 一体なんだって言うんだ!?!」

戸惑うススムをみつけたリーシュが焦った様子で石動に言う。

「む、ススムではないか! お主何をしておる! 早くシエルターに逃げ込まんか!?!」

「え、ええ!?! リーシュさん、どういふことっすか?!?!」

「ああ、お主は忘れておるんだったな。とにかく宿の主人に言ってシエルターじゃ!」

リーシュはそれだけ言って宿屋の奥にあるシエルターに潜って行った。

「くそ、エリーを連れてこなきゃ!」

エリーを負ぶってシエルターに駆け込むこと丸3日。

エーテルの風の難を逃れるために人々が大挙して押し寄せるシエルターは実に人が多かった。

「こんな所で療養なんて申したくありませんね。ご主人に何度貞操を……」

「黙っててくれ、本当に、マジで。お前が俺と寝るって言ったからああなったんだろうが」

ゲッソリしたススムといつもどおりのエリー。

状態も大分良くなってきたのか松葉杖で歩ける程度までに回復している。



二人はすることも無かったので読書をしたりなんなりで過ごしていたのだが、就寝の時はベッドの数の都合もあってススムがあぶれて居たのだが、エリーが「お兄ちゃんと一緒に寝たいんです」と言う  
と「ああ、なんだ兄妹なのか。じゃあ良いか」「良い妹さんを持つ  
たなお前」みたいな空気であったのだが、事態が変わったのは翌朝  
である。

「きゃあー」という棒読みな悲鳴と共にススムは目を覚ました。  
声を上げたのはエリー。

周囲の人間たちは何故か自分達、もといススムの手元に注目してい  
た。

何故？と思ってソレを見てススムは固まった。

ススムの右手がエリーの平原ともいえる幼い胸部に置かれていたの  
だ。

コレで人々が思ったのは「あの変態野郎！」と「ああ、こうして勘  
違いは進むんだな」ということだった。

おかげでススムはロリコンペドフェリア野郎と呼ばれる羽目になっ  
たのだ。勿論、大多数の人間はただの事故だと理解していたが……  
シェルターの中と言う娯楽のない状況ではススムとエリーのこうい  
った事故は格好の娯楽だったのだ。

シェルターを出た後、ススムは再びヴェルニースを出た。今度はパ  
ルミアではなくヨウインへの配達依頼だ。

既に何度か通ったパルミアへの道と異なり、パルミア方面とヨウイ  
ン方面で別れる街道の分かれ道で一瞬パルミア方面へ行ってしまう  
そうになりながらも慌てて軌道修正するという自体もあったがソレ  
はここだけの話し、と言う物だろう。

配達依頼を終えた後、懷に余裕が出来たススムはどうせだからとヨ  
ウインの冒険者ギルドに向かい、その鑑定を請け負っている魔術  
師に鑑定を依頼した。

依頼した際に、ロミアスのブーツが普通の鑑定では調べきれず、調査をすることになってかなりの金額がススムの懐からサヨナラすることになったが必要経費だと思い泣く泣く諦めることにした。そして全ての鑑定結果が出て石動は驚嘆することになる。

「ロミアスの弓、すごかったんだな」

ロミアスの弓こと《異形の森の弓》は森の民の英知が詰まった弓であり扱いやすさは勿論のこと、この弓で射る矢は毒矢となり、更には逃げる相手を逃がさず異次元の手と呼ばれる効果で近くへと転移させるのだと言う。

流石はファンタジー、とでも言うべきなのだろうか？これでススムが矢を射った時に相手が瞬間移動してた理由も判明したわけである。そしてこんなものをあっさりとくれたラーネイレは大物としか言い様が無いと感ずるのだった。

さて、その後ヨウインで調達系の依頼を二つほど受けたのだが何のトラブルも無く直ぐに依頼が終わったので細かい所は割愛しよう。とりあえずヨウインでは特にやる事もないのでススムはあっさりとヴェルニースに戻ることにした。

収穫のお手伝いは俺じゃ無理だから逃げてやるぜ！という思いが強かったという側面もある。

ヴェルニースに戻ってきたススムなのだが、かなり息が切れていた。ソレもそのはずだ、なにせススムは棚を二つほど抱えてヨウインから歩いてきたのだから。

見かねた村人に廃棄前の荷車をもらえなかったら今頃道中の半ばで力尽きて居ただろう。

村人に心のうちで感謝を告げつつ、ヴェルニースの市街へ……と思ったが、どうせだから家具を家（乞食の洞窟）に持っていくかと思いい直してかなり久しぶりに家に帰ることになった。

「乞食の洞窟よ、私はかえってきたのだ！」

思わず叫ぶが誰かが居るわけでも無いので寂しいものだった。

ロミアスもラーネイレも既に旅立っている様だった。

その事に若干の寂しさを感じつつ荷車の棚を降ろして適当な場所におく。

その後、既に日が傾き始めていたので今日はここで寝ようか、とススムが思ったところで思い出した。

「ここ、ベッドとか布団の類が一つもないじゃないか」

それだけで、ヴェルニースに舞い戻る事が決定した。

翌日。

石動は討伐系依頼のみならず戦闘で追い詰められやすいことの要因の一つに装備が整いきっていないこと、というのは実の所周知だった。

それ故に前回ヨウインで鑑定を行った際に装備可能なものは身につけるようにしたのだ。

鑑定の際に巻物の中に解呪の巻物があったのでソレを使用して既に武器も棒から長剣へ変更済みだ。

ソレらによって多少は防御能力も改善されたには違いないが、やはりまだ足りない。

ならば、多少資金を圧迫してでも装備を整えるのは悪いことではない。

ススムはそう思ってヴェルニースの武具店の店主に予算を話して可能な限り性能の良い物を進めてもらうことにした。

「詰まり、1万ゴールドで買える鎧や腰当が欲しいわけか」

「そうなります。都合よくありますか？出来れば防御性能重視の奴で」

「そうだなあ……少し待ってろ」

そう言って店主は飾られている鎧と飾り棚にしまわれていた腰当を持ってきた。

よろいは重厚な装甲を持つ銀の重鎧で店のディスプレイ商品でもあったものだ。腰当は鱗製の物でそれなりの性能を持つとは店主の談。「特に魔法がかかっていたり祝福があるものではないが、この店でそれなりの性能があるのはこの二つだな。予算の1万ゴールドの枠にも余裕で収まるぞ」

「おおー！この鎧、かっこいいー！！買う、買います！」

ススムは喜びながら鎧を購入して早速着てみることにした。

「うお、流石に重いな。けどこの重さが安心の証！」

「はっはっは、まだまだ鎧に着られてる感じだが喜んでくれて何よりだ！ボウズ、良い買い物したな！」

# **Lv4：新米旅行者と王都と農村と鉱山街をいったりきたり（後書き）**

名前..ススム（石動進）

種族..神の化身（現代日本人）

男性..男性

職業..観光客

Lv3↓Lv4

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90（90） — —

マナ 150（150） — —

狂気度 0 — —

速度 100（100） — —

名声 470 +384

カルマ 20 +4

現在値 前回比

筋力..6（6）\* — —

耐久..7（4） — —

器用..17（7）\* +1（+1）

感覚..6（6）\* — —

習得..5（5） — —

意思..2（2） —1（-1）

魔力..5（5）\* — —

魅力..4（4） —1（-1）

装備

頭..なし

首 .. なし

背中 .. 烈火の皮の軽外套「4, 2」 : (感覚維持, 交渉「\*\*」,

火炎耐性「\*\*」)

胴体 .. 白銀の厚鎧「5, 18」 : (暗黒耐性「\*\*」)

利手 .. 鉄の長剣(2d8+1) (3) : (攻撃修正+3, 打撃修正

+1, 火炎耐性「\*」)

手 .. 稲妻のシルバーバックラー「1, 4」

指 .. なし

指 .. なし

腕 .. 鉛の厚箆手「0, 4」

腰 .. 鱗の腰当「2, 2」 : (火炎耐性「\*」)

足 .. ☆気高き合成靴『母は瞳』 : (ロミアスの遺品, 魔力維持,

筋力維持, 大工「\*」, 電撃耐性「\*」, 運勢+5)

遠隔 .. ★《異形の森の弓》 : (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃,

レア, 異次元の手「\*\*」, 毒追加攻撃「\*\*」, 感覚維持,

器用維持, 詠唱「\*」, 毒耐性「\*\*」, 器用+10)

矢 .. シルバーアロー(1d7) (1) : (不燃)

### ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv3. 720 ↓ Lv3. 795

重量挙げ Lv1. 104 ↑ New

両手持ち Lv3. 285 ↓ Lv3. 360

治癒 Lv5. 062 ↓ Lv5. 806

盾 Lv3. 000

重装備 Lv4. 000

中装備 Lv4. 000

二刀流 Lv4. 000

軽装備 Lv5. 158 ↓ Lv5. 429

回避 Lv4. 475 ↓ Lv4. 606

隠密 Lv4. 468 ↓ Lv4. 777

釣り Lv5. 000

信仰 Lv4. 000

旅歩き Lv6. 913 ↓ Lv7. 355

瞑想 Lv5. 506

詠唱 Lv4. 000

交渉 Lv4. 620 ↓ Lv6. 403

◆武器の専門

長剣 Lv4. 070

斧 Lv4. 000

格闘 Lv7. 134

鎌 Lv4. 000

鈍器 Lv4. 000

槍 Lv4. 000

杖 Lv4. 003 ↓ Lv4. 018

短剣 Lv4. 000

弓 Lv4. 663 ↓ Lv4. 830

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv7. 000

銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 弱い耐性\*\*

冷氣耐性 耐性なし

電撃耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*\*

暗黒耐性 普通の耐性\*\*

幻惑耐性 耐性なし

毒耐性 強い耐性\*\*\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 耐性なし

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は石の様に固い「Protection Value+5」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value+5」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

今回のレベルアップ要因は鎧と腰当購入時の交渉スキルのレベル上昇による物だったり。

序盤は（良い意味で）何時上がるか分からないのがElonakオリティ。



## Lv5：新米旅行者と復活のロリっ娘く餓狼の如き戦乙女く（前書き）

仲間復活30日制限、やってみると結構長いですねえ……。

今更だけど『世界は何時だって』の予定のように30年で目標達成できるんだろうか……。

本文よりも後書きの方が長いのはステータス晒し上の仕様です。ご了承ください……本文が短すぎる？

LvUPごとの更新なんだからコレもまた（ry  
今更だけど無茶くせえなあ……。

20101008

誤字修正です。報告に感謝です！

LV5..新米旅行者と復活のロリっ娘く餓狼の如き戦乙女く

26日目

鎧を買った後、俺は即座に★ひとつの森の浄化依頼、要はモンス  
ター討伐依頼を引き受けた。

俺の感想は「防御力は大事です」の一言。

今まで私服だったという事もあるが、防御力などあつて無きに等しく、すでにボロ着と化していたぐらいだ。

そこから着替えた鎧は今まで避け切れずに致命傷だった一撃を痛撃のレベルまでに落としてくれた。

その恩恵もあつて一人でも★ひとつレベルの討伐ならば余裕を持てるようになったと確信を持てた。

RPGの様に装備、特に防具を整える重要性が理解できた瞬間だった。

[illegible]

翌日、ススムは二度寝をしてから目を覚ましすとエリーの寝顔がドアップで視界に飛び込んできた。

「……！」

思わず驚くが、直ぐに落ち着いて起き上がる。

「（エリーは妹みたいな物で俺の射程外。俺はロリコンじゃない。だから欲情はしない。そう、俺はお姉さん系が好きだから！！）」

訂正、ぜんぜん落ち着いていやしない。

自身に暗示をかけるように心のうちで唱えてから布団をめくる。

「なん、だと……っ!!」

すっぽんぽん。

もう一度言おう。

すっぽんぽんである。

ダレがと言えばエリーが。

「（落ち着け俺。幼女は対象外だ。その俺がイタス筈がない）」

先ほどよりも激しく動揺していると、エリーが目覚めます。

「……おはようございます、ご主人様」

エリーはそう言うってから自分の格好を見て。

「……きゃー」

超棒読みだった。

それでようやく理解する。からかわれた、と、

「お前さんのしわざかつ!」

二人は朝から騒がしかった。

それから暫くしないうちに食事の時間になった。

食事は宿の店主が作る山盛りの料理で常に140ゴールドきつかりの定食だ。

「ススム、アンタ達朝から盛んなのは結構だけど他のお客も居るん

だから少しぐらいは自重しとくれよ？」

「う、すいません」

そしてあっという間に8日が経過した。

その間ススムは何をしていたかというところダルフィという城塞都市に荷物を送り届ける依頼を引き受け、届けたついでに現地で依頼を幾つかこなしてきたぐらいだ。

「……しかしあの街には参ったね、市民VS娼婦の乱闘騒ぎは起くるわ、娼婦が所構わずやっているわ、拳句にゲイに掘られそうになるわと散々だった」

「ご主人様、そっちの人に好かれそうですもんね」

「お、おいしい！？それはどういう意味だ！？！」

思わずエリーを問い詰めてしまうススム。

「黙秘します」

エリーはそう言って伸びをする。

「久しぶりに全力で体を動かせます。多少鈍っていきそうで怖いですが……」

「まあ、その辺りは気をつけてくれ。一応この後買い物に行くけど……そうだな、お前用にも鎧買っておくか」

ススムはそう呟いてエリーの手を握って二人で武器屋に向かう。

「お、この間のボウズじゃないか。今日はどうした？武器のメンテか？」

「そっちも頼めるなら一緒に頼みたいんだけど、メインはこの子の防具なんだ」

そう言ってススムはエリーをずずいと前面に出した。

「……え？」

「このお嬢ちゃんのか？」

二人が驚いた様子で言う。

「この子は俺が身柄を引き受けた子なんだけど……ほら、俺って冒険者じゃないっすか。」

んで、この子もしょっちゅう連れ歩くことになるんだけど、今のままだと今度こそ取り返しが付かない大怪我させかねないからね。そこで親父さんにこの子の防具を見繕って欲しいんだ」

「ふうむ……そりゃ構わないんだが、このお嬢ちゃんがどれぐらいまで身に付けられる体力があるかにもよるなあ」

店主はそう言って顎鬚を撫でる様に手をやる。

「あの、私……ローランなので多少重いものでも大丈夫です」

ローラン、それは女性ばかりの種族で更に言う成れば力や体力もあり戦士に向いた一族だ。

「ほう、それじゃあコイツでも大丈夫かも知れねえな」

そう言って店主が持ってきたのは女性向けに造られた白銀の厚鎧だ。

「……親父さん、それ、高いよな？」

「そうだな、コレを買ってくれるなら前回買ってくれたって事もあるし多少割り引いてやらんことも無いぞ？」

「ぐぐぐっ……！」

そういわれて激しく思い悩むススム。

ススムは悩んだ末にため息を付いて懷に手を伸ばす。

「親父さん、コレ、買い取ってくれ。そしたら買えるから」

そう言ってススムが差し出したのは3枚の巻物だった。

「どれどれ……！こいつあまさか！」

「神託の巻物って奴らしいな。鑑定士からは売れば高値がつくって言われた」

「ははあ、確かにそのとおりだ。うし、コレを三つ合わせて6700だ。鎧との差分はコレだけで……そうだな、腰当なんかも一緒にどうだ？」

「じゃあ、ソレも一緒に頼むよ」

神託の巻物、それは巻物を広げて読むと神から神託を授かれるありがたい巻物、と呼ばれている。

主に神器クラスのアートファクトを探す冒険者たちが大枚はたいて買っていく金づるとも言う。

店売りでなら1枚1万ゴールドは硬いが、相場を知らないススムでは安く買い叩かれるのがオチだった。とんとん拍子に話が進み、当の本人であるエリーは半ばおいていかれた状態だった。

そしてあれよあれよという間にエリーは白銀の厚鎧と革の腰当を身につけた状態になった。

「うんうん、お嬢ちゃん用に少し細工したから丁度よさそうだな。腰当もあつてるし、コレでどうだお嬢ちゃん、ボウズ？」

「あ、はい。良いと思います。少し重いですがとても頑丈そうです」

「まあそこは慣れだな。俺でも重さに慣れたし、エリーなら大丈夫だろう。」

うん、見た目も美少女騎士って感じで可愛いというか凛々しいというか

強いて言うなら相変わらずの死んだ魚の目ではなく、生き生きとした目であればなあ……と、ススムと店主は思ったが口にはしない。

「しかしお嬢ちゃんの鎧の細工には少し時間をとりすぎちゃったな。もう日が沈んでらあ」

「そっか、今日はもう遅いから宿に戻るよエリー」

「あ、はい」

エリーは自分の主がまさかここまで自分にしてくれるとは思わず、この日は終始思考が停止しっぱなしだった。

「（そういえば、鎧……少し形は違いますがお揃いなんですね。何故でしょう、そう思うと少し嬉しいかもしれません）」

翌日、準備をしっかり二人は一つの依頼を引き受けた。

それは迷惑な観光客をヴェルニースからダルフィに行かせるための護衛だった。

この護衛を受ける観光客の何が迷惑かというと、酒場の看板娘を始めとする複数の女性に対してセクハラを働いたことだ。

それによりヴェルニースの女性が結託して子の観光客をどこかにやってしまおう、というのが彼女達の総意だった。

旅の途中でエリーがセクハラされそうになるが、彼の手がエリーの尻や胸に届くよりも早く、エリーのナイフが彼の首元にあたっていた。

「私に触れば殺す」

偉くドスの利いた冷たい声に、思わずススムまでも背筋が寒くなる。その後は特に問題なくダルフィにたどり着くことが出来た。

ダルフィに辿り着くと、彼は『これ、お礼だから！もう二度と関わらないでね！』そう言って彼は逃げた。

「気持ちとは分からんでもないけど、オーバーだなあ」

ハハッと乾いた感じで言うススム。或いは彼も逃げたいと思ったのだろう。

「それよりご主人様。ここまでの道のりで鎧の感覚にも慣れたので、早速戦闘をして更に慣れておきたいのですが」

「ああ、そうだな……装備も鎧以外でも充実させた方が良さだろうし、そのためにゃ金が少し足りないか……。うん、とりあえず適当なので行ってみよう！」

その後、近隣にモンスターが沸いたということで討伐して欲しいという依頼があったので二人が出向いたのだが、そこでススムは見てしまった。

水を得た魚……否、餓狼の如く煌々と輝く瞳で獲物に襲い掛かるエリー……エリュシオンの生き生きとした殺戮舞台を。

敵はナイフで細切れにし、攻撃されてもススムから貰ったシルバーバックラーでことごとくをいなし、更には粉碎するその姿を。

まさしく、無双であった。

ススムは現実逃避の意味をこめてエリーから距離をとり、遠くから毒矢を放って敵を狩ることに専念したのだった。

「あは、あはははははは！今死ね！すぐ死ね！骨ごと碎けちれえええええええ！」

「ひ、ひいいいい！」

びびったのはモンスターだけでなくススムもだった。



## Lv5：新米旅行者と復活のロリっ娘く餓狼の如き戦乙女く（後書き）

と、いうわけで復活したエリーの『少女無双』でした。

今回のメインは前回に引き続き装備を整えるというところでしょうか。

今まで、エリーの防具は指輪二つとマントとブーツだけというお粗末具合でした。

これで硬さはかなり改善され戦力としても当分はこれで十分でしょう。

では、恒例のステータス晒しタイムです！

名前…ススム（石動進）

種族…神の化身（現代日本人）

性別…男性

職業…観光客

Lv4↓Lv5

ステータス：カッコ内は元の値

|          | 現在値      | 前回比  |
|----------|----------|------|
| 生命力      | 90（90）   | —    |
| マナ       | 150（150） | —    |
| 狂気度      | 0        | —    |
| 速度       | 100（100） | —    |
| 名声       | 470      | +384 |
| カルマ      | 20       | +4   |
| 現在値 前回比  |          |      |
| 筋力…7（7）＊ | +1（+1）   |      |
| 耐久…9（6）  | +3（+2）   |      |

|    |       |     |   |    |      |
|----|-------|-----|---|----|------|
| 器用 | .. 17 | (7) | * | —  | —    |
| 感覚 | .. 7  | (7) | * | +1 | (+1) |
| 習得 | .. 5  | (5) |   | —  | —    |
| 意思 | .. 3  | (3) |   | +1 | (+1) |
| 魔力 | .. 6  | (6) | * | +1 | (+1) |
| 魅力 | .. 4  | (4) |   | —  | —    |

## 装備

頭 .. なし

首 .. なし

背中.. 烈火の皮の軽外套「4, 2」: (感覚維持, 交渉「\*\*」,

火炎耐性「\*\*」)

胴体.. 白銀の厚鎧「5, 18」: (暗黒耐性「\*\*」)

利手.. 鉄の長剣(2d8+1) (3): (攻撃修正+3, 打撃修正

+1, 火炎耐性「\*」)

手 .. 稲妻のシルバーバックラー「1, 4」

指 .. なし

指 .. なし

腕 .. 鉛の厚籠手「0, 4」

腰 .. 鱗の腰当「2, 2」: (火炎耐性「\*」)

足 .. ☆呪われた気高き合成靴『母は瞳』「0, 4」: (ロミアスの遺品, 魔力維持, 筋力維持, 大工「\*」, 電撃耐性「\*」, 運勢+5)

遠隔.. ★《異形の森の弓》: (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃, レア, 異次元の手「\*\*\*」, 毒追加攻撃「\*\*\*」, 感覚維持, 器用維持, 詠唱「\*」, 毒耐性「\*\*\*」, 器用+10)  
矢 .. シルバーアロー(1d7) (1): (不燃)

## ◆スキルと特殊能力

|        |        |       |   |        |       |
|--------|--------|-------|---|--------|-------|
| 戦術     | L v 3. | 7 9 5 | ↓ | L v 4. | 0 2 9 |
| 重量挙げ   | L v 1. | 1 0 4 | ↓ | L v 3. | 0 4 1 |
| 両手持ち   | L v 3. | 3 6 0 |   |        |       |
| 治癒     | L v 5. | 8 0 6 | ↓ | L v 8. | 0 2 9 |
| 盾      | L v 3. | 0 0 0 | ↓ | L v 4. | 0 2 9 |
| 重装備    | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 中装備    | L v 4. | 0 0 0 | ↓ | L v 4. | 6 7 2 |
| 二刀流    | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 軽装備    | L v 5. | 4 2 9 |   |        |       |
| 回避     | L v 4. | 6 0 6 | ↓ | L v 5. | 2 1 8 |
| 隠密     | L v 4. | 7 7 7 | ↓ | L v 5. | 2 7 9 |
| 釣り     | L v 5. | 0 0 0 |   |        |       |
| 信仰     | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 旅歩き    | L v 7. | 3 5 5 | ↓ | L v 7. | 7 5 2 |
| 瞑想     | L v 5. | 5 0 6 | ↓ | 6.     | 6 3 3 |
| 詠唱     | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 交渉     | L v 6. | 4 0 3 | ↓ | L v 8. | 3 9 5 |
| ◆武器の専門 |        |       |   |        |       |
| 長剣     | L v 4. | 0 7 0 | ↓ | L v 4. | 1 4 5 |
| 斧      | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 格闘     | L v 7. | 1 3 4 |   |        |       |
| 鎌      | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 鈍器     | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 槍      | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 杖      | L v 4. | 0 0 3 | ↓ | L v 4. | 0 1 8 |
| 短剣     | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 弓      | L v 4. | 8 3 0 | ↓ | L v 5. | 3 2 5 |
| クロスボウ  | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |
| 投擲     | L v 7. | 0 0 0 |   |        |       |
| 銃器     | L v 4. | 0 0 0 |   |        |       |

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 弱い耐性\*\*

冷氣耐性 耐性なし

電撃耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*

暗黒耐性 普通の耐性\*\*

幻惑耐性 耐性なし

毒耐性 強い耐性\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 耐性なし

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の守備は鉄壁だ「Protection Value +10」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value +5」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

今回のレベルアップでボーナス6ポイントを重量挙げに全振り、フィートで防御を更にパワーアップで鉄壁を目指しています。

おまけ エリーのステータスシート

名前..エリー(エリュシオン)

種族..ローラン

性別..女性

職業..戦士

L v 1

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

|         |     |       |   |   |
|---------|-----|-------|---|---|
| 生命力     | 100 | (100) | — | — |
| マナ      | 80  | (80)  | — | — |
| 狂気度     | 0   |       | — | — |
| 速度      | 96  | (96)  | — | — |
| 現在値 前回比 |     |       |   |   |

|    |    |      |   |   |
|----|----|------|---|---|
| 筋力 | 14 | (14) | — | — |
| 耐久 | 16 | (16) | — | — |
| 器用 | 7  | (7)  | — | — |
| 感覚 | 7  | (7)  | — | — |
| 習得 | 5  | (5)  | — | — |
| 意思 | 9  | (9)  | — | — |
| 魔力 | 7  | (7)  | — | — |
| 魅力 | 10 | (10) | — | — |

## 装備

頭 .. なし

首 .. なし

背中 .. 鱗の軽外套 [2, 2] ∴ (火炎耐性\*)

胴体 .. 白銀の厚鎧 [4, 18] ∴ (不燃, 暗黒耐性\*\*)

利手 .. 祝福された鉄の長剣 (2d8+1) (3) ∴ (不燃, 火炎耐性\*)

手 .. シルバーバックラー [1, 3] ∴ (不燃, 暗黒耐性\*)

指 .. シルバーデコレートリング ∴ (不燃, 暗黒耐性\*)

指 .. 祝福された布の装飾指輪

腕 .. 鱗の軽手袋 (3, 0) [2, 2] ∴ (火炎耐性\*)

腰 .. 革の腰当 [2, 1]

足 .. シルクヘビーブーツ ∴ (幻惑耐性\*)

遠隔 .. シルバーロングボウ (2d6+2) (3) ∴ (暗黒耐性\*)

矢 ..

◆スキルと特殊能力

戦術 Lv5. 305

両手持ち Lv6. 156

治癒 Lv9. 048

盾 Lv8. 714

重装備 Lv8. 000

中装備 Lv8. 214

軽装備 Lv4. 206

回避 Lv9. 049

隠密 Lv4. 000

信仰 Lv4. 000

瞑想 Lv5. 506

詠唱 Lv7. 000

投資 Lv2. 000

◆武器の専門

長剣 Lv10. 154

斧 Lv10. 000

格闘 Lv6. 000

鎌 Lv9. 000

鈍器 Lv10. 299

槍 Lv8. 000

杖 Lv4. 000

短剣 Lv8. 012

弓 Lv4. 000

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 弱い耐性\*\*

冷気耐性 耐性なし

電撃耐性 耐性なし  
暗黒耐性 弱い耐性\*\*\*  
幻惑耐性 耐性なし\*  
毒耐性 耐性なし  
地獄耐性 耐性なし  
音耐性 耐性なし  
神経耐性 耐性なし  
混沌耐性 耐性なし  
魔法耐性 耐性なし

今回、ようやくエリーが居る状態で1万稼げたので一見だけ見て  
(内容書き写して)リロードです。

こちらも防御が硬くなってきました。

そろそろ『安全な』のダンジョンに潜っても良い頃合でしょうか  
ね？

## **L v 6 :: 新米旅行者とロリっ娘 de ダンジョンとアリーナと遺伝子複合機**

なんか、コッチばかり進んで別連載のものがまったく進まないのは  
どういうことか。

スランプって事なのか！

ああ……時間がたりぬええええええ！

20101008

誤字修正です。報告に感謝です！





何時ものような死んだ魚の目ではなく、今は目をギラ付かせ始めて戦いに餓えた狂戦士のようだ。

「ご主人様、階下に獣のうなり声が……多分、犬とか狼の類だと思います」

「そうか、わかった。今回も俺が弓で、お前には前衛を任せるが……良いな？」

「はい、お任せください」

二人はそろりそろりと降りていくと、階下の敵に気付かれることなく相手を視認できる場所まで降りれた。

「いくぞ……せい!!」

「はああああああああ!!」

ススムが毒矢を放つのに合わせてエリーが前に出て矢で追い立てられた狼を強襲する。

長剣を横薙ぎに一閃。

子供とは思えないほどに迷いもブレも無い一撃で狼を断ち切る。

「次ぎっ！」

「射っ！」

そこから先はエリーがトコトン前に出て戦い、ススムがエリーをフォローする戦いだ。

エリーに群がろうとするコボルトを毒矢で射抜き、その隙にエリーが直ぐそばのモンスター化したきのこを剣で叩き切り、返す刃でこもりをなぎ払う。

「……この程度では余興にもならん」

ヒュッという風切り音を鳴らしながら剣から血を払うエリー、その目がススムには餓えたままに見えた。

「行こうか、エリー。この先にはまだ人が少なそうだから手応えが



程なくして熊を殲滅し終わる頃には二人とも返り血だらけになっていた。

ススムの場合はギリギリまで近づかれた拳句に喀血を思い切り浴びせられたというオチがあるが。

「ふむ、中々体も温まってきた。次に行くぞ、ご主人」  
「お、おう！」

二人はその道中にあるものもキッチンと回収しつつ先に進む。

### ダンジョン3層目

三層目に入ると、そこは一層目二層目と異なり膝までつかるほどの水に満たされた場所だった。

「うへえ、動き辛いなこりゃ」

水の抵抗にはススムだけでなくエリーも顔を顰めていた。

「酒場で聞いた噂だと、ダンジョンの主はその証となる財宝を抱えてるって話だけど……どれがダンジョンの主だろう？」

「どれであろうと関係ない、全て屠るのみよ」

なんだろう、エリーがやたらと魔王っぽい。

「む……もしや、あれ……で……すか？」

とススムが思っていたらいきなり何時もの死んだ魚の目に戻った。その言葉と態度をいぶかしみつつススムはエリーの見つめる先を見た。

「……でっかいカタツムリ？」

でかいカタツムリだった。更に言えば、宝箱を抱えていた。

「……なんか、楽勝っぽうだな」

「……無理です、私…アレだけは……」

エリーはそう言って顔に滝のような汗を浮かべて後ずさる。

「わ、私は他のモンスターを当たります！ご主人様はアレを退治してください！早急に！！」

その反応を見てススムはようやく悟った「ああ、苦手なのね」と。

その後、幾ら大きくなったとはいえカタツムリはカタツムリ。

特に特殊な能力など持たないでかいだけのカタツムリは毒矢とススム程度の剣の腕前でも十分に屠る事ができたと言っておこう。

エリーもカタツムリを倒した頃に丁度良く戻ってきた。

「おう、今から宝箱開けるからどうせだからもつとコッチ来いよ」

「え、ええっと……はい」

そうして宝箱を開けると、鎧と何枚かの巻物、金貨とプラチナ硬貨が入っていた。

「重い、潰れる、しんどい……」

「がんばってください、ご主人様」

ダンジョン攻略後、ススムとエリーは手持ちの帰還の巻物を使用してダンジョンから乞食の洞窟までひとつとびに脱出していた。脱出後、二度に分けて重すぎる荷物をヴェルニースに売りに行く事となった。

「正直、死ぬほど疲れて腕が千切れるかと思った。

前回家具を運ぶのに使った荷車を馬か牛でも入手して荷馬車に改造するのも手段だなあ」

しかし、馬を入手しても下手をするとモンスターや盗賊の襲撃で危ないという事実に気付いたため息をつくススム。

「どうしました、ご主人様」

白銀の鎧を血に染めたエリーが死んだ魚の目のまま微笑む。  
もう少し目に輝きがあれば素直に可愛いと言えたとススムは思う。

「荷物を運ぶのが辛いから、どーにか楽にならんか考えていた所だ」  
「そうですね、ご主人様が運んで私が護衛するというのでも限界はありますし、それに……荷がすごいですね」

「そうなんだよな。しかも馬とか手に入れても、護りきれなきゃ直ぐに死なせちまう。それは金の無駄遣いだ」

「そうですね……いえ、なんにしても今は手がないですね」

二人そろってため息をつく。

ヴェルニースと洞窟の往復、販売を繰り返している最中にもう一つ別の事を考えていた。

帰還の巻物を始め、テレポートやショートテレポートなどの巻物もあるが、使用したのは今回の帰還の巻物が初めてだ。

そして、その効果を見て「もしかしたら元の世界に戻るための手掛かりになるか？」とも思い始めていた。

空間を歪めて転移する。これはテレポートも帰還もどちらも同じだ。強いて言うなら規模が異なるだけだろう。

あの後にも盗賊団に襲われてレポートの巻物を盛大に使って確認したので間違いない。と、思いたい。だいたいな、とススムは内心で呟く。

ススムは魔法に関しては無知だ。欠片も原理を知らないといって良い。

自分に扱えるかも疑問だった。

だが、近いうちに手を伸ばす事も考慮しようと思い始めていた。

「くそっ！！失敗だ！大失敗だよ畜生！！」

悔しさ、無念さ、罪悪感、そういったものを全て吐き出すようにススムは叫びながら毒矢を放つ。

「ご主人、包囲が縮まりつつある。一転突破しそのまま脱出だ」

「判った！方位が薄いのは…向こうか！切り込みは任せるぞ、エリィ！」

二人は今、襲撃者の奇襲に遭遇していた。

相手は盗賊団ではなく、モンスターと傭兵と思われる武装した人間たちだ。

二人だけならば多少痛手を負う可能性が高いが勝利する事も出来たのだが、足を引っ張る存在が居た。

護衛対象である。

騒がしいだけ、足を引っ張るだけの護衛対象を庇いながら窮地を脱しなければならなかったのだが、勝手に突撃された上に討ち死にである。

やり切れない事この上なく、更に自身の窮地はまだ終わっていないと言う状態だ。

相手の数が多すぎてコチラが潰されかねない。

エリーはトランス状態だがそれでも生への嗅覚は強い。戦闘を好むがなによりも生き残る事を重視する。

トランス状態の本人曰く『より長く生き延び、より長く戦い、そして強くなる事こそが我が本望よ!』と余りにも男気溢れる表情で語っていた。

正直可愛い顔にはぜんぜん合わない台詞だった、とはススムのみならずヴェルニースの酒場でたむろしていた酒飲み一同の談。

なお、トランスの理由は良い気分で食事していた所を下手な吟遊詩人が気分を台無しにしたからである。

「はああああ!」

エリーが敵剣士を長剣で豪快に切り捨て、そのまま離脱する。

ススムはいつぞやの盗賊の根城を潰すときに購入した火炎瓶のあまりを投げて敵の進行を阻みつっその場を離脱した。

二人は失敗と敗走に意気消沈してパルミア行きを諦めてヴェルニスへと帰還するが……。

「むう、良い仕事がないな」

「あるのは安い仕事ばかりですね」

通い慣れてきたパルミア、ヨウインへの護衛や配送の依頼は一つもなかった。

冒険者は別にススムやエリーの二人だけではないので金になる依頼は他の冒険者も嬉々として持っていくのだ。

それゆえ、仕方ないと言えば仕方なかった。



「仕方ない、ダルフィへの護衛依頼とポート・カプールへの配送依頼があるからそれをしようか」

「ダルフィ……ですか？」

凄く厭そうな顔でエリーがススムを見る。

「厭そうな顔をするなって、送り届けたらさっさとポート・カプールに向かうつもりだよ。」

俺だってあそこに長居はしたくない」

ダルフィは治安も悪ければ衛生状態も悪い。治安と衛生の良かった日本で生まれ育ったススムには許容できない環境であるのは確かだった。

依頼が無ければ早々行く事はないだろう。

そういうわけで二人は水と食料だけ購入するときさっとポート・カプールへ向かうのだった。

ポート・カプール、そこはこのノースティリス地方で唯一外洋に旅立つ為の港がある街だ。

それなりに有名な港町ではあるが、ノースティリスの中央にあるヴェルニースから見てそれなりに遠い、その上に最寄がダルフィなのでススムは地図を見た際にココまで足を伸ばすのを面倒くさがって倦厭していた節がある。

実際に歩いて感じた事はやっぱり遠いの一言であるのだからそれも仕方ない事だろう。

ポート・カプールに到着して感じた事は海の香りや潮騒よりも『疲れた』の一言だった。

もつともそれはススムだけでエリーはまだまだ余裕があるようだ。まあそれも仕方ないだろう。エリーの方があらゆる意味で能力的に優れている。

貧弱な現代っ子だったススムでは、例え多少鍛えられたといっても、この世界的に見ればまだまだなのだ。

街に入り、商人たちの活気のある呼び声と人々の賑わいをBGMにしつつ配送依頼を終えると、ススムは戦士ギルドなるものを見つけた。

「戦士ギルド……？冒険者ギルドとは違うのか？」

「どうでしょう……冒険者ギルドの方に聞いてみては如何ですか？」  
ススムはそうだな、とエリーに返して冒険者ギルドへと向かった。

冒険者ギルドで魔法使いに未鑑定のを鑑定してもらっている間に、ススムは情報屋に戦士ギルドについて質問した。

「ああ、単純に言えば冒険者の派閥、のようなものだな。同じ様なものがルミエストやダルフィにもあるぞ」

「ダルフィにも？」

「ああ、まあ順に説明しよう。先ずココ、ポート・カプールの戦士ギルドは武器による戦いを好む者たちがこぞって入るギルドだ。ルミエストにあるのは魔術師ギルド、魔法を好んで使うもの、研究するものが所属するギルドだ。で、最後のダルフィにあるのが盗賊ギルド。ようはならず者の集まりだな。それぞれのギルドには特典があるらしいぞ、戦士ギルドなら癒し手や鑑定士の料金が割安に、魔術師ギルドなら魔法書とかが安くなるらしい。盗賊ギルドは……盗品の買取だったか？まあ犯罪者でもない限り世話になる事はあるまい」

「へえ、ギルドに所属すると中々特典があるんだな」

ススムは素直にその事に感心しつつ『俺もギルドに入ろうかなあ』  
等と考えていると、情報屋がそういえばと更に口を開く。

「このギルドにはアリーナの受付があるんだよ。冒険者闘技場と  
ペットアリーナ  
奴隷闘技場がな」

「冒険者用は分かりやすいけど、ペットアリーナ？」

ススムが問うと情報屋は「まあ知らん奴は知らんか」と言ってから  
答える。

「冒険者が使役している下僕や動物、魔物を戦わせるアリーナさ」

「……なるほど、そういう区別ね」

「ま、そういうこった。アンタも興味があつたら参加してみると良  
い。強さで名を売るのも冒険者のたしなみだぜ？ ペットの強さもま  
た然りだ」

鑑定が済み、次はどんな依頼をこなそうかと思いつつバザーを見に  
行くと、ススムとエリーの前に珍しい格好の人間の姿が現れた。

「ほほう、お前さんたち冒険者じゃな？」

そう言って声をかけてきたのは白衣を着たマッドサイエンティスト  
を思わせる老人だった。

「ええっと、はい。そうですけどあなたは？」

「ワシの名前になど意味は無い。だがどうしても呼びたいならドク  
ターとでも呼べば良い。さて早速なのだがお前達に頼みがあるのだ。  
金とある発明品を報酬にくれてやるからモンスターを5種類捕ま  
えてきて欲しいのじゃ。モンスターを捕まえるのはコレを使えば良  
い。捕まえ方は瀕死の状態のモンスターにコイツを思い切り投げつ

けてやれば良い、どうじゃ、簡単じゃろう？ではたのんだぞ！」

老人は言うが早いカススムに青いボール……色以外の形とかにやたら見覚えのあるソレを6個手渡してさっさか去ってしまった。

「あ、嵐みたいな人だったな」

「ご主人様、今の依頼……お受けになられるのですか？」

「一応、ね。何、モンスター5種類鳴らそう難しい話でもないだろう。それに金になるし発明品とやらも興味ある。期限については何も言っていないからじっくり時間かけてやるかな？」

あ、それよりもエリー。あのマーケットにおいてある武器凄くないか！なんかこう、凄い力をびんびん感じるって言うか！」

「そうですね、あの剣にかけられた魔法付加もそうですが、剣自体も良い物です。将来的にはあのような武器も使ってみたいですね」

「そうだな、俺もあーいうの使って活躍できたらカッコいいだろうなあ……」

二人揃って高価な剣をみて目を輝かせる。ススムは単純にカッコよさそうだから、エリーはその力に魅せられて。

とはいえ、今の二人では到底手が出ないので諦めて次の場所に向かうことにした。

「そういえば、アリーナで戦うのも冒険者のたしなみ、とか言われたっけ……あんまし自信ないけど、どうしたもんかな」

「ご主人様、気になられるのでしたら観戦して見てはいかががでしょうか？」

アリーナのメインは普通に考えれば観戦によるところがある。戦闘目的で行くのは冒険者か奴隷を戦わせる人間ぐらいだ。

「そうだな、それじゃあ行って見ようか」

と、いって観戦に行った筈なのだが……。

「どうしてこうなった」

ススムは気付けばアリーナの中央で弓を携えて道化師と対峙していた。

『レディースアンドジェントルメン!』

司会の騒がしいアナウンスが流れる。

新人で無名の冒険者にして闘士だとか、相手はなにそのだれそれだ、とかである。

口上の9割を聞き流してススムは思う。

「手早く終わらせよう、マジで」

カァンというゴングの音と同時に素早く弓をひき、毒矢を放つ。

適当に直感に従って放ったソレは、勢いよく道化師の胴体に吸い込まれ、そして一撃で勝利と言う味気ない結果となった。

「……詰まらな過ぎる。自分が出るより見て他方が良かったな、本当」

ススムはそれだけ言ってアリーナの舞台を後にした。

「ご主人様、弓の腕がまた上がりましたね」

「……おお、言われてみれば確かにそうかも。今まで距離があると結構はずしてたもんなあ」

「では、次は私が行ってきます。吉報をお待ちください」

「わかった、エリーが勝つのを期待しているよ」

「……是非もなし！」

そう言っているいきなりトランス状態に入ってペットアリーナへと足を進めるのだった。

そうしてエリーの1対1の対戦が始まった。

相手はロックスロアー……石投げを得意とし、距離を取り、身軽に動くのが得意な奴だった。

その一方でエリーは白銀の厚鎧を纏い重武装をした重戦士の武装だ。コレは相性が悪いな、とススムは思った。

事実、幾度か接近に成功し、刃を振るうも知命打を当てることは出来ずに相手の投石を盾で防いで仕切り直しという事がかれこれ6時間以上続いていた。

観客は既に飽きて別の試合を見に行った。だが、自分は離れる事が出来ない。

激戦と言えば激戦だろうが、正直に言えば程度が低い。

この程度の戦いで何時間も時間をかけるのは本人達には悪いが愚かとしか言えなかった。

何せ二人とも時間がかかりすぎているせいでお互いのダメージや疲労も闘いながら回復していたぐらいだからだ。

途中、エリーの盾の扱いがどんどん良くなっていった気もしたが、それでもこれ以上決着まで待つつもりはススムには無かった。

「審判、エリュシオンのマスターのススムだが、この試合、エリュシオンの負けで良い」

「え、は、はあ……ええっと、あ、ハイ確かに彼女のマスターさんですね。分かりました、では……」

こうしてエリーの初アリーナは残念な結果で終わりを迎えた。  
どうして決着まで待ってくれなかったのか、とエリーがススムに詰  
め掛けようとしたが。

「あのような相手にコレだけ長い時間をかけてちゃ、正直、な。今  
日はもう宿で休もう。疲れてるだろうから明日は一日休んで良い  
よ」

「え、あ……ご主人様?!」

ススムは返事すらせずに宿へと向かった。

その後、ガツガツと食事を取り、床に就く。

その間二人には会話は無かった。

翌日、エリーが目を覚ます頃には既にススムは宿に居らず、宿の主  
人に尋ねると。

「昨日の依頼果たしてくるからお嬢ちゃんは休むように、だとさ。  
宿代は前払いで貰ってるから部屋で休むもよし。なんだったらバザ  
ーに足を伸ばしてみたらどうだい?」

「……そうですね、伝言感謝します」

エリーは当ても無くバザーを歩いた。

そうして再び彼女はマッドサイエンティストとであった。

「おや、お前さんは昨日の冒険者の片割れじゃな」

「あなたは……」

「ふむ、そういえば昨日の冒険者には言っていなかった事があったん  
じゃ。どうせだからお前さんが伝えてくれんか?」

「どういった内容でしょう」

エリーはススムから渡されていた筆記用具を取り出して話を聞く。それは彼、生化学者『イコール』が作り上げた『遺伝子複合機』に関する説明だった。

簡単に言うと『素体』となる生物に別の生物から遺伝子を『取り出し』て『素体』に混ぜる、という装置だという話だった。

そうする事によって『素体』は優れた遺伝子を取り込み、更に力強く、賢く、力と才能を磨いていく事が出来るのだ！とイコールは熱く語った。

エリーはその話を聞いて強い誘惑を感じた。

強くなる。それはエリーにとって抗いがたい誘惑だった。

強さとは地道に得る物だ。だが、その常識が覆されてしまう。

だからだろう。

彼女は後日、遺伝子複合機を入手して洞窟に戻った後、自身を素体にススムがついうっかり捕らえたごろつきの女と複合機に入り、そして力を手に入れた。

ススムには一言の相談も無く、また悟られることも無く。



## **L v 6 :: 新米旅行者とロリっ娘 de ダンジョンとアリーナと遺伝子複合機**

と、言うわけで多分注目はラストの遺伝子複合機だと思う今回でした。

今まで別のプレイ時では倦厭してたのですが、なんとなく話しの種になるかな?と思って使ってみました。

使ってみて理解しましたが、コレ……一々レベル上げるよりよっぽど早いしチートくさいと。

エリーはこのまま人外への道を歩む、のかもしれませんが。

正直どうなるかは未定ですw

では、恒例のステータスさらしです!

★地道に経験を詰んで行く主人公

名前…ススム(石動進)

種族…神の化身(現代日本人)

性別…男性

職業…観光客

L v 5 ↓ L v 6

ステータス:カッコ内は元の値

|     | 現在値       | 前回比 |
|-----|-----------|-----|
| 生命力 | 90 (90)   | —   |
| マナ  | 150 (150) | —   |
| 狂気度 | 0         | —   |
| 速度  | 100 (100) | —   |

名声 1270 +800  
カルマ 20 一一一

現在値 前回比

筋力.. 8 (8) \* +1 (+1)  
耐久.. 10 (7) +1 (+1)  
器用.. 18 (7) \* +1 (+1)  
感覚.. 7 (7) \* 一一一  
習得.. 5 (5) 一一一  
意思.. 3 (3) 一一一  
魔力.. 6 (6) \* 一一一  
魅力.. 4 (4) +1 (+1)

装備

頭 .. なし  
首 .. なし

背中.. 烈火の皮の軽外套 [4, 2] ∴ (感覚維持, 交渉 [\*\*],

火炎耐性 [\*\*])

胴体.. 白銀の厚鎧 [5, 18] ∴ (暗黒耐性 [\*\*])

利手.. 鉄の長剣 (2d8+1) (3) ∴ (攻撃修正+3, 打撃修正

+1, 火炎耐性 [\*\*])

手 .. 稲妻のシルバーバックラー [1, 4]

指 .. なし

指 .. なし

腕 .. 鉛の厚籠手 [0, 4]

腰 .. 鱗の腰当 [2, 2] ∴ (火炎耐性 [\*\*])

足 .. ☆呪われた気高き合成靴『母は瞳』 [0, 4] ∴ (ロミナス  
の遺品, 魔力維持, 筋力維持, 大工 [\*\*], 電撃耐性 [\*\*], 運勢  
+5)

遠隔.. ★《異形の森の弓》∴ (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃,

レア，異次元の手「\*\*\*」，毒追加攻撃「\*\*\*」，感覚維持，  
 器用維持，詠唱「\*」，毒耐性「\*\*\*」，器用+10  
 矢・・・シルバーアロー（1d7）（1）∴（不燃）

# ◆スキルと特殊能力

|        |      |     |   |      |     |
|--------|------|-----|---|------|-----|
| 戦術     | Lv4. | 029 | ↓ | Lv5. | 001 |
| 重量挙げ   | Lv3. | 041 | ↓ | Lv4. | 163 |
| 両手持ち   | Lv3. | 360 |   |      |     |
| 治癒     | Lv8. | 029 | ↓ | Lv8. | 463 |
| 盾      | Lv4. | 029 | ↓ | Lv6. | 102 |
| 重装備    | Lv4. | 000 | ↓ | Lv4. | 638 |
| 中装備    | Lv4. | 672 | ↓ | Lv4. | 836 |
| 鍵開け    | Lv1. | 000 | ↑ | New  |     |
| 二刀流    | Lv4. | 000 |   |      |     |
| 軽装備    | Lv5. | 429 |   |      |     |
| 回避     | Lv5. | 218 | ↓ | Lv6. | 642 |
| 隠密     | Lv5. | 279 | ↓ | Lv5. | 844 |
| 釣り     | Lv5. | 000 |   |      |     |
| 信仰     | Lv4. | 000 |   |      |     |
| 旅歩き    | Lv7. | 752 | ↓ | Lv8. | 266 |
| 瞑想     | Lv6. | 633 | ↓ | Lv7. | 143 |
| 詠唱     | Lv4. | 000 |   |      |     |
| 交渉     | Lv8. | 395 | ↓ | Lv9. | 799 |
| ◆武器の専門 |      |     |   |      |     |
| 長剣     | Lv4. | 145 | ↓ | Lv4. | 568 |
| 斧      | Lv4. | 000 |   |      |     |
| 格闘     | Lv7. | 134 |   |      |     |
| 鎌      | Lv4. | 000 |   |      |     |
| 鈍器     | Lv4. | 000 |   |      |     |
| 槍      | Lv4. | 000 |   |      |     |

杖 Lv4. 018

短剣 Lv4. 000

弓 Lv5. 325 ↓ Lv6. 320

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv7. 000

銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 弱い耐性＊

冷氣耐性 耐性なし

電撃耐性 素晴らしい体制＊＊＊＊＊

暗黒耐性 普通の耐性＊＊＊＊

幻惑耐性 耐性なし

毒耐性 強い耐性＊＊＊＊

地獄耐性 耐性なし

音耐性 耐性なし

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の守備は鉄壁だ「Protection Value+10」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value+5」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

★チートに目覚め外道を歩み始めるヒロイン（？）

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性

職業…戦士

L v 1 ↓ L v 4

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 100 (100) ー ー

マナ 80 (80) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 104 (96) +8 (0)

現在値 前回比

筋力 18 (18) +4 (+4)

耐久 20 (20) +4 (+4)

器用 9 (9) +2 (+2)

感覚 7 (7) ー ー

習得 17 (17) +12 (+12)

意思 12 (12) +3 (+3)

魔力 14 (14) +7 (+7)

魅力 10 (10) ー ー

## 装備

頭 .. 硝子の羽帽子

首 .. なし

背中 .. 鱗の軽外套 [2, 2] ∴ (火炎耐性\*)

胴体 .. 白銀の厚鎧 [4, 18] ∴ (不燃, 暗黒耐性\*\*)

利手 .. 硝子の大鎌 - 1 (1d14) (4) ∴ (貫通5%, 首狩り\*

\*\*, 速度+4)

手 .. シルバーバックラー [1, 3] ∴ (不燃, 暗黒耐性\*)

指 .. シルバーデコレートリング ∴ (不燃, 暗黒耐性\*)

指 .. 祝福された布の装飾指輪

腕 .. 鱗の軽手袋 (3, 0) [2, 2] ∴ (火炎耐性\*)

腰 .. 革の腰当 [2, 1]

足 .. シルクヘビーブーツ：(幻惑耐性\*)  
 遠隔.. シルバロングボウ(2d6+2) (3)：(暗黒耐性\*)  
 矢 .. 鉄の矢束(1d8) (1)

◆スキルと特殊能力

|      |      |     |   |       |     |
|------|------|-----|---|-------|-----|
| 戦術   | Lv5. | 305 | ↓ | Lv8.  | 085 |
| 両手持ち | Lv6. | 156 |   |       |     |
| 治癒   | Lv9. | 048 | ↓ | Lv9.  | 34  |
| 盾    | Lv8. | 714 | ↓ | Lv13. | 532 |
| 重装備  | Lv8. | 000 | ↓ | Lv9.  | 383 |
| 中装備  | Lv8. | 214 | ↓ | Lv8.  | 427 |
| 軽装備  | Lv4. | 206 |   |       |     |
| 回避   | Lv9. | 049 | ↓ | Lv14. | 8   |
| 隠密   | Lv4. | 000 |   |       |     |
| 信仰   | Lv4. | 000 |   |       |     |
| 瞑想   | Lv5. | 506 | ↓ | Lv7.  | 010 |
| 交渉   | Lv1. | 000 | ↑ | New   |     |
| 投資   | Lv2. | 000 |   |       |     |

◆武器の専門

|       |       |     |   |       |     |
|-------|-------|-----|---|-------|-----|
| 長剣    | Lv10. | 154 | ↓ | Lv10. | 531 |
| 斧     | Lv10. | 000 |   |       |     |
| 格闘    | Lv6.  | 000 |   |       |     |
| 鎌     | Lv9.  | 000 | ↓ | Lv11. | 536 |
| 鈍器    | Lv10. | 299 |   |       |     |
| 槍     | Lv8.  | 000 |   |       |     |
| 杖     | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 短剣    | Lv8.  | 012 |   |       |     |
| 弓     | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| クロスボウ | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 投擲    | Lv4.  | 000 |   |       |     |

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 弱い耐性\*\*

冷氣耐性 耐性なし

電撃耐性 耐性なし

暗黒耐性 弱い耐性\*\*\*

幻惑耐性 耐性なし\*

毒耐性 耐性なし

地獄耐性 耐性なし

音耐性 耐性なし

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 耐性なし

おまけ（容姿編）

エリーのバストが2センチあっぷ！（つるぺたなので余り変わらない）

エリーの髪質が少しダウン！（ごろつきの女の髪質が悪すぎた模様）  
しかしススムは気付かない！（胸も髪も特に気にしていないから）

## **LV7：新米旅行者とロリっ娘 と 運命の鼓動・1（前書き）**

ごちゃごちゃと進みました。

ツンデレと女王と猫娘、あなただったら誰を選ぶ？



## Lv7：新米旅行者とロリっ娘と 運命の鼓動・1

78日目

もう冒険者生活になじんできてどれぐらい過ぎたか分からない。  
ある日を境にエリーが急に強くなった気がするけど、元々俺より強かった気がするんで正直よく分からん。

討伐依頼に出向いたら魔法フルボッコで俺死に掛けてばかり……というか死んだ気がするんだけどな。

まあそれよりも今回は依頼でルミエストに行って来たんだよ。

あそこはなんだろう……観光要所って感じなんだよな。

特に宿の配置がそんな感じ。

伊豆とか箱根とかそんな雰囲気だ。温泉は無いけど。

さて、ソレはさておき今回は冒険者の間でも長いこと噂になってるレシマスに潜って見ようと思う。

なんでも、他の迷宮郡とちがい、無くなったり地形が変わったりと  
言うことは無いらしい。

でもモンスターは無限に近いほど湧いて出るらしい。

今回は帰還の巻物や脱出の巻物は所持してるし、ヤバクなったら何時でも逃げれるぜ！

そういえば、ブーツに掛かった呪いがようやく解けたんだぜ！

祝福された水って効果凄いなあ。

しかし、何で祭壇に水置ただけで祝福されるんだろう……神様の奇跡って奴なんだろうか？

ファンタジーすげえな。

|||||



そう言って釣り上げると……。

「……ハズレか？ いや、でも何かに使えそうだ」

何かの材料に使えそうなゴミが引っかかっていた。

こういう物でも後できっと売れるだろうとススムは思い、気を取り直して釣りを続行するが……。

「ぐ、ゴミばかりってどういうことだよ……レシマス恐るべし」

一応、魚も釣れたのだが、身なんて殆ど無いまずそうなものだったのでお帰り願った。

キャッチアンドリリースと言う奴である。

エリーも釣果を聞くと残念そうにしていた。

「まあ、全部が全部コレって訳でもないだろ。次、期待しようぜ」  
「……はい、そうします」

ちなみに次の場所も結局ゴミばかりだったとか。

意気消沈しつつ二人は第二層への階段を見つけ、更に潜っていくことにした。

## レシマス第二層

階段の下に広がるのは第一層とそう変わらない雰囲気の間窟の姿だった。

「ふうむ、なんか余りいいものなさそうだしとつと三層目指すか？」

「そうですね……周囲のモンスターもたいした事ありませんし、ソレがよろしいかと」

と、言うわけでサクリと襲い掛かるイークと言う小柄な魔物からコボルトなどの魔物の群れを適当に蹴散らし、毒矢で毒殺しながら進むと実にあっさりと階段が見つかった。

### レシマス第三層

第三層に着くと人が魔物と戦っている姿が見えた。

「ふうむ、軽くフォローを入れておくか。エリー、あの人が直接戦ってる魔物以外を狙って攻撃。」

あの人がやばそうだったら即フォローしてあげてくれ、俺もそうするから」

「心得たぞ、ご主人！」

そう言うときエリーは嬉々として相手に切りかかる。

「（本当バトルジャンキーだなあ……。あの子、アレで将来嫁の貰い手が出来るんだろうか……。俺は今から不安だよ）」

そう思いながらもススムは周囲の警戒をしつつ毒矢を射る。

自分の近くの敵を優先するが、それ以上に男の状態がやばそうなので、そちらにも二、三矢放ってモンスターに対する牽制とする。

「あははは！ 無様な姿よ！」

狂気の笑みを浮かべながら速攻で大鎌を振るい相手の頸を刎ね続けるエリーの姿は死神と言うよりもむしろ魔王と思えた。

気付けば毒殺死体や奥で戦って居た人が倒した斬殺死体よりも首の

ない死体の方が多かった。

「怖い怖い……っと、そろそろ大丈夫かな？ エリー、戻ってこい！」  
「うぬ、わかったぞ」

トランス状態であつてもそれなりに従順なエリーにススムはいつも違和感を感じている。

それも仕方ないだろう、あそこまでハイな人間がキチンと言うことを聞くって言うのは中々無い物だ、とススムは思っているからだ。そう思いつつもススムは奥に居た男に話しかけようとして、むあつと漂う血の臭いに眉を顰めた。

明らかに致命傷であり、今にも命の火が消えかけていたからである。今から薬を渡して治療をしたとしても明らかに手遅れだろう。

「…その御仁…頼みが…頼みがある」

「分かった、聞き届けよう」

死に掛けた者の遺言ぐらいは聞いてやろう、ススムはそう思つて彼の言葉に耳を傾けた。

彼が言うには自分はパルミアのレシマス探索の斥候であり、王命により潜んで居たらしい。

詳しく説明することは出来ないが、二つの国の衝突を回避するためパルミアのジャビ王に書簡を届けて欲しい、とのことだった。

この第十一期文明シエラ・テールを護るために、と。

彼はそう言つて息を引き取つた。

「……重い話だな」

「だが、聞いてしまったからには動くべきかと存じます」

「分かつてる。彼の遺品、受け取っておくぞ」

「はい」

二人で彼の所持品を丁寧に受け取り、そして遺体は埋めて墓標の代わりに周囲にあった折れた剣を突き立てる。

「アンタの遺言はキッチンと達成してやる。じゃあな『帰還』！」  
巻物が淡い光を放ち、二人の周囲の空間が歪み、次の瞬間に二人は乞食の洞窟に戻っていた。

そこで荷を整え、改めてパルミアへと出発する。  
今回は急ぎの用件なので街道沿いではなく山道をショートカットして。

二人がパルミアへと到着する同時刻に王城にてススムにとって縁の深い人物たちが居て更にはこの世界の趨勢を担う人物たちが集っているのだが、ススムがそれを知ることには無い。

「ふぁ……流石に強行軍できただけあって眠い」

「……そうですね、最低限の仮眠と休息しか取りませんでしたし、少し辛いです」

幸いにもモンスターや盗賊弾の襲撃は無かったものの、強行軍できただけあって旅の疲れは出ている。

「けどまあ、先に書簡渡しちまえば後はどうとでもなる」

「そうですね、けど……このまま出向くのも失礼かと思います」

そう言ってエリーは自身とススムの格好を指摘する。

「む、う。確かにそうかもな。宿で休んで身支度整えてから行くか」  
「そうしましょう」

それから丸々一日過ぎた次の日。

「あはは、まさか丸一日眠りこけるとは……我ながらのんびりしすぎた」

「……とりあえず、早く行きましょう」

城に向かい、ガードに話しかけて用件を伝えると驚いた様子でガードは城の中へと駆け込み、そして戻ってきた。

「ジャビ王が王の間にてお待ちです。どうぞお入りください」

「わかりました」

そうして向かうのは城の一番奥にある王の間。厳重に警備されたそこは威厳のあるオーラを放つ王と王妃の姿があった。

二人は並び立って王と王妃の前に立ち、ある程度の距離がある場所で頭をたれた。

「よく来たな、そなたが斥候からの知らせを預かっている？」

「はい」

なるべく恭しくなる様にススムは頷き答えた。

「…よからう、その者の書簡をわしの手元へ」

王の言葉に応じて兵士がススムの元へ行き、書簡を受け取り王に手渡す。

そして王がその書簡……報告書に目を通す。

「…なるほど、恐れていた事が現実になったというわけだな。知らせにあるよう、悪しき者がレシマスに眠る秘宝を狙うのであれば、パルミアの王の名誉にかけてそれを阻止せねばなるまい…」

王は決意に満ちた様子でそういう。

「ススムとやら、大儀であった。直ちに謝礼を用意させようではないか」

「ハッ！ありがとうございますに存じます」

ススムの緊張した様子に王は内心で初々しさと若干の好感を感じながら更に口を開く。

「今の時勢、信頼に足る物の剣を遊ばせておくのは惜しい。もしパルミアの元で働く意思があるのなら、城の図書館に居るエリステアを訪ねるが良い。十分な報酬と名誉を約束しよう」

「このような若輩に対し過分なご配慮、感謝の極みにございます」

それらしいと思う言葉を何とか選びつつススムが四苦八苦している姿は周囲から見ても「若いなあ」の一言だった。

「それでは退出してよろしい」

「はい！ありがとうございます！」

王の間を出ると二人はようやく一息ついた。

「ふう、お偉いさんと顔を合わせると本当、なんか緊張するよ」

「わかります。それよりもこの後は図書館ですか？」



「ああ、王様直々だからな、せめて顔ぐらい出しておかないと拙いだろう？」

先のジャビ王の言葉は依頼したと言うわけでは無いが実質依頼されたようなものだ。

受けるにしろ受けないにしろ、どちらにしても一度は顔を出す必要があった。

図書館に向かうと、幾つ物書架と本、そこいらに山積みされた本の姿が見えた。

その雰囲気のススムはほんの数ヶ月前までの学生生活……自身が図書委員でそういう場所に入り浸って居た頃を思い出した。思い出に浸っていると、一人の女性が二人の下にやってきた。

「あなたがススムですね。使いのものから聞いて言います。私はエリステア、ネフィア迷宮郡の歴史研究に携わってきました。今は王命によりレシマス調査隊の復調を勤めています。洞窟に眠る多くのなど危険な魔物の存在のために、調査は思わしく進んでいません。貴方のような冒険者に力になって貰えると心強いです」

「初めまして、エリステアさん。そう言ってもらえると嬉しいですよ。こちらでも微力ながらも全力を尽くします」

なんとなく流れでそう答えてしまうススム。乗せられたのは気付いているが、迷宮郡の探索は彼にとっても必要なことだ。

「（日本に戻るヒントがあるかもしれないしな）」

もし、彼女の調査で何かヒントがあれば、協力することでススムに伝えてもらうこともあるかもしれないと言うちょっとした打算もあったのだ。

ススムの内心を知ってか知らずか、或いは含みがあってもそれはそれで構わないと思ってか、ススムの快諾にエリステアは微笑む。

「よかった。こんな事を言っては悪いけれど、城の兵士達は機転に欠けていて、調査に余り役に立ってくれなかったの」

「そうなんですか？」

ススムは意外そうに返すと、エリステアはふうとため息をついて答える。

「ええ。私達の目的は、レシマスを探索し、最下層にあるといわれる《秘宝》を持ち帰ることです。《秘宝》の正体とレシマスについての研究はある程度進んでいます。一度に言っても覚えられないでしょうから、必要があればそのつどに聞いてください」

「なるほど、わかりました。……とりあえず先ずは最初に何をしましょうか？」

「最初の仕事として、ある人物の探索をお願いします。男の名は《カラム》。あなたと同じように、彼もレシマス探索の強力を買って出た屈指の冒険者です。調査隊の情報源として少なからぬ貢献をしていました。しかし、彼からの音沙汰がここ数週間まったくありません」

「……なるほど」

「あなたの任務は、レシマスに赴き、《カラム》との接触を試みることです。彼から最後に連絡があったのはレシマスの16階。おそらくはより深層に探索の手を広げているでしょう。彼の足取りを掴み、私に報告してください」

そう言ってエリステアはススムにレシマス四層への下り階段を封じている鍵を渡す。

どうやら階段を封じて侵入者を限定しているらしい。

「16階ですか……わかりました。その依頼、やり遂げてみせます。行こう、エリー」

「はい」

二人は城を後にしてそしてため息をついた。

「16階層か……絶対食料途中でやばくなるよな」

「その危険もありますが、深層になればモンスターの脅威も高まります」

「詰まり、道具なんかもキチンとそろえる必要があるわけだ」

道具の中で筆頭はススム的には火炎瓶が一番なのだが、下手に延焼すると後で困るのは自分なので自重しようと思った。

その次に思いついたのは魔法棒……と言うか魔法の杖だ。振れば回数限定で魔法が発動する優れものだ。

しかし、扱いがいまいち難しいので倦厭してたという事実がある。

「そういえば、魔道具に関する技術はポート・カプール、ダルフィ、ルミエストのトレイナーから教えてもらえるそうです」

「んじゃ、先ずはそれを覚えるのを優先するかあ」

「わかりました」

そう決めた二人は道具を買い揃えた後、依頼へと足を伸ばした。

同時刻にロミアスとラーレイネがパルミアの酒場に向かい、その後その身を狙われている事態になっているとは露とも思わず。

と、いうかこの時点で二人に気付くことも、思い出すことも無かったススムだった。

その後、二人はヨウイン、ヴェルニース、ポート・カプール、再びヴェルニース、ヨウイン、パルミア、ルミエストとあちらこちらへと移動しつつ護衛依頼と配送依頼をこなしながら着実に準備を整えていった。

「準備を整えるだけで、ノースティリス主要都市の殆どは回ったなあ……」

「後回ってない場所と言えば、北東の雪原にあるノイエルと南東の高原地帯のラーナですね」

会話をしながらススムはここでようやく読書、もとい魔法書を紐解くことにした。

「んじゃ、暫く読み耽ってるから適当に過ごしてくれ」

「分かりました、ご主人様」

ススムは読み耽っていると、段々と頭痛がしてきた。

理由は分からないが何か変なのだ、良く分からない衝動的なものが頭のうちのた打ち回る感覚。

集中のし過ぎだ、と思い本から目を離すと……。

「あれ？俺、さっきまでギルドの壁に背を預けてたはずじゃ？」

気が付いたら別の場所で座り込んでいた。

だが、なんとなく直感で悟る。

「もしかして、この本の影響なのか？」

再び本を読む。

気が付いたら別の場所。

再び本を読む。

気が付いたら別の場所。

再び本を読む。

気が付いたら別の場所。

再び本を読む。

体の中から何かが抜けた虚脱感。

「く……うう……ダメだ、どうしてこうなってるんだ？　そもそも魔法を覚えられた気配すらない」

一応、ススムも既に幾つか魔法を習得している。扱えるかは別としてだ。

その全てが夢枕に立った赤毛の魔法使いの置き土産であり実際に扱えるか甚だ不安な物だ。

だが、そのお陰でススムは感覚的に魔法が自身に宿ったという事を知覚できるようになった。

それ故にまだ自身が習得していないことも悟れたのだ。

「はあ、こんなんで本当に大丈夫なんだろうか」

その後、なんとか僅かに軽傷治癒の魔法を覚えることに成功するも、身に宿った量は微々たる物だった。

沈黙の霧という魔法封じの魔法を覚えようとしたが、こちらは丸で覚える事が出来ないまま魔法書が擦り切れて消滅してしまった。

「……はあ、一度パルミアに戻るか」

パルミアへの道中は穏やかな物だった。

唯一特筆すべき事があるとすれば、荷崩れが起きてススムが死に掛けたぐらいだ。

「……荷物、預ける場所とかねーのかよ……このままじゃ、レシマスに挑む前に重量オーバーで死ぬわっ!!」

「……………（計画性を持って道具を買わないからこうなるのだと思うのですが）」

エリーは喚くススムを身ながらあきれを感じつつも進言することにした。

「では、倉庫を購入してみてもはどうでしょうか？」

「倉庫？」

ススムが尋ね帰すとエリーがそういえば色々知らない事が多い人だったなと思い出しながら説明する。

「お店などで『建物の権利書』を売ってる場合があります。この権利書を購入すると、何も無い場所に倉庫や家、牧場、畑を設置する事が出来るのです」

「……それって、一瞬で？」

「はい」

「……魔法だとしても、すげえな」

「私もそう思います。いかがでしょう？」

エリーの問いかけにススムはううんと唸ってから「そうだな」と納得し。

「よし、倉庫になる建物を購入しよう！」

そうしてパルミアの街道を挟んで北の位置にススムは遂に倉庫ではあるが新たな拠点を作り上げた。

「ううん、もしかしてコレもまた冒険者として一人前的な行為だったりして」

「まあ、旅歩きして荷物が溢れる冒険者には必須だとは思いますが」

そう言いつつ、エリーは一つ重大なことを思い出した。

「そういえばご主人様はどの神を信仰していらっしゃるのですか？」

「信仰？ いや、特に何も……」

「と、言うことは無のエイスという事はなりますね……。コレを機に神を信仰してみてはいかがですか？」

「ええ？ ちょ、待てよ…なんでまた急に？」

「それは、ですね」

エリーは少し溜めてから説明を始める。

先ず、この世界には幾人もの神が居ます。

機械のマニ

風のルルウィ

元素のイツパロトル

収穫のクミロミ

地のオパートス

幸運のエヘカトル

癒しのジュア

そして無のエイス

其々の神は信仰する物に己の持つ力を与えます。

マニは機械仕掛けの神です。マニを信仰した者は、機械や罠に対する膨大な知識を得、またそれらを効果的に利用する術を知ります。ルルウィは風を司る女神です。ルルウィを信仰した者は、風の恩恵を受け素早く動くことが可能になります。

イツパロトルは元素を司る神です。イツパロトルを信仰した者は、魔力を大気から吸収し、元素に対する保護を受けることができます。クミロミは収穫の神です。クミロミを信仰した者は、大地の恵みを収穫し、それを加工する術を知ります。

オパートスは大地の神です。オパートスを信仰した者は、高い防御力と破壊力を身につけます。

エヘカトルは幸運の女神です。エヘカトルを信仰した者は、運を味方につけます。

ジュアは癒しの女神です。ジュアを信仰した者は、傷ついた身体を癒すことができます。

エイスは「信仰」と言えるかどうか微妙ですが、他の神々と同様、誰のものでもない（つまりエイスの）祭壇に水を置いた場合はちゃんと祝福してもらえたりします。

「……と言うあたりがノースティリスの常識です」

簡単に説明をし終わると少し誇らしげに胸を張るエリー。

しかし何度も触れているが死んだ魚の目だ。

「ほへえ……なるほどねえ。ちなみにエリーはどの神を信仰しているんだ？」

が、流石にススムも好い加減慣れてきたので普通に可愛いものは可



愛いと慣れ始めていた。

「私は収穫のクミロミを信仰しています」

「へえ、理由はなんかあるのかい？」

「供物が薬草や山菜でも良いので、大変信仰がしやすいからです」

「へ、へえ……」

「信仰に供物はつき物ですよ。それは例えば銃であったり、弓であったり、死体であったりと色々ですが」

「……そういうものなのか」

少し引きつつもススムはこの世界での信仰の有効さをなんとなく感じた。

なにせファンタジー世界だ、本当にご利益があるのだろう。

「入信とかするにはどうすりゃ良いんだ？」

「それぞれの神の祭壇で入信を誓うか、ここより北にある『神々の休戦地』と呼ばれる聖域においてある神々の祭壇で入信を誓うか、ですね」

「……今までの街とかでは、全然それっぽい祭壇はなかったな。パルミアにはあった気がするけど……特に何の神とかは言ってなかったか？」

「はい。ですので無のエイス、と言うことになります」

ススムはエリーの言葉を聴いてふむ、とうなずく。

「んじゃ、俺も信仰してみるか」

「それが良いと思います」

そうしてパルミアを出て北へ2日ほど歩く。

その間は幸いにも魔物に襲撃されることは無かった。

そうして辿り着いたのは厳かな雰囲気を漂わせる神聖な場所、と無神論者だったススムにさえ思わせる場所だった。

「ここが、神々の休戦地か……」

「はい」

ススムが周囲を多少の警戒を持ちながら進むと、一瞬強い光がススムの目を焼いた。

「くっ!?!」

ススムの視界が全てが白に染まった後、視界が戻るとそこは先ほど居た神々の休戦地でありながら、そことはまた別の場所になっていた。

そしてススムの目の前には背に翼を生やした神々しさを感ずる女性3人。

「良く来たわね、上位異世界からの観光客」

「というか、来るのが遅いのよ! あ、べ、別に待ってたわけじゃないんだからね!?!」

「三人で君がくるまでまってたんにゃよ!」

まるでススムの存在を知って居たかのように振舞う三人にススムは驚きつつ一步後ずさる。

「貴女方は……一体?」

その言葉に3人はそう言えば、と言ってから自己紹介を始める。

「私は風のルルウイ」

「わ、私は癒しのジュアよ」

「幸運のエヘカトルだみゃ」

その名乗りにススムは驚きを隠せない。

「そ、その名前ってもしかして、いや、もしかなくても神様の名前!？」

3人は満足げに頷いて口を開く。

「さて、まずは態々私たちが直接アンタなんか姿を見せた理由を教えるわ」

「それはとても困った事がおきたんだみゃー」

「手早く言えば、この世界イルヴァを生命体を喰らい尽くす病原菌が多い尽くしつあるの。この世界の生命体は殆どがそれに侵食され、今生きている生命体はそれに適応した存在なんだけど……」

「この世界がその病原体に抵抗しようとするところ、この世界の人間達もまとめてピンチなのによ！」

「で、アンタみたいな殺しても蘇る上位異世界存在に私達から依頼って訳」

そこまできてようやくススムはこの3人の意図が読めた。

「詰まり、俺に何とかしろって事?けど、どうやって……」

戸惑うススムに3人の女神たちは毅然とした態度で次々に口を開く。

「まずはレシマスの秘宝……アレを誰にも奪われないようにしたいわ」

「つまり、キミにはなんとしてもレシマス攻略をがんばって欲しい

のにゃ!」

「勿論、アンタにもキチンと報酬はあるわ!」

「元の世界への帰還の手助け。それが私達イルヴァの神からの報酬よ」

その言葉を聴いてススムはやや眉を顰める。

「元の世界に戻してもらうことは出来ない?」

その言葉にエヘカトルが少し残念そうに答える。

「残念だけど、それはみゃー達の力の範疇を大きく超えてしまうのにゃ。みゃー達にできるのはススムが強く成る為の手助けと帰還方法を探る助力をすることだけにゃのにゃ」

「フフ、これだって私達神々が動くんだから普通じゃ考えられないほど厚遇なのよ」

「べ、別にアンタの事が気に入ってるからこうするわけじゃないのよ! あくまで直接動けないから直接動くアンタを厚遇してやるっただけなんだから!」

3人の女神の言葉を聴き、ススムもなるほど、と頷く。

「……わかりました。正直俺一人じゃ何をどうしたら良いかだってわかんない。俺からもお願いします」

3人は頷いてススムに問いかける。

「それじゃあ、改めて聞くけど」

「ススムは」

「わ、私達のうち、誰を信仰するのかしら!?」

「え？」

ススムの頭は真っ白になった！

「あー……えっと」

ススムは言えない。

実はこの場にはいない大地のオパートスを信仰しようと思っていたとは。

だって、破壊力とか防御力とか魅力的じゃないか！とススムは内心で叫びつつも、態々この3人を目の前にして言えるはずも無い。

「えーっと俺が信仰するのは」

「」「信仰するのは？」「」

そうして石動進は始めて信仰をすることになった。

「べ、別にアンタの活躍なんて期待してないんだからねっ」

ツンデレな癒しの女神ジュアを。



## Lv7：新米旅行者とロリっ娘と 運命の鼓動・1（後書き）

と、言うわけでススムは癒しのジュアを選びました！  
プレイヤー的には打算まみれですよ、防衛者の能力（AI）とか。

本当はオパートスとかイツパロトルにしようかと思ったんですけど、  
野郎の神様よりも女神信仰の方が野郎としてはやる気が出るのです！

それではお約束のLvUP報告です。  
今回、エリーはLvUPしていないので報告はなしです。

名前…ススム（石動進）

種族…神の化身（現代日本人）

性別…男性

職業…観光客

信仰…癒しのジュア ↑New

Lv6↓Lv7

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90（90） — —

マナ 150（150） — —

狂気度 0 — —

速度 100（100） — —

名声 2172 +902

カルマ 20 — —

現在値 前回比

筋力…10（10）＊ +2（+2）

耐久…12（9） +2（+2）

|    |        |       |     |       |
|----|--------|-------|-----|-------|
| 器用 | .. 1 9 | (9) * | + 1 | (+ 2) |
| 感覚 | .. 9   | (9) * | + 2 | (+ 2) |
| 習得 | .. 5   | (5)   | —   | —     |
| 意思 | .. 5   | (4)   | + 2 | (+ 1) |
| 魔力 | .. 7   | (7) * | + 1 | (+ 1) |
| 魅力 | .. 5   | (5)   | + 1 | (+ 1) |

## 装備

頭 .. 祝福された鱗の兜「2, 6」∴ (火炎耐性\*)  
 首 .. 鉄の首当て「0, 4」∴ (火炎耐性\*)  
 背中 .. 烈火の皮の軽外套「4, 2」∴ (感覚維持, 交渉「\*\*」, 火炎耐性「\*\*」)  
 胴体 .. 白銀の厚鎧「5, 1 8」∴ (暗黒耐性「\*\*」)  
 利手 .. 鉄の長剣(2 d 8 + 1) (3) ∴ (攻撃修正 + 3, 打撃修正 + 1, 火炎耐性「\*」)  
 手 .. 稲妻のシルバークラークラ「1, 4」  
 指 .. 輝く鱗の装飾の指輪∴ (器用維持, 火炎耐性\*)  
 指 .. なし  
 腕 .. 鉛の厚籠手「0, 4」  
 腰 .. 鱗の腰当「2, 2」∴ (火炎耐性「\*」)  
 足 .. ☆祝福された気高き合成靴『母は瞳』「0, 4」∴ (ロミアスの遺品, 魔力維持, 筋力維持, 大工「\*」, 電撃耐性「\*」, 運勢 + 5)  
 遠隔 .. ★《異形の森の弓》∴ (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃, レア, 異次元の手「\*\*\*」, 毒追加攻撃「\*\*\*」, 感覚維持, 器用維持, 詠唱「\*」, 毒耐性「\*\*\*」, 器用 + 1 0)  
 矢 .. ☆儚き矢束(1 d 8) (3) ∴ (時止弾 x 4, 炸裂弾 x 1 0, 運勢 + 3)



◆スキルと特殊能力

戦術 Lv5. 001 ↓ Lv5. 181

重量挙げ Lv4. 163 ↓ Lv5. 898

両手持ち Lv3. 360

治癒 Lv8. 463 ↓ Lv11. 000

盾 Lv6. 102 ↓ Lv6. 967

重装備 Lv4. 638 ↓ Lv5. 218

中装備 Lv4. 836

鍵開け Lv1. 000 ↓ Lv1. 050

二刀流 Lv4. 000

軽装備 Lv5. 429

回避 Lv6. 642 ↓ Lv7. 069

隠密 Lv5. 844 ↓ Lv7. 159

釣り Lv5. 000 ↓ Lv5. 728

読書 Lv2. 510 ↑ New

信仰 Lv4. 000 ↓ Lv5. 562

旅歩き Lv8. 266 ↓ Lv9. 448

瞑想 Lv7. 143 ↓ Lv8. 039

詠唱 Lv4. 000 ↓ Lv4. 012

魔道具 Lv1. 204

交渉 Lv9. 799 ↓ Lv13. 547

◆武器の専門

長剣 Lv4. 568 ↓ Lv4. 655

斧 Lv4. 000

格闘 Lv7. 134

鎌 Lv4. 000

鈍器 Lv4. 000

槍 Lv4. 000

杖 Lv4. 018

短剣 Lv4. 000

弓 Lv6. 320 ↓ Lv6. 921

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv7. 000

銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 弱い耐性\*\*\*

冷氣耐性 耐性なし

電撃耐性 素晴らしい体制\*\*\*\*\*

暗黒耐性 普通の耐性\*\*\*

幻惑耐性 耐性なし

毒耐性 強い耐性\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 耐性なし

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」 貴方の守備は鉄壁だ「Protection Value +10」

「フィート」 貴方は見切れる「Defense Value +5」

「フィート」 貴方は我慢強い「耐久+3」

## LV8：新米旅行者とロリっ娘と凹んで だけどがんばって（前書き）

スキルアップしようとするだけであっさりとレベルが上がってしまいました。

やっててなんですけど短くなりすぎた。

後書のステータスに関してですが、今回はメモし忘れたのでありません。

## Lv8：新米旅行者とロリっ娘と 凹んで だけど がんばって

1111日目

ススムです。

そういえば、なんか気付いたらもう4ヶ月近くこっちで過ごしているんだな。

たしか、何度か死に掛けたり死んだりした気もしたけど、何とか無事に過ごしています。

ススムです。

そろそろ母親の手料理がマジで恋しいです。

ススムです。

兄貴の何気なく手広い知識の披露を聞きたいとです。  
ダチのTRPG談義が聞きたいとです。

そして何より真紀先輩に会いたいとです。

ススムです。

ススムです。

ススムです……。

ただし浩太、てめーはダメだ。

なんだか嫌な予感がしすぎるからな。

……遊びすぎた。

準備が終わったのでレシマスに挑んできます。  
出来れば一発でクリアできるといいなあ。

[illegible]

「ご主人様、ここに鍵付きの蓋が」  
「コレを使えば降りれるわけだな」

「うっし、いくぞ！」

「……是非もなし！」

その結果、ザナンの青い髪のイケメンの罫にはまりラーレイネがサ  
イモアという生っ白い王子の下に拉致られたのだが、やはりススム  
とは関係ない所で話が進んでいたのだから彼にはどうしようもないのは  
言うまでも無い。

荷物の重さに足を滑らせて転げ落ちたススムが見たのはモンスターに囲まれた階段周辺と、それと戦う人々の姿だった。

「先に往くぞ、ご主人！」

「くそ、情けない所ばかり見せていられるか！」

その場を切り抜けた、と思ったのだがそれで気を抜いたのが悪かったといえた。

「Gooooooooo!!」

ゴブリンの魔法使いが放った魔法の矢がススムの頭を一撃で碎いたのだった。

ススムの目が覚めると頭は柔らかい何かの上に載っていた。

「ご主人様、目が覚めましたか？」

「エリー……?」

ぼけた頭が段々と覚醒していく。  
そうしてススムは気付いた。

「（こ、コレは伝説の膝枕!? 向こうでは真紀先輩にもしてもらった事が無いアレだっ!?!）」

真紀先輩というのはススムが元の世界で恋人未満親友以上という間柄だった女性のことだ。

友人達からは既に恋人だろうといわれていたのだが、ここではそれは余り関係ない。

「あ、まだ怪我の具合が酷いので動かない方が良いでしょう」

「……そうか俺、また死んだのか？」

「……はい」

「「……はあ」」

暫く休んだ後、大分回復したことを確認したススムはエリーを伴って再びヴェルニスへと向かった。

「とりあえず強くなること、武具をそろえること。コレが重要だなあ」

「……そうですね。現状ではどれだけ足掻いてもレシマスに挑むには少々厳しいようですし」

「……はあ、わが事ながら本当にキツイもんだ」

二人が宿でまったりとダラダラと今後の方針を定めていると、突如叫び声が聞こえた。

「エーテルの風だあああああああ！」

その声にススムはげんなりとしながらエリーに問いかける。

「……エーテルの風って3ヶ月くらい前にもなかったか？」

「基本、三ヶ月周期ぐらいだったかと思います。時折、天変地異的に唐突に起こる事もあるのでなんとも言いがたいですが……」

「……シエルターに行くか」

そうして丸々三日シエルターに拘束される事になる。

「そういえば、エーテルの風って本当に何なんだ？」

「エーテルの風、ですか？」

この世界に吹き荒れる異変の象徴的に扱われ、人々の精神と体に変異という形で影響を与え、3ヶ月、或いは突発で発生するトンデモな天変地異。

だが、その原因や出所に関してはススムは何も知らなかった。

「噂の範囲を出ませんが、希望の森から発生しているという話を聞きます。声高に唱えたのはザナンのサイモア皇子。そして悪いのは森に住まうエレアの民である、とかだったかと」

「エレア……」

その言葉を聞いてススムはつい自分の持つ弓を見た。

元は緑髪の”エレア”、ロミアスの所持品であり、森の民の知恵と技術の詰まった、ススムでさえも扱いやすい最高の弓だ。

ロミアスがエレアであるなら、同行者であったラーレイネもまた高確率でエレアだろう。

「彼らはエーテルの風による影響が極めて小さい、というのも噂の理由のようです」

「なるほど」

「私も育ちがヴィンデルの森周辺だったため、エーテルの影響は他の人々と比較しかなり軽いです」

なるほど、と呟きススムは倉庫に転がっている本に目を通す。

暇つぶしの昼寝の合間に読むような本だった故か、読み終る頃には軽く3日ほどが経過して居た……。

二人は一度拠点である乞食の洞窟に戻っていた。

ススムが荷の整理をし、エリーが冒険者ギルドからの配給を裁いていると、荷の中に赤い札が二枚あることに気付いた。



「あ、ご主人様。税の知らせが来ているのですがいかがしますか？既に一月分滞納した状態です。」

「……え、税って……どゆこと？」

「……そういえば、ギルドでその辺りの説明を受けていませんでしたね。余りにも当たり前すぎて抜けて居たのだと思いますが。」

ご主人様に適応される部分だけで言うと、ご主人様は国家が運営する冒険者ギルドに認定された冒険者です」

「……国営だったのか」

その言葉をエリーはスルーしながら続ける。

「冒険者にはそのランクに応じて配給がされる事になっています。冒険者以外にもアリーナの剣闘士、債権者であることなど様々な理由で配給を受け取る事が出来ます。しかし、その半面で月に一度、税金を支払う義務が生じるのです」

「……ちなみに、滞納しすぎるとどうなる？」

「犯罪者と認定されます」

「よし、払いに行こう！」

石動進、彼は異世界で魔物や人を殺す様になっても犯罪者の烙印を押されるのは勘弁して欲しいと思う割と小市民な男だった。

それから数日の時間が過ぎた。

あいかわらず依頼を受けては街と街を行き来する状態だ。

しかし、旅の間ススムは一つのことをずっと思い悩んで居た。

それは勿論レシマス攻略のときの事だ。

可能な限り万全の状態を整え、さあこれで大丈夫！そう思ってススムはあっさりと殺された。

エリーは何も言わなかったが、ススムは確信を持っていた。

なんで腕を磨こうとしないのか？彼女はずっと可愛らしいが表情の読めない鉄面皮で死んだ魚のような目で見ていたと。

「……はあ、金ばかり稼いでも強くなれるわけじゃない……ってーのは分かってたつもりなんだけどな」

「ご主人様？」

「言葉にすれば簡単なんだよな。そう、俺には足りないものが幾つもある」

依頼を受けたわけでもないのにススムはパルミアの外に向かおうとしていた。

「強くなる為に良い武具や道具を持つ、それも確かに手段だ。ああ確かに効果はあったさ」

「……」

「だけど、所詮道具の力だ。俺自身が強くなったわけじゃない」

「……」

「頭じゃ理解してた。だけど軽視してた。本当、バカだと思わないか？」

「……」

「そうですね」

「強くなるぞ、エリー。その為にはお前の力が必要だ」

「はい」

「そして、何時かは……いや、コレは今考える必要は無いか」

そうしてススムは自分から戦うことを選ぶようになった。

それはレシマス攻略のためであり、女神達からの依頼のためであり、何より自分のために。

身の丈にあったダンジョンに籠ってモンスターを殺しつくした。

サモンモンスターの杖を振るって呼び出した傍から殺して回った。ヤバイ敵が出てきたときは勿論速攻で逃げた。

「ところでご主人様、杖、勿体無くないですか？」

「あー……勿体無いといえば勿体無いんだが、本番でマトモに遣い方が判りませんじゃ洒落に並んだろ？」

さっきだって軽傷治癒ライトヒールの発動、ミスったし」

「……それもそうですね」

便利アイテム、魔法棒（通称は杖、もしくは魔法の杖）はススムにとって大事な所で役に立たないドジ子アイテムだった。そんなこんなで数日が経過した。

## Lv9：新米旅行者とロリっ娘と 子犬の洞窟（前書き）

ゲーム付けっぱなしで文章書いているのでプレイ時間だけは既に30時間オーバーです。

ところで、ムーンゲートネタって皆さん興味ありますか？

詳しくは「Elona ショウルーム」あたりでググるかWiki  
ってください。

LV9..新米旅行者とロリっ娘と 子犬の洞窟

140 日目

気が付いたら我が家の財政はどん底でした。

どうしてこうなった!?

魔法の杖、買い過ぎたからですね、ワカリマシタ。

と、言うわけで反省して実践訓練と言うことでひたすら戦いつつ討伐依頼をこなしているのさ！

でも、難易度高いのは怖い。俺は、勝てる戦いしかしたくない！  
いくら蘇ると言っても超痛いし辛いし死ぬのは嫌なんだよ！

でも、殺されなくなるためにはこの世界では一にも二にも強くなる必要がある。

余裕があるなら護衛を雇うのも良いかも知れないけど、基本高くつくので勘弁して欲しい。

そういえば……ダルフイには奴隷市があつたよなあ……。

まて俺……そこに手を出したら何かが終わっちゃうんだぜ！

[illegible]

二人は今回、まだ足を踏み入っていない場所に行つて見ようという方針の下に節減を突き進みノイエルを目指していた。

「……寒い、寒すぎる……！」

「多少の……防寒着では……効果が……」

二人は吹雪と寒さと疲労でまぶたが重くなるのを感じつつも歩き続けた。

「……！見えた！！エリー、ノイエルだ！」

「……！」

二人は疲労で重くなりつつあった足から疲労が無くなった様に感じるほど心持ち素早くノイエルへと移動した。

「ぷはあゝ！この一杯の為に生きている！」

「温かいお酒が体の芯まで染み渡る感じです」

宿屋にチェックインして早速酒と食事を堪能しつつ休む二人。

そんな姿の二人を見て宿の店主は笑いを堪えつつ若い二人に自慢の手料理を振るった。

さて、ノイエルまで行った二人だがその目的は観光や依頼ではなく実は力を得るためだ。

「確か、ロイターさんが教えてくれた聖なる井戸ってのはこの辺りにあると思うんだが……」

そう、二人の目的は霊験あらたかと噂されるノイエルの寺院の裏手にあると言う噂の聖なる井戸が目的だったのだ。

早速井戸の水を飲むススムだが……。

「……普通に美味しい水って感じしかないな」

「……ハズレ、なんでしょうか？」

命がけで来ただけあって、しょんぼりする二人。

「ま、まあここに来るまでも結構戦ったし、それが良い経験だったよな！」

「そう、ですね」

その後、幾つかの依頼を受けて戦ったり戦ったり、時期が過ぎたけど巨大で美しいクリスマスツリーを見たり寺院を観光したりと楽しんでから二人はノイエルを後にした。

新米冒険者、雪原横断中……

二人は雪原をモンスターに襲われることなく渡りきると、そのままの足でパルミア経由でヴェルニースへと戻った。

戻った直後にヴェルニースの住宅地の地下倉庫がプチやスライムたちに占拠されたから倒してきて欲しいと言う依頼も受けさせられて、ススムはエリーの様子を見て今回は自分ひとりでも大丈夫だろうと判断して訓練がてらで一人で挑んでスライムの特性に驚きつつ、さらには群れて来たのをビビりつつも狭い通路を有効利用して魔法の杖に込められた炎の壁や炎の衝撃や雷の軌跡を振るいまくって一網打尽にすることに成功する。

「あかん、あんなのまともに相手にしたら装備がボロボロになって赤字どころの話じゃない」

地下倉庫の戦いと長旅の疲れを宿で癒した翌日、休憩日として二人は珍しく別々に行動していた。

「……それではご主人様、私は4〜5日ほど留守にしますので」

エリーはそう言って出かけていった。

どこに出かけるかも聞いていないが合流だけはヴェルニースの宿と決まっていた。

そしてススムは釣堀の辺りを散歩しながら、エリーとの旅を振り返っていた。

「しっかしあれだなあ……気が付いたらエリーのほうはどんどん強くなってる気がするんだが……気のせいじゃないよなあ」

ススムから見ても、以前からエリーは強かった。というか、出会った時点で既に強かった。

だが、何時だか頃は既に忘却の彼方であつたが急にぐんと強くなった、気がしないでもなかった。

そしてそれ以来だろう……強さにぐんぐんと磨きがかかったのは。

「ふむう、俺も負けて入られないな!」

そう思っていると、幼い少女がススムのシャツの裾を引っ張っていた。

「ねえねえ、お兄さんは冒険者?」

「え? あ、ああそうだぞ?」

「ほんとに! ? だったらお願いポピーをさがしてきてー!」

「ええつと……ちよつと待てよ、それだけじゃちよつと情報不足だ。おにーさんが質問するから、ポピーに関して教えて欲しいんだだけ



ど、良いかな、ええつと……キミ、なんて名前？」

「わたし、リリアン！」

元気に返事を返すリリアンに苦笑しながらポピーについてはなしを聞く。

そしてわかったことはポピーは子犬で、どうやらヴェルニースから程近い場所にある洞窟に入ってしまったらしい。

そこにはモンスターが沸いて出ると言う噂なので流石のリリアンも入ることは出来なかった、と言う。

「なるほど、そこで俺に行ってきて欲しい、となるわけだ」

「うん！」

「任せてくれ。おにーさんも冒険者だからな。ポピーはキッチンと連れて帰ってくるよ」

「お兄さん、ありがとー！」

そしてススムは子犬の洞窟に挑むのだが……。

「むう、拾得物が多すぎる。……欲張り過ぎてのは分かるが捨てるのはもったいないし……。

しょうがない、一度ヴェルニースに戻るか」

そう言って第二層から第一層に戻ろうとしたのだが……。

「あ…れ？」

先ほどモンスターを狩り尽くしたはずなのに周囲を囲むほどに居るモンスターたち。

更に、気のせいで無ければ壁の配置も違う。

丸で別の部屋だった……。

「こりゃ、本格的にやばいか？」

その後、上り階段を再び上ることによって地上に戻ることは出来たが、洞窟の謎は深まるだけだった。

エリーが戻ってくるまでまだ3日ほど猶予があるため、ススムはどこまでやれるかを試すためにも再び洞窟に潜ることを決意した。

「そのまえに、途中の辺りに倉庫建てておくか。あつた方が便利そうだし」

そうして潜って脱出して、潜って上ってを繰り返して荷物の重さに圧迫されやや潰れ気味になりながらもようやく確信に至る。

「あそこは『不思議なダンジョン』だな……四層しかないみたいだけど」

不思議なダンジョン。大手のシリーズになっている大人気ゲームの商人や風来坊な旅人や黄色いdachouもどきや携帯怪獣の名を持つキャラクターたちが潜ったりする、潜るたびに構造が変わるダンジョンの総称だ。

ちなみにススムは一度四層まで全て潜りつくした。

だが残念なことにポピーを見つける事が出来ず、また食料が尽きたので脱出してきたのだ。

「ううん、こうなったらエリーも連れてきて一緒に潜ってみるのが一番か」

「お呼びでしょうか、ご主人様」

「うおっ!？」

まさかエリーが居ると思っていなかったススムは心底驚いて飛び退る。

「帰ってたのか、エリー。驚かさないでくれよ」

「……申し訳ありません。ところで、どうかされたのですか？」

何時もの表情と目でススムに問いかけるエリー。

彼は今請け負っている依頼を彼女に話し始める。

「……なるほど、近場にそのような穴場があったとは、盲点ですね」

「だな。しかもその洞窟の中には火を噴いたり吹雪を吐き出したりするイヌがいやがるからうかうかしていられないって言う難所だ。

ああ、後は魔法使いっぽい敵も多いな」

ダンジョンに限らず、モンスターとは別に襲い掛かってくる敵は多い。

それは人間だ。

盗賊とはまた別口の敵で、冒険者ではなく殺人集団とか殺人鬼とかそういうイメージを持っておけばそれでいいだろう。

「魔法使いですか、厄介ですね」

「だな。一応色々と妨害系の薬品は持っておいたから良かったものの……一歩間違えたら、な」

一歩間違えれば即死亡。

その事実は何度も死を垣間見たススムは勿論、この世界の生粋の住人であり戦士であるエリーもよく理解していた。

「それで、何時出ますか？」

エリーは何時でも出れると言わんばかりに装備を整えなおす。  
それを見てススムは頷く。

「そうだな、行くか」

### 子犬の洞窟第三層

第一層、第二層は地上でもよく見かける動物達だらけであったが、第三層まで来ると雰囲気が変わってくる。

ここに来ると魔法を使用する敵、ブレスでの広域攻撃を行う敵の比率が多くなってくるのだ。

「ほらよつと！」

ススムは魔法使いの敵めがけて一つのボトルを投げつける。

中身は薬品ではなくウィスキーだった。

そんなものを投げてどうするのだ、と普通なら思うだろう。

だが、ここイルヴァではお酒を投げつけることにも意味がある。

「ウィー…ひっく…」

ススムにとって驚きの事実なのだが、この世界の住人は酒に非常に弱い。

酔いが回るのが早すぎる、とも言える。

そして酔っ払って頭ではまともに集中できるはずも無く。

「ぐほあ……」

何度も魔法の発動をミスして更には魔力の残量を測り間違えて自滅するのだ。

「……まさか、こんな戦い方があるとは」

「俺も酒場でのおっさん達の酔いの速さを見てなけりや思いつかなかった」

むなしい勝利だ、とススムは呟く。

本当にむなしい物であった。

二人は程なくして熊や剣士を切り倒しながら第四層へと進むことになる。

#### 子犬の洞窟第四層

第四層に着くと、犬の鳴き声と何種類かの激しい轟音が耳に届いた。更には魔法が飛び交う音すらしている。

「……か、帰りたくなってきたな」

「今帰っては全ての苦労が水の泡です。子犬を救出して速攻で逃げましょう」

しかし、急ごうとする時に限って二人を阻むモンスターたちが現れる。

「……火を吹く犬つきかよ、洒落にならないな」

「ご主人様、奥のほうに小さい動物が……子犬かと思われます」

エリーがすつと指差すその先に、確かに子犬が居た。

子犬は特にモンスターから狙われている素振りはない。

「……よし、火を吹くのから優先だ。そいつらを始末したら速攻でポピーを連れて上まで駆け抜ける。良いな？」

「……是非もなし」

エリーもスイッチが切り替わったのか凶悪な笑みを浮かべギラギラとした目で敵を見据え……。

「ゴー！ゴー！ゴー！」

「ローランの力、その目に焼き付けるがよい！」

ススムは自身は英雄気分の薬や防衛者の薬、更には加速の薬を飲みつつ、周囲に酒と混乱薬と盲目薬と沈黙薬と火炎瓶を投げつける。  
エリーはススムが敵をそうして牽制する隙に接近し怯んだ火を吹くフアイアハウ犬からその首を狙いにいく。

ある程度薬をまき終えたら今度は毒矢……ではなく手裏剣を構える。

「ロミアスの弓は強いけどこういう時に使うと逆に危ないからなあ」

彼の弓は敵を手近な所に転移させる効果を持つ。

それが下手に発動すると、逃げる時に危ないのだ。

「持ってて良かった手裏剣セット。……中学のとき、こういうのよくやってなかったら本気でノーコンだっただろうな」

攻撃の手を休めずに進んで行くと、遂にポピーとの対面となった。  
ポピーは二人に気付くとまっすぐススムの元に駆け寄った。

「くうーん、くうーん」

「……懐いた、のでしょうか？」

「わからない。けど：よし、俺が抱えていく」

「分かりました、道は私が作ります」

そこからはモンスターとの追いかっこのような物だった。

エリーが突撃して道を塞ぐモンスターを切り倒しつつススムへと向かうモンスターの牽制を行う。

ススムはとにかく走る。

後ろから矢を射らようが切られようがとにかく走る。

エリーはススムが会談までたどり着いたのを確認すると大きく獲物を振り回して牽制し、開いた包囲網から一挙に脱出を図る。

途中、きつく抱き締めすぎたのかポピーが暴れて抜け出し、コボルトにあわや切り殺されそうになるシーンがあったが何とか生きているし怪我も薬品を与えることで治したので問題は無い。

「そう、問題は無いんだ！」

「途中、ご主人様がすっかり盾代わりにして魔法使いの攻撃でこの仔の足が欠けたりしましたがポーシヨンのお陰で回復しましたしね」

そんな事実など一切無かったかのようにススムはリリアンにポピーを引き渡し、更には報酬をいただいているが、冒険者としてどこも間違っていない……とは本人の談だ。

## Lv9：新米旅行者とロリっ娘と 子犬の洞窟（後書き）

レベルは子犬の洞窟に籠っている間に上がったのですが、時期が半端（ポピー未救出）だった為、救出してから話をきりました。

途中でエリーと分かれていたのは単純に防具の酸化を防ぐためです。ついでに遺伝子複合機もまた動かそうと思ったのですが、スキル不足のため断念。

では、何時ものステシさらしです。

名前…ススム（石動進）

種族…神の化身（現代日本人）

性別…男性

職業…観光客

信仰…癒しのジュア

Lv8↓Lv9

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

|     |     |       |   |   |
|-----|-----|-------|---|---|
| 生命力 | 90  | (90)  | — | — |
| マナ  | 150 | (150) | — | — |
| 狂気度 | 0   |       | — | — |
| 速度  | 100 | (100) | — | — |

|    |      |  |  |      |
|----|------|--|--|------|
| 名声 | 2172 |  |  | +902 |
|----|------|--|--|------|

|     |    |  |   |   |
|-----|----|--|---|---|
| カルマ | 20 |  | — | — |
|-----|----|--|---|---|

現在値 前回比

|     |    |      |   |    |      |
|-----|----|------|---|----|------|
| 筋力… | 12 | (12) | * | +1 | (+1) |
| 耐久… | 16 | (13) |   | +2 | (+2) |
| 器用… | 23 | (11) | * | +1 | (+1) |



感覚… 1 6 (1 0) \* + 6 (+ 0)  
 習得… 1 2 (7) + 5 (+ 0)  
 意思… 1 1 (5) + 5 (+ 0)  
 魔力… 1 4 (8) \* + 6 (+ 1)  
 魅力… 5 (5) — —

## 装備

頭 … 祝福された鱗の兜 [2, 6] : (火炎耐性\*)  
 首 … ☆鉄塊と呼ばれる結婚首輪『母殺しの純白』 : (不燃, 宝石  
 細工\*)\*, 自然鑑定\*, 解剖\*, 火炎耐性\*, 運勢+7)  
 背中… 烈火の皮の軽外套 [4, 2] : (感覚維持, 交渉 [\*\*],  
 火炎耐性 [\*\*])

胴体… 白銀の厚鎧 [5, 1 8] : (暗黒耐性 [\*\*])  
 利手… ☆逆鱗に触れし海賊刀『夢を追う月』 (3 d 5 \* 1) (1 6  
 [2, 0] : (中装備\*, 重装備\*, 隠密\*, 交渉\*, 遺伝子学  
 \*, 火炎耐性\*, 盗難防止)

手 … 稲妻のシルバークラーク [1, 4]  
 指 … 輝く鱗の装飾の指輪 : (器用維持, 火炎耐性\*)  
 指 … ☆美しき装飾の指輪『世界をすべる霧』 — 1 : (感覚維持,  
 幻惑耐性\*, 運勢+1, 器用+2, テレポート妨害)

腕 … 鉛の厚箆手 [0, 4]  
 腰 … 鱗の腰当 [2, 2] : (火炎耐性 [\*\*])  
 足 … ☆祝福された気高き合成靴『母は瞳』 [0, 4] : (ロミア  
 スの遺品, 魔力維持, 筋力維持, 大工 [\*\*], 電撃耐性 [\*\*], 運  
 勢+5)

遠隔… ★《異形の森の弓》 : (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃,  
 レア, 異次元の手 [\*\*\*], 毒追加攻撃 [\*\*\*], 感覚維持,  
 器用維持, 詠唱 [\*\*], 毒耐性 [\*\*\*], 器用+1 0)  
 矢 … ☆儚き矢束 (1 d 8) (3) : (時止弾 x 4, 炸裂弾 x 1 0,

運勢+3)

◆スキルと特殊能力

戦術 Lv5. 721 ↓ Lv8. 129

重量挙げ Lv6. 836 ↓ Lv7. 941

両手持ち Lv3. 360

治癒 Lv11. 510 ↓ Lv12. 231

盾 Lv8. 156 ↓ Lv10. 290

重装備 Lv5. 218 ↓ Lv6. 005

中装備 Lv4. 836 ↓ Lv5. 652

鍵開け Lv1. 050 ↓ Lv1. 953

二刀流 Lv4. 000

軽装備 Lv5. 429

回避 Lv7. 069 ↓ Lv9. 076

隠密 Lv7. 159 ↓ Lv9. 217

釣り Lv5. 728 ↓ Lv5. 896

読書 Lv2. 510 ↓ Lv5. 886

信仰 Lv5. 562 ↓ Lv9. 637

旅歩き Lv9. 448 ↓ Lv10. 653

瞑想 Lv8. 039 ↓ Lv10. 626

詠唱 Lv4. 012

魔道具 Lv1. 204 ↓ Lv3. 131

交渉 Lv13. 547 ↓ Lv14. 866

◆武器の専門

長剣 Lv4. 655 ↓ Lv4. 719

斧 Lv4. 000

格闘 Lv7. 134

鎌 Lv4. 000

鈍器 Lv4. 000

槍 Lv4. 000 ↓ Lv4. 404

杖 Lv4. 018

短剣 Lv4. 000 ↓ Lv5. 655

弓 Lv6. 921 ↓ Lv8. 852

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv7. 000 ↓ Lv7. 371

銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 弱い耐性\*\*\*

冷氣耐性 耐性なし

電撃耐性 素晴らしい体制\*\*\*\*

暗黒耐性 普通の耐性\*\*\*

幻惑耐性 耐性なし\*

毒耐性 強い耐性\*\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 弱い耐性\*\*

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の守備は鉄壁だ「Protection Value+10」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value+5」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備はテレポートを妨害する

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性

職業…戦士

L v 4 ↓ L v 6

ステータス…カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) ー ー

マナ 80 (80) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 104 (96) ー ー

現在値 前回比

筋力… 22 (22) +4 (+4)

耐久… 23 (23) +3 (+3)

器用… 10 (10) +1 (+1)

感覚… 7 (7) ー ー

習得… 18 (18) +1 (+1)

意思… 13 (13) +1 (+1)

魔力… 14 (14) +7 (+7)

魅力… 11 (11) +1 (+1)

装備

頭…硝子の羽帽子

首…なし

背中…鱗の軽外套「2, 2」…(火炎耐性\*)

胴体…白銀の厚鎧「4, 18」…(不燃, 暗黒耐性\*)

利手…硝子の大鎌-1 (1d14) (4) …(貫通5%, 首狩り\*

\*\*, 速度+4)

手…シルバークラーク「1, 3」…(不燃, 暗黒耐性\*)

指…シルバードコレートリング…(不燃, 暗黒耐性\*)

指…祝福された布の装飾指輪

腕…鱗の軽手袋(3, 0)「2, 2」…(火炎耐性\*)

腰 .. 革の腰当「2，1」  
 足 .. シルクヘビーブーツ…（幻惑耐性＊）  
 遠隔…シルバールングボウ（2d6+2）（3）…（暗黒耐性＊）  
 矢 .. 鉄の矢束（1d8）（1）

◆スキルと特殊能力

戦術 Lv8. 085 ↓ Lv12. 054  
 両手持ち Lv6. 156  
 治癒 Lv9. 340 ↓ Lv10. 052  
 盾 Lv13. 532 ↓ Lv14. 776  
 重装備 Lv9. 383 ↓ Lv9. 398  
 中装備 Lv8. 427 ↓ Lv9. 973  
 軽装備 Lv4. 206  
 回避 Lv14. 800 ↓ Lv15. 037  
 隠密 Lv4. 000  
 信仰 Lv4. 000  
 瞑想 Lv7. 010 ↓ Lv7. 130  
 交渉 Lv1. 000  
 投資 Lv2. 000

◆武器の専門

長剣 Lv10. 531  
 斧 Lv10. 000  
 格闘 Lv6. 000  
 鎌 Lv11. 536 ↓ Lv14. 141  
 鈍器 Lv10. 299  
 槍 Lv8. 000  
 杖 Lv4. 000  
 短剣 Lv8. 012  
 弓 Lv4. 000  
 クロスボウ Lv4. 000



**LV10：新米旅行者とロリっ娘と 依頼ツアーと挫折とリンゴのフルーツケ**

勢いばかりで書いてるので細かいところがおざなりなのは仕様です。

199日目

あれからまた結構な時間がたった。

思い出す時に日記をつけるようにしているけど、前の日付を見るとかなり日が開いている。

……まあ、気にしたら負けか。

さて、今回は面白いことに気付いたんだ。

それは『祝福』の恩恵って奴だ。

実はこの間、偶々体力が落ちた気がして『肉体復活の薬』っていう……まあ要は栄養剤っぽい味の薬を飲んだんだ。

そしたらなんか飲む前よりも調子がよくなったんだ。

これは気のせいじゃない。

なんせ以前よりもはるかに調子がいいからな。

で、気付いたんだけどどうもコレは祝福されてた薬だったらしい。祝福がされると通常の物よりも効果が高くなる。これは冒険者の常識らしい。だが、どの程度効果があるかは誰も把握し切れていない。

だからエリーも今まで俺に教える事が出来なかったというわけだ。祝福された薬を上手く使えば、俺も強くなれる……いや、技量が上がるって訳じゃないのは理解している。

でも、筋力とか体力とか……正直コレを上げるのはかなりきつい。そもそも、元々俺は力が付き辛い人間なのだ、これが。

周囲の友人たちが同じようなトレーニングをしている中、どうしても腕力が他の人間よりも劣っていたりした。

故にコレは天啓だと思ったね。



と、言うわけで暫くは薬を買い集めるツアーを使用と思う。

「そう言うわけで久しぶりに護衛と配送ツアー、というわけですか」

「確かに、祝福が掛かっていればそのような事もあるかもしれません」

軽く言うススムにエリーはため息をついた。

「……なんだか、ツツコミきついなあ」

「むう……残念だ」

「とりあえず、水の祝福だけでも授かってきたらどうですか？」  
「そうだな、そうするかあ……」

基本的なことで忘れられがちなのだが、水は祭壇に置くことで神から祝福されるのだ。

置くだけでいいのだ。

とても簡単なのだ。

そして、その他の薬品や道具を祝福するには祝福された水を振り掛けたり混ぜたりすれば良いのだ。  
コレもまた、とても簡単なのだ。

「仕方ない、次の街に移動するか」

「そういえばご主人様。荷車に積みっぱなしの交易品、どうされるのですか？」

「あ」

ススムは度忘れしていたが、実は交易品にも手を出していたのだ。  
金になればもうけもの、程度の気持ち出だ。

その交易品のお陰で食料の積み込める量が制限され、一度に移動できる距離や日数に大きな制限が掛かっているのだ。

「しょうがない……ノリエルの交易品だし、ポート・カプールあたりでなら高く売れるだろう」

「そうですね……ではポート・カプールへ？」

「そのまま行くんじゃないかと勿体無いからヨウインへの護衛依頼をこなしながら行くぞ」

「わかりました」

そうしてヨウイン経由で二人は次にヴェルニース、その次はポート・カプールのつもりで移動をしていた。

途中でエリーは顔を悪くし、風邪でも引いたか？とススムが尋ねても大丈夫と言い張って先へ進むことを促していた。

ススムはエリーの状態を気にしながら、休み休みヴェルニースへ向かうのだが。

「へっへっへ、ボウズそこで止まりなあ！」

「「!？」」

気付いたときには盗賊団に囲まれていた。

「何時の間に……」

「……魔術師2、銃使い3、雑魚2、親玉1。突破は」

「……厳しいですが可能です」

二人は小さく呟く。

「ああん？何ビビッてぶつぶつ言ってる？！」

俺たちじゃ無く子も黙る盗賊団『輝ける鈍足の駄馬』だ！命が惜しけりゃ金貨4500とその荷車の積荷を全部よこしなあ！」

その言葉の後にプレッシャーを掛け様という魂胆なのか周囲の盗賊たちが下品に笑い始める。

「さあ、よこしやがれ！」

「「断る!！」」

これは二人にとって良い機会だといえた。

普段であれば魔法を駆使してでも逃げるところなのだが、相手は人数というわけでもなくまた見たところ実力もそれぞれ勝てないほど高いわけでもない。

なればこそ、自身を測る良い機会だった。

「エリーは親玉を！俺は魔法使いから潰す！」

「承知した！」

即座に牙を剥く二人。

ススムは更に薬品を使って反応速度と反射速度を加速し、炎の魔法を放とうとする魔術師を優先して毒矢で葬り、エリーは一番の強敵である盗賊の親玉を相手取る。

二人の即行に先手を打たれた盗賊団だったが、元々数が多く二人を囲んで居ただけあって即座に追い詰められそうになる。

だが、魔術師は矢傷と毒で直ぐに沈み脅威にはならなかった、だが逆に敵の銃使いの弾幕が激しく、エリーの背後からの射撃が幾つか彼女に思いダメージを与えていた。

「くっ！まだ墜ちぬ！」

「はっはー！小娘があー！」

銃撃に邪魔され、手傷を負わされ追い詰められるエリー。

それに気付いたススムはフォローしようとするも。

「やらせねえよう！」

雑魚と断じた相手に射界を遮られ、更に銃使いの一人が牽制まで始める。

「くそっ!?!」

「きゃあー!」

エリーの悲痛な叫びが進むの耳に届いた。

ちらりとだけ視界に納めると、親玉が持って居た棘つきメイスの一撃で吹き飛ばされて、そして身動きをしていなかった。

「っ!」

ススムは今すぐにも駆け寄りた衝動に駆られた。

だが、それをすれば待つのは二人仲良く死ぬというシナリオだけだろう。

「杖よ!!」

腰に挿していた杖を振るい、魔法の矢が盗賊の親玉を破碎した。

「親分!?!」

そして他の盗賊たちが一瞬の動揺を見せた。

「どっか行つてろテメェ!」

そう言って今度は別の杖を振るうと、それだけで銃使いが一人二人とどこかへ転移して消えた。

「至近距離で喰らっつけ!!!」

叫びと共に普段であれば剣を振るう距離で毒矢の一撃を雑魚の脳天に突き立てさせる。

「ケイウエル!？」

おそらく先ほどの雑魚の名前であろうそれをこの場に残った銃使いが口にした。

「次はテメエだ！」

「!!」

コチラも程近い距離から足、胴体、そして最後に頭を打ち抜かれて倒れ付す。

残る銃使いたちもまた同様に殺されていった。

「……うん、コレで処置は大丈夫ね」

「癒し手の先生、エリーは……」

癒し手のキツカーはススムを見てため息をついた。

「心配のしすぎよ。あなたの処置が良かったのと直ぐに連れてきてくれたのは幸いだったわ。一ヶ月もあれば彼女、また冒険に出ても大丈夫よ」

「詰まり逆を言えば一ヶ月は待機、ですか」

ススムは少し複雑な心境になって問い返す。

「そうなるわ。でもまあ、良い骨休めだと思うわ。彼女、どうも結構無理してたみたいだし」

「無理を……?」

問い返すと癒し手はあつけらかんと说つてのけた。

「あら、気付かなかつたの？彼女、ツキの物が来てたみたいで調子がよくなかつたみたいなの」

「月のつて……ええつと」

ススムはその単語が何を意味するか理解した。

ザ・生理。

女性に月一程度で襲い掛かるアレである。

男性であるススムには、どれほどの苦痛であるかは正直想像もつかない。

「本当はこういうのつて余り言うモノでもないのだけどね。あなたは彼女のご主人様でしょ？だったら知つておいた方がいいわ。彼女も知識はあつても始めてだつたらしいから困惑していたし」

「あ、は、はい。わかりました」

「うん、素直でよろしい！あ、後この事を教えた私が言うのはなんだけれど黙っておきなさい。女の子としては男の人に知られたりするととても恥ずかしいことなんだから」

「わかりました」

ススムとしても、エリーを態々怒らせるつもりも辱めるつもりも無いので口にする気は無かつた。

その後、お馴染みのヴェルニースの宿にて、もはや顔なじみとなつた店主と挨拶を交わし「お嬢ちゃんに余り無理させるんじゃないよ！」と怒られつつススムはエリーの所へ向かつた。

ベッドの上に居たエリーは、人形さながらの脱力した様子で体を起

こしたまま呆然としていた。

何かをぶつぶつと呟いている様に、ススムはかなり引いてしまいそうだった。が心を強く持って話しかけた。

「エリー、怪我の具合はどうだ」

「ご主人……さま……」

死んだ魚の目は腐った魚の目レベルにまで落ち込み、さらに元々白い肌は生理の影響もあったのか土気色に近くなっていた。元々細い印象のエリーは更に細くなっているように見えた。

「……怪我は、一月かかるそう、です」

「そうか……今回は無理をさせて悪かった。俺のミスだ」

「そんな！私のせいなんです！私が、弱かったから……！」

「エリー……」

そして私が弱かったから、力さえあれば、エリーはそうぶつぶつと呟き始める。

その姿を見て、何故エリーはそこまで力を求めるのか、という疑問を抱くが進は敢えて今は尋ねないことにした。

「エリー、君は一ヶ月間、怪我が感知するまでは冒険禁止だ。それは聞いているな？」

「こ、この程度……うぐうあ……」

この程度の怪我は大丈夫だと告げようとした所で、今回一番ダメージを受けた内臓に激痛が走り、エリーは思わずうめく。

「落ち着いてくれ、エリーお前に何かあったら一番困るのは俺なんだぞ」



「しかし……私は」

「しかし何もあったものか！ エリー、君が望む『力』を得る為にも君はこういった時まで無茶をすべきじゃない！ こういう時は大人しくしてろ！ これはご主人様命令だ！」

今まで、命令などということはしなかったススムが初めて口にした命令だった。

「……わかりました」

エリーは、自身への情けなさでいっぱいになりつつもそれだけ呟いた。

「分かってくればそれで良い。俺も依頼があるだろうから毎日顔を出せないけど、それでも時間が出来たら様子を見に来る。お土産、期待してろよ」

そうしてススムはエリーに若干の不安を残したまま依頼ツアーに戻った。

「私は戦士なんだ、強くなければいけないんだ、負けてはいけないのに、力を得なければいけないのに、どうして、どうして私は……」

エリーはベッドの上で膝を抱えて泣いていた。

ススムは久しぶりの一人旅行にエリーには悪いと思いつつも気が楽だとも感じて居た。

何故か、と問えば非常に簡単な話だ。

「流石に、エリーがずっと近くに居ると何時暴発するかわかんないからなあ……」

簡単に言えば、性欲である。

ススムは元々普通の男子高校生だった。

性欲だって年相応に持て余し気味で更に言えばいつかあの人と……なんて妄想を何度でも抱いた事がある青少年だ。

故に、素材としては一流で年相応の笑顔さえ浮かべればトンでもなく愛らしいであろうエリーが身近に居ると暴走しかねない。

寧ろ今まで良く保ったほうだと言える、と自画自賛していた。

故に、ススムは今まで忌避して居たダルフィに護衛依頼で来た……と言う建前を用意して持て余し過ぎているソレを沈めに来たのだった。

ススムも一番初めの頃、イルヴァに来たばかりのただの高校生だった頃ならば忌避するかもしれないだろう。

だが、エリーという『女』と行動を共にするようになってからは正直話しは別だったのだ。

元の世界に想い人がいるのが、なんであろうが関係ない。

悶々とし続け、堪え続けることは本当につらいのだ。

そもそも、本当に日本に帰れるかさえ怪しいのだ。

女神達と交わした約束とてこの分では果たせるか非常に怪しいのだ。寧ろ、自身はこのままこの世界で帰る事も出来ずに骨を埋めてしまふのだろうという悲観が強かったのだ。

それはススムにとって強いストレスだった。

だから、ソレを八つ当たりでも何でもいいから発散する場所を求めた。

自分の心が耐え切れなくなる前に、何らかの形で八つ当たりしたかったのだ。

そして、性的欲求を持って当たり散らしたのは彼的には正解だった。相手も娼婦で慣れ切っていて後腐れも無かったから。

もしも、エリーにこの欲求をぶつけてしまえばどうなるか……きつとエリーと一緒に居ることは出来るだろう。

だが、それだけだ。

エリーのあの弱りきった心にトドメをさす。そして、自身にも決して抜けない楔を打ち込む事になってしまう。なんとなくだがススムはそう感じて居た。

そしてススムは依頼をこなしてはダルフィで風俗に行くというルーチンを半月ばかり繰り返していた。

これは快樂によって悩みを一時的に忘れたい、という逃避本能の表れでもあったのかもしれない。

その間に一時『病氣』を貰ってしまったのでススムは大いに動揺し、慌てて魔法薬を買いあさっては回復しないか試す、などという事態にも陥ったりもした。

エロイことも程ほどにしなければこうなるのは自明の理だった。

そして、ふと正気に変えようと急にこっぴどくかしくなってしまったのだ。

「ぬがああああ！ 幾ら酔ってたからってあんなキザっちい台詞言うなんてありえぬええええええ！」

本気という訳では断じてないのだが、ススムは色々と溜め込んだ末の暴発状態で更に娼婦の世話になる前には軽く酒を飲んでからいつも出かけていた。

だからその時、素面では絶対言わないようなキザッちい台詞を言うて口説いていたのだ。

台詞の詳細は覚えていない、だが確実に黒歴史に刻まれるような台詞を。

時間を置いて素に戻るともうダルフィにはいられなかった。

世話になった娼婦にはキチンと礼をいって苦笑され「また今度酒でも奢ってくれば良い」といわれ、そしてススムはとにかく全うな冒険者への道……というか、何時もの自分へと軌道修正するために依頼を受けて旅立ったのだった。

そして、旅立ってから暫くしてからススムはふと思い出した。

「あ、後4日でエリー退院じゃん」

ススムは黒歴史大量生産ですっかり忘れていたが、そういう時期にさしかかっていた。

「むう……祝ってやるべき、なんだろうか？」

様々な意味でスッキリしたススムは、ナニかをどこかに投げ捨てたりしたものの思考形態は厨二状態から賢者を通り過ぎて一般市民状態。

そうしてススムは久しく石動進として考える。

何か良い事があれば祝うのが日本人。

祝うと言えば宴会。

宴会と言えば美味しいもの。

美味しいと言えば肉料理や甘いもの。

エリーは女の子↓なら甘いもので。

売り物と手作りならどっちがいいもんか？

ココは男気を見せて手作りじゃね？多分。

じゃあ手作りで逝こうか。

料理、苦手だけどどうすんよ？

そうだ、ギルドで教えてもらおう。

一連の思考の流れから甘い手料理を作ろう！という結論に至ったススムは取り敢えず料理の基礎を習う為にリーシュの元へ赴いた。

「と、言うわけでリーシュさん。料理の仕方教えてください」

「何じゃ、藪から棒にそれに料理？ 久しく顔を見せなかったかと思えばいきなりそれか、お主は」

新米旅行者、事情説明中・・・

「ふむ、まあそういう事なら教えてやらんでもないが……おぬし本当に料理はできぬのか？」

「正確には手の込んだ料理はの作り方、かな。特にお菓子系統」

「ほほう？ そこまで言うのなら報酬はプラチナ硬貨の他にも成果物一つ、貰い受けたいものじゃな」

「……わかりました」

「よろしい、では料理について教授しよう。先ずはじゃな……」

新米旅行者、講習受講中・・・

「……と言うわけじゃ。これで大体の基礎は喋りつくしたかのう？」

「ありがとうございます。これで何とかかなりそうです！」

感謝を告げるとリーシュはよいよいと言って苦笑する。

「先ずは材料が欲しければ街中の木から林檎や夏みかん、さくらん

ぼが手に入る筈じゃから探してくると良い。探し終えたらパン屋で調理器を借りると良いぞ。あそこはキッチンと話せば調理器を使わせてくれるからのう」

「わかりました！いってきます！」

その後、ヴェルニースの街中にある果物の木から果実を乱獲したススムは、子供やそれを楽しみにしていた一部の大人にやや恨まれつつもそれを手にしてパン屋で調理器を借りるに至った。

「しかし、よくもまあこんだけ集めたもんだよ。なにを作るつもりなんだい？」

「んー、ケーキとかジュースの類を作ろうかと。一応大雑把なレシピは習いましたし……後は練習あるのみです！」

「そうかいそうかい、まあがんばっておくんな」

パン屋の店主は意気込んでいるススムを見て「俺にもあんな時期があったなあ」などと思いつながら仕事に戻った。

ススムが料理に没頭している間、宿は普段エリーと同じ部屋でススムは寝ていたのだが、この時ばかりは隠し事が苦手だと言う自身を鑑みてエリーとは別の部屋を借りて夜を過ごして居た。

「……私は、ご主人様に嫌われてしまったのだろうか……」

理由など欠片も知らないエリーはそう思い悩んでしまうのも仕方の無いことだろう。

そしてススムがあーでもない、こうでもないとして試行錯誤しながら料理を始め、そして遂にエリーが退院する日が来た。

『エリーへ 見せたいものがある 酒場で待ってる ススム』

大分雑な字で書いてあるが、ススムがエリーへ宛てた手紙がエリーの枕元に置かれていた。

「見せたいモノって、何なのでしょ…まさか…」

自分とは異なる美しく、強い女戦士を仲間にした姿を想像し、そしてヨロシクヤリながら「お前はもう用済みだ!」といって縁切りするススムの姿が頭を過ぎった。

まったくの杞憂であるが、最近不安定だったエリーは妄想力が逞しくなっているようだ。

あのご主人様がまさかそんな事をする筈が無い、とは思いつつも1ヶ月前の自信の不明を思い返せば悪い想像しか浮かばなかった。

まあ、少なくともススムがダルフィでヨロシクヤッてきたので妄想も一部だけはあたりだったりする。

エリーは項垂れながら宿を出て酒場にいるススムの姿を見つける。

「お、やっと来たか、エリー!」

「……は、はい。あの、手紙は……どういう意図が」

恐る恐る尋ねるエリーの言葉をさえぎってススムは口を開く。

「まあまあ、待って……シーナさん! 冷たいもん二つ!」

「は〜い♪オススメでいいわね?」

注文の後、まだ昼前だったために直ぐに注文した冷たいものが届いた。  
ジュース

「で、だ。何で態々ここに呼び出したかって言うとなお前に退院祝

いを上げようと思ったんだよ」

「タイイン祝い？」

「そうそう、病気や怪我が治ってよかったな！って言うお祝いだよ。今回は食い物で俺の手製だ、うまいぞ！」

そう言ってススムはリリアンから貰ったクーラーボックスに保管していたリンゴのフルーツケーキを取り出してエリーに渡す。

「コレは……？」

「ケーキだよ。食べたこと無いのか？甘くて美味しい食べモンだ！俺が作ってみたんだ。ささっ、食べてみろって！」

自信満々の笑みを浮かべて勧めるススム。

エリーはフォークを渡され恐る恐るケーキを口にした。

「美味しい……」

口にした瞬間、涙を流すエリー。

「おいおいススム！お前の料理が不味過ぎてエリーが泣いているんじゃないか？」

いつの間にか来ていた某赤い英雄がとがめるように言う。

この人物、腕は良いのだが年がら年中ヴェルニースの酒場で管を巻いているため、時折『ザナンの紅い昼行灯』と呼ばれる事があったり無かったりする。

「何時の間に……いや、それよりもエリー、口に合わなかったなら無理に食わないでも……」



ススムがケーキを下げようと手を伸ばした瞬間に、エリーががばつとケーキにがつつき、一気に食べてしまう。

「ご主人様、私はこんなにも美味しい物が食べれて本当に幸せモノです」

「そ、そうかそうか！ いやあ、エリーに気取られないようにコソコソと練習した甲斐があったってもんだ！」

結局、エリーが泣いたことに関しては美味しい物を食べて感動したから、と言うことで落ち着きを見せた。  
某紅い昼行灯は「チッ」と予想が外れたことに舌打ちして酒場の指定席（となってしまう場所）に行ってしまう。

「ご主人様、私、強くなります！ 誰よりも、どんな存在よりも…！」  
「そうか、エリーの実力は理解してるつもりだ。今後も期待してるぞ！」

「はい！」

ケーキを食べ終えたエリーは思う。

最初は生きる為に、強くなる為に利用として接触した今のご主人様だけれど、その強さを求める理由に自分に期待してくれるご主人様を護りたい、と言う想いを加えたいと。

ススムは決意を胸に秘め、静かに燃えているエリーを見て気付いた。

「（おお、目が生き生きとしている…！ 戦いの時でもないというのに！ やっぱり女の子は甘いものが好きなんだな！）」

思いが妙な感じですね違っている主従だった。

## Lv10..新米旅行者とロリっ娘と 依頼ツアーと挫折とリンゴのフルーツケ

相変わらずの話の大雑把振りに泣けてきました、なつやです。

能力上げの為に勘違いしおつつ奔走とススムくんがダルフィでハッスル（魅力稼ぎ）して我に返って（普通に依頼して）料理スキル習得したのでやってみましたの巻きでした。

盗賊にエリーがやられたのは痛恨の極みでした……後一步早ければ軽傷回復できたのに……。

さて、肉体回復と精神回復の葉は祝福しても能力にブーストがかかるのはどちらも1度だけです。死ぬとリセットされるそうです。

祝福の肉体回復と精神回復でエリーの強化がひどいことになりました。

ススムも強化されましたがぼちぼちなのでありがたみが……。

それにしても、エロイこととして魅力が稼げるって、良いですよ（あ

名前..ススム（石動進）

種族..神の化身（現代日本人）

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv9↓Lv10

ステータス..カッコ内は元の値

|         | 現在値       | 前回比      |
|---------|-----------|----------|
| 生命力     | 90 (90)   | —        |
| マナ      | 150 (150) | —        |
| 狂気度     | 0         | —        |
| 速度      | 115 (100) | +15 (+0) |
| 名声      | 3419      | +1247    |
| カルマ     | 16        | —4       |
| 現在値 前回比 |           |          |
| 筋力      | 19 (13)   | +7 (+1)  |
| 耐久      | 23 (14)   | +7 (+1)  |
| 器用      | 33 (12)   | +10 (+1) |
| 感覚      | 17 (11)   | +1 (+1)  |
| 習得      | 13 (8)    | +1 (+1)  |
| 意思      | 12 (6)    | +1 (+1)  |
| 魔力      | 17 (11)   | +3 (+3)  |
| 魅力      | 12 (7)    | +7 (+2)  |

## 装備

頭 .. 祝福された鱗の兜 [2, 6] ∴ (火炎耐性\*)

首 .. ☆《謎の貝》 [2, 14] ∴ (信仰\*\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*\*, 運勢+3, 神電波受信)

背中.. 烈火の皮の軽外套 [4, 2] ∴ (感覚維持, 交渉[\*\*],

火炎耐性[\*\*])

胴体.. 白銀の厚鎧+1 [5, 18] ∴ (暗黒耐性[\*\*])

利手.. ☆逆鱗に触れし海賊刀《夢を追う月》+1 (3d5\*1) (16) [2, 0] ∴ (中装備\*, 重装備\*, 隠密\*, 交渉\*, 遺伝子学\*, 火炎耐性\*, 盗難防止)

手 .. 稲妻のシルバーバックラー [1, 4]

指 .. 輝く鱗の装飾の指輪：（器用維持，火炎耐性＊）  
 指 .. ☆美しき装飾の指輪『世界をすべる霧』－1：（感覚維持，  
 幻惑耐性＊，運勢＋1，器用＋2，レポート妨害）  
 腕 .. 鉛の厚箆手「0，4」  
 腰 .. 鱗の腰当「2，2」：（火炎耐性「＊」）  
 足 .. ☆祝福された気高き合成靴『母は瞳』「0，4」：（ロミア  
 スの遺品，魔力維持，筋力維持，大工「＊」，電撃耐性「＊」，運  
 勢＋5）  
 遠隔・・★《異形の森の弓》：（ロミアスの遺品，酸で無傷，不燃，  
 レア，異次元の手「＊＊＊」，毒追加攻撃「＊＊＊」，感覚維持，  
 器用維持，詠唱「＊」，毒耐性「＊＊＊」，器用＋10）  
 矢 .. ☆儚き矢束（1d8）（3）：（時止弾x4，炸裂弾x10，  
 運勢＋3）

# ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv8. 129 ↓ Lv8. 394  
 重量挙げ Lv7. 941 ↓ Lv9. 365  
 両手持ち Lv3. 360  
 治癒 Lv12. 231 ↓ Lv13. 712  
 盾 Lv10. 290 ↓ Lv10. 821  
 重装備 Lv6. 005  
 中装備 Lv5. 652 ↓ Lv6. 011  
 鍵開け Lv1. 953 ↓ Lv2. 141  
 二刀流 Lv4. 000  
 軽装備 Lv5. 429  
 回避 Lv9. 076 ↓ Lv9. 441  
 隠密 Lv9. 217 ↓ Lv10. 139  
 釣り Lv5. 896 ↓ Lv6. 132  
 読書 Lv2. 510 ↓ Lv5. 886  
 遺伝子学 Lv1. 000 ↑ New

|         |              |     |        |
|---------|--------------|-----|--------|
| 料理      | Lv1.         | 263 | ↑New   |
| 信仰      | Lv9.         | 637 | ↓Lv10. |
| 旅歩き     | Lv10.        | 653 | ↓Lv11. |
| 瞑想      | Lv10.        | 626 | ↓Lv11. |
| 詠唱      | Lv4.         | 012 |        |
| 魔道具     | Lv3.         | 131 | ↓Lv3.  |
| 交渉      | Lv14.        | 866 | ↓Lv16. |
| ◆武器の専門  |              |     |        |
| 長剣      | Lv4.         | 719 |        |
| 斧       | Lv4.         | 000 |        |
| 格闘      | Lv7.         | 134 |        |
| 鎌       | Lv4.         | 000 |        |
| 鈍器      | Lv4.         | 000 |        |
| 槍       | Lv4.         | 404 |        |
| 杖       | Lv4.         | 018 |        |
| 短剣      | Lv5.         | 655 | ↓Lv5.  |
| 弓       | Lv8.         | 852 | ↓Lv9.  |
| クロスボウ   | Lv4.         | 000 |        |
| 投擲      | Lv7.         | 371 |        |
| 銃器      | Lv4.         | 000 |        |
| ◆耐性と抵抗力 |              |     |        |
| 火炎耐性    | 弱い耐性***      |     |        |
| 冷気耐性    | 耐性なし         |     |        |
| 電撃耐性    | 素晴らしい体制***** |     |        |
| 暗黒耐性    | 弱い耐性**       |     |        |
| 幻惑耐性    | 耐性なし*        |     |        |
| 毒耐性     | 強い耐性****     |     |        |
| 地獄耐性    | 耐性なし         |     |        |
| 音耐性     | 素晴らしい耐性***** |     |        |
| 神経耐性    | 耐性なし         |     |        |

混沌耐性 耐性なし  
魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

あなたの装備は神が発する電波をキャッチする

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備はレポートを妨害する

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性

職業…戦士

Lv6

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100（100）――

マナ 80（80）――

狂気度 0――

速度 114（96）+10（+0）

現在値 前回比

筋力…29（22）+7（+0）

耐久…30（23）+7（+0）

器用…16（10）+6（+0）

感覚…12（7）+5（+0）

習得…24（18）+6（+0）

意思.. 19 (13) +6 (+0)  
 魔力.. 20 (14) +6 (+0)  
 魅力.. 17 (11) +6 (+0)

# 装備

頭 .. 硝子の羽帽子「5, 0」  
 首 .. 鉄塊と呼ばれる結婚首輪『母殺しの純白』：(不燃, 宝石細工\*, 自然鑑定\*, 解剖\*, 火炎耐性\*, 運勢+7)  
 背中.. 異形の革の軽外套「4, 1」：(回避\*, 読書\*\*\*)  
 胴体.. 白銀の厚鎧「4, 18」：(不燃, 暗黒耐性\*\*\*)  
 利手.. 硝子の大鎌-1 (1d14) (4)：(貫通5%, 首狩り\*\*\*, 速度+4)  
 手 .. シルバーバックラー「1, 3」：(不燃, 暗黒耐性\*)  
 指 .. シルバーデコレートリング：(不燃, 暗黒耐性\*)  
 指 .. 祝福された布の装飾指輪  
 腕 .. 鱗の軽手袋 (3, 0) 「2, 2」：(火炎耐性\*)  
 腰 .. 鉄鎖の腰当「3, 3」  
 足 .. シルクヘビーブーツ：(幻惑耐性\*)  
 遠隔.. シルバーロングボウ (2d6+2) (3)：(暗黒耐性\*)  
 矢 .. 鉄の矢束 (1d8) (1)

# ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv12. 054 ↓ Lv12. 216  
 両手持ち Lv6. 156  
 治癒 Lv10. 052 ↓ Lv10. 144  
 盾 Lv14. 776 ↓ Lv14. 944  
 重装備 Lv9. 398  
 中装備 Lv9. 973 ↓ Lv10. 200  
 軽装備 Lv4. 206

|         |                 |   |                 |
|---------|-----------------|---|-----------------|
| 回避      | L v 1 5 . 0 3 7 | ↓ | L v 1 5 . 0 6 1 |
| 隠密      | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 信仰      | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 瞑想      | L v 7 . 1 3 0   | ↓ | L v 7 . 1 8 0   |
| 交渉      | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |
| 投資      | L v 2 . 0 0 0   |   |                 |
| ◆武器の専門  |                 |   |                 |
| 長剣      | L v 1 0 . 5 3 1 |   |                 |
| 斧       | L v 1 0 . 0 0 0 |   |                 |
| 格闘      | L v 6 . 0 0 0   |   |                 |
| 鎌       | L v 1 4 . 1 4 1 | ↓ | L v 1 4 . 2 4 0 |
| 鈍器      | L v 1 0 . 2 9 9 |   |                 |
| 槍       | L v 8 . 0 0 0   |   |                 |
| 杖       | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 短剣      | L v 8 . 0 1 2   |   |                 |
| 弓       | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| クロスボウ   | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 投擲      | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| ◆耐性と抵抗力 |                 |   |                 |
| 火炎耐性    | 耐性なし＊           |   |                 |
| 冷氣耐性    | 耐性なし            |   |                 |
| 電撃耐性    | 耐性なし            |   |                 |
| 暗黒耐性    | 弱い耐性＊ ＊ ＊ ＊ ＊   |   |                 |
| 幻惑耐性    | 耐性なし＊           |   |                 |
| 毒耐性     | 耐性なし            |   |                 |
| 地獄耐性    | 耐性なし            |   |                 |
| 音耐性     | 耐性なし            |   |                 |
| 神経耐性    | 耐性なし            |   |                 |
| 混沌耐性    | 耐性なし            |   |                 |
| 魔法耐性    | 耐性なし            |   |                 |



LV11..新米旅行者とロリっ娘と 将来への展望と炎上したナニカ

2  
4  
1  
日  
日

「そういや、エリーって何歳なんだろうな？ 生理って言うのは早い人は小学校高学年ぐらいであるらしいし、遅い人は高校生ぐらいで初めてくるらしい。」

あの時の癒し手の話しぶりだと、どうやらあの時のが初めてだったらしい。

で、だ。そうなるとうりーの年齢って12, 13ぐらいだと思ってただけど、どうやら僅かに外れて14歳だったらしい。

身長は見た感じ俺より20センチぐらい小さいから150幾つかか？  
体重は……まあ考えるのはやめておこう。レディの体重を気にして  
ると後ろから鎌で頸を刈られても文句は言えないに違いない。

[illegible]

エリーが復歸して暫くするまえにススムはある重大な事実を思い出した。

「また税金払い忘れた！」

税金滞納3ヶ月目であり、4枚溜まってお尋ね者にリーチがかかった状態だ。

旅の再開は始めからグダグダだった。

さて、それからの行動は有体に言えばいつものどおりの護衛と配送依頼を引き受けてノースティリスを駆け巡って居る状態だ。

幸いにもモンスターの襲撃はあれど盗賊団からの襲撃は無かった。

パルミアからヨウインへ、ヨウインからダルフィへ、ダルフィからポートカプールへと移動して歩く。

「ぷはー、流石に慣れてきたけど歩き詰めつてのは結構疲れるよなあ」

「……ですが、馬を飼う余裕はありませんし我慢するしかないと思います」

「だよなあ……」

既にお約束となりつつある移動方法への愚痴、特にポート・カプールやルミエスト、そしてノイエルに行った時にススムは良く口に出している。

「今回は廃品回収でクズ石を水夫のオルファーに渡せば良いんだっただよな」

「……はい。水夫達にオルファー氏の居場所を聞いてお届けするのが確実かと思っています」

「んじゃ、そうするか」

そうして無事に配送依頼を終えると、ススムは妙に持て余してしまつたことに気付く。

「うーん、流石に即日で街を出るのもしんどいんだよなあ……」

「……では、魔法書を読まれてはいいかがですか？あそこの噴水に腰掛けながら、と言うのはどうでしょう？」

「ふむ、まあ良いかな？」

そうしてススムは広場にある噴水の縁に腰を掛けて、軽傷治癒の魔

法書を読み始める。

エリーは何時の間にかススムの隣に腰掛けてそして気付けばうとうととしていた。

「エリー、眠かったら俺の方に倒れこんでも良いぞ」

「…………ふあい」

凄く眠そうな返事をしてエリーはススムの太ももに頭を落とした。

「…………まあいっか」

ほんの僅かに呟いて、本に目を戻す。

「（男が女に膝枕って逆だったら俺としちゃ理想的なんだけどなー）」

そんな雑念を混ぜながら魔法書を読み解き続けていると、不意に噴水から少し離れた位置を囲むように空間が歪み始めた。

「「！」」

その瞬間、ススムの雑念もエリーの眠気も吹き飛んだ。

「エリー、逃げるぞ！なんかヤバイ！！」

「は、はい！！」

空間が歪んでその先から現れたのは巨大な赤いトカゲだった。

「ふぁ、ファイアドレイクだー！！！！」

広場に居た誰かが叫んだ。

「ひ、ひいいい！誰かお助けおー！」

二人は続々と現れるモンスターを尻目に逃げ出した。  
テレポートの杖まで使って。

そして住宅街側のマーケットに転移して、そこから川を挟んで向こう、噴水広場の様子が見えた。

真っ赤に燃えていた。

炎が吹き荒れ、銃声と悲鳴と怒号が響き渡っていた。

「街が……オレ達の町が燃えている……」

近くに居た男性が呆然と呟いた。

「……嫌な、事件だったね」

「……それじゃあ次の街に行きましようか」

二人は自分たちは関係ないとばかりに逃げ出した。

この事態の收拾も付けられないし責任も取れないから。

勇気がないとも言えるし、名乗り出て殺されるのはカンベン、ともいえる。

「強く、強くなろうなエリー！腕っ節だけじゃなくて経済的にも社会的にも！」

「……はい！」

せめて、ファイアドレイクやライオンの群れに勝てる程度に強くな

りたい、と二人は思うのだった。  
後、なんでもお金で解決できる資産力とかコネとか欲しいな、ともススムは思った。

数日後、補給も終えないまま逃げ出した二人は食料が尽きた為、仕方無しにダルフィに向かい食料の買出しに走る。

その途中で依然『世話になった女性』に出会うがそこはそれ、向こうも商売なので商売用の笑みを浮かべて軽く誘う程度だ。  
ススムは相棒がいるから見栄を張って軽く挨拶して誘いを断る。

「……ご主人様、今の女は？」

とはいえ、流石に見透かされたように詰めたい声でエリーが問いかける。

「以前、世話になったんだよ。ほら、エリーが怪我して旅に出られなかった時期だ。」

ちよいと腐ったモン食べて腹を壊して往生してた所を助けてもらったんだ」

「……腐ったものを食べたのですか？」

「……見た目は平気だったんだよ、ただ中身が……な」

ちなみに、この話は時期と助けがなかった事キッチンと話せば事実だ。

「おかげで今ではこんなにスリム」

スリム、と言うよりは今のススムの体格はガリガリである。

以前よりも身体能力は確かに伸びたが、腐ったものを食べて吐いて下痢してくたばりかけて肌も血の気が引いているのか白くなって見

た目はかなり体調が悪そうだ。  
それを気にしたエリーはススムにしっかりとした休息を取るよう  
に進言する。

「……そうだなあ、言われてみると確かに時々つらいんだよな。な  
んかこう貧血っぽいと言うか」

「……しばらく静かな所で休まれてはいかがでしょうか？ パルミア  
の辺りならば色々揃っていると思いますが」

ススムは少し考えてからそうだな、と頷いてパルミアへ向かうこと  
となった。

パルミアについて一日目、ススムはここで普段世話になる宿で今回  
は少し長めに世話になると店主に言ってその日の宿を取った。

「さて、仕事をしないで暫くぐーたらしておくか」

「ぐーたら……」

ぐーたらすると言う言葉にエリーはほんの一瞬眉を顰める。

そうして散歩をしていると、ススムはそういえば近くに倉庫があっ  
たなと思い出す。

「倉庫には迷宮<sup>ネフィア</sup>で手に入れた物品が結構いっぱいあったよな」

「……そうですね。ここに来る途中でついでに攻略したネフィアの  
物品も置いて行かなければなりませんし、行きますか？」

「行こう行こう。ヨウインに寄った時にモノの鑑定の仕方の基礎を  
教わったんだ。丁度試したかったんだよ」

そうしてパルミア北西に建てた倉庫までやってきたススム。

「いやあ、やっぱ武具っていいよなあ」

「そうですね……どれも個性があり歴史もあります、凄く……いいです」

二人は妙に息のあった調子で荷物を広げ、更に武具を適当に置いて眺める。

格好のいい鎧からダサイ服まで。

凄そうな剣から小石まで、ありとあらゆる種類の武具があった。

「これだけあると、店とか開けそうだよな」

「お店、ですか？」

「ああ、まあ商売なんてしたこと無いからアレだけど……結構やれそうな感じしないか？」

「そうですね……戦う事も旅する事も出来なくなったら、そういうのも理想かもしれません」

そんなことを話しながら二人は手近にある武具を手取る。

「見てくれよこの剣。輝き、色つきからして間違いなくブロンズ製じゃないか？」

「青銅ですね。それになんとか不思議な力を感じます……」

「うーん……なんだろうな、この感覚……少し覚えがあるな。あ、思い出した！神々の休戦地の雰囲気になんか似てるのか！………ってことはこれ、祝福されているかな？」

「こっちの靴なんてどうでしょう？シルクのふりふりが着いてます……可愛いです」

「アー……けどそれ、なんかいやあな感じするぞ？多分呪われてるんじゃないか？」

武器を始め数多くの品々。

それを二人はああだこうだいいながら眺め、手に取りながら数日かけて羽を休めた。

休みを切り上げた理由は単純で、もう倉庫に残っている武具は見終わったからだ。

「さあて、バリバリ働くぞ！」

「そして新しい武具を手に入れましょう！」

この二人、既に国から依頼されたレシマス攻略は頭に残っていないようである。

しかしそれも仕方の無いことだろう、レシマスで『殺された』という事実はススムにとってトラウマとなっている。

あそこだけは絶対近寄るもんか！と口にはしないが常に思うぐらいに嫌ってしまったのだ。

それに元々国からの依頼とは言っても冒険者一年生であるススムに国もそこまでの期待はしていないという現実がある。

事実、ススム以外にも名のある冒険者が同様の依頼を受けてはレシマスに挑み……そして命からがら逃げ帰って病院送りというのは冒険者の間では割りと有名な話だった。

「ご主人様、ヨウインへの護衛依頼と配送依頼、ヴェルニースへの護衛依頼もありました」

「よし、それ全部受けて稼ぐぞ！」

「はい！」

そうして毎度お馴染みの配送&護衛依頼。

時に急患も送り届けて一気に荒稼ぎをする二人。

しかし、流石に全然戦わない状態が続くと腕が鈍ると思って居た。

「……ご主人様、この依頼、どうでしょうか？」



「★二つの森の浄化依頼かあ……まあ、なんとかなるか？」

そう思ったのが運の尽き。

辿り着いた先に居るのは星ひとつ分判定間違っていないかと思う強さの敵が集まる森だった。

「ちよちよ！ブレスとか魔法使う奴多すぎ！」

「逃げましょう、ご主人様！」

一目散に逃げようとするも、大量の魔法の矢とブレスの放射が迫る。主にススムへ。

そうしてススムは焼かれ砕かれ弾けとんだ。

「魔法怖い魔法怖い魔法怖い……」

見事に今度は魔法に対するトラウマを植えつけられてしまったススム。

その姿にエリーは同情しつつもため息をついた。

「ご主人様、一度ヴェルニースに戻りましょう。あそこにも倉庫がありますからまたのんびりと武具を眺めて過ごしましょう」

「あ、ああそうしよう！」

そして再び武具を愛でる日々に没入するかと思えばそうでもなかつ

た。

「しまった、受けたまま忘れてた配送が後半日でタイムリミットだ！！！！」

「急ぎましょう！」

なんだかんだで落ち込んでいる暇も無い二人は急いでヴェルニースに向かい、配送先の相手を時間ギリギリで見つけることに成功した。そして今度こそ一息つこうと重い、ススムがエリーに声をかけようとする、逆にエリーからススムに声がかかった。

「……ご主人様、少々所用が出来ました。何日か留守にしたいのですがよろしいでしょうか？」

「へ？ いや……構わないけどどうかしたのか？？」

「……野暮用というものです。用が済めばすぐに戻ります」

何時になく決意に満ちた目でエリーはススムを見た。

「……わかった。まあ何をするかは知らないけど危険なことだけはするなよ？」

「……はい」

Side Elysi on

私が今回ご主人様から離れた理由はひどく単純だ。

「新たな、力が必要です」

そう、力である。

以前、遺伝子複合機を使用した際、私は確かに力を得た。だが、まだまだ足りない。

私自身を護るためにも、ご主人様を護るためにも、力が足りないのだ。

「だから、私の力となってもらいます。貴方達は死ぬわけではありません。私の血となり肉となり、生き続けるのです」

「い、いやだ、やめてくれ！アタシはまだ死にたく……」

「さあ、一つになりましょう……」

「いやだあああああああ！！！！」

ああ、新たな力が流れ込んでくる。

ああ……ああ……あああああああ！！！！

# Lv11…新米旅行者とロリっ娘と 将来への展望と炎上したナニカ（後書き）

と、いうわけでエリーが外道な感じに強くなっていますね。  
ススムとの実力差は歴然とした感じで出ていますね。

おかしいな、主人公の方が強くて俺TUEEEE！したかったはず  
なのに。

名前…ススム（石動進）

種族…神の化身（現代日本人）

性別…男性

職業…観光客

信仰…癒しのジュア

Lv10 ↓ Lv11

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90（90） — —

マナ 150（150） — —

狂気度 0 — —

速度 115（100） — —

名声 4480 +1061

カルマ 20 +4

現在値 前回比

筋力…21（15）＊ +2（+2）

耐久…25（16） +2（+2）

器用…34（13）＊ +1（+1）

感覚…19（13）＊ +2（+2）

習得…16（11） +3（+3）

意思.. 15 (8) +3 (+2)  
魔力.. 17 (11) \* +3 (+3)  
魅力.. 12 (7) +7 (+2)

## 装備

頭 .. オブシディアンヘルム「2, 6」: (火炎耐性\*)  
首 .. ☆《謎の貝》「2, 14」: (信仰\*\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*\*\*, 運勢+3, 神電波受信)  
背中.. 烈火の皮の軽外套「4, 2」: (感覚維持, 交渉\*\*),  
火炎耐性[\*\*]  
胴体.. 白銀の厚鎧+1「5, 18」: (暗黒耐性[\*\*])  
利手.. ☆逆鱗に触れし海賊刀《夢を追う月》+1 (3d5\*1) (16) 「2, 0」: (中装備\*, 重装備\*, 隠密\*, 交渉\*, 遺伝子学\*, 火炎耐性\*, 盗難防止)  
手 .. ミスリルバックラー「5, 6」: (不燃, 耐酸, 詠唱\*)  
指 .. 輝く鱗の装飾の指輪: (器用維持, 火炎耐性\*)  
指 .. ☆美しき装飾の指輪『世界をすべる霧』-1: (感覚維持, 幻惑耐性\*, 運勢+1, 器用+2, テレポート妨害)  
腕 .. 白銀の軽手袋 (4, 0) 「3, 3」: (暗黒\*\*)  
腰 .. ミスリルガードル「5, 4」: (不燃, 耐酸, 詠唱\*)  
足 .. ☆祝福された気高き合成靴『母は瞳』「0, 4」: (ロミアスの遺品, 魔力維持, 筋力維持, 大工[\*], 電撃耐性[\*], 運勢+5)  
遠隔.. ★《異形の森の弓》: (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃, レア, 異次元の手[\*\*\*], 毒追加攻撃[\*\*\*\*], 感覚維持, 器用維持, 詠唱[\*], 毒耐性[\*\*\*\*], 器用+10)  
矢 .. ☆儚き矢束 (1d8) (3): (時止弾x4, 炸裂弾x10, 運勢+3)

◆スキルと特殊能力

戦術 Lv8. 394 ↓ Lv9. 462

重量挙げ Lv9. 365 ↓ Lv10. 930

両手持ち Lv3. 360

治癒 Lv13. 712 ↓ Lv15. 722

盾 Lv10. 821 ↓ Lv11. 641

重装備 Lv6. 005

中装備 Lv6. 011 ↓ Lv6. 256

鍵開け Lv2. 141 ↓ Lv2. 239

二刀流 Lv4. 000

軽装備 Lv5. 429

回避 Lv9. 441 ↓ Lv10. 919

隠密 Lv10. 139 ↓ Lv10. 964

釣り Lv6. 132 ↓ Lv6. 169

読書 Lv5. 886 ↓ Lv7. 996

遺伝子学 Lv1. 000 ↓ Lv4. 550

料理 Lv1. 263 ↓ Lv1. 387

信仰 Lv10. 827 ↓ Lv13. 267

旅歩き Lv11. 362 ↓ Lv12. 269

瞑想 Lv11. 816 ↓ Lv12. 409

詠唱 Lv4. 012

魔道具 Lv3. 839 ↓ Lv4. 157

交渉 Lv16. 520 ↓ Lv17. 176

◆武器の専門

長剣 Lv4. 719

斧 Lv4. 000

格闘 Lv7. 134

鎌 Lv4. 000

鈍器 Lv4. 000

槍 Lv4. 404

杖 Lv4. 018

短剣 Lv5. 953 ↓ Lv6. 506

弓 Lv9. 111 ↓ Lv9. 832

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv7. 371

銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 普通の耐性\*\*\*

冷氣耐性 弱い耐性\*\*

電撃耐性 耐性なし\*

暗黒耐性 普通の耐性\*\*\*

幻惑耐性 耐性なし\*

毒耐性 強い耐性\*\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*\*++

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 弱い耐性\*\*

魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

あなたの装備は神が発する電波をキャッチする

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備はテレポートを妨害する

名前..エリー(エリュシオン)

種族..ローラン

性別..女性

職業..戦士

Lv6

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) - -

マナ 80 (80) - -

狂気度 0 - -

速度 114 (96) +10 (+0)

現在値 前回比

筋力..29 (22) +7 (+0)

耐久..30 (23) +7 (+0)

器用..16 (10) +6 (+0)

感覚..12 (7) +5 (+0)

習得..24 (18) +6 (+0)

意思..19 (13) +6 (+0)

魔力..20 (14) +6 (+0)

魅力..17 (11) +6 (+0)

## 装備

頭 ..硝子の羽帽子「5, 0」

首 ..鉄塊と呼ばれる結婚首輪『母殺しの純白』:(不燃, 宝石細工\*\*\*, 自然鑑定\*, 解剖\*, 火炎耐性\*, 運勢+7)

背中..異形の革の軽外套「4, 1」:(回避\*, 読書\*\*\*)

胴体..白銀の厚鎧「4, 18」:(不燃, 暗黒耐性\*\*\*)

利手..硝子の大鎌-1(1d14)(4):(貫通5%, 首狩り\*\*\*, 速度+4)



手 .. シルバーバックラー「1, 3」: (不燃, 暗黒耐性\*)  
 指 .. シルバーデコレートリング: (不燃, 暗黒耐性\*)  
 指 .. 祝福された布の装飾指輪  
 腕 .. 鱗の軽手袋 (3, 0) 「2, 2」: (火炎耐性\*)  
 腰 .. 鉄鎖の腰当「3, 3」  
 足 .. シルクヘビーブーツ: (幻惑耐性\*)  
 遠隔 .. シルバーロングボウ (2d6+2) (3): (暗黒耐性\*)  
 矢 .. 鉄の矢束 (1d8) (1)

◆スキルと特殊能力

戦術 Lv12. 054 ↓ Lv12. 216  
 両手持ち Lv6. 156  
 治癒 Lv10. 052 ↓ Lv10. 144  
 盾 Lv14. 776 ↓ Lv14. 944  
 重装備 Lv9. 398  
 中装備 Lv9. 973 ↓ Lv10. 200  
 軽装備 Lv4. 206  
 回避 Lv15. 037 ↓ Lv15. 061  
 隠密 Lv4. 000  
 信仰 Lv4. 000  
 瞑想 Lv7. 130 ↓ Lv7. 180  
 交渉 Lv1. 000  
 投資 Lv2. 000  
 ◆武器の専門  
 長剣 Lv10. 531  
 斧 Lv10. 000  
 格闘 Lv6. 000  
 鎌 Lv14. 141 ↓ Lv14. 240  
 鈍器 Lv10. 299  
 槍 Lv8. 000

|         |         |       |
|---------|---------|-------|
| 杖       | L v 4.  | 0 0 0 |
| 短剣      | L v 8.  | 0 1 2 |
| 弓       | L v 4.  | 0 0 0 |
| クロスボウ   | L v 4.  | 0 0 0 |
| 投擲      | L v 4.  | 0 0 0 |
| ◆耐性と抵抗力 |         |       |
| 火炎耐性    | 耐性なし*   |       |
| 冷氣耐性    | 耐性なし    |       |
| 電撃耐性    | 耐性なし    |       |
| 暗黒耐性    | 弱い耐性*** |       |
| 幻惑耐性    | 耐性なし*   |       |
| 毒耐性     | 耐性なし    |       |
| 地獄耐性    | 耐性なし    |       |
| 音耐性     | 耐性なし    |       |
| 神経耐性    | 耐性なし    |       |
| 混沌耐性    | 耐性なし    |       |
| 魔法耐性    | 耐性なし    |       |

**L v 1 2 .. 新米旅行者とロリっ娘と ある意味最強の武器 参上 (前書き)**

あの武器はやっぱり反則デスヨネー

そういえばFF14ははじめました。

友人と一緒にフィガロの砂漠都市でプレイしてます。

……こっちは流石にリプレイ日記はやりませんしやれません。  
時間足りせん、どう考えても。



「（そういえば、エリーが最近更にスゴイよなあ）」

エリーが用事で出かけてから戻ってくるまでの所要日数がおおよそ7日間。

なにをどうしたのかは不明だが、エリーはますます戦闘力を増しているように見えた。

一撃必殺、というわけでもないが首狩りも含めて殲滅力が一週間で上がりすぎている状態だった。

どんな特訓をすればあそこまで一気に強くなれるのだろうか？

それともアレか、新しい戦術とか技を閃いた、とか？

技を閃くと電球がピッカーンと光るゲームみたいに。

そう思った所でススムはふと思った。

「ゲームや漫画とかみたいに、カッコイイ技とかあったらイイよなあ」

そう思ってしまうが、現実是非情で隙だらけの大振りや構えが出鱈目の攻撃など出来るはずもない。

ゲームにありそうな魔法剣の魔法をつくろうなんて考えもなくも無いが、そうするより普通に元から魔法が掛かっている剣を探してきたほうが早いのが現実だ。

もっとも、その手の魔法剣は購入となると値段が非情に高いのでレアなのだけれど。

でも、男の子としては一度はそういう魔剣らしい魔剣を使ってみたもののなのだ。

多分、エリーも同じ事を考えているだろう。

なんて事を考えながらススムは鼻歌を歌いつつヨウインに入ってい

った。

ヨウインに入ってススムとエリーは別行動をとり始める。

寝る時に宿で合流する時と旅立つ前の買出し、それ以外は基本自由行動なのだ。

「ねーねー、冒険者さん冒険者さん！」

「ん？」

気が付くと足元に幼い少女が纏わりついていた。

ススムにとって凄く見覚えのある少女だ。

「おーグウェンか。ひさしぶり、元気してたか？」

「うん、元気してたよー」

無邪気に返事をする少女、グウェンは遊び相手になって欲しいのか、しきりにススムに旅の話をねだった。

ススムはどうせ暇だし、と思ってその求めに応じた。

「——ってな訳で、俺たち冒険者からしても、ましてや普通の人たちからしても無価値な『クズ石』だったんだがその人にとっては幼馴染との大事な友情の証だったって訳さ」

「へえ、そうなんだ」

ススムがそう言ってグウェンに依頼であった話をしていると、エリーが焦った様子（傍から見ると表情は分からない）でススムの所まですべてやってきた。

「ご主人様、一大事です！」

「わかった。グウェン、話はまた今度な」

「うん！」

二人は場所を移して宿の個室に向かう。

「で、何がどうしたんだよ、エリー」

「はい、実は……」

エリーはこの近辺でパルミアの見習い騎士が着ており、その見習い騎士がヨウインを出て暫くにしに行ったところにある山の洞窟でイークの群れを退治しに行ったのだが返り討ちにあい、重傷を負ってしまった、ということのススムに話した。

「イークの群れに……？イークって言うと、ちっこい人型のアレだよな時々自爆とかしたりするのもある」

「そう、そのイークです」

「けど、高々イークが群れてるぐらいじゃそこまで危険は無いような気がするんだけど？」

「そうなのですが……どうも様子がおかしいのです。倒しても倒しても倒しきれない、と」

「どういうことだ？マスター・イークが雑魚を呼びまくってるとか？」

マスター・イーク。

イーク種の中でも上位に位置するイークで魔法の矢っぱいのや同じイーク種を召喚する能力を持っている少々面倒な相手だ。

「分かりません。ですが一番大きな可能性はやはりそこかと……。見習い騎士の方からも報酬は出るので自分に代わりイーク達を討って欲しいと依頼されました」

「そうか……まあ相手はイークだし、なんとかなるだろ」

そうしてやってきた街道沿いの山の傍にあるイークの洞窟。  
その中で海賊刀を振り回しながら石動は言う。

「なんだ、大した敵はやっぱり出ないな」

「そうですね、イークの数が異常というぐらいで……コレぐらいならば直ぐに殲滅できそうですね」

そう思っていた時期が、ススムとエリーの二人にはあった。

そして、その油断や慢心は驚愕の事実を持って思い知らされることとなる。

既にマスター・イークを数匹倒しているので、どうせあと少しだろうと思って居たのだ。  
だが……。

「おい、エリー、ありやなんだ……？」

「……ッ?!」

洞窟の更に奥に居たほかのイークと異なり、衣装を身に纏ったイークが居た。

そいつが杖を振るうと、複数種類のイークが複数同時に呼び出される。

その中には、マスター・イークさえも含まれていた。

「「!」?」

二人が驚きを禁じえない中、そのイークのボスとも言える存在に存在を気取られてしまう。



「!!!!!!!!!!」

イークのボスが雄たけびを上げ、そして二人に向けて杖を向ける。その杖の先から黒い魔法の矢が飛び、ススムに突き刺さる。

「うおお!? 目がっ!?!」

「ご主人様!?!」

それが当たった瞬間、完全に目が見えなくなり戸惑うススム。

エリーはコレはいけないとばかりにススムの手を引っ張って後退する事となった。

ある程度後退すると、ススムの目も回復し、追っ手のイークを薙ぎ払いながら安全を確保していた。

「想定以上だな、アレは。まさか強烈な魔法の矢を使う上に、食らうと目が見えなくなるってドンだけ厄介だよ」

「……更に、数も着た時と同じかそれ以上に増えたようですね」

後退中に切り伏せたイークの数进行思い出してエリーが言うと、ススムはそうだな、と返す。

「一度ここを出て体勢を整えなおそう」

「わかりました」

そうして、更なる追っ手を振り払いつつも洞窟から逃げ出すことに成功した二人だが、手詰まり感は強くなるばかりだった。

「とりあえず、魔法の杖で何とかなるか試してみるか」  
「はい」

用意したのは雷と炎の魔法の杖。

剣や弓矢だけでだめなら魔法でどうだ、と言うわけだ。

だが。

「ちょ！増える数が早い上にボスに余り効いてねえ！？  
「っ？！」

若干の効果はあるが、そもそもボスがショートレポートで逃げ回るので効果は残念な物だった。

周囲を殆ど殲滅できたとしても、押し切れるほどの威力が無かったのだ。

「くそっ、もう一回行くぞ！」

「はい！」

「もう一回！」

「はい！」

「もう一回！」

「はい！」

と、何度も繰り返し挑戦する二人だったが、結局最終的には追い詰めるよりも追い詰められる状況に陥るばかりだった。

「だーっ！ちくしょう、うまくいかねー！！」

「……はあ」

二人揃ってヨウインの草原地帯でぐったりと仰向けに倒れこむ。

「完全に手詰まりですね……」

「ああ、残念だけど今の俺たちじゃ勝てねーな……。はあ、この辺りにいても鬱になるだけだ、パルミア辺りで気晴らしでもするか？」

「……良いアイディアです」

そうしてパルミアで気晴らしをしようと出向いて、なんとなくススムが武器屋に行った時にススムは運命とであった。それはこぶし大のサイズだった。投げるのに丁度良い大きさで、ごついそれは……。

「手榴弾だと!?!」

「おや、お客さん手榴弾の事をご存知で？」

「て、店主さん! コレって!?!」

「はは、落ち着いてくださいよお客さん」

そうしてススムは手榴弾こと手榴弾に関して店主に聞き出す事となった。

なんでも、ネフィアで極稀に拾われてくる武器で、鞆ほどの大きさのケースで拾われてくるらしい。

で、その鞆から手榴弾は無限に供給される、とか。

しかし、扱いが微妙に難しく使用者や味方を巻き込む事が多々あることから厄介な武器として認識されているのだそうだ。

ちなみに、コレを仕入れた理由が前回パルミアを訪れた際にススムがもっと武器を仕入れて欲しいと文句を言って『なら仕入れるから金をよこせ!』『くれてやるが役に立たなかったら放火すんぞ!』などという投資騒ぎがあったからだという。

「……もう、これしかねえ！コレ、買った！！」

そうして、結局パルミアで遊ぶことなく二人はまたイークの洞窟にとんぼ返りする事になったのだ。

「ご主人様、そんな玉で本当にどうにかなるのですか？」

「ふふん、コレでどうにもなら無かったら本気で諦めるだけだ！とりあえずエリーは巻き添え食らわせたくないからここで待機な」

「……はあ、わかりました。健闘を祈ります」

## Side Elysi on

不気味なくらい自信満々なご主人様は、結局私を置いて洞窟に潜っていつてしまった。

あの人は基本的に怖がりの部類だから勝機のある戦いじゃない人間だ。

だから理解できる、あの人は勝つ。

あの良く分からない玉を利用して。

しかし、もしもの場合もあるだろう。

こっそりと付いて行く分にはきつと文句は言われない。

そもそも、近接戦闘においてはご主人様を遥かに凌ぐ実力があるつもりだ。

最近は魔法や弓や銃で集中砲火を受けがちだが……。

それでも戦う実力はあるのだ。

そう思って洞窟を進むと強烈な爆発音が何度も発生し、私の鼓膜を強く刺激した。

何が起きているというの？！

ご主人様は大丈夫なの!?

そう思い、焦りを感じ先ほどよりもやや速度を上げて、行く道を塞ぐイーグ達の頸を斬り飛ばしながら進み、ようやくご主人様とご主人様に群がるイーグ達を見つけた。

「ひゃっはー! 汚物は吹き飛ばしてやんよー!」

その言葉と共に腰に詠えたあの玉を無限に収納してあるらしい鞆から玉を取り出してご主人様はイーグの群れに投げつける。

投擲、命中、閃光、大爆発。

私が理解できたのはそれだけだった。

大爆発が周囲のイーグも巻き込んで周辺を吹き飛ばし、更にはイーグのボスにさえ痛打を与えていた。

ボスはその事態と閃光と大音声で混乱を来たし、テレポートも召喚もまともに扱えなくなってしまう。

「ふはははは! 粉碎! 爆碎! 大喝采!」

ご主人様は更にそれを投げ続け、群がるイーグの四肢を吹き飛ばし、虐殺行為を続ける。

ああ、なるほど……私の認識が足りなかった、というべきなのだろう。

私は彼を上回る能力を持つ。これは確定的に明らか事実なのだ。だけど、彼は私を上回るセンスを持っている。

それは戦闘に限らない発想力の違い。

そしてもう一つ、重要な事実として彼はきっと虐殺を楽しめる人間なのだ。

そうでなければここまで一方的な殺しをあのような笑顔で実行できるはずが無い。

「トドメだ！死ねよやああああ！」

狂気に染まった笑み、だけど私はその笑みにお腹の奥がキュンと引き締まる感覚を覚えた。

頭がぼうつとする。ずっと見ていたくなる。

彼もまた私が求める『強さ』を持つ人間。

そしてあの武器もご主人様が武器屋に対し『投資』を行うという先見があったからこそ得られた物だ。

人とは違う発想力と先を見通す先見性、そしてそれらから結果を得られる『運』。

それらが私が持ちえず、ご主人様が持つ、強さ、実力。きっとそうに違いない。

私はイークのボスの四肢が、全身が粉微塵と吹き飛ぶのを見ながら私はご主人様への一層の忠誠と畏敬と、そして体に熱いナニカを感じていた。

## Lv12..新米旅行者とロリっ娘と ある意味最強の武器 参上(後書き)

と、いうわけで手榴弾無双でした。

実際、手榴弾は仲間がいないときには非常に便利な武器です。

手榴弾の追加攻撃が音攻撃なので大抵の敵は防御できませんし周囲にも被害が行くので威力は上記SSでも誇張してないと思います実際投げれば大抵の雑魚が消し飛びますんで。

では、いつものステシさらしです。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv10 ↓ Lv11

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 115 (100) ー ー

名声 4480 +1061

カルマ 20 +4

現在値 前回比

筋力..23 (17) \* +2 (+2)

耐久..27 (18) +2 (+2)

器用..31 (14) \* +7 (+1)

感覚… 2 1 (1 5) \* + 2 (+ 2)  
習得… 1 7 (1 2) + 1 (+ 1)  
意思… 1 7 (9) + 2 (+ 1)  
魔力… 1 8 (1 2) \* + 1 (+ 1)  
魅力… 1 4 (9) + 2 (+ 2)

## 装備

頭 … オブシディアンヘルム [2, 6] ∴ (火炎耐性\*)

首 … ☆《謎の貝》 [2, 1 4] ∴ (信仰\*\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*\*, 運勢+3, 神電波受信)

背中… 烈火の皮の軽外套 [4, 2] ∴ (感覚維持, 交渉 [\*\*], 火炎耐性 [\*\*])

胴体… 白銀の厚鎧+1 [5, 1 8] ∴ (暗黒耐性 [\*\*])

利手… ☆逆鱗に触れし海賊刀《夢を追う月》+1 (3 d 5 \* 1) (1 6) [2, 0] ∴ (中装備\*, 重装備\*\*, 隠密\*, 交渉\*, 遺伝子学\*, 火炎耐性\*, 盗難防止)

手 … ミスリルバックラー [5, 6] ∴ (不燃, 耐酸, 詠唱\*)

指 … 輝く鱗の装飾の指輪 ∴ (器用維持, 火炎耐性\*)

指 … ☆美しき装飾の指輪『世界をすべる霧』-1 ∴ (感覚維持, 幻惑耐性\*, 運勢+1, 器用+2, テレポート妨害)

腕 … 白銀の軽手袋 (4, 0) [3, 3] ∴ (暗黒\*\*)

腰 … ミスリルガードル [5, 4] ∴ (不燃, 耐酸, 詠唱\*)

足 … ☆祝福された気高き合成靴『母は瞳』 [0, 4] ∴ (ロミアスの遺品, 魔力維持, 筋力維持, 大工 [\*, 電撃耐性 [\*, 運勢+5])

遠隔… ★《異形の森の弓》 ∴ (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃, レア, 異次元の手 [\*\*\*], 毒追加攻撃 [\*\*\*], 感覚維持, 器用維持, 詠唱 [\*, 毒耐性 [\*\*\*], 器用+1 0)

矢 … ☆儚き矢束 (1 d 8) (3) ∴ (時止弾 x 4, 炸裂弾 x 1 0,



運勢＋3)

◆スキルと特殊能力

戦術 Lv9.462 ↓ Lv10.450

重量挙げ Lv10.930 ↓ Lv12.286

両手持ち Lv3.360

治癒 Lv15.722 ↓ Lv17.226

盾 Lv11.641 ↓ Lv12.148

重装備 Lv6.005

中装備 Lv6.256 ↓ Lv6.411

鍵開け Lv2.239 ↓ Lv3.046

二刀流 Lv4.000

軽装備 Lv5.429

回避 Lv10.919 ↓ Lv11.463

隠密 Lv10.964 ↓ Lv11.778

釣り Lv6.132 ↓ Lv6.169

読書 Lv7.996 ↓ Lv10.758

遺伝子学 Lv1.000 ↓ Lv4.550

料理 Lv1.387 ↓ Lv1.762

信仰 Lv13.267 ↓ Lv15.218

旅歩き Lv12.269 ↓ Lv13.065

瞑想 Lv12.409 ↓ Lv13.751

詠唱 Lv4.012 ↓ Lv4.166

魔道具 Lv4.157 ↓ Lv4.287

交渉 Lv17.176 ↓ Lv18.454

投資 Lv2.868 ↑New

◆武器の専門

長剣 Lv4.719

斧 Lv4.000

格闘 Lv7.134

鎌 Lv4. 000  
 鈍器 Lv4. 000  
 槍 Lv4. 404  
 杖 Lv4. 018  
 短剣 Lv6. 506 ↓ Lv6. 907  
 弓 Lv9. 111 ↓ Lv9. 832  
 クロスボウ Lv4. 000  
 投擲 Lv7. 371 ↓ Lv7. 606  
 銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 普通の耐性\*\*\*  
 冷氣耐性 弱い耐性\*\*  
 電撃耐性 耐性なし\*  
 暗黒耐性 普通の耐性\*\*\*  
 幻惑耐性 耐性なし\*  
 毒耐性 強い耐性\*\*\*  
 地獄耐性 耐性なし  
 音耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*\*++  
 神経耐性 耐性なし  
 混沌耐性 弱い耐性\*\*  
 魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

あなたの装備は神が発する電波をキャッチする

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする  
あなたの装備はテレポートを妨害する

ついでに手榴弾

ガラスの手榴弾(1d4)：(グレネード発動\*\*\*，速度+4)

名前..エリー(エリュシオン)

種族..ローラン

性別..女性

職業..戦士

Lv8

ステータス：カッコ内は元の値

|     | 現在値 | 前回比          |
|-----|-----|--------------|
| 生命力 | 100 | (100)――      |
| マナ  | 80  | (80)――       |
| 狂気度 | 0   | ――           |
| 速度  | 114 | (96) +10(+0) |

現在値 前回比

|      |    |      |          |
|------|----|------|----------|
| 筋力.. | 31 | (24) | +1(+1)   |
| 耐久.. | 32 | (25) | +1(+1)   |
| 器用.. | 17 | (11) | ――       |
| 感覚.. | 13 | (8)  | +1(+1)   |
| 習得.. | 24 | (18) | ――       |
| 意思.. | 30 | (23) | +10(+10) |
| 魔力.. | 31 | (24) | +1(+0)   |
| 魅力.. | 18 | (12) | +1(+1)   |

## 装備

頭 .. ミスリルヘルム「4, 6」: (詠唱\*)  
 首 .. 鉄塊と呼ばれる結婚首輪『母殺しの純白』: (不燃, 宝石細工\*, 自然鑑定\*, 解剖\*, 火炎耐性\*, 運勢+7)  
 背中 .. 異形の革の軽外套「4, 1」: (回避\*, 読書\*)  
 胴体 .. 白銀の厚鎧「4, 18」: (不燃, 暗黒耐性\*)  
 利手 .. ☆闇を砕く鎌『中毒者の末路』(2d6+6)(2): (貫通5%, 首狩り\*\*, 魅力維持, 器用維持, 見切り一\*, 心眼\*, 大工\*\*, 採掘\*, 鍵開け\*, 隠密\*\*, 暗黒耐性\*)  
 手 .. 稲妻のシルバークラーク「1, 4」: (不燃, 習得維持, 暗黒耐性\*, 電撃耐性\*\*\*)  
 指 .. シルバードコレートリング: (不燃, 暗黒耐性\*)  
 指 .. 祝福された布の装飾指輪  
 腕 .. 鱗の軽手袋(3, 0)「2, 2」: (火炎耐性\*)  
 腰 .. 鉄鎖の腰当「3, 3」  
 足 .. シルクヘビーブーツ: (幻惑耐性\*)  
 遠隔 .. シルバードロングボウ(2d6+2)(3): (暗黒耐性\*)  
 矢 .. 鉄の矢束(1d8)(1)

## ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv12・930 ↓ Lv13・764  
 両手持ち Lv6・156  
 治癒 Lv10・376 ↓ Lv11・916  
 盾 Lv15・694 ↓ Lv16・256  
 重装備 Lv9・398 ↓ Lv9・403  
 中装備 Lv10・607 ↓ Lv11・028  
 鍵開け Lv1・129 ↑ New  
 二刀流 Lv1・000  
 軽装備 Lv4・206

|       |                 |   |                 |
|-------|-----------------|---|-----------------|
| 回避    | L v 1 5 . 7 3 2 | ↓ | L v 1 5 . 8 7 4 |
| 隠密    | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 射撃    | L v 1 . 0 0 0   | ↓ | L v 1 . 0 2 0   |
| 読書    | L v 4 . 0 0 0   | ↓ | L v 4 . 0 3 6   |
| 暗記    | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |
| 錬金術   | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |
| 魔力の限界 | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |
| 信仰    | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 瞑想    | L v 7 . 1 9 5   | ↓ | L v 7 . 2 4 0   |
| 詠唱    | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |
| 魔道具   | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |
| 魔力制御  | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |
| 交渉    | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |
| 投資    | L v 2 . 0 0 0   |   |                 |
| 演奏    | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |

◆武器の専門

|       |                 |   |                 |
|-------|-----------------|---|-----------------|
| 長剣    | L v 1 0 . 5 3 1 |   |                 |
| 斧     | L v 1 0 . 0 0 0 |   |                 |
| 格闘    | L v 6 . 0 0 0   |   |                 |
| 鎌     | L v 1 5 . 4 9 2 | ↓ | L v 1 6 . 1 0 4 |
| 鈍器    | L v 1 0 . 2 9 9 |   |                 |
| 槍     | L v 8 . 0 0 0   |   |                 |
| 杖     | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 短剣    | L v 8 . 0 0 0   |   |                 |
| 弓     | L v 4 . 0 0 0   | ↓ | L v 4 . 0 1 8   |
| クロスボウ | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 投擲    | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 耐性なし\*

|      |              |
|------|--------------|
| 冷氣耐性 | 耐性なし         |
| 電撃耐性 | 素晴らしい耐性***** |
| 暗黒耐性 | 素晴らしい耐性***** |
| 幻惑耐性 | 耐性なし         |
| 毒耐性  | 耐性なし         |
| 地獄耐性 | 耐性なし         |
| 音耐性  | 耐性なし         |
| 神経耐性 | 耐性なし         |
| 混沌耐性 | 弱い耐性**       |
| 魔法耐性 | 耐性なし         |

LV13..新米旅行者とロリっ娘と 運命の鼓動・2

370日目

気が付いたらこちらに来てから一年を軽く通り過ぎていた。

前のイークの洞窟を浄化するのにあの後更に時間かかったからな、仕方ない。

だが、そのお陰で騎士見習い君からは謝礼として貴重な靴のあーてイファクトと札金を貰った。

……見習いの癖になんて気前のいい奴だ。

これは機会があつたらキッチンと礼をするべきだな。

それはともかく、ここいらでそろそろもう一度レシマスに挑んでみるのも良いかも知れない。

俺とエリーはあの時よりも更に強くなった。

実力を試す、その意味も込めて、行ってみようと思う。

[illegible]

レシマス第四層

以前に來た際に狩りつくしたせいか、ダンジョン内には巨大な（2メートルぐらいの）人型機動兵器がいたり他にも多くの冒険者がいたりしたが、特に詰まることなくここまで降りて來る事ができた。

「問題は、この先の部屋ですね」

「ああ……他の冒険者もここで魔法の連打を食らって沈んだらしい」

実際の所、ここで沈んだのは。ススムだけではなかったのだ。

他にも何人もの冒険者がここで血の海に沈んだという噂がヴェルニスでは流れて居た。

「GO！」

「はい！」

掛け声と共に駆け出す。

部屋の開けっ放しの扉の前まで来ると、またいつぞやの魔法の矢がススムめがけて飛んできた。

「ちいっ！！！」

それをススムは不恰好になりつつもミスリルバックラーで真っ向から受けきる。

「つゝゝッ！エリー！」

防いだ直後に即座に弓矢を射る。

でたらしめな牽制だが、相手はあたるかもしれない状況に動きが鈍る。

「その首級、貰ったッ！」

そこにエリーが飛び込み、大鎌を一閃二閃して両腕を斬り飛ばし。

「冥府に送ってくれるわっ！」

その頸を刎ね飛ばした。

ススムとエリー、二人のトラウマとなった敵は、余りに呆気なくその命の灯火をかき消されるのだった。



## レシマス第五層

戦闘で負ったわずかな傷を癒し、最善の状態で四層目を下ると、思わず二人は第三層まで駆け戻った。

「なんでエレアの戦士と魔術士があんなにいるんだよ!!」

エレアの戦士と魔術士、それはこの地方で『エーテルの風を出して  
るヴィンデルの森は悪だ!ならそこに住むエレアの民も悪だ!魔  
物だ!』という風潮があるが故に現在抗争状態にある敵性存在だ。  
勿論、彼らの全てが敵というわけではないが、多くのエレアの民と  
ノースティリスの民は現在敵対している状態、といえなくも無い。

「しょうがない……爆破するか」

思わずニヤリという悪い笑みを浮かべるススム、その手にはいつぞ  
やの手榴弾が収まって居た。

「エリー、お前は巻き込まれないように俺から離れすぎるなよ?」

「はい!」

そうして何時ぞやのイークを葬った時の様に一方的な爆殺劇が始ま  
る。

幾人かのエレアの戦士は接近さえすればと思えども、近づくものは  
全てエリーの手によって頸を刎ねられた。

遠くから魔法で援護しようとしたエレアの魔術師は、ススムが投げ  
た手榴弾で余さず全滅させられた。

その後も更に足を進めるのだが、二人の足は直ぐに止まる事になる。

「しまった、もう持ちきれない……つか、潰れる」

「……一度戻りますか？」

「そうしよう」

## レシマス第六層

荷物整理を終えて再び第一層からここまで潜ってきた二人だが、ヴェルニースから近いとはいえ半日近く消費してここまで来る道のりなので既にお疲れ気味の状態だ。

「なんつーか……ここ何層まであるんだ？」

「……最低でも16層の筈です」

その言葉に軽く絶望したススム。

まだ6層目ということは半分も進んでいないのだ。

「寝袋とか持ってきてくりゃ良かったか？」

「ネフィアで寝るのは度胸が居る行為ですが……ご主人様はかなり勇敢なようですね」

「はは、雑魚を皆殺しにした後ならぐっすり寝られるだろ」

疲労と眠気に襲われているススムはしんどそうに軽口を叩く。

「さて、次の階層に進もうか」

## レシマス第十五層

その後も、大量に持ち込んだ魔法の杖や自分達の技量を頼りに進んでは重量オーバーで帰還という行為を繰り返し、時には気晴らしと称して依頼でパルミアやヨウインに行っていた二人だが、なんと

か十五層まで辿り着くことに成功した。

「ふう、ここまで長かったなあ……」

「そうですね……既に十日以上挑み続けている計算になります」

間に挟んだ依頼や旅行がなければ丁度そのぐらいになるのである。  
そう考えると普段は一日の探索で終わられるネフィアの短さが際立ってくるという物だ。

感慨にふけりつつも降り立った部屋の警戒をしつつ扉を開く。

この階層の間取りは石畳の広間を中心に幾つかの部屋がある、というような感じの構成のようだった。

二人が身長に足を進めていくと、直ぐそばの石柱からモンスターが現れる。

「でかっ!？」

「氷系の樹木のモンスターです! かなり強いと聞いた事があります  
!」

「なら、燃やしてやりゃあいいのさ!」

そういつて戦おうとした所で更に奥から人魂のような敵や緑色の犬、  
更には魔法使いたちまでもが現れる。

「下がりながらやるぞ!」

「はい!」

下がりながら、時には魔法の杖で敵をレポートさせながら戦うことで、毒のブレスの連打、炎のブレスの連打、雷のブレスの連打を何とか堪え凌ぎ、敵の攻勢を凌ぎきって援軍が来る前に次の階段がある部屋へと逃げ込むことに成功した。

「さて、ようやく最後の階層に行けるな」

「はい、長かったで」

エリーの言葉が途中で轟音にかき消され、ススムは爆風に吹き飛ばされる。

「な、何が……エリー!?」

爆発から気を取り直したススムが見たのは吹き飛ばされ、壁に強く叩きつけられた上に四肢があらぬ方向に曲がり、今にも命の炎が消えかけた状態のエリーだった。

「……っ!」

直ぐに助けに行かなければと思ったが、それは直後に襲い掛かってきた丸い何かによって妨害される。

それは円盤型の何かを床に埋めながら行動するなどの敵だった。

「まさか、地雷!? くっそ、こんな罠使う奴が居たなんて!! とりあえず、死ねえ!」

始めてみる敵に警戒しつつも毒矢を連射し浴びせかける。

地雷を撒くその謎の物体はそれだけであっさりと倒すことに成功した。

だが、問題はその後である。

「くっそ、厄介だ!」

地雷を撒かれてどこにそれがあるかぱっとミでは分からない状態な

のだ。

今、下手に足を踏み入れば自分もエリーの二の舞となるだろう。

「くそ……落ち着けよ……」

何とか目を凝らし、周囲の安全を確保しつつエリーの所まで進むのにはそれなりに時間がかかった。

そして辿り着いて眉をひそめる。

重すぎる怪我を負っている状態のエリーは、手持ちの薬や杖では到底回復しきれない状態だ。

「……戻るしか、ないか」

ススムは気絶したエリーを抱き上げ、帰還の巻物を広げるのだった。

## Side Elysion

私が目を覚ましたのは、レシマスで気を失ってからおよそ二十日ほど日経ってからだった。

癒し手が言うには「あそこまで全身に重傷を負って尚四肢がくっついていたというのはからだが頑丈とか言うレベルでは無いわ。生命力が異常としか言い様が無い。丈夫な体に産んでくれたご両親と貴女を見守ってくださる神々に感謝をしておきなさい」と言われるほどの重傷だった。

今も両手両足にギプスが嵌り、全身包帯だらけで宿のベッドの上という状態だ。

宿の主人が言うにはご主人様は護衛や配送依頼を中心にいつも通りノースティリスを移動しているらしい。

だが、ここに私を預けて以降一度もヴェルニースには寄っていないと言う。

「ご主人様……やはり私は……」

レシマスの探索から30日目、私は退院を言い渡されヴェルニースの酒場でご主人様が来るのを待っていた。

「——！」

だが、ご主人様が来る気配は目覚めた日以降も無かった。  
もしかしたら、ご主人様はあの様な罠にかかる様なものなど、要らないと考えているのだろうか……。

「——！！！」

だから迎えに来てもらえないのだろうか……。

やはり、力だ……私には力が必要だ。

力がなければ、捨てられてしまう。

力がなければ、全て失ってしまう！

だから——

「あなたのちからを、ちょうだい？」

## Lv13…新米旅行者とロリっ娘と 運命の鼓動・2 (後書き)

死なないようにする為にひたすら苦勞しました。

なのにレシマス15層階段手前で地雷犬&地雷いっぱい。

正直、エリーが死……もとい戦闘不能になって泣きたくなりましたがな(´・ω・｀)

名前…ススム(石動進)

種族…神の化身(現代日本人)

性別…男性

職業…観光客

信仰…癒しのジュア

Lv10 ↓ Lv11

ステータス…カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 115 (100) +3 (+0)

名声 8859 +4079

カルマ 20

現在値 前回比

筋力…25 (19) \* +2 (+2)

耐久…26 (19) ー 1 (+1)

器用…42 (17) \* +11 (+3)

感覚…23 (17) \* +2 (+2)

習得…19 (13) +2 (+1)

意思.. 2 2 (1 1) + 5 (+ 2)  
魔力.. 1 8 (1 3) \* + 0 (+ 1)  
魅力.. 1 3 (1 1) - 1 (+ 2)

## 装備

頭 .. オブシディアンヘルム「2, 6」: (火炎耐性\*)  
首 .. ☆《謎の貝》「2, 14」: (信仰\*\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*\*, 運勢+3, 神電波受信)  
背中.. 烈火の皮の軽外套「4, 2」: (感覚維持, 交渉\*\*),  
火炎耐性[\*\*]

胴体.. 白銀の厚鎧+1「5, 18」: (暗黒耐性[\*\*])  
利手.. ☆逆鱗に触れし海賊刀《夢を追う月》+2 (3d5\*1) (1 6) 「2, 0」: (中装備\*, 重装備\*, 隠密\*, 交渉\*, 遺伝子学\*, 火炎耐性\*, 盗難防止)

手 .. ミスリルバックラー+1「5, 6」: (不燃, 耐酸, 詠唱\*)  
指 .. ☆気高き指輪『ボディーの妖しさ』: (習得維持, 旅歩き\*, 畏解体\*, 採掘\*, 電撃耐性\*)

指 .. 耐盲目の鉄の指輪: (不燃, 感覚維持, 火炎耐性\*, 盲目無効)

腕 .. 白銀の軽手袋 (4, 0) 「3, 3」: (暗黒\*\*)

腰 .. ミスリルガードル「5, 4」: (不燃, 耐酸, 詠唱\*)

足 .. ★《ダル||イ||サリオン》+1「16, 7」: (運勢維持, 旅歩き\*\*, 隠密\*, 器用+6, 呪い保護\*\*\*, MAP移動短縮\*\*)

遠隔.. ★《異形の森の弓》: (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃, レア, 異次元の手[\*\*\*], 毒追加攻撃[\*\*\*], 感覚維持, 器用維持, 詠唱[\*, 毒耐性[\*\*\*], 器用+10)

矢 .. ☆儚き矢束 (1d8) (3): (時止弾x4, 炸裂弾x10, 運勢+3)



◆スキルと特殊能力

戦術 Lv10. 450 ↓ Lv12. 231  
重量挙げ Lv12. 286 ↓ Lv13. 532  
両手持ち Lv3. 360

治癒 Lv17. 226 ↓ Lv18. 204  
盾 Lv12. 148 ↓ Lv13. 188

重装備 Lv6. 005

中装備 Lv6. 411 ↓ Lv6. 847

鍵開け Lv3. 046 ↓ Lv3. 679

二刀流 Lv4. 000

軽装備 Lv5. 429

回避 Lv11. 463 ↓ Lv13. 029

隠密 Lv11. 778 ↓ Lv13. 018

釣り Lv6. 169 ↓ Lv6. 376

読書 Lv10. 758 ↓ Lv12. 257

遺伝子学 Lv4. 550 ↓ Lv5. 802

料理 Lv1. 762 ↓ Lv2. 438

信仰 Lv15. 218 ↓ Lv16. 577

旅歩き Lv13. 065 ↓ Lv13. 996

瞑想 Lv13. 751 ↓ Lv14. 344

詠唱 Lv4. 166 ↓ Lv4. 254

魔道具 Lv4. 287 ↓ Lv6. 403

交渉 Lv18. 454 ↓ Lv19. 534

投資 Lv2. 868 ↓ Lv4. 605

投資 Lv2. 868 ↑ New

◆武器の専門

長剣 Lv4. 719

斧 Lv4. 000

格闘 Lv7. 134  
 鎌 Lv4. 000  
 鈍器 Lv4. 000  
 槍 Lv4. 404  
 杖 Lv4. 018  
 短剣 Lv6. 907 ↓ Lv8. 972  
 弓 Lv9. 832 ↓ Lv11. 527  
 クロスボウ Lv4. 000  
 投擲 Lv7. 606  
 銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 弱い耐性\*\*  
 冷氣耐性 弱い耐性\*\*  
 電撃耐性 弱い耐性\*\*  
 暗黒耐性 普通の耐性\*\*\*  
 幻惑耐性 耐性なし\*  
 毒耐性 強い耐性\*\*\*  
 地獄耐性 耐性 なし  
 音耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*\*+  
 神経耐性 耐性なし  
 混沌耐性 弱い耐性\*\*  
 魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

あなたの装備は神が発する電波をキャッチする

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備は盲目を無効にする

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性

職業…戦士

Lv8 ↓ Lv10

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100（100） — —

マナ 80（80） — —

狂気度 0 — —

速度 110（96） — 4（0）

現在値 前回比

筋力…32（25） +1（+1）

耐久…33（26） +1（+1）

器用…29（22） +12（+11）

感覚…14（9） +1（+1）

習得…24（18） — —

意思…41（33） +11（+10）

魔力…32（34） +11（+10）

魅力…19（13） +1（+1）

## 装備

頭 .. ミスリルヘルム「4, 6」: (詠唱\*)

首 .. 鉄塊と呼ばれる結婚首輪『母殺しの純白』: (不燃, 宝石細工\*, 自然鑑定\*, 解剖\*, 火炎耐性\*, 運勢+7)

背中 .. 異形の革の軽外套「4, 1」: (回避\*, 読書\*)

胴体 .. 白銀の厚鎧「4, 18」: (不燃, 暗黒耐性\*)

利手 .. ☆闇を砕く鎌『中毒者の末路』-1 (2d6+6) (2):

(貫通5%, 首狩り\*\*\*, 魅力維持, 器用維持, 見切り一\*, 心眼\*, 大工\*\*, 採掘\*, 鍵開け\*, 隠密\*\*\*, 暗黒耐性\*)

手 .. 稲妻のシルバーバックラー「1, 4」: (不燃, 習得維持, 暗黒耐性\*, 電撃耐性\*\*\*)

指 .. ☆美しき装飾の指輪『世界をすべる霧』-1: (感覚維持, 幻惑耐性\*, 運勢+1, 器用+2, テレポート妨害)

指 .. 祝福された睡眠防止の珊瑚の装飾指輪: (耐久維持, 電撃耐性\*\*, 睡眠無効)

腕 .. オブシディアンライトグローブ (3, 0) 「2, 3」: (混沌耐性\*\*)

腰 .. 鉄鎖の腰当「3, 3」

足 .. 祝福されたミスリルコンポジットブーツ: (不燃, 耐酸, 詠唱\*)

遠隔 .. シルバーロングボウ (2d6+2) (3): (暗黒耐性\*)  
矢 .. 鉄の矢束 (1d8) (1)

## ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv13. 764 ↓ Lv14. 821

両手持ち Lv6. 156

治癒 Lv11. 916 ↓ Lv12. 633

盾 Lv16. 256 ↓ Lv16. 931

重装備 Lv9. 403 ↓ Lv10. 330

中装備 Lv11. 028

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 鍵開け   | L v 1.   | 1 2 9 | ↓ | L v 1.   | 4 3 0 |
| 二刀流   | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 軽装備   | L v 4.   | 2 0 6 |   |          |       |
| 回避    | L v 1 5. | 8 7 4 | ↓ | L v 1 6. | 2 6 3 |
| 隠密    | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 射撃    | L v 1.   | 0 2 0 |   |          |       |
| 読書    | L v 4.   | 0 3 6 |   |          |       |
| 暗記    | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 錬金術   | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 魔力の限界 | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 信仰    | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 瞑想    | L v 7.   | 2 4 0 | ↓ | L v 7.   | 3 8 5 |
| 詠唱    | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 魔道具   | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 魔力制御  | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 交渉    | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 投資    | L v 2.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 演奏    | L v 1.   | 0 0 0 |   |          |       |

◆武器の専門

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 長剣    | L v 1 0. | 5 3 1 |   |          |       |
| 斧     | L v 1 0. | 0 0 0 |   |          |       |
| 格闘    | L v 6.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 鎌     | L v 1 6. | 1 0 4 | ↓ | L v 1 7. | 2 9 9 |
| 鈍器    | L v 1 0. | 2 9 9 |   |          |       |
| 槍     | L v 8.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 杖     | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 短剣    | L v 8.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 弓     | L v 4.   | 0 0 0 | ↓ | L v 4.   | 0 1 8 |
| クロスボウ | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |

投擲 Lv4・000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 耐性なし＊

冷氣耐性 耐性なし

電撃耐性 強い耐性＊＊＊＊＊

暗黒耐性 素晴らしい耐性＊＊＊＊＊

幻惑耐性 耐性なし

毒耐性 耐性なし

地獄耐性 耐性なし

音耐性 耐性なし

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 弱い耐性＊＊

魔法耐性 耐性なし

**LV14：旅行者と暴走するロリっ娘と 運命の鼓動・3十仲間が増える日（前**

タイトルを見て分かりますが、二人旅は流石に限界でした。

LV14..旅行者と暴走するロリっ娘と 運命の鼓動・3十仲間が増える日

440 日目

レシマス探索に失敗し、エリーが入院している間俺は方々を回って修行と新しい装備を探し回っていた。

修行はぼちぼちできていたのだけど、残念なことに新装備は良いのが見つからなかった。

あちろちろ見て回ったせいでエリーの退院には間に合わず、4日ぐらい過ぎてからようやく合流できた。

再開したとき、何となく様子がおかしかった様に見えたんだが、  
気のせいだろうか？

とりあえず、例の地雷原だけど、攻略法はある。

歩くのがダメなら、飛んでいけば良いじゃない。

[illegible]

レシマス第十五層

飛んでいけば良い、ススムがそう思った切欠は雑貨屋で売っている巨大な翼が原因だった。

傍目に見ればただの飾りにしか見えないのだが、この世界で元の世界の常識を当て嵌めてはいけない。

なんと、あれを背中に背負うだけで飛べる様になるのだ。しかも割りりと自由に。

唯一難点があるとすれば、高度はそれほど取れないということだろ



う。

とはいえ、浮遊状態にさえなってしまうえば悩むことは何も無い。

ススムはエリーにそう説明してノースティリスの各都市を回って安い翼を買い求めた。

そして難なく地雷原を突破するのだった。

レシマス第十六層

降りた先に居たのは、悪夢だった。

「——ムリポ」

思わずススムはそんなことを言ってエリーの手を握って十五層に駆け戻った。

「確かに、ドラゴン種2匹とその他にも脅威と思われる敵がいましたから……アレを相手取るのは無理がありますね」

そう、ドラゴンが二匹である。しかも示し合わせたかのように赤と青である。

今の二人には到底倒せそうに無い敵だった。

「加速のポーションとか使って一気に駆け抜けるか？直ぐ近くに階段あったし」

「そうですね、それが一番かと思います」

そうして二人は加速のポーションを飲み、ススムは更に英雄気分のポーションまで飲んで階段めがけて駆け抜けた。

## レシマス第十七層

命がけの短距離走に成功した二人は、階段を下りると直ぐ傍にローブを着た戦士風の男を発見した。

男の様子は今にも死に絶えそうであり、治療を施そうにも既に体の壊死が始まりつつあるので手遅れになった状態だった。

「…貴公は？」

「俺たちはパルミアのエステリアさんからの依頼でカラムさんを探しに来ました」

「そうか、エリステアが私を探すために……見ての通り私は傷を負い、もう動くことすら出来ぬ。しかし、貴公のお陰で今まで生きながらえたことに意味を見出せるようだ」

カラムはそう言って咳き込む。

咳には血が混じり、内臓も致命傷を負っている事が二人には理解できた。

「貴公にお願いする。エリステアに、私の言葉を伝えてもらいたい。信じがたいことだが、レシマスの奥深くに眠る秘宝を守護しているのは、今は亡きザシム王の従弟ゼームだ。秘宝の、いやレシマスの魔に操られているのだろうか。もはや生身の人間ではあるまい」

そこまで言ってカラムは一度息を整える。

「それだけではない。ザナンのサイモアが秘宝を狙っていることは知っておろう。しかし、その理由は？」

その言葉にススムもエリーも困惑する。

そもそも、ザナンのサイモアの名前が出るとは思わなかったし、更に言えば彼が秘宝を狙っていることも今初めて知ったのだ。

カラムは頷いて言葉を続ける。

「ゼームが持つ秘宝の名は《常闇の眼》。世界の真実を移すといわれている。レム・イドの終焉とシエラ・テールの始まりを説き、自身の説に莫大な支持を得ているサイモアが、今更秘法を求めるのは何故だ？」

ススムの頭は好い加減混乱してしまいそうだったが、何とか話を整理しつつ先を促す。

「サイモアの後押しにより、エレアとの戦が始まろうとしている。異形の森が<sup>メシエーラ</sup>レム・イドの災厄であるというのは、果たして確かなのだろうか。そして、もしサイモアの説が偽りであるとすれば、かの者の本当の目的は？…私には悪い予感がする」

ここまで来てようやくススムの知る単語が出てきた。

「（メシエーラ…：確かエーテルの風関連でこの単語が出てきたな。災厄の悪魔とかそんな感じだったか）」

カラムはススムの様子に伝えるべきことは伝えたと言い。

「私の役目はこれまでだ。この傷ではどうせ地上まで辿りつけまい。この報せを早く都に…貴公に運命の神の加護があらんことを！」

カラムは最後に叫ぶと何時の間にか手に持っていた短剣で自刃してしまう。

「な！？」

「！？」

二人はとめる事ができなかった。  
全ては一瞬であったから。

ススムは何とか助けることができないかとカラムの傷の様子を見るが……。

「……だめだ、この傷の深さじゃ手当てをしても間に合わない。それにそれ以前に負った傷で出血が酷過ぎる……」

良く見ればカラムの居た場所を中心に周囲が赤に染め上げられていた。

それは、カラムが出血状態でそれを止める事すら出来なかったと言う事を示す。

二人がカラムの看取って居た頃、パルミアの王城でも一つの事件が起きて居た。

ジャビ王の暗殺である。

犯人はエレアの民二人とダルフィの領主と噂されていた。

だが、そんな事はやはり今の二人は知るべくも無かった。

ヴェルニースに一度戻ることにしたススムとエリーは、ここで一度二手に分かれて行動することになった。

そろそろ二人旅に限界が来ていることを感じた二人はようやくというべきか、遂にメンバーを増やすことを決意したのだ。

ただ、増やす当てが丸で無いススムは、エリーが任せて欲しいというので言われるがままに任せることになったのだ。

その間、エリーはダルフィへ、ススムはパルミアへと向かうことになった。

パルミアにススムが辿り着いた頃、入れ替わりで逃げるようにザナの方面へ向かうグループが居たのだが、それに気付くことなくススムはパルミアへと足を踏み入れた。

「なんか、街が騒がしいな……」

街の様子がおかしい、と思いつつもススムは王城の図書館へと向かい、エスリステアの元へと急いだ。

「エリステアさん！」

「ススム！」

お互いに名前を呼び近づく。

そしてススムはカラムの事を報告しようとするが、その最期を語るうとして言葉に詰まってしまう。

「ススム、あなたの帰還を待っていました。カラムは無事に……」

エリステアに尋ねられ、思わず視線をさまよわせてしまう。

「いえ、その顔を見れば想像はつきます。私たちの救助は遅すぎたのですね……」

それは一重にススムの行動が遅すぎたというのと同じだ。そう思うと罪悪感に駆られずには居られない。

「……カラムの最期の言葉を伝えます」

「……お願いするわ」

そうしてススムはカラムが掴んだ情報とサイモアの疑惑を語る。

「……カラムの言葉、確かに受け取りました。《常闇の眼》という古宝の伝承は、私も本で読んだ事があります。それは、イルヴァの大地の上に築かれた全ての歴史の真相を網羅していると伝えられています。もしカラムが危惧しているように、ザナンのサイモアが自らの説の誤りを葬らんとするためレシマスの秘宝を狙っているとしたら、私達はそれを阻止しなければなりません」

エリステアは決意を込めた表情で言う。

その言葉にススムはそうだな、と思う。

戦争になってしまうのは困るし、レシマスの秘宝を奪われるのは女神達の依頼の件を含めても困る。

「……王の悲報はもう耳にしているでしょう。都の土は涙で濡れようと、今の私達に喪に服している時間はありません。カラムと、そして王の遺志を継ぐためにも」

王の悲報に関しては王城に来る途中の会話でススムも耳にしていた。まさか、という思いがあっただけに若干の動揺は隠せない。

「俺は、次はどうすれば良いですか？」

「あなたの次の任務は、三つの魔石の入手です。魔石には、レシマスの秘密をとく何らかの力が秘められていると伝えられています。魔石の所在は判明していますが、どこも危険な場所ばかり。先ずは各地を探索し、経験を積んでから望んだほうが良いでしょう」

危険な場所、更にエリステアが態々危険とまで言うのでススムの顔

は一気に陰しくなる。

「（こりゃ、かなりヤバ目か……レシマスで遭遇したドラゴンと同等かそれ以上って見たほうがいいか？）」

険しい顔をするススムにエリステアは微笑みかけて言う。

「探索に必要な情報がある時は、何時でも私に話しかけてくださいね。帰還したばかりなのに酷ですが、あなたには期待しています」

## Side Elysi on

ご主人様と分かれてから私はダルフィの奴隷商人を訪ねていた。奴隷商人は厭らしい笑みを貼り付けたまま私に向かって口を開く。

「うん？ おやおや、お客さん久しぶりだねえ」

「……御託は要らない。奴隷を寄越せ……そうだな、投擲や射撃の得意な奴と適当なのを一人ずつだ」

「相変わらずそっけないねえ、お客さん。まあいいさ、そうだな……おい、聞いていたな、連れてこい！」

「……」

奴隷商人の部下が檻の中から手枷をした男女が引っ張られてくる。

「こっちの女が投擲が得意な奴で、こっちの男は体力に自身がある奴でございますあ。二人合わせて三千キツカリでいかがで？」

「……それで構わん。金だ、受け取れ」

「ひひ、お客さんも悪だねえ……」

そうして頑丈な紐で手枷をされた二人は私に引き摺られながらご主

人様の洞窟まで辿り着いた。

「こ、こんなところで何をしようって言うんだ?!」

「わ、私達を解放しろ!」

「黙れ、貴様らに与える自由など、存在しない」

愛用の大鎌を突きつける。

「貴様らに与えられる選択肢はただ一つ。私と我がご主人の為にその身を捧げ、隸属せよ」

「な、なに!？」

「ど、どうということよ?!」

「こういうことだ!」

二人の首根っこを掴み、それに向けて投げつける。

素体と、取り出しと書かれたカプセルにそれぞれが収まり、衝撃でカプセルが閉じる。

「「―っ!?!?!」」

カプセルを叩いて割ろうとするがカプセルは割れない。

「弱いから私ごときにすら逆らえないんだよ。さあ、お前達に力をあげよう。もっとも、少々頭も弄らせて貰うがな」

そう言って私は遺伝子複合機のスイッチを入れた。  
遺伝子複合機には幾つか機能がある。

一つは私が何度も使った遺伝子を取り込む機能。



もう一つはそれに加えて洗脳を行う機能だ。

「ふふふ……弱いからこうなる」

私が奪い、私が与えよう。

「力を、もっと力を！」

## Side Out

二人が分かれてから数日、ヴェルニースにススムが戻るとエリーと見覚えのある武具で身を固めた女性が居た。

「ご主人様、お待ちしております」

「ああ、久しぶり。待たせたか？」

「いえ、そんなことはありません。ご主人様、こちらは今回雇用したウェンディです。彼女は病気で喋ることができませんが射撃が得意だそうです」

「へえ……それなら前衛がエリー、真ん中が俺、後衛がウェンディって感じでやっていけそうだな」

「……（コクリ）」

「彼女の武具はヴェルニース近郊の倉庫においてあった武具で賄っています。事後承諾となりますがよろしいでしょうか？」

「構わないよ。必要なものがあるのならキッチンと使わなきゃな。倉庫の肥やしにするのは勿体無いだろう」

ウェンディという名の女が持つのはミスリル製の不燃性と耐酸性に優れ頑丈さが取り得の散弾銃、ショットガンだった。

近距離における破壊力は折り紙付きの武装だ。

弾丸はブロンズ製の物で、こちらも手榴弾の時と同じくイルヴァの  
フランタジ  
納得のいかない不思議な鞆により無限に供給されるようだ。

ススムは無限に供給されると言うことをありがたいとは思いつつも、  
やはり理不尽を覚えていた。

向こうの世界じゃ、弾一発ですら……といった具合に。

「とりあえず、当分は3人での戦い方の練習とかそんな感じで依頼  
を中心にあちこち回ってみようか」

「わかりました。ウエンディ聞きましたね？」

「……（コクリ）」

そうして3人であちこちらを旅して歩き、ウエンディという3人  
目のメンバーが加わったことで今まで以上に安定して戦えるようにな  
った事をススムは心から安心していった。

「しかし、この国の人間は後ろ暗い奴が多いんかねえ？ 暗殺対処  
込みの護衛依頼が最近やたらと多いんだが……」

「現在、ザナンが煽り、パルミアや周辺諸国がエレアの民との対決  
姿勢を整えつつあります。そのせい、というのもあるのでは無いで  
しょうか？」

「……」

その言葉にススムは軽いため息を付いた。

「ジャビ王とは一度しかあったことは無いけど、暗殺をしたのはエ  
レアの民とその仲間と思わしき者達らしい。だけど、なんつーかタ  
イミングが良すぎるんだよね……」

「……それは、もしやザナン、いえサイモア皇子が暗殺に関わって  
いると?」

「さあ？ 幾ら怪しくても相手は雲の上の住人だ。高々冒険者がしゃばる話じゃあないな」

三人揃ってうんうんと頷く。

「仮に邪魔をするにしたって、一番効率が良いのは直訴とか嘆願とかじゃなくて、俺たち自身が強くなってレシマス攻略することだろうしな」

「やはり、それが一番なのでしょうかね？」

「考えても見ろ、高々冒険者……しかも素性不明の男だぞ、俺は。」

例えパルミア王宮の一部高官に伝手があるとはいえ、そこまで重要視される存在では無いし俺の持つ情報が重要視されるわけでもない」

「……！」

一部高官と伝手があるのか！と驚くウェンディ。だがその表情に二人とも気付かないので軽くスルーされてしまう。

「さて、明日はネフィアに潜るから二人とも早く寝ろよ」

「わかりました」

「……（コクリ）」

そして翌日、3人は揃ってネフィアに足を運んだ。

出だしは好調で、ススムも新しく手に入れたアダマントイト製のカタナを振るいながらこれならこのネフィアも楽勝だな、などと考えていた。

だが、甘かった。

「「「ブモオオオッオオ!!」」」

「ちょ!?! て、撤退――!!!!」

ネフィアの最下層に居たのは5匹以上の巨大な、全身に毛を生やした鼻の長い怪獣。

「なんでマンモスが出て来るんだよ!?! しかも殆ど毒も通らないし」

「流石に、アレにはまだ勝てる気がしません」

「……」

3人揃っての初ネフィアは残念なことに敗北に終わるのだった……。

# Lv14..旅行者と暴走するロリっ娘と 運命の鼓動・3十仲間が増える日(後

今回から仲間が増えて技能を書くのが非常に面倒……もとい死ぬほど大変なので仲間に限ってはステータス値のみの表示とします。某理想郷のオリジナル作品でキャラのステシと技能値を二人分書いてる人がいらっしますが、あの作者さんは本当に凄いです。

では、ステシさらしです。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv13 ↓ Lv14

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 118 (100) +3 (+0)

名声 10703 +1844

カルマ 14 ー 6

現在値 前回比

筋力..26 (20) \* +1 (+1)

耐久..30 (20) +4 (+1)

器用..45 (18) \* +3 (+1)

感覚..24 (18) \* +1 (+1)

習得.. 20 (14) +1 (+1)  
意思.. 25 (12) +3 (+1)  
魔力.. 19 (14) \* +1 (+1)  
魅力.. 15 (14) +2 (+3)

## 装備

頭 .. オブシディアンヘルム「2, 6」: (火炎耐性\*)

首 .. ☆《謎の貝》「2, 14」: (信仰\*\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*\*, 運勢+3, 神電波受信)

背中.. 烈火の皮の軽外套「4, 2」: (感覚維持, 交渉「\*\*」, 火炎耐性「\*\*」)

胴体.. 白銀の厚鎧+2「5, 18」: (暗黒耐性「\*\*」)

利手.. アダマンタイトカタナ(4d6+9): (耐酸性, 不燃, 貫通20%, 両手持ち適正, 耐久+3)

手 .. —

指 .. ☆美しき装飾の指輪『世界をすべる霧』—1: (感覚維持, 幻惑耐性\*, 運勢+1, 器用+2, テレポート妨害)

指 .. 耐盲目の鉄の指輪: (不燃, 感覚維持, 火炎耐性\*, 盲目無効)

腕 .. 闇を砕く鉄鎖の手袋(6, 0)「6, 5」: (不燃, 盾\*\*, 遺伝子学\*, 暗黒耐性\*)

腰 .. ミスリルガードル「5, 4」: (不燃, 耐酸, 詠唱\*)

足 .. ★《ダル・イー・サリオン》+1「16, 7」: (運勢維持, 旅歩き\*\*, 隠密\*, 器用+6, 呪い保護\*\*\*, MAP移動短縮\*\*)

遠隔.. ★《異形の森の弓》: (耐酸性, 不燃, 異次元の手「\*\*\*」, 毒追加攻撃「\*\*\*」, 感覚維持, 器用維持, 詠唱「\*」, 毒耐性「\*\*\*」, 器用+10)

矢 .. ☆ 儂き矢束 (1d8) (3) ∴ (時止弾 x 4, 炸裂弾 x 10, 運勢 + 3)

◆ スキルと特殊能力

|      |                 |   |                 |
|------|-----------------|---|-----------------|
| 戦術   | L v 1 2 . 2 3 1 | ↓ | L v 1 3 . 4 3 4 |
| 重量挙げ | L v 1 3 . 5 3 2 | ↓ | L v 1 4 . 6 9 7 |
| 両手持ち | L v 3 . 3 6 0   | ↓ | L v 5 . 3 5 1   |
| 治癒   | L v 1 8 . 2 0 4 | ↓ | L v 1 8 . 8 2 6 |
| 盾    | L v 1 3 . 1 8 8 | ↓ | L v 1 3 . 4 1 0 |
| 重装備  | L v 6 . 0 0 5   |   |                 |
| 中装備  | L v 6 . 8 4 7   | ↓ | L v 7 . 2 2 9   |
| 鍵開け  | L v 3 . 6 7 9   | ↓ | L v 4 . 2 2 0   |
| 二刀流  | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 軽装備  | L v 5 . 4 2 9   |   |                 |
| 回避   | L v 1 3 . 0 2 9 | ↓ | L v 1 3 . 7 5 1 |
| 隠密   | L v 1 3 . 0 1 8 | ↓ | L v 1 4 . 1 6 4 |
| 自然鑑定 | L v 7 . 2 4 2   |   |                 |
| 釣り   | L v 6 . 3 7 6   | ↓ | L v 6 . 3 9 9   |
| 読書   | L v 1 2 . 2 5 7 | ↓ | L v 1 2 . 9 3 9 |
| 遺伝子学 | L v 5 . 8 0 2   | ↓ | L v 6 . 3 1 0   |
| 解剖学  | L v 1 . 1 9 4   | ↑ | New             |
| 料理   | L v 2 . 4 3 8   | ↓ | L v 2 . 8 9 8   |
| 信仰   | L v 1 6 . 5 7 7 | ↓ | L v 1 7 . 1 5 8 |
| 旅歩き  | L v 1 3 . 9 9 6 | ↓ | L v 1 4 . 8 6 7 |
| 瞑想   | L v 1 4 . 3 4 4 | ↓ | L v 1 5 . 2 3 1 |
| 詠唱   | L v 4 . 2 5 4   | ↓ | L v 4 . 7 3 3   |
| 魔道具  | L v 6 . 4 0 3   | ↓ | L v 6 . 8 3 6   |
| 交渉   | L v 1 9 . 5 3 4 | ↓ | L v 2 0 . 1 5 1 |
| 投資   | L v 4 . 6 0 5   | ↓ | L v 1 0 . 9 7 6 |
| 演奏   | L v 1 . 0 0 0   |   |                 |

◆武器の専門

|       |       |     |   |       |     |
|-------|-------|-----|---|-------|-----|
| 長剣    | Lv4.  | 719 | ↓ | Lv6.  | 262 |
| 斧     | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 格闘    | Lv7.  | 134 | ↓ | Lv7.  | 151 |
| 鎌     | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 鈍器    | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 槍     | Lv4.  | 404 |   |       |     |
| 杖     | Lv4.  | 018 |   |       |     |
| 短剣    | Lv8.  | 972 | ↓ | Lv9.  | 381 |
| 弓     | Lv11. | 527 | ↓ | Lv12. | 515 |
| クロスボウ | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 投擲    | Lv7.  | 606 | ↓ | Lv7.  | 675 |
| 銃器    | Lv4.  | 000 |   |       |     |

◆耐性と抵抗力

|      |              |
|------|--------------|
| 火炎耐性 | 普通の耐性***     |
| 冷氣耐性 | 弱い耐性**       |
| 電撃耐性 | 弱い耐性**       |
| 暗黒耐性 | 普通の耐性**      |
| 幻惑耐性 | 耐性なし*        |
| 毒耐性  | 強い耐性****     |
| 地獄耐性 | 耐性なし         |
| 音耐性  | 素晴らしい耐性****+ |
| 神経耐性 | 耐性なし         |
| 混沌耐性 | 弱い耐性**       |
| 魔法耐性 | 耐性なし         |

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value+4」



「フィート」貴方は我慢強い「耐久＋3」  
「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用＋3」  
「変異」あなたの脚はしなやかだ「速度上昇」  
「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」  
「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」  
「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」  
「変異」あなたは非電導体質だ「電撃耐性強化」  
あなたの装備は神が発する電波をキャッチする  
あなたの装備は盲目を無効にする  
あなたの装備はテレポートを妨害する  
あなたの装備は呪いの言葉から保護する  
あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性

職業…戦士

Lv8 ↓ Lv10

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

|         |     |       |   |       |
|---------|-----|-------|---|-------|
| 生命力     | 100 | (100) | — | —     |
| マナ      | 80  | (80)  | — | —     |
| 狂気度     | 0   |       | — | —     |
| 速度      | 110 | (96)  | — | 4(0)  |
| 現在値 前回比 |     |       |   |       |
| 筋力      | 33  | (26)  | + | 1(+1) |
| 耐久      | 34  | (27)  | + | 1(+1) |
| 器用      | 29  | (22)  | — | —     |
| 感覚      | 16  | (10)  | + | 2(+1) |
| 習得      | 24  | (18)  | — | —     |

|       |               |       |               |
|-------|---------------|-------|---------------|
| 意思    | .. 4 1 (3 3)  |       | + 1 1 (+ 1 0) |
| 魔力    | .. 4 2 (3 4)  |       | + 1 0 (+ 0)   |
| 魅力    | .. 1 9 (1 3)  | - - - |               |
| 名前    | .. ウェンディ      |       |               |
| 種族    | .. イエルス       |       |               |
| 性別    | .. 女性         |       |               |
| 職業    | .. 遺跡荒らし      |       |               |
| Lv    | 9             |       |               |
| ステータス | : カッコ内は元の値    |       |               |
|       | 現在値           | 前回比   |               |
| 生命力   | 1 1 0 (1 0 0) | - - - |               |
| マナ    | 9 0 (8 0)     | - - - |               |
| 狂気度   | 0             | - - - |               |
| 速度    | 8 2 (8 2)     | - - - |               |
|       | 現在値           | 前回比   |               |
| 筋力    | .. 2 1 (2 1)  | - - - |               |
| 耐久    | .. 2 4 (2 4)  | - - - |               |
| 器用    | .. 3 2 (3 2)  | - - - |               |
| 感覚    | .. 2 6 (2 6)  | - - - |               |
| 習得    | .. 3 4 (3 4)  | - - - |               |
| 意思    | .. 1 9 (1 9)  | - - - |               |
| 魔力    | .. 1 9 (1 9)  | - - - |               |
| 魅力    | .. 1 6 (1 6)  | - - - |               |

**LV15：旅行者とロリっ娘と仲魔達と 神様も予想してなかった事態（前書き）**

うっかりってマジ怖いですね。

LV15..旅行者とロリっ娘と仲魔達と 神様も予想してなかった事態

503日目

前回の日記から驚くことに二ヶ月が経過していた。

まあ、基本はひたすら依頼であっちこっち行っただけだし、マンモスは悪夢だったし大して良いことが無かったんで気にしないでおくとする。

そういえば、一番重要なことを忘れてた。

昨日の夜、パルミアの教会の祭壇で祈ってたらジュア様からご褒美と言われて防衛者のネビネイルというイケメンが仲間になった。

なんでもジュア様の下僕らしい。

立場的には俺も同じような物なのだが、下賜されたと言うことから俺のほうが圧倒的に立場が上らしい。

まあ、とりあえず女だけっていう環境も少し辛かったんで男の仲間が増えるのはありがたい、と思っておこう。

[illegible]

一気に四人にメンバーが増えた一行だが、調子に乗って魔石探索……などという具は流石に犯さなかった。

以前よりも心持難易度の高い浄化依頼や掃討依頼を請け負うようになったぐらいである。

また何時も通りにあちらこちらへ行つての日々となつたのだ。

目標は『魔石探索が問題なく出来るレベル』であった。

それを考えると今のススムやエリーたちの力量はまだまだ未熟な物だった。

故に、とにかく金と力を蓄えることにススムは重視していた。

「主殿、ジュア様から主殿が闘う理由は聞いております。ですが、焦りすぎではありませんか？」

「焦っている、か？俺が？」

ススムとエリーだけだった時は二人とも力を得ること、装備を良い物にすることが二人とも当たり前だと感じていた。

ウエンディが仲間になってもそれは同じだ。

ウエンディはエリーの言葉に従順でススムの言葉にも従い文句を言う事が無かった。

だから二人に誰も何も言わなかったのだ。

だが、新たに癒しのジュアより下賜された仲間、ネビネイルはそんな一行からすると非常に普通な感性の持ち主だった。

「はい。勿論、多くの依頼をこなす事は善行であり、ネファイアを探索することは冒険者<sup>クロラー</sup>としても当然の行為です。文句はありません……。ですが、そのペースが少々早足なのではないかと思えます」

「そう……なのか？」

「はい」

ネビネイルの言葉にススムはふむ、と頷く。

「そうだな……確かにそうかもしれない。しばらくは荷物の配送依頼ぐらいにしておくか。それにそろそろ魔法書の数もとんでもなくなってきたし」

そう言ってススムは荷車に載せてある自分の荷物袋を見る。  
その中には山積みになった魔法書や古書物があった。

「主殿、溜め込みすぎですぞ？」

「あはは……難しいのが多いんだ、勘弁してくれ」

「次のルミエストで読み切ってしまったわれたらいかがですか？」

「そうだな」

男二人で会話していると、エリーがその会話に加わる。

「ご主人様、ルミエストによるのであれば魔術士ギルドに所属してみてはいかがでしょう？」

「魔術士ギルドに？エリーなら戦士ギルドを勧めるかと思ってたよ」

「戦士ギルドの特典も良い物ではありますが、将来性を考えればご主人様は魔術師ギルドがいいと思います」

その言葉にはネビネイルも頷く。

「そうですね、冒険者で戦士、魔法を使用せずに戦い続けるというものも居なくは無いが、そういった者達は最終的に二流三流どまりとなっているのが現状。魔法には自身を強化する物、相手を弱体化させるもの、その他にも様々な効果を持つ魔法がある」

「ふむ……言われてみれば確かに魔法も重要か……」

「それに、回復役が私だけでは正直手が回りませんぞ？毎回魔力が枯渇して死に掛けていますし」

実は回復役が欲しかったと言うネビネイル。  
なるほど、それは重要なことである。

「そうだな、俺ももっと魔法覚えなないといかんなあ」

「ご主人様、がんばってください」

「エリーも覚ええないか？覚えてくれれば俺も気が楽なんだが……」

「残念じゃがそれは無理だぞ主殿」

「え？」

ススムの言葉にネビネイルが待ったをかける。

「エリー嬢ちゃんやウエンディには隷属の呪いという奴隷に掛けられる呪いが掛かっておる。これは先代文明時代に作られた呪いでな、魔法や技能を新しく覚えることができなくなる体質にする呪いでもあるんじゃないよ」

「……そんな呪いまであるのか」

「ジュア様が言うには抜け道も無い事もないのじゃが……それは禁忌とされておるらしい」

「それじゃあ、迂闊に手を出すわけにはいかないか」

「そうじゃな。何、我らならばそのような禁忌に手を出さずとも必然的に強くなれるじやろう。」

それに主殿、主殿は肉体的に言えば我ら神の下僕たる存在……人々で言うところの神の化身と同じ肉体を持ち合わせておる。命は主殿が真に諦める時まで尽きることは無いし、寿命もまた然りじゃ」

と、何気なく重要なことをのたまうネビネイル。

「ちょっと待て、俺、神の化身なのか？」

「なんじゃ、気付いておらぬかったのか、主殿？」

お互いに疑問形で言葉を返す男達。

「って事は、俺が死んでも蘇るのは」

「神の特性の一つじゃな。神々や我ら神の下僕はその肉体が滅ぶのは真に魂まで滅んだ時。」

魂があり、生きる活力があれば何度でも蘇るのが我ら神の化身の特徴の一つじゃ」

その言葉にススムはなるほど、とも思う。

イルヴァではなく、地球のそれもフィクションだった気がするがクトウルフの神々から不死性を授かったという逸話があったような気もしなくは無い。

この辺りの話は高校生だった頃に友人のTRPGマニアがクトウルフ系のTRPGの設定を暑く語っていた時に小耳に挟んだ情報だった。

その情報が役に立つのなら、今のススムの不死性はこの世界に来る前に出会ったコスプレ女(※1)が影響している、かもしれない。思った。

「なるほど。じゃあ……余り言いたくないが、お前が死んだ時は直ぐに蘇るのか？」

「私は主殿ほど神性が高くないので30日は時間が掛かるかと思います」

そんなことを話しながら一行はルミエストに到着する。

一行は荷物の配送を終えると早速魔術師ギルドの建物に向かった。

「ギルドに所属したいと？」

「はい、そうです」

受付の男はススムをいぶかしんで見るが、まあ良いか、といって条件を突きつけた。

「解読済みの古書物を30点分集める。点数は古書物のタイトルに応じて決められている。

条件を満たせばギルドに所属できる。わかったか？」

「わかりました。ところで、古書物ってこれで良いんですか？」



そう言ってススムが取り出したのは溜まりに溜まった状態の書の日だった。

「これは……」

受付の男が古書物に手を伸ばし内容をチェックしていく。

「ふむ、状態も問題なし、キチンと解読もされているのか……なるほど、良いだろう全て預かって点数を数える、少し待て」

「はい」

そうして待たされたのは本の数分程度だ。

「……ふむ、十分に点数を満たしているな。合格だ。お前、この紙に名前を書け」

「あ、はい」

さらさらと自分の名前を書いたススムは受付の男に紙を渡す。

「よし。それじゃ案内をするから付いて来い」

「はい」

そういわれて案内されるがままに階段を下りると、そこには地下であるとは思いがたいほど明るく広大な地下室があった。

「凄い……地下なのに凄く明るいし、空気も良い」

「ふふん、それは当然だ。我が魔術士ギルドの魔術、魔道具の技術の粋を凝らして作り上げられたのがこのギルドの施設だ。パルミアの城よりも贅沢なつくりなのさ」

男が自慢げにそういう。

「はぁー、なるほど」

ススムを始め、エリーたちも驚いていた。  
ネビネイルもまた良くぞここまでと驚きをあらわにしている。

「それじゃあ付いて来い。施設の案内をする」

そう言って先ず案内されたのがこのギルドで一番大きな部屋、図書室だ。

「ここはノースティリスで一番の蔵書量を誇っている。調べものがあるのならここで調べるといい」

その次に案内されたのがギルドマスターの部屋だった。

「現在ギルドマスターは留守にしている。この部屋には祭壇もあるからお前が神々を信仰しているのであれば祈っていくが良い。次に行くぞ」

淡々と案内を受け続け、トレーナー、ギルド商店、そして最後に魔法書作家の所に案内された。

「おいしい、ナニコイツ、初めて見るんですけどお？」

「コイツはギルドの新人だ」

「初めまして、新人のススムです。よろしく願います」

「コイツ、何話しかけてきてるわけ？」

挨拶をして理不尽な言葉を掛けられ思わずイラッと来るススム。エリーもまたイラッとした様子だがウェンディとネビネイルが宥めてとりなす。

「まあいい、オレサマの光る才能がありとあらゆる魔法を生み出し世界に光と闇の……」

以下続々と電波的な言葉が長々と続き、ススムを始めこの場に居る全員が混乱して目を回しそうになったところで案内をしていた男からストップが掛かる。

「とりあえず、この方はギルドマスターと同様に重要な役割を担う魔法書の作家だ。お前も世話になるだろうから良く覚えておけ」

「……はい。よろしくお願いします」

そんなこんなで案内は終わった。

男は「面倒ごとは起こすんじゃないぞ」とだけ言ってまた入り口へ戻っていく。

「んじゃ、先ずは早速祭壇で祈ってくるか」

ギルドマスターの部屋へ行き、手持ちの宝石を全て祭壇に捧げてススムは祈る。

すると、不意に頭に声が響いてきた。

『や、やめてよ。アンタの事なんか大好きじゃないんだからねっ。バカ！』

これをあげるのだって、ア、アンタの為にしてあげるんじゃないんだからっ！

あ、あくまで熱心な信者に対する褒美なんだからっ』

なんともツンデレな台詞に思わず

「ツンデレ乙って言えば良いのか？」

そう思いながら祭壇を見ると、祭壇の上には不思議な神々しさを放つ物が二つ安置されていた。

「おや、コレは……ジュア様の秘宝と聖なる雨の宝玉ではありませんか」

見ていたネビネイルが驚いたように言う。

「秘宝！？なんか凄そうだな……どういったものなんだ？」

「先ず、この秘宝を使用すると狂気を緩和する効果があります。そしてコチラの宝玉は使用すると魔法の治癒の雨と同じ効果を持つ雨が降って使用者に癒しを齎すのです」

「狂気云々はよくわからないが、宝玉の方は凄いな、それ」

「はい、これを賜るとは……主殿は相当ジュア様に愛されているのかもしれないね」

「はは、だと良いな」

それから数日、ススムは一度仲間に好きに過ごすようにと指示を出して本を読み耽るようになった。

これはネビネイルが言っていた魔法を覚えるためだ。

その期間の間に街では魔獣や犯罪者が大量発生し、重症患者が出たりに放火まで起きたそうなのだがススムは読書に集中し、五月蠅くなればとつとテレポートの巻物で静かな場所まで転移していたので詳細は知らない。

ルミエストの住人にとっては、悪夢のような日々であったことだけ

は間違いないだろう。

「さて、そろそろ骨休めはここまでにして他の街に行くぞ、皆！」

「……ご主人様、元気そうですね」

「……そういえば騒ぎの間主殿の姿は見えませんでしたな。きっと運よく騒ぎを回避しきっていたのでしょう」

「……（ぐったり）」

元気なススムとそれとは対照的にぐったりした3人。

3人とも巻き込まれてひどい目にあったようだ。

「そういや、ヨウインで確か野菜や果物の採集依頼がいっぱいあったよな？アレ受けてみたいからヨウインに行くぞ！」

その一言でヨウインに行くことになったのだが……。

「だああ！邪魔すんな！！！」

「ご主人様、時間が！」

採集に何度行っても熊や蛙、リスに蜘蛛と様々な動物達から妨害を受けてまともに採集が出来ず、そのままヨウインの人々にお叱りの言葉を受ける事となってしまうのだった。

「お、俺には畑仕事の才能がないな、本当」

「ご主人様、そう気落ちなさらないでください。人には向き不向きがあります」

「そうだな……一度パルミアに戻って別の依頼でも受けてくるか」

気を取り直して一度パルミアへと戻り、依頼で魔物を狩り尽くして

ストレスを発散するススム。

それに付き合わされた仲間達はススムとは違ってかなりボロボロになっていた。

もつとも、エリーだけはボロボロでありながらもすっきりした表情だった。

「さて、それじゃあもう一度ヨウインに行くぞ！」

リベンジである。

「ちょ、これ、抜けねー！！！！」

「ご主人様、動物の群れがっ！！」

「主殿の邪魔はうわらばっ」

「……（ぽったり）」

リベンジは無念にも失敗に終わった。

「はあ……こんなことで本当に俺、やっていけるんだろうか」

「ご主人様……」

心底気落ちしているススム。

宿でクリムエールを飲んで自棄酒をしている姿に、エリーは一つ心に決めて行動に出た。

「ご主人様、失礼します」

「え……？！」

エリーは言うが早いかススムの首に両腕を回し、逃げられぬように固定した上で己の唇とススムの唇を重ねた。

ススムの思考が真っ白になり、何が起きたのか認識しきれなくなる。

「ご主人様、愛してます」

「――あ」

そこから先のことをススムはよく覚えてない。

何か気持ち良いことがあった気がする。

とても、心が安らぎ、満たされた気もした。

何か飲み物を飲まされて、全身が熱くなったような気もした。

そして気が付けば朝になっていて、エリーはススムと自身の体液だらけという状態で同じベッドで横になっていた。

非常にガンガンと痛む頭に堪えつつ、何が起きたのか考えるが何が起きたのかさっぱり分からない。

ただ、非常にエリーが愛おしいと思うようになった。

身支度を整えて部屋を出て階下へ移動すると、ネビネイルが「さくばんはおたのしみでしたね」等と言ってきたのでススムがグーパンで沈めたのは仕方のないことだろう。

宿屋の親父も同じ事を言ったので殴ってやろうかと思ったが傷害罪になりかねないので自重する。

「……しかし、手を出されたのは構わないのですがエリー嬢の扱いはどう為されるのです？」

エリーの立場はススムの奴隷、ということになっている。だが、ススムは奴隷だなどと思ったことは無かった。

「エリーは俺の奥さんにする」

「……本気ですか？」

「本気だ」

ススムもネビネイルが言わんとする事の意味は理解していた。

詰まり何時かはこの世界を去るのに結婚するのか、ということだ。そんな事はススムだってわかって居た。

が、今のススムにとってそれは重要ではなかった。

ネビネイルは何を言っても無駄だと感じ取り、ため息をついてただ一言だけ言う。

「おめでとうございます」

彼のその言葉には、祝う感情よりも困惑や疑念の感情が強かった。

「ありがとな……なに、心配は不要だ」

何故かススムはネビネイルに対して意地の悪そうな笑みを見せるのだった。

Side Elysi on

思ったよりもご主人様はあっさりと私を受け入れてくれた。

お酒が入っていたとはいえ、予想以上だった。それに念には念を入れた。

ご主人様は何度も私に愛をささやき、私の胎に熱いものを吐き出した。

彼は私を『戦士』としても『女』としても求めてくれる。



その事を私は非常に嬉しく思う。

コレで彼は私が望む様に力を得るために奔走してくれる。

ネビネイルとかいう神から賜ったというご主人様……いえ、旦那様  
の下僕が少々目障りだけど関係ない。

あの人の一番は私なのだ、だから。

「……アイツもアレにかけてキッチンと言うこと聞くようにしなければだめかしら？」

**Lv15..旅行者とロリっ娘と仲魔達と 神様も予想してなかった事態(後書き**

と、言う訳で結婚してしまいましたの巻き。  
 やべえ、操作ミスとはいえやっちゃっただ。  
 うっかりセーブされる所まで押しちまったのが運の尽き。

まあ、なつやはヤンデレ属性がキライでは無いのでススム達の冒険  
 このまま続きます。

そういえば、ステシチェックしてたら防衛者の信仰がジュア様じゃ  
 なくてクミロミ様でした。  
 おまえ、それで良いのか!?

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv14 ↓ Lv15

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 115 (100) +3 (+0)

名声 8859 +4079

カルマ 20

現在値 前回比

筋力..29 (23) \* +3 (+3)

耐久..31 (21) +1 (+1)

器用.. 4 4 (1 8) \* - 1 (+ 1)  
 感覚.. 2 6 (2 0) \* + 2 (+ 2)  
 習得.. 2 1 (1 6) + 1 (+ 2)  
 意思.. 2 5 (1 3) + 0 (+ 1)  
 魔力.. 2 0 (1 5) \* + 1 (+ 1)  
 魅力.. 1 5 (1 5) + 0 (+ 1)

## 装備

頭 .. ☆闇を砕く騎士兜『忘れられぬ迫害』 [0, 1 0] ∴ (運勢維持, 信仰\*, マナ限界\*, 暗黒耐性\*)  
 首 .. ☆《謎の貝》 [2, 1 4] ∴ (信仰\*\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*\*\*, 運勢+3, 神電波受信)  
 背中.. 烈火の皮の軽套 [4, 2] ∴ (感覚維持, 交渉[\*\*], 火炎耐性[\*\*])  
 胴体.. 白銀の厚鎧+1 [5, 1 8] ∴ (暗黒耐性[\*\*])  
 利手.. アダマンタイトカタナ (4 d 6 + 9) ∴ (耐酸性, 不燃, 貫通20%, 両手持ち適正, 耐久+3)  
 手 .. ミスリルバックラー+1 [5, 6] ∴ (不燃, 耐酸, 詠唱\*)  
 指 ..  
 指 .. 耐盲目の鉄の指輪∴ (不燃, 感覚維持, 火炎耐性\*, 盲目無効)  
 腕 .. 闇を砕く鉄鎖の手袋 (6, 0) [6, 5] ∴ (不燃, 盾\*\*, 遺伝子学\*, 暗黒耐性\*)  
 腰 .. ミスリルガードル [5, 4] ∴ (不燃, 耐酸, 詠唱\*)  
 足 .. ★《ダルIIイIIサリオン》+1 [1 6, 7] ∴ (運勢維持, 旅歩き\*\*, 隠密\*, 器用+6, 呪い保護\*\*\*, MAP移動短縮\*\*)  
 遠隔.. ★《異形の森の弓》∴ (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃, レア, 異次元の手[\*\*\*], 毒追加攻撃[\*\*\*], 感覚維持,

器用維持，詠唱「＊」，毒耐性「＊＊＊」，器用＋10）  
 矢・・・☆儚き矢束（1d8）（3）：（時止弾x4，炸裂弾x10，  
 運勢＋3）

◆スキルと特殊能力

|      |                   |   |                 |
|------|-------------------|---|-----------------|
| 戦術   | L v 1 1 3 . 4 3 4 | ↓ | L v 1 4 . 6 2 4 |
| 重量挙げ | L v 1 3 . 5 3 2   | ↓ | L v 1 6 . 1 2 5 |
| 両手持ち | L v 3 . 3 6 0     | ↓ | L v 7 . 7 5 0   |
| 治癒   | L v 1 8 . 2 0 4   | ↓ | L v 1 9 . 3 5 4 |
| 盾    | L v 1 3 . 1 8 8   | ↓ | L v 1 3 . 4 1 0 |
| 重装備  | L v 6 . 0 0 5     |   |                 |
| 中装備  | L v 6 . 8 4 7     | ↓ | L v 8 . 1 0 1   |
| 鍵開け  | L v 3 . 6 7 9     | ↓ | L v 4 . 3 6 0   |
| 二刀流  | L v 4 . 0 0 0     | ↓ | L v 4 . 0 3 8   |
| 軽装備  | L v 5 . 4 2 9     |   |                 |
| 回避   | L v 1 3 . 0 2 9   | ↓ | L v 1 4 . 5 1 9 |
| 隠密   | L v 1 3 . 0 1 8   | ↓ | L v 1 5 . 5 0 8 |
| 自然鑑定 | L v 7 . 2 4 2     | ↓ | L v 7 . 8 1 0   |
| 釣り   | L v 6 . 3 7 6     | ↓ | L v 6 . 8 3 6   |
| 読書   | L v 1 2 . 2 5 7   | ↓ | L v 1 5 . 3 2 4 |
| 遺伝子学 | L v 5 . 8 0 2     | ↓ | L v 6 . 3 1 0   |
| 解剖学  | L v 1 . 1 9 4     | ↓ | L v 2 . 1 0 7   |
| 料理   | L v 2 . 4 3 8     | ↓ | L v 3 . 0 3 0   |
| 信仰   | L v 1 6 . 5 7 7   | ↓ | L v 1 8 . 3 8 6 |
| 旅歩き  | L v 1 3 . 9 9 6   | ↓ | L v 1 5 . 3 2 3 |
| 瞑想   | L v 1 3 . 7 5 1   | ↓ | L v 1 4 . 3 4 4 |
| 詠唱   | L v 4 . 2 5 4     | ↓ | L v 4 . 6 3 1   |
| 魔道具  | L v 6 . 4 0 3     | ↓ | L v 7 . 1 1 8   |
| 交渉   | L v 1 9 . 5 3 4   | ↓ | L v 2 0 . 4 5 9 |
| 投資   | L v 4 . 6 0 5     | ↓ | L v 1 2 . 6 1 3 |

演奏 Lv2. 868 ↓ Lv2. 484

◆武器の専門

長剣 Lv6. 262 ↓ Lv9. 073

斧 Lv4. 000

格闘 Lv7. 151

鎌 Lv4. 000

鈍器 Lv4. 000

槍 Lv4. 404

杖 Lv4. 018

短剣 Lv9. 381

弓 Lv12. 515 ↓ Lv12. 985

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv7. 675 ↓ Lv7. 711

銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 普通の耐性\*\*\*

冷氣耐性 弱い耐性\*\*

電撃耐性 弱い耐性\*\*

暗黒耐性 普通の耐性\*\*\*

幻惑耐性 耐性なし

毒耐性 強い耐性\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 素晴らしい耐性\*\*\*+

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 弱い耐性\*\*

魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value+4」  
 「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」  
 「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」  
 「変異」あなたの脚はしなやかだ「速度上昇」  
 「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」  
 「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」  
 「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」  
 「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」  
 「フィート」貴方は税金の計算に強い「税金7%減」  
 「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する  
 あなたの装備は神が発する電波をキャッチする  
 あなたの装備は盲目を無効にする  
 あなたの装備はレポートを妨害する  
 あなたの装備は呪いの言葉から保護する  
 あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）  
 種族…ローラン  
 性別…女性  
 職業…戦士（ススムの嫁）  
 Lv11  
 ステータス：カッコ内は元の値  

|     | 現在値      | 前回比    |
|-----|----------|--------|
| 生命力 | 100（100） | —      |
| マナ  | 80（80）   | —      |
| 狂気度 | 0        | —      |
| 速度  | 110（96）  | —      |
| 筋力  | 34（27）   | +1（+1） |

|      |    |      |    |      |
|------|----|------|----|------|
| 耐久.. | 35 | (28) | +1 | (+1) |
| 器用.. | 29 | (22) | -  | -    |
| 感覚.. | 16 | (10) | -  | -    |
| 習得.. | 24 | (18) | -  | -    |
| 意思.. | 41 | (33) | -  | -    |
| 魔力.. | 42 | (34) | -  | -    |
| 魅力.. | 20 | (14) | +1 | (+1) |

名前..ウエンディ  
 種族..イエルス  
 性別..女性  
 職業..遺跡荒らし  
 Lv9 ↓ Lv10  
 ステータス：カッコ内は元の値

|     | 現在値 | 前回比   |
|-----|-----|-------|
| 生命力 | 110 | (100) |
| マナ  | 90  | (80)  |
| 狂気度 | 0   | -     |
| 速度  | 95  | (82)  |

|      | 現在値 | 前回比  |
|------|-----|------|
| 筋力.. | 29  | (22) |
| 耐久.. | 31  | (24) |
| 器用.. | 40  | (32) |
| 感覚.. | 33  | (26) |
| 習得.. | 42  | (34) |
| 意思.. | 25  | (19) |
| 魔力.. | 24  | (18) |
| 魅力.. | 22  | (16) |

|        |           |
|--------|-----------|
| 種族..   | 神の化身      |
| 性別..   | 男性        |
| 職業..   |           |
| LV     | 8         |
| ステータス: | カッコ内は元の値  |
| 現在値    | 前回比       |
| 生命力    | 100 (100) |
| マナ     | 80 (80)   |
| 狂気度    | 0         |
| 速度     | 110 (96)  |
| 筋力..   | 27 (20)   |
| 耐久..   | 27 (20)   |
| 器用..   | 21 (14)   |
| 感覚..   | 27 (12)   |
| 習得..   | 18 (12)   |
| 意思..   | 23 (17)   |
| 魔力..   | 19 (22)   |
| 魅力..   | 18 (12)   |



**LV16：旅行者と幼な妻と仲魔達と　パルミア・エイリアン事件と転移事故**

転移事故は悲惨です。

みなさんもプレイ中は気をつけましょう。

532日目

エリーと結婚しました。正式に籍を入れた。

方々のタウンギルドの人たちや魔術士ギルドからお祝いの品が届いた。

皆結構奮発してくれたみたいだ、本当にありがたいことだ。

ただ、本音を言おう……寧ろ金をくれたほうがありがたかった。

みんなの装備を整えるのも結構金を食うし……。

何より

税金納めるの大変なんだよ！

今更気付いたけど、倉庫の土地代と仲間達を率いている事で掛かる税があり、

更には依頼を頑張りがすぎたせいで有名税まで掛かっている模様でかなり税金がひどい。

そういえば、ジュア様の秘宝が齎したと思われる効果は割りと効いている。

具体的にアイツの死んだ魚のような目が緩和してきたとだけ言っておこう。

そういえば、ネビネイルが神様からの贈り物ですといって巨大なベツドを渡されたときは心底驚いた。

当人もまさか水を飲んでる時に急に「願いはあるか？」と問われたときはびっくりしたらしい。

そうして「主殿に幸せな家庭を築いて欲しい」と言ってくれたとか。

だが、神様……幸せな家庭で巨大ベッドって……『幸せ家族計画』って事なのか？

しかしコレだけは言わせてくれ、ありがたいけど余計なお世話だ！

[illegible]

ただ同時に「まさか、あの娘がああいう風に笑えるとは思わなかった」とも言った。

それはエイリアンの発生である。

SF映画に出てくる凶悪な化け物だろうか？

イルヴァに出現するエイリアンもまた凶悪なことに間違いは無い。エイリアンは他の生命体に寄生し、その腹を食い破って生まれると言う増え方をする。

彼らに寄生された際の対処法は二つ。

自ら毒薬を飲み体内のエイリアンを毒で殺すか、寄生された宿主ごと殺すかの二択だ。

どうしてこうなったかは不明だ。

酔っ払いが呼び出しただの、冒険者が呼び出しただの井戸から湧いて出ただのと噂はあるが、ガードは対処に追われ、街の住人もエイリアンと戦い、或いは逃げ惑う。

「うーわー……流石にこれ、やばくないか？」

「……非常に不味いかと思います」

「そうですね……この数になると流石に対処しきれるか怪しい。

ここで戦って我々まで倒れては洒落になりませぬぞ？」

「……（こくこく）」

全員揃ってどうしてこうなった、とため息をつく。

「とりあえず、こうなると俺たちでも対処は難しい。そもそも住人は殺されるか、やつら倒せるガードや店の店主達だって寄生されて産まされてってなってるかなり追い詰められてるみたいだしな」

一部の住人たちはシェルターに立て籠もっている。

正解だとは思いますが、寄生された人間がいたらその時点で罪だろうな、ともススムは思った。

そしてその懸念はしっかりと引き起こされシェルターの中では既に悪夢のようなエイリアン祭状態だ。

そのため、念の為に確認しに行った宿の店主は壮絶な悲鳴をあげ、この世を去った。

そしてそのシェルターは数刻前に危険を察知したエリーとウエンデイの手によって嚴重に封印された。

この事実ススムとネビネイルには知らされていない。

「とりあえず、幸いなことに俺たちは毒を飲んでもそう滅多に死ぬほどヤワな性質じゃない。」

奴らを倒しながらパルミアからの脱出を図るぞ。寄生されたら戦闘が終わったぐらいで直ぐに毒薬を飲むように」

「できれば寄生される事なく済ませたいものじゃがなあ」

その言葉に一同苦笑する。誰だって寄生されたくはない。そう思っているとエリーの口から一言。

「……ネビネイルが一番危ないと思います」

「ぐはっ」

「……(ぽんぽん)」

「あー、どんまい？」

そう、ぶっちゃけるとこのメンバーの中ではネビネイルが一番弱い……というか打たれ弱い。

その理由は簡単だ。

装備が残念なのである。

「くう、私の装備も整っていれば！」

「ああ、その事に関しては本当スマン。金が纏り次第早急に何とかしよう」

「ごしゅ：旦那様、そろそろ危険なようです」

「あ、スマンスマン。それじゃあ一番人気の少ない表通りを東に抜けて脱出するぞ！」

「「はい！」」

「……(こくり)」

表に出ようとして宿の一階に降りた所で早速襲撃された。

「ウェンディ、少し距離を取れ！ネビネイルもだ、後タイミングを見計らって治癒の雨を頼む！エリー俺と一緒に前へ！」

「はあああああ！」

「……！」

「お任せください！」

それぞれの性格が出るような形で、しかしキチンと指示に従って行動に出た。

ススムとエリーは前に出て其々の獲物で切り刻み、ウェンディがショットガンを二人が被弾しないように連射し、ネビネイルは手裏剣でエイリアンを牽制しながら時に治癒の雨で二人を援護した。

エイリアンは単体であれば4人にとって恐ろしい相手ではなかった。そも、ススムとエリーの武具は耐酸性のある武具であったり耐酸コーティング済みであったりもするのだ、早々に装備にダメージがいくこともなかった。

だが、これで二匹三匹と相手をしていると話が変わってくる。

「ぐごっ!？」

先ず、支援をしていたネビネイルが脇道から出てきたエイリアンに胚を飲み込まされた。

「……!？」

助けようとショットガンに向けたウェンディだが、一瞬で長い尾で縛り上げられてネビネイル同様に胚を植えつけられる。



しか見えないよな」

参った参ったと言いながら場を和まそうとそう口にしたススムだが。

「……旦那様、その冗談、最悪です」

「主殿、デリカシーがかけていますぞ？」

「……（ぷいっ）」

物凄く不評だった。

「あー、とりあえずとつとと毒薬飲んでこれ何とかしよう。毒飲むのも嫌だが、腹食い破られた状態で戦うほうがもっと嫌だ」

「そうですね」

「では、覚悟を決めますかな」

「……（ごくりごくり）」

そして……。

「」「うぷっ!?!」「」「」

※

※ 現在、大変お見苦しい惨劇が展開しております。

※ 暫くお待ちください。

※

ノースティリス観光組合

※

※

代表 ノルン

※

※

※

「さて、依頼でも受けにルミエストに行くか！」



「「はい！」」

見事に惨劇を無かったことにした3人。

だが、言葉を発しないウェンディだけは後ろ髪を引かれるように一度だけパルミアを見た。

「……（ほっ）」

単にエイリアンが居ってきていないか見たただけだった。

ススムがルミエストを選んだのは単純な話でパルミアから距離のある場所でゆつくりしたかったからだ。

ルミエストでは先日のモンスター襲撃が嘘のように既に復興が終わり、人々の活気に満ち溢れて居た。

そうしてススムは一つ思い出した。

「また納税忘れてた！」

「……そういえば、納める為のお金の工面も忘れていましたね」

「……パルミアで依頼、受け損ねましたしなあ」

そうしてルミエストに行く一行だが、彼らが望むほど良い依頼はなかった。

「と、いうかリーダーの俺が頼りなさそうだから勘弁してって言うのは地味に堪えるな」

それは護衛依頼を受けようとした時の事だ。

3人を率いてススムが依頼人と交渉していたのだが、他のメンバーならともかくススムがリーダーでは頼りない、という話になってし

まったのだ。

しかも、それが原因で御破産になった護衛依頼は一件ではない。他にも魔物の浄化依頼もあったのだが★4つという難易度は今の一行には荷が重いものだ。

更に、以前の収穫依頼で名声を落としていたのも影響しているのだろうか、とススムは思った。

ちなみに、この間も★3つの浄化依頼でススムや他のメンバーが倒されることがあり、その度にネビネイルのレイハンドで救われるという状態に陥っている。

つまり、結構カツカツな状態だった。

「しかたない、金策は地道にやるしかないか」

そうして交渉・調達依頼から配送依頼をメインに活動を行い、数日。配送依頼の途中で一行はパルミア付近を通りかった。

だが、相変わらず響く戦いの怒号と悲鳴とエイリアンの雄叫びに少しぐらいは世の為人の為に……と言う訳でもないが、腕試しでパルミアに入りエイリアンの討伐を行うもやはりエイリアンの繁殖速度に押され始め結局逃げるようになってしまう。

「いやはや……いつそパルミア全部吹き飛ばさないとコリヤもうだめじゃないか？」

「……かもしれませんね」

そうして諦めて再び依頼であちこちを巡り、そして久しぶりにネフイアを探索し軽くクリアした時のことだ。

「んじゃ、脱出するぞー」

そう言って脱出の巻物を広げる。

「わかりました」

「取りこぼしは無いようですね、準備は良いです主殿」

「……」

3人がススムの周囲に集まり、そして次元が歪んだ。

そうして一行はネフィアから外へ脱出……出来ていなかった。

空間が歪んだ先は見知らぬ石壁に囲まれ、鉄格子で部屋の出口をふさがれ、部屋の中にはトイレとロープとベッドが一つずつあるだけの場所だった。

「……って、あれ？ここどこだ？」

「……どこでしょう？」

「主殿、私は何か嫌な予感がしますぞ」

「……（こくり）」

戸惑っている4人に、向かいの鉄格子で閉じられた部屋に居た人間から声がかけられた。

「おいおい兄ちゃん達何をぼけてるんだ？ここは牢獄だぜ？」

「な、なにいいい！？」

それから数日間、時間の感覚を失いつつあった一行は細々と食べ物節約しながらこの牢獄に詰めているガード達に何とか事情を説明して出してもらおうとする物の、ガードは一度も来ないまま放置されていた。

そして食料が尽きてもうダメかも知れない、とかトイレの水を飲むか？という究極の選択を迫られた時にガードはやってきた。

「お前達ももう反省しただろう、出て行け」

「「「……」」」

一行は何かを言おうとしたが言葉が出なかった。

もうそんな気力さえなかったのだ。

とにかく、早く外の空気を吸いたい、食事を腹が裂けるほど食べた  
い。

それだけだった。

**Lv16..旅行者と幼な妻と仲魔達と　　パルミア・エイリアン事件と転移事故**

と、言うわけでパルミアで虐殺の宴でござるの巻き、でした。  
本当にどうしてこうなったw

更に言えば脱出の巻物、未鑑定で使ったのもよくなかった。

そのお陰で御覧の有様(投獄)だよ!

そういえば、仲魔達の実力の伸びがイマイチに感じる今日この頃。

そろそろまたアレが活躍する時期が来たか。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv15 ↓ Lv16

ステータス:カッコ内は元の値

現在値　　前回比

生命力　90 (90)　　――

マナ　　150 (150)　　――

狂気度　0　　――

速度　　115 (100)　　+3 (+0)

名声　　8859　　+4079

カルマ　20

現在値　　前回比

筋力..30 (24) \* +1 (+1)

耐久..32 (22)　　+1 (+1)

器用..45 (20) \* +1 (+2)

感覚.. 27 (21) \* +1 (+1)  
 習得.. 22 (17) +1 (+1)  
 意思.. 27 (15) +2 (+2)  
 魔力.. 21 (16) \* +1 (+1)  
 魅力.. 15 (15) — —

## 装備

頭 .. ☆闇を砕く騎士兜『忘れられぬ迫害』 [0, 10] ∴ (運勢維持, 信仰\*, マナ限界\*, 暗黒耐性\*)

首 .. ★《謎の貝》 [2, 14] ∴ (信仰\*\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*\*\*, 運勢+3, 神電波受信)

背中.. ミスリルマント [7, 4] ∴ (耐酸性, 不燃, 詠唱\*)

胴体.. 白銀の厚鎧+1 [5, 18] ∴ (暗黒耐性 [\*\*])

利手.. アダマンタイトカタナ+1 (4d6+9) ∴ (耐酸性, 不燃, 貫通20%, 両手持ち適正, 耐久+3)

手 ..

指 ..

指 .. 耐盲目の鉄の指輪—2 ∴ (不燃, 感覚維持, 火炎耐性\*, 盲目無効)

腕 .. 闇を砕く鉄鎖の手袋 (6, 0) [6, 5] ∴ (不燃, 盾\*\*, 遺伝子学\*, 暗黒耐性\*)

腰 .. ミスリルガードル [5, 4] ∴ (不燃, 耐酸, 詠唱\*)

足 .. ★《ダルーイ||サリオン》+1 [16, 7] ∴ (運勢維持, 旅歩き\*\*, 隠密\*, 器用+6, 呪い保護\*\*\*, MAP移動短縮\*\*\*)

遠隔.. ★《異形の森の弓》∴ (ロミアスの遺品, 酸で無傷, 不燃, レア, 異次元の手 [\*\*\*], 毒追加攻撃 [\*\*\*], 感覚維持, 器用維持, 詠唱 [\*, 毒耐性 [\*\*\*], 器用+10)

矢 .. ☆儚き矢束 (1d8) (3) ∴ (時止弾x4, 炸裂弾x10,

運勢+3)

◆スキルと特殊能力

|      |                 |      |                 |
|------|-----------------|------|-----------------|
| 戦術   | L v 1 4 . 6 2 4 | ↓    | L v 1 5 . 7 0 5 |
| 重量挙げ | L v 1 6 . 1 2 5 | ↓    | L v 1 7 . 1 6 5 |
| 両手持ち | L v 7 . 7 5 0   | ↓    | L v 9 . 5 6 0   |
| 治癒   | L v 1 9 . 3 5 4 | ↓    | L v 2 0 . 3 2 3 |
| 盾    | L v 1 3 . 4 1 0 |      |                 |
| 重装備  | L v 6 . 0 0 5   |      |                 |
| 中装備  | L v 8 . 1 0 1   | ↓    | L v 8 . 3 7 6   |
| 鍵開け  | L v 4 . 3 6 0   | ↓    | L v 4 . 8 9 2   |
| 二刀流  | L v 4 . 0 3 8   | ↓    | L v 4 . 2 6 6   |
| 軽装備  | L v 5 . 4 2 9   |      |                 |
| 回避   | L v 1 4 . 5 1 9 | ↓    | L v 1 4 . 9 6 8 |
| 隠密   | L v 1 5 . 5 0 8 | ↓    | L v 1 6 . 6 5 0 |
| 自然鑑定 | L v 7 . 8 1 0   | ↓    | L v 8 . 3 4 5   |
| 釣り   | L v 6 . 8 3 6   | ↓    | L v 6 . 8 8 2   |
| 見切り  | L v 1 . 0 0 0   | ↑New |                 |
| 読書   | L v 1 5 . 3 2 4 | ↓    | L v 1 6 . 4 6 6 |
| 遺伝子学 | L v 6 . 3 1 0   |      |                 |
| 解剖学  | L v 2 . 1 0 7   | ↓    | L v 2 . 9 0 0   |
| 料理   | L v 3 . 0 3 0   | ↓    | L v 3 . 4 8 2   |
| 信仰   | L v 1 8 . 3 8 6 | ↓    | L v 1 9 . 2 1 8 |
| 旅歩き  | L v 1 5 . 3 2 3 | ↓    | L v 1 6 . 8 5 3 |
| 瞑想   | L v 1 4 . 3 4 4 | ↓    | L v 1 6 . 8 5 3 |
| 詠唱   | L v 4 . 6 3 1   | ↓    | L v 5 . 7 9 2   |
| 魔道具  | L v 7 . 1 1 8   | ↓    | L v 7 . 6 2 2   |
| 交渉   | L v 2 0 . 4 5 9 | ↓    | L v 2 1 . 6 6 0 |
| 投資   | L v 1 2 . 6 1 3 |      |                 |
| 演奏   | L v 2 . 8 6 8   | ↓    | L v 2 . 4 8 4   |

◆武器の専門

|       |       |     |   |       |     |
|-------|-------|-----|---|-------|-----|
| 長剣    | Lv9.  | 073 | ↓ | Lv10. | 430 |
| 斧     | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 格闘    | Lv7.  | 151 |   |       |     |
| 鎌     | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 鈍器    | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 槍     | Lv4.  | 404 |   |       |     |
| 杖     | Lv4.  | 018 |   |       |     |
| 短剣    | Lv9.  | 381 |   |       |     |
| 弓     | Lv12. | 985 | ↓ | Lv13. | 190 |
| クロスボウ | Lv4.  | 000 |   |       |     |
| 投擲    | Lv7.  | 711 |   |       |     |
| 銃器    | Lv4.  | 000 |   |       |     |

◆耐性と抵抗力

|      |               |
|------|---------------|
| 火炎耐性 | 普通の耐性**       |
| 冷氣耐性 | 弱い耐性**        |
| 電撃耐性 | 弱い耐性**        |
| 暗黒耐性 | 普通の耐性**       |
| 幻惑耐性 | 耐性なし          |
| 毒耐性  | 強い耐性***       |
| 地獄耐性 | 耐性なし          |
| 音耐性  | 素晴らしい耐性*****+ |
| 神経耐性 | 耐性なし          |
| 混沌耐性 | 弱い耐性          |
| 魔法耐性 | 耐性なし          |

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」



「フィット」貴方は我慢強い「耐久＋3」  
 「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用＋3」  
 「変異」あなたの脚はしなやかだ「速度上昇」  
 「変異」あなたの脳は機械化している「暗記＋4」  
 「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」  
 「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」  
 「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」  
 「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」  
 「フィット」貴方は税金の計算に強い「税金7%減」  
 「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い  
 「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する  
 あなたの装備は神が発する電波をキャッチする  
 あなたの装備は盲目を無効にする  
 あなたの装備はテレポートを妨害する  
 あなたの装備は呪いの言葉から保護する  
 あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）  
 種族…ローラン  
 性別…女性  
 職業…戦士  
 Lv11 ↓ Lv12  
 ステータス：カッコ内は元の値  
 現在値 前回比  
 生命力100（100） — —  
 マナ 80（80） — —  
 狂気度 0 — —  
 速度 114（96） — —  
 現在値 前回比  
 筋力…35（28） +1（+1）

|    |    |      |   |   |      |
|----|----|------|---|---|------|
| 耐久 | 36 | (29) | + | 1 | (+1) |
| 器用 | 29 | (22) | - | - | -    |
| 感覚 | 16 | (10) | - | - | -    |
| 習得 | 24 | (18) | - | - | -    |
| 意思 | 41 | (33) | - | - | -    |
| 魔力 | 42 | (34) | - | - | -    |
| 魅力 | 20 | (14) | - | - | -    |

名前..ウエンディ  
 種族..イエルス  
 性別..女性  
 職業..遺跡荒らし  
 Lv10 ↓ Lv11  
 ステータス：カッコ内は元の値

|     |     |       |   |   |      |
|-----|-----|-------|---|---|------|
| 生命力 | 110 | (100) | - | - | -    |
| マナ  | 90  | (80)  | - | - | -    |
| 狂気度 | 0   |       | - | - | -    |
| 速度  | 95  | (82)  | - | - | -    |
| 筋力  | 29  | (22)  | - | - | -    |
| 耐久  | 32  | (25)  | + | 1 | (+1) |
| 器用  | 40  | (32)  | - | - | -    |
| 感覚  | 33  | (26)  | - | - | -    |
| 習得  | 42  | (34)  | - | - | -    |
| 意思  | 25  | (19)  | - | - | -    |
| 魔力  | 24  | (18)  | - | - | -    |
| 魅力  | 22  | (16)  | - | - | -    |

名前..ネビネイル

種族..神の化身

性別..男性

職業..

Lv8

ステータス：カッコ内は元の値

| 現在値 |     | 前回比   |            |
|-----|-----|-------|------------|
| 生命力 | 100 | (100) | —          |
| マナ  | 80  | (80)  | —          |
| 狂気度 | 0   |       | —          |
| 速度  | 110 | (96)  | —          |
| 現在値 |     | 前回比   |            |
| 筋力  | 28  | (21)  | +1<br>(+1) |
| 耐久  | 28  | (21)  | +1<br>(+1) |
| 器用  | 20  | (14)  | —1<br>(+0) |
| 感覚  | 27  | (12)  | —          |
| 習得  | 18  | (12)  | —          |
| 意思  | 23  | (17)  | —          |
| 魔力  | 18  | (22)  | —1<br>(+0) |
| 魅力  | 18  | (12)  | —          |

**LV17..旅行者と幼な妻と仲魔達と 更に増える仲間達(前書き)**

またふえました。

けど、ここでストップする予定。

LV17..旅行者と幼な妻と仲魔達と 更に増える仲間達

642 日目

牢獄での生活は最悪だった。

外に出れたとき、冗談や洒落でなく『シャバの空気は上手い』という言葉を実感した。

あの後、ヨウインで食い倒れを行ったのは仕方のないことだ、と、思いたい。

あ、そうそう最近はキツチリとした休みを取ってなかったの、ここいらで休憩をすることにした。

で、休むならヴェルニースが一番かなと俺は思ったのだ。

だって、あそこの街が一番安全だし……某紅い英雄殿も居ることだし。

[illegible]Side  
Elysi  
on

今日は旦那様に用事があるといつて、ウェンディを伴いまたダルフィに来ていた。

私の用事は何時もどおり一つだけだ。

後、試したいものがあつたから旦那様の倉庫からお借りしてきたものもあつた。

「おや、まあお客さんですかあ」

相変わらず胡散臭く厭らしい顔をした商人だ。

「奴隷を寄越せ」

「今回は何人御所望で？」

私は金貨袋を置いて言う。

「この金で買えるだけ」

「どれどれ、改めさせてもらいますよう？」

そう言つて商人は財布の中を確認する。

「ふうん、ふんふん？ほほう、お客さんもなかなか稼いでいらつしやる」

「……御託は良らない、早く」

そうして幾人かの奴隷を購入した後、私はその効力を確かめるために偶々目に映った娼婦に向かってそれを振った。

「あああ!？」

娼婦はまるでイッテしまったかのような嬌声を上げると、次に辺りを見回し私と目が合う。

そして娼婦がやってきた。

「卑しい娼婦のチョロナめにございます、ご主人様」

「私の名はエリュシオン。名を呼ぶことを許す、覚えておきなさい」

この後、私が奴隷とチョロナを連れて乞食の洞窟へと向かうと、ネビネイルが居ました。

アイツはコチラを見つけると奴隷たちを引き連れる私を見て咎める

様に声を上げた。

「エリー殿その方々は一体？」

「……この際、ついでにやってしまうのも手、ですね」

そうしてウエンディに目配せをし、やらせた。

「！！」

「……ッ!？」

こっそりとネビネイルの背後ににじり寄っていたウエンディがネビネイルを羽交い絞めにし睡眠薬を無理やりネビネイルに飲ませ、眠らせた、それだけの話。

「ふふ、あなたは一応、旦那様が気を許しているから生かしておきます……ですが、少し私の言うことも聞くようになってもらいましょう。あと、今回の事もすっかり忘れてもらわなければいけないですね」

「……」

「ふふ、楽しみですね……」

ああ、早く強くなろう。

この程度の奴らでは高が知れているけど、ウエンディとネビネイルとチヨロナにはとても有用！

こいつらが強くなればご主人様も喜ぶ！  
だから……。

「はやく私ももっと強くななくちゃ」

力がなければ、全て失ってしまうのだから……。

## Side out

エリーが何やら企てて居るころ、ススムは倉庫で本を読んだりぐーたらしたりと、といった生活をしていた。

本音を言えば、ススムはエリーから目を離す気は無かったし、えっちい事もしたかったのだが束縛する気も無かったのだ。

ススムはぐでーっとまだ読んでいない本を探していると、緑の装丁の本を見つけた。

タイトルは『★妹の日記』と書かれている。

「こんなの、拾ったっけか？」

何かの小説かと思い拾い上げてページをめくる。

「うわ、本当に日記だよ……持ち主には悪いことをしたかな？」

ペラペラとめくると日々感じたことや最近のお気に入り、美味しかった食べ物のこと等についてイルヴァの日付で2日飛ばしで書かれていた。

「俺の日記と比べて大分まじめだな」

ススムの日記と比べるのは間違いだろう。

そう思いながら日記を適当に斜め読みしていると、突如本が鈍く光り始めた。

「な、なんだ?!」

思わず飛び跳ねて後退し、カタナに手をやるススム。



光はどんどんと強まり、そして強烈な選考がススムに襲い掛かる。

「くっ!？」

光は直ぐに止み、そこにあったのは何故か、本ではなくススムに近い年齢の少女だった。

少女は本のあった位置で気絶するように横になっていた。

「な、なんなんだこの超展開はっ!？ファンタジーならエロゲっぽい展開も許容されるっつーのか!？」

「う……んう」

慌てるススムを尻目に少女が目を覚まし、ススムを見るとぽあと明るく笑いかけてこういった。

「お に い ち ゃ ん」

ススムのなかの時間がこの瞬間、完全に凍結した。

勿論周囲の時間は流れている。

詰まり、ナニコノテンカイ、とススムの脳が超展開についていけなくなり、更にここ1年半強であった様々な環境の変化が齎していたストレスなどもあわせて脳内を駆け巡った瞬間、ススムの脳はオーバーフローを起こしフリーズ、気絶してしまったのだ。

そして次に目を覚ました時には、倉庫に備え付けてあったそれなりに大きく寝心地の良い落ち着くベッドの上で目を覚めたのだった。

「なんだ、夢……夢じゃないのか」

「あ、お兄ちゃんおはよう！」

「待て待て、何で俺が『お兄ちゃん』？俺は君を知らんし俺に妹が居たことなんて丸でなかったんだが！？」

「え、でもお兄ちゃんはお兄ちゃんだよ？」

その返事を聞いた瞬間、話を通じない、と理解した。

これは同時に融通が利かないという意味であり、イコールでススムの意思なんて重要では無いという意味である。

詰まり、事実として自分をススムの妹であると強く認識している年頃の女性がススムの元に沸いて出た、これが全てである。

「エリーに何て言えば良いんだ」

「エリー？」

「俺の奥さん」

「お兄ちゃん結婚したの！？」

賑やか過ぎる自称妹にススムは頭痛を感じ始める。

「どうしてこうなった……つか、お前は本当に何者なんだ？」

「ウレルだよ、お兄ちゃんの血の繋がらない妹だよ」

「ああ、つまりは義妹設定なのね」

そう答えながらススムは頭を抱えつつもこの妹という存在について思考することにした。

先ず、一番大事なのは本を読むことで現れたという点だ。

つまり、それによって召喚、あるいは生成されたと言う事ではないだろうか？

ただ、召喚であるとは考えたくないなあ、とススムは思う。  
なので希望的観測を多分に盛り合わせて推測する。

ずばり、このウレルという義妹設定の自称妹はさっきの★妹の日記  
が作り出した魔法生物の類だ！と。

そしてあの日記を読んだ人物をお兄ちゃん、ないしお姉ちゃんと呼  
ぶようにインプットされているのだろう。

こんなの作ったのはどこの変態だ……。

ススムはそう思わずにはいられなかった。

「ところでウレル？キミ何歳よ」

「19歳だよ」

この世界では年齢は誕生日ではなく年を越すごとにカウントされる。  
なのでススムと同じ年、ということになるのだろう。

「……はあ」

自称妹が年上というカミィユ状態でなくて良かったと少しだけ思っ  
てしまうススムだった。

「とりあえず、連れて行くべきかあ…」

目の前に居るウレルは、ススムからして貧弱にしか見えない。

それこそ、ゴブリンの一太刀であっさり切り殺されるぐらいに。

ススムはそれを思いながら同時にエリーとの出会いの時を思い出す。

あの時もいきなりご主人様扱いだったなあ、と。

「ウレル、コレとコレとコレ持って、武装して」

「え、うんわかったよー」

そうしてススムとウレルはヴェルニースの酒場に向かう。  
ここがエリー達との合流場所だからだ。

さて、何か頼もうかと思っていたところで吟遊詩人をいたぶっていたロイターがススムの所へやってきた。

この男、音楽にはやたらと厳しいが職務にはまじめなのだ。

今回は新しい女を連れてくるススムをいぶかしんでの行為だろう。

「おい、貴様……その娘はどうしたんだ？」

「あ、ロイターさん。実は……」

旅行者、事情説明中……

「なるほどな、そういう話なら聞いたことがある。本を読んだら見知らぬ女が現れて身内を名乗る、という話だったか……。まさか実例を見せられるとは思わなかったが、な。噂では基本的に害は無いらしい。……まあ、貴様は女好きの様だし丁度良かったじゃないか」「……確かにそう言う所はあるのは認めますが、別に好き好んで女性メンバーが増えたわけじゃないんだけどなあ。ウエンディだってそもそもエリーの部下みたいなものだし」

困った風に言うススムにロイターは鼻で笑って言う。

「ふん、何を言うのやら……。まあ良い、貴様がハーレムを作ろうが何をしようが自己責任だ、刺されない様にだけ気をつけろ」

「ご忠告痛み入ります。もう、本当に」

その数刻が、嫁VS義妹対決になるのかと戦々恐々としていたススムだが、そんな事にはならなかった。

むしろ仲がよさそうに見えたのである。

「主殿、私には正直アレで仲がよいと見えるあなたの目を疑います」  
「……言わないでくれ、うん。俺の精神安定の為に」

そういえば、とススムは言いながらネビネイルに尋ねる。

「なんで彼女が仲間になってるのさ？」

「彼女：ああチョコロナ殿ですか。なんでもエリー殿を気に入って付いてきたらしいのですが」

その後、とりあえず依頼に出ようかというススムの言葉でまたノーステイリスを駆け巡り、ネフィアに潜った所で彼は一つの事実を忘れていた。

ウレルが戦闘においては素人であるという事実を。

そしてネフィアを一つ探索し終えた時はそれでも大丈夫であったが、二つ目に挑んだ時にそれは起きた。

一面敵だらけといういわゆるモンスター部屋。

そこに突入したのだ。

普段であれば余裕で倒しきれぬ敵だったのだが、一人だけそうは行かない人物が居た。

それはウレルだ。

戦闘経験の薄い彼女はあっさりと猟犬たちに囲まれ重傷を負ってしまったのだ。

「おい、大丈夫か!？」

「主殿！下手に揺すってはいけませんぞ！」

「！」

「とにかく、脱出しましょう旦那様」

そうしてススム達は脱出したのだが、この時ススムは自分が持ち物

を持ちすぎている現状に気付いていなかった。  
そして……。

「ぐあ……重過ぎる」

という最期の言葉を残してプチっと荷物に潰されてしまうのだった。

次にススムが目覚めると、そこは懐かしい乞食の洞窟だった。

「あ……れ？」

「気付かれましたか？」

傍にいたのはエリーだ。

以前よりは和らいだとはいえ、やはり死んだ魚の目だ。  
戦闘時とかのあのギラギラとしてののに、何で普段はこうなのだろう、とススムは思っ、ふと思い出した。

「ウレルはどうなった？」

「ネビネイルとウェンディにヴェルニースの癒し手の所まで運ばせました」

「……そうか。しかし、俺も久しぶりに死んじゃったなあ」

ススムはそれだけ言ってため息をついた。

気付けば既に2年、こちらで旅行者というか冒険者として剣と魔法の世界でススムは過ごしていた。

目標は元の世界への帰還。

だが、気付けば自分を慕っている……と思う女の子と結婚し、そして気付けば仲間も増えて今回は自分を兄と慕う義妹設定の女性まで出てきてしまっていた。

これは、相当に面倒で、相当に厄介で、相当にファンタジーで、相当に楽しい生活だ。

勿論、未だに向こうと違う事で受けるストレスもある、それは間違いない。

だが、それでも……。

「エリー、この世界は楽しいな」

「……旦那様？」

突然のススムの言葉に、エリーは何時もの様な死んだ魚の目でススムを見る。

「エリー、もっと楽しめ。世界はどん底で、エーテルの風だのモンスターだの悪人だので悪い事もやたら多いが、それでもこの世界は楽しいぞ」

「……旦那様は、この世界が好きですか？」

「……さあ？強いて言うなら、楽しいとは思ってる。剣も、魔法も、冒険も、モンスターも、そして神様だって向こうでは見ることに、知る事、感じる事さえ出来なかった。それが出来るこの世界には感謝しているよ。だからこそ、手を伸ばしたくなる」

ススムはそう言って何も無い場所に向かって手を伸ばし、開いていた手を握り、拳にする。

「旦那様は……何に手を伸ばすのですか？」

「俺の興味が向いたもの、全てだ。それは武であり、知識であり、魔道であり、金や宝も含める。だが、一人では決して届かない、分かるよな？」

ススムはこの世界に来て唯一つ、決定的に変わったところがある。

それは押さえつけていた自分の欲求、能力<sup>チカラ</sup>への渴望を抑えなくなつた事だ。

ススムは向こう……日本にいた頃は決して何かに優れる人間ではなかった。

強いて言うなら全てにおいて普通と言わしめる人間だった。

だが、全体的に見ればそれは中の下というようなレベルで決して良い物とも言い難かった。

だからこそ、ススムは当時からチカラというものに憧れを抱いていた。

例えば、ゲームのキャラになりきる様な遊び、テーブルトークRPGの類は、友人に誘われて以来良く参加する様になったりした程だ。変身願望、殺戮、破壊願望があったと言っても良い。

そして、その願望はこの世界にて叶えられた。

なんと言っても剣と魔法の世界で、そして何より『殺しても良い人間』とそれ以外が存在する世界。

それを認めたくない理性が強いストレスとなっていた。

時に大怪我を負い、涙と悲鳴を堪えつつ全力で命を燃やせる殺し合いは辛く、そして甘美だった。

それら全てを含めて、全てが楽しい、ススムはそう感じていた。

「旦那様……」

「エリー」

二人は顔を近づけ、唇を重ね合わせる。

そしてそのまま若い二人はそのまま一つとなって交わりあうのだった。

Side Nebineil

「妹殿、お怪我の具合はドウでしょう？」



「あ、ネビさん！もう大分いいと思うのだけど、癒し手さんは完治には一ヶ月養生しなさいって……うー、お兄ちゃんと一緒に痛かったのになあ」

癒し手殿に癒されるまで文字通り死に体と言った様子だったのはどこふく風といった様子で元気そうに振舞う妹殿を見て私は思わず苦笑してしまう。

彼女は事実一ヶ月どころかそれ以上入院して然るべき重傷を負った。だが、ここの癒し手殿の処置が良かったこともあってようやく一ヶ月という期間まで縮める事が出来るのだ。

その彼女だが、最初……エリー殿は見捨てようとした。

それはさもありなんと私は思う。

力も何も無い、ただ主殿を慕い、兄と呼ぶ彼女には過去も何も存在しない。

ただ、兄を慕うということだけが存在に刻み付けられた人形に過ぎないのだ。

そんな愛玩人形として存在する彼女をエリー殿が認めるはずも無い。エリー殿が価値を見出すのは『チカラ』という物だけ。

そして主殿は異世界出身者であるからなのかその成長は普通の人間と比べ目覚ましいものがある。

いや、きつとそれは違うだろう。

主殿が力……否、あらゆる『チカラ』に対して貪欲だ。

一見、主殿はそうでもないように振舞うが、彼は力を振るうことに喜びを感じ、そしてそれをいけないことだと理解し己を律する事もしている。

だが、やはり力に魅せられているのだろう……戦闘時にエリー殿が見せる武と狂気に彼は見惚れてしまっている。

そしてそれはエリー殿も同じ。

全く、妙な所で似た物夫婦じゃ。

「……」

「あ、ウェンディさんとチヨロナさんも来てくれたの？ありがとうございます！あ、お花まで！」

「……」

「うん、それじゃあその花瓶にお願いしまあす♪」

……この二人、何気なく普通に会話してないかのう。  
女同士故に通じる物でもあるのじやろか？

主殿、早く来てくだされ……女人だけの環境は微妙に疎外感が……！

結局、主殿がヴェルニースに来たのは翌日の昼間じゃった。

……主殿おー！

## Lv17..旅行者と幼な妻と仲魔達と 更に増える仲間達(後書き)

娼婦を仲間に入れてみたのは、単に好奇心で……自分で訓練費用稼いでくれたら嬉しいな、とか思ったり。

ちなみに、ススムがお世話になった娼婦をチョイスしてみました(あ妹の方は『苔むした』とあったので何かと思ったらコレでござったの巻き。

似たようなトラップで猫妹とかお嬢が出なければ良いな、と思っています。

では、いつものステシです。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv15 ↓ Lv16

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) 一一一

マナ 150 (150) 一一一

狂気度 0 一一一

速度 115 (100) +3 (+0)

名声 8859 +4079

カルマ 20

現在値 前回比

筋力.. 3 1 (2 6) \* + 1 (+ 2)  
 耐久.. 3 6 (2 3) + 4 (+ 1)  
 器用.. 4 1 (2 0) \* + 1 (+ 0)  
 感覚.. 3 1 (2 4) \* + 4 (+ 3)  
 習得.. 2 5 (2 0) + 3 (+ 3)  
 意思.. 3 3 (1 6) + 6 (+ 1)  
 魔力.. 2 2 (1 7) \* + 1 (+ 1)  
 魅力.. 2 6 (1 5) + 1 1 (+ 0)

## 装備

頭 .. ☆闇を砕く騎士兜『忘れられぬ迫害』- 1 [0, 1 0] : (運勢維持, 信仰\*, マナ限界\*, 暗黒耐性\*)

首 .. ★《謎の貝》[2, 1 4] : (信仰\*\*\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*\*\*\*, 運勢+3, 神電波受信)

背中.. ミスリルマント[7, 4] : (耐酸性, 不燃, 詠唱\*)

胴体.. 白銀の厚鎧+2 [5, 1 8] : (暗黒耐性[\*\*])

利手.. アダマタイトカタナ+2 (4 d 6 + 9) : (耐酸性, 不燃, 貫通20%, 両手持ち適正, 耐久+3)

手 ..

指 .. 強力なシルクデコレートリング : (耐久維持, 解剖学\*, 幻惑耐性\*)

指 .. 耐盲目の鉄の指輪- 4 : (不燃, 感覚維持, 火炎耐性\*, 盲目無効)

腕 .. 闇を砕く鉄鎖の手袋+1 (6, 0) [6, 5] : (不燃, 盾\*\*, 遺伝子学\*, 暗黒耐性\*)

腰 .. ミスリルガードル[5, 4] : (不燃, 耐酸, 詠唱\*)

足 .. ★《ダルIIイIIサリオン》+1 [1 6, 7] : (耐酸性, 不燃, レア, 運勢維持, 旅歩き\*\*, 隠密\*, 器用+6, 呪い保護\*\*\*\*, MAP移動短縮\*\*)

遠隔…★《異形の森の弓》：（耐酸性，不燃，レア，異次元の手「\*\*\*」，毒追加攻撃「\*\*\*」，感覚維持，器用維持，詠唱「\*」，毒耐性「\*\*\*」，器用+10）

矢…☆儂き矢束（1d8）（3）：（時止弾x4，炸裂弾x10，運勢+3）

# ◆スキルと特殊能力

|      |                 |      |                 |
|------|-----------------|------|-----------------|
| 戦術   | L v 1 5 . 7 0 5 | ↓    | L v 1 7 . 1 4 7 |
| 重量挙げ | L v 1 7 . 1 6 5 | ↓    | L v 1 8 . 5 9 5 |
| 両手持ち | L v 9 . 5 6 0   | ↓    | L v 1 1 . 5 0 1 |
| 治癒   | L v 2 0 . 3 2 3 | ↓    | L v 2 0 . 7 8 6 |
| 採掘   | L v 1 . 3 9 5   | ↑New |                 |
| 盾    | L v 1 3 . 4 1 0 |      |                 |
| 重装備  | L v 6 . 0 0 5   |      |                 |
| 中装備  | L v 8 . 3 7 6   | ↓    | L v 8 . 6 2 1   |
| 鍵開け  | L v 4 . 8 9 2   | ↓    | L v 5 . 6 3 4   |
| 二刀流  | L v 4 . 2 6 6   |      |                 |
| 軽装備  | L v 5 . 4 2 9   |      |                 |
| 回避   | L v 1 4 . 9 6 8 | ↓    | L v 1 5 . 1 9 5 |
| 隠密   | L v 1 6 . 6 5 0 | ↓    | L v 1 8 . 1 3 1 |
| 自然鑑定 | L v 8 . 3 4 5   | ↓    | L v 8 . 8 2 8   |
| 釣り   | L v 6 . 8 8 2   | ↓    | L v 7 . 0 7 7   |
| 見切り  | L v 1 . 0 0 0   | ↓    | L v 1 . 8 4 5   |
| 読書   | L v 1 6 . 4 6 6 | ↓    | L v 1 8 . 2 3 4 |
| 遺伝子学 | L v 6 . 3 1 0   | ↓    | L v 8 . 3 0 8   |
| 解剖学  | L v 2 . 9 0 0   | ↓    | L v 3 . 8 7 1   |
| 暗記   | L v 3 . 6 5 8   | ↑New |                 |
| 栽培   | L v 3 . 2 9 2   | ↑New |                 |
| 料理   | L v 3 . 4 8 2   | ↓    | L v 3 . 8 1 4   |
| 信仰   | L v 1 9 . 2 1 8 | ↓    | L v 2 0 . 3 8 2 |

旅歩き Lv16. 853 ↓ Lv17. 050  
 瞑想 Lv16. 853 ↓ Lv17. 690  
 詠唱 Lv5. 792 ↓ Lv6. 458  
 魔道具 Lv7. 622 ↓ Lv8. 110  
 交渉 Lv21. 660 ↓ Lv23. 253  
 投資 Lv12. 613  
 演奏 Lv2. 484

◆武器の専門

長剣 Lv10. 430 ↓ Lv11. 741  
 斧 Lv4. 000  
 格闘 Lv7. 151  
 鎌 Lv4. 000  
 鈍器 Lv4. 000  
 槍 Lv4. 404  
 杖 Lv4. 018  
 短剣 Lv9. 381  
 弓 Lv13. 190 ↓ Lv13. 316  
 クロスボウ Lv4. 000  
 投擲 Lv7. 711  
 銃器 Lv4. 000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 普通の耐性\*\*  
 冷氣耐性 弱い耐性\*\*  
 電撃耐性 弱い耐性\*\*  
 暗黒耐性 普通の耐性\*\*  
 幻惑耐性 耐性なし\*  
 毒耐性 強い耐性\*\*\*  
 地獄耐性 耐性なし  
 音耐性 素晴らしい耐性\*\*\*+

神経耐性 耐性なし  
混沌耐性 弱い耐性  
魔法耐性 耐性なし

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」

「変異」あなたの傷跡は再生する「自然治癒強化」

「変異」あなたの脚はともしなやかだ「速度上昇」

「変異」あなたは美声を持っている「魅力+5」

「変異」あなたの脳は機械化している「暗記+4」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「フィート」貴方は税金の計算に強い「税金7%減」

「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は神が発する電波をキャッチする

あなたの装備は盲目を無効にする

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性

職業…戦士

Lv12

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) — —

マナ 80 (80) — —

狂気度 0 — —

速度 114 (96) — —

現在値 前回比

筋力.. 35 (28) — —

耐久.. 36 (29) — —

器用.. 29 (22) — —

感覚.. 16 (10) — —

習得.. 24 (18) — —

意思.. 41 (33) — —

魔力.. 42 (34) — —

魅力.. 20 (14) — —

名前.. ウェンディ

種族.. イェルス

性別.. 女性

職業.. 遺跡荒らし

Lv10 ↓ Lv11

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力110 (100) — —

マナ 90 (80) — —

狂気度 0 — —

速度 95 (82) — —

現在値 前回比

筋力.. 29 (22) — —

耐久.. 33 (26) +1 (+1)



|      |    |      |   |         |
|------|----|------|---|---------|
| 器用.. | 40 | (32) | — | —       |
| 感覚.. | 34 | (27) | — | +1 (+1) |
| 習得.. | 42 | (34) | — | —       |
| 意思.. | 25 | (19) | — | —       |
| 魔力.. | 24 | (18) | — | —       |
| 魅力.. | 22 | (16) | — | —       |

名前..ネビネイル

種族..神の化身

性別..男性

職業..

Lv8 ↓ Lv11

ステータス：カッコ内は元の値

| 現在値 | 前回比 |
|-----|-----|
|-----|-----|

|     |    |      |   |   |
|-----|----|------|---|---|
| 生命力 | 90 | (90) | — | — |
|-----|----|------|---|---|

|    |     |       |   |   |
|----|-----|-------|---|---|
| マナ | 150 | (150) | — | — |
|----|-----|-------|---|---|

|     |   |  |   |   |
|-----|---|--|---|---|
| 狂気度 | 0 |  | — | — |
|-----|---|--|---|---|

|    |     |       |   |   |
|----|-----|-------|---|---|
| 速度 | 139 | (116) | — | — |
|----|-----|-------|---|---|

| 現在値 | 前回比 |
|-----|-----|
|-----|-----|

|      |    |      |   |         |
|------|----|------|---|---------|
| 筋力.. | 29 | (22) | + | +1 (+1) |
|------|----|------|---|---------|

|      |    |      |   |         |
|------|----|------|---|---------|
| 耐久.. | 29 | (22) | + | +1 (+1) |
|------|----|------|---|---------|

|      |    |      |   |         |
|------|----|------|---|---------|
| 器用.. | 21 | (14) | + | +1 (+0) |
|------|----|------|---|---------|

|      |    |      |   |   |
|------|----|------|---|---|
| 感覚.. | 27 | (12) | — | — |
|------|----|------|---|---|

|      |    |      |   |   |
|------|----|------|---|---|
| 習得.. | 18 | (12) | — | — |
|------|----|------|---|---|

|      |    |      |   |   |
|------|----|------|---|---|
| 意思.. | 23 | (17) | — | — |
|------|----|------|---|---|

|      |    |      |   |         |
|------|----|------|---|---------|
| 魔力.. | 19 | (22) | + | +1 (+0) |
|------|----|------|---|---------|

|      |    |      |   |   |
|------|----|------|---|---|
| 魅力.. | 18 | (12) | — | — |
|------|----|------|---|---|

名前..娼婦のチヨロナ

種族..ノールランド

性別..女性

職業..遺跡荒らし

L V 1

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) — — —

マナ 90 (90) — — —

狂気度 0 — — —

速度 94 (81) — — —

現在値 前回比

筋力..27 (21) — — —

耐久..30 (23) — — —

器用..42 (34) — — —

感覚..35 (28) — — —

習得..36 (29) — — —

意思..25 (19) — — —

魔力..20 (14) — — —

魅力..28 (21) — — —

名前..妹のウレル

種族..ローラン

性別..女性

職業..遺跡荒らし

L V 1

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) — — —

マナ 80 (80) — — —

狂気度 0 — — —

| 魅力 | 魔力 | 意思 | 習得 | 感覺 | 器用 | 耐久 | 筋力 | 速度 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| .. | .. | .. | .. | .. | .. | .. | .. |    |
| 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 1  |
| 6  | 2  | 1  | 7  | 8  | 9  | 6  | 3  | 2  |
| (1 | (7 | (6 | (1 | (1 | (1 | (1 | (8 | 7  |
| 0) | )  | )  | 1) | 2) | 3) | 0) | )  | (9 |
|    |    |    |    |    |    |    |    | 6) |
| —  | —  | —  |    |    |    |    | —  |    |
| —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |    |
| —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
|    |    |    | —  | —  | —  | —  |    | —  |
|    |    |    |    |    |    |    |    | —  |
|    |    |    |    |    |    |    |    | —  |

**Lv18→Lv19..旅行者一人旅　→パルミアに咲いたっぽい赤い花→（前巻**

気が突いたらレベルが二つ上がったでござるの巻き。

しかも結構熱中してたので簡単な流れぐらいしか覚えていないという。

20101003

サブタイのLvを修正しました。

今、19↓20間のプレイしてるんですが、敢えて分ける必要はないな、と思ったので。

話数的には微妙な感じですが、基本はレベル毎なんでこれもありと思っただければ幸いです。

……以上、言い訳でした。

## Lv18～Lv19…旅行者一人旅　～パルミアに咲いたつばい赤い花～

745日目

ウレルが復帰した。どうやらネビネイルやウエンディと少し仲良くなったようだ、良いことだ。

そういや、驚いた事なんだがエリーってまだ初潮が来ていないらしい。

正直嬉しいのやら複雑なのやら、である。

でも、今子供が出来るとうちの最大戦力が抜けることになるので非常に難しい。

……こういう風に考えちゃうのはなんだか染まってきた証拠だねえ。

さて、今日から俺は一人旅することになった。

理由は至極簡単で『戦力が低すぎるから』なのだ。

俺一人であればどうとでもなる。

それこそ、こういうとアレだが俺とネビネイルは死んでも大丈夫な人間だ……人間でいいんだよな？

まあいいや。

だけど、エリーを始めウエンディもチョコロナもウレルも『不死身の人間』と言うわけではない。

そこを懸念したエリーが、ネビネイルも含めて強化訓練を行うことを宣言したのだ。

俺も参加したいと思ったのだが、その間俺にやってきて欲しいことがあると言われた。

ぶっちゃけ金策である。

一応、当分は金に余裕があるのだが、それでも装備を整え、更に今

の拠点である洞窟からそれなりの拠点を得る必要もある。二人だけなら洞窟でもそこそこの暮らしはいいのだけど、今は5人。全うな拠点として考えると無い。

そんな所を使うのは盗賊かモンスターぐらいなものだ。

だから黙過の目標は拠点を得ることだ。

だが、それ以上にやらなければならないこともある。

パルミヤを、これ以上放置しておくことは出来ない。

あの街が今のままエイリアンに半ば占拠された状況では他の街に多大な影響が出る。

事実ヴェルニースにもエイリアンの流出があったのだ。

まあ、ぶっちゃければ俺が護衛で連れ出したクライアントに寄生してた奴なんだが。

そういうわけでせめてパルミヤを消し飛ばす必要がある。

これだけは間違いない。

だから、今日から俺は、悪を名乗ろう。

[illegible]Side  
Elysi  
O

旦那様が乞食の洞窟を旅立ってから4ヶ月ほどが経過した。

その間に私がしたことと言えば先ずはウレルの強化であった。

何時もの様に遺伝子複合機を使ったのは言うまでも無いが、同時に戦いの指導をしたのも言うまでも無い。

ただ、旦那様がダルフィ付近でよく目撃されると言う話を聞くので、何となくではあるが顔を合わせ辛い。

そういう思いが私にはあった。

4ヶ月前、私は旦那様がダルフィから何かを担いで西に向かうのが見えた。

追うべきか否か、迷った。

だが、既に奴隷を購入し終えたばかりの私は時間を食うわけにも行かないので帰宅する事を選ぶ以外になかった……。

そして数日後、パルミアの方面に巨大なキノコのような形をした雲を私は、私達は見る事となる。

そしてその事件の直ぐ後に、旦那様の指名手配が行われた。

容疑はパルミアを襲った強大な爆発事件を引き起こした犯人の最重要容疑者として。

私は即座になるほど、と思った。

旦那様は世界に対し声を上げた。

自分はここに居るぞ、と声を荒げて宣言したのだろう。

旦那様を始めて見た時は頼りない、と思っていた。

だが、その見識はここにいたるまでに、そして今回のコレではつきりと分かった。

旦那様は、誰よりも残酷に冷徹になれる人だ。

あの爆発は、きっとエイリアンを一掃する為の物に違いない。

旦那様は何度もパルミアに向かってはエイリアンを根絶しようとしてきた。

時に寄生したエイリアン殺す為の毒薬まで用意してそれを配ってまで真摯に取り組んでいた。

だが、パルミア政府はそこまでの行為を行わなかった。

だから何時まで経っても駆逐できないし被害が広がる。

旦那様はそれを嘆いていたのだ。

自分達だけでは根絶できないと言う事実。

そして、今回の爆発事件なのだろう。

今回の爆発事件でパルミアの街全域があゝの爆発に飲まれた灰燼と消えた。

死傷者数は前例を見ず、8割の人口が消滅したそう。

王城も被害を逃れきらず、多大な損害を受けたそう。

そして爆発は被害の中心点である宿屋あった場所であるとされ、最後にそこに入ったのはススムという観光客に似ていたという話が辛くも生き残った冒険者の遺言である。

そういうわけで最重要容疑者は宿屋の店主、観光客のススム、市民のカザートフと言われている。

そう思っていると、目の前の空間が突然歪んだ。

「これは……」

驚いている私を尻目に歪みは穴となり、穴の向こうにネフィアと思わしき空間が見えた。

そして……。

「ただいまー」

やたらスッキリとした表情の旦那様がその穴を通って帰ってこられたのだ。

そして旦那様はこう言った。



## Side out

パルミアを火の海に変え……だが、雨なので直ぐに鎮火。それを見届けエイリアンの殲滅を確認した後、パルミアの爆破で容疑者の一人に数えられたススムは、捕まるのも嫌だったのでダルフィを拠点にほとぼりが冷めるまでダルフィの住人相手に依頼をこなして生活していた。

だが、当然ながらそんな生活は旅歩きをしたりネフィアに籠るのも好きなススムには窮屈でしかなく、結局ある程度過ごした所で別の場所に移動した。

それはアクリ・テオラという剣と魔法の世界に似つかわしくないハイテク都市だ。

ここは幸いと言って良いのか他の都市とは違い、パルミア政府の手の入らない場所の一つでもある自治都市だ。

ここで暫く演奏の腕を磨くためにストリートミュージシャン張りに演奏しては石を投げられ金を投げられという生活をしていた。

勿論、その生活も長く続けたわけではない。おおよそ一週間ほどでまた旅に出たのだ。

今度はネフィアを渡り歩く旅だ。

「聞いて驚け！なんと必殺技を編み出したぞ！」

「必殺……技？」

「まー必殺と言うと語弊があるんだけどな。あれだ、集団戦における戦術の一つって言うかなんていうかそんな感じ？」

「はあ……具体的にはどういふものなのでしょう？」

「ああ、とりあえず名前はウィンドミルと名づけたんだけど」

「……風車……まさか」

「おう、ぶっちゃければ回転切りだな。まあただ回転するわけじゃなくて一応色々構えとか斬り方もあるんだけどな。これで包囲された時は戦いが楽になったぞ。実際使いまくってたしな」

そう言って胸を張るススムをエリーはまじまじと見る。

「旦那様、強くなられたのですね」

「当然。まだまだ先は長いけど色んなネフィアに潜って色々切り倒して来たからな。どんなに弱い奴でもアレだけ戦って生き残りやそりゃ強くなるさ」

そう言って方を疎めるススム。

体のあちこちに、装備のアチラコチラに激戦の跡が見えるが本人はピンピンとしているのだから大したモノだ。

「よく、ご無事で……」

「癒しの女神ジュアの祝福と治癒の宝玉がなけりやもつと早くに悪い形で戻ってきてたかも知れんけどね。それよりも、そちらはどうだい？強化訓練、進んでる？」

ススムの言葉に、ピシッと一瞬だけ固まるエリー。

と、言うのも強化訓練は余り進んでいないのだ。

何故かと言えば単純な話でまず出回る装備が残念な物ばかり。

これでは幾ら頑張っても良い物にありつけない、という状態だ。

二人が旅を始めた頃にミスリル装備と出会えたのはそう考えると幸運だっただろう。

次に、奴隷の質が悪く遺伝子複合も余り捗っていないのだ。

ウレルのような圧倒的に才も能力もない人間ならば劇的な変化に見えるだろう。

だが、ある程度力があるエリー、ネビネイル、ウエンディ、チヨロナの4人が新しく強化するためには質の良い遺伝子が必要となるのだ。

おまけで、遺伝子複合が全く不可能な人間も居る。何故か遺伝子複

合機はススムには使うことは出来ない。

と、言うのもススム自身が一度面白そうだと言って自分が取り込む側で出来るかどうか検査をした事があったのだ。

だが、結果はNG、不可能である。

ススムが入った瞬間にNGばかり出て全く機能しなくなるのだ。

これに関しては細かい理由は明らかにされていないし、製作元に問い合わせても今忙しいから後にしろというばかりなのだ。

「今はウエンディ、ネビネイル、チョロナの3人には買出しを頼んでいませんが、ウレルがここに残ってますが、会われますか？」

「ん、そうだな。長い事あってなかったし少し顔見せぐらいはしておくか」

「わかりました」

そうしてエリーがウレルを呼びに行き、そして。

「おにーちゃん！」

年齢19歳、ややロザミアな感じの義妹がタツクル気味にススムに抱きついた。

これでススムが武装していたならウレルが痛い目にあっていただろうが、流石に我が家出まで武装していたくないススムは既に武装解除して私服姿だった。

そのため、モロにその抱きつきタツクルを受けてしまい、倒れる。

「お兄ちゃん、元気にしたた！ちゃんと毎日食べてた！？」

「あーはは、ウレルは元気そうだな。にーちゃんは嬉しいぞ」

やや疲れた様子で苦笑しながらススムはそう言って、ウレルを少し避けて体を起こす。

「エリーとは仲良くやれてるか？」

「うん、けどエリーってば何時も訓練厳しくて困っちゃう。でも、お兄ちゃんの力になる為だからウレル頑張るよ！」

「そか、ありがとうな、ウレル。エリーもみんなの監督、大変だろう？結婚してからコッチ、全然休ませてやれてないな、本当スマン」

「いえ、そんな事はありません。旦那様こそかなり大事になっている様子ですが、お疲れではありませんか？」

それはススムに掛かってる嫌疑に関することだ。

だがススムは問題ないと笑って言う。

「あ、それよりも大分纏まった金が手に入ってきたから2〜3ヶ月以内に引越すからそのつもりでいてくれよう。確かセレブ邸が15万ちょつとで買えるから、本気出せば直ぐなんだけどねー」

それよりももう少し、力を蓄えたい。

ススムはそう言って笑う。

ただ笑ったわけではない、自分自身の可能性、それがこの様に伸びると思っていなかったが故に今が一番楽しいのだ。

元の世界では欠片も役に立たない剣と魔法の才能。

元の世界では役に立たない趣味で終わる旅の知識と技術。

其々の街の住人と関わる冒険者の仕事。

そして迷宮の洞窟や森、塔や砦から金銀財宝を漁るこの生活はススムにとってトンでもなく理想的な刺激だった。

だが、それを味わい尽くすには力が足りない。

「それじゃ、そろそろ行くよ」

ウレルがもつとじゃれたそうにしているが、ススムは今度は今回よりも早く帰ってくるから、と言って押しとどめる。

「あ、そうだエリー」

「はい、なんでしょうか？」

ススムは背を向けたまま言う。

否定する気は無いけど

あんまりズルして怠けていると 後で困るのはキミ自身だよ？

「それじゃあ、いってきます」

ススムが出て行ってから暫く、エリーは動けなかった。  
そんなエリーをウレルは不思議そうに眺めていた。

Lv18～Lv19…旅行者一人旅　～パルミアに咲いたっぽい赤い花～（後妻

と、言うわけで「パルミアよ、私は帰ってきたぞー！」&旦那様は結構前から察していたでござるの巻き。

そりゃ、自分の持ち物（遺伝子複合機）を使用したことも少し調べれば分かるし、奴隷商人とだって依頼を通せばそれなりに付き合  
いが出来るのだから気が付かないわけがないデスヨネー。

でも、黙認します。

それがこの世界に染まるってことなんだと思います。

弱肉強食、それこそがElonaの常識です。

今回はうっかりレベル二つあげちゃったのでステシさらしは次回に延期します。



「燃え尽きよ！」

「きゃあ?!」

「主殿！次はヴェルニースで……くっ、義妹様が！レイハンド！！」

襲い来る悪漢の剣を避け、避け切れなければ防具で受け止め受け流し、つつ二人は会話を交わしていた。

少し外れた所では、ウェンディがショットガンを乱射して盗賊団の暗殺者を纏めてなぎ払っていた。

「ひい！！？何なんだこのアマは?!」

「……!!!!」

「その首、縊り落してくれるわ！」

そして突出したエリーが盗賊団の首領の首を大鎌の一撃で跳ね飛ばす。

「盗賊団首領！討ち取ったり！」

この様に一行は漸く盗賊団について勝てるようになったのだ。時折危うい場面もあるが、それでもこれは大きいのだ。

とはいえ、全てが順調に行っているかと言えば、そうでもなかった。

「この下手糞がっ！」

「へぶっ！」

「うるさい！」

「のう?!」



「だまれ!!」

「ちょ、え、ぎゃー!?!」

と言った感じで演奏の特訓としてパーティに紛れ込んで派手に石を投げつけられ、ススムは気のせいだと思おうとしているがバツチリと仲間達にも石を投げつけられ怪我を負っていた。

「主殿、もう少し修練を積んでから来られた方が良かったのでは? レイハンド!」

「ぐっ……」

あきれた様子のネビネイルからレイハンドを受けて何とか体を起こすススム。

ネビネイルも自身の主の努力は認めるものの、何か方向性間違っていないかと首をひねっている。

そも、何で演奏で死に掛けてまで人前でやろうとするのかが彼にとって理解できなかった。

だがススムに訊いても納得良く理由は出ないだろう。

何故ならススムは下手糞である自覚はあるのだが、これで意地っ張りの負けず嫌い。

故にこれは意地の張り合いなのだ。

相手に認めさせてやると言う意地の。

特に最大の目標はザナンの昼行灯である。

その為だけにプラチナコインを大量に持ち出してヴェルニースにて妙に縁のあるトレイナーのリーシュに頼み込んで演奏指導を受けたぐらいだ。

それぐらいススムは本気で演奏に取り組んでいた。

だが、ネビネイルは思う。

「（じゃからと言って、ホルン（アレ）で演奏するのはまた難易度が高い気がするんじゃないか）」

自分の主には何か考えがあるのだろう、そう思って敢えて言わないが、ホルンよりも素直にリユートなり何なりを使えばいい気がするのだ。

実際、拠点である邸宅にはリユートもあるし、かなり重いがハープも置いてあるのだから。

「（もしも単純に意地でやってる様じゃったら……よく言えば純粹じゃな）」

悪く言えばバカなのだが、そこは考えないようにするネビネイルは従者の鏡であるのかもしれない。

流石は神が直接遣わした存在である。

一方のススムは……。

「（見栄えが良いから使ってるけど、流石に難しい……っていうか、そこいらにおいてあるグランドピアノとか下手すりゃリユートの方がやりやすいよな、多分）」

流石にそろそろ懲りてきていた。

それはそうだろう。

誰だって石投げられるのは嫌だし、それが原因で生命の危機に陥って仲間からレイハンドが飛ぶような状況はお断りである。

なので好い加減乗り換えようとしては誰も気付かなかった。

しかし、そんな日々にも終わりは来た。

パルミア近郊に越して以来、ずっとパルミアで主にパーティへのヘルプ依頼を受け続け、演奏をしてきたススムだが度重なる失敗に業を煮やした方々が居た。

誰を隠そう、タウンギルドの方々である。

「——と、言う訳でススムさんには依頼者の方々から相当数の苦情が来ています。評判だってかつてはあれだけ高かったのに今では新人並ですよ、評判が！？分かってるんですか！？」

「ああ、うー……そのだな、詰まりあれか、当分はキチンと成功できる依頼を受けろと？」

「そういうことです。この様に短期でガクツと名声を落とされてはギルドの名声にも関わるんです。よろしく頼みますよ？」

と、いうわけである。

「そんなに評判悪かったつけ、俺」

「旦那様、もう少し評判は気にしてください……。現在『落ち目』とまで評されています」

エリーがいつもの目で訴えかける。

その言葉にふむ、と頷く。

「んじゃ、演奏にでるのは当分控えるか。んで、ぼちぼちと依頼をこなしつつ、溜め込んだ宝の地図を解読して宝探しといこうか！」

『宝の地図……ですか？』

そんなのあったのか、とばかりにススムは一斉に問われた。

「あったんだな、これが。んじゃ、記念すべき一つ目♪」

ススムは宝の地図を開き、そして脱力した。

「お兄ちゃん、どしたの？」

「みてみる、一面真っ白だ」

そういわれてウルルが渡された宝の地図を見ると、確かに地図……羊皮紙は一面真っ白で中心部分に赤い丸だった。

「……雪原のど真ん中？」

「そうみたいだ」

他にも地図が幾つかあったので、そちらも開いてみることにした。

「……どこでじやろう？ 右上に湖のような物があるのは分かるんじゃないが」

「わからないなあ……。ノースティリスで、平原で、湖がある場所っていうと限られているはずなんだけど」

「それなりの地域を歩いてきましたが、このような地域は流石に存じませんね」

ネビネイル、ススム、エリーの発言だ。

そこにふと気付いたウレルがいう。

「それじゃあ、ノースティリスでまだ足を運んでいない地方じゃないの？」

「……それだ！」

数日後

一行は散々迷い歩いた挙句に漸くそれらしき場所に到着した。

「えーっと、あっちのほうに群生林があって、あっちに湖。更に遙か向こうに険しい山っと」

ススムが位置を確認していると、シャベルやつるはしで武装したエリーを筆頭とした仲間達が進むの判断を待ちわびていた。

「旦那様、この辺りでよろしいですか？」

「うん、この辺りだ！みんな、掘って掘って掘りまくってやるぞ！」

数時間後

一帯を穴だらけにして漸く宝の発掘が完了した。

周囲は流石旦那様だ、やはり主殿は凄いな、おにいちゃんすごい！などと持て囃すのだが、ススムはここに来て思い出した。

これ、確か俺が夢に見て寝ぼけたまま描いた宝の地図じゃなかったっけ、と。

「ま、これも実力のうちだな！」

ちなみに宝箱を見つけたのはウエンディだった。

その後、帰還の巻物を広げてとっとと拠点に戻って反省会である。

「第一回宝探し反省かい！では、今回の反省点は何でしょうか、苦労人のネビネイルくん！」

「く、苦労に……ごほん。先ず、食料の不足では無いでしょうか？」

「後、荷物持ち過ぎで結構辛そうだったよね、主におにいちゃんが」

「……ん、それじゃあそれらを踏まえて次回には食料多目で余計な荷物は無し！と言うことで」

そして再び旅立つノースティリス財宝ハンター達！

しかし、一行の前に立ちはだかるものがいた、それは……！

「やっぱり、この地図の場所がどこかさっぱり判らん！」

今目指していたのは雪原のど真ん中と思われる宝のありか。  
しかし既に10日以上。

雪原をさまよっていたが一行に見つかる気配は無かった。

更に、トドメにエーテルの風が吹くでは無いか。

こりゃアカンとばかりに謎原理のシエルターを設置してその中に逃げ込む一行。

「もう無理。限界。やってられるかー！」

その言葉は一行の総意だった。

もっとも、言いだしっぺがそれ言うなよ、と言う目も無きにしも非ずだが。

「みんな、コレはうっぱらって別の探しにいくぞー」

『おー！』

そして更なる探検は続く。

今度の地図が指し示したのは街道に近く森と花畑が付近にある場所だった。

そのような所はやはり未だ行った事が無い場所である。

だが、大きなヒントがある。

それは街道だ。

「……旦那様、確かヨウインの南西方向に伸びる街道があったかと思えます」

「なるほど、じゃあ試しにそっちの方へ行ってみようか！」

宝探しを開始してから既に一月以上が経ち、冬から春へと変わり、目標の場所に着いた時、春満開の花畑に和みながらススムたちは癒されていた。

「春だなあ」

「春ですねえ」

和んでいるススムとネビネイル。

決して後ろは振り返らない。

ズガンズガンと言う銃砲音とプシャアアという血の雨が吹き出す音、やたらに「お兄ちゃん」とやたら連呼しながら敵を切り裂く義妹の姿なんて知らないとはかりに。

その後、女性陣が暴れまわっているのを背景に静々と発掘作業をしてお宝ゲットをした男たちが居たとかいないとか。

「ふうはははー！今宵も虎鉄は血に餓えているぞー！」

「ちょ、何でこんなのにならびや？！」

「こっちくんぎゃー！？」

「ぐおおおーん！！！」

日付がそこそ進んで春の日のポート・カプール。

「でたあああ！ススム選手お得意の霧払い（ミストファイナー）だ  
あああ！アリーナ期待の新星はここでまた一つ、勝ち星を挙げたぞ  
おお！」

そこではススムが獅子奮迅の活躍をしてモンスターや剣奴達をなぎ  
払っていた。

中にはかつて苦戦したり倦厭したファイアドレイクやアイスドレイ  
クの姿もあるが、そんなの関係ないとばかりにカタナで引き裂いて  
ゆく。

引き裂かれたモンスターや剣奴たちはカタナの連続で切り払うこと  
と血で霧を作り、それすらも切り払うことから何時の間にか霧払い  
（ミストファイナー）等と呼ばれるようになっていたススムの技だ。  
中々に成長した物だ、主に物騒な方面へ。

「では奴隷闘技場を覗いて見ましょう！こちらも凄いことになって  
いるぞー！こちらでは闘技場で期待の新星となっているススム選手  
の奴隷達ペットが次々と血の噴水を起こし、ミンチを作り上げてるぜー！  
ネビネイルテメエはもつと前に出ろよー男だろー？！」

「ちょ、扱いが……！」

と言う感じである。

どの世界でも女性の方が強いのだろうか？

まあそれはともかくネビネイルもめげずに治癒の雨などでキチンと  
仲間をフォローしていた。

ただ、フォローが優先になっているのでどうしても目立たないのは  
致し方ないのだろう。

何時の世も縁の下の力持ちとは地味で目立たないのは致し方ないも  
のである。

もっともフォローを受ける方は危機を救われると言う実感があるた



め、そのありがたみはキッチンと理解しているようだが。主にススムが。

なんせ、女性陣はウェンディを除いてみんな突撃思考が強い。気が付いたら突撃しすぎて囲まれていると言うこともあるのだ、そこをネビネイルがフォローしにくれるからススムも安心して旅ができるという物だ。

ちなみに、最近のススムは先ほどの闘技場アリーナで分かるとおり、それなりに強くなってきている。

今までこそ武具に着られている様な形であったが、今ではキッチンと扱いこなしているのだ。

イルヴァという世界に紛れ込んで3年。

ススムは確実に強くなっていた。

「それじゃあ旦那様、いってらっしゃいませ」

「おう、いつてくるな！」

ある日、ススムはパルミアへと出かけた。

それは新しく牧場経営を始めるためだ。

先ず始めに行うのはプチの飼育と決めていた。

理由は単純で美容と健康によいからだ。

プチの肉を食べた時の食感がこんなにやくのようで、そして食べると肌がつるつるになると言う実例が幾つもあるのだ。

ならば、プチ肉を売りに出せば小金を稼ぐのにはいいという話になった。

そして牧場の権利書を買い、支配の杖でプチを支配して牧場ですること終わったな、などと思って居るススムにそいつらは現れた。

「よーよー兄ちゃんがススムだろう？」

「俺たち最近売り出し中の盗賊団『暁の星』ってーんだけどさあ」  
「ちよっとお金恵んでくんなーい？」

「「けひゃひゃひゃひゃ！」」

妙に頭の悪そうな盗賊団と遭遇したのだった。

この時のススムは牧場を出たばかりで一人きり、それに対して相手は武装盗賊10人という人数。

一見すれば明らかに不利。

だが……。

「御託はいらない。欲しければ奪い取って見せろ、力尽くでな！」

「ハッ、後悔すんなよ小僧！」

日本人で少年の姿のままのススムは実年齢よりも5歳ほど若く、つまりは15歳程度に見られていた。

なるほど、小僧と言われるのは道理だ。

だが、その小僧の持つ爪は非常に強烈な物だった。

「取り囲め！袋叩きにしてやれえ！」

「光輝の盾よ、我が身を護れ！英雄よ、我に力を与えよ！」

瞬時に魔法を二つ唱え守りと攻撃を強化し、そして相手に取り囲まれても余裕を崩さないススム。

「死ねえええい！」

その言葉とともに四方六方から棍棒が、斧が、刃が、銃弾が飛び交うがそれらの殆どは光の盾によって威力を減衰させられ、鎧を傷つ

けることも出来ず、銃弾もまたひよいひよいと回避される有様だった。

「この程度かあ、ま。俺も強くなってっただけだな」

「な、なんでコイツ…!?!」

「じゃ、悪いけど世の為人の為、強いて言うなら俺の為に死んでくれ」

そう言ってススムはカタナで盗賊たちを根こそぎ切り払う。

「霧払い（ミストファイナー）！……なんて世の中では呼ばれてるらしいぜ」

結局、最後まで五体満足で立っていたのはススムだけだった。

## Lv20→Lv21..旅行者と幼な妻と仲魔達と お宝探し(後書き)

と、いう訳でススムくんも順調に強化されています。  
もう普通のヒト(地球基準)は軽く捻れるレベルなのは間違いなしです。

後、気付いたらコロナが病気になって他でござるの巻き。  
娼婦ゆえ致し方なし。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv17 ↓ Lv22

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 130 (100) +15 (+0)

名声 8859 ー 223

カルマ 20

現在値 前回比

筋力..46 (38) +15 (+12)

耐久..41 (28) +5 (+5)

器用..48 (25) +7 (+5)

感覚..44 (29) +13 (+6)

習得..36 (29) +11 (+9)

意思.. 4 8 (2 2) + 1 5 (+ 6)  
魔力.. 3 4 (2 0) + 1 2 (+ 3)  
魅力.. 3 3 (2 1) + 7 (+ 6)

## 装備

頭 .. ★《賢者の兜》「4, 1 5」: (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《謎の貝》「2, 1 4」: (信仰\*\*, 隠密\*\*, 音耐性\*\*, 運勢+3, 神電波受信)

背中.. ミスリルマント「7, 4」: (耐酸性, 不燃, 詠唱\*)

胴体.. ☆光を纏いし輪鎧『呪われた蛇』- 2「1 0, 3 5」: (不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 暗黒耐性\*\*, 意思+8)

利手.. アダマンタイトカタナ+2 (4 d 6 + 9): (耐酸性, 不燃, 貫通2 0 %, 両手持ち適正, 耐久+3)

手 ..

指 .. 唄うオブシディアリング- 4: (治癒\*, 混沌耐性\*\*, 魔力+2)

指 .. 耐麻痺のミカエンゲージリング- 2: (運勢+3, 麻痺無効, 盲目無効)

腕 .. 闇を砕く鉄鎖の手袋+1 (6, 0)「6, 5」+1: (不燃, 盾\*\*, 遺伝子学\*, 暗黒耐性\*)

腰 .. ミスリルガードル「5, 4」: (不燃, 耐酸, 詠唱\*)

足 .. ★《ダルイーリサリオン》+1「1 6, 7」: (耐酸性, 不燃, レア, 運勢維持, 旅歩き\*\*, 隠密\*, 器用+6, 呪い保護\*\*  
\*, MAP移動短縮\*\*)

遠隔.. ★《異形の森の弓》: (耐酸性, 不燃, レア, 異次元の手「\*\*」, 毒追加攻撃「\*\*」, 感覚維持, 器用維持, 詠唱「\*」, 毒耐性「\*\*」, 器用+1 0)

矢 …☆儂き矢束(1d8)(3)∴(時止弾x4, 炸裂弾x10, 運勢+3)

◆スキルと特殊能力

|      |           |      |           |
|------|-----------|------|-----------|
| 戦術   | Lv17. 147 | ↓    | Lv20. 762 |
| 重量挙げ | Lv18. 595 | ↓    | Lv23. 940 |
| 両手持ち | Lv11. 501 | ↓    | Lv17. 993 |
| 治癒   | Lv20. 786 | ↓    | Lv22. 306 |
| 採掘   | Lv1. 395  | ↓    | Lv3. 300  |
| 盾    | Lv13. 410 | ↓    | Lv13. 487 |
| 重装備  | Lv6. 005  |      |           |
| 中装備  | Lv8. 621  | ↓    | Lv10. 758 |
| 鍵開け  | Lv5. 634  | ↓    | Lv7. 307  |
| 二刀流  | Lv4. 266  | ↓    | Lv5. 025  |
| 軽装備  | Lv5. 429  | ↓    | Lv5. 442  |
| 回避   | Lv15. 195 | ↓    | Lv17. 888 |
| 隠密   | Lv18. 131 | ↓    | Lv23. 674 |
| 探知   | Lv1. 253  | ↑New |           |
| 自然鑑定 | Lv8. 828  | ↓    | Lv10. 453 |
| 釣り   | Lv7. 077  | ↓    | Lv7. 381  |
| 見切り  | Lv1. 845  | ↓    | Lv7. 450  |
| 読書   | Lv18. 234 | ↓    | Lv24. 585 |
| 遺伝子学 | Lv8. 308  | ↓    | Lv9. 998  |
| 解剖学  | Lv3. 871  | ↓    | Lv7. 057  |
| 暗記   | Lv3. 658  | ↓    | Lv7. 619  |
| 栽培   | Lv3. 292  | ↓    | Lv5. 601  |
| 料理   | Lv3. 814  | ↓    | Lv5. 951  |
| 信仰   | Lv20. 382 | ↓    | Lv22. 977 |
| 旅歩き  | Lv17. 050 | ↓    | Lv19. 299 |
| 瞑想   | Lv17. 690 | ↓    | Lv20. 048 |

|     |          |       |   |          |       |
|-----|----------|-------|---|----------|-------|
| 詠唱  | L v 6.   | 4 5 8 | ↓ | L v 11.  | 3 0 4 |
| 魔道具 | L v 8.   | 1 1 0 | ↓ | L v 9.   | 4 5 2 |
| 交渉  | L v 2 3. | 2 5 3 | ↓ | L v 2 6. | 3 3 9 |
| 投資  | L v 1 2. | 6 1 3 | ↓ | L v 1 6. | 0 8 9 |
| 演奏  | L v 2.   | 4 8 4 | ↓ | L v 1 4. | 1 5 8 |

◆武器の専門

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 長剣    | L v 11.  | 7 4 1 | ↓ | L v 16.  | 5 7 4 |
| 斧     | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 格闘    | L v 7.   | 1 5 1 | ↓ | L v 7.   | 4 5 1 |
| 鎌     | L v 4.   | 0 0 0 | ↓ | L v 4.   | 6 5 0 |
| 鈍器    | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 槍     | L v 4.   | 4 0 4 |   |          |       |
| 杖     | L v 4.   | 0 1 8 |   |          |       |
| 短剣    | L v 9.   | 3 8 1 | ↓ | L v 9.   | 5 9 8 |
| 弓     | L v 1 3. | 3 1 6 | ↓ | L v 1 4. | 3 7 7 |
| クロスボウ | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 投擲    | L v 7.   | 7 1 1 | ↓ | L v 7.   | 9 2 4 |
| 銃器    | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |

◆耐性と抵抗力

|      |             |
|------|-------------|
| 火炎耐性 | 普通の耐性**     |
| 冷氣耐性 | 弱い耐性**      |
| 電撃耐性 | 弱い耐性**      |
| 暗黒耐性 | 普通の耐性**     |
| 幻惑耐性 | 耐性なし***     |
| 毒耐性  | 強い耐性***     |
| 地獄耐性 | 耐性 なし       |
| 音耐性  | 素晴らしい耐性***+ |
| 神経耐性 | 耐性なし        |
| 混沌耐性 | 弱い耐性**      |

魔法耐性 弱い耐性＊

◆特徴と体質

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「変異」あなたの間接はともしなやかだ「器用+6」

「変異」あなたの傷跡は再生する「自然治癒強化」

「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」

「変異」あなたは美声を持っている「魅力+5」

「変異」あなたの脳は機械化している「暗記+4」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「変異」あなたは猫の目をしている「感覚+5」

「フィート」貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」

「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限-20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は神が発する電波をキャッチする

あなたの装備は盲目を無効にする

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性



職業..戦士

L v 1 2 ↓ L v 1 4

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) ー ー ー

マナ 80 (80) ー ー ー

狂気度 0 ー ー ー

速度 114 (96) ー ー ー

現在値 前回比

筋力..36 (29) +1 (+1)

耐久..38 (30) +2 (+1)

器用..29 (22) ー ー ー

感覚..20 (11) +4 (+1)

習得..25 (19) +1 (+1)

意思..41 (33) ー ー ー

魔力..42 (34) ー ー ー

魅力..21 (15) +1 (+1)

名前..ウエンディ

種族..イエルス

性別..女性

職業..遺跡荒らし

L v 1 1 ↓ L v 1 3

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力110 (100) ー ー ー

マナ 90 (80) ー ー ー

狂気度 0 ー ー ー

速度 95 (82) ー ー ー

現在値 前回比

|       |           |       |   |   |      |
|-------|-----------|-------|---|---|------|
| 筋力    | 29        | (22)  | — | — | —    |
| 耐久    | 34        | (27)  | + | 1 | (+1) |
| 器用    | 40        | (32)  | — | — | —    |
| 感覚    | 35        | (28)  | + | 1 | (+1) |
| 習得    | 42        | (34)  | — | — | —    |
| 意思    | 25        | (19)  | — | — | —    |
| 魔力    | 24        | (18)  | — | — | —    |
| 魅力    | 22        | (16)  | — | — | —    |
| 名前    | ネビネイル     |       |   |   |      |
| 種族    | 神の化身      |       |   |   |      |
| 性別    | 男性        |       |   |   |      |
| 職業    |           |       |   |   |      |
| Lv11  | ↓         | Lv12  |   |   |      |
| ステータス | ：カッコ内は元の値 |       |   |   |      |
| 生命力   | 90        | (90)  | — | — | —    |
| マナ    | 150       | (150) | — | — | —    |
| 狂気度   | 0         |       | — | — | —    |
| 速度    | 139       | (116) | — | — | —    |
| 筋力    | 30        | (23)  | + | 1 | (+1) |
| 耐久    | 29        | (22)  | — | — | —    |
| 器用    | 22        | (15)  | + | 1 | (+1) |
| 感覚    | 27        | (12)  | — | — | —    |
| 習得    | 19        | (13)  | + | 1 | (+1) |
| 意思    | 24        | (18)  | + | 1 | (+1) |
| 魔力    | 20        | (23)  | + | 1 | (+1) |
| 魅力    | 18        | (12)  | — | — | —    |

名前..娼婦のチヨロナ

種族..ノーランド

性別..女性

職業..遺跡荒らし

Lv1 ↓ Lv12

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) — —

マナ 90 (90) — —

狂気度 0 — —

速度 94 (81) — —

現在値 前回比

筋力..26 (20) — 1 (—1)

耐久..28 (21) — 2 (—2)

器用..40 (32) — 2 (—2)

感覚..33 (26) — 2 (—2)

習得..34 (27) — 2 (—2)

意思..24 (18) — 1 (—1)

魔力..19 (13) — 1 (—1)

魅力..27 (20) — 2 (—1)

名前..妹のウレル

種族..ローラン

性別..女性

職業..遺跡荒らし

Lv1 ↓ Lv13

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) — —

マナ 80 (80) — —

|    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 魅力 | 魔力 | 意思 | 習得 | 感覚 | 器用 | 耐久 | 筋力 | 速度 | 狂気度 |
| .. | .. | .. | .. | .. | .. | .. | .. |    |     |
| 2  | 2  | 2  | 2  | 3  | 4  | 2  | 2  | 1  | 0   |
| 7  | 6  | 3  | 9  | 8  | 3  | 9  | 5  | 1  |     |
| (2 | (1 | (1 | (2 | (2 | (3 | (2 | (1 | 2  |     |
| 0) | 7) | 7) | 2) | 2) | 5) | 2) | 9) | (9 |     |
|    |    |    |    |    |    |    |    | 6) |     |
|    |    |    |    |    |    |    |    |    |     |
| +  | +  | +  | +  | +  | +  | +  | +  |    |     |
| 1  | 1  | 1  | 1  | 2  | 2  | 1  | 1  |    |     |
| 1  | 4  | 2  | 2  | 0  | 4  | 3  | 2  |    |     |
| (+ | (+ | (+ | (+ | (+ | (+ | (+ | (+ |    |     |
| 1  | 1  | 1  | 1  | 1  | 2  | 1  | 1  |    |     |
| 0) | 0) | 1) | 1) | 0) | 2) | 2) | 1) |    |     |

1038日

今日は屋敷でエリーと夫婦の家族会議をした

まーぶっちゃければ俺達もヤル事やってた訳でデキたってわけだ。  
で、妊娠したんだったらエリーは出産から育児を含めて数年間動けないだろう。

一応、屋敷には元バーテンダーの年配執事や年若いメイドもいるけど、子育てを完全に任せきるのは良くない。

と、というのが俺の意見。

エリーは少し反対ッぽそうだったがそこはチームリーダーにしてエリーの主の強権を振るわせてもらった。

一応、俺も方々から恨みを買っているので屋敷の護衛と言うことで仲間はネビネイルを除いて全員置いていくことにした。

それに娼婦のチョロナだが、娼婦仲間が子供を生む事もあった事から助産婦の経験があるらしい。

なので、チョロナが残るのは絶対であるしウエンディとウレルは護衛として残ってもらわなければならない。

ネビネイルを連れて行くのはあれさ、俺と同じで死んでも復活する奴だしね、コイツ。

しかも、最近では力がついてきたらしくて復活速度も速いし丁度いいだろう。

そういえば、井戸水を飲んでたら神様から念話を受けた。

『なんでも願い事一つだけ叶えてあげるにゃー』

どうにも幸運の女神エヘカトルっぽい。

何を願ったらいいかわからなかったので、才能を得られるという噂

のクミロミの秘密の経験と言う物を願った。  
これを願った後にネフィアに潜ったら、もう一つクミロミの秘密の経験をゲットした。

……これ、見た目からして神器級にレアなもんだと思うんだけど、こんな所で手に入っているだろうか？

……ネフイアだから良いのか？

とりあえず、猫みたいにすばしっこくなりたいと願っておいた。

さて、子供の名前はどうか。

[illegible]

子供ができるらしいのでどうしたものかと思ったススムは、落ち着かない調子のままとある場所に向かった。

「つーわけで神様方、子供できたらしいんだけど……俺、どうしたらいいかな？」

向かった場所は神々の休戦地だった。

「……うみゅーん、それ相談されても困るニャー」

「あ、あたしだって困るわよ！」

と、相談されても困るという女神二人と。

「と、というか下僕の方際で私たちに相談しようって言うのが間違い

だわ」

といって突き放すドS女神一人。

「……ああ、そういやそうか。んじゃ、また機会があったらきます」

ちなみに、なぜ納得したかというところの3人に子供がいたという伝承とかまったくないからである。

そんな失礼(?)な事を考えつつススムは神々の休戦地を後にするのだった。

ススムが去った後の休戦地でルルウィは早々に帰ったのだが、ジュアとエヘカトルだけは残っていた。

「アイツ、本当にどうするつもりなんだろう。本気で帰るつもりあるのかな？」

「どちらでも良いと思うニャー。帰るつもりにゃとしても、相当な時間がかかる筈。一番初めに出来る可能性があるのは多分ワールドゲイトの開放にゃ」

「そうなのよね、上位世界に行くだなんてそれこそ未知の……いいえ、創生神の更に上位の神の領域。私たちだって出来ない物なのだし、そこが一番可能性があるわね」

ワールドゲイト、簡単に言えば無限に連なる異世界へと移動するための門だ。

もっとも、この魔法自体はイルヴァの魔法ではなく、異なる世界の存在が作った魔法であり、幾らネフィアを探索しようがコレに気づくものなどいないだろう。

あくまで神々が記憶しているだけの魔法なのだ。

「それよりも、子供が生まれたら今度こそ信者ゲットなのにゃ!」  
「あら、ススムの子供も私がもらうわ!」

女神たちはそのまま姦しいまま姿を薄らとさせて消えていく。

残ったのはその地に住まう動物たちと神々を祭る祭壇のみであった。

ススムとネビネイルの二人は女神たちの休戦地を出て3時間ほど歩いたところにあつた洞窟の迷宮に挑んでいた。  
だが、そこはいわゆる初心者向けの洞窟だったようでそれなりの力を蓄えている二人には簡単な場所だった。

「うーん、やっぱり危険度の低いネファイアだといいたものないな  
ー」

「確かにそうですが……『骸骨戦士』にワシがやられかけたのはス  
ルーですか?」

そういつてジト目でススムを見るネビネイル。

「いや、あの程度楽に勝てるようになってくれよ。今度また良い装  
備探してやるからさー」

「ううむ……主殿の成長の早さを頼もしく思うべきか、それとも恐  
ろしいと思うべきか」

「はっはっは。戦い三昧の日々だからねえ」

「……確かにそうですね」

ここで一つ言える事は、ススムは明らかにオカシイペースでネファイ



アを潜り、依頼をこなし、盗賊退治までしているという事だ。

普通の冒険者はススムの3分の1程度のペースでこなす物を3倍速である。

何故そんな事になっているかといえば、簡単な話で休憩のインターバルが極端に短いのだ。

一般的な冒険者は一つの依頼をこなすと2〜3日、外に出るような依頼や危険のある依頼をこなすと1週間から2週間休憩する事が多い。

だが、ススム達の場合はさっくりと次の依頼を受けてさっさと次の町に行ってしまうのだ。

そしてそうやってると急に名が売れるから盗賊にも狙われるようになる。

もちろん、そいつらはキチンと迎撃し、斬り潰し、皆殺しにしている。

何故そこまで徹底できるのかといえば単純な話で『悪人に人権なし』がススムの言だ。

この悪人にはススム自身も含まれているが、敵を潰すのに一々相手の命を気にしてたらやってられないというものだ。

そしてもう一つ『強請るな勝ち取れ、さすれば与えられん』である。まあ要するに『欲しけりゃ努力しろ』という言葉だ。

どちらもフィクションのキャラクターの言葉であるが、血生臭い、明日をも知れない生活をするススム達にとってコレは納得の言葉だったのだ。

エリーなど「天啓だ!」と言わんばかりに頷いていたぐらいだ。

ネフィアからススムは帰還の巻物で一瞬で帰宅すると、直ぐにエリーの所に顔を出しに行った。

その姿を見てネビネイルは「主殿も一応人の子なんじゃなあ」とか思ったとか。

そして一晩屋敷で過ごしてまた直ぐに屋敷を出た。

それから一週間に一度は帰還して顔を見せてという生活をしていった。

そんなある日、ススムの元に一つの噂が舞い込んだ。

「パルミアでエイリアンが再発生した？」

「ええええそうらしいですよススム様！何時だったかにテロで壊滅してエイリアンも一緒に滅んだかと思ったんですがそうは行かなかったみたいです……まったく参ったもんです！」

メイドが饒舌に語るその噂をススムは思わず眉根をしかめた。

「あぁとすみませんススム様。こんな噂は幾らなんでも身籠っていらつしやる奥様の前でするべきじゃなかったですね」

「……構わない。それよりもっと聞かせて」

同じく眉根を顰めたままのエリーがメイドに促す。

噂ではこうだ。

生き残りのガードが発端となり、ガードの腹を食い破って産まれ出るエイリアン。

腹を食い破られたガードは、それでも気丈に立ち上がり、そして戦い、そして結局新たなエイリアンの苗床となってしまう、そして戦って果てていくと。

市民たちはそもそも一撃で屠られているのが現状だ。

店主やタウンギルドのメンバー、闘技場の人間たちは持ち堪えるものの結局苗床にされ、腹を食い破られ、そして果てていくのだ。

「……悪夢だな」

「……旦那様」

「で、ですねー現在パルミアではあの『悪夢の日』と同レベルの厳

戒態勢、正直またテロでも起きてくれたほうが良いくらいの状態ですね」

メイドが言うにはその時までパルミア市外に残っていたのはテコでも動かないような頭の悪い頑固者と公職者故に離れる事ができなかったものたちだけ。

後者の方々には申し訳ないが、安全を考えるのならば全てを消し飛ばしたほうがパルミアどころではなくティリス全体の為でもある、というのが市民たちの声だった。

「当分はパルミア方面への出入りは控えるか。パルミアからの客もシャットアウトしてくれよ。では、仕事に戻ってくれ」

「はい、ススム様！それでは失礼しまゝす」

メイドが出て行ってからため息をつく。

「旦那様、どうなさいますか？」

「案は二つだな。全部まとめてもう一度消し飛ばすか、或いは俺の手で処理するか、だ」

幸いな事に、ススムはあれから更に強くなっている。エイリアンを倒す事も不可能ではないのだ。

だが、時間がかかる事に違いはない。

一方でダルフィのアイツからまたアレを買って吹き飛ばす……とても楽で魅力的な提案だ。

魅力的過ぎて懐へのダメージが心配になる。

ススムの今の目標は資金確保をしつつ新しく店舗と美術館を設営する事だ。

だったのだが、それもまた一時停止してパルミアへと向かわなければならなくなったようだった。

パルミアに一人たどり着いたススムは思わず呆然とした。そこではいつかの惨劇が再び巻き起こっていたのだから。

「どーしてこうなった」

本気でへたり込みそうになるススム。

だがそれだけはしない。

すでにエイリアンが迫っていたからだ。

今回はエイリアン対策で寄生に対して効果のある加護の掛かった銅の大剣を持ってきたが、それが早速役立つ。

「ちっ、切れ味が足りねえ！」

鈍磨な銅製の剣では斬るではなく殴ることしか出来ない。

斬る事を主体とするカタナでの戦いに慣れていたススムとしてはもどかしさもまた強かった。

「っんおお！」

「シギヤアアアア！」

斬る度に耐酸性を高めていない銅の刃が更に鈍磨になっていく。

武器としての体裁を保てなくなっていく。

「ちっ、引くしかないか！」

今回ここに来たのはあくまで偵察、ススムは自身にそう言い聞かせる。

「脱出！」

空間が歪みススムの姿が滲む様に消えたそこにエイリアンの牙が殺到し、虚しく空を切るのだった。

そして屋敷へ。

「うん、アレはアウトだ。危険すぎ、俺たちが以前遭遇した時と同レベル程度にやばいわ」

「主殿、そこまでですか」

ネビネイルが厭そうな表情でウンザリしている。  
ススムもすぐ厭そうだし他のメンバーもすぐ厭そうだ。

「そこまでだ。食料は確保できてるんだっけか？」

「保存食、生鮮食品どれも蓄えは豊富ですな。シェルターの方も整備はきちんとしておりますじゃ」

執事の台詞にふむっと頷く。

「んじゃ、当分は放っておこう。っていうのも、正直現段階じゃ下手に手出ししても痛い目見てコッチでもエイリアン地獄になるだけだってこと。当分は力をつける事を優先する。異存はあるか？」

「……いえ、旦那様の判断に従います。」

それからススムは再びネビネイルをつれてネフィア探索と依頼をこなしたり、態と失敗して名声を落としたりという日々に戻った。

そんな日々の中でヨウインに立ち寄ったススムとネビネイルは妙な

依頼を受ける事になった。

タムという青年の家に『猫』が住み着いてしまったので退治して欲しいという依頼だった。

「猫であそこまで怯えるってなかなかないよなあ」

「そうですね、主殿。この依頼、簡単に終わりそうで……」

話しながらタムの家の中に入り、そして即座に外に出た。

「なあネビネイル。アレって普通、『猫』って呼ぶか？」

「……少なくともワシはアレを普通、猫とは呼ばないと思うのじゃが」

タムの家は血塗られたライオンキングダムと化していたのだった。

もちろん、ライオン単体であるのならススムとネビネイルにだって勝機はあるだろう。

だが、それが相当数の群れだったら？

不可能とは言わないが、かなり骨が折れるだろう。

特にネビネイルの骨が、物理的に。

「と、とりあえず行ってみるか。ネビネイル、俺からあまり離れないように」

「わ、わかりました」

そして1時間後。

「うん、アレ無理っす！」

「そ、そんなー!？」

ススムはタムに対しギブアップ宣言を行っていた。

というのもネビネイルがライオンのつめで三枚に下ろされた……は、言い過ぎであったにしても、囲まれて爪で引き裂かれ食いちぎられて死んでしまったからだ。

即座に遺体を回収して脱出し、復活の魔法で蘇らせたが中々に難易度がきつ過ぎる依頼だった。

無限に湧き出てくるライオンとその他猫と時々炎と氷の魔法使いやブレスを吐くハウンド。

戦い方としては魔法生物である『キング』と戦う時の様に、召喚をする猫使い（仮称）を倒せば良いと言う理屈は分かるのだが、強さが違った。

キングより遥かに強いのだ、猫使いは。

いつそのこと、いつかの様に核の炎で消し飛ばそうかとも思ったが自重する。

何で自重したかといえば理由は一つだけ。

シルバーキャットが居たのだ。

シルバーキャット、それは何時頼まれたかススム自身も忘れたかなり前の話。

王都パルミアでミアに『シルバーにゃんこをつれてきて欲しいのニャ♪』と頼まれたのだ。

断ろうかと思ったのだが、何か不可思議なプレッシャーを感じて思わず引き受けてしまったのはここだけの話だ。

ちなみに、そのミアだがエイリアンの都と化したパルミアに今も住んでいるらしい。

見た目弱そうな割に中々に肝っ玉が据わっている少女だ。

なんでも、以前の核爆発の時にも居残って、そして生き残っていたらしい。

ススムは彼女の姿を確認していないが、きっと気づかなかっただけ

で運が非常に良いのだろう、きっと。

「ネビネイル、俺ちよつと殲滅はしないけどシルバーキャットだけ捕まえてくるわ」

「は、はあ……ワシはどうしますかの？」

「とりあえず待機してくれ。支配の杖持つてこなきゃだし、あそこに突っ込まなきゃいかんし、おまけにその後はパルミアだし」

タムの家もパルミアも、どちらも地獄といえるだろう。

「これなら、パルミアの地獄の方がマシか」

幸い、と言って良いかは不明だがネフィアを攻略していた時に寄生防止加護のある盾を入手しているのでそれを持てばススム自身が寄生される事はないだろう。

「けど、コレ終わったつら速攻で外すか……盾はやっぱ正直邪魔だ」

盾があれば矢や銃弾等を防ぐのは勿論あらゆる攻撃を防ぎやすくなるのだが、その反面で武器が振るい辛いのだ。

特に、カタナを両手持ちで構えていたススムにとってはかなり深刻な問題だ。

更になだ、寄生されたガードやその他住人向けに毒薬や染色剤（毒薬）や硫酸をヨウインに設置しておいた倉庫から持ってきてきてあるのでススムの戦果と気力次第ではエイリアンの一掃も夢ではないだろう。

「さて、いっちょ行きますか！」



パルミアの王都はその日も地獄のような惨状であった。  
城下町にはエイリアンがひしめき、ガードが寄生され殺しては産み、  
殺しては産みという終わらない惨劇を繰り返している。  
そしてそれは城内にまで及んでいた。

「あぐう……」

「う、ぐう……」

謁見の間にて王妃と将軍が揃って青い顔をして肥大化した腹部を憎  
憎しげに思っていた。

その様は妊婦の様であり、今は亡き最愛の夫の子を授かる事無くこ  
の様な姿となつては最早生き恥としか考えられない、と彼女は思っ  
てしまうほどに。

将軍の方は単純に運動不足で肥満したように見えるから中年親父補  
正とは酷い物だった。

「どうもー、冒険者のイスルギです。お二人ともご無事ですくあ…  
…って、全然駄目っぽそうですね」

ふらふらと頬の痩せこけた血塗れの男が謁見の間に入ってきた。  
痩せこけ、血塗れであるがその姿に二人は覚えがあった。

以前、レシマスに居た密偵からの書簡を運び、更には今現在レシマ  
スの探索の為の鍵を得る為に方々へと足を運んでいるはずの男だっ  
た。

「お主は……血に塗れては居る様だがどうやら無事な様じゃな」

「ええ。城下の方はガード達と協力して殆どのエイリアンの駆逐と  
寄生された者達の治療を完了しました。こちらも心配なので様子を  
見に来たんですが、どうやらもっと早くに来るべきだったようです

ね」

ススムがやや申し訳なさそうに言う、やんわりと王妃は否定し、  
將軍がススムに向かって話しかける。

「……不甲斐無い話だが、そうかも知れんな。所で寄生されたものを治療したといったがどうやって？」

その言葉に「え？」と鳩が豆鉄砲を食らったかのような表情をするススム。

そんな表情をされた事に將軍と王妃は首をかしげる。

「……えーつと、もしかして寄生された人間への対処の仕方、ご存じない？」

「知っておったらこの様な無様は晒しておらぬわ！」

「単純にモノが足りないとかそう言う話でなく、本当にしらないのか」

なんてこったとススムは軽く絶望した。  
とつと話しておくべきだったか、と。

「寄生されたなら、毒を飲むか酸を飲んで溶かすんです。寄生したエイリアンを」

「「は——？」」

冒険者にとっては極普通の知識なのだが、そうではない二人には意外すぎる言葉だった。

「そ、そんな事をしたら毒や酸で死んでしまうではないか?!」

「薄めりゃいいじゃないですか、死なない程度のぎりぎりまで。少なくとも冒険者は寄生された時はそうして感染を防いでますよ?」

その言葉に將軍は「豪胆というかなんというか……」將軍はそういつてススムを見る。

「その言葉、真なのであろうな?」

「しょーめーするために態とエイリアンの肉食って寄生されて呪われた飲食物かつくらって吐いたり毒や酸でどろどろになって魔法で治療してと繰り返してましたが何か?」

その言葉に思わずなるほど、といってしまう將軍。  
ススムがここまで痩せこけてるのはそういった理由があったからかと。

ちなみにこの時、ススムの体重は大よそ30kgまで落ち込んでおり、生きているのが不思議なほどだ。

今生きてるのは冒険者として培った生命力の強さが支えてるのだろう。

「良からう、そなたを信じて先ずはわしが試そう」

將軍はそういつてススムからぎりぎり効果がある程度の毒薬を受け取り、そして……。

「うっ!?ぐう……おげえええええ」

盛大に吐き出した。

どろどろに溶けたエイリアンの寄生体を。

王妃はその光景を見てドン引きだったが、効果の程は將軍の腹を見

れば一目瞭然だ。

力士かと思うような出っ張った腹が一瞬でへこんでしまったのだから。

ススムは王妃に毒薬（将軍が飲んだモノの残り）を渡し、将軍を連れて謁見の間からしばらくの間はなれた。

※

※

※ しばらくお待ちください

※

※

※

かくして最後の寄生体も排除し……たと思われ、パルミアに改めてかりそめの平和が訪れた。

それはイコールで生存者全員に毒と硫酸を飲ませて回ったわけで、感謝もされたが微妙に恨まれもしたのだった。

「——と、言うわけで一応パルミアの事件は解決した、という事になってる」

「……つまり、可能性としては寄生体が潜んでる事もありうる、という事ですか旦那様？」

エリーが目立つようになったお腹を死んだ魚の目——ではなく、やや生氣のある表情でゆったりと抱え込みながらススムに問いかける。

「流石に、エイリアン地獄になってた頃にパルミアで寄生された冒険者までは把握してないからな」

「……では、下手を打てばそのものが原因で、また？」

「可能性はある。だから警戒は緩めて良いけど注意は怠らないでくれ」

それだけ言ってススムは席を立つ。

「旦那様、今度はどちらへ？」

「今度は灼熱の塔だよ。良い耐熱装備が揃ったからね。それに竜を狩るのにも丁度良い加護付の大剣が手に入ったし、この間素材変化の祝福したのを使ってルビナス製とかチタン製とか良い装備だからね」

「では、遂にレシマス攻略へ？」

「そこまでは何とも……他の所も結構しんどいらしいからな」

苦笑しながら言うが、それでも意欲がある事にエリーは気づいた。

「んじゃ、いつてくるよ」

## 灼熱の塔 第一層

灼熱の塔は近づくだけで周囲の寒さが嘘と感じてしまう様な熱を発していた。

内部に入れば時折炎が吹き荒れる始末だった。

「持ってて良かった火炎耐性と元素の加護の魔法ってところか」

炎に対して素晴らしい耐性を持つ今のススムは吹き荒れる炎、熱波に多少「あちー」と呻くぐらいでそれ以上の負担は受けなかった。

進路を塞ぐ炎の信仰者やファイアドレイク、ファイアハウンド、火炎樹、レッドワсп、インプ等も出てきたし、何故かプチやベस्पチ等もそれぞれがそれなりに大量に出てきたが残念な事にススムの足を止めるには至らなかった。

「ううん。思ったよりも強くなってるな、俺」

調子に乗ってるように言うが、装備の優秀さに助けられているのは間違いないだろう。

特に炎への耐性は大きい。

「んじゃ、さくつと行っちゃうか」

## 第二層

「あ、祭壇あるじゃん……どこの神様のつてわけでもなさそうだな。んじゃ、ちよいと……」

どこの神様のものでもないのなら無のエイスの可能性も無きにしも非ずだったが、そこを突っ込むのは野暮だろう。

途中でワспの麻痺毒で痺れさせられてしまうが防具性能の高さと火炎耐性の強さで危機に陥ることはなかった。

## 第三層

「この塔、隠し通路とか多いよなあ」

手探りで壁を探り、出っ張りを押したりへこんでいるところをついてみたりとしながらススムは更に進む。

後ろからドレイクに攻撃されそうになるが、振り向き様の一撃で武

器の相性もあってか一撃で両断されてしまう。

#### 第四層

他と雰囲気の違い、モンスターだらけという訳でもない大きい広間に出た。

「なるほど、ここが終着点か」

周囲を見渡せば居るのは炎の信仰者とそいつらが呼び出す門スター達だった。

「（炎の信仰者といえば『元素の傷跡』を使ってきたっけ）ホーリーヴェイル！」

思考と同時に手は道具鞆に潜り込み、念の為に所持しておいた巻物を広げていた。

言葉と同時に光の膜がやさしくススムを包み込み、それに少し遅れて霧のような何かを光の膜がシャットアウトする。

元素の傷跡の魔法だ。

コレを受けると元素属性、火炎・冷気・電撃耐性が下がり通常よりも大きくダメージを受けてしまう様になる魔法だ。

コレを受けた上で炎の信仰者が召喚するファイアドレイクやファイアハウンド等の炎系のモンスターと戦うと持ち物や装備が燃えてしまう事があり、肉体ダメージよりも懐へのダメージの方が大きいことが多々ある、というのが冒険者の共通認識だ。

似たような事が冷気を操るモンスターにも言えるがここでは置いておこう。

「ついでだ、元素の加護！光の盾！英雄！」

ススムを更なる光の膜と光り輝く盾、そして肉体強化による底上げが行われる。

「次々と掛かってきやがれ！」

そう言って魔法の矢で次々と炎の信仰者を射抜き、近づく火炎ムカデやモンスター達をチタン製のクレイモアを振るい続け、剣の境界を作り上げて迎撃していく。

そして、炎の信仰者やモンスター達を屠り尽くしたところでソイツは現れた。

赤い蟲惑的な衣装に身を包み、赤の義眼と

「ヒトの家でここまで堂々とやってくるとは良い度胸じゃないか、貴様！コルゴンが出るまでもない、私が貴様を倒してやろう！」

「ハハッ、ターゲットがわざわざ出てくるか！一斉に来れば良いものを……その油断が命取りだと教えてやる！」

どちらがより悪役か判断に困ったものである。

少なくとも、ススムがセイギノミカタ……という事は先ず無いだろう。

「暗黒よ！」

「しやらくせえ！」

灼熱の塔、そして塔の魔女、赤き義眼のクルイツウアとその僕にして夫の鋼鉄龍コルゴン。

彼らに關しての情報は古くからパルミアに存在していた。



そして、それゆえにススムは炎に対する対策等をとる事が出来たのだ。

「チッ、ブンブンブンとワープしやがって、うざってえ！」

「なんてタフさだい！？とつととくたばりな！！」

戦意が高まるにつれて口調も荒くなっていくススムは自覚の無いまま歯軋りをした。

魔女の使う暗黒の光線で一時的に視界を奪われて少々厄介な上に、テレポートをして近接戦を避けようとするので決定打に掛けるのだ。執拗にテレポートしては魔法で攻撃する魔女にススムの体力もガシガシと削られていく。魔女の方も歯軋りしていた。目の前の冒険者は厄介な事にかなり備えをしてきている。

だが幸いといって良いかは不明だが、魔女の治癒能力は低く更に回復魔法を使わない様子だった。

それなりに痛撃を与えてなお使わないのは寧ろ使えない、という事なのだろう。

ならば、ここは下手に接近戦を仕掛けるよりはアレの出番であるとススムは感じ取った。

「ロミナス、お前の力を借りるぞ！」

サインデール

《異形の森の弓》、コレを用いて射抜かれると毒と射抜いたものの元に転移させられるという恐ろしい効果を持つ弓だ。

「言っておくが、俺の矢は掠っただけでも絶望するぜ？」

「減らず口を！」

接近戦から射撃戦にシフトしたススムは、アイスボルトを元素の加護で減衰させつつ矢を連射していた。

魔女も矢とススムの自身から嫌な物を感じ取ったのか回避していたが、それも遂に……。

「ぎゃあ?!」

その悲鳴とともに毒が一気に全身を回り、そして魔女が気づいたときには自身がススムの元に転移していた。

ススムは笑みを浮かべて大剣を構えていた。

「あっ」

「じゃあな」

切れ味の良い大剣によって遂にその首をはねられてしまうのだった。首を撥ねられた魔女、クルイツウアの顔に浮かんでいた最期の表情は何故か穏やかなものだった。

それがススムに疑問を与える。

何故、そんな穏やかな顔で最期を迎えられる？

侵入者にこうまでやられたというのに。

その後、軽傷治癒の魔法で重傷レベルの怪我をちまちまと回復したススムは鋼鉄龍コルゴンのところまでやってきた。

コルゴンの前に来て、ススムはおや?と思った。

コルゴンから強い殺気を感じなかったのだ。

感じたのは諦観と……そして何とも言いがたい奇妙な雰囲気だった。

「侵入者よ、我らを殺しに来たのだろうか? さあ、その刃を我に向けたが良い! 死合おうぞ!」

「――調子が狂うが、まあ良い！」

コルゴンの言葉から始まる戦い。

ドラゴンが口を利くのには驚かされたが、この世界はファンタジーだしそれもありか、とススムは思い直しそしてクレイモアを構えた。

それは近接戦のみの戦いだった。

ススムは何故か毒矢を使う事も産を使う事も脆弱の霧を使う事もしなかった。

使った魔法が英雄と光の盾ぐらいで後はひたすら大剣で切りつけるのみ。

一方のコルゴンもまた身体能力を生かし、巨大な腕と爪を用いた一撃と長大な尻尾、そして自身の牙を用いた攻撃だけだった。

魔女、クルイツウアの時とは違い、ススムは思わず楽しいと感じていた。

純粋な力と力のぶつかり合い、どうやらそれに楽しみを見出してしまったようだ。

「楽しいなあ侵入者ああ！我はこの様に再び力をぶつけ合える事を楽しみにしていたぞ、人間っ！！」

「ハハッ！！そりゃ良い！俺も楽しいぜコルゴン！！」

長らく続くかと思われた殴り合い、斬り合いだが、彼らにとっては永劫でも刹那でもあった。

だが、それも終わる。

ススムの勝利という形で。

元々相性というものも合っただろう。

竜殺しに長けたクレイモアを持つススムと鋼鉄龍のコルゴン。

ぶつかり合えば耐久力がそれなりにあり、装備で更に強化されたススムが競り勝つのも時間の問題だったのだ。

「ぐふう……貴様と遣り合えたこの時間、良い物であったぞ、冒険者」

「わからないな、アンタ……なんで俺に怒りを向けない？」

そう、それこそがススムにとって最初に引っかけた事だったのだ。コルゴンは魔女クルイツウアの僕であり、夫であるという情報。

それが正しいのなら、主を、妻を殺され怒らないものが居るのだろうか？

「クルイツウアの事か？ふん、この様な結末、我は最初から覚悟しておった。そして、それが、今日だった、それだけの話だ。クルイツウアが覚悟していたかはおいておくがな」

巨大な龍は息も絶え絶えに皮肉気にさういう。

「可能であれば、我もまたヒトとして貴様と刃を交えたかった――」

鋼鉄龍コルゴンはその言葉を最期に永い眠りへとついた。もう二度と目覚めることは無いだろう。

「俺もアンタとはまた刃を交えたいね。アンタとの戦いは楽しかったよ」

こうして難攻不落の難所と言われていた灼熱の塔は、ただ一人の冒険者の手によって主二人を倒されてしまう。

ススムは確かな手応えと、若干の疑問を感じながら、彼らの持っていたアーティファクトと魔石を手に戻還を果たした。

おまけ

帰還した後の来客がエイリアンに寄生されていた上に腹を食い破って産まれる騒ぎがあったが、ススムが速攻で叩き切って客に毒薬を飲ませたので最悪の事態（エリーに寄生）だけは避けられた。

「いやあ、申し訳ない！ 丁度どの街に行っても薬が手に入らなくて難儀してたのよ！ キミがパルミアを救ったというのは聞いていたから、いやあ助かったわ！」

なんて事があったとか。

## Lv22～Lv23…旅行者と防衛者と　　パルミア最後の日と灼熱の塔の魔女と

と言う訳でパルミア事変と灼熱の塔まで一気に行きました！

クレイモア自体は結構前に入手してたんですが、入手当時は「なまもの」でした。

使わなかったではなく、使えなかったという事をお察しください。  
すぐ後に何時ものカタナを入手してたんで余計に、ね？

で、パルミアのエイリアン事件はコレで本当に終わった……と、思いたい！

今後毒薬だけは常備かなあ……orz

とりあえず、E10na第一部(?)メインストーリーの折り返し地点です、確か！

このリプレイSS的にも第一部レシマス探求編は折り返し地点、のはずです。

レベル的なものを排除すれば、ですがw

灼熱の塔の魔女と龍の夫婦には『敵ボス』という扱いしかなく、台詞もゲーム中では存在しないので、どうしたものかと思いましたがこういう形にしてみました。

クルイツウアの方は本当に面倒でしたが、コルゴンは魔法で強化したら後は殴り合いだけで終わりました。

最初、ダンジョンもコルゴンもあっさりだったんで　灼熱の塔に行ったら↓勝ちました。

だけにしちやおうかと思ったぐらいには簡単でした。

つか、レシマス15階層レベルだから耐性と装備をここまで整えて大苦戦というほうがありえないのか？

後、ヨウインの猫使いですが絶賛放置中です。  
シルバーキャットは既に支配の杖で支配してミーマ（エヘカトル）  
に献上しました。

次回どうするかは今のところ未定です。

それにしても強くなってきたなあ、ススム。

最初考えていたほど死なないから別作品の『世界は』で「何度も  
死にまくった」みたいな発言があった気がするけど、訂正するべき  
か？

いや、まだ神様攻略とすくつもあるし訂正は早いかな？

名前…ススム（石動進）

種族…神の化身（現代日本人）

性別…男性

職業…観光客

信仰…癒しのジュア

LV22 ↓ LV23

ステータス…カッコ内は元の値

現在値      前回比

生命力    90    (90)    一一一

マナ       150    (150)    一一一

狂気度     0       一一一

速度       157    (100)    +27 (+0)

名声       11171    +2312

カルマ     0

現在値      前回比

|    |              |             |
|----|--------------|-------------|
| 筋力 | .. 6 3 (4 4) | + 1 7 (+ 6) |
| 耐久 | .. 4 2 (3 2) | + 1 (+ 4)   |
| 器用 | .. 5 3 (3 0) | + 6 (+ 5)   |
| 感覚 | .. 4 5 (3 7) | + 1 (+ 8)   |
| 習得 | .. 4 0 (3 4) | + 4 (+ 5)   |
| 意思 | .. 5 1 (2 6) | + 3 (+ 4)   |
| 魔力 | .. 3 4 (2 2) | + 0 (+ 2)   |
| 魅力 | .. 4 0 (2 3) | + 7 (+ 2)   |

# 装備

頭 .. ★《賢者の兜》「4, 1 5」: (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》「0, 4」: (耐酸性, 不燃, 二刀流\*\*  
\*\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*\*\*)

背中 .. ☆この世ならざる外套『声のドラゴン』「3 1, 2」: (耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+5)  
胴体 .. ☆赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+ 1「1 8, 4 5」: (耐酸性, 不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 意思+8, 生命力+3)

利手 .. 防衛者のチタンクレイモア+ 2 (3 d 1 0 + 7 .. 0 %) (2  
: (不燃, 両手持ち適正, 電撃耐性\*\*, 冷氣耐性\*, 火炎耐性  
\*, 筋力+3, 竜殺\*\*)

手 ..  
指 .. 従者の鉄の指当て「0, 2」: (不燃, 魅力維持, 意思維持,  
心眼\*, 栽培\*, 火炎耐性\*)

指 .. 呻く鉛のスピードの指輪: (耐酸性, 不燃, 筋力維持, 速度  
+ 9)

腕 .. ☆色あせぬ重層箆手『ザ・スカイ』(1 0, 4)「5, 2 5





|      |          |       |   |          |       |
|------|----------|-------|---|----------|-------|
| 見切り  | L v 7.   | 4 5 0 | ↓ | L v 1 1. | 1 9 7 |
| 読書   | L v 2 4. | 5 8 5 | ↓ | L v 2 7. | 2 8 5 |
| 遺伝子学 | L v 9.   | 9 9 8 | ↓ | L v 1 0. | 0 5 4 |
| 解剖学  | L v 7.   | 0 5 7 | ↓ | L v 8.   | 8 0 3 |
| 暗記   | L v 7.   | 6 1 9 | ↓ | L v 1 0. | 0 6 9 |
| 栽培   | L v 5.   | 6 0 1 | ↓ | L v 9.   | 3 3 7 |
| 料理   | L v 5.   | 9 5 1 | ↓ | L v 7.   | 1 7 7 |
| 信仰   | L v 2 2. | 9 7 7 | ↓ | L v 2 4. | 3 8 0 |
| 旅歩き  | L v 1 9. | 2 9 9 | ↓ | L v 2 0. | 3 8 1 |
| 乗馬   | L v 1.   | 3 6 4 | ↑ | New      |       |
| 瞑想   | L v 2 0. | 0 4 8 | ↓ | L v 2 1. | 3 7 1 |
| 詠唱   | L v 1 1. | 3 0 4 | ↓ | L v 1 3. | 8 3 5 |
| 魔道具  | L v 9.   | 4 5 2 | ↓ | L v 1 0. | 4 1 8 |
| 交渉   | L v 2 6. | 3 3 9 | ↓ | L v 2 8. | 3 0 1 |
| 投資   | L v 1 6. | 0 8 9 | ↓ | L v 1 8. | 0 6 8 |
| 演奏   | L v 1 4. | 1 5 8 | ↓ | L v 1 6. | 9 4 2 |

◆武器の専門

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 長剣    | L v 1 6. | 5 7 4 | ↓ | L v 2 0. | 0 7 6 |
| 斧     | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 格闘    | L v 7.   | 1 5 1 | ↓ | L v 7.   | 4 1 9 |
| 鎌     | L v 4.   | 6 5 0 |   |          |       |
| 鈍器    | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 槍     | L v 4.   | 4 0 4 |   |          |       |
| 杖     | L v 4.   | 0 1 8 |   |          |       |
| 短剣    | L v 9.   | 5 9 8 |   |          |       |
| 弓     | L v 1 4. | 3 7 7 | ↓ | L v 1 5. | 0 6 9 |
| クロスボウ | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 投擲    | L v 7.   | 9 2 4 | ↓ | L v 8.   | 2 1 0 |
| 銃器    | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*

冷氣耐性 弱い耐性\*\*

電撃耐性 強い耐性\*\*\*\*

暗黒耐性 耐性なし

幻惑耐性 強い耐性\*\*\*

毒耐性 強い耐性\*\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 弱い耐性\*\*

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 普通の耐性\*\*\*

◆特徴と体質

「フィート」貴方は猫よりも速い「速度+10」

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection  
Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「変異」あなたの皮膚は硬い「PV+3」

「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」

「変異」あなたの声は全てを魅了する「魅力+10」

「変異」あなたの脳は機械化している「暗記+4」

「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「フィート」貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」

「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限－20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備は竜族に対し強力な威力を発揮する

あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…ネビネイル

種族…神の化身

性別…男性

職業…

Lv12 ↓ Lv14

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 139 (116) ー ー

現在値 前回比

筋力 32 (25) +2 (+2)

耐久 29 (22) +9 (+4)

器用 23 (17) +1 (+2)

感覚 27 (12) ー ー

習得 19 (13) ー ー

意思 24 (18) ー ー

魔力 20 (23) ー ー

魅力 19 (13) +1 (+1)



1341日目

なんと言って良いか判らないけどおきた事だけ話すぜ。

子供が生まれました。

やべえ、凄い嬉しい、なんて言っって良いか判らない。

子供の性別は女の子だった。

今は真っ赤な顔にちよいしわくちやでギャンギャン泣いてるが元気があることでいいことだ！

エリーが疲れ果てて眠ったので、ウェンディと話していると子供の性別に関する話になった。

というのもどうもエリーの出身の種族ローランは女系の一族で女系社会を形成しており、この一族は殆どの場合婿を迎えて血を繋ぐのだと言う。

だから、子供は女の子の可能性が高いのはなんとなくわかっていたのだとか。

で、ローランについて突っ込んで聞いてみた。

ローランは女系の種族ではあるが、美しい見た目とは裏腹に能力の高い一族であり、特に冒険者<sup>クローラー</sup>として名高い女はローランである可能性が高いとか。

そして肝心な所なのだが、かつてローランは大きい組織、いや、国があったそうだ。

だが、その国もほんの数年前に盗賊団によって壊滅させられ殆どの女子供は彼らに捕らわれ、悲惨な眼にあっているだろうとの事。エリーも奴隷であつた事からローランの国の国民だった可能性があると。

なるほど、コレを聞いて能力が高い、というところには特に納得したし、エリーのあの死んだ魚の目をした表情にも納得だ。

多分。

さて、そんな感じで一大イベントのあった俺なのだが、残念な事に娘への命名権が存在しなかった。

がっでむ、結構色々考えてみたのに。

娘の名前はアリス。

……どこぞのゲームキャラの様に全体即死技とか使い出さないだろうな？

おとうさんはすごく、ひじょうにしんぱいです。

[illegible]

アリスが生まれてからススムはアリスとエリーに付きっ切りになろうとした。

それはやはり産まれたばかりの子供が気がかりだったとか、妻とイチャイチャしたいとかそう言う願望があったからだが、それは残念な事に叶えられる事は無かった。

「主殿、残念ながら主殿が冒険者家業をサボると税金で一気に破産ですじゃ」

「なん……だと……!？」

というやり取りが合ったわけではないが、事実として税金があるのは変わらない。

更に日々の生活費やなにやら、メイドと執事への給金を考えると3ヶ月から4ヶ月で資金が底を尽く計算だ。

「おうふ……税務署めやってくれおるわ」

「何を言った所でどうにもなりませぬぞ？」

いつそ犯罪者への道を歩むか、と思いたくもなるがそうなると色々大変だ。

犯罪者になって首に賞金が掛かれば、冒険者に命を狙われないとも限らない。

特に上位ランカーの冒険者が着たら今のススムでは太刀打ち不可能だろう。

「くっ！清く正しく生きるしかないのか?!」

「いや、それが普通です」

ネビネイルがビシッと突っ込みを入れる。

正論である。

さて、それからススムが赴いたのはどこかと言うと……。

雪原の湖畔にある一軒の小屋、ティリス一の職人が営むミラルⅡガ



ロク工房である。

はじめてきたのは宝探しの一環でさ迷い歩いていた時だっただろう。

「たのもー！」

「む、なんだまたお前さんか」

ちなみに、工房の主の片割れであるミラルとススムはそこそこに仲が良い。

「ミラル、コレ渡すから荷車の改造頼むわ！」

「お前さん以前改造したばかりだろう。アレ以上改造するのは骨だよ？」

「そんな事言わないでさー、頼むよ！小さなメダル拾ったら誰にも渡さずに優先的に持ってきてるじゃん？」

小さなメダル、ヒトを惹きつける不思議な魅力を持つメダルでヒトの手で作り出す事の叶わない謎のメダル。

一つ一つに違った模様が描かれ、コレをコレクションするものも多い。

入手は採掘だったり収穫の魔法だったりネフィアのお宝だったりである。

ネフィアの探索なのだが、こちらは以前に鉄鋼龍コルゴンを倒した際に入手したコルゴンの指輪をネビネイルが装備する事によって、彼の生存率が一気に上昇し探索も安定して行う事が出来るようになった。

どうにも彼の指輪には強力な物理防御魔法が掛けられているようで、その代償なのか行動が少し遅くなるが頑丈さには換えられない。

避けられないのなら、硬くなればいいじゃない、というものである。

さて、工房にススムとネビネイルが来て態々荷車の改造をして貰うのにも訳がある。

「しかし、お前さんなんでまた急に荷車の改造を？最初のはあんまりにも檻糞臭いんでサービスでまともなのにとっかえるだけだったけど」

「いや、行商の真似事みたいなものだよ。ノリエルのツリーや雪だるまをポート・カプールで売るとまた良い値がつくんだわ。……俺も子供が生まれたから、少しは稼ぎを蓄えておかなきゃいかんしね」  
「ほう、お前さんついに子供が生まれたか！あの緑髪の嬢ちゃんか？」

「いや、ウレルじゃなくてエリー、金髪の娘だよ」

「ふむ？あのちんちくりんの目がヤバイ嬢ちゃんか」

ちんちくりんの目がヤバイ嬢ちゃんという表現にススムも否定はしきれない。

「あ、はは……アレでも子供が産まれて結構普通っぽくなったんだぞ？」

「ふむ、ノロケでフィルター掛かっておるなお前さん。まあ良い、おめでとただけ言っておくよ」

そんな会話をしながら、ミラルはてきぱきと荷車を改造していった。前回は車輪にサスペンションを仕込み足回りの改造。

今回は謎の装置を取り付けて推進力強化のようだ。  
荷車自体は既にフレームの強化が完了し、重さだけなら本体に穴は開かないようになっている。

ススムには理解しきれない、真の鍛冶師の力を見せ付けられる場面

だった。

「ふむ、こんなもんだね。前よりも積載量が増えたけど無理は禁物だね」

「ありがとう、ミラル。それじゃあまた小さなメダルをゲットしたらくるよ」

「なんだったら銘酒でも持ってきてガロクにも手土産を頼むよー」  
「覚えておくよー」

そうしてススムは工房を後にしてノイエルへと向かう。

「主殿、今回もエーテル抗体をあの親子に渡すのですか？」

「ん、そのつもりだ。まーウチじゃ使う奴いないしね。やらない善よりやる偽善とかいったかな？自己満足だけどイイコトをするのも偶には良いもんだ」

「……ですか。まあ、主殿がそれで良いならワシからとやかく言うのは控えましょう」

「？」

ネビネイルが何を言いたいのか今一理解できないススムだったが、まあ良いかと思ってノイエルのとある母子の住む一軒屋へと向かう。一軒屋には幼い子供と病でやつれた女性がいた。

子供の名前はパエル、やつれた女性の名前はリリイ、パエルの母親だ。

父親がいないのはパエルが今よりも若い時にプチに殺されてしまったらしい。

それを聞いた時「プチに殺されるのって俺だけじゃなかったんだな」とススムが小さく思ったのはココだけの話だ。

ススムの場合、実際には死ななかったが、死に掛けたのは間違いない。

「あ、ススムさん！」

「どうもー。元気にしてたか、パエル」

「はい！でも、お母さんがまた苦しそうにしてるんです」

「そか、んじゃコレお母さんに渡しておいてくれるか？」

そう言ってススムが取り出したのはエーテル抗体だ。

祝福は掛かっていないが呪いも掛かっていない、極普通のエーテル抗体。

「ススムさん、いつもありがとう！おかーさんにわたしてくるね！」

うれしそうにパタパタと母親に近寄り薬を渡すパエル。

リリィはそれを受け取り早速薬を飲み干すと、やや顔色が良くなったように見える。

「ススムさん、何時もすみません……おかげで少し、体調が良くなってパエルも安心して外に出て遊びに出る事ができるようになりました」

「そうですか、そりゃ良い事だ！そういえばウチも遂に子供が出来ましてね……」

そこからは若い親同士の子供談義となる。

事実、リリィはまだ20代そこそこの母親でパエルが赤子だった頃の事もまだまだ記憶煮に新しく、また亡き夫がいた場合、こうしてくれたらよかった、と思う事をススムに教え、エリーと子供を大事にするようにと言ったり、自分の命を大事にするようにと何度も言った。

ススムもリリィがそう言う理由がわかっているので頷いて答える。

「さて、それじゃあまた機会があったら来ます」

「ええ、次は皆さんでいらしてください。大した事は出来ませんが歓迎いたします」

そうして外に出るとネビネイルが待っていた。

「主殿、交易品の買い付けは終わりました。外の荷車に既に備え付けてありますじゃ」

「そか、ありがとな。パルミアと自宅経由でポート・カプールに行つて、帰りはヨウインによるか」

「わかりました」

そうしてパルミアで某紅い昼行灯に音楽の出来の悪さで殺されてはネビネイルの手で蘇り、いつか復讐してやるとススムは心に深く刻み込んで、自宅に帰っては可愛い娘と子供が出来たからか表情が柔らかくなった嫁に癒されつつ行商でポート・カプールへ。

ポート・カプールでついっかかりサモンモンスターの杖が暴発して大事になりそうになったがそれはまあおいておこう。

結局ススムは自分の手で始末をつけたのだ、少し騒がせたが問題は無い。ガードににらまれたが問題は無い。

問題はなかったのだが、ススムの名前は悪い意味でも良い意味でも有名になっていた。

「オパートの名にかけて！貴殿はかの有名な『パルミアの剣鬼』殿ではないか？貴殿の腕を見込んで頼みがあるのだ」

ヨウインにやって来た時に、突如そういう掛け声と共にいきなり依頼が舞い込んできた。

「アンタは……確か、ギルバート大佐だったっけ？」

「左様、知られておるなら話は早い！」

「……」

ススムはギルバートのことを知っていたが、それは悪魔でよくない噂としてだ。

グウェンから聞いた話では『ギルバート大佐がアインクさんの小屋に入っていたら、アインクさんが大きな声で『イクー！』って言うってんだって』という話だった。

ススムはそれを聞いて以来、アインクとギルバートとは顔を合わせることが無いようにと距離を置いていたのだ。

「我々がジューアの解放軍としてイエルスの犬どもからジューア自治区を開放して回っているのは知っておろう？」

知らないのだが、話が進まないのですスムは頷いて先を促す。

「その我が軍がパルミア国境でイエルスの強力な防衛線の前に苦戦しておる。銃器や光線銃などの最新鋭の武装を持つイエルス軍に対し我らは剣と弓に頼るのみ。このままでは、全滅の恐れさえあるのだ。どうか貴殿の力を貸して貰えぬか？」

言ってみれば国対民間組織……下手をすればテロ組織か？等とススムは思ったが、ギルバート大佐に関して悪い噂を聞いたことは無かったなと思い直す。

豪放磊落を体現するこの男に表も裏も無いだろう。

仮にあったとしても、自分とネビネイルなら同とでもできる、ススムはそう信じていた。

「……別にかまわないのですが、報酬はどうなります？」

「フハハハアツ！そうこなくてはならぬ！報酬も任せておくが良い。色をつけてやろうではないか！戦の準備が出来次第声を掛けてくれ！」

そう言って去ってゆくギルバートをネビネイルは何故か苦りきった表情で見ている。

「（何やってんだあの神<sup>ヒト</sup>は）」

ネビネイルはギルバートに大地の神オパーツスの残滓が非常に色濃く出ている事を感じていたのだ。

ひょっとすると彼自身がオパーツスの現世での写し身である可能性だってあるのではないかと。

「（いやいや、神は基本的にそう簡単にコチラにこれない筈。そう、その筈なんじゃが……）」

オパーツスだしなあ、と思わず思ってしまうネビネイルだった。

国防防衛線の現場はさながら現代の軍VS中世の軍であった。

相手、イエルス軍は完全武装の米国軍兵士を思わせる武装であり更には機銃の自走砲台まである、逆にジューアの解放軍は剣士や闘士といった感じで近接戦しかない。

そして銃弾の飛び交い方もまさに戦争、といった感じであそこに紛れ込んで挑むのはススムも流石にいやだなーと思い始めていた。

「主殿、主殿の武装ならば例えあそこに飛び込んでも弾が鎧を貫くことはありますまい。寧ろそれ以上に主殿ならひよいひよい避けて

しまわれるのではないですか？」

「いや、でもな？ あんな弾幕避けながら進むのって結構きついぞ？」

「いやいや、まさか。主殿なら余裕でしょう。ではいつてらっしゃいませ」

「え”」

気がついた時にはススムはジューアの剣士たちに囲まれ流され、川を挟んで対岸の最前線の先頭に立たされていた。

「ち、畜生！ こうなったらやってやる！」

そう言ってススムは最近愛用の大剣を振り回し、イエルス工作兵やエリート兵をポンポン切り飛ばし無双しながら進んでいく。

「むむ、奴はパルミアの剣鬼ではないか？！」

「知っているのか、エリート兵！」

「奴は以前起きたパルミアのエイリアン事件を解決へと導いた剣士だ！ しかもそれだけでは無く冒険者としても名が挙がってきており、クローラーとしても名が売れている！ 聞くところに寄るとレシマスに潜る姿も確認されているとか……！」

それを小耳に挟んだジューア剣士たちは

「奴が味方でよかったぜ！」

「でも、アイツに俺のダチが……」

等と少し複雑だったという。

結局、戦闘は防具の頑健さに助けられ、更には光の盾と肉の壁もあったからかススムにダメージを与えることなく終わってしまった。



「ハハハ、主殿ワシの言ったとおりでしたな！さすがですじゃ！」  
「二度とこんな弾の雨の矢面に出たくないぞ」

ヨウインに戻るとギルバート大佐が大喜びで二人を迎えた。

「フアハアアアハハハ！フハー！フアハハハハ、フ、フハッ、ブ  
バアッ…ゲホッ…ゲホ…す…すまん。震えるほどに興奮したぞ、ぬ  
しの雄姿に！解放軍も、これで無事にパルミアの国境を越えること  
ができる。約束の報酬だ。感謝の気持ちもこめた、どうか受け取っ  
てくれい」

そう言って渡される皮袋の中には金貨1万枚とプラチナ硬貨3枚、  
そして凄く美味しそうなチーズが一つ入っていた。

「このチーズは？」

「ヨウインの特産品の一つ★英雄のチーズだ！酒のつまみに非常に  
合うのだが生産に時間がかかるから予約販売の限定品でな。ワシの  
とっておきだ！」

「へえ…：大事に食わせて貰うよ。ありがとう」

「なに、ぬしの活躍には及ばんよ。ではまたな！」

そう言ってギルバート大佐は豪快に笑いながら去っていった。

「やれやれ、あのお方は本当に豪快ですな」

「ああそうだな。だけど、凄く好感は持てるね」

そんな話をしながら二人は一度家に戻り、アリスをあやし、エリー  
と一晩いちゃついたススムが満足してから、二人はパルミアへと向  
かった。

すると、ガードに捕まり「少将がお待ちだ!」と言って何故か城まで連行されてしまう。

「ネビネイル、俺今回なにか悪い事したっけ？」

「いや、ワシも思いつきませぬ」

そして謁見の間にたどり着くといつぞやの將軍が困った顔をして謁見の間をうろうろしていた。

「コネリー少将! 剣鬼ススム殿をお連れしました!」

「おお、お主良い所に来てくれた!」

そういつて少将は駆け足で説明を始める。

ヨウインがミノタウロスの軍により危機的状況にあり、將軍が親しくしてるヨウインの村長経由で救援を依頼された。

だが、パルミアはエイリアン事件から立ち直ったばかりであり、更に王も逝去されたばかりで不穏な状態である。

だから実績のある冒険者で剣鬼とまで称えられるススムに解決を依頼したい、と言う事だった。

「報酬は勿論用意しよう。どうじゃ？」

「……あの、ジューア解放軍のギルバート大佐たちはどうされたんですか？」

「彼らはイエルスの防衛線を突破してから直ぐに向こうに渡り活動を行っているようだ。彼らが居れば任せたのだがな、今回はそうも行かなかったのだ」

「ああ、なるほど……わかりました。その依頼、お受けします」

仕方ないなーと言う空気をかもし出しながらススムは承諾した。

これにはミノタウロス程度なら今のススムなら余裕、と言う自信の

表れでもあった。

「ないん、真か！では早々にミノタウロスの巣窟に向かい、首領を退治してきて貰いたい。場所は確かヨウインの南と聞いておる。頼むぞ！」

「ええ、お任せください」

#### ミノタウロスの巣 第一層

ススムはこの時、少しばかりミノタウロスの巣を甘く見ていた。ミノタウロスの巣は、迷宮だったのだから。

「やべえ、迷宮はともかくミノの魔術師が面倒だな。武器が呪いつきになって変な所に飛ばされるせいでネビネイルと寸断されちゃうし」

そして……。

「ぐあああああ！」

ススム……ではなく、ネビネイルが断末魔の悲鳴を上げて倒れたのだった。

既に3回目である。

2回はススムが復活の魔法を使用したので蘇らせたが、3回目は復活の呪文の魔力が切れており使用できない。

「ネビネイル、先に家で待っていてくれ」

倒れ、そして消えて言ったネビネイルの死体に黙祷を捧げススムは

先に進む事を選択した。

## ミノタウロスの巣 第二層

だが、その後ススムも直ぐに引き返すこととなった。

「いやあ、こんな家具を見つけれなんて……らっきー♪」

高級ミラーと呼ばれる化粧台を見つけたのだ。

エリー達には良い土産となるだろう。

それに、拾い集めた武具のおかげでススムも既に重量オーバーの状態だったのだ。

これ以上潜っている事も不可能だった。

そして荷物整理をし再びミノタウロスの巣に挑み、呪いを何とか防ぎ、除去しつつも進むがココでひとつの誤算が起きた。

ミノタウロスに完全に囲まれた上にキングが召喚したナイトが何故かパンティーを投げてきたのだ。

「は、はぁ?!」

思わず動揺するススム。

ススムとて若い男子だ、女物の下着を投げつけられれば動揺してしまうのも仕方ない。

たとえば、嫁さんとイチャラブで少しは女慣れしていようともだ。

更にもう一つの誤算があった。

それはクイックリングの弓使いだ。

「は、早過ぎる……?!」

クイックリングの弓使いによる超高速連射で動揺している数秒もしない内に矢だらけのハリネズミ状態にされてしまったのだった。

そして気づけば自宅で、良い笑顔のネビネイルがそこで待っていた。

「銃弾とか余裕で弾いてたのに、弓矢でハリネズミにされるのは理不尽じゃないか？」

「……旦那様、ぶっちゃけ腕次第だと思います」

愚痴るススムにアリスを抱きかかえたエリーがズバツと言ってのける。

この世界では全て『腕<sup>スキル</sup>』次第なのだからしょうがないのだ。

「しゃあない、流石に今のまま突っ込んでもしようもないし……また暫く、腕と武具を揃えるか」

「ミノタウロスの巣はどうするんじゃ？」

「あそこは一層二層の敵はほぼ殺しつくしたから暫くは大丈夫だろ」

何度も死んでいると、多少の悔しさこそあれどどうやら恐慌に陥ることはなくなってくるようだ。

だから二人は自身が死んだ後だと言うのに直ぐに次の相談をしてしまっていた。

これが良い事なのか悪い事なのかは、誰にもわからない。

# Lv24→Lv25..旅行者と防衛者と 防衛線攻略とミノタウロスの巣と久し

死因はうつかりプレイとだけ言っておきますw

さて、久しぶりに死にました。

見事に自爆ですw

装備が多少良くなったからつい調子こきすぎましたw  
w  
w  
w  
w  
w  
w  
w  
w  
w

では、いつものです。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv23 ↓ Lv25

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 96 (93) +6 (+3)

マナ 150 (150) - - -

狂気度 0 - - -

速度 157 (100) - - -

名声 10179 -992

カルマ -2 -2

現在値 前回比

筋力..68 (46) +5 (+2)

耐久..45 (34) +3 (+2)

|    |              |           |
|----|--------------|-----------|
| 器用 | .. 5 6 (3 2) | + 3 (+ 2) |
| 感覚 | .. 4 7 (3 9) | + 2 (+ 2) |
| 習得 | .. 4 4 (3 6) | + 4 (+ 2) |
| 意思 | .. 5 2 (2 6) | + 1 (+ 0) |
| 魔力 | .. 3 6 (2 4) | + 2 (+ 2) |
| 魅力 | .. 4 1 (2 4) | + 1 (+ 1) |

# 装備

頭 .. ★《賢者の兜》「4, 15」: (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》「0, 4」: (耐酸性, 不燃, 二刀流\*, \*\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*\*\*+)

背中.. ☆この世ならざる外套『声のドラゴン』「3 1, 2」: (耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+5)

胴体.. ☆赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+1「1 8, 4 5」: (耐酸性, 不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 意思+8, 生命力+3)

利手.. 防衛者のチタンクレイモア+2 (3 d 1 0 + 7 .. 0 %) (2) : (不燃, 両手持ち適正, 電撃耐性\*\*, 冷氣耐性\*, 火炎耐性\*, 筋力+3, 竜殺\*\*)

手 .. 指 .. 従者の鉄の指当て「0, 2」: (不燃, 魅力維持, 意思維持, 心眼\*, 栽培\*, 火炎耐性\*)

指 .. 呻く鉛のスピードの指輪: (耐酸性, 不燃, 筋力維持, 速度+9)

腕 .. ☆色あせぬ重層箆手『ザ・スカイ』(1 0, 4)「5, 2 5」: (不燃, 感覚維持, 器用維持, 耐久維持, 釣り一\*, 軽装\*\*, 筋力+3)

腰 .. 烈火の翼鳥鱗の腰当「9，8」：（回避＊，火炎耐性＊＊＊  
＊，寄生回避）

足 .. ★《ダルーイサリオン》＋1「16，7」：（耐酸性，不  
燃，レア，運勢維持，旅歩き＊＊，隠密＊，器用＋6，呪い保護＊  
＊＊，MAP移動短縮＊＊）

遠隔・・★《異形の森の弓》＋1：（耐酸性，不燃，レア，異次元の  
手「＊＊＊」，毒追加攻撃「＊＊＊」，感覚維持，器用維持，詠  
唱「＊」，毒耐性「＊＊＊」，器用＋10）

矢 .. ☆儚き矢束『ライオンキングダム』－4（1d8）（3）：  
（時止弾x4，炸裂弾x10，運勢＋3）

#### ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv25. 913 ↓ Lv27. 370

重量挙げ Lv26. 712 ↓ Lv27. 812

両手持ち Lv21. 471 ↓ Lv22. 806

治癒 Lv23. 305 ↓ Lv23. 761

採掘 Lv4. 315 ↓ Lv4. 817

盾 Lv14. 024

重装備 Lv6. 005 ↓ Lv6. 817

中装備 Lv11. 688 ↓ Lv12. 145

鍵開け Lv9. 895 ↓ Lv10. 393

二刀流 Lv5. 025 ↓ Lv5. 961

軽装備 Lv7. 014 ↓ Lv7. 197

回避 Lv20. 453 ↓ Lv21. 324

隠密 Lv26. 433 ↓ Lv27. 559

探知 Lv2. 183 ↓ Lv2. 475

自然鑑定 Lv11. 859 ↓ Lv12. 285

釣り Lv7. 645 ↓ Lv7. 689

見切り Lv11. 197 ↓ Lv12. 483

射撃 Lv1. 230 ↑ New



|      |          |       |   |          |       |
|------|----------|-------|---|----------|-------|
| 読書   | L v 2 7. | 2 8 5 | ↓ | L v 2 7. | 5 8 2 |
| 遺伝子学 | L v 1 0. | 0 5 4 |   |          |       |
| 解剖学  | L v 8.   | 8 0 3 | ↓ | L v 9.   | 5 0 1 |
| 暗記   | L v 1 0. | 0 6 9 | ↓ | L v 1 0. | 7 6 2 |
| 栽培   | L v 9.   | 3 3 7 | ↓ | L v 9.   | 4 1 7 |
| 料理   | L v 7.   | 1 7 7 | ↓ | L v 7.   | 6 4 6 |
| 信仰   | L v 2 4. | 3 8 0 | ↓ | L v 2 5. | 2 5 2 |
| 旅歩き  | L v 2 0. | 3 8 1 | ↓ | L v 2 0. | 7 4 1 |
| 乗馬   | L v 1.   | 3 6 4 |   |          |       |
| 瞑想   | L v 2 1. | 3 7 1 | ↓ | L v 2 1. | 8 3 5 |
| 詠唱   | L v 1 3. | 8 3 5 | ↓ | L v 1 5. | 5 9 9 |
| 魔道具  | L v 1 0. | 4 1 8 | ↓ | L v 1 1. | 3 6 0 |
| 交渉   | L v 2 8. | 3 0 1 | ↓ | L v 2 9. | 5 3 1 |
| 投資   | L v 1 8. | 0 6 8 | ↓ | L v 1 8. | 1 0 8 |
| 演奏   | L v 1 6. | 9 4 2 | ↓ | L v 1 9. | 1 2 1 |

  

|        |          |       |   |          |       |
|--------|----------|-------|---|----------|-------|
| ◆武器の専門 |          |       |   |          |       |
| 長剣     | L v 2 0. | 0 7 6 | ↓ | L v 2 1. | 5 4 8 |
| 斧      | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 格闘     | L v 7.   | 4 1 9 |   |          |       |
| 鎌      | L v 4.   | 6 5 0 |   |          |       |
| 鈍器     | L v 4.   | 0 0 0 | ↓ | L v 9.   | 2 7 2 |
| 槍      | L v 4.   | 4 0 4 |   |          |       |
| 杖      | L v 4.   | 0 1 8 |   |          |       |
| 短剣     | L v 9.   | 5 9 8 | ↓ | L v 1 0. | 5 9 9 |
| 弓      | L v 1 5. | 0 6 9 | ↓ | L v 1 5. | 1 8 2 |
| クロスボウ  | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 投擲     | L v 8.   | 2 1 0 |   |          |       |
| 銃器     | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*

冷氣耐性 弱い耐性\*\*

電撃耐性 強い耐性\*\*\*\*

暗黒耐性 耐性なし

幻惑耐性 強い耐性\*\*\*

毒耐性 強い耐性\*\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 弱い耐性\*\*

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 普通の耐性\*\*\*

◆特徴と体質

「フィート」貴方は猫よりも速い「速度+10」

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「Defense Value+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「フィート」貴方は信仰に厚い「信仰+4」

「変異」あなたの皮膚はとても硬い「PV+6」

「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」

「変異」あなたの声は全てを魅了する「魅力+10」

「変異」あなたの脳は完璧な機械だ「暗記+8」

「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「フィート」貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」

「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限－20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備は竜族に対し強力な威力を発揮する

あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前..ネビネイル

種族..神の化身

性別..男性

職業..

Lv14 ↓ Lv15

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) ー ー

マナ 150 (150) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 112 (116) ー ー

現在値 前回比

筋力..43 (26) +11 (+1)

耐久..39 (27) +10 (+5)

器用..25 (19) +2 (+2)

感覚..21 (12) -6 (+0)

習得..20 (14) +1 (+1)

意思..25 (19) +1 (+1)

魔力..31 (24) +11 (+1)

魅力..  
1  
9  
(1  
3)

—  
—  
—

## Lv26..旅行者と防衛者と ピラミッド (前書き)

そういえば、拍手メッセージで「願いで何を願いましたか？」という質問がありましたのでここで回答します。

1回目..幸せのベッド (ネビネイルが井戸で願いを引きました)

2回目..クミロミの秘密の経験

以上二回のみです。

2回目、オーロラやセブンリーグ、ヴィンデルを願おうかとも思いましたが、フィートを先にとっておきたかったのでコチラを優先。願いは自身の方針に沿って計画的に利用しましょう。



行商の真似事を始めてからまだ2週間ほどだが、ススム達の懷はそれなりに暖まりつつあった。

ダルフィの酒場で二人は談笑しながら酒とつまみを楽しんでいた。ダルフィは無法地帯として有名だが、酒場はそれなりに……というかパルミアよりも良い。

と、いうのも無法者たちはイコールで繋げられるほど酒好きが多いのだ。

そして酒好きが多いと言う事は酒と酒の摘みも良いのだ。

パルミアの上品な酒と摘みも悪くないのだが、ススムとしては色々な酒が飲めて摘みもお上品というよりはスパイシーさが強く肉類も多いダルフィの酒場はお気に入りだった。

「うんうん。中々に順調じゃないか、この仕事」

「ですな。行商とネフィア探索に絞っていれば民間への名の広がり方は依頼を受けるよりも薄いモノとなりますしコレはコレで良いかも知れませぬ」

下手に依頼で稼ごうとするよりは行商は危険度が少なかった。

盗賊団に襲われるがそこはソレ、逆に稼ぎ時であった。

「いやあ、あいつらも交易品とか積んでることあるから本当に儲かるよなー」

と言うわけである。

ただし、基本的に交易品をぎりぎりまで積んで移動する事が多いススム達なので盗賊団の交易品を拾うと大抵の場合が重量超過剩状態となり、移動する際は文字通り『死ぬほど』疲れる破目に至るのだが……そこは自業自得だった。

「さて、それじゃあ久しぶりにネフィアに行くぞ、ネビネイル！今

回はダルフィの丘陵地帯を下って直ぐのところにあるネフィアだ！」  
「ハッ！」

ダルフィ直ぐのネフィアだが、そこはネビネイルにとってかなりきつい場所だった。

「うお?! 熱っ!? しかも囲まれ熱ーっ!! 主殿! コレは流石にきつ過ぎるのじゃがっ?!」

「がんばれー。ネビネイル超がんばれー。ほれ、敵の左翼は俺が切り崩してるから、そっち行くまでは堪えてくれよ」

やる気の無い応援だが、ススムはススムで忙しかった。  
こちらにもネビネイル同様に囲まれて炎のブレスを吐かれているが。

「ははは、温いなあ温いなあ!」

と言って笑って涙目でブレスを吐いてるファイアハウンドを大剣で血煙に変換していた。

フルボッコにされているネビネイルとは大違いである。

何故こうなっているかといえ、潜って少しもしないうちにファイアハウンドで溢れかえる部屋に入ってしまった、更にその部屋が下階層に向かう為の階段がある部屋だったのだ。

やろうと思えば一匹、或いは少数ずつ誘き出して片付ける事も出来たのだが……。

「ネビネイル、もう少し修羅場に慣れようか!」

「ちょ、主殿?!」

というやり取りの結果、ファイアハウンドの群れの右翼を相手取る



事になったのだ。

少ししてススムが左翼を全滅させてネビネイルを助けに行くが、その頃にはネビネイルは少し焦げて髪の毛もちりちりであった。

「主殿、ほんつとーにもう少し慎重に行きませぬかつ?!」

「H A H A H A ご冗談を。あの程度ならコレぐらいでも余裕でしょう?」

「主殿みたいな成長率が酷い人種と一緒にしないで下されー!」

「えー、俺人外扱い?」

「主殿、まっとうな人間は死んだ後復活なんてしませぬ」

「まあそうだけどな」

そんな会話をしながら第二層突破。

第二層の敵は殆どネビネイルに任せ、ススムが戦ったのは自身に噛み付いてきた雑魚ぐらいだ。

何で噛まれてしまったかというところ……。

「やっぱり、レイチェルの絵本マジで神作品だな」

と言って読み耽っていたからだ。

心温まる独特な文章で綴られる物語と挿絵は子供向けの作品とはいえ、荒みつつあったススムの心に思わずほろりと涙を流させるような大きな衝撃を与えた。

涙が流れるのは決して後頭部をガジガジとアイスハウンドに噛まれて痛かったからではない。

感動の余韻を残したまま第三層に向かうと、強い気配を感じた。

「なるほど、このネフィアがここが最終地点か」

「そのようすな。……って、主殿!妖精がつ!」

「ん？あっ！？」

いつの間にか進むの直ぐ傍にまで妖精が来ていた。

それに気づいたネビネイルが警告するが時既に遅し、妖精は素早くススムの腰当に括り付けられた皮袋（財布）を一つ盗んでしまったのだ！

「し、しまった！待ちやがれ！！」

「主殿?!」

その後、ススムは妖精を追いかけていたら、このネフィアボスであるトロールを道を塞いで邪魔したからと『素手』で殴り殺し、それに恐怖した妖精が徹底的に逃げ回り最後は……記す事も憚れる、哀れな最期を得た。

「おー、ようやく取り返した！俺の財布ー……ってアレ？コレって『クミロミの秘密の経験』じゃないか？なんで妖精なんかが……まあいいや、ありがたく頂いておくか！」

なお、ネビネイルは途中で絡まれたモンスターと死闘を繰り広げていてそれ所ではなかったのだが、ソレは何時もの事だった。

なお、ススムは拾ったクミロミの経験を用いて更に信仰を深めるコツを願ったとか。

ネフィアから帰還したススムは3日ぶりに戻った家でエリーとアリスをハグしてヨメムスメ成分なる謎の成分を補充し幸せな気分にな

りつつ今回の探索で得たものをメイドに預けて倉庫に持っていくように指示する。

「とりあえずアリスへの土産は心温まる絵本3冊で……何故か一巻だけが手に入らないし、出所が何故かネフィアだけど」

「コレだけ良い作品なのに、なんで市井に出回らないのかなあ。不思議だね」

何時の間にかアリスをあやしながら絵本を読み聞かせていたウレルがそう言う。

「ねーね、ねーね」

「はいはい、今続きを読んであげますよー」

その光景にススムは衝撃を受ける。

「ウレルが俺よりも先に『ねーね』と呼ばれる、だど?!俺はまだ『パパ』とも呼ばれないのに!」

うがあと頭を抱えるススム。

「そりゃ、ウレルが一番アリスを構ってるからしょうがないですよ、ススム様」

チヨロナがそう言って宥めるが、それは余計にススムをへこませた。ススムも本音を言えばもっとアリスを構ってやりたいのだから、ある意味逆効果だった。

「旦那様、そろそろ私達も戦場に復帰したいと思うのですが……」  
「ううん、そうだな……アリスはもう乳離れは済んだのか?」

その言葉に「うっ」と詰まるエリー。

「時々、近場のモンスターを狩る位なら良いけど、アリスが乳離れするまでは家で待機だ。土産に武器、いっぱい持って帰るから楽しみにしてくれ！」

「……仕方ありませんね。優秀なアーティファクト、たくさん願っていたします旦那様」

「任せろ！」

その光景を見ているネビネイルは思わず呟いた。

「主殿、見事に尻に敷かれておるのう」

「旦那様だし仕方ないわよ」

チヨロナの言葉に、今の光景を見ると確かに、としか返せないネビネイルだった。

さて、それから再び行商を再開し各地を回っている最中、ススムはダルフィの酒場で一人の伊達男に出会った。

彼の名前はマークス、世間では『稀代の泥棒』等と呼ばれている存在だ。

「あなたがかの有名な『パルミアの剣鬼』なのですね？ 良い所でお会いできました」

「アンタは、マークスであってるとな？」

「おや、ご存知で？」

「パルミアに行った時、手配書が出回ってたよ。なんでもどこぞの貴族の資産を狙ったとか？ 少しでも興味を引いたから名前ぐらいは覚えておいた」

だが、その手配書は数日もすると取り下げられていた。

その貴族の不正が発覚して手配も正当なものか不明となったからだ。

「でだ、その有名な『稀代の泥棒』殿は何のご用件かな？ 護衛？ それともモンスター討伐？」

「ははは、どちらでもないですよ。カプールの北にピラミッドがあるのはご存知で？」

「ああ、あの噂の……中に入れないって噂だから時間が勿体無いし立ち寄った事がないな。まあ、何時かは物見遊山がてらに行こうと思うけど。そこがどうかした？」

「ええ、実は私のところにこの様な物が着ておりまして」

そういつてマークスは懷から一枚の羊皮紙を取り出した。

「ピラミッドからの招待状……いえ、この場合は挑戦状ですな」  
「本物か？」

見せられて訝しげに即座に問い返すススム。

「本物です。試しにピラミッドまで行くと、驚いた事に進入を拒む魔法が一時的に解除されて進入できるようになりましたよ」

「……ふうん？ で、それをどうしたいんだ？ アンタを護衛して内部の探索に付き合えばいいのか？」

「いやいや、結論を急いではいけませんよ。私はコレを『パルミアの剣鬼』に差し上げようと思っているのですから。無論、タダではありませんが」

そう言ってウィンクするマークス。

伊達男がやると妙にサマになるものだなあ、と妙な関心をしつつス

スムは確認を行う。

「……ふうん。なるほど。アンタ自身が行く気は？」

「私は直接戦闘は好きではありませんし、態々罠があると思われる場所に行く気もありません。ですが、貴方は冒険者で様々なネフィアを探索し、レシマス探索にも関わる人間だ。この程度は腕試しに丁度よろしいのでは？」

罠があると言う言葉に少し考えようとしたが、罠程度はレシマスにも様々なネフィアにも存在する。いまさらのトラップだ。  
例え割合が増えたとして、地雷でもない限りは何とかなるだろうとスムは考える。

「……まあいいや、それ買うよ。お幾らで？」

「金貨2万枚です」

たけえーと思わず呻くが、冒険者にして旅行者であるスムはこの時、金よりも好奇心を優先する事にした。

エリー達には悪いが、冒険心でも金は稼げるのでそこは許容して貰おう、と言う魂胆だ。

## ピラミッド第一層

内部に侵入したスムが先ず思ったことは一つ。

「うざったいぐらいい入り組んでるな」

「それに古代の棺もありますから何かと武具が呪われて腹も立ちますな」

ということであつた。

更に、入り組んだ道が多いと言う事は簡単にネビネイルと分断されやすいと言う事で……。

「ぎゃあああああ?!」

「ふうははー! 呪いはウザイのじゃがここならワシでも活躍できますぞー!」

灼熱の塔で入手したコルゴンの指輪とブラッドムーンで武装したネビネイルは調子に乗って大暴れしていた。

まるで今まで死んでも無理やり蘇らせて戦わされた鬱憤を晴らすかの様だ。

「うんうん、遅しくなってきたねえ」

思わずほろりと感じ入るものが出てしまう。

ネビネイルは時に魔力の反動で死に掛ける事すらあった自己犠牲という名の自殺志願者だったのだ、だがここまで来ると頼もしいものだ。

そう、ネビネイルを頼もしくは思っているのだが……。

「やっぱり、このせまっ苦しさで呪いだけはどうしてもイヤだな。ホーリーヴェイルの魔法も巻物も底を直ぐに尽いちまったし」

それに何よりの難点はやはりこのピラミッドの迷宮としての質だ。そこでススムは最後の手段を手っ取り早く使う事にした。

「昔の人は言った! 壁があるなら、突き崩せば良いじゃない!」

どのぐらい昔かと言えばススムがファミコンソフト・ドルアーガの塔で遊んでいた子供の時で、言った人物はススムの兄である石動涼という人物なのだがそれはさておく。

普通に考えれば建築物の壁を崩すのは危険行為であり、それがピラミッドともなれば危険度は鰻登りに上がる。

だが、ここは変なところでファンタジー都合主義な世界なので実のところネフイアでもだが、壁を崩し、穴を掘り続けて一面広い広場、と言う状況にしまっても天井が落ちてきたり床穴が抜けたり、と言う事はないのだ。

「あ、ここの壁って結構良い鉱石とか埋まってるじゃん」

「主殿！どンドン掘り返してください！ワシのトレーニング費用のために！！」

「よかろう、なのだー！」

この時、ススムもネビネイルも何故かテンションがおかしかった。或いはコレもピラミッドに存在する不思議なパワーなのかもしれない。

そしてある程度掘り進めては休憩し、久しぶりに持ち歩くクーラーボックスの中から食材を取り出しては調理。

時折調理に失敗してへこんだり、ネビネイル用にミイラや古代の棺などの死体のこんがり焼きを用意して食わせたり。

そんな事していると本当に食材が尽きてきた頃には第一層は探索し終わり、拳句には第二層までの最短経路が進むの手によって掘り進められてしまう等、迷宮としての意義を失いそうな状態に陥っていた。

歴史研究家に悪し様に罵られそうな行為である。



だが、得てして遺跡探索されれば遺跡に多大なダメージが行くのは寧ろお約束である。

かの有名な探検家インディ・ジョーンズやララ・クラフトだってどれだけの歴史的な遺跡を駄目にしたか判った物ではない。

等とススムが理論武装していたかは不明だが、少なくとも直線で第二層まで進めるようになったのは確かだった。

「足りない……」

「ぬ、どうされました主殿？」

ネビネイルの言葉を見殺しにしてススムはつるはしを強く握り締め、振り上げた。

「足りない足りない足りない！」

「あ、主殿?!」

まるでモンスターと戦う時の様に連続してつるはしを振り回し、壁に叩きつける。

「俺に壁を突き崩させろー！」

石動進、実年齢21歳。

壁を掘る事にハマる。

その後、疲れ果てた石動を背負ってネビネイルがポート・カプールの宿屋まで背負って戻り、翌日には憑き物が取れたかの様にすつき

りした顔で第二層に挑む事となった。

「……寝てるな」

「……寝てますな」

二層に行くにあつたのは棺桶複数に篝火、そして部屋の置くに宝箱三つであつた。

そして手近なところの棺桶を開くとその中にはミイラや何故か拷問器具のアイアンメイデン。  
それらが眠っていたのだ。

「先制攻撃しかないだろ、これ。どう考えても宝に近づくと襲い掛かってくるパターンだし」

「まー、この程度ならワシらでもやれますし、やりましょうか」

そうして攻撃を仕掛けようとすると、即座にモンスター、この場合は財宝の番人が起き出して二人に襲い掛かってきた。

おどろおどろしい呻き声をあげているが、ススムやネビネイルからしてこの程度は温い。

これなら以前敗れたミノタウロスの巢のモンスターの群れの方が厄介だったと感じさせる。

「とは言ってもアイアンメイデンも厄介だけだな!」

「くっ、こやつらこちらが攻撃すると器用に棘を出しおって……面妖な!」

ギャーギャー文句を言いながら、ススムは治療薬と英雄気分の薬で棘のせいで出血している所を止血し、更に攻撃力をブーストさせる。

「主殿、コチラも回復願います!」

「治癒の雨使えよ?!」

「詠唱する暇がありません!」

コレだからネビネイルは、とか言いたくなりつつもススムは軽傷治癒の杖でネビネイルの傷を塞ぎ、杖を放り投げて今度は大剣を振り回して周囲のモンスターを薙ぎ払う。

この際、またまたトゲで出血を強いられた為舌打ちをした。

「これが、血も滴る良い男ってか?」

「主殿、それはタダの怪我人ですじゃ」

なんて言われて冗談もそこに即座に治療薬で回復。

「主殿、どうして先ほどから魔法を使わないのですか?!」

「ああ、品切れだよ品切れ」

あっけらかんと言いながら大剣を豪快に振り回すススム。

「もしかして、この間、屋敷の庭で盛大に叫んでいたのは……」

「魔法の特訓! やり過ぎて! 普段使う魔法のストック全部使い切っちゃった!」

この世界の魔法はストック制で更に魔力を用いて発動するという面倒な仕様だ。

だから幾ら本人が魔力を持ってもこの様に必要な時に使えない、という事があるのだ。

「まー、こいつらならお前でもいけるって!」

「囲まれるのは流石につらいのですじゃ!」

そうこうしているうちにピラミッドの主らしき威圧感を持つミイラまで出張ってくる。

「貴様ら、何者だ」

シュコーっという呼吸音が何故だか似合いそうなミイラに二人は宣言する。

「俺はススム。パルミアの剣鬼って名前で売り出し中の冒険者クロラーとその部下だ！」

「ネビネイル、癒しの女神ジュアの命によりススム殿の配下となった防衛者じゃ！」

「良からう。我が名はツェン！この王墓の主！侵入者ども絶望の淵に沈み我が末席に加わるが良い！」

そんな感じで戦いは再スタートしたのだが。

「ふんぬらあああああ！」

「はいだらあああああ！」

「ぐおおおお？！」

考えてみて欲しい、既に逸般人級の二人が超重量級の大剣を、軽くても炎の追加攻撃加護攻撃力増強の加護がついたメイスを振り回して暴れ周ればどうなるかを。

たかだか死体や拷問器具に怨霊が憑いて蘇って動き回る程度の相手では、役者不足であったのだ。

「な、なんと……！我が精鋭たちがこうもあっさりと？！」

「あえて言うぞ！死んだ奴はそこで何もかもが止まる！生きてる奴

だけが更に上に上れるんだよ！常に強くなり続けている俺たちが、たかだかこの程度で負けるはずがねえだろう！？」

ススム、この時点で絶好調状態の有頂天になっているが、それも仕方ないだろう。

油断したとはいえミノタウロスの巢で、本命のミノタウロスの王ではなく囲まれた挙句にとどめはクイックリングの射手にハリネズミにされたのだから。

言ってみればコレは八つ当たり。

弱いもの虐めでかなりカッコ悪いかもしれないが、そこはそれ。ツェンがマークスに挑戦状を送りつけ、マークスが罫は御免とススムに売りつけた時点で彼と彼のピラミッドに住み着くモンスター達の命運は決まっていたのだ。

「ふう、すっきりした」

「偶にはこういう風にボコボコにするのも気持ちがいいですよ」

すっきりした二人の足元には、全身粉碎骨折の上で四肢断裂状態のツェンの亡骸が転がっていた。

ここまでやられては最早現世を恐れえて二度と現れる事も無いだろう。

「んじゃ、お宝もらって帰ろうか」

「そうですね。それにしても、この像……オパートス様に良く似ていらっしやる」

宝箱3つと神の像、そして様々なアーティファクトの武具。土産としては上場であった。



## Lv26..旅行者と防衛者と ピラミッド (後書き)

と、言うわけでピラミッドも攻略が完了しました！

難易度的にはミノタウロスの巣よりも先にやるべきだったか、等と思わなくも無いですが、上記の様にススムを暴走させられたので良しとします。

ちなみに、実際のゲーム中も似た様な感じで完全にリンチ状態でした。

寧ろあっさりとカタが着きすぎて文章に困るほどに。

名前..ススム (石動進)

種族..神の化身 (現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv25 ↓ Lv26

ステータス:カッコ内は元の値

|             | 現在値       | 前回比     |
|-------------|-----------|---------|
| 生命力         | 96 (93)   | +3 (+0) |
| マナ          | 150 (150) | — —     |
| 狂気度         | 0         | — —     |
| 速度          | 157 (100) | +9 (+0) |
| 名声          | 10179     | +495    |
| カルマ         | 0         | +2      |
| 筋力..68 (46) |           | +1 (+1) |
| 耐久..45 (34) |           | +2 (+2) |
| 器用..56 (32) |           | — —     |

|    |    |      |   |   |      |
|----|----|------|---|---|------|
| 感覚 | 47 | (39) | + | 3 | (+2) |
| 習得 | 44 | (36) | + | 2 | (+2) |
| 意思 | 52 | (26) | + | 1 | (+2) |
| 魔力 | 36 | (24) | — | — | —    |
| 魅力 | 41 | (24) | — | — | —    |

## 装備

頭 .. ★ 《賢者の兜》 [4, 15] : (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★ 《ツインエッジ》 [0, 4] : (耐酸性, 不燃, 二刀流\*\*\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*\*\*+)

背中 .. ☆ この世ならざる外套『声のドラゴン』 [31, 2] : (耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+5) 胴体 .. ☆ 赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』 +1 [18, 45] : (耐酸性, 不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 意思+8, 生命力+3)

利手 .. 防衛者のチタンクレイモア+2 (3d10+7..0%) (2) : (不燃, 両手持ち適正, 電撃耐性\*\*, 冷氣耐性\*, 火炎耐性\*, 筋力+3, 竜殺\*\*\*)

手 .. 指 .. 硝子のスピードの指輪 : (不燃, 速度+8)

指 .. 呻くルビナススピードリング : (耐酸性, 不燃, 筋力維持, 速度+9, 生命力+3)

腕 .. ☆ 色あせぬ重層箆手『ザ・スカイ』 (10, 4) [5, 25] : (不燃, 感覚維持, 器用維持, 耐久維持, 釣り一\*, 軽装\*\*, 筋力+3)

腰 .. 烈火の翼鳥鱗の腰当 [9, 8] : (回避\*, 火炎耐性\*\*\*, 寄生回避)



足 .. ★《ダルーイサリオン》+1「16, 7」: (耐酸性, 不燃, レア, 運勢維持, 旅歩き\*\*, 隠密\*, 器用+6, 呪い保護\*\*  
\*\*, MAP移動短縮\*\*)

遠隔.. ★《異形の森の弓》+1: (耐酸性, 不燃, レア, 異次元の手「\*\*\*」, 毒追加攻撃「\*\*\*」, 感覚維持, 器用維持, 詠唱「\*」, 毒耐性「\*\*\*」, 器用+10)

矢 .. ☆儂き矢束『ライオンキングダム』-4 (1d8) (3) :  
(時止弾x4, 炸裂弾x10, 運勢+3)

### ◆スキルと特殊能力

|      |           |   |           |
|------|-----------|---|-----------|
| 戦術   | Lv27. 370 | ↓ | Lv27. 985 |
| 重量挙げ | Lv27. 812 | ↓ | Lv28. 675 |
| 両手持ち | Lv22. 806 | ↓ | Lv23. 155 |
| 治癒   | Lv23. 761 | ↓ | Lv23. 927 |
| 採掘   | Lv4. 817  | ↓ | Lv7. 249  |
| 盾    | Lv14. 024 |   |           |
| 重装備  | Lv6. 817  |   |           |
| 中装備  | Lv12. 145 | ↓ | Lv12. 191 |
| 鍵開け  | Lv10. 393 | ↓ | Lv10. 693 |
| 二刀流  | Lv5. 961  |   |           |
| 軽装備  | Lv7. 197  | ↓ | Lv7. 217  |
| 回避   | Lv21. 324 | ↓ | Lv21. 433 |
| 隠密   | Lv27. 559 | ↓ | Lv28. 430 |
| 探知   | Lv2. 475  | ↓ | Lv2. 486  |
| 自然鑑定 | Lv12. 285 | ↓ | Lv12. 522 |
| 釣り   | Lv7. 689  | ↓ | Lv7. 689  |
| 見切り  | Lv12. 483 | ↓ | Lv12. 625 |
| 射撃   | Lv1. 230  | ↓ | Lv1. 500  |
| 読書   | Lv27. 582 | ↓ | Lv28. 029 |
| 遺伝子学 | Lv10. 054 | ↓ | Lv10. 466 |

|     |          |       |   |          |       |
|-----|----------|-------|---|----------|-------|
| 解剖学 | L v 9.   | 5 0 1 | ↓ | L v 9.   | 9 1 1 |
| 暗記  | L v 1 0. | 7 6 2 | ↓ | L v 1 1. | 1 1 6 |
| 栽培  | L v 9.   | 4 1 7 | ↓ | L v 9.   | 4 2 7 |
| 料理  | L v 7.   | 6 4 6 | ↓ | L v 8.   | 0 5 2 |
| 信仰  | L v 2 5. | 2 5 2 | ↓ | L v 2 6. | 1 7 2 |
| 旅歩き | L v 2 0. | 7 4 1 | ↓ | L v 2 1. | 0 6 3 |
| 乗馬  | L v 1.   | 3 6 4 |   |          |       |
| 瞑想  | L v 2 1. | 8 3 5 | ↓ | L v 2 2. | 1 4 4 |
| 詠唱  | L v 1 5. | 5 9 9 | ↓ | L v 1 6. | 2 0 3 |
| 魔道具 | L v 1 1. | 3 6 0 | ↓ | L v 1 1. | 4 5 0 |
| 交渉  | L v 2 9. | 5 3 1 | ↓ | L v 3 0. | 0 5 1 |
| 投資  | L v 1 8. | 1 0 8 |   |          |       |
| 演奏  | L v 1 9. | 1 2 1 | ↓ | L v 1 9. | 8 5 6 |

◆武器の専門

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 長剣    | L v 2 1. | 5 4 8 | ↓ | L v 2 1. | 9 8 5 |
| 斧     | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 格闘    | L v 7.   | 4 1 9 | ↓ | L v 1 0. | 4 7 6 |
| 鎌     | L v 4.   | 6 5 0 |   |          |       |
| 鈍器    | L v 9.   | 2 7 2 |   |          |       |
| 槍     | L v 4.   | 4 0 4 |   |          |       |
| 杖     | L v 4.   | 0 1 8 |   |          |       |
| 短剣    | L v 1 0. | 5 9 9 |   |          |       |
| 弓     | L v 1 5. | 1 8 2 | ↓ | L v 1 5. | 2 0 8 |
| クロスボウ | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 投擲    | L v 8.   | 2 1 0 |   |          |       |
| 銃器    | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*\*

冷気耐性 弱い耐性＊＊  
電撃耐性 強い耐性＊＊＊  
暗黒耐性 耐性なし  
幻惑耐性 強い耐性＊＊＊  
毒耐性 強い耐性＊＊＊  
地獄耐性 耐性なし  
音耐性 弱い耐性＊＊  
神経耐性 耐性なし  
混沌耐性 耐性なし  
魔法耐性 普通の耐性＊＊＊

◆特徴と体質

「フィート」貴方は猫よりも速い「速度＋10」  
「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection  
Value＋15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue＋4」  
「フィート」貴方は我慢強い「耐久＋3」  
「フィート」貴方は猛烈な信者だ「信仰＋8」  
「変異」あなたの皮膚はとても硬い「PV＋6」  
「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」  
「変異」あなたの声は全てを魅了する「魅力＋10」  
「変異」あなたの脳は完璧な機械だ「暗記＋8」  
「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」  
「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」  
「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」  
「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」  
「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」  
「フィート」貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」  
「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い  
「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限－20」  
「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備は竜族に対し強力な威力を発揮する

あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前..ネビネイル

種族..神の化身

性別..男性

職業..

Lv15

ステータス:カッコ内は元の値

|     | 現在値       | 前回比 |
|-----|-----------|-----|
| 生命力 | 90 (90)   | — — |
| マナ  | 150 (150) | — — |
| 狂気度 | 0         | — — |
| 速度  | 112 (116) | — — |

現在値 前回比

|      |         |         |
|------|---------|---------|
| 筋力.. | 43 (26) | +1 (+1) |
| 耐久.. | 39 (27) | +0 (+2) |
| 器用.. | 25 (19) | +0 (+0) |
| 感覚.. | 21 (12) | -1 (+0) |
| 習得.. | 20 (14) | — —     |
| 意思.. | 25 (19) | +1 (+1) |
| 魔力.. | 31 (24) | — —     |
| 魅力.. | 19 (13) | — —     |

LV27.. 旅行者と防衛者と 古城の主 と 才能という名の悲劇

1416日目

さて、今回の日記は2ヶ月ぶりとなるわけで、後半月もしないうちに俺はコチウに来てから四年の歳月を迎えるわけだ。

で、ふと思ったわけだ。

初志って奴を忘れてたと。

俺の初志、それは勿論『日本に帰る事』だ。

エリーとアリスも出来れば向こうに連れて行きたい。  
永住って意味じゃない。

里歸りと結婚報告と父さんと母さんに対して孫の顔見せって奴だ。そんで、俺はまたこちらに戻る。

向こうに戻って、そしてどうしろというんだ。

今更向こうに戻っても得られるのは戦いの無い安全な生活と電気と娯楽と……

書いててちよつと意思が揺らいだ。

だけど、正直俺みたいな戦闘好きが戻ったところでアッチじゃ退屈を持て余すだろう。

だから、一度だけで良い。

みんなを連れて里帰り、出来たらいいな。

[illegible]

ススム達は行商を続けて街道沿いに歩みを進めていると、見覚え

の無い森がそこに現れていることに気付いた。

「ネビネイル、あれは十中八九ネフィアだよな」

「気配からして初心者向けですが……いかなさるおつもりで？」

「当然、攻略する。金は多いに越したこたぁない」

ススムの財政状況を考えればそれは当然の言葉だ。

「そういうと思っておりました」

「んじゃ、行こうか」

そして辿り着いた先で予想外に多くの魔法書が手に入り、ススムはそれらを持ち歩くのも大変なのでその場で読む事にした。

そして、まあ大丈夫だろうとい一気に読み進めていくと予想外の敵が空間をゆがめて現れた。

「げえっ!? レッドドラゴン?!」

「ま、拙くありませんか?!」

様々な物語でその存在を語られるレッドドラゴン、中級の冒険者でかなり苦戦、下手すれば敗北する相手であることは間違いない。

現在のススムたちで勝てるかはやや不透明だ。

「へ、変化の杖はないのですか、主殿！」

「全部ヴェルニースの倉庫だ！」

「か、肝心な時に何時も無い!!」

「ぐだぐだいうな! 来るぞ!」

そこからは正に激戦の模様だった。

互いに回復魔法を掛け合い、英雄気分の薬で能力をブーストし、そしてとにかく斬る。

レッドドラゴンが爪と牙、そしてブレスを巧みに操り二人に次々と致命傷を与えんとする。

「くそ、ブレスは大丈夫だけど何度も打撃を受けるとつらいな」  
「ワ、ワシはブレスもきついですよ!？」

二人は文句を言いつつも攻勢を緩めない。  
ここで退こうとすれば確実にネビネイルがやられるのは間違いない。  
ススムはなんだかんだで勝てるだろう、苦戦は間違いないが。

「ファイトオー…いっぱあーっ!!！」

飛び上がったの大上段からの全力一撃。  
それがドラゴンの胸板を大きく切り裂いた。

「ギャアオオオオオオン?!」

「今が好機じゃな!？」

ネビネイルが背後から翼と翼の間、背骨を狙って全力の一撃を見舞い、そして壊滅的な破碎音を鳴らしてドラゴンの骨を砕く。  
そして轟音を立てて倒れふすドラゴン。

「コレで、トドメだ!」

再び大上段からの一撃を、今度は首に見舞うススム。  
その一撃がトドメとなってドラゴンは力尽きた。

「なんとか無事に倒し終わりましたな。それにしても、こやつここ

のボスよりも強いのではありませぬか？」

「かもしれないなあ」

その後、森の奥まで進んだ先に待っていたボスはマンドラゴラで、ススムの「やっておしまい！」の言葉と共にネビネイルの血塗れた棍棒でド突かれてあえなく散ったのは言うまでも無い。

それから再び行商の旅にでたのだが、二人は出先で大物を引き当てる事になった。

「……コレは、買いだ！」

「えっと、お客さん、正気ですかい？」

正気を疑われるのもしやうがない話だ。

ツリー10本以上に雪だるまも10体以上。

確実に荷車が壊れる重量であり、運び主のススムもどうしようもない重量なのだ。

「正気も正気。コレを使えばいいだけだし」

そう言ってススムが取り出したのは帰還の巻物。

転移してしまえば重さなど関係ない、と言わんばかりだ。

実際には転移に重量があるのだが、何故か荷車の重量だけは帰還の際も関係ないのだ。

この事は魔術師ギルドでも話題になっているらしい。

そうして帰還してしばしの休暇となる。



ススムは2日か3日に一度は帰宅してはアリスを可愛がったりエリーといちゃついたりと言う生活をしていた。

そして夜中にエリーに押し倒されたりと、なんら問題なく平和だった。

「旦那様、女にも欲求不満はあるのですからしっかり付き合ってくださいね？」

「お、おう?!」

その後、エリーに生氣やらなにやら吸い尽くされた様子のススムはやや疲労気味の様子でツリーを二本、二台に載せて再び行商の旅に出た。

筈だったのだが。

気が付いたらススムとネビネイルは中東の戦場かと思わせるような場所で完全武装で戦っていた。

理由は非常に簡単で、ポート・カプールに居た負傷兵に絡まれたのだ。

主に泣き落として。

曰く、友人を含む部隊が最前線で撤退しているがこのままでは敵のカミカゼで壊滅するのは確定的に明らか。

早く撤退の援護部隊を送らねばならないが人員が足りない。

そう思っていたら現れたのは最近巷で噂になってるパルミアの剣鬼。

これはもう神の導きに違いない。

部隊が撤退するまででいいからどうか自分の代わりに撤退の援護に向かって欲しい。

ホントマジ頼みますよ。

ってな感じである。

「カミカゼイークだけじゃなくて、地雷侍に爆弾岩……主殿、ワシはここを切り抜けられる自信がないのじゃが」

「お、俺だって無理だぞこの布陣相手じゃ!？」

ただでさえ面倒な自爆する相手である。

そこに最強の爆弾モンスター、爆弾岩が現れればどうなるか？

決まっている、全滅しかない。

そう考えたススムの行動は迅速だった。

「か、壁せいせー！」

『!?!?』

みごろしにしても いきのびてやる。

その一言だけだった。

魔法の杖をぶんぶん回してススムと若干名の周囲を完全に壁が包囲した。

そして、直後。

「ぎゃあああああ!？」

「たすけてくれー!!！」

「おがーちゃん!!！」

「そんな！？みすてなぐひゃべ」

阿鼻叫喚の断末魔。

そして壁を破壊せんと次々と起こる爆発。

高く聳え立つ壁越しに爆発に巻き込まれた兵士たちのパーツが飛んでくる。

手であったり、足であったり、内臓であったり、ヨクワカラナイナニ力であったり。

「――」

最早誰も言葉を発する事が出来ない。

それもそうだ。

自分たちは仲間を見殺しにして生き残っているのだから。

ススムも含め、誰もが耳を塞いで時が過ぎるのを待った。

そして、遠くの空から撤退完了の合図である号砲が聞こえた。

「戦争、怖いな」

「あ、主殿はとっとと防壁作って逃げたから良いモノの、ワシは逃げ切れなくて爆死して戦争の狂気を身に刻みました。アレは……トラウマモノですじゃ」

ガタガタブルブルと震えるネビネイルを心の底から労いつつ、オレンジ色の珍しいフルーツを食べていた。

★マジカルフルーツと呼ばれるレアな食べ物で食べるとマナが成長

すると言う噂である。  
味は柑橘系だった。

「けど、微妙にオレンジやグレープフルーツとも違うんだよなあ」  
そんな事を呟きながら、ススムはネビネイルを視る。まだまだ頼りない所もあるが武器を変えてからの活躍は目覚しいところがある。

「ううん……イケル……かねえ？」

「うん？主殿、どうなされましたか？」

ススムはうんと一人うなずいて決意する。

「……うし、ネビネイル。古城に行くぞ」

「判りました、次の行商は……って、古城ですと！？」

一瞬行商の目的地と勘違いしたネビネイルは、喋っている途中で氣付いて驚きを露にする。

「古城と言うと旧都であり、今は廃城となっているヴェルニースを南に進んでいくあの古城ですか！？」

「説明台詞乙。その古城だよ」

ネビネイルの言葉にもあったように嘗ては王都であり、今は廃都であり廃城。

閑静な森の中にひっそりと佇むそこは、大昔の王族によって建てられた建物だ。

そこは長くならず者達によって占拠されていたが、一世紀ほど前に《古城の主ワイナン》を名乗る存在が占拠してからダルフィの悪漢達さえも近寄らない恐ろしい場所として知られるようになった。

噂では《ワイナン》は未だ古城の王座に君臨し、生粋の戦士として侵入者を配下の魔物たちと共に討ち取るという。

彼の手にした斧槍はランキスは相対する相手の生命力を奪う槍であり、相応の実力か作戦がないのならば挑むべきではないとされている。

この情報はパルミアのエリステアからの情報でそこその信頼性がある情報だ。

対策としては地獄属性に対する耐性を持つ装備を揃えれば良いのだが、耐性を持つ素材がザイロンだったりボーンだったりするので店頭では割と見かけないのが現実だったりするのだ。

無論、ネフィアで見かけることもあるが予め用意しようと思わなければ揃うはずもない。

揃っていた時期もあったが、性能がイマイチと言う理由からススムはとっとと売りに出してしまったと言うのもあった。

なのでススムは思い切って地獄属性への耐性は捨てる事にした。これはネビネイルも同様で最終的に決まったのが『君が死ぬまで、殴るのを辞めない！』が作戦だった。

……要するに何時も道理突っ込んで腕力で語る、それだけである。

## 古城 第一層

そして古城に殴りこみに言った二人だが、案の定袋叩きにされていた。

具体的に言うとな雷のブレス連発で瞬間的な麻痺が何度も続いてそろそろ心臓へのダメージと脳味噌が焼ききれるのを心配したところだった。

なお、肉体的ダメージはたいしたことは無いのが救いだったのだろうか。

「うざってえ！潰れていやがれっ！！」

「うううあああああ!!」

ススムが大剣を豪快に振り回し、一撃毎に複数のライトニングハウンドを挽肉に変えていき、ネビネイルもまた必死に血塗れの棍棒を振るって相手を血の海に沈め、追加効果で発動する炎で燃やし尽くしていた。

ネビネイルはススムよりも余裕がなく、とにかく叫びながら攻撃するしかない状態だ。

恐怖で叫ぶのではなく、とにかく相手を怯ませる、自身に気合を入れるために叫んでいるのだ。

ススムの様な一見無茶で力任せで豪快な戦い方ではなく、とにかく盾でうまく受け、流しながら叩き潰す戦い方は、基本でありながらも堅実だ。

それなりに苦勞しつつ進んでいくと階段を発見し、この階層を攻略し終えた事を確認してから二人は次の階層へと足を進めた。

## 古城 第二層

ここでもブレス攻撃を行うライトニングハウンド、更にはファイアドレイクの群れと遭遇することとなった。

「主殿！流石にこうなつて来ると何やら主殿の普段の行いが悪いからこうなるのではと愚考するのじゃが?!」

「バカ言え！俺ほど世の為人の為に頑張ってるえーゆー的な男は居ないだろう!!」

「自画自賛ですな!」

炎と雷のブレスの連打に追い詰められつつある二人、だが決して諦めずに互いに治癒の魔法を唱えつつ攻撃を繰り返していると、どこ

から機械的な音が聞こえてくることに気付いた。

ドスン、と言う音と共にそれは機械の関節を鳴らして吼えた。  
ギアとギアの駆動音で在る筈の音は、彼らにとつて威圧的な咆哮と  
なってドレイクとハウンドにプレッシャーを与える。

鋼鉄の人型の肩に乗る幼い少女全としたそれが言った。

「みて、M r バブルス……天使がいるわ」

「……」

その眼は明らかにススムとネビネイルを見ていた。

「天使の血でお腹を満たすの」

その言葉の意味は、二人を殺してその血を啜ってやる、と言うこと  
だろう。

「いけM r バブルス、いけ!!」

「ぐおおお!!」

カメラアイを真っ赤に輝かせ、ビッグダディが二人とそして道を塞  
ぐ邪魔なドレイクとハウンドを攻撃し始めた。

「っ！ 面倒な相手が来たな」

「ですが、今が好機！体勢を整え攻勢に出ましょうぞ！」

二人は頷いて治癒の魔法で回復し、即座に聖なる盾、英雄などの強  
化魔法を使用する。

「オオラオラオラオラ!!」

「どかねばそのどたまを叩き潰すのみですじゃ!!」

ビッグダディの乱入により挟み撃ち状態となった魔物たちはそれを後期と見たススムの剣に叩き切られ、或いはネビネイルの懇望で潰され、またはビッグダディの内蔵する機銃によって蜂の巣にされていった。

そしてあつという間の形勢逆転だが、二人とビッグダディの間でにらみ合いが行われる結果になる。

「……」

しかし、その睨みあいもビッグダディがくるりと身を翻した事により終わりを迎える。

リトルシスターが何かを喚いていたが、彼はそれに答えず去ることを選択した。

彼の至上命題はリトルシスターの死守であり、敵性存在とみなす必要のない相手に態々襲い掛かることはしないのだ。

ドレイクとハウンドが攻撃されたのは彼のメモリーに敵性存在として登録されていたからに他ならない。

もつとも、その様な事はススムとネビネイルは勿論、リトルシスターも知らないことだった。

その後も足を進めていくと、ドレイクやハウンド、古代の棺や闇の宣教師などの少々手強かったり厄介な敵が現れたりしたもの、二人よりも先に潜っていた傭兵戦士や魔術士達と合流して共に戦う、という事を繰り返しながら二人は想定よりも早く第六層に辿り着く事に成功した。



「……流石に雰囲気違いますな」  
「っ！駒が来るぞ！」

ネビネイルが感想を漏らしたのとススムが警告するのはほぼ同時。  
駒、ナイトが投げたと思われる手裏剣が幾つも二人に殺到する。

「食らうかつ！」

「こういう時の為の盾ですじゃ！」

二人は大剣を、盾を用いて手裏剣を防ぎ、或いは回避する。

「優先順位はキング、クイーン、ナイト、ビショップ！ポーンとルークは放っておけ！」

「了解ですじゃ！ワイナンが来たらいかぞ致しますか！」

「駒を先にやるぞ！キングとクイーン、それにナイトの投擲は厄介だ！」

二人は白黒の升目状の広間へと踊りでる。

するとソコには既に召喚が終わっていたのか複数の駒が存在していた。

「チッ、これ以上呼ばせられない！」

「ワシが気を逸らしている間に、主殿は弓でキングを！」

「オーケー！弓は得意だ、任せておけ！」

ススムはその言葉と共に異形の森の弓を構え、矢の弾幕を張らんとばかりに連射を行う。

「ネットゲーからアイディアをぱくったコレはどうか！リボルバー・アロー！！」

単純に矢を複数直ぐにつがえられる持ち方をして連射しているだけだが、言うは易し、行うは難しである。

元々、弓矢は連射が聞く武器ではない。故にそういう事を出来ると言うのは本当に練習を重ね、腕を磨いてきた証でもある。

ススムが放った5本の矢は2本が外れ、3本がキングに的中した。

「弓よ！奴を引きずり込め！」

言葉と共にキングの居た空間が歪む。

そして直後にススムの少し離れたところの空間が歪む。

「一気に行くぞ！英雄の力よ、我が身に宿りて敵を討つ力となれ！」

その言葉と共に身体能力が強化され、更に魔法杖を振るう事により行動速度が一気に強化される。

「王手、飛車取り！なんてな！！」

高速から成る踏み込みと連続切り。

元よりキングは召喚能力による厄介さはあれども戦闘能力が大した事もない。

寧ろ、召喚されきった後が怖いだけなのだ。

なので一番に、ナイトやクイーンが大量に呼ばれる前に葬らねばならないのが定石だ。

「……！」

だが、そんなススムの攻撃に耐え切ったキングが手に持った杖を振

るうとクイーンとナイト、そしてビショップが召喚される。

「ち！悪あがきをー！！」

「あ、主殿！」

悪態をついた瞬間、ススムの背後から手裏剣が迫る。

それを回避する事も出来ず、胴に手裏剣が何本か鎧を貫いて刺さる。

「つつ〜！舐めるんじゃ……ねえええええええ！」

その言葉と共に霧払いと名付けられた剣戟が放たれ、更に魔法の矢が幾つもススムの手から放たれキングとナイトを葬る。

しかし、クイーンとビショップは足早にレポートで回避し難を逃れる。

その間にも勿論手裏剣が、魔法の矢が、時折手榴弾まで飛んできたがススムはそれを歯を食いしばって耐え、避け、防ぎながらも攻勢を緩めなかった。

ネビネイルの方もススムが前に出たのと同時にナイト、ビショップ、クイーンを惹き付けたのでポーンとルークを棍棒で叩き潰していた。

「こんのお！！燃えてしまいが良い！！！」

ポーンは兵士、と言うよりは雑兵と言うのが正しく大して強くはないが、ルークは城壁とも取れる頑丈さを持ち、普通に戦っている時間がかかるのだが……。

「ブラッディムーンよ！力を……解き放てっ！！！」

全力の振り下ろしと共に叩いた場所に焼夷爆弾でも当たったかのような小爆発とルークの鎧に業火が猛り続ける。

「倒しきれないぞ！矢よ…痺れさせろ！」

ススムが倒しきれなかったルークに対して素早く魔力を練って麻痺の矢を放ち、ルークを痺れさせて一瞬の隙を作る。

「るあああああああ！」

今度こそ、とばかりに怒声と共に振られた棍棒はルークの頭部を完全に破碎し、倒れ付させた。

二人ともここまでの戦闘で既に満身創痍だが、ここで動くことをやめては死んで出なおす羽目になる。

ネビネイルは一瞬弛緩し掛けた意思と力を改めて四肢に込め、魔力を活性化しながら叫ぶ。

「治癒の雨よ！」

その声と共に温かい雨のような魔力が二人に降り注ぎ、二人の外傷を癒す。

「ネビネイル、ビシヨップを狙え！」

「はいっ！！！」

そういいながらススムは愛用の弓でナイトを一体ずつ引き寄せては斬り潰す。

ネビネイルも即行でビシヨップを潰しにかかる。

「手裏剣も手榴弾も痛過ぎるんだよ、ボケェ！！！」

重装甲ゆえに多少は耐えられるものの、集中攻撃はやはり厳しいも

のだった。

先ほどから麻痺の矢で一瞬怯ませ手は接近して斬り潰すという行為をしていたが、相手が遠方ともなると間合いが遠くてうまくいかない。

故に弓を放って引き寄せていたのだが、矢がそもそも当たりづらい事もあってそううまく言っていなかったのだ。

現状、ススムはネビネイルの治癒の雨で少しは癒されたものの、直ぐに怪我を負わされずめの涙状態だ。

ちまちまと自力でポーションと魔法で回復しつつ戦っていたが、ポーションが遂に品切れになったのだ。

残るは魔法とジュアの宝玉とジュアに祈願して癒して貰う事と今までの冒険により鍛えられた再生能力と言って良い程の自己治癒能力を信じる事ぐらいだろう。

ちなみに、現在の戦闘でススムは既に1度腹に穴が開き、利き腕の左腕の間接が稼働できる方向とは真逆に曲がり、手榴弾の爆発によって右目が一度完全に潰れていた。

その辺りも魔法やポーション、自己治癒能力で直ぐに回復できるのだから彼も大分人間をやめているだろう。

これで血の色がまだ赤なのが不自然なぐらいだ。

この世界では、一部の回復力が以上に高い存在は血の色が緑だったり紫だったりするという話だからだ。

ススムは大剣を振り回しながらそれだ思考を修正しつつ、このままでは早々に魔力も尽きると判断し、腰のポーチに入れている一つのポーションを取り出し、大剣を盾にしながらその影で一気に飲み干す。

「——ツプハア！全速力で潰す！！」

飲んだのは『加速のポーション』だ。

短時間だけではあるが、飲んだ人間の動きを劇的に早くしてくれる

優れもので、多少値が張るがここぞという場面で使える一品だ。

注意点はただ一つ、元の速度に戻った時に早くなったままだと勘違いして回避や防御のタイミングをミスって致命傷を貰ったり最悪死ぬケースがあること、ぐらいだろう。

「でああああああ！」

「――！」

ススムは大声を挙げ、クイーンとナイトが声無き声を上げて魔法の矢を手裏剣を連射してくる。

そして、ススムは丁度クイーン達が纏まった場所に接近することに成功した。

「チェックメイッ！！粉々になりやがれえ！！！」

その直後に起こったのは鋼の暴風とでも例えるべきだろうか。

何時もどおりの脳筋と言えはソレまでだが、しかし、何時も通りだからこそ逆にそれだけ信頼できるのだ。

そして数秒後には鋼の暴風が止んだ頃には残るのは瓦礫と化した駒のみだった。

「主殿！こちらも片がつけました！」

「良くやった……けど、どうやらお代わりが来たようだ」

直後、周囲の気温を一気に10度は下げるようなプレッシャーが二人を襲う。

『ほう、我をして『オカワリ』とな。此度の戦士は実に活きが良い』

黒いオーラを身に纏った、紅い馬に載ったフルアーマーの正に騎兵

といった存在。

その手に携える獲物、禍々しさを感じさせる槍斧は噂に名高いランキスだろう。

「アレが……古城の主ワイナン！」

プレッシャーにやや押されたのか、口にしつっジリっと一瞬ネビネイルの足が下がった。

『丁度手頃な駒が減ったところだ。貴様等を討ち取った暁には我が駒にしてくれよう！』

「言ってるバケモノ！やるぞ、ネビネイル！！」  
「はっ！」

『来るが良い！我が渴望、満たしてみせい！』

先手を取ったのはススムだ。

「おらよっ！！」

その言葉と共に投げつけたのは『脆弱のポーション』と『鈍足のポーション』だ。

脆弱は浴びたものは液薬に秘められた魔法効果により防御能力の弱体化が行われ、鈍足は認識速度を含めたありとあらゆる速度が遅くなる効果がある。

『ぬっ?!小癪な!!』

「ハッ！手段なんて選ぶつもりはねえんでな！ネビネイル！」  
「チエエエエエー！！」

ネビネイルが盾を掲げながら突撃。  
その隙にススムは魔法を詠唱する。

『更に『英雄』！『聖なる盾』！『元素の加護』よ！』

次々に強化魔法を自身に掛けていき、更に加速のポーションが尽きたので今度は加速の杖を振るう。

更に、ポーションを飲み込んで再生能力まで強化したところで強化はし終わった。

「悪いな、ワイナン。お前は既に、勝ち目を逃してる！」

『っ！良いよるな若造！！だが、勝負とは今際の際まで判らぬ物よ！！』

「なら、教えてやる！世の中にはどうしたって勝てない相手が居るってことをなあ！！」

言葉と共にススムも突撃し、大剣切り結ぶ。

ワイナンもまた二人をランキスの露としてくれんとばかりに槍を振るうが、多少切りつけ、相手から生命力を吸う物の、それ以上に二人の人数が厄介となった。

ススムが純粹に素早く重過ぎる大剣による連続攻撃。ネビネイルによるマナを奪う棍棒による重い攻撃。

『グウツ！』

唸り声と共にワイナンは転移を行うも、戦闘に次ぐ戦闘で過敏になりすぎたススムの感覚が直ぐに出現位置を察知して弓矢を構える。

「どこに行こうというんだ？」



ヒュンツという音がしてその直後にワイナンは自分が意図したわけではない転移が行われたことに気付く。

『な、なんだと!?!』

「知らなかったのか? 大魔王からは逃げられないんだぜ?」

「ハハッ、主殿が魔王とはハマリ役ですな!」

ニヤリと笑うススムと余裕が出てきたネビネイル。

しかし、ワイナンもあせるかと思えば逆に冷静さを取り戻す。

『闇よ!?!』

ワイナンの手から放たれた黒の光線が運の悪いことに一直線上に居たススムとネビネイルを貫く。

「ちっ!」

「目潰しじゃと!?!」

光線に貫かれはしても威力的には大したことも無く、感覚的に言えばコボルトに棍棒で叩かれたぐらいの痛みしか感じないススムとミノタウロスにどつかれたぐらいの痛みを感じるネビネイル。

「目が潰れたんならカンで攻撃すりゃあいだけだ! ど…っせえい!」

先ほどから高ぶり続けている気と鋭敏になった感覚が僅かな気配をススムに察知させそこを斬れと訴えていた。

振り抜いた先にススムは手応えを感じた。

直撃ではない。相手が獲物で防いだから。

『な、なんだと！貴様、見えているのか！？』  
「カンだって言ってるだろう！」

言いながらもさり気無く腰に挿したままの治癒の魔法杖と加速の魔法杖をさり気無く振っている。  
地味に回復を行い、既に全快の加速状態だ。

「さあ、冥府に送り届けてやるぞワイナン！！」  
『——ッ！？』

先程よりも更に鋭い踏み込みで、ススムはワイナンの目前に迫る。

「これが」

そして大剣は地を滑る様に火花を走らせ一刀目で騎馬の首を撥ね、更にランキスを弾き飛ばす。

「死出の手向けだ！」

返す刃で胴を払い抜けた。

『これが——我の最期か。最期に猛者と出会えたこの幸運、オパ  
ートスに感謝を——』

それが斬り飛ばされ、消えていったワイナンの最後の言葉だった。

「こいつもか……わかんないな。なんで負けて殺されたのにこんなに満足気なんだ？」

「それは……何時か主殿にも分かる時が来るかと」

ネビネイルはどこか彼らの気持ちを理解している様子だが、ススムにはやはり理解できるものではなかった。

「さて目標物もゲットしたし、お宝探して帰るぞネビネイル」  
「了解しました、主殿」

こうして覇者の魔石をススム達は手に入れることに成功した。  
残るは死者の洞窟に眠る魔石のみとなった……。

おまけ

今回の探索でとある人物から依頼されていた『絵本4巻セット』を  
遂に揃えたススム。

勿論、アリスの分も確保して、なので普通に集めるよりも時間がか  
かったのはいうまでも無い。

そして、その本を依頼主に渡すと、依頼主は早速絵本を読みはじめる

「……」

心温まる絵本の筈なのに、依頼主の表情は読み進めるにつれて険し  
いものへと変わっていく。

そして……。

「こんなもの！こんなもの！！」

そう叫んで依頼主は本を僅かな時間でビリビリに破いた上で更にト  
ドメとばかりに魔法で消滅させてしまったのだ。

「ふー！ふー！……っは、すまない。この本を書いた人物は本物の

天才だよ。こんな絵本は天才にしか書けない……。私の妹がどれだけ努力しても、この絵本に及ぶ事は無かっただろう。もしも幸運の女神が実在するのなら、私は女神を恨もう……。それと、すまなかったな。コレは報酬だ。暫く一人にしてくれ」

依頼主の男はススムに報酬の金貨とプラチナコインと像とチーズを受け取らせるとそのまま去っていった。

「……依頼は達成したけど、なんだか虚しいもんだな」

絵本を完全にダメにされた事と、残酷な現実を突きつけてしまった事、それらの事実はススムに溜息しかつかせなかった。

「知らない方が良い事ってーのはあるもんだな」

凡人は天才に叶わない、とは一概に言い切れないが、努力する凡人と努力する天才、その差は悲劇的だったのだろう。

故に幾ら努力しても埋める出来ない才能の差など、知らない方が幸せなのだろう。

ススムは漠然と、その事実だけは理解した。

## Lv27..旅行者と防衛者と 古城の主と 才能という名の悲劇(後書き)

今回、非常に時間がかかったのはワイナン討伐後にまだLv26でその後何で埋めるか悩んでしまったからだだったりします。

※それ以外にもプライベートやなんやかんやで動きがあったので暫く執筆していませんでした。

結局演奏会出演と収穫依頼で演奏と採集スキルを鍛えてレベルを上げました。

演奏、早く某紅い人に石を投げられないレベルにしたいです。

さて、ここまで来るとレシマス最終攻略まで後……4歩ぐらい？多分、わき道にもそれますのでまだまだ続きます。

それでは、毎度恒例のステータス紹介です。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv25 ↓ Lv26

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

|     |     |       |    |      |
|-----|-----|-------|----|------|
| 生命力 | 102 | (96)  | +6 | (+3) |
| マナ  | 153 | (153) | +3 | (+3) |
| 狂気度 | 0   |       | —  | —    |
| 速度  | 165 | (100) | +8 | (+0) |

|     |       |   |     |
|-----|-------|---|-----|
| 名   | 10179 | + | 332 |
| カルマ | 0     | - | -   |

|     |     |
|-----|-----|
| 現在値 | 前回比 |
|-----|-----|

|    |    |      |    |      |
|----|----|------|----|------|
| 筋力 | 71 | (49) | +3 | (+3) |
| 耐久 | 50 | (39) | +5 | (+5) |
| 器用 | 59 | (35) | +3 | (+3) |
| 感覚 | 50 | (42) | +3 | (+3) |
| 習得 | 50 | (41) | +6 | (+5) |
| 意思 | 57 | (30) | +5 | (+4) |
| 魔力 | 36 | (24) | +1 | (+1) |
| 魅力 | 42 | (25) | +1 | (+1) |

装備

頭 .. ★《賢者の兜》+2 [4, 15] ∴ (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》[0, 4] ∴ (耐酸性, 不燃, 二刀流\*\*\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*\*\*)

背中 .. ☆この世ならざる外套『声のドラゴン』[31, 2] ∴ (耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+5)

胴体 .. ☆赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+2 [18, 45] ∴ (耐酸性, 不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 意思+8, 生命力+3)

利手 .. 防衛者のチタンクレイモア+2 (3d10+7..0%) (2) ∴ (不燃, 両手持ち適正, 電撃耐性\*\*, 冷氣耐性\*, 火炎耐性\*, 筋力+3, 竜殺\*\*)

手 .. -

指 .. 硝子のスピードの指輪-1 ∴ (不燃, 速度+8)

指 .. 呻くルビナスノスピードリング：（耐酸性，不燃，筋力維持，速度＋9，生命力＋3）

腕 .. ☆色あせぬ重層籠手『ザ・スカイ』（10，4）『5，25

「：（不燃，感覚維持，器用維持，耐久維持，釣りー＊，軽装＊，筋力＋3）

腰 .. 烈火の翼鳥鱗の腰当「9，8」：（回避＊，火炎耐性＊ ＊ ＊ ＊，寄生回避）

足 .. ★《ダルIIイIIサリオン》＋2「16，7」：（耐酸性，不燃，レア，運勢維持，旅歩き＊ ＊，隠密＊，器用＋6，呪い保護＊ ＊ ＊，MAP移動短縮＊ ＊）

遠隔 .. ★《異形の森の弓》＋2：（耐酸性，不燃，レア，異次元の手「＊ ＊ ＊」，毒追加攻撃「＊ ＊ ＊ ＊」，感覚維持，器用維持，詠唱「＊」，毒耐性「＊ ＊ ＊ ＊」，器用＋10）

矢 .. ☆儂き矢束『ライオンキングダム』ー4（1d8）（3）：（時止弾x4，炸裂弾x10，運勢＋3）

#### ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv27. 985 ↓ Lv29. 580

重量挙げ Lv28. 675 ↓ Lv30. 210

両手持ち Lv23. 155 ↓ Lv23. 796

治癒 Lv23. 927 ↓ Lv24. 495

採掘 Lv7. 249 ↓ Lv7. 817

盾 Lv14. 024 ↓ Lv14. 824

重装備 Lv6. 187

中装備 Lv12. 191 ↓ Lv12. 355

鍵開け Lv10. 693 ↓ Lv12. 739

二刀流 Lv5. 961

軽装備 Lv7. 217 ↓ Lv7. 247

回避 Lv21. 433 ↓ Lv22. 100

窃盗 Lv1. 354 ↑ New

|              |                                     |              |              |                                       |              |                                       |        |                                       |                                       |                                       |                                       |                                       |                                       |                                   |                                       |                                       |                                   |                                     |                                       |                                     |                                       |                                   |                                       |                                   |                                       |                                   |                                       |    |
|--------------|-------------------------------------|--------------|--------------|---------------------------------------|--------------|---------------------------------------|--------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|-------------------------------------|---------------------------------------|-------------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|----|
| 杖            | 槍                                   | 鈍器           | 鎌            | 格闘                                    | 斧            | 長剣                                    | ◆武器の専門 | 演奏                                    | 投資                                    | 交渉                                    | 魔道具                                   | 詠唱                                    | 瞑想                                    | 乗馬                                | 旅歩き                                   | 信仰                                    | 料理                                | 栽培                                  | 暗記                                    | 解剖学                                 | 遺伝子学                                  | 読書                                | 射撃                                    | 見切り                               | 釣り                                    | 自然鑑定                              | 探知                                    | 隠密 |
| L v 4. 0 1 8 | L v 4. 4 0 4<br>↓<br>L v 1 2. 5 3 9 | L v 9. 2 7 2 | L v 4. 6 5 0 | L v 1 0. 4 7 6<br>↓<br>L v 1 1. 3 0 4 | L v 4. 0 0 0 | L v 2 1. 9 8 5<br>↓<br>L v 2 2. 4 6 5 |        | L v 1 9. 8 5 6<br>↓<br>L v 2 2. 8 0 9 | L v 1 8. 1 0 8<br>↓<br>L v 1 8. 3 1 9 | L v 3 0. 0 5 1<br>↓<br>L v 3 0. 9 6 1 | L v 1 1. 4 5 0<br>↓<br>L v 1 2. 4 3 5 | L v 1 6. 2 0 3<br>↓<br>L v 1 6. 8 0 3 | L v 2 2. 1 4 4<br>↓<br>L v 2 2. 4 0 5 | L v 1. 3 6 4<br>↓<br>L v 1. 3 9 0 | L v 2 1. 0 6 3<br>↓<br>L v 2 1. 5 2 0 | L v 2 6. 1 7 2<br>↓<br>L v 2 7. 0 4 8 | L v 8. 0 5 2<br>↓<br>L v 8. 4 7 7 | L v 9. 4 2 7<br>↓<br>L v 1 0. 1 5 1 | L v 1 1. 1 1 6<br>↓<br>L v 1 2. 1 3 3 | L v 9. 9 1 1<br>↓<br>L v 1 0. 5 4 2 | L v 2 8. 0 2 9<br>↓<br>L v 2 8. 6 4 5 | L v 1. 5 0 0<br>↓<br>L v 2. 1 7 6 | L v 1 2. 6 2 5<br>↓<br>L v 1 3. 5 8 6 | L v 7. 6 8 9<br>↓<br>L v 7. 7 1 1 | L v 1 2. 5 2 2<br>↓<br>L v 1 2. 8 4 3 | L v 2. 4 8 6<br>↓<br>L v 3. 6 2 9 | L v 2 8. 4 3 0<br>↓<br>L v 3 0. 0 9 1 |    |



短剣 Lv10・599  
弓 Lv15・208 ↓ Lv15・377  
クロスボウ Lv4・000  
投擲 Lv8・210  
銃器 Lv4・000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*  
冷氣耐性 弱い耐性\*  
電撃耐性 強い耐性\*\*\*  
暗黒耐性 耐性なし  
幻惑耐性 強い耐性\*\*\*  
毒耐性 強い耐性\*\*\*  
地獄耐性 耐性なし  
音耐性 弱い耐性\*  
神経耐性 耐性なし  
混沌耐性 耐性なし  
魔法耐性 普通の耐性\*\*\*

◆特徴と体質

「フィート」貴方は猫よりも速い「速度+10」  
「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection  
Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「フィート」貴方は猛烈な信者だ「信仰+8」

「変異」あなたの皮膚はとても硬い「PV+6」

「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」

「変異」あなたの腕はひきしまっている「筋力+3」

「変異」あなたの声は全てを魅了する「魅力+10」

「変異」あなたの脳は完璧な機械だ「暗記+8」

「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「フィート」貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」

「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限-20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備は竜族に対し強力な威力を発揮する

あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…ネビネイル

種族…神の化身

性別…男性

職業…

Lv15

ステータス：カッコ内は元の値

|     | 現在値 | 前回比         |
|-----|-----|-------------|
| 生命力 | 90  | (90) ー      |
| マナ  | 150 | (150) ー     |
| 狂気度 | 0   | ー           |
| 速度  | 112 | (116) ー     |
| 筋力  | 46  | (29) +3(+3) |

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 魅力 | 魔力 | 意思 | 習得 | 感覺 | 器用 | 耐久 |
| .. | .. | .. | .. | .. | .. | .. |
| 2  | 3  | 3  | 2  | 2  | 2  | 4  |
| 0  | 2  | 1  | 1  | 2  | 7  | 3  |
| (1 | (2 | (2 | (1 | (1 | (2 | (3 |
| 4) | 5) | 0) | 5) | 3) | 0) | 0) |

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| +  |    |    |    |    |    |    |
| 1  | +  | +  | +  | +  | +  | +  |
| (1 | 1  | 6  | 1  | 1  | 2  | 4  |
| +  | (+ | (+ | (+ | (+ | (+ | (+ |
| 1) | 1) | 1) | 1) | 1) | 1) | 3) |

## Lv28..旅行者と防衛者と 盗掘者の復帰 と 空から降ってきたお嬢様

1503日目

とりあえず、レシマス探検のキーとなる魔石3つのうちを2つを入手した。

最後のは死者の洞窟という場所にある愚者の魔石というらしいが、正直面倒なのでいきたくないでござる。

アンデッド系がうじゃうじゃ居るのは間違いないだろう。

アンデッド系が多いということは下手すると力を奪われていざという時に全力で戦えなくなるかもしれない。

いやだなあ。

ネビネイルもこの間調子に乗らせ過ぎて死なせちゃったし……。

復活には時間がかかるし。

こういう時こそアリスと戯れて癒し分補充だよな。

本当、アリス可愛い。良く目の中に入れても良い位と言う比喻があるが、その気持ちが良い判る。

まー、俺とエリーの娘だし、この世界だから後数年もしたら肉体作りや戦闘訓練も始めなけりゃいかんだろう。

ある程度のモンスターや盗賊たち相手に戦って勝てるぐらいにはなっってもらわないとなー。

後、そろそろ他のメンバーを戦線復帰させるべきか？

いい加減、二人旅だと手が足りない場面があるしなあ……。

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||



「ちっ、しょうがない！」

そう言って先ずはハウンドを大剣で斬り潰し、ウエンディに一つの斧槍を渡す。

それはついこの間入手したばかりのランキスだった。

そもそも、今まで両手にバックラーを装備していたのは前衛が多かったから態々近接戦闘を仕掛ける必要が無かったからで、少数での旅となると逆にソレが自分の首を閉めることになったのだ。

「……！」

その認識が正しいといわんばかりに、ランキスを持ったウエンディはうまくショットガンとランキスを持ち替えながら器用に戦いを続けた。

その後、2つ3つのネフィアを探索し、水晶製の合成鎧とミスリル製のガントレットを入手し、これこそ天佑だとススムは思わざるをえなかった。

その二つの装備のお陰でウエンディの防御能力が大いに上昇したからだ。

とはいえ、だからと言って直ぐに、再びネフィア探索に出るかといえ、そんなわけが無い。

相変わらず、結構な額の税金の請求が来ているので、それを支払う為にパーティで演奏を行い、金稼ぎの日々だ。

本来なら一月の税金など各所から与えられている給与で賄えるのだが、殆どがススムが買い漁る巻物や魔導書の代金で消えている。

その他にももちろん食料や薬品などの購入もあるが、やはり一番大

きいのは巻物や魔導書の類だろう。

「ぐはあっ!？」

「あ、主殿!?! レイハンド!!」

なお、パーティには実力者が多く、更に音楽にうるさい人間も多いので演奏する際は常に命懸けだ。

今もススムは某紅い人や遠征した筈の大佐殿、更には芸術家や見覚えのあるギルドトレーナーに石を投げられて一瞬三途の川を渡りかけていた。

「時々、宝石を投げつけられていたのだけど……これって嫌がらせなのか認められているのか……」

「認められているのではないかと思うのじゃが……これは結構大きな塊ですのう」

「……（コクコク）」

そういつてネビネイルとウェンディがススムを励ましつつおひねりを回収していく。

中には時々本棚やベッドを投げ込む剛毅な聴衆が居るが、そちらはススムが背負って運んでパルミアの商人に売ったりというのがいつもの流れだ。

他にもネフィア探索で得られた対して価値の無い武具や雑貨は基本的に付近の街や村の商人に卸している。

だが、魔導書の類や薬などは余り売ることが無い。

単純にススムが自分で使ったり仲間に使わせたりするからだ。

そんなわけで、ススムは何時ものように商人に要らない物を押し付け、そして以前のネフィア探索で得られた魔導書を読もうとすると……。

魔導書を開いた瞬間に光が天に昇りそれは人の形を取り、そしてそれはゆっくりと地上へ降りてきた。

「親方！空から女の子が！！」

どこかの誰かがそういった。

ススムは呆然としながら降りてきた女の子を見た。

金髪碧眼でどこかエリーに似た感じもするが性格などは大いに違い  
そんな純正美少女だ。

エリーとの一番の違いは『胸がでかい』という所謂巨乳という点に  
尽きる……とはススムは死んでも口にしないだろう。

「わたくし、セズバルドと申します。これより貴方様の配下に加わ  
りますのでよろしくお願いいたしますわ」

どこかお嬢様然とした容姿と態度のセズバルドを名乗る少女にスス  
ムは「おいおい」と呟いてから問いかける。

「キミは一体何者なんだ？」

勿論、ススムはこういった現象の前例を知っているのである程度予  
測はついている。

「そうですわね。判りやすい例えで言えば、私は……本の精の様な  
ものですわ」

その後もセズバルドの自身のアピールタイムが始まる。

まあ単純に何が出来るか、等だ。

まず、ポーション投擲……無限にランダムにポーションを投げるこ



とができるとか、脆弱の霧、鈍足、治癒の雨を使えるとも告げる。

「ふうむ、なるほどね……。まあ、まずは武具を整える事から始めないとな」

ウレルの時でもう耐性が付いたのかススムはうだうだ考えるのを放棄してセズバルドを仲間として迎え入れた。

ネビネイルは主がソレで良いのなら良いか、と思い、ウエンディはどのみち自身が考える必要はない、と考え同時に戦力が増えたのはいいことだ、と歓迎した。

「それじゃ、まずは武具屋に行くぞー」

「わたくしに相応しい武具を見繕ってくださいませ」

結局、パルミアの店では良い武具が手に入らなかったので手持ちや倉庫にある武具でセズバルドの装備を整え、そして……。

「先ずはどの程度戦えるか見なきゃな」

「判りましたわ。わたくしの実力をご覧あそばせ」

そう言って与えた白銀の長剣とミスリルのバックラーを手に突撃していくセズバルド。

ススムは大丈夫だろうか？とも思ったが良い意味で見立てが外れた。彼のお嬢様はそれなりに武具をキチンと使いこなし、勝利を収めているのだ。

ススムの初期と比べれば装備も断然良いが才能が段違いだと思わざるを得ない。

「……ま、まあ基本的に俺の方が強いし問題なしっ！」

と、思っていると少し強い相手が出てきた途端に追い込まれ始める。

「地力の差ですな。コレばかりは器用に立ち回ったとしても埋めがたいものがあるようじゃな。助太刀してきますじゃ」

「……（コクリ）」

「任せた、二人とも」

二人が参戦して事なきを得たが、セズバルドは才能があるにしても今はまだ蕾、といったところなのだろう。

まだまだ才能を発揮するには経験が足りない、という事が良く判った。

「というわけで、暫くは地力をつけるために旅歩きで経験をつもうか」

「……判りましたわ。確かに私は経験がないのも事実ですわ」

非常に悔しそうに言うが、セズバルドはやはりお嬢様だけあって体力がない為、旅も途中途中で休憩を挟む事になる。

しかし、かなりきつい筈なのに文句を言わないのは意地とかだろうか？

敢えて尋ねて見ると彼女はこう答えた。

「わたくしはコレでもかつては……いえ、遥か昔に存在したそれなりの家柄の生まれですわ。故にこの程度のことでは根を上げては今亡き家臣達や多くの者たちに顔向けが出来ませんわ！」

「……ふうん？しかし、なんで本を読んだらお前さんが出てきたんだ？」

「わたくしが居た時代ではある技術が存在しました。それは人を魔導書に封印するという技術です。これは時に犯罪者を封じる為に使う事もあれば、わたくしのように『とある事情』でそうしてでも生

き延びるという選択肢を選んだものが自らを封印し、後の世で再び名を挙げるための処置ですわ。もっとも、今ここにいる私は原典となるわたくしから幾つも分かれた写本のようなもの。探せば似たようなわたくしが幾らでも出てくるでしょうが」

「なるほど……だから★妹の日記なんかも結構量があるわけか」

「あら？　と言う事はもしかして……」

セズバルドはその言葉で察した用だ。

「ああ、一人だけどその本出身の『妹』がいるよ」

「そう……あの不憫な子ね。変態魔術師に洗脳されて、目覚めて最初に見た人物を自分の兄や姉と思い込んでしまう呪いが掛けられて、そのまま魔導書に封印されたのよね、確か」

「そんな呪いが……」

ちなみに目の前のセズバルドや家で待機中のウレル等の一部の人間を対象に確実に『血』を残す為に魔導書に封印し、封印した魔導書を原典としてそこから更に写本と言う形でその封印の書のコピー、セズバルド達からすればクローンがたくさん居るらしい。

セズバルド自身もクローンの一つだと言う。

そんな話をしながら一行は南に向かう。

目指すのはノースティリスの南関所だ。

最近になってようやくサウスティリスに行ける様になったらしいので、少しだけ見て回ろうと言う魂胆だ。

そして、ススムは3人を連れてキャラバンに同行してサウスティリスに向かったのだが……。

「主殿、見事に道に迷いましたな」

「はあ、考え無しに行動するからこうなるのですわ」

「……（フウ）」

一ヶ月ほど歩き回ったが、ネフィアはあれどもどうしてか街には辿り着く事ができなかった。

「帰るか……」

「ソレが良いかと思えますじゃ」

歩き回ったお陰で向こうの土地柄を見ることは出来たが、徒労感ばかりが募ったのだった。

**Lv28..旅行者と防衛者と 盗掘者の復帰 と 空から降ってきたお嬢様(後**

今回はメインストーリー的には大きな進展がありませんが、うっかり未鑑定のお嬢の日記をよんでしまい、仲間が増えてしまったので妄想設定も追加してgdgdと。

サウステイリアはまだ工事中なので出来る事も全然無く、すごすごと戻ってまいりました。

では、今回のススムとLvupしたウェンディと新参のお嬢のセズバルドのステを晒します。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv25 ↓ Lv26

ステータス:カッコ内は元の値

現在値      前回比

生命力102 (96)      一一

マナ    153 (153)      一一

狂気度    0      一一

速度    165 (100)      一一

名声    14318      +4139

カルマ    0      一一

現在値      前回比

|    |    |      |    |      |
|----|----|------|----|------|
| 筋力 | 76 | (50) | +5 | (+1) |
| 耐久 | 52 | (40) | +2 | (+1) |
| 器用 | 62 | (38) | +3 | (+3) |
| 感覚 | 54 | (44) | +4 | (+2) |
| 習得 | 53 | (44) | +3 | (+3) |
| 意思 | 59 | (32) | +2 | (+2) |
| 魔力 | 37 | (25) | +1 | (+1) |
| 魅力 | 44 | (27) | +2 | (+2) |

## 装備

頭 .. ★《賢者の兜》+2 [4, 15] ∴ (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》[0, 4] ∴ (耐酸性, 不燃, 二刀流\*\*\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*\*\*)

背中 .. ☆この世ならざる外套『声のドラゴン』[31, 2] ∴ (耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+5) 胴体 .. ☆赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+2 [18, 45] ∴ (耐酸性, 不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 意思+8, 生命力+3)

利手 .. 防衛者のチタンクレイモア+2 (3d10+7..0%) (2) ∴ (不燃, 両手持ち適正, 電撃耐性\*\*, 冷氣耐性\*, 火炎耐性\*, 筋力+3, 竜殺\*\*)

手 .. ー

指 .. 硝子のスピードの指輪-1 ∴ (不燃, 速度+8)

指 .. 呻くルビナススピードリング ∴ (耐酸性, 不燃, 筋力維持, 速度+9, 生命力+3)

腕 .. ☆色あせぬ重層箆手『ザ・スカイ』(10, 4) [5, 25]

「 ∴ (不燃, 感覚維持, 器用維持, 耐久維持, 釣りー\*, 軽装\*\*)



|      |          |       |   |          |       |
|------|----------|-------|---|----------|-------|
| 見切り  | L v 1 3. | 5 8 6 | ↓ | L v 1 4. | 2 5 4 |
| 射撃   | L v 2.   | 1 7 6 | ↓ | L v 3.   | 4 2 0 |
| 読書   | L v 2 8. | 6 4 5 | ↓ | L v 2 9. | 2 7 1 |
| 遺伝子学 | L v 1 0. | 4 6 6 | ↓ | L v 1 2. | 1 1 6 |
| 解剖学  | L v 1 0. | 5 4 2 | ↓ | L v 1 0. | 9 3 8 |
| 暗記   | L v 1 2. | 1 3 3 | ↓ | L v 1 2. | 9 4 8 |
| 栽培   | L v 1 0. | 1 5 1 | ↓ | L v 1 0. | 3 7 2 |
| 料理   | L v 8.   | 4 7 7 | ↓ | L v 9.   | 0 0 2 |
| 信仰   | L v 2 7. | 0 4 8 | ↓ | L v 2 7. | 5 7 7 |
| 旅歩き  | L v 2 1. | 5 2 0 | ↓ | L v 2 1. | 9 9 4 |
| 乗馬   | L v 1.   | 3 9 0 |   |          |       |
| 瞑想   | L v 2 2. | 4 0 5 | ↓ | L v 2 2. | 7 6 1 |
| 詠唱   | L v 1 6. | 8 0 3 | ↓ | L v 1 7. | 4 1 5 |
| 魔道具  | L v 1 2. | 4 3 5 | ↓ | L v 1 2. | 5 9 9 |
| 交渉   | L v 3 0. | 9 6 1 | ↓ | L v 3 1. | 3 8 3 |
| 投資   | L v 1 8. | 3 1 9 | ↓ | L v 1 8. | 4 9 5 |
| 演奏   | L v 2 2. | 8 0 9 | ↓ | L v 2 4. | 6 0 6 |

◆武器の専門

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 長剣    | L v 2 2. | 4 6 5 | ↓ | L v 2 3. | 1 0 3 |
| 斧     | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 格闘    | L v 1 1. | 3 0 4 | ↓ | L v 1 1. | 3 7 8 |
| 鎌     | L v 4.   | 6 5 0 |   |          |       |
| 鈍器    | L v 9.   | 2 7 2 |   |          |       |
| 槍     | L v 1 2. | 5 3 9 | ↓ | L v 1 3. | 6 0 4 |
| 杖     | L v 4.   | 0 1 8 |   |          |       |
| 短剣    | L v 1 0. | 5 9 9 |   |          |       |
| 弓     | L v 1 5. | 3 7 7 | ↓ | L v 1 5. | 8 4 1 |
| クロスボウ | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 投擲    | L v 8.   | 2 1 0 |   |          |       |



銃器 Lv4・000

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*

冷氣耐性 弱い耐性\*\*

電撃耐性 強い耐性\*\*\*\*

暗黒耐性 耐性なし

幻惑耐性 強い耐性\*\*\*

毒耐性 強い耐性\*\*\*\*

地獄耐性 耐性なし

音耐性 弱い耐性\*\*

神経耐性 耐性なし

混沌耐性 耐性なし

魔法耐性 普通の耐性\*\*\*

◆特徴と体質

「フィート」貴方は猫よりも速い「速度+10」

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection

Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「フィート」貴方は猛烈な信者だ「信仰+8」

「変異」あなたの皮膚はとても硬い「PV+6」

「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」

「変異」あなたの腕は強力だ「筋力+6」

「変異」あなたの声は全てを魅了する「魅力+10」

「変異」あなたの脳は完璧な機械だ「暗記+8」

「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」  
 「フィート」貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」  
 「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い  
 「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限-20」  
 「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する  
 あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする  
 あなたの装備は混乱を無効にする  
 あなたの装備は追加打撃の機会を増す  
 あなたの装備は竜族に対し強力な威力を発揮する  
 あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ  
 あなたの装備は呪いの言葉から保護する  
 あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…ウエンディ  
 種族…イエルス  
 性別…女性  
 職業…遺跡荒らし

Lv11 ↓ Lv15  
 ステータス：カッコ内は元の値

|         | 現在値       | 前回比       |
|---------|-----------|-----------|
| 生命力     | 110 (100) | — —       |
| マナ      | 90 (80)   | — —       |
| 狂気度     | 0         | — —       |
| 速度      | 95 (82)   | — —       |
| 現在値 前回比 |           |           |
| 筋力      | 29 (22)   | +1 (+1)   |
| 耐久      | 33 (26)   | +5 (+2)   |
| 器用      | 40 (32)   | +1 (+1)   |
| 感覚      | 34 (27)   | +12 (+11) |

|      |      |      |      |
|------|------|------|------|
| 魅力   | 魔力   | 意思   | 習得   |
| 22   | 24   | 25   | 42   |
| (16) | (18) | (19) | (34) |
| —    | +    | —    | +    |
| —    | 11   | —    | 1    |
|      | (+7) |      | (+1) |

名前..セズバルド

種族  
..  
ローラン

性別..女性

職業..魔法劍士

LV5

ステータス：カッコ内は元の値

現在値  
前回比

生命  
力  
100  
(100)  
—  
—  
—

|    |    |                |   |
|----|----|----------------|---|
| マナ | 80 | $\binom{8}{0}$ | — |
|    |    |                | — |
|    |    |                | — |

狂気度 0 ———

速度  $\frac{1}{19} \left( \frac{9}{6} \right)$  — — —

現在値  
前回比

筋力  $\frac{1}{6} \left( \frac{1}{0} \right)$   
—  
—  
—

耐久..22(13)  
—  
—  
—

器用.. $\frac{1}{2}$ (7)  
—  
—  
—

感覺.. 15 (7)

習得.. 12 (7)

意思..  $\frac{1}{6}(10)$   
—  
—  
—

魔力..20(14)

魅力..  $\frac{1}{6}(10)$   
—  
—  
—

どうしても良い事です、L V 5時点のススムとセズバルドを比較するとセズバルドの方がやはりかなりステータスがよろしいです。

次回辺りでどこかのイベント消化しなきゃなあ。



結局人数は3人のままだが、セズバルドが冒険初心者である為フローが非常に大変になった、とだけススムは思った。

と、いうのも早速生死の境を彷徨われてしまったのだ、彼等のお嬢様は。

腕はもげて胴が真っ二つになり腸が洩れている。

「成功率低いんだけどな……『復活』！」

魔法そのものは成功しているものの、冥界には届ききらず途中でふつりと切れてしまうような感覚で魔法が力を失う。

「もう一回……『復活』！」

ぼわんという音を立てて失敗してしまう。

「主殿……もはや諦めた方が……」

「いや、今度こそ！『復活』！！」

ススムの3度目の正直とばかりの叫びにも似た声が功を奏したのか、『復活』の魔法が正常発動し、セズバルドを冥府から吊り上げる事に成功した。

「う……あ……わたくしは一体……ヤマを名乗る神に溜息をつかれていた気がしたのですが……」

「何を言ってるんだ？まあ、死に欠けと言うかモロ死んでたような気もするけど、蘇れたんだから気にするな」

「具体的には腕がもげて、胴が腹のあたりで真っ二つになってたのじゃよ。主殿が復活の魔法を使えてよかったのう」

ちなみに、彼女は今日既に2回目の冥土帰りだ。

1度目はネビネイルのレイハンドで事なきを得たが、2度目は本当にギャンブルだったと言える。

こう考えるとネビネイルのレイハンドの有用さが身に染みるのだが、レイハンドは一日一回……というか、1眠りしてようやく1回分補充で上限回数も1回という使い勝手なので、ススムとしては早く『復活』の魔法を使い慣れてしまいたい所だった。

中々習得機会がないのが難点なのだが。

さて、ソレは置いといて久しぶりにヨウインにやってきたススム達一行は、とある人物に呼び止められた。

「お久しぶりです、冒険者さん」

「おや、アンタは……」

そういつて思い出そうとするススムだったが……。

「……ええつと……」

嫌な間がおかれ、結局ススムはこう口にした。

「誰だっけ？」

「タムです！もう1年以上前に家の猫退治を依頼した!!」

ソコまで言われてようやく思い出した。

「あゝ……ああ！はいはい！あの時のか!!」

「思い出していただけたようで。それよりも！何時になったらウチに居座る猫たちを退治してくれるんですか!？」

「いやいや、ちょっと待てよタムさん。アンタ、あのライオンやケ

ットシー、その他諸々が暴れまわってるのを知ってて言ってるのか！？」

「はぁ？何言ってるんですか。猫でしょう、相手は！とにかく、とつととやってくださいよ！！」

「いやいや、お前待てよ！！アレはそこいらの奴じゃ軽く死ねる敵だぞ！？」

「猫ごときにやられる冒険者なんて名ばかりじゃないですか！」

そうして結局ススムは冒険者としての意地……というわけではなく、単純に名声が地に落ちるからという理由でタムの猫屋敷にリベンジする事になった。

もっとも、渋々とはいえ受けた理由のもう一つは『今の自分なら何とかできるだろう』という推測があったからだが。

そして、タムの猫屋敷に入り込んで直ぐにやる気が一気に落ち込む。

「ライオン多過ぎ。ナニコレ」

げんなりした進むにネビネイルが活を入れるように言葉を掛ける。

「とはいえ、今の我らならばこの程度は何とか出来ましようぞ！主殿、ご命令を！」

その言葉にススムは覚悟を決める。

「しゃーない。見敵必殺！敵は全部叩き潰せ！」

「オウ！」

そうして突っ込んでいく男二人。

しかしセズバルドは流石にそうはいかない。



いかに良い装備を使わせて貰っているとはいえ、まだまだ駆け出しの冒険者程度の実力しかないのだ。

彼らのように突っ込んで行っっては命が幾つあっても足りない。

「つて、なんでライオンに齧られて余裕綽々なんですの!？」

「この程度で参る様じゃ! レシマス攻略なんて夢のまた夢だ!! ぶんぬらあー!!」

それから大よそ2時間。

ライオンや猫、その他を召喚するバケモノは物量と肉の壁に苦戦しつつも遂に撃破に成功するのだった。

そしてススムはいい感じの笑顔でライオンをはじめとした多くのバケモノの屍骸を引き摺って行ってタムの前にドスンと叩きつける。

「や、やあ……そ、それはなんだい？」

ソレとは見るも無残なライオンやケットシー、魔術士や謎のバケモノの屍骸だ。

「おまえの! 家に! たむろしてた! バケモノだよ! コレのどこが猫だ!？」

「ひ、ひい!？」

散々苦勞させられたせいでストレスも天元突破状態だったススムは怒声を上げてタムに詰め寄った。

周囲で見ていた宿屋の店主やギルドトレーナーの取り成しがなければ、タムは今頃魚の開きのように卸されていた事だろう。

それ程に召喚を乱発する面倒な敵だったのだ。

その後、とりあえずの謝礼と言う事でプラチナ硬貨と金貨、そして

素材槌という希少品をススムは譲り受けた。

「これは？」

「コレはアーティファクト……確か結構高位のアーティファクトの素材を変化させる事ができると言う話だそうです」

「かなーり伝聞系だな」

「そりゃ、使い道がなくて使った事ありませんし」

その後、キッチリと報酬全てを受け取り一度ススムは自宅へ戻ることにした。

何故かと言えば非常に簡単。

愛と癒しを求めての帰宅だ。

今回の敵であった猫軍団は、ススムにとってはワイナンと戦うよりもしんどいものであったとか。

「旦那様、戻ってきてくださるのは嬉しいですが……1日もしないで戻ってこられるのは早いのでは？」

「いや、ちゃんと働いてるぞ！ほら、コレ」

「……そういえば、旦那様は名声が上がるのさえ嫌わなければ、かなり素早く稼ぐ方でしたね」

「いや、まあ……なあ。名声が余り高くなると、税金酷いから上げたくないし……なあ？」

掲げられている金貨袋とその言葉にエリーは非常に難しい顔をする。ススムも難しい顔をしている。

「世の中世知辛いんだよ。……とりあえず、武具屋や魔法店とかへ

の投資もしておかないと、良い武具が入らなくて探索が滞る。本当に金が出が激しいったらありやしねえ」

「……って、投資までされていたのですか？」

「そうでもないといつら本気で商売に力入れないんだよ……。とはいえ、投資して武具がいいのになると、今度は武具が高くて買うのに困ったりするんだが」

「儲ける気があるのでしょいか？」

「生きるのに必要な金だけ稼げれば良いと思ってるんだろいかねえ？」

その後、ほのぼのと雑談やアリスの育児に関する話を話した後、エリーはススムの次の予定を尋ねる。

「次か……そろそろミノタウロス共にリベンジを仕掛けたい所だな」  
「というと、噂のウンガガ……とか言うミノタウロスが強敵となりそうですね」

「知ってるのか、エリー？」

「噂だけは。なんでも他のミノタウロスとは頭一つ分どころか隔絶して強いとか……。素早さはそうでもないそうですが、類を見ない怪力から繰り出される凶悪な一撃は大岩でさえ木っ端微塵、凶悪なタフさを持つ鋼の肉体は例え業物といえる刀剣でも傷付かないと聞きます」

其処まで聞かされてススムはうんざりした。

鉄鋼龍コルゴンや古城の主ワイナンもまた凶悪で強いと噂であったが、改めて聞くとミノタウロスの王ウンガガは下手をするとそれ以上じゃないか？とも。

とはいえ、冒険者は自尊心が高い者が多く、運よく敗走するも、自分の名声惜しさでそう吹聴しただけ、と言うのもありえなくもないだろう。

その考えを口にするのとエリーはススムを諫める様に言う。

「ですが、数多くの冒険者や兵士達がミノタウロスの巢に挑み散っていったのは事実です。旦那様も油断だけはしないでください」

「そりゃまあ、油断は出来ないのは分かってるよ。ミノタウロスの魔術師とかは特に。呪いも飛ばしてきて本当に面倒だしな……」

思い返すのは以前挑んで振り返りにあった頃の事だ。

あの時も散々呪いを掛けられてたなあとか、最終的に囲まれてクイックリングの弓矢によってハリネズミにされた、というのは懐かしくも悔しい話だった。

そう、前回は結局ボスに辿り着くどころか、前座で沈んだのだ。その事実を思い出すと道程の困難さが明白に成ってくる。

ついでに、ハリネズミにされた時の痛みを思い出し、やや身震いする。

前回よりも自分は確かに強くなったが、果たしてどこまでやれるか、未知数だった。

だが、猫使い（仮称）を倒した事でススムは案外何とかなるかもしれない、という妙な自信を得ていた。

「なんとかなる、かな？」

「旦那様、そんなノリで大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。問題ない」

そういった後、ススムは一言付け足す。

「少なくとも、俺とネビネイルは他の人間と違って死んでも蘇るしな。……自分で言うのもなんだが、ひっじょうに厄介な存在なのさ、

敵対する奴にとって」

「でも、今回は『あの娘』も連れて行かれるのでしょうか？」

「まー、セズバルドはイザと言う時は先に帰還させるよ。死なれても、『復活』で蘇らせるのは困難だしな」

そう言っ一つため息をついた。

「そういえば、旦那様は『復活』の魔法が使えましたね」

「だけど、アレの詠唱……というか術式の構築が結構複雑なんよ、コレが。その上に使用コストも高いから中々練習も出来ないし、まいったね、本当」

更に難点なのが『復活』は魔法書が出回っておらず、極稀に他者の夢に乱入する赤毛の魔法使いに伝授して貰うしかないのだが、彼と遭遇するのは割と珍しく、その上に教えて貰うものを選ぶ事はできない。

「そういえば、エリー。エリーの復帰時期に関してなんだが」

「はい」

「アリスが乳離れし始めた時期に、他のメンバーと交代で出ると言う形でいいか？」

「それが無難かと思います。アリスがぐずらなければ良いのですが……」

「はは、あの子はかなーりお母さんっこだからなあ。俺、抱き上げると時々泣かれるし……父親が居なくても子供は育つね、マジで」

「旦那様、それは……旦那様帰ってきて直ぐに抱き上げるので、血や汗、後装備のニオイがキツイのかと……」

「……そこか！」

そんなこんなで翌日。

ススムはネビネイルとセズバルドを引き連れてミノタウロスの巢へ向かう。

「そういえば、ススム様。ミノタウロスと言うと……あの牛の頭と足を持ったバケモノですわよね？」

「ああ、そうだけど。それがどうかしたか？」

「幾らなんでも、私の力では奴らと戦うのは厳しい気がするのですが」

「まあ、そうだろうな」

さもありなんとススムは頷く。

「では、今回私がついていくのは？」

「より強い敵と言うものを実感して貰おうと思って。やばくなったら『帰還』の巻物で先に返すから安心していいぞ」

「ですが……よろしいのです？ 『帰還』の巻物は武具に比べれば安価ですけど、それでも一般から見れば高級品ですよ？」

ちなみに、この世界の殆どの店では一般人が買う時の物価と冒険者が買う時の物価は異なる。

理由は様々だが、端的に言うところ『お前らは他より稼げるんだから、その分金を落していけ』と言うわけだ。

これは商店の独断などではなく、各国共通のルールで、他店と差が出にくいのは商人のギルドが存在し、下手に価格を上下しづらい状況が整っているからだ。

では、どこで差が出るかと言えば品揃えである。

これ以上は蛇足が過ぎるので省くが、冒険者は儲かるのと同時に、やはり非常に金が掛かるのだ。

「気にすんな。俺もそこそこ稼いでる方だし『帰還』はそもそも魔

法の方を扱える。それほど問題にもならない」

「主殿は『帰還』の魔法を習熟しておるし、其処まで気にする事はないのじゃ。貰える物はキッチンと貰うがよかろう。それが冒険者じやよ、セズバルド」

「ススム様、ネビネイル……わかりましたわ。そのご厚意に感謝いたします」

キッチンとしたお札を言う姿から、改めて育ちが良いな、等とススムとネビネイルは思った。

「んじゃ、行くぞ！」

## ミノタウロスの巢 一層目

巢に入って直ぐにミノタウロスと遭遇。しかし前衛がススムで後衛にネビネイル、挟まれてセズバルドと言う陣形はタフさとバックアタック警戒の面からしてそれなりに有効だった。

ミノタウロスが斧を振り上げ力いっぱい振り下ろすが、その攻撃の単調さゆえにススムは確実に見切ってヒラリと回避し、得意の大剣による連続攻撃で微塵に切り刻む。

「ふふん、アーティファクトの効果も高いけど、ここまで来ると実力が上がった事も実感できるな」

「主殿、調子に乗ると痛恨の一撃を受けてしまいますぞ？ただでさえ主殿が調子に乗るとそういう事がほぼ確実に起きるのですじや。自重してください」

「……その通りですわ、ススム様。油断は身を滅ぼしますわ。絶対に、気をつけてください」

やや強調した口調でセズバルドがススムに注意する。

その注意にススムはそうだな、と返す。

返事が適当な様だが、それでもススムはキチンと以降注意しながら進む様になったので、意見はしっかりと受け入れた様子だった。

## ミノタウロスの巣 二層目

幾ら注意をし、セズバルドが追い込まれない様にしようとしても、道中でどうしてもセズバルドが幾度か相手と交戦する事態に陥り、彼女はかなり窮地に追いやられもした。

何度も致命傷を受けたり気絶してはススムに後ろに放り投げられ、ネビネイルにキャッチされ、回復を受ける。

仕掛けてきたミノタウロスの戦士を倒し終えた所でススムはそろそろか、と呟く。

そしてセズバルドが気絶と思っているのは実は即死であったりして、それが『復活』でカバーしきれない状態になったのだ。

しかし、一番の問題は復活の魔法がやはり難しいと言う事もある。魔法自体が成功しても、冥府から呼び戻すのに失敗してしまう事もあるからだ。

失敗した時は、気持ちや感覚的に釣りをしてる時に餌だけ食われて逃げられてしまった時の感覚に似ている、とススムは言う。

ネビネイルのレイハンドも既に使用済みという事もあり、ここから先は本当に実力勝負となるだろう。

「セズバルド、お前はここらでいったん引き返せ」

「そうですね、今回、お主を連れてきた理由はより強力な敵の存在を知る事が理由。で、あれば既に目標を達しておりますし」

「……わかりましたわ。少なくとも私はまだ未熟。お二人の足を引っ張るよりはその方がよろしいですわね」



セズバルドは無念そうな表情をしたまま帰還の巻物を広げ、そしてススムの邸宅に転移した。

見届け終わったススムにネビネイルが問いかける。

「主殿、良かったのですか？」

「ん、何がだ？」

「我々も少々キツイ状態である事に違いはありませぬが……装備への呪いもキツクなってきたおります故、下手をすると前回と同じような事も」

「……そいつは、まあ最初から分かっていた事だ。それに、前はフンババだっけ？ そいつに辿り着く前にやられたからなあ。ぶっちゃけて言えば、勝てれば儲けものじゃないか？」

「……命懸けの威力偵察となりますか。正直、蘇れると言っても何度も死ぬのはご勘弁願いたいのだが。それとミノタウロスの王の名前はウンガガですじゃ」

「安心しろ、俺も多分死ぬぞ」

とても良い笑顔でネビネイルの訂正をスルーし、ススムは先を急ぐ。ネビネイルは「こりゃ死ぬな」と内心思いつつススムの後についていくのだった。

## ミノタウロスの巣 第五層

三層、四層共に以前と同じく呪いを飛ばされはした物の、魔法『清浄なる光の加護』や『ホーリーヴェイル』を駆使してそれを防ぎ、ネビネイルは呪いを受けつつ、時々ススムから解呪の巻物を貰い受けて呪いを解除しつつ進んだ。

途中では大して追い詰められる事もなく、強いて言う『キング』

が召喚連打の後に良い逃げっぷりを発揮して苦勞した程度だった。

「ここまでで、大分疲れた気がする」

「主殿はずっとスウォームを打ち続けておりましたしのう、それもやむをえないかと」

スウォーム、ススムが普段『霧払い（ミストファイナー）』と呼んでカッコつけているアレだ。

刀でやればカッコ良く、大剣でやれば豪快なのだが、どちらにしても相応に疲れる事は変わらない。

「ところでネビネイル、さっきから遠くから地響きが聞こえるんだけど、気のせいじゃないよなあ……」

「十中八九、ミノタウロスの王かと」

会話が終わり、二人がため息をついて立ち上がった所でソレは壁を斧で破壊して現れた。

普通のミノタウロスよりも大きく、力強く、重圧感を感じさせ、如何にも凶悪ですと言う雰囲気を持つ斧を持ったミノタウロス。

「ブモアアアアアアアア！」

「ネビネイル、距離をとれ！最低でも俺より前に出るな！！」

「わかりました！」

即座に立ち居地を入れ替わり、同時にススムは詠唱を終える。

「ブンツモオオオオオオオ！」

「輝け『聖なる盾』！」

斧の一撃と輝く魔力で編まれた結界が一瞬拮抗するも、直ぐに突破

され、斧が身を振ったススムの左肩に叩きつけられる。  
その一撃は余りに重く、鎧に輝が入り、ススムは肩の感覚が完全に  
なくなったことを自覚する。

「ぐっ!!」

「主殿!? 『治癒の雨』よ!!」

即座に入った回復の援護により、感覚が戻るもそれでも状況は良く  
ないとススムは自覚する。

「『英雄』の力を我に! 杖よ、今こそ力を示せ!

「女神ジュアよ、我を守りたまえ……『聖なる盾』よ!」

先制こそ受けたものの、何とか体勢を整え終わり、改めて大剣をミ  
ノタウロスの王ウンガガに向ける。

「ブフーツ! ブフーツ!」

「ちっ、こいつぁマジでコルゴンやワイナンよりも強いぞ!!」

斧の一撃がススムの頭狙って振り下ろされるも、その軌道を何とか  
見切りススムはそれを更に前に出て大剣の横薙ぎの一撃を見舞う。  
しかし、その一撃も直撃したにも関わらず、斬る事が叶わない。

寧ろチタン製の大剣が弾かれてしまう程だった。

ススムの手には鋼鉄の叩き付けたかのような反動と痺れが襲い掛か  
っていた。

「鋼鉄を斬るよりも厄介じゃねーか!!」

「ブモオオオオ!!」

斧が再び振るわれるもソレは再び回避。

「チッ、スマートに行きたかったんだけどな！」

そう言っただけでススムは手持ちの薬ビンを幾つも投げつける。

中には呪われた肉体回復、精神回復の薬や硫酸や火炎瓶、毒と雑多に色々だった。

それで多少動きが鈍ったものの、ウングガ怒りのボルテージは更に上昇し、それに伴い体の切れが薬を浴びる前よりも良くなる。

「っ！？冗談きついぞ！！！」

「危ない！主殿！！！」

ウングガに集中していたススムめがけて、ミノタウロスの闘士が突進してくる。

「しまっ！？」

「ぶもおー！」

ウングガから目を離せず、対処が遅れたススムはミノタウロスの闘士の攻撃を受けるかと思った。

だが、ソレは寸前の所でネビネイルに庇われる。

「ぐっ……ま、まだまだじゃ！」

言葉と共に血塗れた棍棒をミノタウロスに叩きつけ、そのまま叩き伏せるも。

「ネビネイル！！下がれ！！！！」

「なんとっ！！！」

ススムを庇い、ミノタウロスの闘士を倒す為とはいえ前に出過ぎたせいでウングガに狙われてしまう。

「ブモオオオオオオオオ！」

「——！！！」

ソレは正に両断とも言える一撃。

ネビネイルは一撃で頭頂部から斧で真っ二つに斬り潰される。

「一撃で！？洒落にならねーぞおい！！！」

慌てて距離をとり、弓矢での攻撃にシフトするも、ソレは遅すぎた選択だった。

最初から距離を取りながら戦えば或いはまだ、結果は違ったかもしれないが、弓による猛毒もこの時点では既に付け焼刃程度にしか役に立たない。

まったく効いた様子を見せない事に、ススムの闘志は折れてしまった。

「ハハ——こりゃまいっ」

「ぶもおおおお！！！」

言葉を全て口にする前に、ウングガの斧が盾にした大剣ごとススムの頭部を粉碎し、ススムは痛みを感じる暇もないまま死んだ。

**Lv29：旅行者と防衛者とお嬢と 猫使いの最期とミノタウロスの巣へのリベ**

今回、ウンガガをHP8割削れたんですが、クリティカルでネビネイルが沈んだ直後にススムも沈みました。

HP8割（200強）が一撃って超怖い。

ガチでそのまま埋まっちゃおうかと思った瞬間でした。

セズバルドはまだ弱いのでアレですが、ネビネイルはそれなりに強くなったのでウンガガ相手ではアレでしたが、ミノタウロス達相手ではタイマン時は割と安定してました。

もう少し強くなれば群れられても大丈夫かな？

今回はステータスをコピるの忘れてたので、次回にステータス掲載します。

**LV30～LV32..旅行者と防衛者とお嬢と 決意、新たに(前書き)**

大分駆け足気味です。

プレイ状況がでたらめになってきてるなーと思って生暖かい目で見てください。

一応、決めたルールだけは護ってる状態です。

20110125 指摘のあった誤字修正





そして、外からはエリーの気合の籠った声と、セズバルドの悲鳴が聞こえた。

「……悪いが、何がどうなってるか説明してくれるか？」

「あはは……了解、だよ」

事の発端は、セズバルドが帰還した直後にあるらしい。

と、いうのも彼女が自身の無力さを痛感し、打ちひしがれていた所、エリーがこう言ったとか。

「力が、欲しいですか？」

と。

そうして始まる地獄の特訓。ウレルもススムとネビネイルが居ない間に何度も経験した『模擬戦』やつあたりである。

エリーは実の処、ススムの指示に従ってしっかりと自宅でアリスをあやしていた。

だが、やはりと言うか、母親をしているよりも暴れたいと思う時がままあったらしく、その度にウレルをはじめとしたメンバーと『模擬戦』つあたりをしていたようだ。

「エリーちゃん、お兄ちゃんと一緒に冒険できるネビとセズが羨ましいんだよ」

一拍置いてウレルは付け足す。

「私も、羨ましいんだ。あの二人が」

「そっか……」

なんと言ったものか、と悩み始めるが結局思ったままに言う事にした。

「わるいな、気の利いたこともいえないが、それでも俺はお前とエリー、それにチョロナをコレで結構頼りにしてるんだ。アリスの事もそうだし、この家の防備も、な」

「お兄ちゃん」

石動の家は首都であるパルミアから、歩いてそれほど時間の掛からない位置にある。

故に、治安もそれほど悪いわけではないが、それでも街の外にあると言う都合上、モンスターの襲撃もあれば、稀に盗賊団の襲撃もある。

「ま、なんにしても大勢で動くのは今の所デメリットが大きい。何でか知らんが、他の人間よりも俺は強くなりやすいけど、お前達はそうも行かないだろう？ だったら、先ずは俺が強くなって、確実に守れるようになりたいんだよ」

「わがまま、だね」

「ああそうだ。わがままだ。知らなかったか、お前の兄貴は、この世界できっと一番わがままで理不尽な存在だぞ。俺は俺の望む全てを手に入れたいんだからな」

「意味わかんないよ。でも、応援する。わたし、おにいちゃんがだいすきだから」

「あんがとよ」

その後、ススムが再びネビネイルとセズバルドを引き連れて旅に出た後、エリーはチョロナに一つ指示を出す。

「奴隷を買ってきなさい」

「よろしいのですか？ ススム様、余り良い顔をされなと思います  
が……」

ススムが奴隷と言う制度を余り良いと思っていない事、そして奴隷  
の末路……自分たちの力の勝てとする行為は、ススムの性格からし  
てやはり好ましいものではない。

「オマエが気にする事ではないわ。それに、旦那様は黙認している  
もの」

窓の外に見える、既に小さく見えるススム達の姿を見ながらエリー  
は歪な笑みを浮かべる。

チヨロナはその笑顔が、とても恐ろしく感じたのだった。

そんな御家庭のナニカを特に気にすることなく、ススム達はネフィ  
ア探索の旅を繰り返していた。

と、言うのも非常に簡単な話で、幾ら金策を練ったり魔法の学習を  
行った所で、戦闘の腕は上がらないし、勘も鈍る、と言う極判りや  
すい理由だ。

何度かセズバルドには厳しい場面があったので、即座に治癒系魔法  
杖で回復させたり帰還させたり、荷物の持ち過ぎで辛くなったので  
自分も帰還したりと言うのを繰り返した。

そういう事を繰り返しながら幾つかのネフィアを探索していったあ  
る日、久し振りのヨウインのギルドに立ち寄った際にこう呼ばれた。

「おお『ネフィアを統べる者』ススムじゃないか！ 最近の活躍は聞  
いているぞ！ 大活躍じゃないか！！」

「ちよちよっ！なんだよその大それた『統べる者』とか！」

ススムは思い切り動揺してそれを訪ねると、ギルドの情報屋の男は「ああ、偶にいるんだよなあ」と言ってから教え始める。

「ギルドにはランクシステムがあるのは知ってるな？一定の業績を積んでランクを上げるあれだ」

「え？あ、ああ冒険者ランクとか魔術師ギルドのアレもだよなソレは知ってるけど、それがどうかしたのか？」

「仕方ないな、特別にただで教えてやろう」

ここで簡単に説明すると、ティリスでは様々な分野でランクシステムが導入され、その業績に応じて国から報奨金が支払われる。

ススムがあげた冒険者、探索者、クロウラー魔術師（同列に戦士と盗賊）、商店、博物館、アリーナ、ペットアリーナ、コミュニティ、家格などだ。

一定期間に一定の業績を上げればランクが上がり、場合によっては下がる者もあるが、他にも下がる事なく積み重なる事の出来る者もある。

前者がアリーナの場合、後者はそれ以外全部だ。

冒険者ランクに関しては他者との名声競争でもあるので、ぼんやりしているとアツサリと置いていかれてしまい、最終的にはビリになってしまうことも間々ある話だ。

そして、冒険者が活躍すればするほど冒険者ギルドにも報奨金が入ったりする、と男は言った。

ちなみに、ススムは冒険者ランクが40人中ランク30だ。

「でだ、冒険者はそれぞれ異名を持つから敢えてつけられる事はないが、他のランキングはランクに応じて本人や施設に称号があるんだよ」

探索者<sup>クロウラー</sup>ランク1…ネフィアを統べる者。

アリーナランク39…アリーナの中堅闘士

博物館ランク42…ちよつと人気のある博物館

ホームランク34…ちよつと人目をひく家

商店ランク59…リピーターのいる店

コミュニティランク39…マダム好みの有権者

ギルドランク76…ギルドメンバー候補

「となっているんだよ」

「……この手帳がここまで機能があったなんて気付かなかった」

「結構いるんだよな、隅々まで見ない奴って。基本依頼情報しか見ないとか、税の滞納対策で見る程度のが殆どだろう」

「……まあ、そうだな」

ススムが冒険者になって直ぐに貰った手帳であったが、そういう自動編集機能があったとはまるで思わなかった。

流石ファンタジー……と、久し振りにこの世界のファンタジーぶりを思い知らされるのだった。

さて、幾度もネフィアを潜っていると流石に疲れや飽きが来る。

そう思ったススムは、趣向を変えて久し振りに家族全員を連れ出し『宝探し』をする事にした。

突然の振りだったが、そこは彼と何年もやってきた面々だけあって即座に対応できた。

「しかし、気が付いたら結構宝の地図が溜まってたな」

「旦那様は、意外と運が良いのでしょうか？」

「意外とは失礼な。俺はかーなり、運が良いんだよ！無一文から始まって美人の嫁さんに可愛い娘、それに良い仲間に恵まれてる

しな！」

ススムは胸を張って、気負うことなく堂々と言ってのける。  
エリーはススムと旅をし、そして結ばれてからと言うもののドンドンと美しくなっていた。

それはアリスが生まれてからも変わらない。

「美人……旦那様は口がお上手です」

「上手なんじゃなくて、素直なだけだよ」

「だうー」

ススムが言った後に、ススムが背負っているアリスも同意するように声をあげる。

「アリスは本当、お母さん似だな。俺に似てる箇所がわからんぐら  
いだ……」

「あら、アリスは旦那様に似て素直な子ですよ。少し手がかかる所  
もありますが、そういった所も旦那様に似ていてとても可愛らしい  
です」

それはアリスを通してススムはそういう所がある、とエリーは言う。  
そういう風に言われると、なんともこそばゆい気持ちになるススム  
だった。

「ねー、ネビネイルー。お兄ちゃんたちがイチャつき過ぎててなん  
か疎外感感じるんだけどー」

「妹様、主殿達は世間で言うところの新婚……と言うには少し時間  
が経ちましたが、それでもまだまだ若い夫婦ですじゃ。致し方あり  
ますまい」

「そうよう？お二人はまだまだ若いんだし、旦那さんが普段からしよっちゅう家にいないし、奥様も若いんだからあーいう風にいちゃつきたいモノなのよう？」

「（コクコク）」

愚痴るエリーにネビネイル、チヨロナ、ウエンディがそう返す。  
セズバルドはなんとなく微妙そうにウレルを見ている。

「うー……私もお兄ちゃんとイチャイチャしたいのになー」

「そこはそれ、おにーさんをキチンと誘惑できるようにってからにしないな♪」

「そういえば、この国の法では近親は合法なのですか？」

セズバルドが今更気付いたように誰とはなしに問いかける。  
ソレに答えたのはチヨロナだ。

「ぶっちゃけて言えば、兄弟だろうが親子だろうがティリスでは合法よん♪勿論、近親では白子や奇形が生まれる可能性があるって言うのは流石に知られてるから、それを避けようとする人もいるけど、血を重視するような王族や貴族、豪族とか、場合によっては人手が重要な農村だと意外とそーいうケースはあるわよん？」

「……ティリスは結構フリーダムなのですね」

セズバルドは自分の故国では近親はダメだったなー、等と考えながら、手に持つ紙切れに目を落す。

「で、そろそろこの辺りじゃなからうかの？」

「（コクコク）」

目を落すタイミングとほぼ同じタイミングでネビネイルが問いかけ

る。

「そうですわね。この辺りが宝の埋蔵地点……の筈ですわ」

自信無さ気にセズバルドは言う。

それも仕方ないだろう、その地図が示してるのは一面雪原地帯。そして今居る場所も一面銀世界の雪原である。

その地図は、何時かススムが諦めた宝の地図だった。

離れた場所が無邪気に家族で戯れているススムたちが少し憎たらしい、と思いつつもセズバルドはティリスの地図と宝の地図、そして周辺環境を鑑み、そして最後は女のカンでびしっと宣言する。

「この辺りを掘って掘って掘りまくりますわ！」

「セズバルド、お主も女子おなこなのじゃからもう少し慎みを持つようにせい」

「うぐっ……変な所でネビネイルは説教臭いわよ！まったく、あなたは私の教育係ですの？」

「ほっほっほ、そうじゃな、イスルギ家の教育係、と言うのも面白くはありますのう！となれば、ウエンディやチョロナは侍女かのう？」

「あらん、それもまた良さそうねえ。旦那さんも何だかんだで羽振りは良いし。奥様は時々怖いけど、ソレはまあ置いておくとして。ウエンディさん、この際本腰入れて侍女になって見ましょ？」

「（……コクリ）」

ススム達夫婦がアリスと雪遊びをし、その間に仲間たちはアッチだコッチだで行き来して宝を探す。

時々仲間たちが休憩してアリスと遊んだり、二人に意見を聞きにい



ったり、エリーが稽古と称してセズバルドとウレルをボコったりしたが、時は進み、夕方頃に、遂にネビネイルは地震のスコップの下に今までの雪や土とは違う金物の感触を探り当てたのだった。

「お、おおおおお！ みつけましたぞー！」

「よくやりましたわ！」

「さっすがネビー！ 伊達にお爺ちゃん言葉じゃないわね！」

「口調は関係ないじゃろ、口調は」

その後「実は他にも宝の地図はまだあるんだぜ！」と暴露したススムにセズバルドはキレ気味に「こうなったら全部見つけて見せるわよ！」と啖呵をきり、1ヶ月近く宝探しツアーを行う事になる。

途中、ススムがそろそろ打ち切ってネフィア探索に戻りたいと言いつ出したが、セズバルドの強い要望で打ち切りが却下された。

その背景にはススムの嫁と自称妹の援護射撃があったとか。

そしてエリーやウレル、チョロナもボチボチと戦闘に参加し『模擬戦』の成果を遺憾なく発揮し、満面の笑顔を得たのだった。

その後、一行は再び雪原……ではなく、ノリエルに向かう一行と、いうのも、ススムが「そろそろノリエルに住むリリイとパエルの母娘の様子が気になる」と発言したからだ。

ちなみに、リリイとパエルの事は全員が既に知っており、エリーもリリイの事はともかく、アリスを産んでからはパエルが一人になるのは良い事ではない、と思う様になった様子で積極的に支援するように、とススムに言うぐらいだった。

ノリエルに到着し、宿を取ってススム、エリー、アリスの3人だけでリリイとパエルの家に向かった。

ネビネイルは買出し、ウレルは街の観光、チヨロナは男漁りと別行動だ。

「よう、パエル。久し振りだな、元気だったか？」

「ススム、さん？おひさしぶりです！あたし元気にしてたよ！ところで、コッチの人は？」

パエルがエリーと抱きかかえられたアリスを見て首をかしげる。

エリーは、普段はアリスをあやす時ぐらいいしか見せないような優しい表情を作って自己紹介する。

「はじめまして。私はススム様の妻のエリュシオン。こっちは娘のアリス。よろしくね、パエルちゃん」

「あー、うー」

「うん、よろしくね！エリュシオンさん！アリスちゃん」

ススムはエリーが優しい態度を取っている事を嬉しく思いながら、パエルに母親の事を訪ねる。

「お母さんは……また、病気が悪くなって……」

泣きそうな表情をするパエルにススムは眉を顰める。

エーテル病、その実態が全てわかってるわけではないが、一度患ってしまえば、エーテル抗体で症状を抑えて発症してる症状を打ち消しても何れは死に至る病だといわれている。

また、エーテル病で患う症状は何が起きるか不明で、精神を病む事もある、異形の姿へと変貌してしまう事もある。

以前まではパエルの母、リリィのエーテル病は少なくとも異形化ではなかった。

「……そうか。お母さんに会えるか？」

「……うん」

「それじゃあ、俺とエリーで行って来るよ。少しの間、アリスを見て欲しいけど頼めるかな？」

「え？ その……私、赤ちゃんはじめてみたし……」

「旦那様？ ……いえ、判りました。パエルちゃん、お願いできるかしら？ 大丈夫よ、私とだん……ススム様の子供ですもの。安心して頂戴」

「あ、う、うん。それじゃあ、わかりました」

頷いて、パエルはエリーが抱き抱えていたアリスを受け取り、抱き抱える。

「ふふ、アリス、パエルお姉ちゃんの言う事、ちゃんと聞いて困らせてはダメよ？」

「あうー」

「エリー、行くぞー」

「はい」

そうして二人はパエルの母、リリィと顔を合わせるのだが、その顔を見た瞬間、驚きで固まってしまう。

頭部が常人よりも肥大化し、顔はまるで酸でも浴びたかの様に焼け爛れていたのだ。

更に、周囲の空気は物理的に重苦しく、目を凝らすと空間が振れている様にすら見えた。

「やはり、恐ろしいですか？ 私の顔が……」

「あ、いや。リリィさんの顔が怖いとかそー言うことはないんですよ。『怖い』ってだけならネフィアに潜むバケモン共の方がよっぽ

どですし……」

「旦那様。比較対象が最悪です、デリカシーもなさ過ぎです。少し黙っていてください」

愛の鞭（鉄拳）で黙らされ、エリーがリリィに歩み寄る。

「あの、貴女は？」

「私はエリユシオン・イスルギと申します。エリーと呼んでください。貴方の話はあの人から聞いております。女手一つで子供を育てている素晴らしい方だと」

「そんな……それに、今の私は……」

ススムもエリーも、リリィが何を言わんとし、必至に抑えつけているかわかった。

それはススムにとって日常的に感じ、エリーにとっては久し振りに感じた物。

「精神にも影響が……？」

「……はい。以前は感じなかった、強い、憎しみと怒りが、人を殺したいと思うってしまうほどの憎悪を」

「……俺たちで良ければ、話は聞くよ。リリィさん」

「……なんで、何で私はこんな、醜い姿になって、人とも思えない姿になってしまったの？！あんまりよ！！愛したあの人だってプチなんか殺されてしまって、ご近所の人々に白い目で見られて！誰も助けてくれなくて！でも、女手一つでパエルを育てて、ようやくとあの人のことを振り切れたと思ったら、エーテル病で働けなくなつて！それでもパエルを育てなきゃって思つて！今まで頑張つてきた！ススムさんに抗体も貰つて、もっと頑張ろうって思つた！なのに、病気は悪化して、人目に晒せない姿になって……あんまりよ！

私が一体何をしたって言うの！なんで他の人たちは平気に暮らしているのに、私だけ人目を忍んで暮らさなければいけないのよ！？」

リリイは今まで溜め込んできた鬱屈とした気持ちを晴らすように叫ぶ。

彼女は今まで『母』として様々なモノを堪えて頑張ってきた。

だが、エーテル病を患って以来『母』としての努力すらも出来なくなった。

彼女にできたのは、愛した人との忘れ形見、パエルと共に過ごすことだけだった。

「……ススムさん、エリーさん。貴方たちをお願いします。最期のお願いが……。この短剣で私を貫いてください」

「っ！本気か？！俺達にリリイさんを殺せと！？」

「……リリイさん、貴女はパエルちゃんを残して逝く気なのですか？」

リリイの言葉に二人は思いとどまって欲しいと思いつつ問いかける。

「うふふ、だって、この姿がばれてしまったら、せっかくできたパエルのお友達が逃げてしまうじゃない。それに、他にも……。あの子が幸せになれるのなら、私は……」

「エーテル病で変異した人なら、俺だって知ってる。冒険者には特に多いからな。でも、彼らはそれでも生きてきた。リリイさん、アంతは諦めちゃうのか！？」

「……思い止まる事はできないのですか？良かれと思って生き残されて、そして一人になってしまうのは、残された人間にとってそれはとても残酷な事です」

ススムは自身が時々出会う、冒険者を思い返しつつ。エリーは、滅

んだ故郷と自身を生き延びさせた親しかった人たちを思い返しなから言葉をかける。

しかし、リリイはその言葉を拒む。

「こんな事、ススムさん達にだからこそ、頼めるのよ。どうか、この苦しみを終わらせてください……。エリーさん、初対面でこんな事になってしまってごめんなさいね」

「……旦那様」

「……っ！ まだだ、まだ諦められない。まだ何か手段があるはずだ。それこそ、レシマスの秘宝とか、神様たちに頼る事だって、俺ならできる筈だ！」

しかし、リリイはススムを否定する。

「あ、あなたは、私にこんな姿で生き続けろと言うの？ 世の中には、希望なんて便利な言葉で片付けられない苦しみがあることをわかってるの？！……ごめんなさい、きつい事をいって。貴方の考えが変わるのを待っているわ。だからお願い……今は出て行って」

結局、リリイを説得できなかったが、少なくとも、暫くは時間を稼げるだろう。

ススムはそう思う事にした。

「わかった。また会おう、リリイさん」

「失礼致します」

家を出て、外でアリスとあやしていたパエルが駆け寄ってきた。

「ススムさん。お母さんはどうですか？」

「……正直、なんて言っても良いか判らない。だけど、俺はまだ諦め

たくない。レシマスに眠る『永遠の秘宝』とも呼ばれるお宝があるそう。『それを手に入れた者は、永遠の繁栄を手にする』ってお宝だ。それを手にすれば、もしかしたら何とか成るかもしれない。俺は、そう信じてい

「ススムさん……」

「旦那様……」

ススム自身、冒険者たちの間で噂されているだけのソレに縋るつもりはなかった。

だが、少しでも役に立つ可能性があるのなら、ソレに賭けたかった。

「ま、少し時間は掛かるだろうが、きっと何とかしてみせる。なんたって、俺は『不死身の剣鬼』だからな！」

剣鬼と言うのは前々から噂されていたが、不死身というのはここ最近になってついたあだ名だ。

簡単に言えば、明らかに死ぬであろう依頼やネフィア探索に対し、失敗しようがなんだろうが、確実に生きて再び姿を見せる事からそう呼ばれるようになったのだ。

特にミノタウロスの巣からの生還がそれに拍車を掛けた。

実際には何度か死んでいるが、そこはバレない限りは言わないお約束だ。

それに彼は神々ともレシマスに眠る秘宝を得る約束をしているのだ。どちらにせよ、挑む時期が早まるだけ、そう言い聞かせる。

その後、宿に泊まり作戦会議と言う感じで夕食を食べながらの方針会議。

と、いつでもやる事はアッサリと決まった。

ネビネイルとセズバルドのみが引き続きネフィア及びレシマス攻略に加わり、他のメンバーは待機か店番か牧場や博物館、新設した畑、そしてパエルたちの世話をする係りに分かれると言うことだ。そうと決まると行動が早く、一同は帰還の魔法で拠点である屋敷まで戻り、ススムは二人を引き連れ、レシマス攻略の鍵である残りの魔石、愚者の魔石を保有する『闇の奇形イスシズル』の居る死者の洞窟へと向かう。

## 死者の洞窟 第1層

「なるほど、名の通り亡者共がうようよ居るのう」

「ですが、この程度ならば、まだどうとでもなりますわ」

「んだな。とはいえだ、油断すると囲まれて腐った手で触られて能力下げられちまうし、気をつけて行くぞ」

それぞれが棍棒、槍斧、大剣という獲物を振るいながらの会話で、群がるゾンビや骸骨戦士、時々現れるリッチやマスターリッチを屠りながら油断無く足を進める。

特に厄介なのがマスターリッチだ、マスターリッチはリッチ、魔法も扱うアンデッドモンスターで耐久性は勿論、能力そのものが高く魔法も強力なのだ。

「セズバルド、俺がやるからお前はネビネイルと一緒にハウンドを片付けろ！」

「わかりましたわ！」

立ち居地を入れ替え、ススムが一気に前に出てマスターリッチに斬りかかり、セズバルドは後退してネビネイルのフォロー、火炎瓶投擲を行う。



「#####!!」

「何言ってるか、意味不明なんだよ!」

ススムはその言葉と同時に真っ向からマスターリッチを縦に両断した。

「チッ、奥の方に死刑執行人か……面倒な相手だ!」

死刑執行人は『死の宣告』という某大作RPGで出てくるカウントダウン後に確実に死を与える魔法を扱う冒険者にとって出来れば遭遇したくない相手の高位に属する相手だ。

防ぐにはホーリーヴェールなどの魔法で防御する、解除する為には清浄なる光の加護や全浄化の魔法を使うか、或いは死刑執行人をカウントが終わる前に倒すかのいずれかだ。

なので、ススムは最初から全力全開で挑む事にした。

腰に刺していた加速の魔法杖を振るい、自身を加速して魔法を唱える。

「我が身に『英雄』の力を、我が手に『聖なる盾』を!受けてみる!」

「#####!!」

最初の一撃は薙ぎ払い、次の一撃は袈裟切り、再び薙ぎ払いの連撃。その剣の軌跡はアルファベットの「Z」となり、死刑執行人は十八番の『死の宣告』を行使する前にこの世を去った。

「これが最後通牒ファイナルレターって奴さ」

若干、遊びが入っているものの、ススムはそれでも余裕を持って相手を切り刻み、ネビネイルとセズバルドもソレに続く。

### 死者の洞窟 第3層

「っ、こやつは本当に硬いのう！」

「あぁん、もう！何でこんなにグレイターマミーが居るのかしら！」

ネビネイルがリビングアーマー3体を、セズバルドがグレイターマミー2体とリッチを相手取りながら叫ぶ。

「きゃあ!？」

「くっ、治癒の雨よ！」

「チッ、奔れ！稲妻の軌跡!!」

二人が戦う傍でフォローもしつつ戦うススムだが、ソレは確実に彼にとって大きな負担だった。

だが、それでも彼一人で挑むよりも殲滅速度は速いのは間違いなく、また彼が危機に陥ることもあるので。

「うおっ?!」

「治癒の雨よ！」

「油断大敵ですわよ！」

ススムもまた危機に陥った時には彼らのフォローを受けて何だかんだで3人はうまくやっていた。

しかし、この階層のアンデッド達を葬り終えた所でススムはううん、と伸びを言う。

「んじゃ、今日はこの辺りで帰るぞー」

軽い口調で言われて二人は少しこけた。

「おいおい、まさかこのままやり続ける気だったか？勘弁してくれよ。戦利品が多すぎて結構きついんだよ」

「……主殿、相変わらず手癖が悪いのう」

「いいんだよ。つか、倒した相手の装備を奪うのは冒険者や探索者の最大収入だぞ？」

「確かにそうなのですが……なんというか、アレだけ格好つけて宣言したのに、1日もしないうちに帰還と言うのが少し……」

「良いじゃないか、死者の洞窟は割合近所なんだし」

「近所と言っても、歩いて半日（12時間）も掛かる位置じゃがのう」

「まあ、ソレはともかくとしてだ。レシマス探索の事を考えると、金の工面を考えて、ウェンディに任せた店に納品する武具はどれだけ多くても困らないってわけだ」

「それはまあ、わからなくもありませんが」

そうこう言っているうちに帰還の魔法が展開され、3人は屋敷に戻り、翌日、店や倉庫に武具を預けてから再び使者の洞窟に挑むのだった。

## 死者の洞窟 第6層

「結構、あつという間じゃったのう」

「部屋数事態はそうでもなかったな。モンスターハウスと言わんばかりにぎゅうぎゅうにアンデッドが詰まっていたのを考えなければ」

「思い出させないでくださいませんか？アレはちよつとしたトラウマ

ですわ」

セズバルドは、余りにもぎゅうぎゅう詰めだったアンドッデ達に押し倒されて潰された経験がある為、完全にアンデッド嫌いになったようだ。

「さて、この階層は部屋の雰囲気からして他と違う感じだ。つつーことは、所謂ボス部屋ってわけだ」

「つまり、闇の奇形イスシズルが居ると言うわけですか？」

「そういうこと、だ。予め言っておくが、あいつと戦うのは俺一人だけで良い。お前達は他のやつらを当たれ。間違っても割り込むなよ？ネビネイルは良いとしてもセズバルドは今回死なれると復活の魔法も、魔法書もないから復活させれないし」

「……口惜しい事ですが、私の実力ではやはりまだ足手纏いのですか？」

「ああ、ぶっちゃけな。ただ、筋は良いと思ってる。今でこそ俺はこうだが、始まりはプチ3匹に殺されかかる実力からだったんだ。それを考えりゃオマエは明らかにマシだろう」

そういつて『改宗せよ！』と叫ぶ闇の宣教師や、リビングアーマーを葬りつつ進むと遂に一段と暗く怖気を感じる形容し難いナニカが居る場所に辿り着いた。

『A a a A a A ! ! ! !』

ソレは直ぐにススムたちに気付き、叫び声をあげながら魔法をススムに向けて乱発してくる。

「んじゃ、後は俺に任せてお前達は回りを頼むな」

「「オウ！」」

ススムが大剣で防御をしつつ指示を出し、二人はソレに応えて散会する。

「そういや、今回はキチンと情報収集してねえんだよな。……まあ、この程度なら多少キツイがどうとでもなる！」

『A a a a a A A ! ! !』

「喚くな煩い！こちとらとつとレシマス攻略せにやならんのだ！とつとと……くたばれやあああ！！！」

ススムは何度も魔法を使うイスシズルをみて魔法主体と理解し始め、件を振るう腕を僅かにとめて、試しに沈黙の霧の魔法杖を振るうとソレが有効である事を相手が魔法を使おうと腕……のような触手を振るって魔法が発動しない事で理解する。

「さあ、ここからはずっと俺のターン！英雄！聖なる盾！加速！」

『A A A A A ! ! ! !』

イスシズルも魔法が使えない事を理解し、即座に携えていた杖でススムを殴打しようとするが、近接戦闘こそがススムの十八番だ。

「甘い甘いあまーい！！言っただろう！ずっと俺のターンだと！！！」

叩きつけられる杖を見切って大剣で打ち払い、更に余った勢いで顔を蹴り飛ばす。

よろけた所で追撃しようとしたが、咄嗟に再び魔法杖を振るってイスシズルの魔法使用不可能状態を延長する。

『A A A A A ! ! ! !』

「確かにオマエは厄介だけど——コルゴンやワイナンと戦った時

の方が戦いを楽しめたぜ！コレで仕舞いだ！」

加速状態のススムは剣を大きく振りかぶり、袈裟に斬り潰し、次いで下がった剣を床を滑らす様に走らせ、火花を散らしながらまるで居合のように抜き放ち、イスシズルの胴を断ち切り、更におまけとばかりに床に落ちたイスシズルの上半身、頭に大剣を叩きつけ、完全に潰す。

「……ふう。これで、後はレシマスを攻略するだけだな」

ススムがそう呟いてイスシズルの死体から戦利品を剥いでいると、雑魚を相当し終えた二人が駆け寄ってくる。

「主殿、そちらも終わってましたか」

「流石ですわ。言うだけのことはありますわね」

「まあな、男は一度口にしたなら何とかして見せるぐらいの気概は見せるべきだ。そう思わないか、ネビネイル」

「ですな。とはいえ、このぐらいになりますと誰もがそうできるわけでもありませんが」

一通り周囲のお宝も回収し終えた一行は、改めて集合し帰還の巻物を使って屋敷へ戻る。

全ての魔石を回収したススム達を次に待ち受けるのはレシマス。未だ攻略者が出ない、ノースティリス最大のネフィアであった。

## Lv30～Lv32…旅行者と防衛者とお嬢と 決意、新たに（後書き）

前書きにも書きましたが、今回は少々駆け足気味に進んでしまいました。

けど、こうやって飛ばさないと何時までも進められないっぽいので仕様です。

今回、ネビネイルとセズバルドはエリーの手によって魔改造済み（ゲームだとススムがやっていますが）という感じでレベルが上がり、装備も多少は良い物使うようになりました。

ぶっちゃけ、防御力だけならネビネイルやセズバルドが上だったり。ただ、スキル関連考えると、プレイヤーであるススムの方がやはり強いわけで……。

特に変異とかフィートで差がついて更に耐性パズルの関係もあるのも色々ごっちゃりしてます、ススムが。

ペットにも変異とかフィートが欲しいと思う今日この頃。

でも、変異だと管理大変そうだなあ……。

では、いつものステータス晒しです！

ネフィア探索の時に色々武器を持ち替えて遊んでみたのですが、やはり大剣が一番安定します。

大鎌の首狩りも結構好きなのですが、やっぱり男なら剣を使って何ぼと言うイメージが……。

後、ステータス見比べると判るのですが、実はステだけはネビネイルよりセズバルドの方が多少安定してます。

攻撃力はネビネイルの方が高いんですけど、中々当たらないんですよえ、最近の相手には。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv28 ↓ Lv32

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力102 (96) ー ー ー

マナ 153 (153) ー ー ー

狂気度 0 ー ー ー

速度 170 (103) ー ー ー

名声 24200 +9882

カルマ ー17 ー17

現在値 前回比

筋力..88 (61) +12 (+11)

耐久..59 (47) +7 (+7)

器用..80 (51) +18 (+13)

感覚..77 (57) +23 (+13)

習得..63 (53) +10 (+9)

意思..67 (38) +8 (+6)

魔力..43 (30) +6 (+5)

魅力..46 (29) +2 (+2)

装備

頭 .. ★祝福された《賢者の兜》+2 [4, 15] ∴ (看破, 耐酸



性，不燃，レア，耐久維持，詠唱＊，解剖＊，魔法耐性＊，幻惑耐性＊，魔力＋5，混乱無効）

首…★《ツインエッジ》＋1〔0，4〕…（耐酸性，不燃，二刀流＊，運勢＋4，筋力＋4，追加打撃＊＋）

背中…☆祝福されたこの世ならざる外套『声のドラゴン』＋2〔3，2〕…（耐酸性，不燃，魔力維持，習得維持，筋力維持，詠唱＊，速度＋5）

胴体…☆祝福された赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』＋2〔18，45〕…（耐酸性，不燃，心眼＊，裁縫＊，軽装備＊，意思＋8，生命力＋3）

利手…祝福された防衛者のチタンクレイモア＋2（3d10＋7…0%）（2）…（不燃，耐酸性，両手持ち適正，電撃耐性＊，冷気耐性＊，火炎耐性＊，筋力＋3，竜殺＊）

手…  
指…白銀のスピードの指輪…（耐酸性，不燃，暗黒耐性＊，速度＋10）

指…呻くルビナススピードリング…（耐酸性，不燃，筋力維持，速度＋9，生命力＋3）

腕…☆祝福された重き重層箠手（1，1）〔1，1〕…（不燃，習得維持，感覚維持，器用維持，耐久維持，釣り＊，演奏＊，解剖学＊，隠密＊）

腰…祝福された烈火の翼鳥鱗の腰当＋2〔9，8〕…（回避＊，火炎耐性＊，寄生回避）

足…★祝福された《ダルイイサリオン》＋2〔16，7〕…（耐酸性，不燃，レア，運勢維持，旅歩き＊，隠密＊，器用＋6，呪い保護＊，MAP移動短縮＊）

遠隔…★祝福された《異形の森の弓》＋2…（耐酸性，不燃，レア，異次元の手〔＊〕，毒追加攻撃〔＊〕，感覚維持，器用維持，詠唱〔＊〕，毒耐性〔＊〕，器用＋10）

矢…エメラルドアロー（1d11＋1）（3）…（耐酸性，不燃，

神経耐性\*＊)

◆スキルと特殊能力

|      |                 |      |                 |
|------|-----------------|------|-----------------|
| 戦術   | L v 3 0 . 5 5 6 | ↓    | L v 3 2 . 6 0 8 |
| 重量挙げ | L v 3 1 . 4 0 2 | ↓    | L v 3 6 . 2 6 3 |
| 両手持ち | L v 2 4 . 4 4 5 | ↓    | L v 2 6 . 1 5 3 |
| 治癒   | L v 2 4 . 9 6 4 | ↓    | L v 2 7 . 2 1 1 |
| 採掘   | L v 8 . 3 7 7   | ↓    | L v 1 0 . 3 8 0 |
| 盾    | L v 1 5 . 1 0 0 | ↓    | L v 1 6 . 4 5 6 |
| 重装備  | L v 6 . 1 8 7   | ↓    | L v 6 . 2 7 1   |
| 中装備  | L v 1 2 . 4 2 8 | ↓    | L v 1 3 . 3 3 9 |
| 鍵開け  | L v 1 4 . 4 7 4 | ↓    | L v 2 0 . 2 5 3 |
| 二刀流  | L v 5 . 9 6 1   | ↓    | L v 1 8 . 8 7 7 |
| 軽装備  | L v 7 . 2 4 7   | ↓    | L v 7 . 4 7 4   |
| 回避   | L v 2 2 . 4 2 6 | ↓    | L v 2 9 . 7 8 7 |
| 畏解体  | L v 1 . 0 0 0   | ↑New |                 |
| 裁縫   | L v 1 . 0 0 0   | ↑New |                 |
| 窃盗   | L v 1 . 3 5 4   | ↓    | L v 1 . 6 5 3   |
| 隠密   | L v 3 1 . 2 8 0 | ↓    | L v 3 6 . 0 4 6 |
| 探知   | L v 3 . 8 7 6   | ↓    | L v 7 . 3 9 9   |
| 自然鑑定 | L v 1 3 . 4 2 0 | ↓    | L v 1 8 . 9 3 4 |
| 釣り   | L v 7 . 7 9 9   | ↓    | L v 8 . 2 4 7   |
| 見切り  | L v 1 4 . 2 5 4 | ↓    | L v 2 8 . 0 7 3 |
| 射撃   | L v 3 . 4 2 0   | ↓    | L v 9 . 0 0 2   |
| 読書   | L v 2 9 . 2 7 1 | ↓    | L v 3 1 . 2 5 3 |
| 遺伝子学 | L v 1 2 . 1 1 6 | ↓    | L v 1 9 . 6 6 0 |
| 解剖学  | L v 1 0 . 9 3 8 | ↓    | L v 1 3 . 1 6 0 |
| 暗記   | L v 1 2 . 9 4 8 | ↓    | L v 1 5 . 6 1 5 |
| 栽培   | L v 1 0 . 3 7 2 | ↓    | L v 1 1 . 7 2 2 |
| 料理   | L v 9 . 0 0 2   | ↓    | L v 1 0 . 0 6 0 |

魔力の限界 Lv1. 405 ↑New

信仰 Lv27. 577 ↓ Lv31. 850

旅歩き Lv21. 994 ↓ Lv23. 726

乗馬 Lv1. 390 ↓ Lv4. 564

瞑想 Lv22. 761 ↓ Lv24. 585

詠唱 Lv17. 415 ↓ Lv21. 261

魔道具 Lv12. 599 ↓ Lv16. 322

交渉 Lv31. 383 ↓ Lv33. 183

投資 Lv18. 495 ↓ Lv19. 695

演奏 Lv24. 606 ↓ Lv31. 929

### ◆武器の専門

長剣 Lv23. 103 ↓ Lv25. 611

斧 Lv4. 000

格闘 Lv11. 378 ↓ Lv12. 087

鎌 Lv4. 650 ↓ Lv19. 976

鈍器 Lv9. 272

槍 Lv13. 604

杖 Lv4. 018 ↓ Lv14. 123

短剣 Lv10. 599

弓 Lv15. 841 ↓ Lv18. 895

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv8. 210 ↓ Lv10. 675

銃器 Lv4. 000 ↓ Lv8. 671

### ◆耐性と抵抗力

火炎耐性 素晴らしい耐性\*\*\*\*\*

冷氣耐性 弱い耐性\*\*

電撃耐性 強い耐性\*\*\*\*\*

暗黒耐性 弱い耐性\*\*

幻惑耐性 強い耐性\*\*\*  
毒耐性 強い耐性\*\*\*  
地獄耐性 耐性なし  
音耐性 弱い耐性\*\*  
神経耐性 弱い耐性\*\*  
混沌耐性 耐性なし  
魔法耐性 普通の耐性\*\*\*

◆特徴と体質

「フィート」 貴方は類稀な幸運の持ち主だ  
「フィート」 貴方は猫よりも速い「速度+10」  
「フィート」 貴方の防御は鋼のように固い「Protection  
Value+15」

「フィート」 貴方は見切れる「DefenseValue+4」  
「フィート」 貴方は我慢強い「耐久+3」  
「フィート」 貴方は猛烈な信者だ「信仰+8」  
「変異」 あなたは鉄のような皮膚を持っている「PV+9」  
「変異」 あなたの間接はしなやかだ「器用+3」  
「変異」 あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」  
「変異」 あなたの腕は筋肉の塊だ「筋力+9」  
「変異」 あなたの声は全てを魅了する「魅力+10」  
「変異」 あなたの脳は完璧な機械だ「暗記+8」  
「変異」 あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」  
「変異」 あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」  
「変異」 あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」  
「変異」 あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」  
「変異」 あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」  
「変異」 あなたは鷹の目をしている「感覚+10」  
「フィート」 貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」  
「変異」 あなたは人肉を食べることに抵抗が無い  
「先天」 あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限-20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備は竜族に対し強力な威力を発揮する

あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前..ネビネイル

種族..神の化身

性別..男性

職業..魔法戦士

Lv17↓Lv21

ステータス:カッコ内は元の値

|  | 現在値 | 前回比 |
|--|-----|-----|
|--|-----|-----|

|     |    |      |   |   |
|-----|----|------|---|---|
| 生命力 | 90 | (90) | — | — |
|-----|----|------|---|---|

|    |     |       |   |   |
|----|-----|-------|---|---|
| マナ | 150 | (150) | — | — |
|----|-----|-------|---|---|

|     |   |  |   |   |
|-----|---|--|---|---|
| 狂気度 | 0 |  | — | — |
|-----|---|--|---|---|

|    |    |       |   |   |
|----|----|-------|---|---|
| 速度 | 93 | (116) | — | — |
|----|----|-------|---|---|

|  | 現在値 | 前回比 |
|--|-----|-----|
|--|-----|-----|

|      |    |      |    |       |
|------|----|------|----|-------|
| 筋力.. | 55 | (42) | +9 | (+13) |
|------|----|------|----|-------|

|      |    |      |    |      |
|------|----|------|----|------|
| 耐久.. | 46 | (38) | +3 | (+8) |
|------|----|------|----|------|

|      |    |      |   |       |
|------|----|------|---|-------|
| 器用.. | 23 | (23) | — | 4(+3) |
|------|----|------|---|-------|

|      |    |      |   |       |
|------|----|------|---|-------|
| 感覚.. | 14 | (14) | — | 8(+1) |
|------|----|------|---|-------|

|      |    |      |   |      |
|------|----|------|---|------|
| 習得.. | 15 | (15) | — | 6(0) |
|------|----|------|---|------|

|      |    |      |    |       |
|------|----|------|----|-------|
| 意思.. | 34 | (30) | +3 | (+10) |
|------|----|------|----|-------|

|      |    |      |     |       |
|------|----|------|-----|-------|
| 魔力.. | 45 | (45) | +13 | (+20) |
|------|----|------|-----|-------|

|      |    |      |    |       |
|------|----|------|----|-------|
| 魅力.. | 25 | (25) | +5 | (+11) |
|------|----|------|----|-------|

名前..セズバルド

種族..ローラン

性別..女性

職業..魔法戦士

Lv5↓22

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力106 (100) — —

マナ 80 (80) — —

狂気度 0 — —

速度 108 (96) — —

現在値 前回比

筋力..30 (30) +14 (+20)

耐久..38 (35) +16 (+22)

器用..19 (19) +7 (+12)

感覚..18 (15) +3 (+8)

習得..20 (16) +8 (+9)

意思..30 (30) +14 (+20)

魔力..53 (50) +33 (+36)

魅力..28 (28) +12 (+18)



|||||

「ススム、遂に3つの魔石を揃えたのですね」

「ああ、そこそこ苦労したよ」

「そうですか……。私たちの調査によれば、魔石はレシマスの秘宝の間への扉を開く鍵となる筈。しかし、レシマスの奥深くには恐ろしい魔物が巢食い、その場所が何階にあるかまでは判明していません」

エリステアは言葉を区切ってから続きを口にする。

「あなたの任務……おそらくは最後の任務は、決して易しいものではなく、失敗も許されません。レシマスの探索を進め、秘宝の間を見つけてください。そして《常闇の眼》を地上に持ち帰り、ザナンの陰謀を阻止するのです」

「責任重大だな。ところでその《常闇の眼》と言うのは……？」

ススムは責任を感じつつも、新たに飛び出した単語についてたずねる。

その責任の中には、この国は勿論、リリィとパエルの母娘や、自身の願望を叶えるか否かまで含まれているのだ。

だからこそ、情報はしっかりと得ておきたいと改めて考えたが故だ。

「……ネフィアの迷宮軍の一つ、レシマスは、パルミアの歴史と大きく関わりがあります。エウダーナがネフィアの秘宝の一つにより繁栄が約束されたように、パルミア第三代の王ザシムと従弟ゼームもレシマスの秘宝を求め、調査隊を繰り出していました」

エリステアは最初こそ躊躇いつつも、次第によどみなくしゃべる。



「そしてある日、ついに調査隊の朗報を受けた王と従弟は、レシマスの最下層に赴き、秘宝の眠る部屋へと足を踏み入れたのです……。しかし数刻の後、部屋から出てきたのはザシム王一人だけでした。ザシム王は側近にこういったと伝えられています」

『それは強き者の手の内では決して輝く事のない。弱き者の手の内では黄金の如く眩いが、その輝きを他の者に見せる事はできない。この秘宝は、常闇の中で永遠に眠っているべき物なのだ。直ちに部屋を封印するがよい。従弟は最早帰っては来るまい』

エリステアが言う、側近に伝えられたとされるその言葉の意味をススムは考える。

「（強き者……実力者が持つても意味がない？……けど、繁栄だろ？金になる？……言ったのは王様……権力者？強い権力を持つものには意味がない？？」）

「秘宝が眠る部屋は魔術により封印され、封印の鍵となる三つの魔石は、それぞれ最も強大で邪悪な存在の元に送られました。魔石の真の価値は知らさずに」

「俺が倒したルクイツウアとコルゴン、ワイナン、イスシズルか……確かに強敵だった、かな」

ミノタウロスの王の方が厄介だ、と言うのは呑み込み、エリステアを見る。

「以来、パルミアの代々の王家は、ザシム王の意思を引き継ぎ、洞窟にはもう何もないかのように、他の国々を欺いてきたのです」

「……説明してくれたのはありがたいが、結局何なんだ《常闇の眼》というのは……いや、まあいいや。とりあえずレシマスに潜って秘宝っぽいのを持って来ればソレで片が付くんだしな」

ススムがソレで納得したのを見てエリステアは話を戻す。

「カラムの言葉が正しければ、秘法を守るのは今は亡きザシム王の従弟ゼーム。ゼームは名うての魔術師としても知られていました。彼が生き永らえているのも何らかの。魔力に寄るものでしょう。心して臨んで下さい」

「……」

何らかの魔力と言われ、ふとススムは魔石の存在を思い出す。

自身が持つ3つの魔石、もしかしたら、かつてコレを保有していた3人はコレの力で生きながらえていたのだろうか、と。

そう思っていると、エリステアはふと表情を緩めて言う。

「あなたの働きには、感謝の言葉だけでは報いきれません。この指輪は、スターシャ様からの贈り物です。あなたの冒険の成功を祈っています」

「ありがとうございます。スターシャ様にも礼を伝えて欲しい」

エリステアから指輪を受け取り、そしてススムは軽く驚いた。

「コレは……凄いな。もしかして神器級のアーティファクト？」

「その指輪はパルミア・プライドと呼ばれる物です。本来であれば国宝として扱われるのですが、あなたの活躍はパルミア・プライドを下賜するに値する、そう判断されたのでしょうか」

「……ここまで期待されるとはね。予想以上だ。この報酬に見合う働きをしてみせるよ。それじゃあ、次に来る時はレシマス攻略報告だ。期待してくれ」

そう言ってススムは自信たっぷりに言ってパルミアを後にするのだ

った。

そうしてススム達がレシマスに向かい、25階以降へ潜る為の階段の封印を解いている頃、ザナンのとある場所にてロミナス達がサイモアの研究所を訪れていた。

そこで、ロミナス、ラーレイネの二人は青い髪のヴァリウスという、ロミナスたちエレアの民を裏切った人物から、隠された真実を明かされたのだったが……、残念な事にススムはその情報を知る事はなかった。

エーテルがこの世界が生み出した抗体であり、人々や世界を蝕み、やがて全てを滅ぼすメシエーラというウィルスが存在。

ロミナスたちの故郷、ヴィンデルの森がメシエーラに抗するかつて人々の最後の希望であり、事実奇跡をもたらした事を。

その奇跡こそが今でこそ人々に忌まれるエーテルの風。

エーテルが世界の自然に対してメシエーラへの抵抗力高めたと言う事実。

それによって森に住むエーテルによって免疫力を高められた人間と、抵抗力を持たずメシエーラに適応できる者が生まれ始めたと言うこと。

これが、森の内と外に住まう人間を分けてしまったと言うことを。

そして、そのヴィンデルの森を滅ぼすという計画と既に新たな救いを自分たちは手にしている、とヴァリウスは告げる。

### レシマス 第30層

「で、でひゃあああああああ！！」

「三十六計逃げるにしかずー！！！！」

「ど、鈍足鈍足ッ！！」

レシマスを潜っていった先に3人を待っていたのは、悪夢の具現たる……爆弾岩……だった。

爆弾岩、その破壊力、恐怖をススムは勿論、それ以上にネビネイルは己が身をもって知っており、何を隠そうセズバルドもネフィア探索時に爆弾岩の手によって粉微塵になって死んだことがあったほどだ。

ススムだけは気合と根性……そして運で一回だけなら爆弾岩の爆発に耐えられるが、2発目はない。

はつきり言えば、今までの魔石を持ってたボスたちの攻撃が屁と感じる威力なわけで3人は動揺しながらも逃げ出し、距離を取り、そしてススムの持つ変化の魔法杖に期待を託す事となるのだ。

だが……。

「#####」

「「「あ」」」」

ススムにとってはどこかで聞いた様な言葉が聞こえた後、大爆発が巻き起こる。

幸いにもネビネイルはギリギリ爆発範囲外であったが、セズバルドは吹き飛ばされ四肢がもげる所か頭も胴もバラバラの猟奇殺人の後のようになってしまうている。

「……レイハンド！」

「軽傷治癒、軽傷治癒、軽傷治癒、軽傷治癒、軽傷治癒。治癒の雨！」

何とか体勢を立て直すも、虎の子であるレイハンドを使ってしまったのは痛い状況だった。

「主殿、どういたしますか？セズバルドも先程の爆弾岩のショックで呆然としてしまっていますが」

「（ぐだー……）」

「……一旦脱出するか。当面はヴェルニースを拠点に行動するぞ」

それだけ言うと、ススムは完全武装のセズバルドを肩に担いで脱出の巻物を広げた。

「うーん、やっぱりこのぐらいの女の子はまだまだ軽いもんだねえ」

「まあ、何だかんだでセズバルドはまだ14ですからのう」

「アー……そういうやそうだった。すっかり忘れてた」

少し間が抜けたススムの言葉が出ると同時に、3人の周囲の空間が歪み、歪みを通じて地上へと脱出した。

地上に戻り、3人は一度ヴェルニースに向かう事にした。

と、言うのも単純な話で、食料が底を尽き始めたからだ。

今回、予め大量のパンを用意して探索に臨んだが、10層以上潜るとなると持ち込んだパンも直ぐに尽きてしまい、レシマス内部でもモンスターの肉を調理して食べたりする事もあったが、それらの蓄えも既に尽きており、外に出る頃には全員空腹状態だ。

なので、ヴェルニースで食料を得て、その後一度パルミア、そして屋敷に戻ると言う考えだ。

「しかし主殿、魔法書店の巻物も魔法書も望む物はありませんのう」  
「ああ……こりゃ、運が悪い。」

帰還の魔法で一氣に戻れば、ヴェルニースではなく、パルミアに直ぐにいけるが、帰還の巻物も魔法書も現在どこでも売り切れが続いており、ススムの魔法も帰還のストックが切れていた。

「……うっし。ヴェルニースで休んだら、一度魔術師ギルドに行くか。あそこの魔法書作家に頼んで帰還の魔法書を買ってもらおう」  
「おお、そういうえばその様な方もいましたなあ。確か凄い根暗な雰囲気」

「……ネビネイル、幾らなんでも少々言い過ぎなのでは？」  
「いやいや、セズバルドよ。あの御仁の暗さといったら途轍もないレベルじゃぞ」

等々と喋りながらルミエストに向かうと、そこは何故かモンスターが跋扈する魔都になっていた。

「「「……」」」

思わず街の入り口で立ち止まり一度目を瞑ったり、天を仰いでから3人は再び街を見る。

街に人の姿はなく、某ゲゲゲで出てきたバックベアードを赤くした様なモンスター、デスゲイズ。

チェスの駒、騎士姿をした既に馴染み深いナイト。

更に、こちらもネフィアでよく見かけるイーグ戦士、そしてダイオウサソリが跳梁跋扈していた。

「何が起きたってーんだよ、コレ」

「解りませんが、このままにしておいて良い、と言うことはないと思いますわ！」

「そうじゃな、主殿！」

「解ってる！ナイトの投擲に注意しつつ殲滅するぞ！孤立しない様に気をつけろよ！」

そうして戦い始める3人だが、普段は軽く倒しているイーク戦士やダイオウサソリが異様な強さとタフさを兼ね備えて壁になり、普段よりも撃破に時間がかかる状態へと追い込まれた。

それでもどうにか出来るのは伊達にレシマス第30層まで潜っては居ない、と言うことだろう。

「くっ、たかがイーク如きにここまで手間取るなんて……！」

「もしや、こやつら変異種か!？」

変異種、それは原因は様々だがエーテルや人々が適当に放棄した薬による悪影響により、人がモンスターへと変異して凶暴化したり、元々モンスターだった者が更に凶悪になってしまった姿だ。人間が完全に変異して凶暴化した場合、元の姿に戻す事は不可能だといわれている。

「……という！訳です……じゃ！」

ぐしゃりと棍棒でイークの頭を粉碎しながらネビネイルが解説した。それに「ナルホド」と返しつつ、ススムはレシマスで新しく手に入れた大剣を振るう。

それは非常に大きく無骨な銀の十字剣。刀身に謎の刻印がされている以外は一切の装飾はなく、単純に敵を切り払う事のみに特化したその作りは、一種の畏怖さえも催す。

その刃が描く銀閃は、防御すら無視して鎧ごとイークを引き裂いた。

「……コリヤまた凄いな。良い物を拾ったな、俺は」

確かにススム自身の、剣の腕もあるだろうが、それ以上に剣の鋭さと破壊力が驚異的だといえた。

今まで愛用してたチタン製の大剣も、破壊力のみで言えば十分であったが、ここまでの鋭さは併せ持っていない。

「ネビネイル、セズバルド！一気にやるぞ！」

「承知！」

「わかりましたわ！」

ススムが英雄の魔法と加速の魔法杖を用いて速攻に走り、ネビネイルもまた自身の力をブーストさせて一気に殲滅を図る。

セズバルドはいえ、ポーション投擲で酸を撒いたり脆弱化させたりと攻撃よりもフォローを行う。

「……こういう場面を見ると、二人がどれだけ人間離れているかわかってしまいますわね」

セズバルドは既に常識の域から非常識の域に突入している二人の戦闘をフォローしつつ一人呟く。

だが、もし一般市民がこの場に居て彼女の台詞を聞いたら、絶対にセズバルドも同類だと言うだろう。

何故なら、普通の人間ではこの非常識な奴らをフォローなど、できる筈もないのだから。

大よそ二時間ほどで探索と討伐を終えると、宿のシェルターから人々が顔を出す。

「もしかして、あなた達がモンスターを討伐してくれたのか？」

出てきたのはルミエストの町長だった。



見事なあごひげを持つナイスジジイといった感じの爺様だ。

「んーっと、デスゲイズとナイトとダイオウサソリとイーグ戦士なら退治したけど……一体何があったんだ？街中であんなのが出るなんて……。ガード達も機能してなかったみたいだし。異常に異常が重なってるって感じじゃないか？」

「それなのだが、簡単に言ってしまうとエーテル病の影響なのだよ。エーテル病の末期患者がガードの身内におり、そしてガードも発症、そして連鎖的に……。更に、身内への情で手を出せなかったガードが犠牲になってこの始末だ。魔術師ギルドに応援を頼もうにも、その頃には既に出歩くのも危険で、彼らは基本ギルドの地下に籠っているから……」

「研究熱心な魔術師ギルドの面々は気付かなかった、と……そりゃまた、災難でしたね」

魔術師ギルドのメンバーは、基本的に内向的で研究に没頭、或いは魔法知識の研鑽に打ち込んでいる人間が多い。

そういう気質だからか外の事に多少疎い事もあり、またこういった事態も起きてしまったのだ。

「まあ、魔術師ギルドとの連携はそちらの問題。がんばってください」

「ありがとうございます。それと、こちらをどうぞ。心ばかりですが、今回ルミエストを救っていただいたお礼です、『剣鬼』殿」

剣鬼、と呼ばれてススムは微妙な顔をする。

とはいえ、貰える物はキチンと貰うが。

「……あぁっと、もしかして俺って有名？」

「ええ、青の外套を身に纏う、黒髪黒目の大剣使い、金髪の少女と

茶髪の少年の従者を連れて旅する剣にも魔術にも通じる冒険者と聞いております。数年前にはパルミアを巢食ったバケモノどもを根こそぎ退治し、ノースティリス各地のネフィアを攻略し、更には灼熱の塔、古城、死者の洞窟も攻略した腕利きの探索者でもあると言う噂は有名ですぞ」

「ふむ、確かにその噂はワシ達のような。もともと、金髪の少女はセズバルドのみ、とは限らんが……」

「ああ、そういえば。奥様も私と同じ金髪ですものね」

「そういう事じゃ」

「……なるほどなあ。しかし、それほど有名とは思っても見なかった。名声と実力でいえば上の冒険者って結構居るし」

ソレもまた事実だ。

ススムよりも上の冒険者はソレこそ25人近く居る。

「そういえば、さっき言ってた様なモンスターは最近じゃ多いんですか？」

「最近になってから、確かに頻発しているな。以前はそう言った事は全然なかったのだが……。何か、大事の前触れなのだろうか……」

「……なるほどね。情報ありがとう、町長さん。また会う事があったらその時はよろしく頼むよ」

その後、魔術師ギルドに行くが残念な事にここでも帰還の巻物、魔法書は手に入らず、魔法書の予約だけして時間を潰す事となった。そして、時間を潰すのならば「そうだ、ネフィアに行こう」というススムの思い付きからルミエスト南東にある多くのレシマスを荒らして周り、そしてちよつとした事件が起きる。

ススムとネビネイルはセズバルドを見てため息をつく。

「アー……うー……どうしてこうなるんですの」

「……若返ったな」

「若返っておりますな」

「……胸が残念な事になってるな」

「おまけに鎧と靴と籠手もですな。後、パンツがずり落ちておるぞ、セズバルド」

「ぴゃああ!？」

顔を真っ赤にしてパンツを持ち上げ、「うゝゝ!」と唸るセズバルド。

「まさか、敵のポジション被って若返るとは……つか、若返るってのは少し拙くないか?セズバルド、力とか大丈夫か?」

「うう……筋力とかは大丈夫なのですが、服のサイズが合わないですわ。一旦町に戻ることを切に希望します!」

「いや、そりゃ構わないけど……しゃーない、拾った帰還の巻物で一度屋敷まで戻るか」

そんな事もあって、帰還すると、若返ったセズバルドはチヨロナとウエンディ一部にどうやって若返ったかを必至に問われたりした。

二人とも年長者だからか、それともアラサーだからか、若さを保つ事に必至な為、若返ったセズバルドは羨ましかった様だ。

ススムとネビネイルが不老で不死(一応)だったりするが、そちらの方は余り気にしていないらしい。

二人の場合は種族的な特徴か何か、と思われているようで、事実『神の使い』なので聞いても仕方ない、と思われているようだ。

「そういえば旦那様、良い大鎌は、ありましたか?」

「あー……今ん所、この間拾ったミスリル製の奴が一番だな。アレ以上となると中々見つからない」

「そうですか……大鎌はそもそも中々見かけませんし、仕方ないですよね」

「んーむ……まあ、そのうち見つかるだろ」

「長剣や大剣は良く見つかるのに、大鎌だけ見つからない。残念です」

「いや、良く見つかるって言っても、俺が『使いたい!』って思うほどいいのって早々ないぞ?それに、剣の扱いは慣れているけど、長剣は俺あんまし使わないし」

そう、ススムは剣を扱うのは慣れているが、長剣だとしてもしつくり来ないので使わない。

使うとすれば重い素材のカタナや元々重量級である大剣だ。

「そういえば、旦那様はどうして大剣やカタナをよく使われるのですか?片手剣と盾の組み合わせの方が生存確率は高いと思いますが」  
「え?……うーん、あんまり細かく考えた事はないけど、大剣とかだと斬りも出来るし重量で圧殺できるし、軽い攻撃なら大剣で余裕で防げる。カタナは、腕を磨くのに丁度いいって思ってたからかな?最近は余裕無くて使ってないけど」

具体的にいえば、良いカタナが無いから使っていないとも言えた。仮に、今ススムが使っているクレイモアと同等の業物があれば、間違はなくススムはカタナを選ぶだろう。

カタナは日本人の心……というかロマンなのだから。

ただ、ロマンで食って行ける訳もないので使用していないのだ。

「そういえば旦那様、この後は再びレシマスへ?」

「うーん。どうも最近はエーテルによる変異種や、モンスターの亜種が暴れまわる事件が多発してるらしいから、ソレ関連をどうにかしながら、今度こそウンガガ倒そうかとね」

「エーテルによる変異種、と言うのは？」

「文字通りだよ。エーテル病が悪化して、最後は理性を失い人で無くなってしまった人。それが変異種っていうらしい。んで、最近はそのうちの良く出るんだってさ……まったく、ますます急がなきゃいけなくなっちゃった」

「……そうですね」

「で、だ。ソレに際してエリーに一つ頼みごとがあるんだが、いいか？」

「頼みごと？ 珍しいですね、旦那様が改まってそう言うのは」

「そうか？ 俺としては家の事を始め、しょっちゅう頼んでる気もするけど……まあいいや、倉庫のモノや金を好きに使っていいから、パルミアや屋敷の周辺で変異種や亜種が出た時、必ず勝てる様だったら3人でそいつらを優先的に殲滅してくれ」

「……よろしいのですか？」

「ああ、エリーの腕なら、立ち回りさえ間違えなけりや問題ない。そう思ってるから言うんだ」

ススムはエリーを始め、ウレルとチョロナ、ウエンディが歪つな力のつけ方をしている事には気づいていた。

だが、止める気はなかった。

ススムもいったが、立ち回りさえ気をつければ問題ない。それにエリーはそれが解らないほど愚かでもない。

ススムはそう信じているのだ。

「……わかりました。旦那様。期待に応えて見せます」

「おう、でもくれぐれも無理だけはするなよ。ヤバイと思ったらとっと逃げろ」

「わかっています。私は旦那様と違って不死身ではありませんので」

エリーがそう言って笑う。

その笑顔は、一緒に旅していた頃によく見せた、寧猛なエリーの本性を少し孕んでいた。

## ミノタウロスの巢 第5層

三度目の正直、とはよく言うが、ススムは本当に倒せるかと言う不安を抱きつつも、ミノタウロスの巢にまたやってきた。

ここまで来る間に、パルミアでは将軍に、とっとと退治しろと急かされたが、ヨウインの方ではミノタウロス被害そのものは激減していた。

それも当然だ、ススムが潜る度に巢のモンスターを殲滅しながら最下層へ進むので、ミノタウロスの数そのものが減っているのだ。

だが、それでも安心は出来ないだろう。

ミノタウロスが人間女を浚い、新たにミノタウロスを生ませる事になれば、更に人手が減って相手が増えるのだ。

「さてと、みんな準備はいいな？」

「当然じゃ。主殿もよろしいですか？」

「勿論。セズバルドはどうだ？」

「投げるポーションの選別も終わりましたし、いつでもいけますわ！」

ススム達の方向に段々と近づいてくる、壁を壊す音。

「……くるぞ！」

「ぶもおおおおおお！！！」

ウンガガが、また以前と同じく壁を破壊してやってきた。

出合い頭の一撃をススムに向けて振るおうとするが、横合いからウンガガの口の中に一つのビンが投擲される。

「ブモッ!? ぐげええええええ」

「おほほ、状態が最悪のクリムエール、口に含んだだけで悪酔いと嘔吐必至の劇物ですわ!」

ふらふらと千鳥足のまま、吐瀉物をばら撒くウンガガ。  
非常に接近戦がしなくなる状態だった。

「だが、今が勝機! 鈍足!! 脆弱!!」

ススムが杖を振るうと、ウンガガの動きが目に見えて遅くなる。

「次はワシが! せやああああ!」

「続きますわ!」

棍棒と斧槍が同時にウンガガを叩き、刺す。

そして、その瞬間にセズバルドの持つ斧槍、ランキスが淡い輝きを放つと同時に周囲の時間が止まる。

ランキスの持つ『時を止める』という特殊な魔法効果が発揮されたのだ。

「これは、チャンスですわ! 今のうちに、せえええええい!」

セズバルドが必死になって獲物を振るうも、例え脆弱の魔法が掛かっていようと僅かな傷しか与える事ができない。

そして、時間が動き出す。

「俺もやるぞ！だつりゃあああああ！」

ススムもまた前に出て、クレイモアを振るう。

銀の刃はススムの裂帛の気合と共に振るわれ、頑健なウンガガの胸板は、確かに刃で斬られた。

今までのチタン製の大剣では得られなかった手応えだ。

防御貫通効果と会心の一撃、ソレに特化したこの大剣の威力は改めて凄まじい物だとススムは驚く。

「これなら、やれる。一気に畳み掛けるぞ！！」

「心得た！」

「おーっほっほ、追加のクリムエールと失耐性、脆弱ポーションは万全ですわ！」

それぞれが獲物を構えて再び殴りかかるが、ウンガガも歴戦のツワモノだけあって、ただで食らってやるわけがない。

ダメージを無視して強引に反撃を仕掛けてきた。

狙うのは、一番厄介なダメージソースであるススムだ。

「ブモオオオオオ！！！！」

「しまっ！！」

咄嗟に回避し、直撃は避けるものの、ウンガガの持つ斧が、地面に叩きつけられた際に衝撃が発生し、それによって少し怯むススム。

「追撃などさせんぞ！」

「私も居ますわよ！」

「ブモッ！？」

二人の攻撃は痛打にはならずとも、ウンガガの気を逸らすには十分



だった。

そう、加速状態で即座に体勢を整えなおしたススムが復帰するには十分な時間だ。

「二人とも、次は俺が行く!!」

今度大上段から真っ直ぐ斬りつけ、その直後に薙ぎ払いの一撃を浴びせる。

ウンガガの体力はまだまだあれども、クレイモアによるススムの攻撃は、ネビネイルとセズバルドの援護もあってウンガガの命を確実に削り取っていった。

時折、反撃で痛打を受ける事もあるが、それでも耐えられるのは純粋にススムが強くなってきたと言う証左でもあるだろう。

だが、ススムの成長速度が如何に速かろうと、周りまではそうではない。

ネビネイルとセズバルドは、時折ウンガガが牽制で振り回す斧の攻撃によって、何度かそれなりの重傷を負わされた。

その度にネビネイルが治癒の雨を使ったり、ススムが治癒系統の魔法杖を振ったり、ジュアの宝玉を使ったりして凌いでいた。

しかし、ススムは思う。

「（やっぱり、純粋な強さでは、まだ追いつかない、か！くそ、勝機が見えてきたとは言え悔しいもんだな）」

ウンガガは単身でこの実力を持つが、自身は二人との連携があつてようやくだ。

実力が付いて来たと言う実感があるからこそ、高みをより遠く感じてしまう。

段々とネビネイルとセズバルドの体力、魔力が底をつき始め、そしてススムもまた限界が近づいてくる。

「っ！！癒しの女神ジュアよ！我が身に祝福を！！」

『ちょ！アンタまた無茶して！？あ、べ、別に心配してるわけじゃないんだからね！』

脳裏にそんな言葉が響くと思うと、暖かな黄金の光がススムを覆い、急激な勢いで体を癒し、魔力を満ち溢れさせた。

そして光は洞窟の暗さに馴染んでいたウングガ、そしてネビネイルとセズバルドの目を焼いていた。

『幾らアンタやネビネイルが蘇るからって言っても、無茶ばかりして死に続けたら、魂が壊れちゃうんだから！気をつけなさいよ！』

「（何それ、怖い……もっと早くに知りたかったぞ！？）」

しかし、ススムの心の叫びに反応することなくジュアの気配は遠ざかり、光は消える。

残ったのは目が眩んだ状態のウングガと、ネビネイルとセズバルドだ。

そして、それは弱ってきていたウングガを倒す為の最大のチャンスだった。

「必殺！」

ススムがウングガを葬る為に行った、最後の一撃は全力で剣を振り下ろす。それだけだった。

振り下ろされた銀の両手剣は狙い違わずウングガの頭を両断し、ウングガはそのまま血と脳漿を垂れ流しながら力なく倒れるのだった。

「……勝った、か？」

「……どうやら死んでるようですじゃ」

「……そうみたいですわね。痙攣はしていますけど、それ以上は動きませんですし」

3人がそれぞれの獲物でちょいちょいと叩いたり突き刺して確認し、そして3人とも座り込んだ。

「つつかれたあー！」

「はは、よく勝てたのう、ワシたち」

「こんなタフな敵、もう何度も戦いたくないですわ」

休息とも放心とも言える状態から復帰すると、ウンガガ討伐の証として、獲物である巨大な斧とウンガガの首を切り落とし、常時持ち歩いてる予備の皮袋に放り込んでパルミアへと向かった。

3人は達成感を感じるよりも、長時間の激戦による強い疲労と緊張のお陰で、「とにかくとっと戻って休みたい」という思いが強かったのだった。

おまけ

ススム達がミノタウロスの巢に潜っている頃、エリーはウレルとチヨロナを率いて自宅付近に設営した倉庫を訪れていた。

そこを漁った結果、エリーは勿論の事、ウレルの武装も大幅に強化された。

だが、残念な事にチヨロナの分ともなるとそこまで良い武装がなかった。

「まあ、私はうまく適当に逃げ回って囿に成るので、お二人に期待させていただきますよ?」

「……解った。だが、旦那様の命令もある。死ぬ事は許さない」  
「りょーかい！おにーちゃんとアリスちゃんの為にも生きて帰らなきゃ！ね？」

ススムとアリスが居ないからか、やや威圧的な空気を出して緊張感を生み出しているエリー。

装備を整え終えると、3人はそのまま町の様子を見て回る。

宝探しもあったお陰で、実に1ヶ月ぶりのパルミアだが、異変の二オイはないようだった。

だが、街の周辺でモンスターが大量発生したと言う依頼はあった。

「ねえ、エリーちゃん。この依頼なら肩慣らしに丁度いいんじゃないかな？」

「……そうだな。この程度ならば問題はないだろう」

「じゃあ、わたしが依頼人に話をつけてきますね」

チヨロナがそう言って礼拝所へ向かい、依頼人である癒し手と話をつけて依頼を引き受けてくる。

「それで、情報は？」

「アイストレイクや闇の宣教師、神経異常を起こすブレスを吐くハウンドが出るそうです。後は他にも魔法使い系の敵が出現する可能性があるそうですが、前3つ以上の敵は目撃されていないそうですよ？」

「ブレスを使うのが、最低二種か……ちょっと面倒だね、特に神経異常が」

「だが、旦那様たちはその程度苦にもしないで居るだろう。妻である私や、部下であるお前たちが苦にする様では話に成らない。行くぞ」

「はいはいっと、お兄ちゃんなら気にしなそうだけど、お兄ちゃん

の名前に泥を塗るわけにも行かないしね。うん、ガンバロー！」

この日を境に、やたら強い美女3人組がパルミア周辺でモンスター狩りを行うと言う噂が流れ始めるのだったりするが、ススムはその3人がエリー達であると知るのはその噂が流れてから暫く経ってからだった。

**Lv33～Lv34…旅行者と防衛者と若返るお嬢と レシマスと変異事件と…**

レシマス潜るにしたがって現れたドラゴンやゴーレムが固いの強い  
のと厄介な事に。

一応、ネビネイル、セズバルド両方とも生かしたままこれらは倒せ  
たのですが、途中で神経ハウンドとか、その他ブレス系の攻撃持つ  
敵が出なくて本当良かったです。

出てたら二人どころかススムも沈んでた可能性あったんですよ……。

さて、何とかウンガガは倒せました！

まさか、セズバルドが投げた酒で嘔吐して弱るとは思いませんでした  
（笑）

死ぬほど弱ったわけではありませんが、少なくとも酔っ払ったお陰  
で勝機をつかんだのは事実でした。

＊～フラリ～＊とよろけたお陰で攻撃されずに済んだターンも何度  
あったか！（笑）

後、エリー達待機組のみの活躍で実際に★9つの依頼がクリアでき  
ました。

途中、神経ハウンドのブレスで怪しいシーンもありましたが、エリ  
ーが『ブシュッ』と大鎌でやってくれました。

本当、頼りになる嫁だなあw

では、恒例のステ晒しです！

名前…ススム（石動進）

種族…神の化身（現代日本人）

性別…男性

職業…観光客

信仰…癒しのジュア

Lv32 ↓ Lv34

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

|     |     |       |   |   |
|-----|-----|-------|---|---|
| 生命力 | 102 | (96)  | — | — |
| マナ  | 153 | (153) | — | — |
| 狂気度 | 0   |       | — | — |
| 速度  | 168 | (103) | — | — |

|    |       |   |      |
|----|-------|---|------|
| 名声 | 33238 | + | 9038 |
|----|-------|---|------|

|     |   |   |    |
|-----|---|---|----|
| カルマ | 0 | + | 17 |
|-----|---|---|----|

現在値 前回比

|    |    |      |   |    |      |
|----|----|------|---|----|------|
| 筋力 | 87 | (63) | — | 1  | (+2) |
| 耐久 | 60 | (48) | + | 1  | (+1) |
| 器用 | 82 | (53) | + | 2  | (+2) |
| 感覚 | 69 | (59) | — | 9  | (+2) |
| 習得 | 66 | (56) | + | 3  | (+3) |
| 意思 | 60 | (39) | — | 7  | (+4) |
| 魔力 | 47 | (34) | + | 4  | (+4) |
| 魅力 | 60 | (30) | + | 14 | (+1) |

## 装備

頭…★祝福された《賢者の兜》+3〔4, 15〕：(看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*, 魔法耐性\*, 幻惑耐性\*, 魔力+5, 混乱無効)

首…★《ツインエッジ》+2〔0, 4〕：(耐酸性, 不燃, 二刀流\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*, 背中…☆祝福されたこの世ならざる外套『声のドラゴン』+2〔3

1, 2〕：(耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱

＊，速度＋5)

胴体…☆祝福された赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』＋2「18，45」…(耐酸性，不燃，心眼＊，裁縫＊，軽装備＊，意思＋8，生命力＋3)

利手…★《クレイモア》＋2 (3d14＋16) (1) …(耐酸性，不燃，レア，両手持ち適正，筋力維持，暗黒耐性＊，クリティカル＊＊＊＊＋，完全貫通＊＊＊＊，変異保護)

手…一

指…★《パルミア・プライド》「15，5」…(耐酸性，不燃，詠唱＊，暗黒耐性＊＊，混沌耐性＊＊，運勢＋15，速度＋8，魅力＋12，盗難防止)

指…呻くルビナスノスピードリング…(耐酸性，不燃，筋力維持，速度＋9，生命力＋3)

腕…☆祝福された重き重層ギャンブラー・プリンス箆手＋2 (1，1) 「1，1」…

(不燃，習得維持，感覚維持，器用維持，耐久維持，釣り＊，演奏＊，解剖学＊，隠密＊)

腰…祝福された烈火の翼鳥鱗の腰当＋2「9，8」…(回避＊，火炎耐性＊＊＊，寄生回避)

足…★祝福された《ダルIIイIサリオン》＋2「16，7」…(耐酸性，不燃，レア，運勢維持，旅歩き＊，隠密＊，器用＋6，呪い保護＊＊，MAP移動短縮＊)

遠隔…★祝福された《異形の森の弓》＋3…(耐酸性，不燃，レア，異次元の手「＊＊」，毒追加攻撃「＊＊＊」，感覚維持，器用維持，詠唱「＊」，毒耐性「＊＊＊」，器用＋10)

矢…エメラルドアロー(1d11＋1) (3) …(耐酸性，不燃，神経耐性＊＊)

### ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv32・608 ↓ Lv33・121

重量挙げ Lv36・263 ↓ Lv37・663



|       |                 |   |                 |
|-------|-----------------|---|-----------------|
| 両手持ち  | L v 2 6 . 1 5 3 | ↓ | L v 2 6 . 7 9 9 |
| 治癒    | L v 2 7 . 2 1 1 | ↓ | L v 2 8 . 1 5 0 |
| 採掘    | L v 1 0 . 3 8 0 | ↓ | L v 1 0 . 6 3 6 |
| 盾     | L v 1 5 . 1 0 0 | ↓ | L v 1 6 . 4 5 6 |
| 重装備   | L v 6 . 2 7 1   |   |                 |
| 中装備   | L v 1 3 . 3 3 9 | ↓ | L v 1 3 . 6 2 1 |
| 鍵開け   | L v 2 0 . 2 5 3 | ↓ | L v 2 1 . 2 5 3 |
| 二刀流   | L v 1 8 . 8 7 7 | ↓ | L v 1 8 . 9 5 5 |
| 軽装備   | L v 7 . 4 7 4   |   |                 |
| 回避    | L v 2 9 . 7 8 7 | ↓ | L v 3 1 . 3 4 2 |
| 罨解体   | L v 1 . 0 0 0   | ↓ | L v 1 . 3 6 6   |
| 裁縫    | L v 1 . 0 0 0   | ↓ | L v 1 . 1 0 0   |
| 宝石細工  | L v 1 . 0 0 0   | ↑ | New             |
| 窃盗    | L v 1 . 6 5 3   | ↓ | L v 1 . 7 6 5   |
| 隠密    | L v 3 6 . 0 4 6 | ↓ | L v 3 7 . 4 9 5 |
| 探知    | L v 7 . 3 9 9   | ↓ | L v 7 . 8 8 5   |
| 自然鑑定  | L v 1 8 . 9 3 4 | ↓ | L v 2 0 . 1 6 3 |
| 釣り    | L v 8 . 2 4 7   | ↓ | L v             |
| 見切り   | L v 2 8 . 0 7 3 | ↓ | L v 3 0 . 4 3 1 |
| 射撃    | L v 9 . 0 0 2   | ↓ | L v 9 . 6 3 2   |
| 読書    | L v 3 1 . 2 5 3 | ↓ | L v 3 2 . 2 1 2 |
| 遺伝子学  | L v 1 9 . 6 6 0 |   |                 |
| 解剖学   | L v 1 3 . 1 6 0 | ↓ | L v 1 3 . 8 8 0 |
| 暗記    | L v 1 5 . 6 1 5 | ↓ | L v 1 7 . 0 7 8 |
| 栽培    | L v 1 1 . 7 2 2 | ↓ | L v 1 1 . 8 5 1 |
| 料理    | L v 1 0 . 0 6 0 | ↓ | L v 1 0 . 2 6 3 |
| 魔力の限界 | L v 1 . 4 0 5   | ↓ | L v 1 . 5 1 7   |
| 信仰    | L v 3 1 . 8 5 0 | ↓ | L v 3 2 . 4 9 2 |
| 旅歩き   | L v 2 3 . 7 2 6 | ↓ | L v 2 4 . 1 1 2 |
| 乗馬    | L v 4 . 5 6 4   |   |                 |

|     |                 |   |                 |
|-----|-----------------|---|-----------------|
| 瞑想  | L v 2 4 . 5 8 5 | ↓ | L v 2 5 . 7 0 4 |
| 詠唱  | L v 2 1 . 2 6 1 | ↓ | L v 2 2 . 2 1 3 |
| 魔道具 | L v 1 6 . 3 2 2 | ↓ | L v 1 7 . 1 7 4 |
| 交渉  | L v 3 3 . 1 8 3 | ↓ | L v 3 4 . 5 3 3 |
| 投資  | L v 1 9 . 6 9 5 | ↓ | L v 2 0 . 0 3 1 |
| 演奏  | L v 3 1 . 9 2 9 | ↓ | L v 3 2 . 4 4 6 |

### ◆武器の専門

|       |                 |   |                 |
|-------|-----------------|---|-----------------|
| 長剣    | L v 2 5 . 6 1 1 | ↓ | L v 2 9 . 1 6 3 |
| 斧     | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 格闘    | L v 1 2 . 0 8 7 | ↓ | L v 1 2 . 1 1 6 |
| 鎌     | L v 1 9 . 9 7 6 |   |                 |
| 鈍器    | L v 9 . 2 7 2   |   |                 |
| 槍     | L v 1 3 . 6 0 4 | ↓ | L v 1 3 . 6 7 6 |
| 杖     | L v 1 4 . 1 2 3 | ↓ | L v 1 4 . 1 5 2 |
| 短剣    | L v 1 0 . 5 9 9 |   |                 |
| 弓     | L v 1 8 . 8 9 5 | ↓ | L v 1 9 . 5 0 5 |
| クロスボウ | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 投擲    | L v 1 0 . 6 7 5 |   |                 |
| 銃器    | L v 8 . 6 7 1   |   |                 |

### ◆耐性と抵抗力

|      |             |
|------|-------------|
| 火炎耐性 | 素晴らしい耐性**** |
| 冷氣耐性 | 普通の耐性**     |
| 電撃耐性 | 弱い耐性**      |
| 暗黒耐性 | 普通の耐性****   |
| 幻惑耐性 | 強い耐性****    |
| 毒耐性  | 強い耐性****    |
| 地獄耐性 | 耐性なし        |
| 音耐性  | 弱い耐性**      |

神経耐性 弱い耐性＊＊

混沌耐性普通の耐性＊＊＊

魔法耐性 普通の耐性＊＊＊

#### ◆特徴と体質

「フィート」 貴方は類稀な幸運の持ち主だ

「フィート」 貴方は猫よりも速い「速度＋10」

「フィート」 貴方の防御は鋼のように固い「Protection  
Value＋15」

「フィート」 貴方は見切れる「DefenseValue＋4」

「フィート」 貴方は我慢強い「耐久＋3」

「フィート」 貴方は猛烈な信者だ「信仰＋8」

「変異」 あなたは鉄のような皮膚を持っている「PV＋9」

「変異」 あなたの間接はしなやかだ「器用＋3」

「変異」 あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」

「変異」 あなたの腕は筋肉の塊だ「筋力＋9」

「変異」 あなたの声は全てを魅了する「魅力＋10」

「変異」 あなたの脳は完璧な機械だ「暗記＋8」

「変異」 あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」 あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」 あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」 あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」

「変異」 あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「変異」 あなたは鷹の目をしている「感覚＋10」

「フィート」 貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」

「変異」 あなたは人肉を食べることに抵抗が無い

「先天」 あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限－20」

「先天」 あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備はクリティカルヒットの機会を増やす

あなたの装備は完全貫通攻撃発動の機会を増やす

あなたの装備は変異から保護する

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前..ネビネイル

種族..神の化身

性別..男性

職業..魔法戦士

Lv17↓Lv21

ステータス:カッコ内は元の値

|     | 現在値       | 前回比 |
|-----|-----------|-----|
| 生命力 | 90 (90)   | —   |
| マナ  | 150 (150) | —   |
| 狂気度 | 0         | —   |
| 速度  | 103 (116) | —   |

現在値 前回比

|      |         |         |
|------|---------|---------|
| 筋力.. | 55 (42) | —       |
| 耐久.. | 47 (39) | +1 (+1) |
| 器用.. | 23 (23) | —       |
| 感覚.. | 14 (14) | —       |
| 習得.. | 19 (16) | +4 (+1) |
| 意思.. | 34 (30) | —       |
| 魔力.. | 45 (45) | —       |
| 魅力.. | 30 (25) | +5 (0)  |

名前..セズバルド

種族..ローラン

性別..女性

職業..魔法戦士

Lv5↓22

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力106 (100) ー ー

マナ 80 (80) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 108 (96) ー ー

現在値 前回比

筋力..30 (30) +1 (+1)

耐久..38 (35) ー ー

器用..19 (19) +1 (+1)

感覚..18 (15) +1 (+1)

習得..20 (16) +1 (+1)

意思..30 (30) ー ー

魔力..53 (50) ー ー

魅力..28 (28) +1 (+1)

待機組

名前..エリー (エリュシオン)

種族..ローラン

性別..女性

職業..戦士

Lv14 ↓ Lv21

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) — —

マナ 80 (80) — —

狂気度 0 — —

速度 110 (96) — —

現在値 前回比

筋力.. 46 (38) +10 (+9)

耐久.. 61 (49) +13 (+19)

器用.. 39 (31) +10 (+9)

感覚.. 23 (20) +3 (+9)

習得.. 29 (28) +4 (+9)

意思.. 30 (32) —11 (—1)

魔力.. 37 (43) —5 (+9)

魅力.. 42 (34) +21 (+19)

名前.. 妹のウレル

種族.. ローラン

性別.. 女性

職業.. 遺跡荒らし

Lv13 ↓ Lv21

ステータス: カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) — —

マナ 80 (80) — —

狂気度 0 — —

速度 95 (96) — —

現在値 前回比

筋力.. 43 (40) +18 (+21)

耐久.. 37 (37) +9 (+15)

器用.. 35 (35) —8 (+0)

感覚.. 23 (22) —3 (+13)

習得.. 2 2 (2 2)      - 7 (+ 0)  
 意思.. 2 7 (2 7)      + 4 (+ 1 0)  
 魔力.. 5 0 (4 7)      + 2 4 (+ 3 0)  
 魅力.. 4 0 (4 0)      + 1 3 (+ 2 0)  
 名前.. 娼婦のチヨロナ  
 種族.. ノーランド  
 性別.. 女性  
 職業.. 遺跡荒らし  
 L v 1 2    ↓    L v 2 0  
 ステータス：カッコ内は元の値

|            | 現在値           | 前回比           |
|------------|---------------|---------------|
| 生命力        | 1 0 0 (1 0 0) | - - -         |
| マナ         | 9 0 (9 0)     | - - -         |
| 狂気度        | 0             | - - -         |
| 速度         | 8 8 (8 1)     | - - -         |
| 現在値    前回比 |               |               |
| 筋力..       | 2 1 (2 1)     | + 5 (+ 1 1)   |
| 耐久..       | 3 7 (3 7)     | + 9 (+ 1 6)   |
| 器用..       | 4 2 (4 2)     | + 2 (+ 1 0)   |
| 感覚..       | 2 6 (2 6)     | - 7 (+ 0)     |
| 習得..       | 2 7 (2 7)     | - 7 (+ 0)     |
| 意思..       | 1 9 (1 8)     | - 5 (+ 0)     |
| 魔力..       | 3 3 (3 3)     | + 1 4 (+ 2 0) |
| 魅力..       | 4 0 (4 0)     | + 1 3 (+ 2 0) |

さて、次回辺りは再びレシマス探索予定です。

P S. ウェンディは店番があるのでまったく活躍しておりません W

**L V 3 5 \ L V 3 6 :: 旅行者と防衛者とお嬢と 女神ジュアのドチッ娘神疑惑**

20110321 誤字修正。 h i r oさん報告ありがとう！



2009日目

改めて書くのも難だけど、この失敗を忘れない為に書いておこうと思う。

頭をぶった切った上に、首を切り落して袋に入れると、臭いは元より、取り出したときに酷かった。

脳漿がぐちゃぐちゃに漏れて、血も酷い。

自分で言うのもなんだが、人間、モンスターと問わずあらゆる奴を様々な方法で殺してきたが……。

これだけは吐きそうだった。堪えたけど。

だけど、將軍殿はアッサリと吐きやがった。

王妃殿は濃すぎる血と腐敗臭であっさりダウンしていた。

二人とも、少しぐらいは堪えて欲しい。

さて、これで残す仕事はレシマス攻略、そして秘宝のゲットだ。

あっさり行くとは思ってもいないけど。

|||||  
|||||  
|||||  
|||||  
|||||

パルミアから戻り、日記をつけてからベッドでエリーと一緒に寝ていると、ススムは夢を見た。

それは、夢の中に癒しの女神ジュアが現れると言うものだった。

『さて、アンタ最近色々と無茶してるみたいだけど、どうにか成ってるみたいね』

「ジュア様?……あれ、俺寝てた筈じゃ?」

『ここはアンタの夢の中、よ。で、本当はもっと後、アンタが秘宝を入手してから言う筈だった事を今のうちに告げようと思ってね』

「あ、はい。そういえば、パルミアからも秘宝を入手しろっていわれて少し悩んでるんですね。イザって時は、敵が奪われるのを拒んで、粉みじんに破壊したとでも言うつもりですが」

『あー、そんな事しないでも良いわよ。アンタに言った秘宝入手なだけでね。アレ、一度私たちの所に先に持ってきてくれれば、その後で代わりのを渡すわ』

「代わり、ですか?」

『そ。アレに記録されている情報に制限を掛けた複製品よ。それでも十分必要な情報が得られるのだから問題はない筈よ』

「……もしかして、ジュア様達は、どんな情報が必要かを把握しているんですか?」

『そりゃ勿論。神様なのよ、私達は。ただ、神々が直接知識や技術を下賜する事は許されないわ。私達は熱心な信者に宝や下僕をプレゼントをすることはあっても、そういった事は今までアンタにもしていないでしょう?例えば……エーテル病に侵された人間の抜本的な治療方法とか、ね』

「!」

『勿論、ネビネイルも色々と気づいてはいた筈だけど、彼の場合、そちらに降りた時にコチラの知識や技術を封印してそちらに行っているのよ。だから、何か言いたくても言えない』

「……そうだったのか。ネビネイルが以前、エーテル抗体を渡しに行った時に、ああいう顔をした理由がようやくわかった」

『さて、折角話題に出したんだから、救う為のヒントぐらい上げるわよ。《常闇の眼》に封じられた情報には、もしかすればあんたが望む情報があるかもしれないわ。使用許可をあげるわ。それをもって自らの望みを成し遂げる情報をキチンと得なさい』

「……あ、ありがとうございます、ジュア様!」

『べ、別にそれほど感謝されるような事じゃないわ！ただ、アンタにやる気出して貰わないと、私達が困るから教えただけよ！アンタが好きだからとか勘違いしないでよね！』

ジュアは顔を少し赤くして、その姿を消して行く。

「ジュア様は本当に良いツンデレ」

ススムはそう呟きながら、意識が覚醒していくのを感じた。

## レシマス第1層

一行は懐かしい場所、レシマスの第一層に居た。

ススムはやる気満々で其処に居るが、二人はそうでもない。

実は既に一度第40層まで潜っているのだ。

なのに、今からもう一度1層から潜り直すぞと言われれば、モチベ1ションも上がらないだろう。

「主殿、ほんっとーにやるのですか？」

「幾らなんでも、少々きついと思いますわ」

文句を言われているススムだが、こちらは少しばつの悪い顔をして言い返す。

「いや、しょうがないじゃん。ちよつと装備整えたり、投資したり、魔法書買ったり薬品買ってたら、金なくなっちまったんだし」

そう、有体に言えばお金がない！という状況だ。

ここ数日、レシマスの攻略を急いで下の階層へ行くことを重視して

いたが、そのせいかお金になるような行為を疎かにしており、たまに帰還した際に税金を払いに行ったら無一文とまでは行かないが、それに近いぐらいに金が無くなってしまったのだ。

「相変わらず、ススム様は計画的にお金を使う事ができませんのですね」

「いや、計画的には使ってるぞ？主に税金対策的な意味で」

「いやいや主殿？税金対策だからと言って使い切ってしまうのは……」

「一応、貯金箱に入れてあるから本当にカラッポってわけじゃないぞ。貯金箱を割れば28万近い金貨が入ってるし」

これだけ聞けば、別段金策の為にこのような面倒な行為をする必要はない、と思うだろうがそれは違うのだ。

「そもそも、武具が半端なんだよなあ……。ネビネイルはコルゴンの指輪つけているから良いとして、セズバルドの防具や他のメンバーの武具が見劣りしちゃうってのがなあ」

「あー……そういえばそうでしたな」

「そういえば、今では余り気にしていませんでしたが、私達が使用する武器は基本的に神器級でしたわ」

「そして、神器級ってのは、こんだけしつこくネフィアやレシマスに潜る俺達でも、中々ゲットできないお宝ってわけだ」

「しかし、なにもそこまでして神器級の武具を探さなくても良いのでは？」

ネビネイルは少し呆れた様に言うが、ススムは少し怒った様に言う。

「その結果がミノタウロスの巢やウンガガに殺されるって言う結末だっただろうが。あの時は意識してなかったけど、奴の武器、破壊

の斧も確かに神器級だけど、それ以上に奴自身がおっそろしく強かった。で、だ。ソレに対抗するには俺たち自身が強くなるか、もしくはより強い武具を探し当てるかってわけだ」

「それで、今まで未回収だった武具や倒していなかった魔物を掃討すると？」

「……正気の沙汰じゃありませんわね」

「やけに毒を吐くな、セズバルド。だけど、それぐらいの気概じゃなきゃレシマス攻略も夢のまた夢だろう。まして、エレキドラゴンにスカイゴーレムにタイタンだっけ？アレに囲まれて、俺達もかなり拙かったじゃないか」

「それは……まあそうですが」

「でも、ウンガガとあの群れ、くらべればまだあの群れの方が御しやすいかったですわね」

それはそうだろう。

ヤバイと思ったススムがテレポートの杖でどこかに転移させ、一体ずつ蜘蛛の巣の魔法で足止めをした上で脆弱や鈍足のポジションで弱らせてから総攻撃を仕掛けたのだ。

コレで勝てなければ相手はウンガガと同等かそれ以上だろう。

そして、もう一つ言うならば、そんなスゴイのを従えていると思われるレシマスの主とも言うべき人物、それがどれだけの實力を持つかも未知数だ。

ススムとネビネイルは不死身だから良いが、それでも何度も戦えば相手も自分も手札が読まれてしまうだろう。

ススム自身は戦う時は本能や直感で戦う事も多いので、頭の良い相手や、ススム達相手にごり押しできる程の相手だった場合、為す術がないのだ。

「……と言うわけだ。それじゃあ説明も終わったのでガンガン行こ

うか！」

そうして、数回に分けて第1層から潜ったり、帰還の魔法を応用して第40層から登っていき、敵の掃討や武具の回収を行ったが。

「結局、余り結果は出せなかったな」

「早々落ちているわけがない、とは思いましたが、少なくとも戦闘をこなす事は十分に出来ましたわね」

「まあ、アレらはウェンディに金に換えてもらっておるしの。後は他のネフィアを漁るのが一番じゃなかろうかのう？」

ネビネイルがそう言いって二人に提案するが、それは非常に正しい提案だった。

レシマスの第40層まで潜り、敵を全て殲滅し、取れるモノは全て回収済み。

と、なればそれ以上を望むなら更に潜るか、或いは別のネフィアに潜るぐらいしかない。

そして、レシマスの方は敵が凶悪に成ってきているので、これ以上潜る前にパワーアップしたいのだ。

## 闇の塔 第5層

「と、いうわけでレシマスからこの塔に梯子した訳だが……もうちょいふんばってくれよネビネイル」

「……」

「返事はありません。どうやら屍のようですわね」

レシマスから通常のネフィアに移って一度目の探索で、ネビネイルは早速死んでしまっていた。

「私は耐えられましたが、ネビネイルは爆弾岩に近い場所に居ましたから」

「いや、俺なんて真横だぞ？変化の杖使い損ねたよ」

セズバルドはそうでもないが、四肢といわず全身粉微塵となり、最後は光の粒子へと帰って逝ったネビネイル。

爆発寸前で防御しようとした腕が耐え切れず、武具は何とか生きているものの、衝撃波で腕や脚が複雑骨折の状態のススム。

「ススム様は良くそれで生きていますね」

「めっちゃ痛いけど、ぶっちゃけ慣れたとしか言えないな。魔法使って骨も修復してるし……まあ、あとは数時間休むか。周囲の魔物も掃討済みだしな」

微妙に期待した返事とは違ったが、セズバルドもススムならばこの程度ありかと納得して返す。

「私が言うのも難ですが、本当に人間離れしておりますわね」

「いや、それをいったらこの世界の冒険者は俺たち以上が他にも何人も居るから、そっちのが酷いだろ」

強いて言うなら、一般人からすればどっちもどっちのバケモノ揃いだ。

ススムは中でもまだ、レベルが低い方だろう。

それを考えると、レシマスの最奥に潜むであろうボスが、どんなバケモノで、どんな凶悪な存在か、今から恐怖で脚が震えると言うものだ。

その後、塔の主であるアイスドレイクを叩き切って二人は帰還する。二人は思う。

爆弾岩が一匹だけでよかった、と。

自宅に帰還した二人が見たのは、玄関先でいつも掃除をしているメイドなどではなく、死に戻りしたネビネイルが、エリーに修行と言う名の拷問に掛けられているシーンだった。

具体的には、弱った体で逃げ惑うネビネイルと、大鎌をぶん回しながらギリギリのラインで追い回すエリーの姿だ。

「エリー殿！ワシ、死に戻りしたばかりでまだ体調がッ！！」

「言い訳無用！旦那様であれば蘇った直後に元気に動き回る！貴様もその程度こなして見せよ！！」

「主殿とワシを比較対象にしないで下され！！主殿は次元が一つも二つも違うのですぞ！根本的に！！」

「言い訳無用と言った！！」

「ひええええー！！」

この二人を見て、ススムはどうするべきか真剣に悩んだが、とりあえず、見なかった事にすることにした。

「あ、主殿おおおー！」

ネビネイルの魂の叫びが聞こえたが「ガンバレ」と良い笑顔でセズバルドと共に応援して屋敷の中に入った。

その後、蘇った直後ということで弱っているネビネイルだが、ギリギリまで扱かれて開放された。

だが、弱っている時に扱いたせいか、更に弱ってしまい、多少医療



に心得のある執事の見立てでは1週間は安静に言うことになった。ソレに伴い、ネビネイルに代わり、ウレルがススムに同行する事になった。

エリーは着いて来ようとしたが、旦那よりも娘の方が心配、と言うことで屋敷に残る事になった。

それを言われた時のススムの心境は少しだけ複雑だった。

しかし、娘はススムにしても可愛い盛りだった。

娘の為に妻が残るのは仕方のないもの、と割り切り、ウレルを連れて旅に出るのだった。

屋敷を出て大よそ1時間、パルミアにつくとススムは礼拝堂へと向かう。

そうして何時も通りに祭壇にミカやダイヤモンドの原石などの宝石を捧げ、ススムは自身と仲間達の健康祈願をする。

そうしていると、つい先日、夢で聞いた声が聞こえてきた。

『べ、別にアンタのこと愛してなんかいないんだからっ。あたしの傍から離れたらしょうくないからねっ！このバカあ…』

「（な、なんというツンデレ！言ってる事が滅茶苦茶だが、だが、そこが良い！流石ジュア様だ……）」

変な方向にススムが感極まっていると、ススムの上の方から光が降り注ぎ、違和感と嫌な予感がして咄嗟に飛びのくと、ススムが跪いていた時に頭があった場所に、神秘的な雰囲気が漂う聖なる槍ともいえそうな細槍が「ドスウ」という音を立てて床に突き立っていた。その神秘的な雰囲気はジュアの持つ威光に近い事を感じ取り、ススムはそれがジュアからの贈り物であると感じたが……。

「癒しの女神ジュア、ツンデレに加えてドジッ娘属性だと……!？」

流石ジュア様、あなどれん。等と妙に真剣な雰囲気ですレタ事を呟いてススムは槍を引き抜く。

槍を引き抜いてから気づいた事だが、ススムは基本的に大剣使いだ。如何に優れた神の槍であっても、非常に残念なことだが活かしかない上に、武器としての能力はクレイモアの方が上だと気付いて僅かにへこむが、これは仲間の強化に使えると考え直して早速ウレルに持たせる事にした。

ウレルも基本的には剣を扱うのが中心だが、他のメンバーと違い、色々な武器をとつかえひつかえしてその時余っている一番強い武器を扱うので本人も「練習すれば何とかなる、かなあ？」と言って受け取った。

その後、練習のつもりでススムはウレルをレシマスに連れて行っただが、その判断は大いに間違っていた。

帰還の魔法を用いて、レシマス第40層に直接乗り込んで戦い始めたのは良いが、ウレルの基礎能力はそこそこに良かったモノの、戦闘技術がこの階層で戦う者として大いに不足していたのだ。

その為、ネビネイルやセズバルドであれば戦い抜ける、或いは生き延びられるエレキドラゴン相手に敗北し、重傷を負う事となった。重傷とは言っても、魔法やポーションで直ぐに治療したので後遺症はないが、暫くは不自由が残るだろうと言うのが執事の見立てだった。

「……迂闊でした。訓練は所詮訓練でしかない事を忘れていました。旦那様は、だから魔物掃討や討伐をする様に私に仰ったのですね？」  
「まあ、そうだったんだけど……俺自身も迂闊だったな。身内最顶层で見てこのザマだ、みんなを率いるモノとして、情けなくなるよ」

へこむススムだが、エリーがススムに優しく抱きつき、ススムも抱き返す。

言葉は交わさない。

お互いに言いたい事はわかっているから。

同じ過ちは繰り返さない、その為の努力をしようと二人は心に固く誓う。

その後になんかあったかは言うのも野暮と言うものだろう。

一言言うなら、重傷者<sup>ウレ</sup>は聞こえてくる物音によるストレスで怪我が悪化しかけたぐらいだ。

後日、パルミアで暫く演奏依頼を受けたりして金を稼ぎつつ暇を潰し、ネビネイルの復帰を待ち、ススム達は再びネフィア探索に戻る。ネビネイルはそこで愛用の血塗れの棍棒を振り回し、快調にイークやオークの頭や急所を粉碎し、果てはミノタウロスの頭蓋も叩き潰す。

「ふはははは！快調快調！ワシは今、とても輝いておりますぞ！」  
「ねえ、ススム様。ネビネイルが妙にハイなんだけど、アレどうなってるの？」

「……地獄の扱きから開放されたからか？とはいえ、あの調子でレシマス潜ると死にそうだな。……まあ、暫くすれば頭も冷えるだろ」

実際に、マスターリッチの魔法攻撃でネビネイルは窮地に追いやられ頭も一気に冷えた様子だった。

そこからはセズバルドも加わり反撃に乗り出す。  
ススムはその頃、ゴールデンゴレム二体とティラノサウルスの相手をしていた、それどころじゃなかったりしたが。

その後、地道に演奏で稼いだり、やはりネフィアを潜ったりとを繰り返しているとおつという間に1ヶ月という時も過ぎ去る。

復帰したウレルを迎えたが、ススムとしては内心微妙であった。

原因はやはり実力差に他ならない。

しかし、実力をつけるにはやはり実践が一番なのは言うまでもない。詰まる所は急がば回れ、地道に頑張りましょうと言うわけだった。

再びネフィアを潜り、依頼を受けてルミエストからポート・カプールまでの護衛を受け、またネフィアを潜り、という生活をし、再びルミエストを訪れた時に一人のガタイのいい掃除屋がススムの前に現れ、大きな声でしゃべり始めた。

「アンタがパルミアの剣鬼だな？俺はこの美しいルミエストの清掃を生涯の使命とし、この道十年のベテラン掃除屋バルザックだ」

「ベテラン？掃除屋の？？」

突然現れた自称ベテラン掃除屋のバルザック。

彼はススムの言葉を聞いてか聞かずか再び口を開く。

「街道に落ちているどんな小さなゴミも見逃さないプロ魂を持つが、そんなプライドも傷つけられちゃった。下水道にとんでもない化け物が住み着いて、もう俺の手には負えないぜ。お前なら、俺の気持ち汲み取って、退治に出向いてくれるな？」

バルザックは受けてくれるよな！受けてくれるよな！と期待した目でススムを見ている。

「あー……」

どうしたもんか、断るか？断ろう。  
そう思ったススムがキツとバルザックを見ると、バルザックが先にしゃべりだした。

「そうか！受けてくれるか！パルミアの剣鬼がたかだか下水道の化け物に遅れを取る筈もないもんなあ！その言葉、待っていたぜ！下水道の入り口は宿屋の近くにある。気をつけろ、奴等は手強いぞ！」

大きな声で、周囲に良く聞こえるように言われた。

コレでは、今更嫌だ、とは言えない。

バルザックは終わったら街の北にある俺の家まで来いよ、と言ってさっさとどこかに行ってしまった。

「これは見事に押し付けられてしまいましたな」

「ああ……それにしても、台風みたいな奴だった」

二人がそう言って頷きあっている所にセズバルドがふと気づく。

「ところで……下水道って、排水とかが流れるアレですわよね？」

「アレというか……それしかないかなあ？」

ウレルは困った笑顔を浮かべながらセズバルドに言う。

「ウレル姉さま、私、下水道ばかりは行きたくないですわ」

「私も行くのは勘弁して欲しいけど、お兄ちゃん次第だよ」

セズバルドは、以前薬品の影響で若返ってから、精神まで若返ったのかウレルを姉と呼び慕っていた。

ウレルも妹分が出来て嬉しいのか、はたまた元々面倒見が良いからなのかセズバルドの姉として頑張っていた。

そんな二人に、ススムは慈悲無くこう言った。

「まあ、幾らなんでも猫使いとかウンガガの時みたいな化け物が出るとは限らないし、全員で行ってちゃっちゃと終わらせるぞ!」

「そうですね。下水道と言ってもネフィアやレシマスに比べれば規模も小さいですし今から遣れば夕方頃には片付きましょう。うん? 妹様にセズバルド、二人ともどうしたんじゃ?」

男二人の言葉にガツクリと項垂れる女二人。

彼らに彼女達の心境を理解することは当分出来無いだろう。

ルミエストの下水道。

そこは薄暗く、腐臭が充満し、肉の塊とも取れる怪物が跋扈する魔境だった。

「と、心情をモノログ調で語ってみたが、正直、塊の怪物とか弱酸性スライム程度なら3人でも十分じゃないか?」

「そうですねあ……正直、主殿が出るには相手が役者不足といった感じもありますな。修練も兼ねて、先ずは我らで相手をして見ましょうぞ」

「んじゃ、俺は厄介そうなスライムとかだけ魔法や弓矢で潰しておくか」

ススムは手早く腰に下げていた異形の森の弓を抜き取り、矢を番えて何時でも攻撃できる態勢をとる。

「行動開始!とっとと終わらせるぞ、3人とも!」

「「了解!」」

かくして下水掃除はつつがなく開始し、途中で塊の怪物に包囲されて3人がサンドバック状態になったり、ガグというモンスターも居たが、所々でススムが魔法や弓矢で援護したりといった場面もあり、特に問題はなかった。

強いて言うなら、女性二人が下水とモンスター達によるあまりの臭気と汚物によってグロッキーになったぐらいだ。

「いやあ、やはり塊の怪物は厄介ですなあ。もう少し奴等が強かったら、主殿の援護も活用できずに倒れる所でした」

「ははは、ネビネイルも相変わらず良いタイミングで治癒の雨を使ったな。アレが無ければ援護も間に合わない所だった」

男二人は流石に血みどろ戦闘に慣れ過ぎたせいか、汚臭程度では最早動じないが、この辺りは感性の問題だろう。

その後、ようやく二人が憔悴している事に気付いたススムは、二人を宿屋で休ませ、自分は掃除屋のバルザックの元へと向かう。

「なんと！まだ2時間と経っていないのにもう下水の掃除が終わったのか！？」

報告に行くと、バルザックは驚いた様子で二人を見た。

「いや、まああの程度なら、なあ？」

「そうですね。あの程度なら、我らの手に掛ければ雑作もありませぬよ」

「はっはっは、流石パルミアの剣鬼とその従者殿だ！」

バルザックはもう一度笑った後に、家の奥から大きな袋を持ってきて、そしてススムの前で袋を開けた。

「これが報酬だ！受け取ってくれ！」

そう言って二人の目の前に出てきたのは女神ジュアの像だった。

「おお！？これは素晴らしい……ジュア様の精巧な偶像フィギュアですな！」

「ああ……凄いな、驚くほどに良く似てる。バルザック、これが報酬なんだな？」

「おうよ！俺の所にあっても、まあ余りな。剣鬼殿は癒しの女神ジュアの信徒なんだろう？だったらコレが一番って思った訳だ！」

「そうか、ありがとう！」

礼を言うススムだが、ふと思う。

どっからそういう情報漏れたんだ？

ススムは気付いていないが、この世界には「相手の信仰を見抜く」という特殊なアーティファクトが存在する。

自身も手に入れたことがあるが、余りにも役に立たない、かなりどうでも良い効果だったのですっかり忘れているのだ。

「勿論、態々剣鬼殿に動いて貰ったんだ、金貨とプラチナ硬貨も用意させて貰ったぜ」

「そうか。像だけでも嬉しいが、受け取っておこう」

「おう、そうしてくれ。像だけで済ませたとあっちゃ、お互いの評判にも関わるからな」

そうしてその後、ルミエストで一泊してから再びネフィア探索を開始したのだが……。

「●、●ガ……ンテ……」



「ば、爆弾い……ギャー！！！！」

ネビネイルが爆風に吹き飛ばされ壁の染みとなり。

「ま……」

「こ、コツチにも！？つきゃああああ！！！！」

「いやあああああ！！？」

ウレル、セズバルドが同時に爆風に吹き飛ばされ、重傷を負い戦闘不能となる。

「……どうしてこうなった」

ススムは3人が次々と爆弾岩の自爆に巻き込まれ、死に戻りしたり、戦闘不能で帰還させた後に呟く。

ネフィアの主である『ナイト』を大剣でちびちびと斬りつけつつ呟く。

「どうして、こうなった」

ため息と同時に大剣でナイトを唐竹割で真っ二つにし、やはり再びため息をついたのだった。

## Lv35～Lv36..旅行者と防衛者とお嬢と 女神ジュアのドチッ娘神疑惑？

油断大敵、と言うことでしょうか？

お供の3人が、爆弾岩達の自爆で呆気なく碎け散りました。

その時の気持ちはススムの眩きと同様「どうしてこうなった」というものでした。

装備新調して少し硬くなったばかりだったのになあ。

PS. ショールーム関連を本編のレシマス攻略後に挑んでみようと思います。

お勧め、やってみて欲しいショールームのご紹介お待ちしております！

出来れば、始めのうちは難易度Easy（レシマス攻略直後程度）が希望です。

間違っても難易度Hard（階層75）やLunatic（階層150以上）とかは勘弁してください。

絶対に攻略できません。

ええ、間違いなく。

それでは、いつものスタータス晒しです。

お供の3人は今回入院中なので次回以降となります。

名前..ススム（石動進）

種族..神の化身（現代日本人）

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv34 ↓ Lv36

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力105 (96) +3

マナ 153 (153) -

狂気度 0 -

速度 168 (103) -

名声 33238 -5011

カルマ 0 -

現在値 前回比

筋力..92 (68) +5 (+5)

耐久..65 (52) +5 (+4)

器用..85 (56) +3 (+3)

感覚..80 (61) +11 (+2)

習得..72 (61) +6 (+5)

意思..72 (42) +12 (+3)

魔力..49 (36) +2 (+2)

魅力..63 (33) +3 (+3)

## 装備

頭 .. ★祝福された《賢者の兜》+3 [4, 15] : (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》+2 [0, 4] : (耐酸性, 不燃, 二刀流\*\*\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*\*\*\*\*)

背中.. ☆祝福されたこの世ならざる外套『声のドラゴン』+2 [3  
1, 2] : (耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+5)

胴体.. ☆祝福された赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+3 [18,

45」：（耐酸性，不燃，心眼\*\*，裁縫\*，軽装備\*，意思+8，生命力+3）

利手…★祝福された《クレイモア》+3（3d14+16）（1）：（耐酸性，不燃，レア，両手持ち適正，筋力維持，暗黒耐性\*，クリティカル\*\*\*\*+，完全貫通\*\*\*\*，変異保護）

手…一

指…★《パルミア・プライド》+1「15，5」：（耐酸性，不燃，詠唱\*，暗黒耐性\*\*，混沌耐性\*\*，運勢+15，速度+8，魅力+12，盗難防止）

指…呻くルビナスノスピードリング：（耐酸性，不燃，筋力維持，速度+9，生命力+3）

腕…☆赤く染まった軽手袋『ドウルエオン』+3（13，0）「10，9」：（不燃，耐酸性，魅力維持，生命力+3，浮遊，麻痺無効）

腰…祝福された烈火の翼鳥鱗の腰当+2「9，8」：（回避\*，火炎耐性\*\*\*，寄生回避）

足…★祝福された《ダルIIイIサリオン》+2「16，7」：（耐酸性，不燃，レア，運勢維持，旅歩き\*\*，隠密\*，器用+6，呪い保護\*\*，MAP移動短縮\*\*）

遠隔…★祝福された《異形の森の弓》+3：（耐酸性，不燃，レア，異次元の手「\*\*\*」，毒追加攻撃「\*\*\*」，感覚維持，器用維持，詠唱「\*」，毒耐性「\*\*\*」，器用+10）

矢…エメラルドアロー（1d11+1）（3）：（耐酸性，不燃，神経耐性\*\*）

#### ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv33・121 ↓ Lv35・376

重量挙げ Lv37・663 ↓ Lv40・945

両手持ち Lv26・799 ↓ Lv28・522

治癒 Lv28・150 ↓ Lv29・830

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 採掘    | L v 1 0. | 6 3 6 | ↓ | L v 1 3. | 1 9 3 |
| 盾     | L v 1 6. | 4 5 6 |   |          |       |
| 重装備   | L v 6.   | 2 7 1 |   |          |       |
| 中装備   | L v 1 3. | 6 2 1 | ↓ | L v 1 4. | 0 7 0 |
| 鍵開け   | L v 2 1. | 2 5 3 | ↓ | L v 2 2. | 7 8 5 |
| 二刀流   | L v 1 8. | 9 5 5 |   |          |       |
| 軽装備   | L v 7.   | 4 7 4 | ↓ | L v 7.   | 4 8 5 |
| 回避    | L v 3 1. | 3 4 2 | ↓ | L v 3 2. | 1 1 9 |
| 罨解体   | L v 1.   | 3 6 6 | ↓ | L v 1.   | 9 8 7 |
| 裁縫    | L v 1.   | 1 0 0 |   |          |       |
| 宝石細工  | L v 1.   | 0 0 0 | ↑ | L v 2.   | 4 1 7 |
| 窃盗    | L v 1.   | 7 6 5 |   |          |       |
| 隠密    | L v 3 7. | 4 9 5 | ↓ | L v 4 0. | 8 0 1 |
| 探知    | L v 7.   | 8 8 5 | ↓ | L v 8.   | 9 6 8 |
| 自然鑑定  | L v 2 0. | 1 6 3 | ↓ | L v 2 1. | 8 4 4 |
| 釣り    | L v 8.   | 2 4 7 | ↓ | L v 9.   | 0 7 1 |
| 見切り   | L v 3 0. | 4 3 1 | ↓ | L v 3 1. | 6 8 6 |
| 射撃    | L v 9.   | 6 3 2 | ↓ | L v 1 2. | 4 1 1 |
| 読書    | L v 3 2. | 2 1 2 | ↓ | L v 3 3. | 6 1 9 |
| 遺伝子学  | L v 1 9. | 6 6 0 | ↓ | L v 2 3. | 2 5 4 |
| 解剖学   | L v 1 3. | 8 8 0 | ↓ | L v 1 5. | 4 3 0 |
| 暗記    | L v 1 7. | 0 7 8 | ↓ | L v 1 8. | 8 1 7 |
| 栽培    | L v 1 1. | 8 5 1 | ↓ | L v 1 2. | 8 3 5 |
| 料理    | L v 1 0. | 2 6 3 | ↓ | L v 1 0. | 9 3 7 |
| 魔力の限界 | L v 1.   | 5 1 7 | ↓ | L v 1.   | 6 6 8 |
| 信仰    | L v 3 2. | 4 9 2 | ↓ | L v 3 4. | 2 1 3 |
| 旅歩き   | L v 2 4. | 1 1 2 | ↓ | L v 2 4. | 7 7 0 |
| 乗馬    | L v 4.   | 5 6 4 |   |          |       |
| 瞑想    | L v 2 5. | 7 0 4 | ↓ | L v 2 6. | 8 9 7 |
| 詠唱    | L v 2 2. | 2 1 3 | ↓ | L v 2 4. | 5 4 8 |

|     |                 |   |                 |
|-----|-----------------|---|-----------------|
| 魔道具 | L v 1 7 . 1 7 4 | ↓ | L v 1 8 . 6 7 6 |
| 交渉  | L v 3 4 . 5 3 3 | ↓ | L v 3 7 . 9 1 2 |
| 投資  | L v 2 0 . 0 3 1 | ↓ | L v 2 2 . 2 1 1 |
| 演奏  | L v 3 2 . 4 4 6 | ↓ | L v 3 9 . 8 1 4 |

◆武器の専門

|       |                 |   |                 |
|-------|-----------------|---|-----------------|
| 長剣    | L v 2 9 . 1 6 3 | ↓ | L v 3 1 . 6 1 7 |
| 斧     | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 格闘    | L v 1 2 . 1 1 6 | ↓ | L v 1 2 . 7 3 9 |
| 鎌     | L v 1 9 . 9 7 6 |   |                 |
| 鈍器    | L v 9 . 2 7 2   |   |                 |
| 槍     | L v 1 3 . 6 7 6 |   |                 |
| 杖     | L v 1 4 . 1 5 2 |   |                 |
| 短剣    | L v 1 0 . 5 9 9 |   |                 |
| 弓     | L v 1 9 . 5 0 5 | ↓ | L v 2 0 . 9 7 2 |
| クロスボウ | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 投擲    | L v 1 0 . 6 7 5 |   |                 |
| 銃器    | L v 8 . 6 7 1   |   |                 |

◆耐性と抵抗力

|      |         |       |
|------|---------|-------|
| 火炎耐性 | 素晴らしい耐性 | ***** |
| 冷氣耐性 | 普通の耐性   | **    |
| 電撃耐性 | 弱い耐性    | **    |
| 暗黒耐性 | 普通の耐性   | ***** |
| 幻惑耐性 | 素晴らしい耐性 | ***** |
| 毒耐性  | 素晴らしい耐性 | ***** |
| 地獄耐性 | 耐性なし    |       |
| 音耐性  | 弱い耐性    | **    |
| 神経耐性 | 弱い耐性    | **    |
| 混沌耐性 | 普通の耐性   | ***   |

魔法耐性 普通の耐性

\*\*\*

◆特徴と体質

「フィート」貴方は類稀な幸運の持ち主だ

「フィート」貴方は猫よりも速い「速度+10」

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「フィート」貴方は猛烈な信者だ「信仰+8」

「変異」あなたは鉄のような皮膚を持っている「PV+9」

「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」

「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」

「変異」あなたの腕は筋肉の塊だ「筋力+9」

「変異」あなたの声は全てを魅了する「魅力+10」

「変異」あなたの脳は完璧な機械だ「暗記+8」

「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「変異」あなたは鷹の目をしている「感覚+10」

「フィート」貴方は税金の計算にとっても強い「税金15%減」

「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限-20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備はクリティカルヒットの機会を増やす

あなたの装備は完全貫通攻撃発動の機会を増やす

あなたの装備は変異から保護する

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする



**LV37：旅行者と奥さんの旅行 ファンタジーのお約束 (前書き)**

今回はヒロイン(?)のエリーのみを連れて行ってみました！  
装備が貧弱すぎて慌てたのは良い思い出。



「二人で出かけないか、エリー？」

「え？ アリスの事は良いのですか、旦那様？」

帰ってきた翌日、ススムはエリーに何の前振りもなく言うと、流石のエリーもやや驚いた様子で問い返す。

「アリスの事は執事やメイド、それにネビネイル達が居るから大丈夫だよ。3人とも、今回はアレだったがそれなりに力もつけているから屋敷の守備も十分にこなせるだろうしな。それにだ、コレが一番重要なんだが……結婚してからコッチ、二人きりで過ごす時間が全然ないじゃないか。だから、コレを機に久し振りにあちこちに足を伸ばしてみないか？」

「そういう事ですか……わかりました。妻として、戦場を共に駆けるパートナーとして一緒に過ごします」

「おう。よろしく頼むな、エリー！」

外の倉庫とパルミアの武具店で装備を整え、さて準備も出来たし行くか、と言うところでメイドが遣ってきてススムに尋ねる。

「ご主人様、何時頃の帰宅予定になりますでしょうか？」

「うん？ そうだなあ……」

ススムは特に考えていなかったもので、ふむ、と考えてから答える。

「一応、一ヶ月だ。ネフィアに潜ったり、盗賊団を潰した場合は一時的に戻ってくるが、そのつもりでいてくれ」

「わかりました。ウレル様達にも伝えておきます」

「ああ、よろしく頼む」

そうして出かけた二人だが、先ず向かったのはパルミアだった。

「パルミアですか？先程着たばかりですが……」

「まあ、さっきのは準備メインだったろ？買ったのも武具ばかりだし。今度はちょっとデートらしい事しようと思ってな」

「デート……？」

「逢引ってこと。丁度パーティとかあるし、行かないか？上手いメシに気の効いた音楽。ま、普段は遣らないお上品な楽しみってのもありだろう？」

「わ、私には不釣合いな氣もしますが」

エリーが少し困った風に言うが、ススムは氣にせずに言う。

「何、釣り合うとか釣り合わないとかは氣にする必要はない。どうだ？」

「……それでは、その、お供します」

行った先は小金持ちが集まるパーティ会場。

やや庶民くささのあるパーティだが、やっている事等は基本的に大きなパーティと変わらない。

普段は楽器演奏などでパーティを盛り上げる側に参加しているが、今回はそちらがメインではない。

「うん、良く似合ってるじゃないか」

「旦那様も。白いスーツ、似合っています」

エリーが着ているのはバラの様に赤いドレス。

胸元と背中が大胆に露出しており、普段は（暗器を隠す為に）ゆったりした衣装や武具に隠れる、白い肌とメリハリのあるボディが惜

しみなく色気をかもし出していた。

一方でススムの方はと言うと、顔はまあ普通としか言いようがないのだが、彼の放つ冒険者として鍛え上げた引き締まった肉体と磨き上げた自信、そして強い意思の宿る瞳がそこいらの男とは一線を画する魅力カリスマを形成していた。

普段は隠れている二人の魅力は、このパーティ会場では一際輝くモノだった。

「な、なんだか注目されていませんか？」

「ははっ、それだけエリーが魅力的なんだよ。自信を持って堂々としていれば良い」

周囲からの視線に少し怯んでしまったエリーだが、ススムは楽器演奏でよくパーティに来ていただけあって、注目される事には慣れていたので堂々としたモノだった。

「……はい」

エリーは恥ずかしげに顔を少し赤くし、ススムの腕に自身の腕を絡めてパーティ会場へと入っていった。

そして、このまま進めば大団円とも言えたのだが、そこはススムの運の悪さとも言うべきか、大団円とは行かなかった。

気付いたらパーティ会場は火の海で、モンスターが大量発生し、人々が逃げ惑っていたのだ。

「……どうしてこうなった？」

「客の中にモンスターを呼び込む呪物を持った人間が居たのかもしれない。先程、ファイアドレイクやケルベロスの姿を確認しまし

た」

「うっわー……なにそれ、炎の信仰者でも呼び寄せたのか？」

そう言っていると、離れた所でけたたましい爆発音が響く。

その向こうに見えるのは『ポーン』や『ナイト』を始めとした駒達だ。

「……『キング』も召喚されていたようですね」

「っだな！」

突如目の前に現れた『ルーク』を、回し蹴りで粉々に粉碎してススムは返事を返す。

その後、入り口で預けた武装を回収して殲滅戦を行うが、エリーはパーティの時よりも戦闘の時の方が良い笑顔をしていたのでススムは微妙に凹んでしまった。

「こういうパーティならば、私としても楽しみなのですが……」

「いや、コレあくまでアクシデントだから」

「そうですか……」

しゅーんと残念そうになったエリーを見て、萌えたバカ一名。

その後、パーティ会場を後にした二人はパルミアを出てヴェルニスを目指して歩み始めたのだが、3時間ほど歩き、死者の洞窟に程近い場所でそいつらとであった。

「おうおう、俺達や盗賊団『クリムゾンディーパー』だ！荷物とそこのネーチャン置いていきや、いかしといてやるぜ！」

盗賊の親分と思われる人相の悪い男が下卑た表情と、テンプレとも言える台詞を吐いて二人を部下に囲ませた。

「金蔓が向こうからやってくるなんて、ラッキーだな」

「ええ、所で、勿論ミナゴロシで良いんですね、旦那様？」

「当然だ。斬って解体<sup>バラ</sup>して燃やして凍らせて、ティリスの大地に還してやろうじゃないか」

この場合、不幸なのは明らかに盗賊団だった。

「パルミアの剣鬼、ススム」

「その妻、パルミアの首狩妃エリー」

「<sup>ティリス</sup>社会のゴミを殲滅する！」

「応！！」

敢えて言おう、ティリスの盗賊団は全体的に見てもここ最近力をつけ始め、一般の冒険者でも危ない存在となりつつあった。

そして、ススム達を襲った盗賊団は、それなりに名前が売れ始めた危険な盗賊団でもあったのだ。

だが、その盗賊団も気がつけば一瞬で大打撃を受けていた。

「加減無用！全ての敵を駆逐するぞ！！」

ススムの言葉を受けたエリーは、不自然なほど体に力が溢れるのを感じた。

ついでに体の芯から炎で燃え盛るように熱くなってきた。

そして、思ったのだ。

「（これが噂に聞く『愛の力』と言うものかっ！？物語だけの架空の力と思ったが……まさか実在するとは！）——是非もなし！！」

愛用の大鎌を振るう度に、ミスリルの翠銀の軌跡と電撃が迸り、盗賊を斬り抉り、首を刎ね飛ばし、感電死させる。

「こ、この化け物女があ！」

「ぐっ！？」

背後からの斧による一撃。

それはエリーの肩に食い込むような一撃であつたが……。

「こ、コイツ一瞬で再生しやがつた？！」

「私の背後に立つんじゃないなああい！！」

鎌の刃を下から掬い上げる様に振り上げ、盗賊の腹に突き刺し、持ち上げ、一瞬で軀と化したそれを無造作に放り投げる。

「貴様等に、私と戦う資格はぬあああああい！！」

エリーの咆哮に、盗賊団のみならず、ススムも少しびびる。

そしてエリーはそれだけに留まらず、盗賊の親分との距離を一気に詰め、紫電を帯びた大鎌を振るう。

「死ぬか！」

袈裟切りに切り伏せ、胴を斜めに切り裂き。

「消えるかあ！」



ダウンは許さんとばかりに逆袈裟に切り上げ。

「土下座してでも生き延びるかっ?！」

首を掴んで地面に叩きつけた。

言うまでもないが、この段階で既に盗賊は死んでいる上に、ススムが地味に活躍していたお陰で壊滅状態だ。

今にもぶるああああ!とか叫びだしそうなエリーだが、不適に微笑んでこういうのみだった。

「今日の私は淑女的よ。運が良かったわね」

普段との差はミンチ死体が多いか少ないか程度だが、細かい所は気にしてはいけない。

そうして戦利品の一部をパルミアに戻って売り払い、残りの戦利品、主に交易品をポート・カプールで売ろう、と言うことになり二人は改めてヴェルニース、ポート・カプールの順に歩み始めた。

「そういや、エリーって盗賊相手だと特に凄いテンションになるよなあ」

「ええ……少々。幼き日の恨み辛みの八つ当たりと申しましようか……。盗賊団を名乗るものたちを見ると、どうしても完膚なきまでに誇りも生命も尊厳も、踏みにじらなければ気がすまなくなってしまうのです」

エリーは最初は少し躊躇って、最後の方はイイ笑顔でそう言った。言い切った。

元々戦闘狂だったうえに恨みと愛の力（ススムの『鼓舞』）でパワ

ーアップしたと言うのもあって、今回は余計にテンションが凄かったのだ。

パルミアの宿屋で朝までフィーバーし続けたぐらいにエリーは絶好調だった。

おかげでススムが一度、ベッドの上で寝ているのに過労死しかけたのだが、役得なので気にしたら負けだ。

二人はポート・カプールに向かって歩んでいたが、やはり言うか寄り道はきちんとしていた。

勿論、寄り道した先はネフィアだ。

『闇の塔』と呼ばれる規模の石動判定で中級のネフィアであり、二人で向かうには丁度いい感じの難易度だった。

拾える物は大した物が無かったが、腕試しには丁度良いだろう、と言える程度だ。

そして、『闇の塔』のボスは、何を間違ったのか、カタツムリだった。

無論、苦戦する事はないが、強いて言うならカタツムリの癖に生意気だ！と思える程度には耐久力があり、一撃で倒す事は出来なかった。

しかし、エリーは十分に動き、戦えた事に満足して機嫌が良さそうだった。

「(うーん、流石俺の奥さん。バトルマニアだねえ、盗賊の時ほどではないにしろトランスしちゃうし……)さて、荷物はヴェルニースの倉庫に預けて、今度こそポート・カプールに行こうか」

「はい、旦那様♪」

なお、ネフィアでの拾得物は後日、店番が板についたウエンディが回収し、そこそこの値段で売り払った。

ポート・カプールへと向かう途中に、二人は商人を見つけた。

正確にはまるでドラゴンのブレスでも食らったかのように吹き飛ばされ、燃え尽きた商人の遺体の残骸と荷物の残骸だ。

荷物のほうはキツチリと燃え尽きており、火事場泥棒も出来そうに無い有様だ。

「コレは酷いな……ドレイク程度の火力には思えない被害だけど」

「……少なくともドラゴン級の火力、ですね。ただ、この辺りではドラゴンは出ない筈なのですが」

仮に、この辺りでドラゴンが出るとすれば、ネフィアから出てきたと言う事になるだろうが、ネフィアのモンスターは基本的に外に出現する事は少ない。

それは特に強いモンスターがその傾向にある。

最も、それが何故なのかと言う点になると誰にもわからない。

眉唾な噂なら幾つか例がある。

曰く、何らかの結界が張られている。

曰く、ただの縄張り意識である。

曰く、ネフィアを真に統率している何らかの存在の意思である。

「だとすると、ネフィア以外の野生……というには難がありますが、

そういうモンスターでしょうか？」

「可能性はあるな。ここから一番近いのは……ダルフィか」

この時点でススムの選択肢から『関与らない』という選択肢は消えた。

それも当然だろう。

ススムはコレで家族を大事に思っている人間だ。

盗賊等を含め、後に家族やその周囲に災いを齎しかねない相手を見逃して、後で後悔をしたくないのだ。

エリーも、ススムの気質をキツチリと把握しているので反対はしない。

寧ろ、戦う場が増える可能性を考慮し、今から戦意が上がり始めていた。

「少々寄り道ですが、行けますか？」

「ああ、行こうか」

そうしてダルフィに向かい、二人が直行したのは酒場だった。

これは非常に単純な話だが、このご時勢と時代で、人が集まりくだを巻くのは酒場や宿屋、商店、ギルドや囲碁端などの人口が集まりやすい場所だ。

そして、情報が欲しければ、そこに行けば良いのだ。

酒場に入ると、バンダナをしたハイティーンの水色の髪をしたラフな格好の少女がススムに近寄ってくる。

「ススムじゃない、最近こっちに来ることがトンとなかったのに……この時期に来るなんて、アンタも運が悪いね。しかも、女連れ？」  
「久し振りだな。こっちは俺の奥さんのエリーだ。エリー、こっちは……って、痛い、脇を鎌の柄で殴るなって！そんな目を見るな、

コイツは友人だよ。一応」

エリーを紹介しようとした所で、エリーはススムが目の前の少女（美少女といって間違いではない）と知り合いという事を気に入らず、嫉妬して鎌の柄でわき腹を突いていた。

目も最近では見せなかった、死んだ魚の目……といった感情に感情が一切見えず、ただ無表情でどすどすと突いている。

「あっはっは、奥さん。アタシはソイツとはただの友人だよ。それにだ、アタシは男よりも爆弾コレが恋人なんだ、そいつに脇目を振る気はないね」

そう言って取り出すのはやや大きい爆弾。

だが、それこそ知る人ぞ知るパルミアの『エイリアン事件』の最後で使用された爆弾と同系列の、強力な爆弾だ。

ススムはソレを見ぞんざいに扱ってみせる様子に顔を赤くしたが、お構い無しに自己紹介を始める。

「ノエルよ。見ての通り、爆弾が趣味。少しばかり値が張る爆弾を売ってるわ」

「威力に関しては洒落にならないもんだ、とだけ言っておく。俺も危うく消し飛びかけたしな……タイマーのカウント、あれ短すぎねえか？」

さりげなく、爆弾の威力を口にしつつ苦情を言うススムだが、ノエルは特に気にした風でもなく返答する。

「あら、転移魔法テレポートでも使ってさっさと爆発圏外に脱出すればいいだけ出し、十分じゃない？」

「転移系の魔法は脱出魔法エスケープと帰還魔法リターンは発動までのタイムラグがあ

るし、それ以外は基本的にどこに転移するかランダムだ、そこまで当てにならないだろ」

「ま、そこをどうにかするのも実力でしょ。正直いちいち設定変えるのも面倒だから自分で何とかしてよ」

という具合に取り付く島はなかった。

「つとと、思わず爆弾の話をしちゃったけど、本題そこじゃなかった。アンタ達、火炎竜ヴェスダって知ってる？」

「いや、知らないな」

「んじゃ、教えてあげるわ。あ、マスター！高い酒持ってきて！コイツの奢りでね！」

「……はあ、加減だけはよろしく頼むよ」

「はいはい♪」

ノエルが語った内容は、ノースティリスの西部に住むものなら、それとなく知っているらしい話だった。

火炎竜ヴェスダ、このダルフィの北の高原地帯にある洞窟に住まう、かなり強力な火炎のブレスを吐き出す強力なモンスターだ。

見た目は炎が巨大な鳥の形をしていて、華麗に燃え盛る3本の尾を持つらしい。

滅多に人前に姿を現すことはないが、自分のテリトリーを荒らしたものがいると、報復としてこちら一帯を暴れまわっていくらしい。

なお、知られている事としてはヴェスダは光物を好み、巣には金銀財宝が溢れているとかいないとか。

今回のヴェスダの怒りも、その財宝を狙った冒険者くずれのせいだろうと言うのがおおよその見解だ。

「まったく、自分の実力を理解してない馬鹿のせいで苦勞するわよ、本当に」

「ははは。まあ愚痴っても仕方ないだろ。しかし火炎竜、ねえ……」  
ススムは相手が強力な火炎を扱うという事と強い竜という事実を知った上で、自分で倒せるか、ということ考え始める。

「旦那様、行きますか？」

「……そうだな、俺とエリーならやってやれない事もないだろ。行くか」

「わかりました。幸いにも武具によって火炎に対する耐性もありますし、何とかかなりそうですね」

#### 竜窟 第4層

竜窟に潜むモンスター達は、ススムとエリーが考えていた程強くはなかった。

二人の想定では、それこそドラゴン種が群れとなり、更には上位種のゴーレムやクトゥルフなモンスターも多発する事を想定していたのだ。

そう考えている辺り、ススムも大分厄介なネフィアに潜る事が多くなっただけだ。

「旦那様、この辺りはファイアハウンドの数が多いです。……一匹一匹のプレスはともかく、多数にやられると流石に厳しいです」  
「確かに。いくら準備してきたとはいえ、数が多いと面倒だな」

実際問題、武具の魔力でファイアハウンドのプレスの大半を無効化できるが、エリーの耐性はススムよりやや下回り、段々と炎や熱により、鎧の下には火傷が増え始めていた。

これはススムの方は、軽い火傷ぐらいは負っても数分もすれば治っ

てしまう位に治癒能力があるので、気にする程でもなかった。  
だからこそ、言われてようやくエリーがダメージを負い始めている  
ことに気づいたのだ。

「少し休憩するか。この後には大物が待っているし、準備は万全に  
しなきゃな」

「わかりました。……ありがとうございます、旦那様」

「気にすんなって、それより、薬、きちんと飲んで置けよ」

「時々思うのですが、なんで飲むのも塗ったり被ったりしても効果  
はあまり変わらないんでしょう？」

エリーは俺の荷物袋から取り出されたポーションを受け取り、グイ  
ッと飲み干す。

基本的にこれらの薬品は小瓶程度のサイズなので一息に飲み干せる  
のが特徴だ。

「さあ？まあ細かい事は気にしてもしょうがないぞ。俺、前にそれ  
考えてたら夜も眠れなかった。だからなんかこう、不思議な力がが  
んばってるんだな、で納得する事にしたんだ」

その後、エリーは元素保護のポーションも飲んでから火炎竜ヴェス  
ダのところ二人は向かう。

しかし、ここにきてまさかのファイアハウンド雑魚の群れ、そして奥には火炎竜ヴェ  
スダ。

「幾らなんでも数が多いな。大丈夫か、エリー？」

「この程度をこなせなくて、旦那様の妻を名乗るつもりはありません  
ん」

そう言って握りこまれた鎌は、エリーの気概を現すかのようにバチ



バチとスパークしていた。

「んじゃ、先ずはじめにファイアハウンドの殲滅だ。ヴェスダも気になるけど、横合いから邪魔されるほうが面倒だ」

「心得ました」

そうして何時もの様に魔法で身体強化し、加速の魔法杖で加速した所で、炎の津波に飲み込まれていた。

なんて事はない、ファイアハウンドの群れが一斉にブレスを吐いただけだ。

だが、それが面倒で、視界一面炎しか見えない状態なのだ。

「鬱陶しいぞ、てめえら!!」

津波とも取れる炎のブレスの中を一足飛びに踏み込み、大剣を無尽に振るう。

それだけでファイアハウンドは数匹纏めてナマス切りになるが、数が多いので殲滅にはまだ遠い。

「セツ！ハアツ！！」

一方のエリーも炎に炙られながらも、一匹ずつ、効率的に大鎌で首を刎ね続けていた。

「治癒の雨よ、我等を癒せ！」

ススムが叫ぶように呪文を発動させると、心地よい冷たさの雨がススムとエリーに降り注ぎ、傷を癒す。

「エリー、戦いはまだまだこれからが本番だ！やれるな!？」

「当然っ！」

そのままファイアハウンドとの戦いが続行するかとも思ったが、そうは行かないとばかりに今度は火炎竜ヴェスダが動き始める。ヴェスダが始めに目をつけたのは、ススム……ではなく、エリーだった。

「なっ!? くっ!! 番狂わせだが、それもまた戦いの常! 旦那様、ファイアハウンドはお任せします!!」

「な、エリー!?!」

エリーは嬉々としてヴェスダに向かい鎌を振るい、ヴェスダもまた火炎の翼をはためかせて炎の雨とも取れる火炎弾を放ちエリーを攻撃し、時には足の鋭い爪で、体当たりじみた攻撃なども交えて攻撃を行う。

それらはエリーの身を確実に焦がし、裂きながら追い詰めた。

「援護するぞ! 貫け、アイスボルト!!」

ヴェスダが調子に乗り始めたと感じたススムは、ヴェスダの左翼にアイスボルトを叩き込んだ。

「エリー、もう少ししたらそっちに向かえる、あと少し頼むぞ!」

「はいっ!」

ススムからの応援を受け、自らを再び鼓舞させていると何時だかの様に体中が熱を持ち、今まで以上の力が漲るエリー。

「ふふふ、力が漲ってきたわ……。今の私は、例え巨人であろうと止められないわっ!!」

「クエー!？」

文字通り見違える動きをし始めたエリーに、敵対していたヴェスダは度肝を抜かれた。

しかし、ヴェスダとて長い事竜窟の主としてやってきた存在だ、的確に必殺の一撃でもってエリーの胴を足の爪で引き裂いた……のだが、1秒にも満たない時間で明らかなまでに致命傷だった一撃は無かった事にされたが如く、傷が一気に修復された。

更に、先ほどとは違う威力で大鎌が振るわれ、ヴェスダの胴を大きく引き裂き、灼熱の鮮血とともに内臓がこぼれている。

だが、それでもヴェスダはエリーに向かい、燃やしつくさんとばかりに火炎を放った。

しかし、それすらも最早怖くないとばかりにあえて突っ込む。

無論、エリーは痛烈なダメージを受ける。

肉が焼け爛れ、炭化さえもした箇所がある。

だが、それらはすべて瞬時に修復された。

「悪いが、今の私は旦那様の愛に満たされている。故に、貴様には万分の一の勝ち目も無い!!」

「クエエエエエエ!!」

叫び踊りかかろうとするが、ヴェスダの周囲に突如魔力で構築された強烈な粘性を持つ蜘蛛の糸がばら撒かれ、動きを制限する。

「俺の事を忘れてもらっちゃ困るな。といってもエリー一人でどうにかできたみたいだけど」

「そんな事はありません、旦那様が居てくださるからこそです」

足止めをされたヴェスダに、二人は同時に切りかかる。

ミストファイナー

「霧払い！」

「その首級クビもらった！」

ススムの相手の守りさえも無視して引き裂く二閃と、エリーの首を刈り取る一閃によって。

ブシュっという音と、ゴロンという肉片が落ちる音、そして血が噴水のように二人に降り注ぐ……。

「あち！？あちちちちち！？！」

「ひゃあああ！？！」

灼熱の血をまともに浴びた二人は、思わず斬新すら忘れてあわててヴェスダの死骸から離れたのだった。  
なんともしまらない終局である。

おまけ

戦い終えた二人は、ヴェスダが持つという財宝を見つけた。

それはなぜか宝箱に入っていたりしたが、細かいところは気にしない。

宝箱は幾つかあり、今、最後の一つの開錠を試みていたのだが。

「旦那様、開きそうですか？」

「うーん……後ちょっと……」

パキ

「「あ」」

手持ちのロックピック、最後の一つが切ない音を立てて折れてしまった。

その後、結局二人は一度町に戻り、ロックピックを購入して改めてこの場に戻ってきて宝を入手するのだった。

「せめて、宝箱が後200軽ければ持てるんだけどな」

「流石旦那様です」

その『流石』が本当にほめ言葉かどうかは、エリーのみが知る。

## Lv37..旅行者と奥さんの旅行 ファンタジーのお約束 (後書き)

と、言う事でファンタジーのお約束『ドラゴン退治』、ここに完了！  
 ヴェスタ戦では実際にエリーが殆どヴェスタの相手をして、自分は  
 ファイアハウンドをちまちまと。

時々治癒の雨で回復させたり、ハウンドごとアイスボルトで援護し  
 たりとしましたが、ほぼエリーだけで押せてました。

これで他のメンバーが居たら、本当にいじめにしかないな。

次回、Elona第一部の最終回となります！

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv36 ↓ Lv37

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力105 (96) ー ー

マナ 153 (153) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 158 (103) ー 10

名声 32238 ー 10000

カルマ 0 ー ー

現在値 前回比

筋力..87 (71) ー 5 (+3)

耐久..68 (55) ー 3 (+3)

|    |              |           |
|----|--------------|-----------|
| 器用 | .. 8 7 (5 8) | + 2 (+ 2) |
| 感覚 | .. 8 3 (6 7) | + 3 (+ 6) |
| 習得 | .. 7 4 (6 3) | + 2 (+ 2) |
| 意思 | .. 7 3 (4 3) | + 1 (+ 1) |
| 魔力 | .. 5 0 (3 7) | + 1 (+ 1) |
| 魅力 | .. 5 4 (3 4) | - 9 (+ 1) |

# 装備

頭 .. ★祝福された《賢者の兜》+ 3 [4, 1 5] : (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*, 魔法耐性\*, 幻惑耐性\*\*\*, 魔力+ 5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》+ 2 [0, 4] : (耐酸性, 不燃, 二刀流\*\*\*, 運勢+ 4, 筋力+ 4, 追加打撃\*\*\*\*\*)

背中 .. ☆祝福されたこの世ならざる外套『声のドラゴン』+ 2 [3 1, 2] : (耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+ 5)

胴体 .. ☆祝福された赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+ 3 [1 8, 4 5] : (耐酸性, 不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 意思+ 8, 生命力+ 3)

利手 .. ★祝福された《クレイモア》+ 3 (3 d 1 4 + 1 6) (1) : (耐酸性, 不燃, レア, 両手持ち適正, 筋力維持, 暗黒耐性\*, クリティカル\*\*\*\*\*, 完全貫通\*\*\*\*\*, 変異保護)

手 .. -

指 .. ★祝福された《パルミア・プライド》+ 2 [1 5, 5] : (耐酸性, 不燃, 詠唱\*, 暗黒耐性\*\*\*, 混沌耐性\*\*\*, 運勢+ 1 5, 速度+ 8, 魅力+ 1 2, 盗難防止)

指 .. 呻くルビナスノスピードリング+ 2 : (耐酸性, 不燃, 筋力維持, 速度+ 9, 生命力+ 3)

腕 .. ☆祝福された赤く染まった軽手袋『ドウルエオン』+ 3 (1 3, 0) [1 0, 9] : (不燃, 耐酸性, 魅力維持, 生命力+ 3,

浮遊，麻痺無効)

腰 .. 祝福された烈火の翼鳥鱗の腰当+2「9，8」∴(回避\*，  
火炎耐性\*\*\*，寄生回避)

足 .. ★祝福された《ダルIIイIIサリオン》+2「16，7」∴(耐酸性，不燃，レア，運勢維持，旅歩き\*\*，隠密\*，器用+6，呪い保護\*\*\*，MAP移動短縮\*\*)

遠隔.. ★祝福された《異形の森の弓》+3∴(耐酸性，不燃，レア，異次元の手「\*\*\*」，毒追加攻撃「\*\*\*」，感覚維持，器用維持，詠唱「\*」，毒耐性「\*\*\*」，器用+10)

矢 .. エメラルドアロー(1d11+1)(3)∴(耐酸性，不燃，神経耐性\*\*)

装備重量.. 27.9s(中装備)

命中修正.. 13

ダメージ修正.. 4

DV/PV.. 107/173

### ◆スキルと特殊能力

戦術 Lv35.376 ↓ Lv37.118

重量挙げ Lv40.945 ↓ Lv41.887

両手持ち Lv28.522 ↓ Lv30.263

治癒 Lv29.830 ↓ Lv30.574

採掘 Lv13.193 ↓ Lv13.193

盾 Lv16.456

重装備 Lv6.271

中装備 Lv14.070 ↓ Lv14.424

鍵開け Lv22.785 ↓ Lv23.415

二刀流 Lv18.955

軽装備 Lv7.485

回避 Lv32.119 ↓ Lv33.102



|        |          |       |   |          |       |
|--------|----------|-------|---|----------|-------|
| 罫解体    | L v 1.   | 9 8 7 | ↓ | L v 2.   | 3 3 1 |
| 裁縫     | L v 1.   | 1 0 0 | ↓ | L v 1.   | 1 0 0 |
| 宝石細工   | L v 2.   | 4 1 7 |   |          |       |
| 窃盗     | L v 1.   | 7 6 5 |   |          |       |
| 隠密     | L v 4 0. | 8 0 1 | ↓ | L v 4 1. | 8 3 7 |
| 探知     | L v 8.   | 9 6 8 | ↓ | L v 9.   | 2 1 9 |
| 自然鑑定   | L v 2 1. | 8 4 4 | ↓ | L v 2 2. | 4 5 6 |
| 釣り     | L v 9.   | 0 7 1 |   |          |       |
| 見切り    | L v 3 1. | 6 8 6 | ↓ | L v 3 2. | 6 8 0 |
| 射撃     | L v 1 2. | 4 1 1 | ↓ | L v 1 3. | 6 6 3 |
| 読書     | L v 3 3. | 6 1 9 | ↓ | L v 3 5. | 9 5 7 |
| 遺伝子学   | L v 2 3. | 2 5 4 | ↓ | L v 2 3. | 3 9 4 |
| 解剖学    | L v 1 5. | 4 3 0 | ↓ | L v 1 6. | 1 0 1 |
| 暗記     | L v 1 8. | 8 1 7 | ↓ | L v 2 0. | 2 6 3 |
| 栽培     | L v 1 2. | 8 3 5 | ↓ | L v 1 3. | 0 3 9 |
| 料理     | L v 1 0. | 9 3 7 | ↓ | L v 1 1. | 4 1 6 |
| 魔力の限界  | L v 1.   | 6 6 8 | ↓ | L v 1.   | 8 5 5 |
| 信仰     | L v 3 4. | 2 1 3 | ↓ | L v 3 4. | 8 8 3 |
| 旅歩き    | L v 2 4. | 7 7 0 | ↓ | L v 2 5. | 0 7 9 |
| 乗馬     | L v 4.   | 5 6 4 |   |          |       |
| 瞑想     | L v 2 6. | 8 9 7 | ↓ | L v 2 7. | 7 9 8 |
| 詠唱     | L v 2 4. | 5 4 8 | ↓ | L v 2 5. | 8     |
| 魔道具    | L v 1 8. | 6 7 6 | ↓ | L v 1 8. | 8 4 2 |
| 交渉     | L v 3 7. | 9 1 2 | ↓ | L v 3 9. | 2 8 8 |
| 投資     | L v 2 2. | 2 1 1 | ↓ | L v 2 2. | 6 9 2 |
| 演奏     | L v 3 9. | 8 1 4 | ↓ | L v 4 0. | 5 9 9 |
| ◆武器の専門 |          |       |   |          |       |
| 長剣     | L v 3 1. | 6 1 7 | ↓ | L v 3 3. | 4 6 8 |
| 斧      | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |

|       |                     |
|-------|---------------------|
| 格闘    | Lv12・739            |
| 鎌     | Lv19・976            |
| 鈍器    | Lv9・272             |
| 槍     | Lv13・676            |
| 杖     | Lv14・152            |
| 短剣    | Lv10・599            |
| 弓     | Lv20・972 ↓ Lv21・416 |
| クロスボウ | Lv4・000             |
| 投擲    | Lv10・675            |
| 銃器    | Lv8・671             |

◆耐性と抵抗力

|      |         |       |
|------|---------|-------|
| 火炎耐性 | 素晴らしい耐性 | ***** |
| 冷氣耐性 | 普通の耐性   | **    |
| 電撃耐性 | 弱い耐性    | **    |
| 暗黒耐性 | 普通の耐性   | ***   |
| 幻惑耐性 | 素晴らしい耐性 | ***   |
| 毒耐性  | 素晴らしい耐性 | ***   |
| 地獄耐性 | 耐性なし    |       |
| 音耐性  | 耐性なし    |       |
| 神経耐性 | 弱い耐性    | **    |
| 混沌耐性 | 普通の耐性   | ***   |
| 魔法耐性 | 普通の耐性   | ***   |

◆特徴と体質

「フィート」 貴方は類稀な幸運の持ち主だ

「フィート」 貴方は猫よりも速い「速度+10」

「フィート」 貴方の防御は鋼のように固い「Protection Value+15」

「フィート」 貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」 貴方は我慢強い「耐久+3」

「フィート」貴方は猛烈な信者だ「信仰＋8」  
「変異」あなたは鉄のような皮膚を持っている「PV＋9」  
「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用＋3」  
「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」  
「変異」あなたの腕は筋肉の塊だ「筋力＋9」  
「変異」あなたの声は全てを魅了する「魅力＋10」  
「変異」あなたの脳は完璧な機械だ「暗記＋8」  
「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」  
「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」  
「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」  
「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」  
「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」  
「変異」あなたは鷹の目をしている「感覚＋10」  
「フィート」あなたは税金の計算にとっても強い「税金15%減」  
「フィート」あなたは仲間を一時的に強くできる  
「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い  
「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限－20」  
「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する  
あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする  
あなたの装備は混乱を無効にする  
あなたの装備は追加打撃の機会を増やす  
あなたの装備はクリティカルヒットの機会を増やす  
あなたの装備は完全貫通攻撃発動の機会を増やす  
あなたの装備は変異から保護する  
あなたの装備はアイテムを盗まれなくする  
あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ  
あなたの装備は呪いの言葉から保護する  
あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）

種族..ローラン

性別..女性

職業..戦士

Lv21 ↓ Lv22

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) +3 (0)

マナ 80 (80) - -

狂気度 0 - -

速度 110 (96) - -

現在値 前回比

筋力..62 (38) +16 (+1)

耐久..61 (49) - -

器用..39 (31) +11 (+10)

感覚..23 (20) +15 (+10)

習得..29 (28) +17 (+10)

意思..30 (32) +10 (0)

魔力..37 (43) +15 (0)

魅力..42 (34) - -

## EP1 Final…旅行者と 深遠に潜む《常闇の眼》と……

2258日目

遂に、レシマスの最奥と思われる場所に挑む準備ができた。

正直な話、万全を期したつもりだが、最奥に潜むという遥か昔のレシマス王家の王弟ゼーム。

彼は魔術師として名高い存在であったという噂だ。

もし、情報通りに生き延びているとすれば。

強大にすぎる敵である可能性が否定できない。

自身が不死の存在になったからこそ判るのだけど、それはつまり、腕を磨く時間が永久にあるという事だ。

まして、魔物の巣窟ともいえたレシマスの最奥だ、洒落に成らないほど強くてもおかしい所は何も無い。

だから、今回に限っては全員で挑む事にした。

本音を言えば、俺とネビネイルだけで挑もうとしたのだが、エリーを始め、ウレルやチヨロナに言われたのだ。

「何度も挑める、という気持ちで挑めば勝てるものも勝てなくなります」

「それに、相手も負けたくないから必死になってくるんだよ？」

「おまけに、相手は永き時を生きた魔術師だと聞いたわ、だとすれば二人だけで行った場合、本当に勝ち目があるの？」

おまけに、ウエンディまでも店番を放棄して戦支度を万端に整えて待機していたのだ。

こうなってはもう仕方ない。

それに結局の所、みんなは仲間として、家族として俺とネビネイル

を案じているからこそここに居るのだ。

だから、俺は心に決めた。

[illegible]

レシマス第44層

嘗て、一度ススム達はこの扉の前に立ったことがある。  
その時は酷い悪寒を感じ、そして今の自分では敵わない何かが居る、  
そう感じて一度撤退したのだ。

「旦那様、準備はよろしいですね？」

「主殿、引き返すなら今ですぞ？」

だから今、行くぞ」

「パーツと終わらせて、早くアリスの所に戻ろうね！」

「そうそう、あの娘、誰に似たのか凄く寂しがり屋だもんねえ……」  
「（コクコク）」

ウエンディも二人の言葉に頷いて賛意を示す。

「それじゃあ、行くぞ！」

ススムが嚴重に封印された扉の前に立つと、三つの魔石が鈍い光を放ち、重い扉が金属の擦れる悲鳴のような音を上げながらゆっくりと開いた。

その先に足を進めると、一つの広間に出た。

その奥から、男の声が響く。

「ここまで辿り着くとはな……」

目を凝らしてようやく、その姿を確認する。

所々擦り切れた深紅のローブを纏った、土気色の肌をした男。

圧倒的なプレッシャーを放つそれは、ただの人間とは思えない力強さを感じさせる。

「どうやら《混沌》は、自ら創りしネフィアの安定さえも望まぬらしい」

男の言葉は全てがススムに向けられていた。

「しかし、私とてここで死ぬつもりなどないのだ……かかってくるがよい！ 異界の者よ！ 我が名はゼーム！ この名前、しかと魂に刻み

込むがよい!!」

「いくぞ、みんな!! 最初から全力だ!!」

ススムが全員を短く、しかし強い意志を持った声で鼓舞すると、それぞれの体に強い活力が漲ってくる。

これはエリーがいう所の『愛の力』というやつだ。

まあ、ススムからの夫婦愛や兄妹愛、友愛と考えればあながち間違いでもないだろう。

「防衛者ネビネイル、推して参りますぞ!」

「援護するわ、ネビネイル!」

「……!」

ネビネイルが先陣を切ってゼームに踊りかかるも、ゼームはそれを手につく大鎌で難なくあしらい、反撃しようとする。

「させない!」

そこに割り込んでセズバルドが火炎瓶を投擲するも、それをゼームはマントで防ぎ、払う。

マントは燃える事無く、火炎瓶の中身の大半は周囲の床に撒かれる結果に終わった。

だが、これで終わりということは勿論無い。

「これが通じれば御の字だ!」

そういつてススムが振るったのは沈黙の魔法杖だ。沈黙をもたらすきりがゼームを包み込む。

「……!」



ゼームはすぐさま抵抗を試みるも、すぐに破る事は敵わない。その隙を縫って、ウレルが聖なる槍で突きを見舞うが、意識を切り替えたゼームがすぐに対処して槍を打ち払い、逆にウレルに大鎌で斬りつける。

「きゃあ!？」

防具すらも切り裂く勢いで振るわれたそれは、鎧の一部を破壊し、ウレルの肩の肉をえぐっていた。

だが、その攻撃の隙を縫ってウエンディがショットガンを乱射してゼームを牽制し、さらに死角からススムの大剣、エリーとチヨロナの大鎌、による攻撃が入る。

しかし、チヨロナの攻撃は無念にも大した打撃にもならず、エリーの攻撃はわずかに防具に傷をつけるにとどまる。

唯一、ススムの攻撃が目に見えた手傷をゼームに負わせることに成功した。

ゼームはススムが手に持つクレイモアを見てなるほど、と理解を示す。

クレイモアは実に粗野で、そしてシンプルな武器だ。

そして下手な属性など追加せず唯一つに特化している。

それは、相手の防御を貫ぬき、会心の一撃を持って敵を討つ事だ。

「ふっくっく、まさか手傷を負わされるとはな……少々遊びが過ぎたか」

「もう破ったのか?! もう一度……!」

もう一度沈黙状態にしてやろうとおもって魔法杖を握ろうとしたススムだが、その前にゼームは行動を起こした。

「混沌の渦に飲まれるがよい！」

その言葉とともに、爆音とともに何かが炸裂した。それは音であり衝撃であり、形容しがたい何かだ。それは一気に全員の体力を奪ったが、それだけで倒れるほどススム達はヤワではなかった。

「怯むな！魔法を詠唱する隙を与えないように絶え間なくしかけるぞ！！」

「よかろう！今代の戦士達よ、全力で来るがよい、そして絶望するがよい！圧倒的な力の差に！！」

そう叫んだ直度、ススムは大剣を振るいながらこれは何の悪夢だと心の片隅でつぶやいた。

混沌の渦が連続で巻き起こされ、まずチョコロナが倒れた、一応息はあるようだが、戦闘不能で立ち上がるのは不可能だろう。

更に、ゼームはモンスターまで召還しだし、それに意識を割かれたウレルが大鎌で胴を薙ぎ払われ、上半身と下半身が真っ二つになった。

だが、それは直後にネビネイルがレイハンドを使用したためにギリギリのラインで絶命は避けられた。

しかし、その直後に今度はネビネイルが魔力弾で吹き飛ばされてしまう。

「くっ！やはり強い……想定以上、ですね」

「だが、奴に攻撃は通っている！諦めるな！」

ススムは自身も挫けそうになりながらも、それでも叱咤する。自分が背負う、すべてを思えば、倒れる事などできないのだから、と。

剣戟を交え、幾合も刃を交える。

エリーとセズバルドもまたそれを援護しようとするが、同時に襲い掛かるモンスターの対処に追われる。

「くっそ!!」

「ふっふっふ、焦っているな？未熟者どもがっ!!」

言葉と同時に再び混沌の渦がススム達を飲み込み、そしてモンスターごとその相手をしていたエリー、セズバルド、そしてウレルが同時に倒れる。

唯一、ススムは自身を魔法で治療し、身体能力を強化し、聖なる盾で減衰させているからこそ辛うじて生き残る。

「しぶといな、しかし、それも何時まで持つか!？」

「いってろ!俺は、俺たちには諦められない理由が幾つもあるんだ!」

「ならば我を超える力を示せ!」

「おあああああ!!!!」

幾度も幾度も刃を交える。

時間も何もかもを忘れ、ただ、ひたすらに、愚直に。

時にススムの腕が裂かれては魔法で即座に修復し、ゼームの胴が大剣で貫かれてはこちらも魔法で修復し。

ゼームが混沌の渦を放てば、進は聖なる盾で防御して反撃する。

「来たれ、魔物どもよ!」

「しゃらくせえ!」

魔物が呼び出され、ススムを包围すればゼームごと近くに居た魔物

を薙ぎ払う。

地力で言えば、実力の差はややゼームが上手だった。

だが、生き汚さに限れば驚く事にススムが上手だった。

ススムの中では、もう大分前からずっとレッドアラームが点灯して何時死んでもおかしくないと理性が告げていた。

それは経験則からくるものだった。

だが、ススムはそれでも生きて戦っていた。

あるいは死にながら戦っていたのかもしれない。

しかし、それはゼームも同じだ。

「ふ、くくく！ ははははは！ ！ ！ まさか、まさかまさかまさか！ この我が、こうも攻めきれぬとはなあ！ ！」

「らあああああ！ ！」

「楽しいぞ！ これほど心が踊るのは何時以来だろうなあ！ ！」

「あああああ！ ！」

ゼームは心底楽しそうに鎌を振るった。魔法を行使した。

だが、ススムはそれでも倒れない。

それどころか、隙を見ては回復し、大剣を振るった。

「ははは！ 化け物め！ まだ立つか！ まだ倒れぬか！ 」

「人の事言えるか、てめえ！ 」

お互いの獲物を振るいながら、二人は言葉を発する。

「くはははは！ やはり貴様は面白い！ 」

ゼームはススムがレシマスに初めて潜った時から目をつけ始めていた。

そして、彼を観察していた。

死んでも蘇る稀有な存在として、様々な喜悲劇を潜り抜けるオモシロイ存在として。

それは時に、もう一つの観察対象であったザナンの皇子とそれに関わる事柄よりも興味深い対象だった。

何れ、ススムが自身の前に来ることは明白だった。

何故なら、ススムの目的もまた《常闇の眼》なのだ。

様々な思惑の中に飲まれながら、圧倒的な脅威を前にしても何度でも立ち上がる姿は脅威であり、愚かであり、どこか眩しかった。

ゼームは嘗て、この場所に、自身の兄に封じられた。

もはや理由が何であったか、どうしてこうなったかなんて物は遠い記憶の彼方だ。

悠久の時の中で《常闇の眼》を通して知る情報だけが彼の慰みであり、総べてだった。

そして、始まりがあれば終わりがするように、二人の戦いの輪舞も、ゼームの悠久の時も終わりを告げた。

「でやあ！！！！」

「ぐぬっ！？馬鹿なっ……！！」

ススムの放った渾身の一撃が、ゼームの防御を弾き飛ばした上で胴を引き裂き、膝を屈し、そして横に倒れたのだった。

技でもなんでもない、ただの薙ぎ払いの一撃。

だが、それは確かにゼームに届き、そして勝負を決する一撃となったのだ。

ススムも、もはや立っているのがやっとで、ともすれば倒れ伏してしまってもおかしくないほどに消耗していた。

「我が最後は……このような物が相応しいか……。異界の者よ、最後の我侂だ、名を教えてくださいぬか？」

「……ススムだ。ススム・イスルギ」

「そうか……さらば、だ……貴様の……末が、私の様な暗き物でない事を願おう……」

ゼームはそれだけ言うと、静かに目を閉じた。

ススムはそれを見届け、そして腹のそこから咆哮を上げる。

「おお おおおお!!!」

勝った、そう思い、脱力してしまい膝をつこうとした瞬間。  
広間の奥にある、台座の方から声が聞こえた。

「お前が勝つことは」

それは段々と近づいてきた。

「決まっていた事なのだ……遅かれ早かれな」

部屋の空気が緊張し、端麗な容姿をした青年がススムの前に現れた。

「我々からすれば、複雑性の一面に過ぎないが、人間は運命と呼ぶのだろうか？」

ススムは直感的にそれが『敵』だと感じた。

そして立ち向かおうと思うものの、疲労と怪我、そして形容しがたい何かを感じて、足が震え、止めようとするが抑える事は難しかった。

華奢に見える幼顔の男の影は人の者ではない。

幼く見えるその瞳の奥に、ススムは得体の知れない力と闇を感じた。

「ネフィアの永遠の盟約に基づき」

青年は死体となったゼームを見た後、台座を指差し、皮肉に微笑む。

「この哀れな老人が守っていた物は、今からお前の物だ」

ススムは台座の上におかれている、絢爛な装飾の本を訝しげに見る。すると、青年は堪え切れないとばかりに芝居がかった口調でしゃべり始める。

「ああ、聡明なるレシマスの常闇の眼よ！新しい主は、どうやらお前の本当の価値を知らないようだぞ。…だが、心配しなくても良い。この男は、そこで死んでいる老人の様に、たまに本を開いては下界の嘘に満ちた歴史をあざ笑い、自己満足にふける以外の使い方を、きっと見つけてくれるだろう！フフ、クク…！」

青年は明らかに見下し、嘲った笑いを上げ、ススムに向き直る。

「さあこれ以上愚かな詮索の表情を続けて私を落胆させないでくれ。お前が眺めている本には、真実の歴史を刻み、過去の文明の歩みを記録する魔力が秘められていると知ったのなら」

「……」

男はやはり芝居がかった口調でしゃべり続ける。

「そう。この本に書かれている事は、全て偽りなき歴史。シエラ・テールの、そして過去の偉大なる文明の栄光と盛衰の軌跡が記されている。その価値を、態々説明する必要もあるまい？」

「なるほど、力強き者には意味が無く、力弱き者には意味がある……力強き者が常に歴史を操り、力なきものは歴史の真実を知らない。だからこそ、これは勝者の土台をひっくり返す価値があるというわけか」

ススムはかつて聴いた言葉を思い起こし、そして今青年が口にした言葉で要約合点がいった。

そして、女神ジュアが言っていた事を鑑みれば、エーテル病の治療法も、自身が元の世界に帰るためのヒントもこの中に記されている可能性があるのだろう。

「一つ警告しよう。台座から離れた時、それは魔力を失い、変哲の無い一冊の本と化するのだ。新たな歴史が刻まれる事は無く、正当性を証明するすべもなくなるだろう」

ススムが動こうとした気配を察して青年が口を開いた。

「本を所有する者はまた、偽りの歴史を動かす勢力から、自らの命を守る必要にも迫られるだろう。このアーティファクトにはそれだけの価値があろうという事だ。そしてお前には……エレアの風を聴く者と出会い、言葉を交じ合わせたお前には……それがどれほどの意味を持つ事か、理解していなくても……そうだな、少なくとも我々を楽しませてくれる様な使い方を期待しているよ」

青年はそこで一旦言葉を区切りにやりと笑って壁に寄りかかった。

「もちろん、本を外界に持ち出すかどうかはお前次第だ……少なくとも、選択という行為に私が予期できない偶然がある可能性を、お前が信じるのなら」

「……」



ススムは青年の言葉に少なからぬ動揺を覚えていた。

命を狙われる危険性……それは、自分たちならまだしも、娘のアリスを巻き込む可能性があった。

果たして、本当に良いのか？ 正解なのか？ 自分が選ぼうとしている選択に間違いは無いのか？

ぐるぐると脳裏を言葉が駆け巡る。

数秒なのか数分なのかわからない時間の間に、氷の瞳をした青年の姿は消えていた。

ススムは、深く深呼吸をして意を決する。

元より、答えは決まっている、今更迷う事などない。

不安を振り払い、ゆっくりと本に手を伸ばした…。

## Epilogue 《一つの冒険の終わりと、新たなる旅立ち》

シエラテール517年8月12日

ノースティリアに現れた石動進は、行き倒れていた所をヴィンデルの森の使者であるエレアの男女に救助され、そして乞食の洞窟から冒険を始めた。

彼は多くの人々と出会い、愛する家族を得て、戦友を得て、掛替えの無い多くのものを得た。

そして、自らの為に、愛する者の為に、見知らぬ誰かの為に2万5659の敵を切り殺した。

自らに降りかかる火の粉を振り払う為に、多くを犠牲にしてより多くを救う為に、自らの願いの為に。

そして彼は523年11月21日、僅か6年と3ヶ月9日という期間で多くの冒険者が志半ばで散っていったレシマスの制覇するという偉業を成し遂げた。

驚くべき事に、彼は誰一人として仲間を欠けさせる事なく戻ってきた。

無論、即座に入院する羽目になったが、誰一人として死者を出さずに戻ってきた彼は『英雄』として讃えられた。

これにより、彼の名はパルミアの剣鬼として、否、ネフィアを総べ、レシマスをも総べる者として名を馳せる事となった。

だが、同時に語られない事もあった。

彼がゼームを倒した後に出会った青年についてだ。

だから、青年の事について知っているのはススムのみだった。

彼の語った事全てを鵜呑みにするわけではないが、やはり不安は残った。

「力をつけよう。実力も、権力も、金も、全てを蓄えて有事に備えるぞ」

「わかりました、旦那様」

「心得ましたぞ、主殿！」

ススムは自らの願いの為に《常闇の眼》を開き、知識を得た。だが、望む知識全てを得たわけではなかった。

同時期に一つの朗報がイルヴァの民に届く。

ヴィンデールの森は失われた。

この朗報を聞いたイルヴァの民は口々にヴィンデールを討ったザナンの皇子を讃えた。

だが、世界は徐々に姿を変えていった。

各地で原因不明の病が流行り、作物は枯れ、乾いた風が吹き荒れた。

人々が異変に気付き始めた時、ザナンのヴァリウスは戦禍を生き延びた一人のエレアの女を議会の証言台に立たせた。

女は真実を語った。

異形の森と呼ばれたヴィンデルの森がイルヴァの自然の均衡を保ち、メシェーラの力を抑えていた事。

そして、森が失われた今、世界は長い時をかけて、人の住めない生態系に変わりつつある事。

イルヴァの民は証言に困惑した。

ある者は悲嘆にくれ、ある者は過ちを悔い、他の多くの者は、何時もそうであったように傍観者の態度をとった。

シエラ・テールに暗い時代が訪れた。

しかし、すべての希望が潰えたわけではない。

ヴァリウスは言った。

イルヴァにはもう一つの異形の森が残されている。

それは奇しくも、サイモアがまだ第二の皇子だった頃に研究の為に築いていたものだった。

嘗て、ヴィンデルへの攻撃を先導したザナンは分裂し、ヴァリウスを指導者に据えた共同体ロスリアが生まれた。

ロスリアは森を育み、国家を超え星への従事と平和を謳い、森に巡行する者は病から開放された。

約束の地ロスリアは、イルヴァの理想郷となるはずだった。

一三年後――

「うっぷ……荷物に紛れて運ばれると、どうしても居心地は最悪だな」

ススムは自らの望みを叶える為、そして嘗て救うと約束したパエルとリリイ母子に会う為に諸国を渡り歩き、ポート・カプールの商船に乗り込んでいた。

三年の時は、多くの変化をもたらした。

イルヴァの大地に残された傷は深く、その悲しみは決して癒えない様に思われた。

だが、時が経つに連れ、街は賑わいを取り戻し、人々は悪夢を忘れてしまったのか、あるいは忘れたように振舞っていた。

ロスリアは腐敗した。

救いを手にし、多くの人と富を招いたロスリアは、イエルスを始めとする国々の利権に翻弄されるようになった。

死に行く世界の中でさえ、イルヴァはロスリアの理想の元に結束する事は無く、各国の思惑と陰謀と、新たな紛争の気配に揺らめく暗雲が大地を覆った。

一方、イルヴァの混迷の影では、ススムと仲間たちの当ても無い旅が始まるうとしていた。

「まあ、所詮といっちゃなんだけど、人間は人間だ。地球の人間もイルヴァの人間も、こういう所はきつと変わらないな。だからこそ、俺は俺の為に動こう。仲間たちと一緒に、な」

レシマスの真実の書、《暗闇の瞳》。その写本を行い、その解読に多くの時間を費やしたススムは、エイス・テールとレム・イドの文明の狭間に誰にも知られていない空白の時代、ナーク・ドマールが存在した事を発見した。

それは世界に混沌と魔法の力がもたらされ、ネフィアに隠された謎の鍵を握る時代だった。

そして、ススムの望む異世界へと渡る魔法に関する知識があるとなれば、その時代に関連する可能性があることが判明した。

「おとーさん！みなとについたよー！」

「あーはいはい、直ぐ行くから慌てるなよアリス」

「アリス、慌てていたらこけてしまうわよ？」

娘に手を引っ張られ、ポート・カプールに降り立ったススムは、隣に立つ色香を匂わせる美女となった妻、エリーと共に懐かしいテイルスの冷たい風を頬に受け、ゆっくりと歩き始めた。

自らの望みの為の冒険と、嘗てレシマスの最奥で出会った青年が語った《ネフィアの永遠の盟約》(Eternal League of Nefia)を巡る、大いなる試練と冒険を予感しながら。ススムの冒険はまだまだ続く……。

Eternal League of Nefia で Fantasy life な日記 第一部…レシマスの秘宝 完

## EP1 Final..旅行者と 深遠に潜む《常闇の眼》と……(後書き)

遂にレシマスの秘宝編完結です！

長かった……単純に攻略するだけなら下手しなくても1ヶ月どころか2週間かからないだろうけど、文章化って結構大変だった。

色々と熱血バトル漫画風？っぽくなった戦いでしたが、まあ気にしないください、作風です。仕様です。(あ

ゼーム戦では、見事にススム以外は全滅しました。

混沌の渦ってば超鬼畜。みんな混沌の渦に飲み込まれて、ゲーム内時間で3時間か4時間ぐらいのタイミングでほぼ全滅。各種回復魔法や信仰スキルのジュアの祈りを覚えさせてなかったら先ず全滅でしたわ。

戦闘終盤は本文にもあったようにほぼガチの殴り合いでした。

時々ゼームが回復してきたりするので、ゲーム内時間でおよそ10時間、ぶっ通しでの殴り合いです。

勝つ直前でススムが餓死状態まで落ち込んで本気で焦ったりもしましたが、幸運にも一発で勝利をもぎ取れました。

あぶねー、超あぶねー。

これで全滅だったら第一部完できずに後2話ぐらい一部続いてたんじゃない？

さて、そんなわけで第一部が完結しましたが、実は第二部は大きな問題が立ちふさがっています。

Elona本編の第二部が、未だに存在しないのよね！

一応、オリジナルストーリー（何時もの日記）と、色々な方（主にElonaWikiで掲載）のシヨールームによるサイドストーリーがメインになると思われます。

後、ここいらで一つアンケートをとりたいと思います。

第二部で、アリスを仲間メンバーとして登場させるか否か、です。参加の場合はCNP Cとしての参加を想定してます。

CNP Cとしての能力はまだ全然考えてなかったりしますが……。

皆様のご意見ご感想、お待ちしております！

では、最後に第一部時最終ステータスは以下のとおりです！

なお、ススム以外のキャラはステータス変化が無かったので次回に持ち越しとなります。

名前…ススム（石動進）

種族…神の化身（現代日本人）

性別…男性

職業…観光客

信仰…癒しのジュア

Lv37

ステータス…カッコ内は元の値

現在値      前回比

生命力105      (96)      一一一

マナ      153      (153)      一一一

狂気度      0      一一一

速度      158      (103)      一10

名声      32238      一1000

カルマ      0      一一一

現在値      前回比

|    |        |       |   |   |
|----|--------|-------|---|---|
| 筋力 | .. 8 8 | (7 2) | — | — |
| 耐久 | .. 6 8 | (5 5) | — | — |
| 器用 | .. 8 7 | (5 8) | — | — |
| 感覚 | .. 8 3 | (6 7) | — | — |
| 習得 | .. 7 4 | (6 3) | — | — |
| 意思 | .. 7 4 | (4 4) | — | — |
| 魔力 | .. 5 0 | (3 7) | — | — |
| 魅力 | .. 5 4 | (3 4) | — | — |

## 装備

頭 .. ★祝福された《賢者の兜》+3 [4, 15] : (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》+2 [0, 4] : (耐酸性, 不燃, 二刀流\*\*\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*\*\*+)

背中 .. ☆祝福されたこの世ならざる外套『声のドラゴン』+2 [3 1, 2] : (耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+5)

胴体 .. ☆祝福された赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+3 [1 8, 4 5] : (耐酸性, 不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 意思+8, 生命力+3)

利手 .. ★祝福された《クレイモア》+3 (3d14+16) (1) : (耐酸性, 不燃, レア, 両手持ち適正, 筋力維持, 暗黒耐性\*, クリテイカル\*\*\*\*+, 完全貫通\*\*\*\*\*, 変異保護)

手 .. —

指 .. ★祝福された《パルミア・プライド》+2 [1 5, 5] : (耐酸性, 不燃, 詠唱\*, 暗黒耐性\*\*, 混沌耐性\*\*, 運勢+1 5, 速度+8, 魅力+1 2, 盗難防止)

指 .. 呻くルビナスノスピードリング+2 : (耐酸性, 不燃, 筋力





|       |                |                  |
|-------|----------------|------------------|
| 二刀流   | L v 1 8. 9 5 5 |                  |
| 軽装備   | L v 7. 4 8 5   |                  |
| 回避    | L v 3 3. 1 0 2 | ↓ L v 3 3. 2 4 5 |
| 罨解体   | L v 2. 3 3 1   |                  |
| 裁縫    | L v 1. 1 0 0   |                  |
| 宝石細工  | L v 2. 4 1 7   |                  |
| 窃盗    | L v 1. 7 6 5   |                  |
| 隠密    | L v 4 1. 8 3 7 | ↓ L v 4 1. 8 8 3 |
| 探知    | L v 9. 2 1 9   |                  |
| 自然鑑定  | L v 2 2. 4 5 6 |                  |
| 釣り    | L v 9. 0 7 1   |                  |
| 見切り   | L v 3 2. 6 8 0 | ↓ L v 3 2. 8 2 5 |
| 射撃    | L v 1 3. 6 6 3 | ↓ L v 1 3. 6 7 1 |
| 読書    | L v 3 5. 9 5 7 |                  |
| 遺伝子学  | L v 2 3. 3 9 4 |                  |
| 解剖学   | L v 1 6. 1 0 1 | ↓ L v 1 6. 1 2 9 |
| 暗記    | L v 2 0. 2 6 3 |                  |
| 栽培    | L v 1 3. 0 3 9 |                  |
| 料理    | L v 1 1. 4 1 6 |                  |
| 魔力の限界 | L v 1. 8 5 5   |                  |
| 信仰    | L v 3 4. 8 8 3 |                  |
| 旅歩き   | L v 2 5. 0 7 9 |                  |
| 乗馬    | L v 4. 5 6 4   |                  |
| 瞑想    | L v 2 7. 7 9 8 | ↓ L v 2 7. 8 2 1 |
| 詠唱    | L v 2 5. 8     | ↓ L v 2 5. 8 9 5 |
| 魔道具   | L v 1 8. 8 4 2 | ↓ L v 1 8. 8 8 8 |
| 交渉    | L v 3 9. 2 8 8 |                  |
| 投資    | L v 2 2. 6 9 2 |                  |
| 演奏    | L v 4 0. 5 9 9 |                  |

◆武器の専門

|       |                 |   |                 |
|-------|-----------------|---|-----------------|
| 長剣    | L v 3 3 . 4 6 8 | ↓ | L v 3 4 . 4 2 8 |
| 斧     | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 格闘    | L v 1 2 . 7 3 9 |   |                 |
| 鎌     | L v 1 9 . 9 7 6 |   |                 |
| 鈍器    | L v 9 . 2 7 2   |   |                 |
| 槍     | L v 1 3 . 6 7 6 |   |                 |
| 杖     | L v 1 4 . 1 5 2 |   |                 |
| 短剣    | L v 1 0 . 5 9 9 |   |                 |
| 弓     | L v 2 1 . 4 1 6 | ↓ | L v 2 1 . 4 2 1 |
| クロスボウ | L v 4 . 0 0 0   |   |                 |
| 投擲    | L v 1 0 . 6 7 5 |   |                 |
| 銃器    | L v 8 . 6 7 1   |   |                 |

◆耐性と抵抗力

|      |         |       |
|------|---------|-------|
| 火炎耐性 | 素晴らしい耐性 | ***** |
| 冷氣耐性 | 普通の耐性   | **    |
| 電撃耐性 | 弱い耐性    | **    |
| 暗黒耐性 | 普通の耐性   | ***   |
| 幻惑耐性 | 素晴らしい耐性 | ***   |
| 毒耐性  | 素晴らしい耐性 | ***   |
| 地獄耐性 | 耐性なし    |       |
| 音耐性  | 耐性なし    |       |
| 神経耐性 | 弱い耐性    | *     |
| 混沌耐性 | 普通の耐性   | **    |
| 魔法耐性 | 普通の耐性   | ***   |

◆特徴と体質

「フィート」 貴方は類稀な幸運の持ち主だ  
「フィート」 貴方は猫よりも速い「速度+10」  
「フィート」 貴方の防御は鋼のように固い「Protection」

Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「フィート」貴方は猛烈な信者だ「信仰+8」

「変異」あなたは鉄のような皮膚を持っている「PV+9」

「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」

「変異」あなたの脚は理想的な形をしている「速度上昇」

「変異」あなたの腕は筋肉の塊だ「筋力+9」

「変異」あなたの声は全てを魅了する「魅力+10」

「変異」あなたの脳は完璧な機械だ「暗記+8」

「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの血は滾っている「火炎耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「変異」あなたは鷹の目をしている「感覚+10」

「フィート」あなたは税金の計算にとっても強い「税金15%減」

「フィート」あなたは仲間を一時的に強くできる

「変異」あなたは人肉を食べることに抵抗が無い

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限-20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備はクリティカルヒットの機会を増やす

あなたの装備は完全貫通攻撃発動の機会を増やす

あなたの装備は変異から保護する

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備は異物の体内への侵入を防ぐ

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

**LV38～LV39：帰ってきた旅行者と奥さんと下僕と 愛娘の初陣（前書き）**

お待ちいただいた読者の皆さん、長らくお待たせしました。

更新再開です！

まだEP2でもショールームでもありませんが、そちらに入る前のLV上げ期間だと思っていただければ幸いです。

**Lv38～Lv39..帰ってきた旅行者と奥さんと下僕と 愛娘の初陣**

527年1月23日

長い事ティリスの外を歩き回っていたがようやく戻ってこれた。  
帰還を記念して、日記を新しいのにする事にした。

前の日記から大分サボったから、イルヴァに来てからの日付を計算するのが面倒になった、というのもあるけど。

まあ、それは冗談としてだ。

俺がこちらに来た………というか、ロミアス達に拾われたのが517年8月17日となる。

で、今が527年の1月23日だ。

何が言いたいかというと、後半年ぐらいで丁度10年になるわけだ。

んでもって、娘のアリスもあれからすくすく育って今年で6歳。

エリー仕込みの英才教育が功を奏したのか、こんな子供なのに大人に混じって戦闘訓練したりしている。

……自分で書いておいてなんだが、本当に自分の子供か疑いたくなるほどに優秀で才気に溢れた子だ。

将来が楽しみな反面、その才気が非常に妬ましいとも感じる。

まあ、それはともかくとして、今回ノースティリスに戻って来たのはきちんと理由がある。

以前入手した情報から、ネフィアの謎を解く鍵はやはりティリスの地にあるという事。

一応、いける限りの場所を見て周り、情報を集めようとしたのだが最終的にはこのティリス地方がネフィアの謎と異世界への鍵を握っ

ているんじゃないだろうか？と云うのが現状の結論だった。

さして、先ずはどこから手を付けるべきだろうか？

久しぶりのノースティリスだ……どこから行こう？

[illegible]

久しぶりの自宅を満喫しつつ、次をどうするか考えていると、ウエンディを伴ったエリーがリビングまでやってきた。

ウェンディは元々年長であった事もあってか、そろそろ冒険者としては引退の時期にさしかかっており、今ではススムが経営を任せている店での店番が仕事となっている。

ウェンディ自身も店の経営を楽しんでいる節があるので、特に文句を言わず引き受けてきていた。

「旦那様、ウエンディからお話があるそうです」

「珍しいな？　どうかしたのか？？」

「(コクリ)」

ウェンディは頷いた後に、メモ帳にさらさらと文字を書いて、ススムに渡す。

『商品の在庫がほぼ売り切れました。可能な限り早めの補充をお願いします』

「あ、すっかり忘れてたな……補充といっても倉庫の在庫が無いと  
なると、ネフィア探索しかないか」



ネフィアでお宝探したな、と呟いて今回の探索で連れて行くメンバーを考え始めると、エリーがススムに進言する。

「でしたら、今回はアリスを連れて行きましょう。あの子もそろそろ実戦の空気を知っておくべきかと思います。ネビネイルが護衛につけばいざと言う時も問題は無いと思いますが、いかがですか？」

「確かにネビネイルが居ればある程度安心だけど……あの子はまだ10にもなってない子供だぞ？不安しかないんだが……」

「ですが、あの子は旦那様の子です。……旦那様も私も、そして皆が賊や一部の心無き不逞の輩から狙われる立場にあります。故に、戦場を知るのなら早い方が安全かと」

「ううん……」

エリーが言う様に、ススムとその仲間達は実際に盗賊団などから狙われる身であり、また一部の権力者からも密かに狙われているのだったりする。

「それに、私も知らされて驚いたのですが……アリスには旦那様以上に魔道の才能があります」

「な、なに？」

エリーの言葉に動揺しつつ尋ね返すと、一呼吸置いてからエリーは告げた。

「高位の魔術書を読み解いていました。更に、混沌の渦を行使している所も確認しています」

「……うそお」

思わず天を仰いでそう言うてしまうが、エリーはそんな嘘をススムに言うはずもないので事実だろう。

父親を軽く凌ぐ魔法使い、誕生、と言うわけだ。

ススムにもそれなりのプライドという物があるのだが、まさか幼児の自分の娘に劣るとは夢にも思わなかった。

「（魔法少女アリスって感じか）」

「……旦那様？」

心の片隅で変な事を考えると、エリーはそれを不審に思っただけで少し冷たい眼で見ている。

それなりに長く連れ添ったパートナーだからこそ、変な事を考えたタイミング、と言うのも理解できているようだ。

「ま、まあ、とにかくだ。今から当分は稼ぐ時期だ。アリスも連れて行くが、先ずは手頃な街の依頼からこなしていくぞ」

「そうですね……ネフィアで何かあれば取り返しがつきませんが、討伐依頼であれば最悪、離脱も容易です」

「んだな。……そういや、セズバルドはどうした？アイツの姿を戻ってきてからは見てないが」

ふと、留守を任せていたセズバルドの存在を思い出し、尋ねると本人が今の扉をバン！と強く開けて胸を張って現れた。

「御呼びとあらば即参上！と言う訳ではありませんが、ただ今ノイエルから戻りましたわ！ススム様、長旅お疲れ様です。色々と報告する事もございますので暫く冒険はお待ちくださりません？」

セズバルドは3年の月日を経てかなりの美少女に成長していた。一度若返った上で今年で16歳のセズバルドは、むわっとした匂いを全身から放ちながら部屋の中に入ってこようとしたが、ススムはそれを手で静止する。

「とりあえず……風呂に入ってこい。返り血が酷いぞ」

「あらやだ、盗賊退治の名残が……それでは暫し失礼いたします」

この家では、返り血ムンムンぐらいは日常茶飯事だ、何せ住人は基本的に冒険者で、メイドと執事はもう何年もそういう住人達を相手にしている、更に出入りの商人達もまた戦闘ぐらいするのでその程度は慣れて当然だった。

なので、メイドは「ああん、お掃除したばかりだったのにー！」と嘆きながら血で彩られたセズバルドの足跡を急いで掃除している。執事の方は扉にこびり付いた血の処理をしている。

「……血塗れの時専用、外に水場作っておくか？」

「そうですね、それがよろしいかと。幾らなんでも毎度コレでは屋敷の中が血生臭くなって興ふ……もとい、落ち着きませんので」

「あっはっは、エリーは血の気がおぐはあ!？」

「旦那様、口は災いを招くそうです注意した方がよろしいかと」

ススムが軽口を叩こうとした所で、見事なボディブローがススムの腹に突き刺さる。

油断していた所に刺さる一撃は、軽い突っ込み程度であっても意外なダメージを与えるのであった。

「エリー、悪かった、だけど内臓破裂寸前レベルの突っ込みは勘弁してくれ」

「……すみません、加減を誤りました」

そんな夫婦の時間から暫し後、武装を外し、私服姿になったセズバルドは最近のノースティリスの状況を説明し始める。

それは、ススムが予想していなかった事実を幾つか含んでいた。

先ず、第一の報告は治安の悪化だ。

治安の悪化に伴い、盗賊の増加と凶悪化が挙げられる。

次にエーテルの風による魔物化現象の報告だ。

突如ティリスの住民が魔物化する事例が多発しており、魔物化した住人達は理性を失って暴走し暴れていると言う。

コレに関してはメシェーラに強く汚染されていないススム達には今のところ問題は無い事象だ……少なくとも、自身が魔物化しない、と言う意味では。

最後にススムと縁のあった知人の幾人かが昏睡状態で倒れていると言う報告だ。

該当するのは今の所、爆弾魔ノエル、パエルの母リリィの二人だ。不思議な事に、数ヶ月眠り続けているのに栄養失調で死んだりしていないらしい。

そのかわり、酷く苦しそうに魘されている、と言う事だった。

パエルに関しては、ご近所のご好意＋コチラからの援助で食うに困る事態にはなっていない模様。

「……先ず始めのはあの馬鹿皇子とロスリアのダメツプリの影響だな。まったく碌なモンじゃない。約束の地という宣伝文句ばかりが先行して結局腐敗して駄目になってれば世話無いつての」

「魔物化現象に関しては、3年前の時点で少数ではありますが見受けられました。しかし、ここまで悪化するとは」

関連付けて説明すると、約束の地ロスリアと呼ばれた第二の希望の森は、最初こそキレイな事を言って慈善的な活動をしていたらしい、のだが。

次第に他国の思惑もあって初志は3年間であっさりと消え去り、金

と権力が物を言う腐敗した場所となり、更にそのロスリアを狙った紛争が各所で起きてしまった。

そのせいか自分だけは助かろう、または今がチャンスだ！とばかりに悪い手段で金を稼ぐ賊徒が増加する一方であり、また凶悪化にも歯止めが利かなくなっている。

更に、そんな現実には絶望したエーテル病患者達の多くは病に抵抗する気力を失い、魔物化して暴走している、と言うのが現実だった。

その中での変り種が昏睡しているノエルとリリィの二人だった。

「なるほど、な。一応ロスリアに関しては俺も聞いてたが、こっちじゃここまで酷い事になってたか」

ススム達は基本的に調べ物中心で世俗の情報を余り仕入れなかった為にそういったことに疎くなっていた。

それだけに少々苦い物を感じている。

更に、ススムはエーテル病の根治する為の方法も調べていた。

そして、希望の森等に頼らなくても済む手段を一応は検討がついた。ヴァンデルその手段とは、遺伝子治療だ。

方法は簡単で、遺伝子複合機を用いてメシェーラの汚染を除去、あるいはメシェーラに対する抵抗力を強引に強めてしまえ、という結構めっちゃくちゃな方法だ。

ただし、当然ながら実験も何もしてないので一歩間違えば自殺行為でしかないだろう。

勿論、ススムもそれを理解しているので安易に実験をしよう等とは思わない。

ススムとネビネイルの様な特例を除けば命は有限だ。

特例の二人は、そもそもメシェーラに感染しないという特徴を持っているのでエーテル病など罹りようがなく、実験体には適さないのだ。

なので、現状では主にススム達は特に焦る必要も無かったので素直にエーテル抗体使って緩和してくれ、と言うのが実情だった。

「とりあえず、目下の所、俺達がやるべきところは金策として依頼を受けて回ったりしながら最近の情勢とか色々な所の情報収集って所だな」

ススムはそれだけ決めると全員に声を掛け、早速パルミアへと向かった。

が、パルミアは既に激戦区となっていた。

パルミアを跋扈する変異種のモンスター達が辺りをうろつき、住民はシェルターにでも籠っているのか人っ子一人見当たらない状況となっていた。

「なんだかデジャビュだな……」

「確かに、これは何年も前に見た様な光景を彷彿させますなあ」

ススムとネビネイルが以前起きたエイリアン事件を思い返しながら言う。

が、今は思い出に浸っている時間ではない。

「とりあえず、見た所今の俺たちの敵って程じゃない、各自囲まれないように注意しながら撃破だ！アリスは俺から離れないように！」

「はい！」

そうして戦闘が始まるのだが……。

「いくぞ！」

「はい！いっけえ、あんこくの、やー！」

「……」

「やー！やー！」

ススムが踏み出そうとすると即座に飛んでいく暗黒の矢。

その発信源は間違いなくアリスだった。

一生懸命に叫びながら暗黒の矢を放つ姿はかわいらしいのだが、気付けばススムは活躍する場面を見失っていた。

「……アリス、がんばったな」

「うん！アリスがんばったよ！ほめてほめてー！」

その後、アリスが魔力切れでお休み状態だったのでススムも通常の2倍3倍ぐらいの気迫を見せて一気に殲滅戦に出向いた甲斐もあり、半日も掛けずにパルミアを救う事に成功する。

この結果から、ススムはアリスは幼いながらもそれなりに戦う事ができると判断し、そしてネフィアに連れて行く事を決めたのだが……。

ネフィアの最奥に居る、主であるグリーンドラゴン相手に大苦戦を強いられた。

「く！？きゃああああー！！」

ブレスに煽られ、ドラゴンの豪腕で吹き飛ばされ気絶するエリィ。

「もうやー！！」

「ちょー！アリスお嬢様が逃げた？！」

ピンチを悟って帰還の魔法で一人逃げ出したアリス……一瞬でも発動が遅れれば、間違いなくミンチになっていただろう。

アリスの代わりにネビネイルが大打撃を受けることとなった。

「お前ッ！！こんっのおっ！！いい加減にくたばれええええ！！」

既に何度目か不明な全力の一撃は、遂に鋼鉄よりも硬い鱗を砕き、ドラゴンの右肩から左わき腹に掛けて大きく斬る事に成功した。ふと気付くとススムが負っていた細々とした怪我が癒えていた。

「主殿、援護いたしますので臆する事無く突っ込んでください！」  
「わあった！」

ネビネイルの援護を受けつつ、大剣を下段に構えなおし、力を貯め、狙いを定めて剣を振り上げと同時に跳ねる。

振り上げる際に大剣は地を這い、その際に鞘走りのように溜めを作り、ドラゴンの胴を狙って一気に振るわれた。

「寝てろお！！」

再び胴を斬られたドラゴンは仰向けに倒れそうになるものの、ギリギリの所で踏ん張って見せるが、ススムは更に追撃をした。

「それなら、落ちろ！！でえりゃああ！」

跳び上がった状態で剣を振るえる体勢でもなく、出来たのは……なんと空中での踵落しだった。

踵落し、革製の靴である★祝福された《ダルⅡイⅡサリオン》＋３による格闘攻撃はそれほどの威力は無いが、それでも祝福と強化で革製とも思えない頑丈さを誇り、それプラスしょっちゅう圧死しかねない程の荷物を持ち運ぶススムの脚力が叩きつけられ、ドラゴンは頭蓋を碎かれることとなった。



それによって、ようやくドラゴンは倒れ伏し、二度と動かなくなつた。

ドラゴンの死亡確認をしたススムは、倒れた自分の嫁の無事を確認し、多分逃げ帰った自分の娘を思い返し、ため息をつくのだった。

「ふう、やれやれだ」

「……主殿はやっぱり人の姿をした化け物じゃのう。普通の人間では、空中踵落しでドラゴンの頭蓋破壊等できませぬぞ」

「お前、俺の従者の癖に散々な物言いだな。いや、俺も既に人外に足突っ込んでるのは自覚してたけどさ」

「主殿のご教育の賜物かと思うがのう。それに自覚があるのなら何よりですじゃ。しかし、空中で踵落しなどどうすれば出来るのやら」  
「ああ、そりゃコイツのお陰だよ」

そう言ってススムは装備している赤く染まった軽手袋を掲げて見せる。

空中で追撃が出来た理由は簡単だ、装備しているルビナス製の軽手袋『ドウルエオン』が浮遊効果を持ち、それによって姿勢制御が出来たというだけの話だ。

無論、コレには『英雄』の魔法等による身体能力のブーストがあったからこそ成功率が上がった結果でもある。

ちなみに、会話をしながら既にエリーは回収済みだ。

容態はかなり危険だが、魔法を使ってできる限りの治療は行っている。後には休息が必要だろう。

大分血を流したようで、回復しきるまでにはそれなりに時間が必要だろうというのを見て取れた。

ススムは手袋を取り、エリーの顔を軽く撫で、その後直ぐに背負って帰還の魔法で一路自宅へと戻った。

「やれやれ、俺もそうだけどエリーも大分鈍っちゃってたかあ」

「ワシとしては、奥方もアリスお嬢様にも女性らしく御淑やかであつて欲しいと思うのじゃがのう」

「俺もそれは同感なんだがね、エリーの場合戦つてゐる姿が綺麗だからな」

「……ノロケじゃのう」

「それに、俺たち一家が狙われている現実もある。力を得ることは必須だよ、ネビネイル」

「そうじゃな。ワシら以上のバケモノはごまんと居る。モンスターにしろ、変異種にしろ、そして人間もじゃな」

帰還後、アリスは予想通り帰宅しており、その後は軽く反省会となった。

もったも、最終的には『もっと修練を積んでうまく対処できるようになろう』で結論付けられた。

その後、ススムはエリーとアリスの復帰を待ちつつ、久方ぶりに釣りをすべく、ヴェルニースで、ポート・カプールで、パルミアで、ルミエストで釣りをしまくった。

餌はヴェルニースで購入したバツタだ。

久しぶりだというのもあって「餌って言えばミミズとかそれっぽいんじゃないかったか？」とススムは思ったが、元々釣りに詳しい訳でも大して思い入れがあるわけでもないのでサクッとその思考を忘れてバツタに釣り針を突き刺した。

ずぶつと。

柔らかいわき腹を抉り込むように突き刺した。

最初はもがき苦しんだバツタだが次第に動きは精彩を無くし、やがて活動を停止した。

その様を確認したススムは特に何を考えるわけでもなく、にテキトウ釣りを開始する事にした。

「あいむしんかー……とうーとうーとうーとうー？」

昔、どこかで聞いた歌っぽいナニカを口ずさもうとして、ふと疑問に思う。

「……これ、歌詞の続きを忘れちゃったな」

思わずため息をついた。

正直に言う、ススムは現時点で元の世界で覚えていた細々としたことは忘れつつある。

それは一重に『向こうの世界での常識は投げ捨てる物』とも言えるこのイルヴァの常識に適合した結果でもあったりする。

今、彼が覚えていることなど、大体は嘗て趣味で覚えたゲームなどの遊び方や大まかな設定等である。

自分がどれだけ趣味に生きていたのやら、と思い知らされる瞬間だ。

「あー……まさか、10年目にしてホームシック？をまた患うとは。いい加減な感性してるな、俺」

別にススムは今までホームシックに罹らなかったわけではない。

ただ、一人でゆっくりと冒険や戦闘、魔法や研究以外の事を考える時間が極端に少なかったが故にこういった事を考えるゆとりが出来る

ただ。

とはいえ、だからといってナーバスになることだけはない。

「とりあえず、早めに研究を完成させて異世界移動が出来るようにならないとな。多分、一発では成功しないだろうけど……エリーと異世界旅行のデートというのも楽しそうだな……フィッシュ!? おおおお!? おお!!! キターーーー!!!」

盛大に盛り上がった末に釣り上がったのは……。

「マニ、マニ……」

ナニカヨクワカラナイ、コワレタキカイダッタ。

「はっはっは、まあゴミがあたる事もあらあな!」

笑顔でゴミをポート・カプールの海に蹴り落とす。  
全力で無かった事にしたいようだ。

「マニーーー?!」

※海にゴミを捨てるのはマナー違反です。

※ゴミが釣れた場合は海に還さず適切な処分をしましょう。

※ ポート・カプール漁業組合※

Lv38→Lv39..帰ってきた旅行者と奥さんと下僕と 愛娘の初陣(後書き

と、言うわけでCNP C魔道少女の『アリス』が実装されました！  
以前感想で頂いたアイディアを元に製作させていただきました。

更に、今回は事前に通告した通りバリアント版Elona ore  
hackを採用しています。

色々数字が見えるのは、なんだか嬉しいなあ…w

さて、第二部？突入を記念して久方ぶりのステ晒しです！

といっても全員分ではなく、今回連れ歩いた(こっそりと間にセズ  
バルドも居たり)メンバーの分のみですが。

名前..ススム(石動進)

種族..神の化身(現代日本人)

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア

Lv37 ↓ Lv39

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力102 (96) -3(0)

マナ 153 (153) - -

狂気度 0 - -

速度 162 (103) +4(0)

名声 32238 +5631

カルマ 0 - -

現在値 前回比

|    |        |       |   |   |       |
|----|--------|-------|---|---|-------|
| 筋力 | .. 9 4 | (7 8) | + | 6 | (+ 6) |
| 耐久 | .. 7 2 | (5 9) | + | 4 | (+ 4) |
| 器用 | .. 9 1 | (6 1) | + | 4 | (+ 3) |
| 感覚 | .. 9 0 | (7 3) | + | 7 | (+ 6) |
| 習得 | .. 8 3 | (7 1) | + | 9 | (+ 8) |
| 意思 | .. 7 8 | (4 7) | + | 4 | (+ 3) |
| 魔力 | .. 5 5 | (4 1) | + | 5 | (+ 4) |
| 魅力 | .. 5 7 | (3 7) | + | 3 | (+ 3) |

## 装備

頭 .. ★祝福された《賢者の兜》+3「4, 15」:(看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*\*, 魔法耐性\*\*, 幻惑耐性\*\*\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》+2「0, 4」:(耐酸性, 不燃, 二刀流\*\*\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*\*\*+)

背中.. ☆祝福されたこの世ならざる外套『声のドラゴン』+2「3 1, 2」:(耐酸性, 不燃, 魔力維持, 習得維持, 筋力維持, 詠唱\*, 速度+5)

胴体.. ☆祝福された赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+3「18, 45」:(耐酸性, 不燃, 心眼\*\*, 裁縫\*, 軽装備\*, 意思+8, 生命力+3)

利手.. ★祝福された《クレイモア》+3 (3d14+16) (1): (耐酸性, 不燃, レア, 両手持ち適正, 筋力維持, 暗黒耐性\*, クリテイカル\*\*\*\*+, 完全貫通\*\*\*\*\*, 変異保護)

手 ..

指 .. ★祝福された《パルミア・プライド》+2「15, 5」:(耐酸性, 不燃, 詠唱\*, 暗黒耐性\*\*, 混沌耐性\*\*, 運勢+15, 速度+8, 魅力+12, 盗難防止)

指 .. 呻くルビナスノスピードリング+2:(耐酸性, 不燃, 筋力



|       |          |       |      |          |       |
|-------|----------|-------|------|----------|-------|
| 鍵開け   | L v 2 3. | 4 1 5 | ↓    | L v 2 4. | 9 1 7 |
| 二刀流   | L v 1 8. | 9 5 5 |      |          |       |
| 軽装備   | L v 7.   | 4 8 5 |      |          |       |
| 回避    | L v 3 3. | 2 4 5 | ↓    | L v 3 4. | 5 0 1 |
| 罨解体   | L v 2.   | 3 3 1 | ↓    | L v 2.   | 5 9 5 |
| 裁縫    | L v 1.   | 1 0 0 |      |          |       |
| 宝石細工  | L v 2.   | 4 1 7 | ↓    | L v 4.   | 6 5 8 |
| 窃盗    | L v 1.   | 7 6 5 |      |          |       |
| 隠密    | L v 4 1. | 8 8 3 | ↓    | L v 4 5. | 2 2 6 |
| 探知    | L v 9.   | 2 1 9 | ↓    | L v 1 0. | 5 1 9 |
| 自然鑑定  | L v 2 2. | 4 5 6 | ↓    | L v 2 4. | 0 4 8 |
| 釣り    | L v 9.   | 0 7 1 | ↓    | L v 1 4. | 8 3 4 |
| 見切り   | L v 3 2. | 8 2 5 | ↓    | L v 3 4. | 0 4 8 |
| 射撃    | L v 1 3. | 6 7 1 | ↓    | L v 1 6. | 6 5 2 |
| 読書    | L v 3 5. | 9 5 7 | ↓    | L v 4 1. | 4 1 5 |
| 遺伝子学  | L v 2 3. | 3 9 4 |      |          |       |
| 解剖学   | L v 1 6. | 1 2 9 | ↓    | L v 1 8. | 2 9 0 |
| 暗記    | L v 2 0. | 2 6 3 | ↓    | L v 2 7. | 0 0 8 |
| 錬金術   | L v 2.   | 2 3 8 | ↑New |          |       |
| 栽培    | L v 1 3. | 0 3 9 | ↓    | L v 1 4. | 0 9 2 |
| 料理    | L v 1 1. | 4 1 6 | ↓    | L v 1 4. | 4 1 1 |
| 魔力の限界 | L v 1.   | 8 5 5 | ↓    | L v 2.   | 2 1 7 |
| 信仰    | L v 3 4. | 8 8 3 | ↓    | L v 3 6. | 7 8 2 |
| 旅歩き   | L v 2 5. | 0 7 9 | ↓    | L v 2 5. | 8 5 1 |
| 乗馬    | L v 4.   | 5 6 4 | ↓    | L v 4.   | 6 5 2 |
| 瞑想    | L v 2 7. | 8 2 1 | ↓    | L v 2 9. | 3 5 3 |
| 詠唱    | L v 2 5. | 8 9 5 | ↓    | L v 2 7. | 8 0 3 |
| 魔道具   | L v 1 8. | 8 8 8 | ↓    | L v 2 0. | 0 2 4 |
| 交渉    | L v 3 9. | 2 8 8 | ↓    | L v 4 2. | 7 1 5 |
| 投資    | L v 2 2. | 6 9 2 | ↓    | L v 2 7. | 1 8 1 |



演奏 Lv40. 599 ↓ Lv41. 948

◆武器の専門

長剣 Lv34. 428 ↓ Lv36. 355

斧 Lv4. 000

格闘 Lv12. 739

鎌 Lv19. 976 ↓ Lv20. 634

鈍器 Lv9. 272

槍 Lv13. 676

杖 Lv14. 152

短剣 Lv10. 599

弓 Lv21. 421 ↓ Lv22. 907

クロスボウ Lv4. 000

投擲 Lv10. 675

銃器 Lv8. 671

◆耐性と抵抗力

火炎耐性 ＊＊＊＊

冷氣耐性 ＊＊

電撃耐性 ＊＊

暗黒耐性 ＊＊＊＊

幻惑耐性 ＊＊＊

毒耐性 ＊＊＊＊

地獄耐性 ＊＊＊＊

音耐性

神経耐性 ＊＊

混沌耐性 ＊＊＊

魔法耐性 ＊＊＊

◆特徴と体質

「フィート」貴方は類稀な幸運の持ち主だ

「フィート」貴方は猫よりも速い「速度+10」  
「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection  
Value+15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue+4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久+3」

「フィート」貴方は猛烈な信者だ「信仰+8」

「変異」あなたは鉄のような皮膚を持っている「PV+9」

「変異」あなたの間接はしなやかだ「器用+3」

「変異」あなたの傷は瞬く間にふさがる「自然治癒強化」

「変異」あなたの脳は機械化している「暗記+4」

「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」あなたの鼓膜は厚い「音耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「変異」あなたは猫の目をしている「感覚+5」

「フィート」あなたは税金の計算にとっても強い「税金15%減」

「フィート」あなたは仲間を一時的に強くできる

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限-20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備はクリティカルヒットの機会を増やす

あなたの装備は完全貫通攻撃発動の機会を増やす

あなたの装備は変異から保護する

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備はあなたを浮遊させる

あなたの装備は麻痺を無効にする

あなたの装備は出血を抑える

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前..エリー(エリュシオン)

種族..ローラン

性別..女性

職業..戦士

Lv22 ↓ Lv25

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力103 (100) ー ー

マナ 80 (80) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 110 (96) +15

現在値 前回比

筋力..73 (49) +11 (+11)

耐久..69 (59) +8 (+10)

器用..61 (51) +22 (+20)

感覚..38 (30) +15 (+10)

習得..46 (38) +17 (+10)

意思..40 (32) +10 (0)

魔力..53 (44) +16 (1)

魅力..43 (35) +1 (+1)

名前..ネビネイル

種族..神の化身

性別..男性

職業..魔法戦士

Lv21 ↓ Lv25

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 90 (90) +3

マナ 150 (150) +5

狂気度 0 - - -

速度 103 (116) +18 (0)

現在値 前回比

筋力 55 (42) +21 (+11)

耐久 47 (39) +22 (+22)

器用 23 (23) +41 (+31)

感覚 14 (14) +29 (+21)

習得 19 (16) +25 (+20)

意思 34 (30) +9 (+1)

魔力 45 (45) +10 (+1)

魅力 30 (25) +4 (+2)

名前..魔道少女の『アリス』

種族..神の化身

性別..女性

職業..魔法使い

LV1 ↓ LV12

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 93 (90) - - -

マナ 150 (150) - - -

狂気度 0 - - -

速度 142 (110) - - -

現在値 前回比

筋力 20 (14) - - -

|      |    |      |   |   |   |
|------|----|------|---|---|---|
| 耐久.. | 20 | (11) | — | — | — |
| 器用.. | 19 | (13) | — | — | — |
| 感覚.. | 22 | (16) | — | — | — |
| 習得.. | 22 | (16) | — | — | — |
| 意思.. | 27 | (20) | — | — | — |
| 魔力.. | 43 | (26) | — | — | — |
| 魅力.. | 17 | (11) | — | — | — |

アリスは暗黒の矢と混沌の渦、治癒の雨を使用しますが、Lv1スタートなので打たれ弱い上にMPもかすつかすで、リプレイ時の実際の死因は魔力反動だったり。

でも、レベルが上がってくると段々と頼もしい感じに魔法を連射してくれます。

決して殴り合いとかはしません。

この辺り、両親とは全然違うなーw

ore|hackの影響なのか、ペットの強化が随分と楽になりました……。

まあ、以前だとあまり鉱石やお金とか渡したりしてなかった気がします……ゲフンゲフン。

そろそろシヨールームや混沌の城にも挑んでみようかなあ。

20110627 誤字など修正

**L v 4 0 :: 旅行者一家と混沌の城《機甲》**      それと最近の流行とか（前書き）

初めて混沌の城に挑みました。

詳しくは本文にて……

2 0 1 1 0 8 0 4      誤字修正

**Lv40：旅行者一家と混沌の城《機甲》**      **それと最近の流行とか**

527年6月26日

あつという間に半年近くが経過してしまった。

あの後、怪我が回復したエリーとアリスの二人には、『まだまだ不足がある！』と主張したエリーの意見を採用してギルドにて特訓の日々を送ってもらう事になった。

その費用は今まで溜め込んでいた貴金属を売り払う事でまかなわれたいざと言う時の換金用だったのだけど、強くなる為に背に腹は変えられないし家族の為だ、と割り切って断腸の思いで宝石とさよならだ。

等と書くアレだな。

実際の所は少し残念程度だ。

宝石はネフィアでは時々採れるものだし、俺自身しょっちゅう売り払ってた。

あ………そういえば税金2ヶ月滞納してたから払に行かなきゃ………。  
一月あたり6万〜7万だから12万〜14万程度の出費かあ、地味に痛いな。

宴会でわざと失敗して名声下げるか？

税金なんて殆ど名声から大雑把に出される有名税だしなあ………。

って、そういえば今更名声下げても、知名度って意味じゃ妙に有名になり過ぎてるんだった。

なんだかなあ………。





まるで天からの啓示のようだった。  
そしてススムは自身のトラブルに巻き込まれる事の多い悪運を少しでも改善すべく、こう口にした。

「それじゃあ運勢を良くしてくれ」

直後、光が進むの周囲で踊り、運勢が良くなった……気がしたが、正直な所本当に運勢が良くなったのかは不明だった。

なんとなく腑に落ちなかったが、神の気配がなくなっていたので既に去った事をようやく悟った。

「ご主人様。何か、変わりましたか？」

「……正直、よくわからないなあ。機会があったらもう一度願ってみて、何か違いがあるか注意深くさぐって見るか」

ちなみに、このすぐ後に再び願いを叶える神（前の神とは別の神）が顕れて、まったく同じことを願ったのだが、結局何が変わったのかは不明だった、と、ススムは言った。

普通の人間が聞けば胸倉掴んで顔面殴りつけ、更にはヘッドバッドをした挙句に発狂して叫びそうになるような話だった。

ネフィア探索を終え、パルミアの酒場<sup>バー</sup>でのんびりとくだを巻いていると、近くで冒険者らしい格好をした若者達の話し声が聞こえた。ススムはその噂話に興味を持って耳を澄ましてみることにした。

「なあ、あの噂聞いたか？」

「ん？アノってどれだよ？眠りっぱなしなのに死なない冬眠病の事か？それとも、エーテル病で魔物化する変異病のことか？」

「違う違う！《混沌の城》とかいう場所の噂の事だよ！」

「いや、聞いた事はないな。なんだそりゃ？」

「いやな、ランキングの上位に乗るような冒険者達は知ってるらしい話なんだが、なんでも嘗てパルミアを救った剣鬼殿が倒した炎の魔女や古城の主とかいたじゃないか」

「ああ、確か……6〜8年ぐらい前の話だったか？当時、あらゆる冒険者がそいつら相手に散っていったとか聞いたことがあるな。そして唯一勝利を得たのは剣鬼殿率いる隊だったという話だよな？」

「そう、それだよ。そいつらよりも、更に強いつて噂になってるのが混沌の城に住む3人の主らしいぜ。噂では、この辺りだとパルミアを南、ヨウインへの橋のある辺りかな？その辺りのとこに一つあるらしいんだが、これまた噂だと弱い奴は余程強い意思を持って入ろうとしない限り、城に近づくだけで恐怖で足が竦んで回れ右しまうんだとさ」

「へえ……興味深いけど、正直俺にはどうしようもねえ話だなあ。なんせ、ドレイクでヒィヒィいつてるんだぜ？そういうのは、英雄譚に名が残るような英雄殿にお任せするさ」

「ま、そうなんだけどな」

そこまできいて、ススムはそれ以上の話を聞く事をやめた。

それ以降は何処その誰が可愛いだのエロイだのという話に切り替わったからだ。

「混沌の城、か。そういえば、無意識に避けてたかもしれない場所、確かにあったかもしれないな」

だとすれば、それは数年前に命どころか魂まで削る思いで戦った日々ですら、それを恐れて忌避したという事を示す。

「……面白いな。そういう場所がまだあったのか」

みんなも疲れがたまっているだろうから、一人で行くのが丁度いいだろう。

どうせ、やばくなったらすぐに逃げればいいのだし。

そう考えてススムは酔いもそこそこ回っている足でフラフラとパルミアの外へ向かった。

目指すは南、混沌の城である。

混沌の城は、ススムが本能的に「こっちじゃないな？」と思う所を敢えて「いや、こっちだ！」と思って進む事で意外とあっさりと見つける事ができた。

今のススムの足でなら、パルミアから3時間もしない位置にあったのだ。

「こんなに近くにあったのに、俺、気がつかなかったのか。……こんなデカイ城……というか、塔なのに」

そう、混沌の城は城というだけあって大きかった。

とはいえ、正確には城というよりも塔と呼ぶのが正しいだろう。

それも、ただの塔ではなく、一つの機能に限定された塔だ。

なんて、カッコつけてススムは考えてみたが、強ちそれも間違いではないのではないかと思い始めていた。

「……所々に魔方阵があるな。これって何かの補助で設置されてる

「んだろうか？」

残念な事に、魔方陣というのはこの時代では殆どインテリアのような物だ。

ある程度魔力が通っている様にも見えるので、もしかしたら何らかの機能を持っている可能性もあるが、少なくともススムの知識ではそれを判別する事はできない。

「とりあえず、先に進んでみるか」

数分後、ススムはその判断を大いに後悔する事となる。

長い直線の通路を進んでいくと、広間に出た。

魔方陣に囲まれたソレは、ススムが居る事に気づくと、金属音が複雑に絡み合う事で起きた異形の咆哮を上げて告げた。

——シンニユウシャ　ハツケン

——セキュリテイレベル　サイダイ

——シンニユウシャ　ヲ　ハイジヨ　スル

「——は？」

ブウンという、まるで古いテレビの電源が付く音のあと、更に騒がしく鳴り響く金属音とモーターの駆動音。

大地を揺らす轟音と共に、ソレは大型の銃……イメージ的には某有名ロボットアニメなどで装備されそうな感じのブツを携え、更に片手にはレーザーで作ったと思われる近接兵装<sup>レーザーソード</sup>。

「い、何時からイルヴァはファンタジー世界からSF世界になったんだ!？」

—— ターゲット ロック レールガン チャージ

「!!!!!!」

—— ハッシャ

キュボツという大気を引き裂く音。

発射直前のタイミングで運良く相手のアナウンスが聞こえて回避を試みたが、衝撃波だけで左腕が持っていかれた。

具体的に言えば、千切れ飛んでしまった。

—— テキ セントウリヨク テイカ ヲ カクニン

—— キンセツモード ニ イコウ スル

ドンツという爆発を推進力に換えてソレはススムに迫った。

「あたるか!!」

それだけであれば、ススムは回避する事ができた。

しかし、相手はそもそも常識が通じない相手だった。

キュボンツという音を立てて、ススムの脇を通過しそうになった所を全身に付けているスラスターで姿勢制御を行い急速転回を披露して魅せ、同時に閃熱剣レーザーソードをクイックターンの勢いのままに横風に振るう。

「っ!?!」

それを身を投げ出して飛び込み前転して回避する。

若干マントが焼け焦げたが、直撃すれば胴体が宙を舞っていた事は想像に難しくなかった。

「くそ！こんなのに勝てるかポケット！！——『脱出』！」

即座に脱出の使用を判断するが、ソレがススムの運の分け目だった。

——レールガンチャージ ハッシャ

「ぬ——グアアアア！？」

距離を取ってしまったススム目掛けて、正確無比にして超高速の一撃である超電磁砲の砲弾がススムの両足を太ももから下を吹き飛ばし、最早まともに動く事すら叶わなくなってしまった。

——レールガンチャージ

「あ」

——ハッシャ

もがく事もできないまま、無慈悲な一撃がススムの首から上を跡形も無く吹き飛ばした。

「——という夢を見たんだ」

「いや主殿、それ夢じゃござらんから」

血塗れになった鎧を洗いながら、ススムはとなりで同じく血塗れになったその他防具を洗っているネビネイルに混沌の城であったことを語っていた。

「いやだって、あそこまで何も出来ないまま死ぬのは悔しい。というかありえない。悪夢だよ」

「主殿。ソレを言ったら風の女神や幸運の女神の二柱は更にありえなくなるでござるよ。うつすらと魂に焼きついて居るでござる……笑いながら罵倒しながら疾風を超える速度でワシやその他神々の僕たる眷属たちを一顧だにする事無く葬ったあの力を」

ネビネイルは遠い目をしてそう語った。

嘗て神々の御許に居た頃、訓練と称して神々と刃を交えたそのときの事を。

風の女神が罵倒しながら100人以上居た眷族を吹き飛ばし、幸運の女神が奇声をあげながら全てを吹き飛ばし粉微塵にしていく様を。

「ジュア様がおらねば、今のワシはありますまい……精神の復帰、という意味で」

「へ、へえ……？」

「しかし、それでも風の女神と幸運の女神はワシにとってもっとも苦手な相手なのですじゃ」

「そうなのか……」

ススムはこの時、自分はそういう経験はしたくないなあ、等と思っていたが、未来において両方と刃を交えるガチバトルをする事になるとは、今の時点では思いもしなかった。

閑話休題。

冒険ばかりで最近では街の流行という物に疎くなっていたススムは、ルミエストで依頼が貼られている掲示板を見て首をひねった。

「トレジャーハント依頼？」

ナンダコリヤ、とススムが疑問に思っていると、丁度通りかかった冒険者の男がソレを見て口を出してきた。

「おや？アンタ、その依頼を目にするのは初めてかい？」

「ああ。いや、言ってる事はわかるんだが、何でこんなもんが、つてな」

「そう言う事か。まあ、貴族や商人の金持ちの見栄だよ。難易度はピンキリだが、ぶっちゃけた話、星の数と難易度がマッチしてねえから上位の冒険者ぐらいしか受けられないんだよな、その手の依頼はよ」

「なるほどねえ……」

基本的に、イルヴァでコレクションとして今まで自慢になりそうな物といえば、珍しい武具等が主流であったといえよう。

その武具だって、どうせ冒険者が武具店などに売り払う事も多いので、この様に態々依頼の形で出される事は無かったのだ。

だが、ここ数年はいわゆる『成金』が増えており、武具以外の役にも立たないが『非常に珍しい物』に成金達が注目しており、見栄とプライドで生きるような貴族達もそれに対抗してそれを集め始めている、という話だった。

「アンタもその依頼を受けるのなら、キチンと注意しておけよ」  
「ありがとう」



その後、トレジャーハント依頼は様子見として放っておき、ルミエスト周辺に現れたモンスター退治依頼を受けたりして日銭を稼いでいたのだが……。

妙に背が高く、下半身はねじれ、上半身はローブのような物を着た異形の存在だった。

しかし、それだけならば大した事は無さそうなのだが、見るだけでじとり、とススムは汗が服を濡らすのを感じた。

「な、何だアイツは？」

「あやつは！まさか螺旋の王！？」

「ヤツを知っておるのか、ネビネイル？」

ネビネイルにエリーが問い質す。

「私も詳しくは知りませぬが、奴は少なくとも地上に現れるような存在ではなかった筈……。地下深くの迷宮にのみ存在するといわれていたと思ったのじゃが……」

「つまり、本来なら地下深くにあるネフィアの中に居るのが何の弾みか出てきてしまったってか？」

「そうなるでしょう。奴はそこいらのドラゴンよりも凶悪な上に魔法も扱いますじゃ！気をつけねば、一瞬で相手に飲まれますぞ！」

「……っ！ならば、突貫あるのみ！アリス、ウレル、二人は手を出さず我らの動きを良く見ておれよ！」

そう言って一人、大鎌を持って螺旋の王を相手に距離をつめ、斬りかかるエリー。

それに慌てたのはススム達だ。

「エリー？！ネビネイル、俺たちも行くぞ！セズバルド、二人を頼

む！」

「了解です！」

螺旋の王、それは地上どころかネフィアでも滅多にお目にかかることは無い……少なくとも現在のススムが行くようなネフィアでは見られないような異形だった。

「コイツ、魔法使い型か！？」

「ヌッ！クッ！？距離を詰めようにも、存外に早いだと！？」

ススムとエリーの二人は距離を詰め、苛烈に斬り付けては魔法で反撃を受け、ネビネイルは治癒の雨を用いながら何とか隙を窺って攻撃を行っていた。

だが、それでも攻め切れているかといえど中々に苦しい状態だった。

「オオオオオン」

一際大きい雄叫びと同時に、魔力が爆発して轟音と衝撃が3人を吹き飛ばす。

「轟音の……波動まで使うのか」

「グウ、敵ながらここまでやりおるとは天晴れなヤツ」

ススムは苦い物を感じながら、エリーは苦痛を感じつつも戦いへの歓喜からか笑みがこぼれている。

「ワタシがヤツの首級を直に狙う。旦那様とネビネイルは牽制を頼むぞ」

「……オーケイ、頼むぜエリー！」

「心得ましたぞ！」

今度はススムとネビネイルが積極的に接近戦を行い、エリーは螺旋の王の死角へと移動する。

「オオオオオオオオ！」

「ちいっ！？この野郎！！魔法なんて連発してるんじゃ、ねえええ  
スタンアロー  
！麻痺の矢！」

「今ならば！せやあああああ！」

ススムが螺旋の王の動きを一瞬止め、ネビネイルが姿勢を崩させる。

「今が勝機！その首級、頂戴いたす！！！」

ザン！という鮮やかな一閃が螺旋の王の首を大鎌で刎ね飛ばした。

「おかーさんすごい！お父さんとネビネイルもかっこよかったよ  
！」

「本当。お兄ちゃんもエリーも、それにネビネイルも凄過ぎだね。」

アリスとウレルがそう言って3人の健闘を讃えていたが、一方でセズバルドは嫌な予感を感じ取っていた。

「（もしも、ここ以外にも螺旋の王が出現した場合、かなり拙い事になるんじゃ……）」

このセズバルドの予感が正しい事を証明されるのは、次の依頼を受けた直後だった。

以降、螺旋の王が出現した際は、アリスとウレルの二人は実力不足から街に即戻るように指示が出されるようになったとか。

**Lv40..旅行者一家と混沌の城《機甲》**      **それと最近の流行とか（後書き）**

と、言う訳で究極兵器★ウティマとの戦いと、トレジャーハント依頼（ore|hack最新版より）が顔見せです。

ウティマ戦は負けるには負けましたが、実際だと25%ぐらいダメージ与えたりしましたが、本文中ではあっさり負けたことにしてみました。

その方が迫力出るかな、見たいな気がしたので！

トレジャーハント依頼に関しては、ネフィアの階層レベルが30〜40ぐらいだったので、今のメンバー（というかペット達）にはややきつめな感じでした。

これで、緑★5つとか詐欺だろ。

最後は螺旋の王がやや強くて困ったねwというお話でした。

実際、ネビネイルとエリーの二人もそこそこ手傷を負っていたのでまだレベルの低い&装備が充実していないアリスとウレルでは大分厳しい感じです。

すぐに街に戻したのは今でもいい判断だったな、とか思ったり。

この調子でやってて、何時になったら混沌の城の3柱を倒せるのやら……。

さて、それでは恒例のステシ晒しです！

名前..ススム（石動進）

種族..神の化身（現代日本人）

性別..男性

職業.. 観光客

信仰.. 癒しのジュア

Lv38 ↓ Lv40

ステータス: カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 102 (96) 0 (0)

マナ 153 (153) - -

狂気度 0 - -

速度 162 (103) 0 (0)

名声 44964 +12726

カルマ 0 - -

現在値 前回比

筋力.. 98 (81) +4 (+3)

耐久.. 76 (62) +4 (+3)

器用.. 97 (64) +6 (+3)

感覚.. 94 (77) +4 (+4)

習得.. 86 (74) +3 (+3)

意思.. 80 (49) +2 (+2)

魔力.. 57 (43) +2 (+2)

魅力.. 62 (41) +5 (+4)

## 装備

頭 .. ★祝福された《賢者の兜》+3 [4, 15] : (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱\*, 解剖\*, 魔法耐性\*, 幻惑耐性\*, 魔力+5, 混乱無効)

首 .. ★《ツインエッジ》+2 [0, 4] : (耐酸性, 不燃, 二刀流\*, 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃\*, 追撃\*)

背中.. ☆祝福されたこの世ならざる外套『声のドラゴン』+2 [3



命中修正…13

ダメージ修正…4

DV／PV…100／176

### ◆スキルと特殊能力

|      |          |   |          |
|------|----------|---|----------|
| 戦術   | Lv40・472 | ↓ | Lv41・257 |
| 重量挙げ | Lv45・080 | ↓ | Lv47・173 |
| 両手持ち | Lv33・617 | ↓ | Lv35・286 |
| 治癒   | Lv35・496 | ↓ | Lv37・509 |
| 採掘   | Lv14・778 | ↓ | Lv17・652 |
| 盾    | Lv16・456 |   |          |
| 重装備  | Lv6・271  |   |          |
| 中装備  | Lv14・917 | ↓ | Lv15・222 |
| 鍵開け  | Lv24・917 | ↓ | Lv24・928 |
| 二刀流  | Lv18・955 |   |          |
| 軽装備  | Lv7・485  |   |          |
| 回避   | Lv34・501 | ↓ | Lv35・941 |
| 罨解体  | Lv2・595  | ↓ | Lv2・906  |
| 裁縫   | Lv1・100  |   |          |
| 宝石細工 | Lv4・658  | ↓ | Lv6・578  |
| 窃盗   | Lv1・765  |   |          |
| 隠密   | Lv45・226 | ↓ | Lv47・281 |
| 探知   | Lv10・519 | ↓ | Lv11・414 |
| 自然鑑定 | Lv24・048 | ↓ | Lv25・444 |
| 釣り   | Lv14・834 | ↓ | Lv16・187 |
| 見切り  | Lv34・048 | ↓ | Lv34・515 |
| 射撃   | Lv16・652 | ↓ | Lv17・807 |
| 読書   | Lv41・415 | ↓ | Lv44・515 |
| 遺伝子学 | Lv23・394 | ↓ | Lv24・360 |
| 解剖学  | Lv18・290 | ↓ | Lv19・422 |

|       |          |       |       |          |       |
|-------|----------|-------|-------|----------|-------|
| 暗記    | L v 2 7. | 0 0 8 | ↓     | L v 3 1. | 2 4 4 |
| 錬金術   | L v 2.   | 2 3 8 | ↑ New |          |       |
| 栽培    | L v 1 4. | 0 9 2 | ↓     | L v 1 4. | 5 9 8 |
| 料理    | L v 1 4. | 4 1 1 | ↓     | L v 1 6. | 3 1 6 |
| 魔力の限界 | L v 2.   | 2 1 7 | ↓     | L v 2.   | 2 6 4 |
| 信仰    | L v 3 6. | 7 8 2 | ↓     | L v 3 7. | 8 8 0 |
| 旅歩き   | L v 2 5. | 8 5 1 | ↓     | L v 2 6. | 2 1 5 |
| 乗馬    | L v 4.   | 6 5 2 |       |          |       |
| 瞑想    | L v 2 9. | 3 5 3 | ↓     | L v 3 0. | 1 1 3 |
| 詠唱    | L v 2 7. | 8 0 3 | ↓     | L v 2 8. | 7 7 6 |
| 魔道具   | L v 2 0. | 0 2 4 | ↓     | L v 2 0. | 3 3 1 |
| 交渉    | L v 4 2. | 7 1 5 | ↓     | L v 4 4. | 3 2 1 |
| 投資    | L v 2 7. | 1 8 1 | ↓     | L v 3 1. | 8 7 7 |
| 演奏    | L v 4 1. | 9 4 8 | ↓     | L v 4 3. | 1 8 0 |

◆武器の専門

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 長剣    | L v 3 4. | 4 2 8 | ↓ | L v 3 6. | 3 5 5 |
| 斧     | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 格闘    | L v 1 2. | 7 3 9 | ↓ | L v 1 2. | 8 2 8 |
| 鎌     | L v 2 0. | 6 3 4 |   |          |       |
| 鈍器    | L v 9.   | 2 7 2 |   |          |       |
| 槍     | L v 1 3. | 6 7 6 |   |          |       |
| 杖     | L v 1 4. | 1 5 2 |   |          |       |
| 短剣    | L v 1 0. | 5 9 9 |   |          |       |
| 弓     | L v 2 2. | 9 0 7 | ↓ | L v 2 3. | 6 2 5 |
| クロスボウ | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 投擲    | L v 1 0. | 6 7 5 |   |          |       |
| 銃器    | L v 8.   | 6 7 1 |   |          |       |

◆耐性と抵抗力



火炎耐性 ＊＊＊＊  
 冷気耐性 ＊＊  
 電撃耐性 ＊＊  
 暗黒耐性 ＊＊＊＊  
 幻惑耐性 ＊＊＊  
 毒耐性 ＊＊＊＊  
 地獄耐性 ＊＊＊＊  
 音耐性  
 神経耐性 ＊＊  
 混沌耐性 ＊＊＊  
 魔法耐性 ＊＊＊

◆特徴と体質

「フィート」 貴方は幸運の女神の寵愛を受けている  
 「フィート」 貴方は猫よりも速い「速度+10」  
 「フィート」 貴方の防御は鋼のように固い「Protection  
 Value+15」

「フィート」 貴方は見切れる「DefenseValue+4」  
 「フィート」 貴方は我慢強い「耐久+3」  
 「フィート」 貴方は回避に長けている「回避+2」  
 「フィート」 貴方は猛烈な信者だ「信仰+8」  
 「変異」 あなたは鉄のような皮膚を持っている「PV+9」  
 「変異」 あなたの間接はとてもしなやかだ「器用+6」  
 「変異」 あなたの傷は瞬く間にふさがる「自然治癒強化」  
 「変異」 あなたの脳は機械化している「暗記+4」  
 「変異」 あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」  
 「変異」 あなたの皮膚には霜が付いている「冷気耐性強化」  
 「変異」 あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」  
 「変異」 あなたは猫の目をしている「感覚+5」  
 「フィート」 あなたは税金の計算にとっても強い「税金15%減」  
 「フィート」 あなたは仲間を一時的に強くできる

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限－20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備はクリティカルヒットの機会を増やす

あなたの装備は完全貫通攻撃発動の機会を増やす

あなたの装備は変異から保護する

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備はあなたを浮遊させる

あなたの装備は麻痺を無効にする

あなたの装備は出血を抑える

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性

職業…戦士

Lv25 ↓ Lv26

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力103 (100) ー ー

マナ 80 (80) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 125 (96) ー +15

現在値 前回比

筋力…73 (49) ー +2 (+1)

耐久…69 (59) ー -1 (-1)

|      |   |   |     |    |      |
|------|---|---|-----|----|------|
| 器用.. | 6 | 1 | (5) | 1  | (+)  |
| 感覚.. | 3 | 8 | (3) | 0  | (0)  |
| 習得.. | 4 | 6 | (3) | 0  | (0)  |
| 意思.. | 4 | 0 | (3) | +1 | (-1) |
| 魔力.. | 5 | 3 | (4) | -1 | (-1) |
| 魅力.. | 4 | 3 | (3) | -1 | (-1) |

名前..魔道少女の『アリス』  
 種族..神の化身  
 性別..女性  
 職業..魔法使い  
 Lv12 ↓ Lv15  
 ステータス：カッコ内は元の値

|     | 現在値 | 前回比   |
|-----|-----|-------|
| 生命力 | 96  | (90)  |
| マナ  | 150 | (150) |
| 狂気度 | 0   | -     |
| 速度  | 130 | (110) |

|      | 現在値 | 前回比  |
|------|-----|------|
| 筋力.. | 20  | (14) |
| 耐久.. | 20  | (11) |
| 器用.. | 19  | (13) |
| 感覚.. | 22  | (16) |
| 習得.. | 22  | (16) |
| 意思.. | 27  | (20) |
| 魔力.. | 43  | (26) |
| 魅力.. | 17  | (11) |

名前..ネビネイル

種族..神の化身

性別..男性

職業..魔法戦士

Lv25↓Lv26

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 93 (90) 0

マナ 155 (150) 0

狂気度 0 ー ー ー

速度 121 (116) 0 (0)

現在値 前回比

筋力..76 (42) 0 (+0)

耐久..69 (39) 0 (+0)

器用..64 (23) 0 (+0)

感覚..43 (35) 0 (+0)

習得..45 (37) 0 (+1)

意思..44 (33) 1 (+2)

魔力..55 (46) 0 (0)

魅力..35 (28) 1 (+1)

名前..セズバルド

種族..ローラン

性別..女性

職業..魔法戦士

Lv22 ↓ 26

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力106 (100) +3 (0)

マナ 80 (80) ー ー ー

狂気度 0 一一

速度 108 (96) +9 (0)

現在値 前回比

筋力.. 59 (42) +29 (+12)

耐久.. 60 (48) +22 (+13)

器用.. 43 (33) +24 (+14)

感覚.. 24 (23) +6 (+8)

習得.. 22 (25) +2 (+9)

意思.. 47 (31) +17 (+1)

魔力.. 54 (51) +1 (+1)

魅力.. 41 (33) +13 (+3)

名前.. 妹のウレル

種族.. ローラン

性別.. 女性

職業.. 遺跡荒らし

Lv21 ↓ Lv23

ステータス: カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力100 (100) 一一

マナ 80 (80) 一一

狂気度 0 一一

速度 109 (96) +14 (0)

現在値 前回比

筋力.. 52 (40) +9 (+0)

耐久.. 46 (37) +9 (+1)

器用.. 55 (46) +20 (+11)

感覚.. 52 (43) +29 (+21)

習得.. 51 (42) +29 (+20)

|    |    |    |
|----|----|----|
| 魅力 | 魔力 | 意思 |
| .. | .. | .. |
| 4  | 6  | 3  |
| 9  | 2  | 5  |
| (4 | (4 | (2 |
| 0  | 7  | 8) |
| )  | )  | )  |
| +  | +  | +  |
| 9  | 1  | 8  |
| (0 | 2  | (+ |
| )  | (0 | 1) |
|    | )  | )  |

## Lv40. 5: 旅行者と防衛者の夢魔退治 『ノエルの悪夢』

527年10月19日

トレジャーハント依頼を受けてみた。

以前受けた注意は正に的を得たものだった。

どの依頼も『混沌のく』とつくネフィアばかりで、俺ならば窮地に陥る事は無いが、仲間たちはそうもいかないようだ。

ネビネイル、エリー、セズバルドは俺が良く連れ出していただけあって実力が高い。

だが、ウレルには家の事を任せてばかりだったし、アリスは魔法に偏っているので肉体的には弱い。

ちなみに、コロナは既に欄外、完全に自宅警備員……というところ、なんだか人聞きが悪い気がするが、とにかく警備員と化している。勿論、ガードとは違うが。

ウエンデイの方はほぼ完璧に俺の店の店番……というか店長だな、アレは既に。

それはともかく、若干忘れかけてたけど、偶々オモシロイ情報が入って思い出した事柄があったりする。

爆弾魔ノエルとパエルの母、リリーの夢魔病（という名称になって噂されているらしい）に役立ちそうな情報だった。

なんでも、この病氣は夢魔が患者に取り付き、精神世界から患者を攻撃し、精神が折れ切った所で己の眷族にする、というモノらしい。対処するにはムーングートと呼ばれる物を通して患者の精神世界へと潜り込み、夢魔、或いは患者を苛む何かを退治する必要がある、という事だった。

幸いな事に、ムーングートを作る為のムーンストーンはこの手にあ

[illegible]

「んん？」

ススムの呟きに答えるネビネイル。

ススム達は今、こん睡状態が続く爆弾魔ノエルの精神世界にムーンゲートを用いてもぐりこんでいた。

「そうだな」

「……規則性もあったもんじゃないな」

「んだな」

695



ように存在する扉があった。

「この先か」

「楽に行くといいのじゃがなあ」

扉を開け、部屋に入ると二人は一瞬めまいを起こし、妙な物を見る事となった。

——『人は二度死ぬ』という言葉がある。

——お母さんから教わった言葉だ。

何処からか聞こえる少女の声に気づくと、一般家庭の家と思われる場所に二人は何時の間にか居た。

——一度目の死は肉体の死。二度目の死は全ての人の記憶から『自分』が消えてしまう存在の失われてしまう事。

——それはとても悲しい事なのだとお母さんは言う。

——今の私には、それが正しい事なのか確かめる術は無いのだけれど。…だからこそ、この日記をつけようと思う。

「ノエルの声だな」

「『お母さん』というのはノエル嬢のご母堂ですか」

部屋を良く見ると、床には子供が好きそうなぬいぐるみ。本棚には絵本と思われる本のタイトルが幾つか見えた。

——今日、お母さんが死んだ。誰からも顧みられず、私以外に取るものはいない…。

——今、私が感じている悲しみが忘れ去られてしまわないように…。

——私はこの日記帳を開き、筆を執る。

——これは私の記録であり、瞬間の感情と思考を綴った記憶でもあるのだ。

そこまで声が聞こえた時、二人はようやくその声の発信源に気付いた。

「もしかして、この本からか？」

「かも、しませんな」

ススムが日記に触れようとすると、日記は消失し、セピアがかった景色は普通の視界に戻った。

「先に進むか。……しかし、ヒトの心に土足で入り込む……余り楽しい事じゃないな」

「しかし、今回は必要がある故にそうせねばならぬのです」

ススムが苦い顔をして言うと、ネビネイルはキツパリとそう言い、移動を促した。

部屋を出ると、今度は殺風景な通路に出た。

「うん？前の通路とはまた違うな」

「何らかの意味があるのじやろうか？」

二人は疑問を抱きつつも歩みを進め、そして再び扉を潜る。

扉を潜った先の部屋は、重苦しい石の部屋であった。

インテリアが若干異なるが、間取りそのものは先ほどの部屋と変わらないだろう。

「主殿、あの卓の上にまた日記らしきものがありますぞ」

そう言ってススムが触れると、今度は消えずにキッチンと手にとることができた。

「どれどれ……」

[illegible]

<○○月××日>

お母さんが死んで、私は独りになった。お父さんは居ない。死んでしまったのか、何か事情があるのかはわからない…。

[illegible]

<○○月△△日>

争議の式場で、私を養女に迎え入れたい、と申し出てくれた人がいると耳にした。

新しい姓を得ること、住み慣れた家を手放す事には強い抵抗を感じるけれど…。

私はまだ子供で、これから独立して暮らしていくアテもない。

その人の好意を無碍むげにしてしまうのも気が引ける…。

申し出を受け入れるべきなのだろうか？



「……血の匂いですな」

「ああ、けど、気配は無いんだよな」

警戒しつつ歩みを進め、そして突き当たった場所にあった扉を潜ると、そこは拷問部屋としか思えない場所だった。

「おいおい、何だっけいきなり拷問部屋なんだ？」

「それはノエル嬢に聞かねば理解不能ですなあ」

怪しい雰囲気 of 拷問部屋に眉をしかめつつ、その部屋を見て回るが特に日記は見つからなかった。

「……この部屋、ハズレか？」

「いや主殿、こちらに扉がありますぞ」

「ん？じゃあ行ってみるか」

扉を潜った先にあるのは、重苦しく暗い場所で、ただ一つ、大きな墓があるだけだった。

「字がかすれてて、何が書いてあるか判らないな」

「んー…没年だけは大体10年ほど前のものであるのはわかりますな」

「多分、ノエルの母親の墓か？……墓に何かあるか探してみるか」

少し辺りを探索すると、すぐに開けた場所を発見した。

そこは冬の雪原で、母親と思わしき女性と幼い子供が仲睦まじく戯れている光景が見える場所だった。

最初、ソレを見た時は二人は心が少し和んだ気もしたが、すぐにソレは眉を顰める物となった。

「繰り返しているな」

「ええ……もしかすると、ノエル嬢にとって最も幸福だった頃の記憶、一番焼きついている光景なのでしょうな……」

二人はまるで壊れたレコードの様に何度も何度も同じ場面を繰り返すその光景から目を逸らし、来た道に戻ることにした。

「さて、それじゃあさつきは選ばなかった、もう一つの扉をあけてみるか」

扉を潜った先からは、感じなれた気配を感じた。

「なるほど、モンスターか……って、なんで精神世界なのにモンスター？」

「主殿、細かい事は考えず、とりあえず倒してしましましょうぞ」

扉の先の通路にいたのはオークの戦士とマミーの二体だった。

だが、ハッキリと言ってススムとネビネイルを相手にするには相当役不足であるのは言うまでもない。

モンスターをあっさりと切り伏せた二人は、通路の奥に会った扉を潜った。

そこは石造りの部屋で

部屋の隅には本棚や棚、花や観賞用植物などが置いてあった。

そこそこにセンスも良く、二人が想像していたよりもやや豪華な部屋だった。

しかし、部屋の所々に酒瓶が転がっており、ちらかった印象が伺え







「ああ」

「だから、今更オークやダークハウンド程度じゃ障害にもならない  
っての！」

二人は一撃でオークの戦士を粉碎し、ダークハウンドを両断した。そうして、嫌な事が起きていたという事が既に想像できている次の部屋扉をあけた。

「……くさいですな。臭いだけで何が行われたか理解できますわい」

二人は再び日記を見つけると、書いてある内容には多少予測はついたが、それでも日記を開く事にした。

|     |     |
|-----|-----|
| 1   | 1   |
| 2   | 2   |
| 3   | 3   |
| 4   | 4   |
| 5   | 5   |
| 6   | 6   |
| 7   | 7   |
| 8   | 8   |
| 9   | 9   |
| 10  | 10  |
| 11  | 11  |
| 12  | 12  |
| 13  | 13  |
| 14  | 14  |
| 15  | 15  |
| 16  | 16  |
| 17  | 17  |
| 18  | 18  |
| 19  | 19  |
| 20  | 20  |
| 21  | 21  |
| 22  | 22  |
| 23  | 23  |
| 24  | 24  |
| 25  | 25  |
| 26  | 26  |
| 27  | 27  |
| 28  | 28  |
| 29  | 29  |
| 30  | 30  |
| 31  | 31  |
| 32  | 32  |
| 33  | 33  |
| 34  | 34  |
| 35  | 35  |
| 36  | 36  |
| 37  | 37  |
| 38  | 38  |
| 39  | 39  |
| 40  | 40  |
| 41  | 41  |
| 42  | 42  |
| 43  | 43  |
| 44  | 44  |
| 45  | 45  |
| 46  | 46  |
| 47  | 47  |
| 48  | 48  |
| 49  | 49  |
| 50  | 50  |
| 51  | 51  |
| 52  | 52  |
| 53  | 53  |
| 54  | 54  |
| 55  | 55  |
| 56  | 56  |
| 57  | 57  |
| 58  | 58  |
| 59  | 59  |
| 60  | 60  |
| 61  | 61  |
| 62  | 62  |
| 63  | 63  |
| 64  | 64  |
| 65  | 65  |
| 66  | 66  |
| 67  | 67  |
| 68  | 68  |
| 69  | 69  |
| 70  | 70  |
| 71  | 71  |
| 72  | 72  |
| 73  | 73  |
| 74  | 74  |
| 75  | 75  |
| 76  | 76  |
| 77  | 77  |
| 78  | 78  |
| 79  | 79  |
| 80  | 80  |
| 81  | 81  |
| 82  | 82  |
| 83  | 83  |
| 84  | 84  |
| 85  | 85  |
| 86  | 86  |
| 87  | 87  |
| 88  | 88  |
| 89  | 89  |
| 90  | 90  |
| 91  | 91  |
| 92  | 92  |
| 93  | 93  |
| 94  | 94  |
| 95  | 95  |
| 96  | 96  |
| 97  | 97  |
| 98  | 98  |
| 99  | 99  |
| 100 | 100 |

< × × 月 × × 日 >

…今日はお養父さんに言われて、お養父さんの寢室へ足を運んだ。その後の事は……思い出したくない……。あれは何？とても痛くて、気持ち悪くて、身が千切れてしまいそうだった。お養父さんはあんなことを私としたかったの？あんなことをするために、私を屋敷に引き取ったの……？私、どうしよう……コレからどうすれば……。お母さん……。

[illegible]

書かれている内容は字が震え、何かに濡れて滲んだ後があった。ススムはふう、と息を吐き出して呼吸を整えてから先へ進む為に無言で歩き出した。

寢所からは外に繋がっていた。噴水があり、庭木がある場所だった。

「ふん！」

突如剣を抜き放つススム、そこには庭木の陰に隠れていた機械のモンスター、ブレイドΩが潜んでいた。

不意打ちをしようとして逆に自分が不意を撃たれたブレイドΩは無防備にその一撃を受け、倒れはしないものの相当な致命傷を受けた。

「はっ！」

更にもう一撃叩きつけると、ブレイドΩは当たり所が悪かったのか

粉々に砕け散った。

「ダイオウサソリも居ますな、そちらはワシにお任せを！」

他にもキューピッドやアイスハウンド、ゴブリンの魔術師など様々な敵が庭で待ち伏せていたが、二人にかかれればその程度は敵ではなかった。

物の数分もしない内に全て倒し切ると、べつとりと血に塗れた剣を乱暴に振り回して血を掃う。

ネビネイルは、無言で歩を進める自分の主の背を見て悟った。

アレは相当怒っているな、と。

庭から次の部屋へ向かうと思われる廊下を発見し、二人はその廊下へ足を進めると異様な光景に驚かされる。

何時の間にか、雨が降り始め、雷雨となっていた。

雷は建物に当たったのか、周囲が火に巻かれている様子だった。

が、ここまでやってきた二人の敵ではない。

時々、炎を吹き出す様子ではあつたが、それらの炎如きで参るほど二人ともヤワではなかつた。

[illegible]

今日、お父さんが死んだ。：私もこれからどうなるかはわからな  
い。庭に落ちた落雷から火が燃え移り、いま屋敷は真っ赤な炎に包

まれているのだ。

この音……。外では雨が降っているのだろうか？例えそうでも荒れ狂う炎の猛威は収まる事を知らない。

お父さんが死んだ。私の目の前で炎に巻かれて。私を無理やり押し倒し、貫いたまま。私は自由になった。

もしもここから生きて出られる事があるならば、私は炎を信仰しよう。

この炎は私にとって救いの御手であり、神の具現だ。私は私の神に従い、身を捧げ、そして殉教する。

みんな…みんな真つ赤に染まれ。

そう……全てが灰になってしまえばいい……。

[illegible]

——みんな…みんな真つ赤に染まれ…

日記を読み終わった時、二人の脳に直接響くようにノエルの声がそう木霊した。

直後、部屋を一際強い炎が吹き荒れた。

「くっ！」

「ぬぁ！？」

炎が部屋を満たしたとき、その中心には醜く焼け爛れた初老の男が居た。

ソレは上半身こそ上品なスーツを纏っているものの、下半身丸出しで見るからに品性下劣であり、ソレは顔にも現れていた。

「貴様は、まさか！？」

「ひひっ…そうさ…。俺はノエルにお前の想像通りのことをしたさ…。羨ましいか！」

そう叫ぶと下品な笑いを上げながら男は炎に包まれ幾つもの悪意ある炎の塊を生み出す。

「……哀れな奴だ。そんな事しか、誇れるものが無いのか？幼く無力だったノエルを組み敷きいいようにした、ソレしか誇れるものは無いのか？だとすれば、余りにも哀れだなオマエも、お前如きにいいようにされたノエルも」

ススムはそう言って剣を構える。

「お前は幾つもあった選択全てを間違えた哀れな男の残滓でしかない。だが、事ココにいたっても選択を間違えた様だな。そう、俺を、俺たちを怒らせたのは愚かな選択だよ！」

「主殿、周囲の炎はワシが。主殿はあの妄念を叩き切ってください！」

「言われるまでもない！」

ソレは抵抗しようとしたが、まともな抵抗も出来はしなかった。一つ刃を振るえば、腕を切り飛ばし、足を切り飛ばす。

「ひ、ひい……！俺が、俺が悪かった！だから許して……ゆるし」

「黙れ、不快だ、二度と浮かび上がってくるな、畜生風情が……！」

「死ぬが良い！」

真っ向からの唐竹割りは、ソレを容赦なく縦に真っ二つに引き裂いた。

「お見事、会心の一撃ですな」

「……あんな雑魚相手に、そんな事を誉められてもうれしくは無いな」

「ですが、胸がスカツとする良い一撃でした」

「……次、行くぞ。なんだか胸騒ぎがする。やな感じだ」

「ですな。気をつけていきましようぞ」

炎に巻かれた部屋を出ると、打って変わって静かな通路。

その雰囲気は精神世界の入り口と同じ感覚を二人に与えた。

「……なるほど、ナイトメアはこの先に居るのか」

「……ゼームの時以上に嫌な感覚がしますのう」

「いくぞ」

通路の先には青い炎に挟まれた扉があった。

その扉を潜ると、薄暗い部屋に蒼暝の男が音も無く佇んでいた。

二人はその男から強力な力を感じ、目の前の存在に触れるべきではない、と感じていた。

だが。

その横で、ノエルは魔力の霧に囚われていた。

「ノエル！」

——ススム、どうしてここに？

ススムが呼びかけると、ノエルが初めて気がついたかのように反応した。

「お前を目覚めさせにきた！」

ススムがそういうと、ノエルの横に佇んでいた男がようやく反応した。

——少女は自らの破滅を望んだ……。ワタシは渴望を潤し、静寂と停滞の狭間に浮かぶのみ……。

「ノエル嬢が破滅を望んだか」

「ありえなくもないな。だが、アイツは俺のダチだ、眠りっぱなしは困るんだよ。アンタなんだろう？ノエルが眠り続ける原因は」

——ワタシは少女の呼びかけに答え、引き寄せられたに過ぎない……。

「お前は存在そのものが迷惑だ！いなくなれ！」

——ワタシを滅ぼすというなら向かって来るが良い……。

——貴様のユメ、喰らい尽くしてやろう……。

ススムからみて、ナイトメアはススムの倍近い実を持っていると見ていた。

だが、そんな事は関係ないのだ。

「やるぞ、ネビネイル！ノエルを悪夢から開放する！」

「了解しましたぞ、主殿！」

即座に聖なる盾と英雄の魔法を発動し、ついで先制でライティングボルトを打ち込む。

——オロカナ、実力の差も判らぬか

「退けない戦いつて奴なんでね、コイツァ！」

ナイトメアが魔法を用いてススムの精神を弱らせる魔法を用い、心を折りに来るが、それだけで戦闘不能に陥る事はない。  
だが、多少弱気が出てきそうになる。

「畜生、喰らいやがれ！！」

——受けるが良い……

ススムは無心に剣を振るう。

あるのは恐怖でも弱気でも強気でもなく、ただ勝利を得る為に計算し始めた思考とその為に動く肉体のみだ。

魔法の爆風で少々の傷を負うが、お構いなしに剣を振るう。

「るうあああああ！」

——愚か者め……



人を幻惑させるかのような光の束がススムを貫き、精神と肉体を傷つけるが、即座に魔法杖をふるって治癒し再び斬りかかる。

ナイトメアもまた、杖をふるって魔法を放ち、或いは杖を撃ちつけてススムを攻撃するが、ある程度以上の怪我を負った瞬間にススムは即座に魔法杖をふるって回復してしまう。気付けばナイトメアはじりじりと追い詰められていく。

——永遠の停滞を……

「人は、歩み進むからこそ自ら望むモノを手に入れる事ができる！」

「立ち止まっただけは何も得る事は出来ぬのじゃ！それは只人であろうと、神であろうと変わりはせぬ！」

ネビネイルが牽制で血塗られた棍棒を振るい、ススムが本命となる粗野な刃を喰らわせ続ける。

二人はナイトメアの魔法で精神を蝕まれ続けていた。だが、だからこそ理解できる光が見えていた。

——調子に乗るか、ニンゲンが！！

「なっ！？」

追い詰められたナイトメアが、怒りを露に猛反撃を開始する。

吹き荒れる神経を苛むブレスは肉体のみならず神経に直接響く攻撃でススムとネビネイルに襲い掛かった。

一度止んだブレスは、息も付かぬ間に再度放たれる。

「ぐうっ！！癒しの杖よ！」

「治癒の雨よ！！！」

二人は回復を行いながらも何とか凌ぐが、状況は停滞し、やがて消

耗戦に引きずり込まれ今度はススムがジリ貧に陥る。

「っ！」

何とかブレスに耐えながらも刃を振るっていたが、次第にネビネイルが追いつかなくなり、ブレスの衝撃に吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた後、光の粒子となって消えていった。

——次は貴様だ……

「ほざけ、寄生虫が！」

状況は攻撃をしつつ、ナイトメアが転移して逃げる瞬間に不要な魔法杖から魔力を抽出し、その魔力を癒しの杖に魔力を充填して使う、或いは充填の巻物で魔力補充して使うという本当の意味での消耗戦となった。

「っ！！！テレポート！！！！」

——逃さん……

お互いに一進一退。

ナイトメアも既に虫の息だが、ススムの方も既に虫の息だった。

——塵へと帰れ……

「悪しきユメよ、去れ！」

最後の一撃は、2連のブレスが途切れた瞬間に決まった。  
ススムの持つ粗野な銀の剣が、遂にナイトメアを切り崩したのだ。

——……

最後に、ナイトメアが何かを言ったが、その言葉はススムの耳には届かなかった。

荒い呼吸を整えながらススムは消滅していくナイトメアが、最後まで消滅するのを見届け、ノエルの居た場所まで戻る。

「……よう、ノエル。さっき振りだな」

「ススム……」

ススムを見て、ノエルは戸惑った様子だった。

「ナイトメアはぶっ倒した。後はお前が目を覚ませば万事解決だ。さ、行こうか」

「まって」

ススムが目覚めを促すと、ノエルはソレを静止した。

「うん？」

「分からないの……。外の世界でどうやって生きていけばいいのか……」

ノエルはうつむいて喋り始める。

「今まで、養父さんへの怒りと恨みを炎の信仰って思って過ごしてきた。だけど駄目なの」

「何が、駄目だったんだ？」

段々と泣きそうな声でノエルは訴える。

ススムは、理由を優しい態度で問いかける。

「もう、一人は嫌……。私は何時も、結局独りぼっちだった！誰かと一緒にいる人が羨ましかった！」

「……」

「私も…誰かと一緒に居たい…。もう、独りぼっちはいやだよ…」

ノエルは言葉を感情を吐き出すごとに段々と幼い姿へと変わっていく。

その姿は、先に見た母親と戯れる少女より、少しだけ年上程度の少女だった。

「……お前は一人じゃない」

「え？」

ススムは、見た目幼くなってしまったノエルの目線に合わせるようにかがんでそういう。

「お前が孤独だというなら、何で俺はネビネイルと一緒にココに来た？」

「……わからない」

ススムはぽんぽんと優しくノエルの頭を撫でる。

「簡単な答えだ。俺が、俺達がお前の友達だからだ」

「……ともだち」

「ああ、そうだ。それに、ノエルはノエルが思っているよりも多くの人間に想われているんだぞ」

「……うそ」

「嘘じゃない。外の世界じゃお前、もう3年近く眠りっぱなしだけど、その間は盗賊ギルドのマスターがお前を保護してくれてたんだ。あのムツツリオヤジは稼ぎが期待できるからだ、とか言ってたが、そんなの建前だな。キツチリとお前が心配だから、って顔に書いてあった。酒場のマスターや、他にも色んな奴らがお前を気にしてた

ぜ」

「……」

「んで、偶々助け出せるだけの実力があったのが俺たちだ。だから、安心して目を覚ませ」

「……ありがとう、ススム。助けてくれて、ありがとう。馬鹿なんだから……本当に……こんなにボロボロになるまで戦って」

真正面から礼を言われ、なんとなく気恥ずかしくなったススムは目を逸らして照れ隠しを言う。

「なに、気にすんな。俺が俺のしたい様にしただけだ」

「じゃあ、私も私のしたい様にするよ。だから、キツチリ受け取って頂戴、私のお礼」

ノエルはススムの顔を両手で挟み、自分の唇を押し付ける。

「!？」

「……ん。ススム、顔真っ赤だ。お礼のつもりだったけど、良い物が見れたわ。それじゃあ、また現実むじょうで会いましょ」

ノエルはそれだけ言うと、一足先に現実に戻った。

ススムはソレを見届け、世界が消えていくのを確認すると自身も現実へと帰還した。

ナイトメアは恐ろしく強い敵だった。

だが、ススムはその敵に対し、ネビネイルと共にギリギリの戦いを強いられながらも己の知恵と勇気で乗り越える事ができた。

この事実は、ススムの気を引き締めると共に、大きな自信となったのだった。

ノエルが目覚めて数日後…。

「ところで、旦那様。なぜ、ノエルが、旦那様に、引っ付いているのですか？」

「エリー、硬い事言いっこなしよ。惚れちゃったんだから、しょうがないじゃない」

ススムの腕に抱きつきながら、ベーっと舌を出しているノエル。その様子にカチンと来たエリーは愛用の大鎌を構えて言う。

「……ははは、こやつめ。よろしい、表に出やがちなさいメス猫」

「あら、やるっていうなら相手になるわ。猫らしく猫の揺りかご使え」

今日も、ススムの屋敷は平和だ。

「ちょ！本当にキャットクレイドルつかってるんじゃない！！」

……平和だ？

## Lv40. 5..旅行者と防衛者の夢魔退治 『ノエルの悪夢』 (後書き)

いやあ、本気で負けるかと思った！

と、言うわけで、シヨールーム、光なき連鎖ノヴィスさん作『ノエルの悪夢』でしたー！

ゼーム戦よりマジで厳しかったですよ、被ダメがと与ダメが！

本文でも書いてますが、最後の方(残HP1割〜2割)でナイトメアがガチギレしてブレス乱射してきました。

本気で死ぬかと思いました。

途中、癒しとか生命の杖が尽き掛けて、充填の巻物や魔力充填を使えなければまず勝てない相手でした。

なんともまあシリアス？というかダーク？路線なノエルの悪夢。

プレイヤーの自分からしてもHP管理と魔法杖の回数管理が悪夢な回でした。

718

この後に控える混沌の三神やソレ並みからそれ以上のシヨールーム……。

マジで攻略できるんだろうか……？

あ、撃破時のログのスクショ撮っておけばよかったorz

20110807 誤字修正

20110810 色々と修正

## Lv42..旅行者と女神様の改宗勧告と ヨウインを襲った不死者の悲劇

527年10月19日

ノエルをナイトメアの手から救出してから数日。

ちよろちよろっと騒動はあったものの、全体的に特に問題は無いような感じだったので

俺は再び修行兼冒険と観光の旅を再会した。

しかし、確かに命懸けで助けたとは言え、ノエルが公然と

『惚れた』

なんて言っただけに俺に告白してくると思わなかった。

思わず動揺したよ、マジで。

エリーも最初は受け入れがたそうだったが、一夫多妻、あるいは多夫一妻もありうるイルヴァなので余り良い顔はしなかったが…。

『旦那様ほどの方であれば、妾が居てもおかしい事ではない』

なんて言っただけ、許すと言っていた。

俺としてはもう少し独占欲を抱いてくれると嬉しいのだが、そこはソレ、生まれの違いによる価値観の相違ってやつなのだろう。

まー、なんだかんだで拒否しない俺も、相当に気が多くて色好きって言うわけなんだが。

あ、ちなみに、一夫多妻とかやってるのは主に金持ちと豪族と貴族王族、後は時々荒稼ぎしてる冒険者なんかもだ。

一般人はふつーはそういうこと出来ません。経済的な意味で。



ちなみに、俺の場合は分類上では荒稼ぎしてる冒険者になる。

屋敷を持つてる上にメイドや執事、お抱え商人に部下多数、コレだけいりゃ、普通に金持ちだわな。

更に、収入源は基本的にネフィア産なので原価は食料を得るための資金と、魔法を使った分だけの魔道書購入費用、その他といった感じだ。

この世界での自分のスタート時点を思い出すと、中々に成り上がったもんだよなあ…。

ああ、そうそう。

ノエルに関しては直ぐに結婚、という訳には行かなかった。

俺の方が心が決まっていなかったからというのもあるし、ノエル自身も『足を洗ってから、改めて会いに行く』と言い、それまでは見守って欲しいとのことだった。

さて、ぶっちゃけ俺自身、自分で言うのもなんだが、女好きだから、余り拒む気はない。

けど、それにしたって結婚ともなれば互いにキッチリと考える必要があるだろう。

特にノエルに関しては吊り橋効果みたいな感情も強いだろう。

だから、冷却期間がある、というのはかえってありがたかったかもしれない。

そういえば、ナイトメアは本当に強かった。

次は負けるかもだし二度と戦いたくは無いな。

[illegible]

その日、ススムは夢を見た。

何時かの様に癒しの女神ジュアが現れる夢だった。

「こ、こういう風に会うのは久しいわね、ススム」

「ええ。お久しぶりです、ジュア様」

「アンタの活躍。私も聞いているわ。魔界の住人、ナイトメアを打ち破ったとかね。よくやった……って言いたいけど！ 無茶し過ぎよアンタ！！」

ジュアはそういつてススムを叱り始める。

ススムは何故唐突にしかられたのか理解できず、目を白黒させる。

「今に始まつた事じゃないけど、敢えて今言うわ！本来、命は一つしかない大事な物なのよ！そりゃアンタは確かに上位世界存在で、私たち神に近い存在だから死ぬ、いいえ、消滅する事無く蘇る。だけど、アンタの奥さんや子供、その他の人間の仲間達はそうじゃないのよ！？」

「?！」

ススムはその言葉に、無意識のうちに自分の命どころか、仲間の、家族の命まで軽く見始めていたことに気づかされる。

ススムは死ぬ事なく蘇る不死の存在だ。

だが、エリーもアリスもその他、ネビネイルを除いた全ての仲間の命は有限なのだ。

そんな当たり前のことを、ススムは何時からか意識から除外し始め

ていた。

「確かに、何かの為に無茶をしなきゃいけないのは分かるわ。でもね、ソレが当たり前になってしまうのは間違いなノ！アンタ、そんな事続けてたら、娘がソレを真似て無茶して死んでしまうようになってしまうのは嫌でしょう？」

「ソレは嫌だ。……分かった、これからはもっと無理のない範囲で行動する。俺だって、可愛い娘や嫁さんを死なせたいわけじゃないんです」

「……（こいつは、こんな所出まで惚気ちゃって）……分かったのなら良いわ。今日はお説教以外にも、もう一つ大事な話があるわ」  
「大事な話、ですか？」

ススムが尋ね返すと、ジュアは目を瞑り、呼吸を正してから覚悟を決めたように言う。

「アンタ、改宗しなさい」

「カイシュウ……回収？物を持って来いってことですか？」

言葉を見事に聞き違えたススムがそう返すと、ジュアが鋭く突っ込みをいれる。

「違うわよ！別の神を信仰しろって言ってるの！」

「ど、どうして？！今更別の神様とか、考えられないですよ！」

「つべこべ言うな！悔しいけど、私の癒しの力だけじゃ、今後のアンタを支えるには不足なのよ。他の神々から神器の下賜や加護、それに下僕を得るくらいじゃなきゃアンタの目標が達成できないの！」  
「……っ！」

癒しの女神ジュアの加護、それは戦闘での直接的な影響は少なく、

どちらかといえば回復等の加護だ。

更にその加護を受けている間は治癒能力や料理技能、瞑想や解剖学などの上達に影響が出るが、それもやはり補助的なものだ。

純粋な力が必要な場面では、ジュアの加護は時に非力過ぎた。

そもそも、ススムがその気になればジュアの加護による治癒は確かに治癒能力が高い。だが、発動する為にはススムの体力をそれなりに使用してしまうのだ。もしソレで更に追い詰められてしまうということを考えれば、細かい軽傷治癒の乱打やそれ以上の治癒魔法を使った方が効率が良くなるのも時間の問題だった。

だが、ススムがそうする事は無かったのだ。

それは無意識にジュアに対する情がそうする事を拒んだのだ。

如何にこの世界に適応し、魔物であろうが人間：老若男女、問わず敵を切り殺してきたススムでも一つだけ何時までも変わらないところがあった。

それは、一度気に入った相手を良いように見すぎてしまう悪癖にも近い性分。

勿論、手痛い、許す事のできない事をすれば激昂するし、場合によっては激情のままに相手を殺してしまう事もありうるだろう。

だが、それでもススムはどこか御人好しで、少なくとも、自分から裏切りのような行為を働きたいと思う性分ではなかった。

改宗すると言うことは、今までの神を裏切り、別の神の下に着くと言う風にススムは認識していた。

それは、強ち間違いではない。

神は信者の信仰心によってその存在の規模が変わる。

信仰が強ければ、強い神であり、信仰が弱ければ弱い神だ。

そして、神はその強弱に関わらず己を信仰を強くするモノには加護を齎し、より強い信仰心を持つモノには神器を授けるものだ。

その神が、自分を信仰する人間に宗旨替えをしろというのは、どれだけ異常な事か、ススムには想像もつかない。

神はその性質上、どのような信者でも、例えばどれだけ厄介者であつても他の神を信仰しろ、という事は言わない。

だからこそ、ススムは思い知らされざるをえない。

女神ジュアは信仰<sup>チカラ</sup>を得ようとする神としてではなく、自分を慈しむ存在として自分に改宗を勧めているのだ。

「――癒しの女神、ジュア様。今まで、お世話になりました…っ！」

ススムは深く頭をたれる。

今まで世話になった感謝の意を込めて、未練を残さないという決意を込めて。

そして、男として自分の泣き顔など見せまいとして。

ジュアもソレを悟ってか背を向ける。

「――目覚めの時間よ。観光客のイスルギ（……）。アンタが目指す旅の終わりは果てなく遠い、決して諦めるんじゃないわよ」

「――はいっ！」

これが、女神ジュアと観光客の石動進の一時の別れであつた。

「だんなさま、うるさいです」

まだ太陽が昇らぬ早朝、突然寝ながら叫んだススムの寝言で起こされ、イラつときたエリーは、寝惚けたままススムの鼻っ面に裏拳を叩き込む。

コレは単純にススムが寝言を叫んだからだけではなく、他所<sup>・</sup>の（・）女に気を取られている事を敏感に察知した女のカンから来る行動で

もあった。

容赦のない寝惚けたままの一撃はススムの鼻っ面に叩き込まれ、ススムを悶絶させた。

それですっきりしたのか、エリーは再び横になって悶絶した状態からやや落ち着いたススムを抱き枕に再び眠り始めるのだった。

翌朝、ススムは家族と仲間たちに今朝見た夢の内容を告げ、そして自身の決意を告げると、全員で神々の休戦地へと赴く事となった。ススムとネビネイル以外が遠足気分なのは割としょうがない事だろう。

「わぁ……かみさまのきゅーけーちってなんだかすごく不思議な感じだね、お母さん！」

「神々の休戦地よ、アリス。……神々がいらっしゃる場所だから、そう感じるのかもしれないわ。」

「あ、見てアリスちゃん！あそこに猫っぽい銀色のが居るわよ！」

「……俺の決意が、この光景見てるとすごい軽く感じるなあ」

「主殿、普通は主殿の様な敬虔な信徒はそういう風に感じるものですよ。特に本人ですから……とはいえ、奥方達が率先してああいう明るい雰囲気を出してくれるのは悪い事でも有りますまい。ジュア様も、主殿が何時までも引きずる様では困ってしまわれますぞ？」

ネビネイルがそう言ってため息をついたススムに言葉をかけると、次は母親に甘えるアリスの相手をしていたエリーがススムに声をかける。

「旦那様、近接戦闘を主とする旦那様の戦い方を鑑みれば、地のオパートスもまた素晴らしい加護を与えてくださると思います。かの神は大地の神であると同時に戦神でもあります」

その言葉に反応して、セズバルドとウレルも思ったことを口にする。

「そういえば、オパートスの加護って確か防御特化だったかしら？ スムの戦い方だと、盾が無いから防御が薄いし、丁度いいんじゃないかしら？」

「お兄ちゃんも、拘りがあるのは良いけど、盾ぐらい持った方が良いと思うよ？ 絶対今より安定するよ」

スムは思わぬ方向からの口撃に面を喰らい、同時に少し落ち込んだ。

自分の戦い方、そういう風に思われてたのか、と。

「……うゝああゝ……。まあ、なんだ、行ってくる」

そう言って、神々の休戦地の神殿内部に入ったスムは、何時ものように聖域に入り込むと

『ふうははははー！』

「うおわっ!？」

真正面に、暑苦しく豪快な大笑いをする筋肉の塊、もとい、地の神オパートスがそこにいた。

見た目2メートル近い、まるでギリシャ神話のヘラクレス等を想像させる筋骨隆々とした偉丈夫。

髪の毛は矢鱈に長く、そして伸ばし放題ではあるが、不思議とそれはそれで味がある、と思わせる状態となっていた。

『ふむ、ようやく来たか、上位世界よりの観光客イスルギ・ススムよ!』

「え、あ、はい。えっと、もしかして俺を待っていましたか?」

『うむ! ジュアから直接、貴様を我が信徒とし、戦働きを更に励めるように加護を与えて欲しいと頼まれていたからな!』

ヌワハハハ!と豪快に笑うオパーツスを尻目に、ふとこの辺りに着てから妙にオパーツス信仰をプッシュされていた事を思い出す。

「(もしかして、皆がプッシュしてた理由ってココでオパーツ様が待ち構えてたからか??)」

そう思考するが、考えても埒が無い事だと思い考えを中断する。

『さて、ワシとしても貴様は我が敬虔な信徒の困難を救った事のある人間だ、快く歓迎しないでもないが、貴様はどうだ?』

「……そのお心遣いに感謝を。旅の最終目標、私の生まれた世界に帰る為に、是非、加護を賜りたい」

ススムの言葉を聴き、オパーツスは真剣な表情でススムを見返す。

『貴様の生まれた世界、上位世界か……その道のりは厳しいぞ?』

「元より承知の上です」

『ハッキリ言えば、神である我らですら、上位世界を目指すとなれば更に上の位階へと進ませねばならん程だ。貴様にそれだけの事を成し遂げる覚悟はあるか?』

「この世界に来て、限界って言うのは無茶してでも突破する物だと



知った」

ススムが堂々とそういうとオパートスはニヤリと笑う。

『ならば、ワシから貴様に一つ試練を与えてやろう。なに、遣り様によつては命の危険は限りなく小さい試練だ』

「試練、ですか？」

『城を持て。一国一城の主となれ。それがワシが与える試練だ』

「……しかし、それに何の意味が？」

ススムは城を手に入れることに、何の意味があるかを理解できず、思わず問い返す。

『何、難しい話ではない。強き力を持つ者はその力に魅せられたモノが寄つて来る。それは善良なる者ばかりでなく、時に厄介事もな。それらを牽制する為に、力のみならず名声、そして威厳が必要なのだ貴様とて、すっぱで貧弱な体付きの冒険者よりも、重武装の冒険者の方が手強く感じるであろう？他にも、周囲からアイツは強い強いと言われている奴は多少頼りなさ気でも警戒してしまうだろう？つまり、そういう事だ。さて、そろそろ戻るが良い。貴様の活躍、ココから見ているぞ！ふははははは！』

オパートスは言うだけ言うと、最後に笑ってススムを元居た場所に戻した。

「お城？お父さん、わたし絵本で見たようなすっごいお城にすんでみたーい！」

「ははは、ま、折角目指すんだしそれも良いな。ま、そう言う訳だ。みんな、次の俺達の目標は城を手に入れる事だ！」

「お城かぁ……ねえ、セズちゃん、お城って確か100万ぐらいだ

っけ？」

「そのぐらい……だったかしら？ 後でどのぐらいの値段で売ってるか、調べなきゃいけないわね」

「しかし主殿、城ともなると、例え小さな城であつたとしても税金が恐ろしい事になりそうじゃな」

「……言わないでくれ、考えないようにしてたんだ」

城を手に入れるという事には誰からも反対は出なかった。

しかし、ネビネイルからのみ税金の話題が出て若干気が重くなるススム。

「旦那様、頑張りましたよ。お金を稼ぐのは、旦那様だけではなく、皆でやればよいのです」

「そうだな。みんな、苦勞をかける事になるけど、よろしく頼むぞ！」

『おー！』

ススム達が目標新たに決意を固めていた頃。

農村、ヨウインの疎らに存在する民家の一つで異変が起きていた。

「あ……がっ！？ぐ……げぎゃがっ？！」

寸前まで談笑していた筈の隣人が、突如苦しみ始め、狂ったように喉を掻き毟り、目は一瞬で窪んで暗く怪しい光を放ち始め、骨格が肥大化し、ゴギンゴギンと音を立てて骨格のみならず肉体までもが肥大化し、肌の色は生者のそれからまるで死人の物へと代わっていく。

「あああああううううう……」

「あ、あああああ、ひ、ひいいい！！」



しかし、そのどれもが癖が強く、我も強く、制御不能なのだ。

そんな輩が出向けば、かつて起きたパルミアの核爆弾テロ事件と同等レベルの災いとなりかねない。

そういう認識をされているのだ。

実際に、小さい集落に現れた突然変異主討伐を依頼したら、集落と住民ごと炎に消えたという話もあるとノエルは言う。

「と、言う訳らしいわよススム。というか、何で私こんなメッセンジャーみたいな事してんだろ？」

「カタギっぽい仕事を紹介してくれって言うからギルド紹介したんじゃない……俺が」

「いや、そうなんだけどね」

ノエルは余り釈然としないのか、軽いため息をつき、ススムはとりあえず話を進めようと口を開く。

「しかし、よく分からんけど相当に強いのか？」

「パルミア特務部隊が動くぐらいだし、相当だわ。アレが動くって言うのと、災害並みに被害が出るモンスター相手の時ぐらいらしいわよ？組織されたのは割りと最近だけど、出動頻度は異形化事件や突然変異事件の生でかなり多いそうだし」

「……何とまあ。……そうだな、最近ちよっと壁を感じ始めてたし、限界突破には丁度良い」

ススムはそう言ってにやりと笑い、声を張り上げる。

「ネビネイル！皆に準備をさせろ！完全武装だ！ヨウインで怪物退治としゃれ込むぞ！」

昼間のヨウイン、普段であれば農村ではあるもののそれなりに活気があり、穏やかな雰囲気がある村は、パルミア特務部隊の兵士と傭兵、そしてススム達イスルギファミリーが完全武装で今回の討伐対象、デミリッチに備えていた。

以前であれば、解放軍がヨウインを拠点に活動していたので更に戦力アップが見込めたが、今はタイミングが悪い事にサウステイリス地方で活動しているらしく、彼らとの共闘は不可能だった。

「しかし、デミリッチが相手か……聞いた限り、変異種ってヤツツばそうだし……今から戦うのが憂鬱だな」

「リッチといえば、テレポートを使って逃げ、遠距離から暗黒の矢等で狙撃もしてきます……私のような近接戦闘主体ではかなり厳しい戦闘になりそうです」

「……だな。あー、戦力的に不安なアリスとウレルは置いてきた方が良かったか？下手したら腕力とかも洒落に並んだろうし。ウレルはギリギリ何とかなるかも知れんけど、アリスは近づかれたら終わりだし……」

「旦那様、最早時間が有りません。このまま行きましょう。いざと言う時は可能な限り庇う様に動けば何とかなりましょう」

「そうだな……やれる限り、やるしかない、か」

「なんて言ってた結果がコレかよ！？くそっ、戦闘不能ってだけで済んだのが不幸中の幸いッ！！」

「ぐっ、なんて怪力……流石は怪物かっ！！」

噂をすれば何とやら、デミリッチが登場したのはススムが覚悟を決めて直ぐであり、開戦直後にアリスとウレルが撃破された。

ウレルは魔法で撃ち抜かれ、一度頭部を粉碎され、直後にネビネイ

ルがレイハンドで再生させるも、即座に再び魔法で腹部に大穴を開けられ、辛うじて死んでいないが、戦闘不能であり即座に帰還の魔法で屋敷に送られ、アリスはそれに動揺した所を驚くべき速度で距離を詰められ、魔法で牽制する前に殴り飛ばされ左腕を粉砕骨折させられ、更に右足をミンチにされ即座に帰還の魔法で離脱する破目になった。

その状況にススムとエリーは憤るよりも先に戦慄した。

ウレルはメンバーの中でも戦力的には微妙ではあるが、それでもこの場の人間と比較すれば強い部類だ。

そしてアリスも幼い子供ではあるものの、魔法の天才であり戦闘においても才能を発揮する天才児だ。

その二人が、成す術もなく倒されたというのは、詰まり、それなり以上の強敵であると言う事だ。

「この場に居る全員に告げる！この戦いは死にたく無いヤツはケツをまくって逃げろ！命知らずの馬鹿だけ俺に続け！こいつをここで倒さなきゃ、ヨウインが滅ぶぞ！！」

そう告げ、ススムは『英雄』と『聖なる盾』の魔法を発動させる。

「エリー！ネビネイル！セズバルド！往くぞ！！」

「奴の首、刈り取ってくれようぞ！」

「相変わらず人使いの荒い主殿じゃ！」

「いい加減なれました、わ！」

ススムが先ず最初に接近し、それまでの時間を稼ぐようにセズバルドが機関銃を連射する。

しかし、放たれた弾丸はリッチの三次元的な不可思議な動きでたやすく回避された。



かる。

「ウー…」

短い呻き声がテレポートの詠唱となり、刃が届く寸前でデミリッチの姿が掻き消える。

「クソッ！何処に消えやがった！！」

「うつけども、後ろだ！！」

戦士達の背後に現れたデミリッチが豪腕を振るおうとする所を、エリーが大鎌で腕を斬り付けて攻撃を怯ませる事に成功する。

「次はワシじゃな！」

ネビネイルが愛用の血塗れの棍棒ブラッドムーンでデミリッチの足を狙って痛烈な一撃を繰り出す。

叩きつけられた箇所には炎が燃え盛り、デミリッチに効果的にダメージを与えるがネビネイルは難しい顔をして即座に距離を取った。

「こやつ、異常なまでに硬すぎる！！」

「ミスリルゴーレムとてここまで硬くは無いが……くく、血が猛る、このような強者と戦えるとはな！是非もないわッ！！」

「……久しぶりの戦闘狂状態ですわね」

「奴の一撃は重いぞ！一撃離脱に徹しろ！致命傷は確実に避けるんだ！！傭兵や特務部隊とも連携して攻撃を受けないようにするんだ！」

ススムから新たに指示が飛ぶその声を聞くと3人の体に改めて力が漲るのが感じ取れた。



そうしている内にもパルミア特務部隊の何人かが文字通り粉碎され、傭兵隊も数名が魔法の餌食となってミンチになった。

デミリッチのレポートによる奇襲が迎撃の難易度を以上に高めているのだ。

「くそ！普通のデミリッチならとくにお陀仏だったのに、何なんだコイツは！！」

「普通じゃないデミリッチということだろう！？とにかく、一気に決めるぞ！今までの攻撃で多少は動きが鈍い！」

ススむが叫ぶと、セズバルドが機関銃を構える。

「それではほーら、弾丸の雨ですわ！皆さんもご一緒に！！」

「うおおお！銃身が焼き付くまでうち続けてやらあああ！」

「弓は連射にむかねーんだがな！」

矢が弾丸が、ありとあらゆる手段の遠距離攻撃が雨霞とデミリッチに襲い掛かる。

しかし、当然の如く穴はある。

前衛への被弾を避ける為の穴を利用しデミリッチは回避する。

「それが狙いなんだよ！」

ススムが袈裟切りから払い抜けへの連携攻撃を加える。

今までと違い、真正面から確かに肉を、臓腑を引き裂きく会心の一撃を刻み込む。

「怯んだのう？その隙が命取りじゃて！」

ネビネイルが続けて、デミリツチの背後から背を砕かんとばかりに叩き棍棒の先に着いた棘付き鉄球で叩き、体制が崩れた所でもう一撃、今度は後頭部に叩き込む。

その勢いで軽くデミリツチが飛ぶ。

「アハハハ！その首、貰ったぞ！！」

エリーが嗤いながら、大鎌を振るう。

大鎌による一閃は狙い変わらず無防備に吹き飛んできたデミリツチの首を刎ね飛ばした。

「デミリツチ変異種、討ち取ったり！！」

刎ねた首を念の為に踏み砕き、エリーは高らかにそう宣言したのだった。

その後の調べで、今回の事件に関して分かった事がいくつかあった。ギルドの調査によると、デミリツチになったのはこの村の若者で、来週には恋人と結婚が決まっていた青年だったらしい。

彼がデミリツチに突如変貌した理由も判明した。

彼の友人で、彼の恋人に横恋慕をしていた男の嫉妬によって酒に突然変異の薬という魔法薬が混入されていたのだ。

何故、これらが分かったかというと、デミリツチ出現直後に殺されたと思われる死体の懷に問題の薬があり、更に男の横恋慕は聡い者達ならば気づいていた事だったのだという。

「やれやれ、この手の話しは嫌な気分になる」

「……けど、嫉妬に関しては分からなくも有りません」

ヨウインからの帰還中、ススムはそう吐き捨て、しかしエリーは若

干の同情を持ってそう口にした。

「エリーが嫉妬してくれるのは嬉しいな。それだけ愛されてるってワケだ。ところでエリー、この間探索したネフィアで拾った武器に神器級があったんだが」

「イイですね。是非とも拝見させてくださいな」

「ははは、了解了解」

という訳でお待たせいたしました。

自分自身でもまさか3ヶ月も時間があくななんて思いもしなかったです。

今回はジュアからオパートスへの改宗と変異種デミリッチとの戦闘でした。

デミリッチはLv71で普通にボスと戦う並にきつかったです。ペット全滅防止的な意味で。

ぶっちゃけススムの方にもとんでくる高Lv魔法は割と痛かったです。

1発で1割くらいHP削れましたがな。

トドメにかんしては、流れるにはまんま文中の通りです。

エリーがおいしい所を持ってきました。

クリティカル首狩りでダメージ1万2千越えて……コエー……。

それでは、恒例のステ晒しです！

名前..ススム（石動進）

種族..神の化身（現代日本人）

性別..男性

職業..観光客

信仰..癒しのジュア↓地のオパートス

Lv40 ↓ Lv42

ステータス:カッコ内は元の値

現在値      前回比

生命力102      (96)      0 (0)

マナ      153      (153)      一一一

狂気度 0 一一一  
速度 158 (104) -4 (+1)

名声 44964 +12726  
カルマ 0 一一一

|      | 現在値      | 前回比      |
|------|----------|----------|
| 筋力.. | 107 (85) | +9 (+4)  |
| 耐久.. | 88 (67)  | +12 (+5) |
| 器用.. | 105 (71) | +8 (+7)  |
| 感覚.. | 105 (82) | +11 (+5) |
| 習得.. | 94 (81)  | +8 (+7)  |
| 意思.. | 69 (51)  | -11 (+2) |
| 魔力.. | 62 (48)  | +5 (+5)  |
| 魅力.. | 67 (46)  | +5 (+5)  |

## 装備

頭 .. ★祝福された《賢者の兜》+3 [4, 15] : (看破, 耐酸性, 不燃, レア, 耐久維持, 詠唱 [ \* ] (+3), 解剖 [ \*\* ] (+7), 魔法耐性 [ \*\* ] (+75), 幻惑耐性 [ \*\*\* ] (+125), 魔力+5, 混乱無効, 透明可視化)

首 .. ★祝福された《ツインエッジ》+2 [0, 4] : (耐酸性, 不燃, 二刀流 [ \*\* ] (+14), 運勢+4, 筋力+4, 追加打撃 [ \*\*\* ] (+1))

背中.. ☆祝福された古なる防護外套『姉殺しの時間』+2 [15, 8] : (耐酸性, 不燃, 速度維持, 意思維持, 器用維持, 筋力維持, 信仰 [ \*\* ] (+8), 鍊金 [ \* ] (+3), 詠唱 [ \* ] (+3), 盾 [ \* ] (+3), 探知 [ \* ] (+1), 交渉 [ \*\* ] (+7), 遺伝子学 [ \* ] (+1))

胴体.. ☆祝福された赤く染まった輪鎧『呪われた蛇』+4 [18,

45]：(耐酸性，不燃，心眼「\*\*」(+5)，裁縫「\*」(+2)，軽装備「\*」(+1)，意思+8，生命力+3)  
利手…★祝福された《クレイモア》+4 (3d14+16) (1)  
：(耐酸性，不燃，レア，両手持ち適正，筋力維持，暗黒耐性\*  
+25)，クリティカル「\*\*\*\*\*+」，完全貫通「\*\*\*\*\*  
」，変異保護)

手…一

指…★祝福された《パルミア・プライド》+2 [15，5]：(耐酸性，不燃，詠唱「\*」，暗黒耐性「\*\*\*」，混沌耐性「\*\*\*」，運勢+15，速度+8，魅力+12，盗難防止)

指…祝福された白銀のスピードリング+1：(不燃，暗黒耐性「\*\*\*」(+50)，速度+18)

腕…☆祝福された赤く染まった軽手袋『ドウルエオン』+3 (13，0) [10，9]：(不燃，耐酸性，魅力維持，生命力+3，浮遊，麻痺無効)

腰…★祝福された《紅凜》+3 [2，15]：(耐酸，不燃，レア，魔力維持，習得維持，詠唱「\*」，地獄耐性「\*\*\*\*\*」，火炎耐性「\*\*\*\*\*」，出血抑止)

足…★祝福された《ダルIIイIIサリオン》+2 [16，7]：(耐酸性，不燃，レア，運勢維持，旅歩き「\*\*\*」(+5)，隠密「\*」(+1)，器用+6，呪い保護「\*\*\*」，MAP移動短縮「\*\*\*」)

遠隔…★祝福された《異形の森の弓》+3：(耐酸性，不燃，レア，異「次元の手「\*\*\*」，毒追加攻撃「\*\*\*\*\*」，感覚維持，器用維持，詠唱「\*」(+3)，毒耐性「\*\*\*\*\*」(+150)，器用+10)

矢…古なる矢束(1d15+1) (5)：(耐酸性，不燃，炸裂「9発」，連射「70発」，詠唱「\*」(+3))

装備重量…32・3s (中装備)

命中修正…13

ダメージ修正…4

DV／PV…84／192

### ◆スキルと特殊能力

|      |           |       |           |
|------|-----------|-------|-----------|
| 戦術   | Lv41. 257 | ↓     | Lv42. 256 |
| 重量挙げ | Lv47. 173 | ↓     | Lv50. 215 |
| 両手持ち | Lv35. 286 | ↓     | Lv36. 996 |
| 治癒   | Lv37. 509 | ↓     | Lv40. 254 |
| 採掘   | Lv17. 652 | ↓     | Lv21. 022 |
| 盾    | Lv16. 456 |       |           |
| 重装備  | Lv6. 271  |       |           |
| 中装備  | Lv15. 222 | ↓     | Lv15. 864 |
| 鍵開け  | Lv24. 928 | ↓     | Lv25. 995 |
| 二刀流  | Lv18. 955 |       |           |
| 軽装備  | Lv7. 485  |       |           |
| 回避   | Lv35. 941 | ↓     | Lv37. 631 |
| 罨解体  | Lv2. 906  | ↓     | Lv3. 094  |
| 裁縫   | Lv1. 100  |       |           |
| 宝石細工 | Lv6. 578  | ↓     | Lv6. 676  |
| 窃盗   | Lv1. 765  | ↓     | Lv2. 493  |
| 隠密   | Lv47. 281 | ↓     | Lv50. 771 |
| 探知   | Lv11. 414 | ↓     | Lv12. 867 |
| 自然鑑定 | Lv25. 444 | ↓     | Lv27. 478 |
| 釣り   | Lv16. 187 | ↓     | Lv18. 134 |
| 心眼   | Lv12. 186 | ↑New? |           |
| 見切り  | Lv34. 515 | ↓     | Lv34. 866 |
| 射撃   | Lv17. 807 | ↓     | Lv20. 278 |
| 読書   | Lv44. 515 | ↓     | Lv49. 137 |
| 遺伝子学 | Lv24. 360 | ↓     | Lv24. 738 |

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 解剖学   | L v 1 9. | 4 2 2 | ↓ | L v 2 1. | 4 9 8 |
| 暗記    | L v 3 1. | 2 4 4 | ↓ | L v 3 5. | 9 2 3 |
| 錬金術   | L v 2.   | 2 3 8 | ↓ | L v 2.   | 2 7 8 |
| 栽培    | L v 1 4. | 5 9 8 | ↓ | L v 1 6. | 0 3 7 |
| 料理    | L v 1 6. | 3 1 6 | ↓ | L v 1 8. | 6 6 8 |
| 魔力の限界 | L v 2.   | 2 6 4 | ↓ | L v 2.   | 6 3 3 |
| 信仰    | L v 3 7. | 8 8 0 | ↓ | L v 3 9. | 4 5 0 |
| 旅歩き   | L v 2 6. | 2 1 5 | ↓ | L v 2 7. | 8 2 6 |
| 乗馬    | L v 4.   | 6 5 2 |   |          |       |
| 瞑想    | L v 3 0. | 1 1 3 | ↓ | L v 3 1. | 8 8 3 |
| 詠唱    | L v 2 8. | 7 7 6 | ↓ | L v 3 0. | 8 3 0 |
| 魔道具   | L v 2 0. | 3 3 1 | ↓ | L v 2 1. | 3 3 9 |
| 交渉    | L v 4 4. | 3 2 1 | ↓ | L v 4 7. | 4 6 2 |
| 投資    | L v 3 1. | 8 7 7 | ↓ | L v 3 3. | 4 0 1 |
| 演奏    | L v 4 3. | 1 8 0 | ↓ | L v 4 5. | 5 8 6 |

◆武器の専門

|       |          |       |   |          |       |
|-------|----------|-------|---|----------|-------|
| 長剣    | L v 3 6. | 3 5 5 | ↓ | L v 4 0. | 0 7 7 |
| 斧     | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 格闘    | L v 1 2. | 8 2 8 | ↓ | L v 1 3. | 4 9 6 |
| 鎌     | L v 2 0. | 6 3 4 |   |          |       |
| 鈍器    | L v 9.   | 2 7 2 |   |          |       |
| 槍     | L v 1 3. | 6 7 6 |   |          |       |
| 杖     | L v 1 4. | 1 5 2 |   |          |       |
| 短剣    | L v 1 0. | 5 9 9 |   |          |       |
| 弓     | L v 2 3. | 6 2 5 | ↓ | L v 2 5. | 8 0 8 |
| クロスボウ | L v 4.   | 0 0 0 |   |          |       |
| 投擲    | L v 1 0. | 6 7 5 |   |          |       |
| 銃器    | L v 8.   | 6 7 1 | ↓ | L v 9.   | 7 8 3 |



◆耐性と抵抗力

火炎耐性 ＊＊＊＊

冷氣耐性 ＊＊

電撃耐性 ＊＊

暗黒耐性 ＊＊＊＊

幻惑耐性 ＊＊＊

毒耐性 ＊＊＊＊

地獄耐性 ＊＊＊＊

音耐性

神経耐性

混沌耐性 ＊＊＊

魔法耐性 ＊＊＊

◆特徴と体質

「フィート」貴方は幸運の女神の寵愛を受けている

「フィート」貴方は猫よりも速い「速度＋10」

「フィート」貴方の防御は鋼のように固い「Protection

Value＋15」

「フィート」貴方は見切れる「DefenseValue＋4」

「フィート」貴方は我慢強い「耐久＋3」

「フィート」貴方は回避に長けている「回避＋2」

「フィート」貴方は猛烈な信者だ「信仰＋8」

「変異」あなたは鉄のような皮膚を持っている「PV＋9」

「変異」あなたの間接はともしなやかだ「器用＋6」

「変異」あなたの傷は瞬く間にふさがる「自然治癒強化」

「変異」あなたの脳は完全な機械だ「暗記＋8」

「変異」あなたは魔法に耐性がある「魔法耐性強化」

「変異」あなたの皮膚には霜が付いている「冷氣耐性強化」

「変異」あなたは非電導体質だ「電撃体制強化」

「変異」あなたは鷹の目をしている「感覚＋10」

「フィート」あなたは税金の計算にとっても強い「税金14%減」

「フィート」あなたは仲間を一時的に強くできる

「先天」あなたは罪悪感を感じない「カルマ上限－20」

「先天」あなたは周囲の狂気を緩和する

あなたの装備は透明な存在を見る事が可能にする

あなたの装備は混乱を無効にする

あなたの装備は追加打撃の機会を増す

あなたの装備はクリティカルヒットの機会を増やす

あなたの装備は完全貫通攻撃発動の機会を増やす

あなたの装備は変異から保護する

あなたの装備はアイテムを盗まれなくする

あなたの装備はあなたが浮遊させる

あなたの装備は麻痺を無効にする

あなたの装備は出血を抑える

あなたの装備は呪いの言葉から保護する

あなたの装備は速度を上げ、ワールドマップでの移動速度を短くする

名前…エリー（エリュシオン）

種族…ローラン

性別…女性

職業…戦士

Lv26 ↓ Lv27

ステータス：カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力103 (100) ー ー

マナ 80 (80) ー ー

狂気度 0 ー ー

速度 125 (96) ー ー

現在値 前回比

筋力…73 (49) +5 (+4)

耐久…69 (59) 0 (0)

|      |   |   |     |    |      |
|------|---|---|-----|----|------|
| 器用.. | 6 | 1 | (5) | 1  | (-1) |
| 感覚.. | 3 | 8 | (3) | 0  | (0)  |
| 習得.. | 4 | 6 | (3) | 0  | (0)  |
| 意思.. | 4 | 0 | (3) | 0  | (0)  |
| 魔力.. | 5 | 3 | (4) | -1 | (+1) |
| 魅力.. | 4 | 3 | (3) | 0  | (0)  |

名前.. 魔道少女の『アリス』

種族.. 神の化身

性別.. 女性

職業.. 魔法使い

Lv15 ↓ Lv18

ステータス：カッコ内は元の値

|     |     |
|-----|-----|
| 現在値 | 前回比 |
|-----|-----|

|     |   |   |     |   |    |     |
|-----|---|---|-----|---|----|-----|
| 生命力 | 9 | 6 | (9) | 0 | -3 | (0) |
|-----|---|---|-----|---|----|-----|

|    |   |   |   |     |   |   |
|----|---|---|---|-----|---|---|
| マナ | 1 | 5 | 0 | (1) | 5 | 0 |
|----|---|---|---|-----|---|---|

|     |   |   |   |   |
|-----|---|---|---|---|
| 狂気度 | 0 | - | - | - |
|-----|---|---|---|---|

|    |   |   |   |     |   |   |      |   |     |
|----|---|---|---|-----|---|---|------|---|-----|
| 速度 | 1 | 3 | 0 | (1) | 1 | 0 | (+1) | 4 | (0) |
|----|---|---|---|-----|---|---|------|---|-----|

|     |     |
|-----|-----|
| 現在値 | 前回比 |
|-----|-----|

|      |   |   |     |   |    |   |      |
|------|---|---|-----|---|----|---|------|
| 筋力.. | 3 | 1 | (2) | 4 | +1 | 1 | (+4) |
|------|---|---|-----|---|----|---|------|

|      |   |   |     |   |    |      |
|------|---|---|-----|---|----|------|
| 耐久.. | 2 | 7 | (2) | 0 | +7 | (+9) |
|------|---|---|-----|---|----|------|

|      |   |   |     |   |    |      |
|------|---|---|-----|---|----|------|
| 器用.. | 2 | 7 | (2) | 0 | +8 | (+7) |
|------|---|---|-----|---|----|------|

|      |   |   |     |   |    |      |
|------|---|---|-----|---|----|------|
| 感覚.. | 2 | 9 | (2) | 2 | +7 | (+6) |
|------|---|---|-----|---|----|------|

|      |   |   |     |   |    |      |
|------|---|---|-----|---|----|------|
| 習得.. | 3 | 0 | (2) | 3 | +8 | (+7) |
|------|---|---|-----|---|----|------|

|      |   |   |     |   |    |      |
|------|---|---|-----|---|----|------|
| 意思.. | 3 | 3 | (2) | 6 | +6 | (+6) |
|------|---|---|-----|---|----|------|

|      |   |   |     |   |    |      |
|------|---|---|-----|---|----|------|
| 魔力.. | 5 | 2 | (3) | 4 | +9 | (+8) |
|------|---|---|-----|---|----|------|

|      |   |   |     |   |    |      |
|------|---|---|-----|---|----|------|
| 魅力.. | 2 | 4 | (1) | 8 | +7 | (+7) |
|------|---|---|-----|---|----|------|

名前.. ネビネイル

種族.. 神の化身

性別..男性

職業..魔法戦士

Lv26↓Lv27

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力 93 (90) 0

マナ 155 (150) 0

狂気度 0 - - -

速度 121 (116) 0 (0)

現在値 前回比

筋力..79 (55) 3 (+13)

耐久..74 (53) 5 (+14)

器用..66 (23) 2 (+32)

感覚..44 (36) 1 (+1)

習得..45 (37) 0 (+0)

意思..46 (34) 2 (+1)

魔力..57 (48) 2 (+2)

魅力..38 (30) 3 (+2)

名前..セズバルド

種族..ローラン

性別..女性

職業..魔法戦士

Lv26 ↓ 27

ステータス:カッコ内は元の値

現在値 前回比

生命力106 (100) +3 (0)

マナ 80 (80) - - -

狂気度 0 - - -

速度 113 (96) 5 (0)

|      | 現在値     | 前回比      |
|------|---------|----------|
| 筋力.. | 60 (43) | +1 (+1)  |
| 耐久.. | 64 (49) | +4 (+1)  |
| 器用.. | 43 (33) | 0 (0)    |
| 感覚.. | 32 (24) | +8 (+1)  |
| 習得.. | 38 (27) | +16 (+2) |
| 意思.. | 55 (31) | +8 (+0)  |
| 魔力.. | 74 (51) | +20 (+0) |
| 魅力.. | 42 (34) | +1 (+1)  |

名前.. 妹のウレル  
 種族.. ローラン  
 性別.. 女性  
 職業.. 遺跡荒らし  
 Lv21 ↓ Lv23  
 ステータス: カッコ内は元の値

|      | 現在値       | 前回比     |
|------|-----------|---------|
| 生命   | 100 (100) | — —     |
| マナ   | 80 (80)   | — —     |
| 狂気度  | 0         | — —     |
| 速度   | 109 (96)  | — —     |
| 筋力.. | 52 (40)   | +4 (+1) |
| 耐久.. | 46 (37)   | +1 (+2) |
| 器用.. | 55 (46)   | +0 (+0) |
| 感覚.. | 52 (43)   | +4 (+0) |
| 習得.. | 51 (42)   | +8 (+0) |
| 意思.. | 35 (28)   | +0 (+0) |
| 魔力.. | 62 (47)   | +0 (0)  |
| 魅力.. | 49 (40)   | +1 (0)  |

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5582n/>

---

Elona で Fantasy life    な日記

2011年11月12日11時01分発行